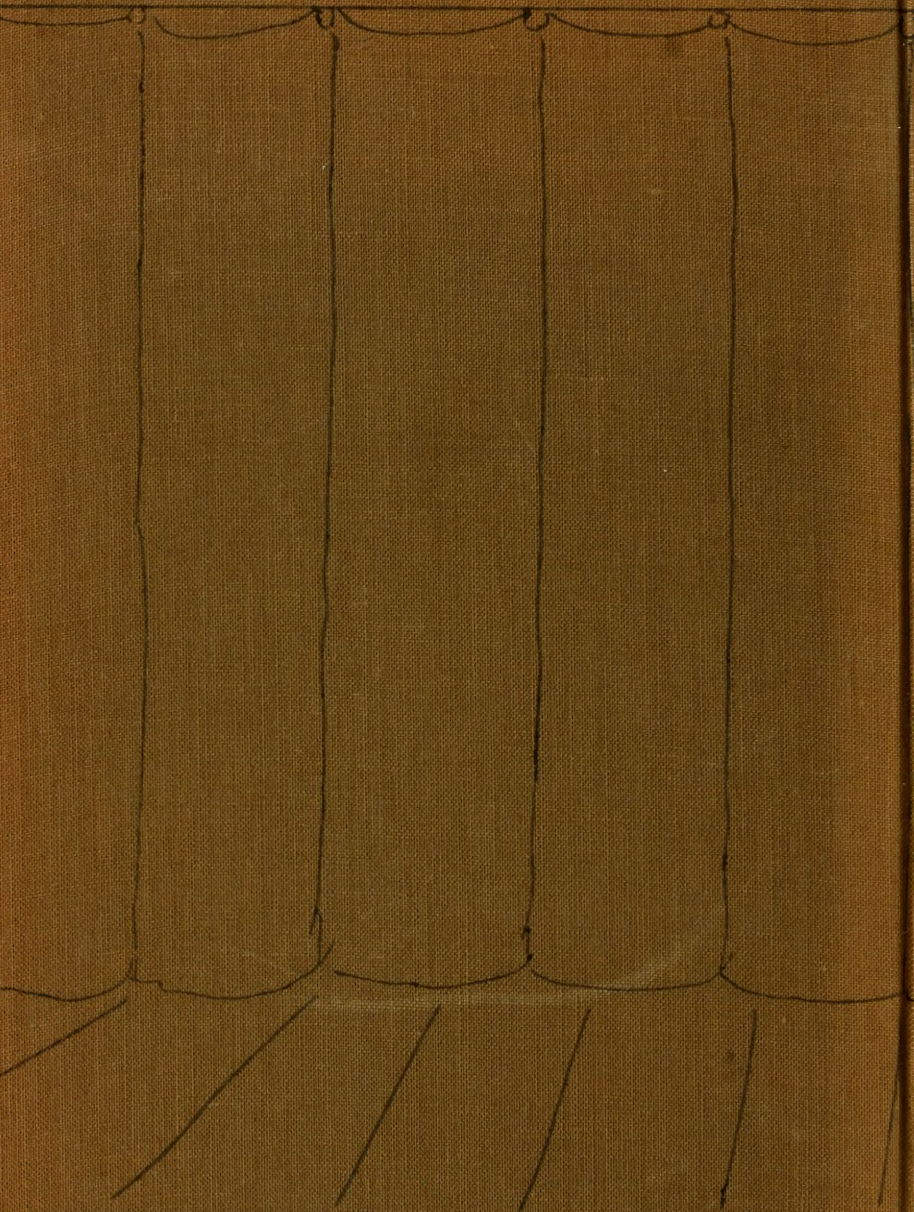


日本戲曲全集
第二十三卷

天保嘉永度狂言集

東京
春陽堂版

日本戲曲全集　第廿三卷　目次

天保嘉永度狂言集

けいせい濱眞砂（はまのまさご）



八世片岡我童の小鮒の源五郎

けいせい濱眞砂

序幕

南禪寺の場

役名——眞柴久次。眞柴久秋。眞柴お通姫。腰元、出町。同、月待。同、白川。同、岡崎。同、紅。九重姫 實ハ腰元、早瀨。粟津嘉門。不破伴作。岩城主稅。小田彈正。高山右近。上杉景遠。三輪高秀。黑田監物。前野左島。山口玄蕃。龍造寺帶刀。佐竹左京。筒井順慶。世尊寺中納言。酢賣 實ハ堅田の小雀。一子、五郎市。生蕎賣 實ハ三二の五郎七。幇間、珍八。仲居、お作。同、お竹。前野屋、佐次兵衞。筑紫の權六。祇園のお梶。岸田民部。女盜賊、石川屋眞砂路。淀町御前。

造り物、一面櫻の林、向う奧深に築地、所々に幕うち廻し、毛氈掛けし床几、櫻の吊り枝見事、すべて南禪寺境內、花盛りの體、鳴り物入り賑やかなる禪の囃子にて、幕明く。

トぶッ裂き股立ちにて、若黨三人、竹箒、切り水桶など持ち出て

若一　ナント、與助、太郎次、掃除を仕舞ふて、斯う櫻を眺めた所は、どうも云へぬではないか。

若二　さうとも〳〵。とてもの事にこの境內の花を見て、きゆうと一杯呑んだらよからう。

若三　榮耀な事をぬかす奴ぢや。今日はこの加茂明神へ、武將久吉公の御子息、久次さまが御參詣遊ばされ、今朝卯の刻から神職で馳走たつぱい。

若一　その久秋さまは、兄御には似ぬうつけ者、女の味さへまだ知らずぢやげな。

若二　その久次さまは年若なれど、今の世の賢人と、褒めそやす若大將。

若三　サア、そこで附き〳〵の諸大名が勸め込み、隨分身持ち放埓をなさるとの云ひ附けぢやさうな。

若一　テモ、天上拔けの味ひ身の上。おいらなればおやま狂ひの仕飽きをするのに。

若三　その上、御殿御息女お通姫が、日本一の縹緻よし、

若一　これも追ツつけ久秋さまの御名代に御參詣なさるげな。
若一　其お姫樣の御縹緻がよくば、どうぞお願ひ申して聟入りがしたいものぢや。
若三　途方もない事を云ふワ。お姫さんとわれとは、鼈とお月樣とぢや。
若二　所を俺が見事な腕前を以て、靡かせて見せるて。
若一　何を云ふやら。アレ／＼、お姫樣が御參詣ぢや。
若三　ほんに人事云はゞ月代置けぢや。又お目玉を貰はぬうち。
若二　奥庭の掃除をせう。サア、皆ござれ／＼。

ト三人下手へ入る。右鳴り物きつぱりとなり、向ふよりお通姫、捧げ附き振り袖、衣裳、被衣を着、出町、振り袖の腰元にて、小巾綿、抱へ帶にて、守り刀を持ち、月待、同じく腰元にて、しの袋を持ち、白川、岡崎、糺、皆々腰元にて、後より中川主計、衣裳上下にて、後に長刀持ち、挾箱、茶辨當持ち附き出る。花道にて、

お通　中川主計、兄上にはもうお越しなされたかいなう。
主計　なるほど主君久秋公には、未明よりお入りとの知らせ。幸ひあれなる設けの床凡に、暫らく御休息あられませう。
お通　さうせうわいなう。

ト始終鳴り物、皆々本舞臺へ來て、お通姫、上手の床凡に掛ける。此の外皆々、よろしく並ぶ、主計、次々供廻り、橋がゝりへ扣へる。

イヤ、ナウ、腰元ども、年毎に見る花なれど、分けて色よう咲き揃ふ、この境内の花盛りは、一入の詠めではないかいなう。
出町　お姫樣の御意遊ばす通り、八重九重に咲き添へて、山路にかゝる春霞、どうとも斯うとも申されませぬわいなア。
月待　日頃はお姫樣のお物案じ、わたし等までが心も浮かず、世上は春でもお館は秋の夕暮れ、それに今日の花見は、お氣合ひもよさゝうで、此やうなお嬉しい事はござりませぬ。
白川　典藥衆の配劑でも御病氣は直らず、お姫樣の戀病ひ、譬へにも云ふ通り、任せぬ物は双六の骰子と加茂川の水。
岡崎　叶はぬ戀の辛氣さには、昔の帝さまも、さう仰しやつたではないかいなア。

出町　さうしてお姫樣の戀人と云ふは、どなたでござんすえ。
月待　戀人と云ふは久次さまの御家來、不破伴作さまぢやわいなう。
出町　なんと云はしやんす、アノ、伴作さんは小姓達の色男、それであのお姫さんが。ガオレ。
お通　いつぞや聚樂でお能の時、伴作はせい願の太鼓の役、その折見染めたが自らが初戀、思ひの程を推量してたもいなう。
白川　主計さま、お姫樣の戀の叶ふやう、よい思案は
皆々　ござりませぬかいなア。
主計　ハテサテ、粗相千萬。先達て九州の探題、毛利元就の子息元春どのへ、御許嫁遊ばされ、聟引出として播州一圓、相違なき御朱印を相添へ、追ッてお輿入れあるお通姫樣、左樣の抄汰は必らず御無用。ト、サ、申すは表向き、御父久吉公御歸陣あるまで、何事も御辛棒、先づ今日は當社神職方に於て、武運長久の御祈念、まつた我が君歸依遊ばさるゝ當山の花盛り、貴賤の者どもに參詣を許し、群集をいたすもお慰みの一つと、觸れさせ置きましてござりまする。

お通　成る程、氣の變つた賤の姿。
月待　私し等もよい見物を
皆々　いたしますわいなア。
ト在鄕唄になり、向ふより生薑賣り、ぽつとせ、たッ附けにて、藁苞に生薑を入れし籠を擔げ、後より酢賣り、これもたッ附け、殿中羽織、頭巾にて、片荷に酢樽、御料理酢と書きたる札を附け、片荷には小樽、桝など、一荷に擔なひ乍ら出て
酢賣　オヽイ〱、さりとては早い足ぢや。もそつと靜かに歩けい。
生薑　イヤ〱、今日はこの南禪寺に、天下樣が花見をさつしやるとのお觸れ。そこへ持ちかけ商ひをせにやならぬ。
酢賣　サア、そりや我れ等も同じ事。どうで方々から大名の寄り合ふであらう。併し南禪寺なら花見より、湯豆腐がよいにな。
生薑　ハテ、何を云ふやら、兎角したい事をなさるが、天下樣の御威光ぢや。
酢賣　そんなら我れも商ひがしたさに
生薑　貴樣も錢儲けがしたさに

酢賣　相も變らぬ
兩人　錢の欲しさぢやよなア。
ト又在鄕にて、本舞臺へ來る。皆々、見て
出町　コレ〳〵、賤の者、お姬樣のお慰みに、何なりとも
買ふて取らさう程に、御前へ出や〳〵。
酢賣　ハイ〳〵、それは有難うござりまする。
ト荷を下へ置きながら
生薑　それ見たか、もう直ぐにお客が附いた。
酢賣　ソレ〳〵、出せ買はうと云ふはこの事ぢや。ハヽヽ
ハヽ。
ト追從笑ひをして、前へ出て
生薑　わたしはこの山城の國の生薑賣りでござりまする。
殘らずお求め下さりませうならば、有難う存じまする。
酢賣　私しは和泉の國の酢賣りでござりまする。酢を殘ら
ずお求め下さりませうならば、有難う存じまする。
生薑　イヤモウ、商人と申しまする者は、足に任せて聲を
張り上げ、賣らねばならぬ者でござりまする。
酢賣　イヤモウ、幸ひな所へ上がりまして、お得意が殖へ
たとは、大きな仕合せでござりまする。これは名代の酢
でござりまする。すこん〳〵。
生薑　生薑こん〳〵。
酢賣　すこん〳〵。
生薑　ヤイ〳〵、そなた男、人の耳のはたへ寄つて、何を
すこん〳〵と云ふのぢや。
酢賣　ヤイ、さう云ふ貴樣が、何をはじかまらう〳〵と云
ふのぢや。
生薑　貴樣等が何を云ふたとて、まゝの皮、藁苞にはいか
う系圖があるものぢやわい。
酢賣　なんぢや、藁苞に系圖があるとは。
生薑　オヽ、なか〳〵。
酢賣　チト、聞きたうおぢやるの。
生薑　イヤ、知らずば云ふて聞かさう。第一この藁苞に黄
金と云ふ事がある。其うへ生薑にはいかう系圖が正しい
ものぢや。そちがその酢には、系圖はあるまい。
酢賣　イヤ、我れらが賣るこの酢にこそ系圖があるぢや
て。
生薑　ハヽア、アノ、酢の樣な物にも系圖があるか。
酢賣　なか〳〵あるの。
生薑　ちと聞きたうおぢやるの。
ト兩人、前へ出て、せり合ふ。

主計　コリヤ〳〵、商人ども。姦しい、控へませい。
兩人　ハイ〳〵。
　ト後へ寄つて蹲る。
お通　ほんに氣さくな者。その品もとめてやりやいなう。
出町　畏まりました。コレ、二人とも、酢も生薑も求めやうと仰しやる程に、喜んだがよいぞや。
月待　併し聞けば酢や生薑の様なさもしい物にも、系圖があるとは聞き事ぢや。
白川　今日は上々様のお大名方にも、この南禪寺にて系圖改め、その系圖とは面白からう。
岡紀　サア〳〵、ちやつと。
皆々　語りやいなう。
酢賣　ハイ〳〵、卽ち爰で語つてお聞かせ申しませう。
　ト咳拂ひして、聲を調べ
　イヤ、そこな生薑屋、この系圖を語つた上、もし位に負けたら、今日から賣り子になるか。
生薑　そりや何より面白い。どちらなりとも負けた方が、賣り子となるのぢや。その覺悟して居るがよい。
酢賣　よし〳〵、さらば各々聞こし召せ。
　トむづかしう居直つて

　昔推古天皇の御時に、一人の酢賣り禁中を賣り廻る、其とき王院、酢賣り〳〵と召されしが、すの門をするりと通り、簀の子縁にすつくと立つて、酢の御用かと尋ねた所、其とき王院すき張り障子をするりと明け、する〳〵と御出であつて、好きな御酒を下された。一つたべ、二つたべ、三つ目に御詠歌を下された。貴様よもや、それ知るまい。
生薑　イヤ、ついど知らぬ、急いで語りやいの。
酢賣　住吉の、隅に雀が巣をかけて、すばや雀が住みよかるらんと下された。そこで其お歌の下の句から思ひ附いて、我れ等の名は堅田の小雀と云ふぢや。なんとこれに増したる系圖はあるまい。サア、生薑賣り、賣り子にならうぞ。
生薑　なるほど解つた。マア、此方のもとつくりと聞くがよい。昔からく天皇の御時、生薑賣りを召されて、唐門をからりと通り、唐緣に畏まる。其とき王院、唐紙障子をからりと明けて、から〳〵と御感あり、からき御酒を下さつた。一つたべ二つたべ、三つめにお肴をして、お歌を一首下された。これへ寄つて聞こし召せ。
酢賣　オヽ、こりや聞き事ぢや、早う云やいの。

生薑　畏くも、からき生薑、數かぞへ、唐木で焚いてから煎りにせんと下された。なんとこれに増したる系圖はあるまい。其とき王院、生薑を三つお摑みなされたとある、そこで我れ等が名を三二五郎七と名乘るぢやて。サアおぬし、賣り子にならうぞや。

酢賣　イヤハヤ、これも余ッ程の系圖ぢや。さりながら、推古天皇もからく天皇も位は同じ事なれば、今から相商ひにせうぢやないか。

生薑　成る程おぬしの云ふ通り、酢のある所には生薑もいりさうな事、そんなら今から相商ひうちにして、情を出さうぢやないかいの。

酢賣　オヽ、さうせうとも〳〵。イヤ、申し、只今お聞きの通りの系圖なれば、お召し遊ばしても御人體は廢りませぬ。

生薑　どうぞ兩方ともお買ひなされて下さりますれば、價を戴き、早う歸りたう存じまする。ナウ、酢賣りどの。

酢賣　ハイ〳〵、よろしうお願ひ申しまする。

月待　申しお姫樣、聞けば聞くほど氣の輕さうな賤の者、設けの假家へお召しなされて、酒でも呑まして、浮き世噺しをお聞きなされたら、よいお慰みではござりませぬか。

お通　サア、自らもさう思ふわいの。主計、その者を同道しや。

主計　ハッ、畏まつてござりまする。其方、御前へ參つてお取り持ち仕れ。

酢賣　商ひをして、酒を振舞はれるとは、マア、こつちに損の行かぬ事ぢや。

生薑　そりや有難いは有難いが、若し後から、書出しをおこすのぢやないかえ。

主計　ヘテ、正直な奴の。

出町　斯う見た所が、生薑賣りも正直さうな男、其處へ賤しからぬ褄外れ。

白川　生薑賣りをさすは惜しい者、小袖袴に改めて、大小を差させたら

月待　わたし等も屹度

皆々　思惑ぢやわいなう。

ト酢賣り、いろ〳〵いろどる思ひ入れ。皆々、見て

皆々　ホヽヽヽヽ。

主計　イヤナニ、お通姫樣へ申し上げまする。御祈念は未の上刻、それ迄は兩人とも休息いたさせ、お假家へ御入

りあつて、然るべう存じまする。

お通　サア、行から、皆もおぢや。

生蕃　ドリヤ、御馳走に預からうか。

皆々　主計さまにも御一緒に

主計　先づ御入りあられませう。

ト唄になり、皆々臆病口幕のうちへ入る。酢賣りも荷を擔なふて入る。後、媚めいた合ひ方にて、下手幕のうちより、九重姫、栗津嘉門、拵らへは久秋の形にて、天窓は矢張り嘉門の鬘にて、九重に手を引かれ出て

九重　サア〳〵、お越し遊ばせいなア。

嘉門　この久秋に、ついぞ見かけぬ女性、なんの用でこざるぞ。

九重　わたしの用は、この文の御返事。

嘉門　ナニ、久秋の君さま參る、九重より。そんなら某の許嫁。

九重　アイ、九重姫でござんすわいなア。

ト寄らうとするな、嘉門、突き退ける、柔かなる合ひ方。

嘉門　まつたその九重姫が、なにゆゑのその姿、樣子があらう、どうでござる。

九重　聞こえませぬ久秋さま、許嫁はあり乍ら、月日は經てどもお呼び迎へのお沙汰はなく、仇に過ぎ行くやるせなさ。今日爰へお越しと聞き、せめて餘所乍らお詞なりとも交さんため、あられもないこの姿で、御遊興のお相手になつたればこそ、お詞交した嬉しさを、推量して下さりませいなア。

嘉門　サテは、さう云ふ心であつたか。その誠ある、志しを聞く上は、今改めて夫婦の約束。久秋が妻の九重。

九重　そりや御眞實で、ござりまするかえ。

嘉門　なんの僞りを云はうぞいなう。

九重　エヽ、嬉しう存じまする。

ト抱き附く。この時、花見幕のうちより、岩城主稅、衣裳上下にて、侍ひ三人、各々衣裳羽織にて、附き出る。

主稅　ヨウ〳〵、濡れ事の開山、見附けたぞ〳〵。

嘉門　ヤア、そち達は。

主稅　イヤ、お見知りない筈、拙者ことは大和の領主、岩城主稅と申す者、夜前京着の上、淀町どのゝ御供いたし、當加茂の社へ參籠、あれなる幕で酒宴の折柄、久秋公と承り、思ひ寄らざるこの場のお目見得。

侍一　我れ〳〵は主税どのゝ組下の侍ひ。
侍二　久秋公には武將の若殿。
侍三　譜代同然に思召され
三人　お見知り置かれ下さりませう。
嘉門　サテは聞き及んだ岩城主税となア。
主税　主從の禮儀はこれまで、サア、お二人の御仲を祝ふて、御覽なされい、大和の名物霞酒の孤樽一挺、祝言やら遊興やら、はめをはづして呑みかけやうではござらぬか。
嘉門　出來た〳〵。ナント、主税は、顏に似合はぬ粹ではないか。
九重　自らも落着いたわいなう。
主税　お杯を早う〳〵。
三人　心得ました。
ト侍ひ一、樽の鏡を拔く。侍ひ二、三、長柄持ち出る。
主税　我が君のお杯、頂戴々々。
嘉門　頂戴とは堅い奴、碎け居れ〳〵。
主税　いかさま、おのれが呑んで、身どもへ差し居れ。
嘉門　あの爰な粹の水とめ。
主税　ドリヤ、酌と出かけやうか。
嘉門　コリヤ話せるわいやい。
ト酒宴になり、皆々、捨ぜりふよろしくある。この時橋がゝりより小田彈正
彈正　イヤ、その祝言はなるまい〳〵。
ト云ひながら、着附け上下にて出る。
皆々　ヤ、なんと。
彈正　久秋の似せ者、化の皮ひッぱぎ居らうぞ。
嘉門　コレ、粗相云ふまい。某は金吾久秋ぢやぞ。
彈正　默らう、こいつ。當時久吉が客分となつて、都在城の小田左樂齋、久秋が面體知らいでならうか。察する所、久次が小姓あがりのわつぱ、粟津嘉門であらうがな。
九重　エヽ、そんならあなたは。
主税　我が君でなうて粟津嘉門。
皆々　ハテナア。
ト彈正、嘉門を引附け
彈正　コナ、僞り者めが、久秋と名乘るさへあるに、許嫁の姫と不義働く毛二才め、左樂齋が目に遮つたは、遁れぬ天命、言ひ譯なくば切腹ひろげ。
ト突き飛ばす。嘉門、こなしあつて

嘉門　露顯の上は是非に及ばぬ、いかにも某は粟津嘉門、久秋さまには生得懦弱の御生れ、今日當加茂の社にて、武運の御祈念場所、殊には諸侯の中へ御出座あつても、御挨拶さへむづかしければ、淀町どのゝ仰せには、其方久秋になり替り、今日の役目を勤めよとの、お指圖を以てのこの姿。左樂齋様、此うへに非道とも思召さば、お手討ちは御勝手次第。サア、いかやうともなされませう。

彈正　ハ、、、、鷺を烏とあらがうても、九重姫との不義は遁れぬ。ぶち放す、覺悟せい。

ト嘉門を切らうとする。

九重　コレ、申し。

彈正　面倒な。

ト九重を引退け行く。この時空より雁一羽、飛び下りて、以前の文落ちてあるを、啣へ、又舞ひ上がる。彈正、又九重を切らうとする。

右近　イヤ〳〵、左樂齋様、暫らくお待ちなされませう。

ト着附け上下、乘り物、供廻り、連れ、出て來る。

皆々　ヤア、高山右近どの。

彈正　不義働いた粟津嘉門、ぶち放すをなぜ留める。

右近　イヤ、嘉門は不義ではござらぬ。

彈正　ナニ、不義でないとは。

皆々　それにはなんぞ、證據があるか。

右近　イヤ、申し譯の仕る。

皆々　シテ、その申し譯は。

右近　久秋さまには生得虚弱のお生れゆゑ、今日の如く諸侯群參の場所へ、御出會は御不承知なれども、たつて右近お勸め申し、御供申すうち、時刻延引せば惡しかりなんと、淀町どのへ申し入れ、それ迄の名代は粟津嘉門。其うち久秋公のお許嫁、九重姫さまも、幸ひ御入りあるゆゑに、兩人が俳優をお目にかけしは、お通姫さまへの御馳走でござる。それを各々が相伴なされたのでござらう。ハテ、よいお慰みをなされたな。

彈正　ムウ、すりや今のはお通姫への御馳走の俳優。エ、、馬鹿々々しい。

ト主税と顏見合せ、思ひ入れ。

右近　即ち久秋様には、やう〳〵とお勸め申し、お乘り物にて、右近これへお供仕つてござりまする。

嘉門　スリヤ、久秋さまには、お乘り物にてお越しとな。

九重　ようお越し遊ばしました。これで淀町さまのお詞も立ちまする。

彈正　なんの事ぢや、馬鹿々々しい。難なく一ぱい食ふたからは、ほんの久秋とても油斷はならぬ。

主税　左樣々々、また改めて對面の致すは後での事。

右近　神職方へ參つて、薄茶なりともお呑みなされまするか。

彈正　左樣いたさう。サア、いづれも。

皆々　先づお越しなされませう。

ト唄になり、彈正、主税、侍ひ三人附き、上手へ入る。後に嘉門、早瀨、右近、殘り、思ひ入れあつて

右近　左樂齋はじめ主税等が只今の顏附き、ハテ、興がるな、ハヽヽヽ。併し丁度幸ひの所へお供申して、兩人もお仕合せ。

嘉門　それはさうと久秋樣には、さぞお退屈遊ばされませう。ちやつとこれへお出で遊ばし、お氣の鬱れをお晴しあるよう。

右近　なにさま、各々お乘り物もろとも、神職方へお伴ひ申してよからう。

嘉門　畏まつてござりまする。

早瀨　そんなら右近。

右近　サ、お構ひなくとも、お越しなされい。

ト唄になり、乘り物先に、嘉門、九重實は早瀨は上手へ入る。元の鳴り物になり、上杉景遠、三輪五郎、黑田監物、衣裳上下にて出て

景遠　これは高山右近どの。

五監　只今御參詣でござるか。

右近　これはいづれも。今日は御苦勞千萬。これなる若殿久秋公の御供申し、やう／＼只今

景遠　こんにつた當加茂の社殿にて、御武運長久の御祈念に就き、未明より相詰める我れ／＼。

五郎　お勅使は小野左大辨諸實卿、淀町樣にも御參籠、お腰の方は今日齋宮の役目。

監物　同じ兄弟の仲なれど、落着き顏の久次樣とは事變り、舍弟久秋樣にはぬくいお育ち。

三人　さぞ、御心勞にござらう。

景遠　イヤ、これはしたり、拙者とした事が、久秋樣の附き添ひたる、右近どの、聞く前とも存ぜず、慮外申した。

五郎　ナニサマ、舍兄久次樣には、岸田民部と不破伴作が附け人。

監物　御次男の久秋樣には、此村大炊之助と右近どの、ツイうか／＼と取違へ、久秋樣を馬鹿者のやうに申したは

粗相千萬。

景遠　眞平御免下されい。

右近　これは各々の御挨拶。我が君久吉公、武威逞しく在せし頃、三好より御養子の久次公なれば、自然と父御の御氣質を受け、いま賢人と呼ばれ給ふ。また若殿久秋公には、四海太平に治まりて後の誕生なれば、物事温和に育ち給ふを、なんぞや下司の馬鹿呼ばゝり。この右近が耳こすり、近頃承り難うござる。

景遠　ハヽア、異な事が耳に觸るな。温和と云ふは下世話に云ふ馬鹿の諱名、ぬく〳〵とした人を御發明にござるなぞと、ぬつぺりと云ふはそりや正月詞と云ふもの。

五郎　いかにも左様、僞り飾りは表裏の武士、馬鹿ならば馬鹿と有體に云ふが、僞り飾らぬ誠の武士。

監物　それに附き添ふ高山右近、御自分の耳には障る筈、それゆゑ粗相を詫びるのだ。

三人　氣に障つたら料簡さつしやれ。

右近　成る程な、各々方の樣な誠の武士の腸は、また格別な物でござるてな。

景遠　そりや云はいでも知れた事だわい。

右近　僞り飾りのない各々方なれど、この右近の口にかゝれば、餘りのいた中でもござるまい。ハヽヽヽヽ。

ト嘲笑ふ。五郎、監物、ムツとして寄らうとする。景遠、留めて、右近へ詰めかけて

景遠　イヤナニ、右近どの、餘人はさて置き、この上杉景遠を、馬鹿者とな。どうして馬鹿ぢや。

右近　云つてお聞かせ申さうか、景遠どの。こなたばかりではない、三輪どのにも監物どのにも、系圖正しいお家なれど、我が君久吉公の武威に恐れ、城を出で兜を脱ぎ幕下につけば家來も同然。その公達の久秋公、例へばたわけ馬鹿たりとも、久秋公には主君の公達、それを兎や角申さるゝは、あの下世話で申す、口の端の飯粒を拂ひ落すとやら、なりや馬鹿者ではござらぬか。

ト三人、ムウとひるむ。

右近僞りは申さぬ、主君久吉公へ降參召され、軍功ある人々と同座をすれば、誰れが許さぬ手柄顔、それになんぞやぬつぺり云ふは表裏の武士。諂ひ飾らず斯やうに申すが誠の武士、各々方、左様なものではござらぬか。

景遠　右近、我れ〳〵が身の棚卸し、よく云つた。

五郎　馬鹿と云つた竹篦返し。

監物　今一言云つて見よ、その場は立たさぬ。

三人　それへ出よ。

　ト三人、刀に手を掛け、キツとなる。

右近　ハヽヽヽ、それは異な事がお耳に障るな。各々方より仰せなさるゝゆゑ、手前よりも申すのぢや。これで双方五分々々とやら。それとも各々より刃傷をお好みならば、身不肖なれども高山右近、一人づゝは面倒な、三人一緒にお相手になり申さう。斯く諸大名の群集と云ひ、殊にはかゝる山内にて、僅かの口論より云ひ募り、刃傷に及ばつしやるか。ハテ、面白い、隨分お相手になり申さう。

　トきつとなる。皆々、血相に恐れ、びくびくする。

サア、各々方、これでも事をお好みなさるか。いかがでござる。

　ト又キツとなる。景遠、よんどころなく柄に手を掛ける。監物、五郎、これを留めて

監物　景遠どの、お待ちなされい。

景遠　イヤ、兩人ともにお留めなされな。

五郎　コレサ〳〵、景遠どの、悪い御合點、いま右近の申さるゝ通り、今日は我れ〳〵始め、諸大名の系圖改め。

監物　殊にはかゝる山内に、血などあやすは不吉の基。輕からぬ我れ〳〵が身の上。右近風情を相手になさるは大人氣ない。

景遠　成る程なア、今日は大切の日、さしてもない事云ひ募り、血をあやなすは先祖へ不孝、止めに致さう止めに致さう。エヽ、コレ、命冥加な高山右近、うぬ、乾度覺えて居らうぞ。

右近　ハヽヽヽ、申し分あらばなん時でも、どなたこなたの用捨は致さぬ。右近乾度承らう。

景遠　うぬ、その廣言を。

　トまた兩人、キツとなる。この時チヤン〳〵と鐘鳴る。上手より前野左嶋、少し老けたる拵らへにて、上下大小にて、家來一人連れ、出て

左島　オヽ、これはいづれも、何事でござります、先づお靜まりなされい。

　ト前へ出る。皆々見て

三人　ヤア、こなたは。

左島　いづれも方には御存じない筈、拙者これなる久秋公のお許嫁ある、吳羽家の姫君九重姫君樣のかしづきたる前野左嶋と申す者。

右近　なるほど貴殿は前野左嶋どの、何故これへお越しあ

つたな。

左島　今日當加茂の社殿に於て、諸大名武運長久の御祈念につき、小野左大辨どのには御勅使の役目にて、未明より御入來、定めて久秋公にもお越しあらんと存せしゆゑ、主君吳羽中將の仰せを聞き、參りかゝりしこの場にて、いづれもが口論の體、何事でござる。かゝる寺中にて劍擊を振ふは佛への恐れ。先づ〳〵お靜まりなされてよからう。

トこれにて双方扣へる。敵役三人は嬉しいと云ふこなし。

景遠　ヤイ、右近、よい所へ老人の挨拶、眞劍はかゝるこの景遠が一寸手をさへると、生きて再び歸る事はならぬ所、今日は恕して置くぞよ。

左島　これはしたり各々方、さりとてはおとなしからぬ儀。そりやもう武士の意氣地と申せば、さしてもない事より云ひ募り、口論にも及ぶはまゝある事。拙者が悴左十郎なぞも、若氣の誤りより同じ禁庭の御用を勤める朋友と口論に及び、相手の者に少々擦り傷をつけしゆゑ、申し譯なく以前勘當の致したゆゑ、今はいづくに罷り居るやら、さぞ苦勞いたして居らうと、老の身の心にかゝれど、致し方なく今日の御用にも、年寄つても某が、矢張り御用を勤めにやならぬ。丁度その樣なもので、各々方も、短慮功をなさずと云ふ心、必らず寢覺めにもお忘れならないよう、御合點かな、ハヽヽヽ。各々の挨拶より、云はれざる老の身の棚卸し、御免下されい、なういづれも。

右近　左島どのには有難きお示し。シテ、今日貴殿の御入來は、主人久秋へいかなる御用でござりまする。

左島　イヤ、餘の儀でもござらぬ。去々年禁庭よりお指圖によつて、それなる金吾久秋公と、手前の姬君とお許嫁あつて、近々お輿入れあるべき所、御病氣とやらにて日限延引、まつたその砌り兩家より結納の印として、取交すべき吳羽家の重寶、公任卿自筆の和漢朗詠集、この左嶋が預かりなれば、早く輿入れの日限を定め、この朗詠集を納め、眞柴の重寶瓢の印を、受取り歸れよとある御内意を承つて、コレ、斯くの如く一軸を守護し、わざわざこれまで參つたのでござる。

ト懷より箱入りの袱紗包みを出して見せる。後より酢賣り、出て、チツと思ひ入れあつて、隱れる。右近、思ひ入れあつて

右近　なるほど、それは近頃御老體の御苦勞千萬、久秋公には御案内の如く、元來柔弱のお生れゆゑ、段々と緣邊延引いたせど、近々吉辰の選みお輿入れあるやう、久次公へも淀町樣へも、この右近が申し上げるでござりませう。
左島　イヤモ、左樣承れば此方も重疊、どうぞ一日も早くお執り持ち頼みまする。
右近　お氣遣ひなされまするな、追々久秋公にも御病氣御本腹なれば、早々お輿入れあるやう、拙者が計らひませう。
景遠　ハヽヽヽ、高山右近が、いかやうに口利口に云ひなしても、あの久秋樣の馬鹿病ひ。
監物　典藥衆が手を盡しても、いつかな癒らぬ、それが下世話で申す通り、阿呆につける藥がござらぬて。
五郎　そりや一番出來ました。
　ト　これにて右近、またキッとなつて
三人　ハヽヽヽ。
右近　その惡口の返禮には、高山右近が各々方へ、重ねて屹度
三人　アノ、見事そちが
右近　なんでもない事。

景遠　相手になるか。
右近　ずんとなります。
　ト　詰め合ふ。
左島　これは又いかな事。久次公にもお待ち兼ね、右近どの始め、いづれも客殿へ御入りあつて然るべう存じまする。
景遠　いかにも左樣いたさう。
五監　景遠どの。
左島　然らばいづれも。
右近　左嶋どのには、お越しなされませう。
　ト　唄になり、皆々上手へ入る。引違へて、上手ばたばたにて、早瀬を小雀追ふて來り
早瀬　エヽ、誰れぢやぞいなア。
小雀　コレ、大事ない〳〵、酢賣りの雀ぢや〳〵。
　ト　いろ〳〵あるを振り切り
早瀬　ヤア、そなたは何者。
小雀　イヤ、俺やさつきにお姫樣の御前へ召された酢賣りぢやが、お前がそのスッとした姿を見て得心さして見たいて。
　ト　受身になる。

早瀬　エヽ、何を阿呆らしい。
小雀　なんの阿呆らしい事があるもので、コレ、この酢貫りは素寒貧と見えるであらうが、氣立ては粹で、すんとして、女子の好きな酢文字より、すぐれた事をしてえの。
ト云ひながらいろ〳〵しなだれる。早瀬、小雀を引退け、逃げやうとする。この時彈正、ズッと出て、立ち塞がり
彈正　早瀬、待て。
早瀬　あなたは彈正さま。
彈正　早瀬、返事が聞きたい。
早瀬　返事とはえ。
彈正　此村が娘の早瀬、兼ねて聞き及ぶ執心の身ども、得心いたさば父大炊へ申し入れ、表向きの妻女にする。
小雀　最前から口說いたゆ、彈正さまに頼まれてのこの橋渡し。
彈正　云ひ出すからは否とは云はさぬ。
小雀　但しは否か。
兩人　返事はどうぢや。
ト この時、侍ひ出て、この體を見て居る。早瀬こなしあつて
早瀬　否でござりまする。
兩人　なんと。
早瀬　不儀一同の御法度は、たとへ父上が得心でも、今では淀町さまのお側仕へ、よう御存じでござりませう。
彈正　左程堅固な其の方が、物蔭より窺へば、馬鹿者の久秋と、今の樣子は慥かに密通。
早瀬　エヽ。
小雀　但し見た事聞いた事、この小雀が注進せうか。
早瀬　サア、それはな。
彈正　得心いたすか。
早瀬　サア、知らぬわいなう。
ト兩人、追ひ廻しになり、色々あつて、トヾ彈正、つかつかと出て、眞中へ入る。小雀、これを知らずに抱き附く。この隙に早瀬逃げ入る。小雀と彈正顏見合せ、悔り
小雀　ヤア、あなたは小田左樂齋さま、エヽ、忌々しい、折角味うやりかけた所へ。
彈正　イヤ、それよりは、其方に申し附ける一大事。
ト囁く。
小雀　ムウ、スリヤ、その左嶋とやら云ふ侍ひが持つて居

る、朗詠集とやら。大金になる代物かな。
彈正　コリヤ、聲が高い、歸りを待ち受け、合點か。
小雀　シテ、その左は。
彈正　齋宮のもとに休息すれば、どうで歸りは黄昏どき。
小雀　若し手強けりやア、お前も加勢を。
彈正　そりやちつとも氣遣ひいたすな。
小雀　それ聞いて大丈夫、去による道を張つて居やう。
彈正　心覺えの身どもの一腰。
ト渡す、小雀、受取つて
小雀　味いワ。そんなら左樂齋さま。
彈正　早く〳〵。
小雀　シテコイナ。
ト一腰ぼつ込み、向ふへ走り入る、彈正、笑壺のこなしにて
彈正　あれも良し。先づ差し當る香爐の儀は、主税に云ひつけ置いたれば、これもよい〳〵。
トこなしあろ、ト下手より以前の侍ひ三人、出て來て
三人　左樂齋さま。
彈正　コリヤ。
ト押へて
兼ねて其の方に申し附け置いたる通り、手拔かりなきやう計らへよ。
三人　心得ました。
彈正　身はこれより御祈念の場所へ。
侍ひ　然らば左樂齋さま。
彈正　ドリヤ、御勅使の御前へ參らうか。
ト唄になり、皆々こなしあつて、幕のうちへ入る。チヨン〳〵

返し

造り物、一面の敷疊み、すぐ南禪寺、左黑谷眞如堂、右白川橋と記せし榜示杭、すべて南禪寺前の心にて、本釣り鐘、入相の鐘、方々にて突く。向ふより小雀、走り出て、直ぐに本舞臺へ來て、向ふをきつと見て
小雀　左樂齋さまの云ひ附け、金吾久秋の方へ頼みに送る、晃羽家の重寶朗詠集とやらの一卷、さぶめが爰へうせ次第、騙すに手なし、オヽ、さうぢや。
ト刀の寢刃を合す。小凄き合ひ方になり、向ふより人

音するゆゑ、小雀、一寸隱れる。向ふより左島、以前の形にて、家來一人、提灯のたゝみしを持ち、附き出て

家來　お旦那、藪影は暗うござりまするが、お提灯を點しませうか。

左島　ナニサ〳〵、直さま歸らうと存じたる所、宮内どのの宅へ立寄り、茶をよばれしゆゑ暇取つた。

　トこんな事云ひ〳〵、本舞臺へ來る。

今やうやく入相か。春の日は永いなア。

　ト云ふうち、雀ばつと藪より立つ。左島、思ひ入あつて

塒の雀が惑ふ有樣、ハテ、心ならぬ。

　ト云ふうち、後より小雀、切つてかゝる。左島、振拂ふ。これにて家來、ハッと云ふて逃げて入る。左島、拔き合して立廻り、小雀を引伏せ

何者なれば、狼藉至極。

　ト小雀、何をとかゝるを、立廻りのうち彈正、橋がゝりより忍び頭巾にて出て、エイと手裏劍を打つ。左島にあたり、ウンと怯む。小雀、たゝみかけて切り附ける。又振り拂ふ。彈正、つか〳〵と行つて、止めを刺し

彈正　堅田の小雀。

小雀　左樂齋さま、どうやら斯うやら。

彈正　ハテ、脆い奴なア。

　ト小雀、左島の懷より一卷を出して

小雀　これが彼の朗詠集とやら。

彈正　其の方にしかと預ける。

小雀　お氣遣ひなされまするな。

彈正　まだ其の方に云ひ附くるは。

　ト囁く。

小雀　スリヤ、あの桃山の用金を

彈正　合點か。

小雀　心得ました。

彈正　小雀、さらば

　ト唄になり、彈正、橋がゝりへ入る。小雀、頷き、一卷を懷中して

小雀　朗詠集は手前が預かり、其うへに用金とは、うまい物の選り喰ひ。ドリヤ、足元の明るいうち、隨德寺と出かけやうか。

　ト行かうとする、此うち主計、出かけ居て、小雀を支

へろ。小雀、翻りながら振り拂ふ。一寸世話の立廻りにて、小雀の首筋を掴む。この時振り切り、主計の脾腹を蹴つて、花道へ行く。

主計　盗人待て。

ト小雀、エイと、砂を掴み打ちつける。主計、躱す、小雀、向ふへ走り入る。主計、後を見て、左島が小柄を引抜き

後日の證據はこの小柄、なんでも曲者、さうぢや。

ト凛々しく尻からげ、向ふへ追はへ走り入る。チョンチョンにて、黒幕切り落し、籔疊引割る。

返し

造り物、眞中一間の通り庭、兩方屋體、向ふけつかい附き、後へ寄せて座敷のかゝり、上の鴨居に半簾かけある。右兩方の間に、仕出し、思ひ／＼の花見の形にて、湯豆腐、酒肴にて、呑み居る。仲居お作、お竹、赤前垂れにて、銚子運び居る體。騷ぎ唄の中への音にて、奥にて手を鳴らし、ハイと返事なぞ賑はしく、道具納まる。

仕一　まツと豆腐を貰はうぞや。

仕二　こつちは熱燗にして持つて來て下され。

仲居　アイ／＼。

トこんな事云ふうち、奥より珍八、幇間にて、禿兩人、せびるを、珍八、蓮華花を持ちながら出て來て

禿兩　わたしに下んせ／＼。

珍八　アヽコレ、滅相な。さう口々に云ふては堪らぬ。折角摘んだ蓮華草、お前達にやるのは俗に云ふ子供に花ぢや。

禿兩　それぢやによつて、おこしやいなう。

ト又取り附くを、振り退けながら

珍八　これはしたり口喧しい。其のやうに云うて太夫さんに叱られまいぞえ。

仕三　今日はこの南禪寺は、えらい群集ぢやなう。

さく　ハイ、天下樣の花見ぢやとて、大名衆の御參會。

たけ　それを見やうとて、町のお方々や、色里のお衆まで皆一時。

珍八　そこでこちらも立會はねばなるまいと、太夫さんのお供をして、出かけて來たと云ふものぢや。

禿一　ソレ／＼、後で太夫さんが、山門とやらへ行て、花見をしやうと云はんしたぞえ。

珍八　サア、よいわいの。そりや頓八が頼みに行たりや犬丈夫ぢや。
禿一　さう云ふて、この花を取つたものぢやわいなう。
ト華蓮花を取る。
珍八　ヤア、南無三、してやられたか。戻せ／＼。
禿兩　知らぬわいなう。
ト逃げて奥へ入る。
珍八　うむ、卑怯未練な、その蓮華花返せ、戻せ／＼。
ト仰山に尻からげして、追はへ入る。
仕一　ハテ、茶屋者と云ふものは、口喧しいものぢや。
二三　サア／＼、満腹した。附けと茶を下んせ。
さく　まそつとお肴、拵らへませうかえ。
仕一　イヤモ、こつちも呑まん／＼。
ト捨ぜりふ、出端の華やかなる。唄になり、向ふより前野屋佐次兵衛、町人の形、羽織、一本差しにて、次にお梶、着浪し、仲店の形、日傘を持ち、少し酒に醉ふたろこなしにて出て、花道にて
かぢ　申し／＼、前野屋の旦那樣、わたしが連立つて行かうと云ふのに、ても早い足、わたしらの樣な者と、連立つて歩くのは否かえ。
佐次　ア、、なんのマア、さうではなけれど、今日はこの南禪寺に、かた／＼逢はねばならぬ人もあり、殊に貴樣はどこで入れて來たか、大分吸ひ込んでゐる樣子、そこでつい我が身の足が早いのぢやて。
かぢ　アイ、その筈でござんす。今日わたしもこの南禪寺へ、雇はれ仲居、殊に上樣の花見とやら、大名連もお揃ひとのこと、それを見たさに急いで來た所が、祇園で近附き衆に會ひ、つい一口二口過ごしたれど、わたしや醉ふてゐやせんぞえ。
佐次　イヤ、あんまり醉はんでもあるまい。オ、、彼れこれ云ふうち奥の丹後屋まで來た。マア、向ふでやらうぢやないか。
かぢ　奥丹とは有難い。そんならわたしも附き合はうわいなア。
佐次　サア、斯うおぢや／＼。
トまた右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、店先へ腰掛ける。
たけ　ようお出でな、奥へお通りな。オ、、お梶さん、遅かつたなア。
かぢ　アイ、氣は急いでも、ツイ、此お方と一口二口、話

しに實がついてなア。

さく　オヽ、誰れかと思へば前野屋の旦那樣、酒つけやうかえ。

佐次　酒と云ふたらお梶坊は後へは寄るまい。わしもキユうと一丁入れたい、なんなりと拵らへてくれ。

さく　アイ／＼、合點でござんす。

ト奥へ入る。此うち仕出し、銘々拂ひなぞして

仕一　サア、算用はあれでよいかの。

仕二　これからぶら／＼、花見がてらお歸りぢや。

たけ　マア、御ゆるりとなされいなア。

仕三　イヤ、俺は去にしなに、知恩院へ廻つて去なう。

皆々　サア、ござれ／＼。

たけ　ようお出でなア／＼。

ト捨ぜりふにて、上手と橋がゝりへ入る、始終合ひ方、奥よりお作、酒肴を持つて出る、此うち茛なぞのみゐる。

佐次　テモ、丹後屋は、いつも／＼賑やかな事ぢやなア。サテ、俺は今日は、この寺へ來てござる大名衆のうち、大和一國の主、筒井順慶さまと云ふお人へ、常々からお出入りの用達ゆゑ、則ち五百兩と云ふ金を手渡しせうと出かけたが、サテ五百兩はよつ程重い物ぢや。

ト首にかけて居る財布を片脇へ置く。

かぢ　その順慶さまは、名に聞えた大々名。假染めにも五百兩と云ふ金、お供の衆にも渡さず、テモ、大膽なお方なア。

佐次　サア、そこぢや。東川の町人前野屋佐次兵衞と云はれては、長者鑑に乘つてチヤキ／＼の男ぢやが、今日この金の取渡しには、ちと曰く因縁が有馬山ぢや。

かぢ　有馬山とはいなの笹原、足のつくと云ふやうな事でござんすかえ。

佐次　滅相な、足のつく樣なやぼな事ぢやない。五百兩や千兩の金で、手もつく男ぢやないて。

かぢ　何も彼も揃ふてあれど、しんのないのが

佐次　玉に疵とは古いぞ／＼。

さく　きつうお嫌ひなア。そのお口へ、一つあがれや。

たけ　お豆腐も冷めぬうち、お肴も追ひ／＼持つて參じまするわいなア。

佐次　イヤ／＼、爰構はずと、ほつと置いておくれ。お梶坊と差向ひで吞むのが生正味。

かぢ　見得ばかりのいかけとは、こつちは眞平御免ぢやぞ

え。ホヽヽヽ。

さく　お梶どん、御用があるなら知らしておくれえ。

　ト此うち奥より、手を鳴らす。

たけ　アレ〳〵、座敷に手が鳴るぞえ。

佐次　早う行てやりや〳〵。

作竹　アイ〳〵〳〵。

　ト返事しながら奥へ入る、お梶しか〴〵あつて、酒を呑む。佐次兵衛、邊りを見廻し、ちよつと色どろこなしにて、お梶を見て

佐次　コレ、お梶坊、今日はどうしたものか、えら吸ひ込みに吸ひ込んで、なんぢや可笑しな、人に氣を持たすやうな、怪體な詞附き。何を思ふて、其のやうな事をのたまふぞ。

かぢ　なんの、氣を持たすも持たさぬもない。前かた祇園の森へ茶店を、出した時分から御贔屓に預かつて、こつちは大事の旦那とも、またいとしほらしい殿御ぢやとも思ふてゐるに、口先ばかりでぢやら〳〵と、面妖男のよいお方は、どこやらが素氣ないもの、人の思ふやうにもない、心が屆かぬことかいなア。

　ト思ひ入れあつて云ふ。佐次兵衛、ぐんにやりとなつて

佐次　アレ、また。例のさう可笑しう云はれると、なんぢや知らぬが首筋もとがじわ〳〵。そりやマア、誰れに云ふ事ぢやぞいなう。

かぢ　誰れに云はう、心に覺えのある人に。

佐次　さう云はれると、こつちからも云はねばならぬ、丸山行きの戻り道、祇園の森の夕烏、かあい〳〵と啼くにつけ、こつちも氣のある梶の茶屋、後家か寡婦か孔無しか、口説き落して、抱いて寐よとは思へども、待て暫し、女獨りの出商賣、えんやらやつと値が出來て、四つに組んだ土俵際、間男見附けた、扱へなど、これまでなんぼも芝居である格、そこを思ふて一日延ばし二日延ばし、今日まで寄らず觸らず堪らへてゐる、俺が心をお梶坊、推量してくれいやい。

かぢ　なんのあなた、わたしらの樣な者を誰れが、相手になつてくれさうな事でもござんせぬ。尤も以前は夫もあつたが、四五年先に死別れ、その後は淋しい寡婦の身。辛氣に暮らして居りますわいなア。

佐次　アノ、辛氣なかえ。そつちも辛氣なら俺も辛氣な、彼れこれ地合を云ふより、いつそ一口商ひで、コレ、こ

の佐次兵衞と、ちや〳〵らかするとは、どうぢやなどうぢやな。

ト手を握りながら寄り添ふて云ふ。お梶、チツと受身になつて

かぢ　サア、そりやわたしもほんに嬉しいけれど、殿御と云ふ者は、ついじやら〳〵と云ふばかりで、一度や二度でつい捨てられる。なんぼう其やうに云はしやんしても、お前は前野屋の旦那樣、こちら風情の者を、所詮奧樣には釣合はぬゆゑ。

佐次　まだな事を云ふ者ぢや。戀に上下の隔てはなし、殊に貴樣は茶店の女子ぢやと云へど、祇園のお梶は歌の一つも讀むと云ふ評判、なりや佐次兵衞には過ぎた女房。

かぢ　そんならこちの人と、云ふても大事ないかえ。

佐次　大事ない所か、今の女房は抛り出し、妻になつてたもいなう。

かぢ　そんなら愈々呼び迎へて下さんすなら、この形ふりでは世間の聞こえ、身の廻りから何彼の支度を。

佐次　オツト、これは皆まで云ふまい、この佐次兵衞が心にある。仕拵らへには小判で百兩、改めてそなたにやるが、それでも否か。

かぢ　サア、そりや、それだけあればようござんすわいなア。

佐次　そつちもよければこつちもよし、一寸堅めを爰の座敷で。

かぢ　アノ、座敷へ行くのかえ。

佐次　オヽ、行くとも〳〵。

ト　お梶は財布の金の欲しい心、この時橋がゝりより五郎七、木綿奴の合羽、一本差しにて出て來て、ちよつとこれを見て、思ひ入れ。佐次兵衞、お梶は、揉み合ひゐて、トゞ佐次兵衞、お梶を引伏せる所を、五郎七、出て、見事に取つて投げ

五郎　マヽ、間男め、ウヽ、動き、ヤア、がるな。

ト合ひ方になる。お梶、見て、恟りして

かぢ　ヤア、そなたは家來の五郎七ぢやないか。

ト俯向く。ト佐次兵衞、起き上つて

佐次　アイタヽヽヽ、ヤイ、おのれはマア、どこの牛の骨ぢや。なんで俺を投げたのぢや。

五郎　シヽ、知れた事、マヽ、間男の、トヽ、科で。

佐次　ヤア。

五郎　オヽ、お梶さん、コヽ、こりや、ドヽ、どうぢや。ヒ

ヒ、久し振りで、オ、、逢ふた、オ、、おらより、シ、シ死なしやつた、ゴ、、御主人が、コ、、此ことを、見やしやつたら、サ、、さぞ、ヨ、、悦ばつしやらうと、オ、、思はつしやるか。コ、、こなたも、イ、、以前は、ブ、、武士の、ニ、、女房、ソ、、その、オ、、奥樣を捕へ、ナ、、なんの態、マ、、間男の、セ、、成敗、ダダ、旦那に、カ、、代つて、オ、、おらがする、カ、、覺悟して、ソ、、それへ、デ、、出され。

ト此ときお梶、俯向く。佐次兵衛、色々あつて

佐次　なんぢやい〳〵、あんまり侍ひ風吹くなよ。どうでこんな事であらうと思ふた。高で内陣入りはせず、つい門口でお札所も行かんのぢや。そんな脅し食ふ佐次兵衛ぢやないわい。

五郎　サ、、左程、ケ、、潔白な、テ、、手前が、コ、、こりや何事。

佐次　イヤサ、それはな。

五郎　タ、但し、フ、、不義でないか。

佐次　サア、それは。

五郎　言ひ譯あるか。

佐次　サア

兩人　サア〳〵〳〵

五郎　ド、どうぢやい。

佐次　エ、忌々しい。

ト此時奥より最前の禿、出て、お梶を見て

禿　母樣いなう、よう來て下さつたなう。

かぢ　ヤア、五郎市かいなう、そんならそなた、爰のうちへ。

五市　アイ、太夫さんと連れ立つて來ましたわいなア。

ト五郎七、これを見て、悔りのこなしにて

五七　ヨ、、よう、ソ、、そんなら、ダ、、旦那の、オ、オお胤、ゴ、、五郎市さんまで、チヤ、、茶屋者に、シシ、仕込んで、コ、、殊に、コ、、これは、オ、、女の姿。

ト五郎市を引寄せ、顔を見て、お梶を恨めしさうに眺め

オ、、親が、オ、、親なら、ワ、、和子までを、エ、、エイ、イ、、忌々しい、オ、、お人だわい。

トお梶を蹴りにかゝる。五郎市、縋つて

五市　べいよ、もう堪らへて下されやい。

佐次　そんならこの禿めは、あのお梶が先の男の子であつ

たか。エヽなんのことぢやい。

かぢ　コレ、五郎七、わたしが斯うした身持ちをするも、又五郎市を女子に仕立て、秀峯公さす事も、段々と理由のある事。

五七　イヽイヤ、ソヽその、イヽ云ひ譯、キヽ聞く耳や持たぬ。

かぢ　ヤア。

五七　サヽ侍ひは、ニヽ二君に仕へず、テヽ貞女兩夫に、マヽまみえずの、タヽ譬へ。

かぢ　そんならわたしが心をば

五郎　ウヽ疑ふ所か、コヽ詞交すも、ケヽ穢らはしい。

ト刀を拔き、お梶を峯打ちにせうとする。五郎市、取り附き

五市　コレ、五郎七、堪忍してたもいなう。

ト手に取り縋り留める。お梶、思ひ入れあつて

かぢ　オヽ腹が立たう、尤もぢや。サ、腹が立つなら、どうなとしや〳〵。

ト體を突き附ける。五郎七、あごむ體にて、刀を捨てて

五郎　コヽコヽこなたはなう。

ト下へ突き据ゑる。合ひ方變る。

コレ、いたづらどの、今の態はなんの事だい。おらが旦那は石川傳二さまと云つて、もとは河州石川の郷士。五ケ年以前おらはお暇貰ふて國へ行たあと、旦那には不慮の御最期。その後こなたは、祇園のお梶と名代を取り、賣女同然の生計と聞いては居れど、よもや〳〵、人の噂と思ふて居つたが、尋ね當たつた今日のしだら。不義惡戯がかわきたさに、現在旦那の只一人子、秀とやらの奉公させ、それで操が立つと思ふか。袖乞ひしても操は立つもの、この下郎めは旦那に代り、切つても捨てたい心なれども、頑是ない子達に免じ、何事も云はんぞよ。この子は今日からおらが預かり、里へ連れて歸つてゞも、養育する、エヽ見下げ果てた生き畜生、よう覺えてさつしやれ。

ト始終吃りながら云ふ。お梶、愁ひのこなしにて

かぢ　所詮こな樣に云ひ譯しても、忠義一圖の憤り、聞き分けてはたもるまい、情ない身の成り行きぢやなア。

佐次　オヽ所詮役立たぬ云ひ譯せうより、この佐次兵衞も乘りかゝつた船、向ふから云はぬ先に、間男の首代か

ら、あの小さの養育代やら、二三十兩なら張り込むが、雨降つて地固まると、愈々俺が女房になり、嫁入りしてくれる氣はないか。

　トお梶に寄り添ふ。五郎七、拂ふて

五郎　エ、、ア、あた舌たるい。ス、、素町人め、ショ、性根の根腐つた、オ、、女、ニヨ、女房に、ナ、、ならうが、カ、、かたづかうが、ロ、、論は、ム、無益。シシ、併し、ワ、和子は大事の、カ、形見、ケ、、穢れた親の傍には、オ、、置けぬ。サ、、ベ、、べいについて、コ、斯うござれ。

　ト五郎市を引立て、背中に負ふ。お梶、縋つて

かぢ　そんならどうでもその子をば

五郎　ツ、、連れて、イ、、去んで、セ、成人、サ、、させ、ア、、溢れ、ヒ、、人にして見せう。

佐次　シタリ、溢れ奴こらさでも、さすがは侍ひ。間男の扱ひ代も、小忰の養育代もおこせと云はぬ、御綺麗御綺麗。

五七　ウ、うぬらが、ケ、穢れた、カ、金は、イ、、いらぬ。

佐次　それ聞いて落着いた。ナウ、これお梶坊、女房ども。

五市　母様いなう。

　トこれにてお梶もぎつくりするを、五郎七、引退け

五七　エ、、オ、覺えて、イ、、ゐやつしやれ。

　ト唄になり、五郎七、五郎市を負ふて、橋がかりへ入

　トろお梶、ヘアと泣く。佐次兵衛、介抱して

佐次　オ、、尤もぢや〳〵が、あのやつこらさがちつぺいを連れて去んだで、連れ子連れずの花嫁御、我が身に花も咲くと云ふもの。祝ふて三度三々九度、奥座敷へ行てやらうぢやないか。

かぢ　サ、、そりや合點でござんすが、可哀やあの子を

　ト行かうとするを押へて

佐次　サ、、養ひ位は後からくれる。マア、それよりは、寝るのが肝心。

かぢ　サア、そんなら、お前、その金

　ト財布に手をかける、振り退け

佐次　こりや願慶さまへ渡す金ぢや。

かぢ　それぢやと云うて、さう早急に

佐次　待つてはゐられぬ。俺が名の前野屋は、立つたり萎えたり、佐次兵衛云はずと、ほつねつを

かぢ　イエ、わたしの心の納まるやう、この金取つたその上で。
佐次　そりや追ツつけ入ると云ふに。
ト兩人、金を取り合ひ、よき所にて、上手屋體の簾下りてゐるうちの火鉢へ、抛り込む。兩人、恟りして
ヤア〱、途方もない所へ。
かぢ　あの金を、滅相な。
佐次　ドリヤ、俺が取つて來うか。
ト佐次兵衛、つか〱と行き、袴裾卷き上げる。此うちに筑紫權六、羽織袴、頭巾にて、前に火鉢を抱へ居る。佐次兵衛行き、手をかける、その手を叩く、と合ひ方。
權六　コリヤ、なんと致す。
佐次　イヤ、その火鉢の中へ取り落したは、我が身が金。
かぢ　アイ、てんごうに取り合ふて、思はず落したその財布。
權六　委細は次より見届けた。濱川の町人、前野屋佐次兵衛。
佐次　ハイ、わたしをあなたは、よう御存じ。
權六　知らいでならうか。筒井の家老、島左門と云ふ者。

佐次　ヘイ、そんならあなたが左門さま。
權六　今日主人順慶樣には、當南禪寺へ御參籠ゆゑ、お迎へかた〲參り合したこの丹後屋。色を以て心を蕩かし、大金の掠め取らんとする、不敵の女め。
かぢ　エヽ。
ト恟り、震ふ。佐次兵衛、きよろ〱して
佐次　アヽ、申し〱、左内さま、掠めうにも掠めまいにも、財布は其まゝ取り合ふて、ほんの粗相で落したばかり。マア、何分にその金を。
ト又取りに行くを
權六　ソレ〱、まだその通り馬鹿を盡すか。畢竟某がこれへ來かゝり目に附けばこそ。住所も知れぬ女を捕へ、大金を所持しながら、あじやら事も場所による、以後きつと嗜むがよい。
佐次　成る程コリヤ一番誤りました。筒井のお家では島左門さまと評判のお方、智惠は又別な物。この佐次兵衛もうつかりと、あの女性に引されて、すでの事に五百兩を、さゝほさにしやうとした。テモ、恐ろしい事なア。
トお梶の方を見る。お梶、俯向く。
權六　ハテ、それと申すもその方が、懦弱なから。この火

鉢のうちに落ちたる財布。

ト中より財布を出して

跫踉のないうち慥かに受取れ。

ト佐次兵衞、取つて

佐次　ヤレ、有難い。へイ／＼、結び目も先の通り、少しも跫踉はござりませぬ。命冥加な金であつたよなア

ト懐へ納める。お梶、思ひ入れあつて

かぢ　跫踉ないかえ、なんのござんせう。元よりこつちは企まぬ事。あのゝものゝと云はしやんすゆゑ、ほたへが過ぎて今のしだら、疑ひ受けう筈はない。ドレ、歸りませうか。

ト立上がるを

權六　イヤ、女待て。イヤサ、用がある、先づ待て、

かぢ　アノ、私しに。

權六　いかにも。

佐次　あの女に、まだ御詮議がござりまするか。

權六　この頃盜賊そこ爰に徘徊する由、かく一僕をも召し連れず、人立ち繁きこの邊りへ、參り合すも詮議の一條、そちも盜賊の餘類であらう。

かぢ　エヽ、そんな事は知りませぬ。

權六　ハテ、知らぬぢやよなア。

ト此時下手より、ばた／＼にて、同宿、鼠の僧帽子と拂子を持ち、出て來て

同宿　前野屋の佐次兵衞は、これにゐぬか／＼。

佐次　前野屋の佐次兵衞はこれに居ります。

同宿　師の御坊のお供先、順慶様よりお頼みにて、其の方を召しましたぞ。

佐次　それは御大儀、順慶様なら定めてこの事。

ト財布を教へる。

權六　ナニサマ、御主人には嘸ぞお待ち兼ね。少しも早くお手渡し申せ。

佐次　ハイ／＼、畏まりました、が、アノ、女は。

權六　身どもが屋敷へ連れ歸り糺明いたす。

佐次　エヽ。

かぢ　スリヤ、アノ、わたしをお屋敷へ。

佐次　連れて去ぬとは、惜しいものなア。

同宿　サア、早うござれと云ふに。

佐次　ハテ、忙しない。まそつとこれを。

權六　構はずと早く行きやれ。

佐次　エヽ、見殘して殘念な。
同僧　サアヽ、早う參らぬか。
ト手を引く時、拂子と僧帽子を落とす。無理に捨ぜりふにて
佐次　これは又忙しない事ぢやぞ。
ト同僧、無理に佐次兵衛を連れて橋がゝりへ入る。權六、下へ下りて、後見送る。お梶と顏見合せ、思ひ入れ、本釣り鐘。
權六　お梶どん、まんまと首尾よう。
かぢ　アヽ、これ。
ト押へる。合ひ方、權六、頭巾を脫ぐ。大百日になる。懷より佐次兵衛の金を出して、渡す。
權六どん、今日は思ひの外漁が利いたなア。前野屋の佐次兵衛といふは筒井の用達、今日五百兩と云ふ金持つて來た事聞いたゆゑ
權六　この筑紫の權六は、筒井の家老島左門、もの〳〵しうやつたが山。
かぢ　あの火鉢へ拋り込むと、中に疾より形代を拵へ置いたが仕事の種。
權六　これと云ふもおいらの頭、五右衛門どのは、以前釜煎りで死罪になり、殘つた手下を從へて、お梶どんを尼將軍、それに從ふおいらが商賣。
かぢ　夫傳吾どのは明智の殘黨、石川五右衛門と改名して、一昨年の春死なしやんしたれど、息あるうちにわたしへの遺言。主人の姫君、皐月姫さまの、御在家を尋ね出し、守り育てよとの呉々のお頼み、年齢も行かぬ五郎市を、禿奉公にやつて置いたも、九條の里の眞砂路さま、慥かに尋ねる皐月姫さま、詳しい素性を聞かうため。
權六　幸ひ爰の奥座敷へ、その眞砂路さんが來てゐらるゝゆゑ、次の間から樣子を見ると、こなたの話しに違はぬ人相。
かぢ　スリヤ、いよ〳〵推量の通り、姫君に違ひなくば、幸ひこの金を以て、
ト權六に囁く。
權六　スリヤ、九條の廓へ行て、あの眞砂路どのを身請けの相談。
かぢ　斯う云ふ事とは露知らぬ、五郎七がさつきの意見、身にしみ〴〵とこたへ乍ら、夫の遺言お主へ忠義、立てたいばかりに五郎市を、心强うも預けたは、まさかの時

に、せめて我が子の、命ばかりは助けたさ、推量して下されいなう。
　トほろりとする。この時五郎七、五郎市を背負ひ、出かけゐて
五郎　ア、、誤りました〳〵、ウ、疑ふたは、ゲ、、下郎が誤り、コ、こらへて下され、オ、お家様。
かぢ　ヤア、、そなたは五郎市。
權六　以前の家來の三二の五郎七。
五郎　ク、、委しう聞いた、オ、お家の心。コ、此うへは、コ、、この和子を、愈々、ア、、預かり、オオ、俺が養育。
かぢ　そんならそなたが育てゝたもるか。エ、、忝けない。今はあの子も九條の里へ、禿奉公にやつてあれば、兩三日の間に暇を取つて、そなたの方へやる程に、どうぞ養育してたもや。
　ト云ひ〳〵、懷より金包みを出して
少しなりとも子供の小遣ひ。
　ト渡す。
五郎　ソ、、そんならこれを。
かぢ　隨分ともに煩はぬやう。
五郎　オ、お家様、權六どん、さらばでござんす。
權六　靜かに行かんせ。
かぢ　コレ、五郎市、そなたはちやつと太夫さんの傍へ。
五市　アイ。
　ト上手屋體へ入る。ト唄になり、五郎七、橋がゝりへ入る。
かぢ　コレ、權六どん、お前は今頼んだことを聞き合して來て下さんせ。
權六　そりや呑込んでゐやんす。
かぢ　隨分ともに氣取られぬやう。
權六　そんならお梶どん。
かぢ　早う行て下さんせ。
權六　合點でごんす。
　ト唄になり、權六、向ふへ入る。お梶、後見送つて、
かぢ　エ、、有難い。姫君のお身の行くへは聞き出すし、思はず手に入る五百兩、あれで身請けの諸事を明け、又五郎市は以前の家來、三二の五郎七に、頼んだれば氣懸りなし。嘸冥途から連合ひの、五右衞門どのも悦ばれう。女の身のあられもない、惡事と知りつゝこの商賣。
　ト一寸愁ひのこなしあつて、氣を替へて

イヤ／＼、不覺の涙、盜み騙りもお主へ忠義。案じてゐても濟まぬ事。ドリヤ、そろ／＼と歸りませう。

ト行きかゝると、ばた／＼にて、佐次兵衞、走り出て來る。お梶、一寸隱れる。佐次兵衞財布を持つて

佐次　サア／＼、事ぢや／＼。今の島左門と吐かした奴は、どこへ失せたぞ。順慶さまに逢ふて金を渡さうとした所が、似ても似附かぬこのやわぴん、其うへ島左門と云ふ奴は、肥前名護屋へ軍にござつて、こつちに居やう筈はないとの事。それではあのお梶めよりは侍ひが

ト火鉢を見て

ソレ／＼、爰にあるこの火鉢より、直ぐに出したゆゑ違ひないと思ふたが、中で品玉やり居つたか。エヽ、腹の立つ、忌々しい。どうしてこましたら腹が癒えう。口惜しいわい／＼。

ト地團駄踏んで、財布を打ちつけ、ぐんにやりなる。此うちお梶、そろ／＼行かうとする。佐次兵衞見て、立上がり

ヤア、うぬはさつきの衒妻め。

トかゝるをお梶一寸支へる。お梶、そこにある毛氈を佐次兵衞の體へかぶせる。佐次兵衞、其まゝ、そこにある拂子にて打つてかゝる。お梶、突き飛ばす。此うとき橋がゝりより以前の形にて同宿、出て、お梶の持つてゐる僧帽子をくれと、かゝるを、お梶、同宿を突き飛ばす。此うちに佐次兵衞、毛氈を被り、拂子を持ち、床几にかゝる、達磨の樣になる。お梶、見て

かぢ　南無阿彌豆腐。

ト手を合し拜む。佐次兵衞、ウンと意氣込む、お梶、花道へ行て

阿呆よ。

ト向ふへ走り入る。チョン／＼

返し

淺黄幕かぶせる、直ぐに禪の勤めになり、下手より思ひ／＼の仕出し大勢、出て來て、皆々、立留りて

仕一　なんと今日はこの南禪寺にて、大名衆がたんと寄らしやるさうな。

仕二　それぢやによつて、おいらもその見物せうと思ふて出て來たのぢやて。

仕三　なんぢや知らぬか、天下樣のお花見ぢやと云ふて、

色里町中より、今日はどえらい群集ぢやわい。

仕四　そろ／＼往て、見物しませうぢやないかい。

皆々　さうせう／＼。サア／＼、ござれ／＼。

ト禪の勤めになり、上手へ皆々入る。チョン／＼にて、淺黄幕切つて落す。

造り物、三間の二重、向ふ金襖、左右落間、後、網代塀、南禪寺文丈座敷の體。久次、衣裳長上下にて、彈正、素袍烏帽子に改め、反打つて、久次に詰め居る。久次、居ながら止めて居る。世尊寺中納言、勅使にて、床几にかゝり居る。小姓、太刀を持ち、久次の傍に扣へる。平舞臺に筒井順慶、錦の陣羽織を久次に見せて居る。この並びに山口玄蕃、龍造寺帶刀、佐竹左京、素袍烏帽子にて、橋がかゝりに上杉景遠、黑田監物淺野左内、三輪五郎左衛門、素袍烏帽子、各各大名にて、立つて居る。バタ／＼、序の舞ひにて、道具納まる。

ト序の舞ひ打上げ、唐樂になる。

久次　彈正さま、こりや何事でござる。

彈正　罪科極まる其の方なれば、押して介錯いたさうと存じて。

久次　イヤ、假令久次切腹に及ぶとも、こなた樣のお指圖は受けぬ。勅使お成りの席と云ひ、尾籠千萬、お扣へなされい。

ト突き放す。彈正、こなしあつて、下に居る。皆々坐る。

世尊　眞柴久次。

久次　ハツ。

世尊　大領久吉には異國征伐、勝軍を祈りの爲め、加茂八幡の兩社にて奉幣捧げ、まつた當南禪寺にて、當時桃山の城内に參勤の諸大名、源平四姓の系圖改め、禁裡御文庫へ納めよとの勅諚。

久次　建久の頃右大將の治世に當り、諸大名は大系圖を撰みし事、國家安全の例し。未だ部屋住みの某なれども、父久吉が名代、お勅使とあつて世尊寺中納言さまには、遠路の御光駕、御苦勞千萬に存じまする。

順慶　武將久吉公には名護尾在陣の、留守居に殘る我れ我れども

帶刀　系圖改めと承り

玄蕃　各々申し合せ

左京　未明よりこの所へ

皆々　相詰め居りましてござりまする。

世章　只今聞けば、桃山の寶藏に籠めある、千鳥の香爐紛失との事。この香爐の儀は明智光秀、春永より拜領し、今久吉が寶となる。當今後陽成院、深く御叡望あつて、叡覧に供へよと勅命を下されし所、紛失にて事が濟まうか。急ぎ詮議を致してよからう。

彈正　イヤ、外を詮議するには及ばぬ。香爐盗みしは久次、そちぢや。

久次　香爐紛失、某が仕業とは、證據ばしあつての事かな。

順慶　その證據はこの陣羽織、鳳凰を縫ひ附けし蜀江の錦、紛れもなき武將の着用、久吉公より讓り受け、こなたの所持でござらうがの。

彈正　千鳥の香爐に變あらんず時は、自然と音を出す稀代の名器、まつた蜀江の錦を以て、これを覆へば直ちにその音を止む。察する所父久吉より、家督讓りたきを恨み、子として親を亡ぼす謀叛の根ざし、申し譯あるまいあるまい。

帶刀　久次さまには御簾中のお胤、久秋さまには淀町さまの御實子、その子の寵に溺れ、久秋さまへ天下を讓らん大領の思召し。

玄蕃　さるに依つて、附け家老岸田民部、不破伴作なぞが勸めに隨ひ、御野心ありと街の風說。

五郎　香爐紛失かた〴〵以て不審晴れず。

左京　御野心でござれば、主君の若君とて用捨はない。

景遠　御勅使の目通り、久次さま御返答を承らう。

皆々

久次　ハヽヽヽ、コリヤ仰々しき不審呼ばはり。千鳥の香爐所望と思はゞ、父に願ふて表向きより、請ひ受けるに仔細やあらん。父に弓引く野心なぞとは、存じもよらず。

彈正　左程堅固な久次さま、香爐紛失の場所に、この陣羽織は、なにゆゑあつたな。

久次　サア、その儀は。

彈正　謀叛と云つたが誤りか。

久次　サア。

皆々　申し譯がござるか。

皆々　サア〳〵。

皆々　なんとでござる。

ト此とき不破伴作、蔚附け上下にて、つかつかと出

て

伴作　イヤ〳〵、いづれも、暫らくお抑へ下さりませう、主人久次が申し譯、恐れ乍らこの伴作が仕りませう。先づ〳〵暫らく。

彈正　伴作、其方が申し譯とは。

伴作　ハッ、御勅使樣へ申し上げまする。千鳥の香爐盜み取りしは、斯く申す伴作でござりまする。

世尊　ナニ、其の方が

伴作　四海に名高き香爐なれば、日頃より望みをかけ、主人の陣羽織を密かに取り出し、桃山の寶藏へ忍び、かの錦を以てこれを盜み取つてはござれども、よくよく思へば四海の重器、事露顯せばこの身の大事と思ふより、密かに香爐打割り捨て、人は知らじと思へども、天命遁れず御主人の難儀となり、是非に及ばず盜賊の白狀。この上は四海の成敗、サア、いかやうとも計らはれませう。

久次　伴作、それへ出い。

伴作　ハッ。

ト平伏する。

久次　不屆きな奴の。幼少より不便を加へ、我が膝元に召使ひ、若黨乍ら忠義の者と存ぜしに、恩を忘れし非道の仕業、千鳥の香爐を奪ひ取りしのみならず、破却せしとは言語同斷の曲者。獅子身中の蟲とや云はん。コナ、人外めが。

ト きつと云ふ。伴作、久次を見上げ、ほろりと泣き、氣を換へ、居直り

伴作　サア、御存分に遊ばされませう。

ト 覺悟の體。久次、小姓に持たせし太刀を取り、血相する、この時、向ふより

民部　待つた我が君、暫らく〳〵。

ト 唐樂きつぱりとなる。向ふより岸田民部、衣裳上下、老けたる家老の拵らへにて、つかつかと出て

岸田民部、只今出仕。

ト 花道よき所にて平伏する。

久次　岸田民部。

民部　ハッ〳〵。

久次　千鳥の香爐紛失の儀は

民部　承知仕つてござりまする。

久次　伴作が白狀、手討ちにいたすを、なぜ留める。

民部　罪の疑はしきは輕く行へよと古人の格言。御勅使の目通り恐れながら、この民部が詳しく申し譯仕る。我

が君には先づ〳〵。

ト平伏する。久次こなしあつて、太刀を下に置く。

世尊　岸田民部、苦しうない、近う。

民部　ハッ。

トこの時伴作、こなしあつて、末座へ扣へる。民部、平伏しながら、本舞臺へ來りて、刀を橋がかりの方へ置き、よき所へ坐る。

彈正　伴作が自身の白狀を、盜賊でないとは。

民部　伴作はお家譜代、かゝる非道を企むべき理由がござらぬ。差當たつたる主人の御難儀、この場を無事に納めんため、盜賊と名乘りしは主人へ對して忠義の若者。久次公には一途のお怒り、お手討ちなぞとは近頃粗相千萬、先づ〳〵お鎭まり下さりませう。

左京　然らば矢張り久次さまに

玄蕃　疑ひかゝる

皆々　香爐の紛失。

民部　御主人に疑ひとは、何を以て。

願慶　香爐紛失の場所に、落ち散きありしこの陣羽織。

民部　御父久吉公より、お讓りありし錦の著用。香爐とても主人久次公のお寶同然。

彈正　スリヤ、其の方が事を糺すぢやまで。

民部　久吉公のお眼鏡を以て、附け家老たる岸田民部、貴人諸侯の方々でも、他家他門の批判は受けぬ。いらざる媒介、御無用々々。

ト願慶、彈正と顏見合せ

兩人　ハテナア。

久次　誤つて疑へば、罪なき人を殺すとの本文。民部、伴作。

兩人　ハッ。

久次　此うへともに忠勤を勵んでよからう。

兩人　ハア、。

ト平伏する。

世尊　民部が忠心に愛でゝ、香爐の事は追つての御沙汰。この上は廣間に於て、諸大名の系圖を改め、奏聞に及ぶであらう。

彈正　末代までの記錄となる氏系圖。この彈正は桓武天皇の後胤、平の淸盛が末孫、兄春永まで十二代、連綿たる家の系圖。

願慶　某は橘の末葉、暫らく春日の神職と相成り、運に乘じて大和一國を切取り、四海に轟る筒井順慶。

帶刀　拙者は藤原秀郷が嫡孫、九國に名高き龍造寺帶刀。

景遠　大職冠より二十四代、子孫傳へし上杉景遠。

玄蕃　我が先祖は唐土の琳聖太子、大内が一族にて、山口玄蕃。

五郎　武藏の國兒玉氏を相改め、三輪五郎左衞門高秀。

監物　宇田源氏の嫡流、黑田監物。

左内　淸和源氏の正流淺野左内。

左京　新羅源氏の佐竹左京。

彈正　いづれも源平藤橘の四姓を離れず。今四海の武將と仰ぐ久吉公、氏系圖なき匹夫下郎、草履取りの眞柴大領。

作作　イヤ／＼、彈正さま、以前は格別、今久吉公の客分とお成りなさつて、祿をお取りなさるゝ、あなた樣、聞き惡い惡口雜言、言葉が過ぎると免しませぬぞ。

　ト擬勢して云ふ。

彈正　なんぢや／＼、何をぎしやばる。なんぼう、うぬがきつぱ廻しても、この彈正嘘言は云はぬ。眞柴久吉は匹夫下郎ぢや。

　ト久次へあてゝより

下郎を下郎と云つたが、彈正の誤りか。

作作　餘りと云へば

　トおこづくを、民部、顏にて押へる、久次もこなし。

彈正　ナニサマ、久吉は、尾州中村、筑阿彌とやら云ふ土民のお胤、その血筋たる久次、系圖と云ふは畑いぢりのうごろもち。ナント、いづれも、遖れた系圖ではござらぬか。

皆々　御尤もに存じまする。

彈正　その下司下郎に膝を屈して、尊敬するも、時世につるゝ人の立身。これを思へば蚯蚓が、昇天すまいとも申されぬ。ハヽヽヽヽ。

　ト久次を詰つて云ふ。

世繼　方々の申す如く、眞柴の氏は四姓のうちにも聞き及ばず、末代までの證據に殘す系圖書き、先祖は土民、父は下郎の草履摑みとも記されまい。久次、面々の系圖を聞いて、嘸心外にあらう。

久次　劉邦はもと沛縣の土民、僅か三尺の劍を引ッ提げ漢家四百年の基を開き、高祖皇帝と仰がれ給ふ。大和唐土と例は變らず。日の本の宗廟、天に照らす御神を、父久吉が先祖の系圖と定め置きましてござります。

彈正　大鋸屑も云へば云はるゝとかや。口利口に云ひ拔け

ても、貴人は貴人、下司は下司と、相分けるが天地自然の道理。兎角云ふうち時刻延引。お勅使様、廣間へ御入りあつて、持參いたせし拙者が系圖。

順慶　我れ〳〵どもが姓氏の一卷。

皆々　お改め下さりませう。

彈正　ナニ、伴作、久次が草履摑みの系圖書き、お勅使の御前へ持參いたせ。

ト伴作、おこづゝを、民部、押へる。

世尊　久次、後刻。

久次　ハツ。

世尊　方々、案内。

皆々　先づ、御入りあられませう。

ト唄になり、世尊寺中納言先に、彈正、順慶、大名皆皆、奥へ入る。久次、民部、伴作、跡に殘る。合ひ方になり、伴作と民部と入れ替つて、久次を見上げ

伴作　殿樣、嘸御無念にござりませう。

ト久次、無念を隱す心にて、兩手を組み、俯向く。伴作、久次が顏を見詰め、こなしあつて

恥辱を與へし殿樣の御鬱憤、さうぢや。

ト追取刀にて行かうとする。民部、袴の裾を取つて

民部　伴作、待ちやれ。

伴作　イヤ、殿樣になり代り、彈正始め筒井順慶、一々にぶち放して、切腹すれば事相濟む。そこ放さつしやれ。

ト振り切る。

民部　待て。

伴作　放さつしやれ。

ト立廻つて、伴作を引廻して

民部　待て〳〵、待たうぞ。

ト屹度留める。伴作、民部に詰めかけ

伴作　民部どの、今諸大名の惡口は、こなたの耳へは入りませぬか。いま日の本の武將と仰がれ、勇も智謀も兼ね備へたる久吉公、何に變りはましまさねども、士民の腹に宿らせ給ひしは、御子孫まで系圖の恥。久次公の御無念が思ひやられて、伴作めが腸を、ずた〳〵に切り裂く樣にござるわいなう〳〵。

ト身を震はして云ふ。民部、伴作を見て

民部　主人の恥辱、無念にあらう、口惜しからう。

ト伴作、はら〳〵と泣いて、俯向く。此うち久次默して思案の體。民部こなしあつて

貴きも賤しきも變らぬ人界、人もなげなる只今の惡口。

ト奥を睨みて

我が主君久次公を、匹夫土民の胤と思ふか。王位を出でて遠からず、清和源氏の正流たる、三好左京太夫勝成どのゝお胤と知らざるか。コナ、うつけ輩めが。

ト奥を見て云ふ。久次、フトこれを聞きこなしある。

伴作、心得ぬ體にて、躙り寄り

伴作　民部どの、主人久次公を清和源氏の正流、三好家の公達とは、仔細ぞあらん、なんとでござるな。

民部　ホ、ウ、仔細知らねば不審は尤も。斯く云ふ民部ももとは三好家譜代の家來。武將久吉公、未だ筑前守たりし時、室町殿と我が古主たる、左京どのも倶に在京。末の入魂結ばんため、未だ水子の若君を、お乳もろとも養子となし、我れも主人の指圖に從ひ、附け人となつて當家に赴く。暮れ行く月日も早二十三年、古主三好は四國を斬り取り、阿波の勝端と云ふ所に一城を構へ、阿波の館と諸人の尊敬。久吉公は運に乘じ、討つに從ひ攻むるに靡き、遂に四海の總追捕使と仰がれ給ふ。胤腹分ける御親子とお聞きあらば、若し不行跡もあらんかと、今日只今まで、隱し包みし御身の素性。眞柴は武將、三好は臣下の列ながら、氏は正しく淸和の後胤。六十餘州の大名に、何恥づる所のあらんや。諸侯列座の席に於て、打明けんとは思ひしかど、明かさば久吉公をさみする道理と愚人輩が惡口雜言、他所に聞きなす民部が無念さは、どのやうにあらうと思ふ。

ト憂ひのこなしにて

伴作が無念、久吉公の心外、嘸あらんと思ふゆゑ、よしなき民部が問はず語り、何事もこの場限ぎり。伴作、必らず他言な無用〱

ト久次、始終を聞き、扨はと云ふこなしにて、心の改まるこなし。

伴作　恥を知るは仁を知る。諸大名の惡口より、思はざる主人の筋目、恥辱は却つて時の幸ひ。殿樣、御安堵あつて然るべう存じまする。

ト久次、屹度こなしあつて

久次　今まで知らざる我が素性、實父は正しく淸和の淸流、氏も系圖も誰れをか恐れん。

ト思案を極めし體にて

父大領は名護屋在陣、折を窺ふ明智が殘黨、旗擧げをなさゝるうち、一心の臍を固め、父を押籠め、六十餘州を掌にせん時節到來。

ト民部、伴作、ぎよつとして、つか／＼と行て、兩方より詰めかけ

伴作　スリヤ、御身の系圖を開いて

民部　父君に敵對ある

兩人　御謀叛のきざしとな。

久次　ト久次、太刀を持ち、ずつと立つて
唐の太宗は兄を射殺し、武田信玄は父を廢して國を保つ。諫言いたすな、所存は一決。
ト兩人、顏見合せ

兩人　ホイ。
ト當惑のこなし。

内方　還御。
ト件絃になり、奥より世尊寺中納言、彈正、順慶、其ほか大名皆々出る。橋がゝりより、仕丁大勢出て來りて、扣へる。民部、伴作、下の方へ行く。

世尊　民部が演說、具さに聞く。扨ては阿波の館、三好の亂にてありしよな。

彈正　さは知らずして先刻の法外。

順慶　無禮は偏へに

皆々　御免に預りませう。

世尊　參内の上、沙汰に及ばん。方々、さらば。
ト行かうとする。

久次　お勅使、待たつしやれ。

世尊　用があるか。

久次　父久吉は武家の棟梁、大領關白。この久次は三卿の隨一、太政大臣に任官あれと、大内へ取次ぎをさつしやれ。

世尊　その願ひ叶ふまい。大内へ對してさせる功もなく、故もなきに任官の沙汰があらうか。存じも寄らぬ事、叶はぬ／＼。
ト行かうとする。久次、中納言が首筋を引ッ摑む。皆々驚く。
コリヤ、某をなんとする。放さぬか／＼。

彈正　勅使に向つて慮外千萬。

順慶　公成卿を手込めにして、後日の祟りをいかゞ召さるる。

久次　うぬ、青公家め、取次ぎせずば無事には歸さぬ。サア、官位昇進の奏聞いたすか。

世尊　どうあつても非道に組する公成ではない。奏聞の儀は叶はぬ／＼。

ト笏にて振り拂はんとする。久次、その笏を引ッたくり、中納言が冠を叩き落し、下舞臺へ蹴落す。民部、伴作、手に汗を握るこなし。

彈正　狼藉千萬、うぬ。

ト反打つてかゝる。久次、太刀を拔いて、突き附ける。彈正、氣を呑まれ、後へ寄る。

順皆　我れ／＼が

ト寄らうとする。久次、太刀を持ち替へて、白刃を附ける。皆々、血相に恐れ、後へ寄る。

久次　承引せずば生けては歸さぬ。取次ぎいたすか。

世尊　サア、それは。

久次　討ち放さうか。

世尊　サア

兩人　サア／＼／＼。

久次　どうぢや。

ト又白刃を中納言に突き附ける。これにて中納言、ワアと云ふて飛び退き、震ふ事あつて、それより性根を据ゑしこなしにて

世尊　オヽ、殺さば殺せ。和歌三神も照覽あれ、天理に背く公成でない。いつ迄も取次ぎは叶はぬ、ならぬ事ぢやぞ。

ト震へ聲にて云ふ。久次、ずつと下りて、中納言を斬らうとする。民部、中納言を退け、刀に縋り、留める。伴作も留めて

民部　待つた、御勅使に凶事あつては、朝敵同然。

伴作　四海の騷ぎにお心が附きませぬか。

民部　御短慮千萬、先づ／＼。

兩人　お待ち下さりませう。

ト久次こなしあつて、兩人を引退け

久次　命冥加な青蠅め。順慶、彼れが裝束を引ッ剝ぎ、眞裸にしてぼッ拂へ。

順慶　イヤ、その儀は

久次　早く引ッ剝げ。

順慶　ハッ。

ト當惑乍ら中納言に向ふ。

御意でござる。裝束を脫がつしやれ。

世尊　ハテ、やくたいもない。この裝束を脫いでは

順慶　ハテ、脫がつしやれ。

ト拔き身を敎へ、その首が飛ぶと云ふ仕方する。中納言は首を納め、すつ込む。

命代りぢや、早く脱がつしやれ。
世尊　是非に及ばぬ、兎も角も仕りまする。
ト我が手に束を脱ぎ、帯を解き、小袖を脱ぎ、長襦袢、半湯文字一つになり、しよんぼりとなる。
作丁　こりや又あんまり。
ト寄らうとするを、袖にて留め
世尊　ヤレ、早まるな方々よ。只何事も麿の不徳のいたす所。さはさりながら公成が、諸侯満座の席に於て、剝がれしと沙汰あつては、摂家清花の恥辱とならん。世尊寺中納言は歸京の道筋、白川橋の邊りにて、盗賊に剝ぎ取られしと末世末代記録に留めよ。斯うもあらうか。世尊寺と云へば損する習ひかや、されども肌に殘るきんなり、ハテ、有為転變の世の中ぢやよなア。
トこなし。民部、久次が傍へ居直り、詰め寄つて
民部　久次公、こなたはなんとして、悪魔が入れ替り、非義非道の御振舞ひ、よも御本性ではござるまい。御身の御先祖は、先づ斯く／＼と明かせしは、日頃の御氣性、仁義正しき名將と、見極めし民部が眼力、相違いたせしこの場の所行。コレ、假令三好のお胤にもせよ、一旦御養子とならせ給へば、後の親を本とせよとの本文を、お辨へはござらぬか。一人たんれいなれば一國亂を生ずとやら、佞人輩が讒言の種となつて、御身の破滅不義の汚名にその身を果たし、玉を磨きし累紲の御所も、狐狸野盗の住み家となつて、父に刃向ふ悪逆とも、畜生塚とも呼ぶならば、民部が無念は、どのやうにござらうぞ。サア、お心を改められ、勅使へのお詫び、善心に蘇つて下され、我が君様。
ト詰めかけ云ふ。久次、拔き身を構へ、血相して
久次　ホゥ、悪逆とも畜生とも、譏らば譏れ、一心は翻へさぬ。謀叛の手始め、その勅使めを
彈正　ヤア、民部、氣もせいやくな。所詮諫言用ひぬ證。順慶、いづれも、何をうつかり。朝敵謀反の久次、生け置けば後日の祟り、踏ん込んで嬲打て、早く早く。
順慶　誠に、いづれも、ソリヤ。
皆々　心得ました。
ト素袍をはね退ける。民部、伴作、心遣ひのこなし。皆々久次にかゝらうとするを、民部、伴作、左右にてこれを留め
兩人　聊爾あられな、待つた／＼。
ト兩人留めるを、久次、中納言に切つて行く。早き舞

ひになり、中納言、逃げながら狼狽へる。彈正、久次を搦めよと焦慮る。順慶大名皆々、久次を組み留めんとする。色々毆り退け、中納言を追ふ。中納言は逃げ廻る。民部、作作、皆々を宥めたり色々ある。この立廻りのうち、大名皆々、片鬢をちよくられたり、肩先を切られたり、手疵を負ふ。中納言、逃げ廻り、こけつまろびつ花道へ逃げて入る。久次、花道へ追ひかける。作作、向ふに立塞がる。順慶、大名皆々、駈け附け、久次に組み附く。彈正は本舞臺にて、焦慮り、行かんとするを、民部、留める。花道の人數、右の見得にて、本舞臺へ押し戻す。久次、切り拂ふ。彈正、順慶、臆病口へ逃げて入る。大名皆々、橋がゝりへ逃げて入る。久次は向ふを目がけ行く。作作、組み附き留める。民部、陣羽織を取り、片手に刀を拔き、久次へ突き附ける。三人、この見得よろしく、後じさりして二重舞臺までつか〳〵と行き、久次、屹度なつて

久次　岸田民部、スリヤ我れに手向ひ致すか。

民部　イヽヤ、民部ではない。この陣羽織は御父久吉公の着用、取りも直さず久吉公の御折檻。

久次　なんと。

ト作作、刀を引退け、民部、刀を捨て

民部　君は船なり、臣は水なり。

作作　水よく船を浮べる時は

民部　その君全し。

作作　我れ〳〵が諫言は

民部　御身に用ゆる良藥とは

作作　御存じなきか

民部　我が君

兩人　久次公。

ト裏身になつて、左右より見上げる。久次、金鍔にて舌を潤し、兩人をじろりと見て、肩にて笑ふ。この見得よろしく、チヨン〳〵にて

返　し

造り物、平舞臺、一面の筋塀、空は櫻の吊り枝ぶらりと下がる。矢張り南禪寺山門の體。忙しき禪の勤めにて、道具留まる。

トばた〳〵、上手より彈正、素袍、股立取り、景遠、監物、五郎左衛門、銘々股立ちにて、所々疵を附け、附添ひ出て來る。橋がゝりより順慶、黑羽織、忍び頭

巾にて侍ひ三人連れ出て來て、双方行き合ひ

順慶　彈正さま、どこもお怪我はござらなんだか。

彈正　イヤ、拙者はお庇で怪我もせなんだが、怪しからぬ領惠者ゆゑ、持て餘してござるて。

景遠　その相伴にはこの景遠、顎たをもよくられ、閉口いたした。

五郎　この三輪五郎左衛門は片小鬢。

皆々　身どもは大事の鼻の先。

三人　お庇で痛い御馳走に預かつたた。

順慶　それは氣の毒。身どもは又一番に駈け出したは、卑怯でござらぬ、この家來どもを呼びに參つた。シテ、久次は。

彈正　民部めと伴作がやう／＼取りおさへ、程なく聚樂へ歸るでござらう。

順慶　エヽ、時遲れて殘念千萬。

彈正　イヤナニ、順慶老、久次が叛逆は思ふ壺、咎めの箇條は千鳥の香爐。

順慶　その香爐の儀は春永公より明智へ下され、今久吉が家の重寶。

彈正　この彈正が頼みによつて、定めて貴殿が。

順慶　盜み取つてこつちの手に入る。

彈正　シテ、その香爐は。

順慶　即ちその隱し所は

　ト囁く。彈正、聞き取つて

彈正　スリヤ、當時の、アノ、山門。

　ト云はうとするを、順慶、抑へて

順慶　人の目に附かぬやう、二重目の屋根裏に隱してあれば氣遣ひ御無用。

彈正　フム、よし／＼。此うへは久次さへ亡き者にすれば久秋の馬鹿者は、捻り殺すになんの手間暇。

順慶　久吉は名古屋在陣の留守と云ひ、何も彼も思ふ壺。

皆々　その時の荷擔は我れ／＼。

内方　久次公のお立ち。

同　ハア、。

皆々　スリヤ、久次めは

彈正　裏門より歸館と見ゆる。我々も見え隱れに立廻り

順慶　家來どもは跡に殘り、邪魔になる伴作めを釣り出して、合點か。

三人　心得ました。

　ト右三人、上手へ入る。

皆々　イデ、この上は我れ〳〵も
順慶　この順慶も御同道。
彈正　いづれもお來やれ。
ト唄になり、人數皆々、向ふへ入る。チョン〳〵にて

返し

右の筋塀、双方へ引取る。黑幕切つて落す。造り物山門の二重門、屏前高欄、高き斗形、よろしく、石山門の兩脇、一面の櫻の花盛り、前の蹴込みの所、霞にて下隱れあり。この緣先に、眞砂路、傾城にて傍に蒔き繪の莨盆、銀の長煙管にて莨をのみ乍ら・四方の風景を見て居る心にて、この道具、前へ突き出す。かすかに禪の勤め、木魚入り、誂らへの合ひ方にて、道具納まる。

ト直ぐに淨瑠璃になる。

〽九重の、櫻に匂ふ山門の、甍も花に埋もれて、霞棚引く夕まぐれ、南禪寺に撞く入相は、枕にあらぬ欄干に、身を峙て丶開き澄まし、香爐峰の雪ならぬ、簾を蒔き繪の莨盆、寄せてくゆらす煙さへ、實に諺に傾城の、晝寢ぬ程に思ひ詰め、願ひありげの獨り言。

眞砂　春の眺めを價ひ千金とは、さもしい譬へ。この石川屋眞砂路がためには、詞にも云ひ盡されず。日も山の端に傾いて、暮れの櫻も一入に、ハテ、麗かな眺めぢやなア。

〽煙管つく〴〵眺めやり、

ほんに思へばこの身ほど、變つた望みはない程になう。浮き川竹に勤めの身。體は苦界に沈めども、誠の父は先將軍武智日向守光秀さま。小栗栖にて御生害あり、この身は乳母に抱かれて、館を落ち延びそこかしこと、世を忍ぶ身はそれぞとも、安き心はせぬものを、却つて多く入り込みの、九條の里にこの身をば、連れて乳人は引舟奉公。連合ひは乳兄弟の、娘を連れてこれも散り〳〵、生死の程も分らねば、せめては行くへ聞きたいと、十の年にくれ〳〵と、云ひ置いて行つた跡、この身は廓に置き土產、人の勸めに是非なくも、袖褄取つて傾城の、我が名に呼びし石川屋、眞砂の客の數々も、張りと意氣地に振り通し、まだ帶紐は解かねども、ふと見染めたは眞柴の公達、金吾久秋と云ふ若殿、嫌味がなうて凜として、今時女のなづな風俗。とても女子に生れた甲斐に

〽あゝ云ふ殿御にしつぽりと、閨の下紐うち解けて、抱かれて寐たいこの身の願ひ。

現在この身の父上と、仇敵たる眞柴の家、その若殿と知り乍ら、惚れるもなんぞの因縁事。

〽心のたけをくど／＼と、戀する態の一筆に、書いて送りし玉章の、あどけなくも又可愛らし。

返事待つ間も辛氣さに、遣手引舟禿まで、脇へそらして只一人、この山門に昇りしも、是非お歸りは彼のお方、その道ならでと思ふに附け、見送るうちも夕まぐれ、ほんに辛氣な、事ぢやわいなア。

〽花の梢に立ち惑ふ、醒かあらぬか數多の鵆、群がり遊ぶ有様に

ト　これにて薄どろ／＼鵆笛、鵆數多飛び交ふ。

〽眞砂路思はず打ちまもり

ト　眞砂路、見て

ハテ、合點の行かぬ。時は今、春の半ば、四方の櫻も綻びて、木々の梢も匂ふ頃、時ならぬ千鳥の啼く音、加茂の川原か白河の、流れも爰に遠のいて、山懷のこの邊に、時知り顏に群れ遊ぶは

〽はて不思議やと夕月に、猶も目を附け打ち頷き

コリヤコレ、只の鵆とも見えず、兼ねて聞く眞柴の重寶、千鳥の香爐は、その昔、小田の家の重寶とやら、武智の家に賜りしを、今は眞柴家に納まり、この香爐の奇瑞には、變ある時には音を出だし、數多の千鳥の群がると聞く。若しその音を止めんには、蜀江の錦を以て覆ふとやら。

〽試し見んには屈強と、見やる軒端に音を立てゝ、群がる千鳥追拂ひ／＼、邊り探れば過たず、手に當つたる一つの香爐。

ト　軒裏より香爐を取り出す。千鳥いよ／＼群がる。千鳥笛、禪の勤め。

〽取れば愈々啼き立つ千鳥。音を止めんには幸ひと、頷き膝を補襠の、袖に覆へば飛び散る千鳥、啼く音も共に靜まれば、猶も覆ふて邊りを見廻し

世にも不思議な寶の奇瑞。この袱紗こそ古代に渡りし蜀江の錦、これを以て覆ふ時は、今まで群がりし數多の千鳥、一羽も見えずどこへやら、これ程奇瑞のあるものをなにゆゑ爰に隱せしぞ。

〽誰れが仕業と案じつゝ、かたへに包み打ちやりて。

ト　眞砂路、香爐を懷へ入れる。

〽かゝる折柄、散る花を、見捨てゝ歸る雁ならで、文を啣へて只一羽。

ト雁、文を啣へて來る。

テモ、しほらしいこの雁がね。かの唐土の蘇武ならで、誰が玉章を雁のつて、戀のなかだちする事ぞ。

〽あゝ浦山しやと立上がり、追へども騒ぐ氣色も見えず、繰り取る文に羽叩きし、雲井遥かに飛び去つたり。眺める文は外ならぬ、花の雫と濡れ文句。

アヽ、いづくも同じ色の道。

〽心悄やと繰戻し〳〵、見れば名宛ては我がさす敵。

ト此うち眞砂路、煙管にて雁を追ふても去らぬゆゑ、啣へし文を取る。雁は文を放して、トヒョにて飛ぶ。眞砂路、不思議さうに、段々文を見て

ヤア、久秋の君樣、早瀨より。こりやこの身の戀ふ久秋さんと、深い縁の濡れ文句。久秋さまと云ふ名さへ、戀し床しう思ふ折、これ見よがしにあの雁がね。テモ、憎てらしい、そなたでも、番ひ女夫はあらうのに、送つた返事の便りもなく、見せつけたらしい惡戯文。エヽ、胴慾ぢや、胴慾ぢやわいなう。

〽恨みのたけに思はずも、立たんとすれば裲襠より、まろぶ香爐、啼き立つ千鳥。戰き作ら手に取上げ。

ト又千鳥笛、千鳥群るゆゑ、眞砂路、惘りしながら、ちやつと立上がり

オヽ、さうぢや。斯うした相手があらうとまゝ、思ひ立つたるこの身の戀路。假令呵責の大紅蓮、油の中で煮らるゝとも、ちつとも厭はぬ我が願ひ、叶へいで置くべきか。

〽思ひ詰めたる女の一念。

トきつと向ふを見る。この見得、チョン〳〵にて、禪の勤めきつぱり、床と打合はせの合ひ方、上調子入り誂らへの鳴り物になり、この道具段々せり上げる。この時、花、夥しく降らす。山門の下、石段、兩方筋塀、櫻の實木現はれ、眞中せり出しより女巡禮淀町、上より繰り下ろす文の端を取り、讀み、終りの端を持ち、片手にて腰の矢立てを出し、石川やの歌を落書きの見得。又花道の中程へ久次、衣裳壷折、高下駄にて、下座の方より伴作、着附け上下、股立ちにて、南禪寺丹後屋と云ふ傘をさしかけ、これに花吹雪がたまつてある。山門を見込み居る。この見得にてせり上げる。上座切り穴より權六、着流し、野袴にて、その蛇

の日傘。この下に久秋、殿の形、上に赤合羽をかけ、手に弓を持ち、これに矢を番へ、空を狙ふ心、きよろきよろと可笑しく狙ふこなし。よき時分に、空より以前の雁を飛ばす。始終花吹雪つもりある體。三方一緒にセリ上げ、鳴り物ちやんと變つて、道具納まる。

久次　アヽ、降るワ〳〵。風雅を知らぬ愚人でさへ、見捨て難きは花の雪。我が身に重き傘の、上にも積もる國の恩、寶に面白きこの眺め。

作作　九重に、立つ白雲と見えつるも、大内山のそれならぬ、南禪寺院の花の雲。

權六　その櫻木と人は武士、忠義も同じ立つか弓、あり合はせしを幸ひに

久秋　得物はそれと數へられ、なんぢや知らねど滅多的、あの雁がねをどうぞして、

ト弓を構へる。眞砂踏、こなしあつて

眞砂　戀し床しい心の迷ひ、慥かにそれぞと思へども

ト久秋の方をすかし見る。

久次　人間萬事塞翁が、馬に鞍置く眞柴の榮え。

ト久秋、不器用に矢を放し

久秋　コリヤ、してやつた、鳥嚇しぢや。

ト自慢の心。空より雁、矢立ち、ぱつたり落ちる。

權六　思ふ矢壺へ今の手ごたへ。

作作　空より落ちしその雁がね。

眞砂　それかあらぬか夜目遠目。

久次　花の吹雪ともろともに

作作　雪かと見れば花の雨。

權六　翼纏はれしこの獲物。

ト矢を拔く。雁、ぱつと飛んで行く。

久秋　鳥は飛んでツツと行た。

久次　怪しの女郎。

ト山門をきつと見る。

眞砂　どうして見ても

久秋　利口な俺ぢや。

ト我が鼻へ指をさす。

作作　優にやさしき

權六　寶にも由々しき

眞砂　匂ひと

久次　香。

久秋　飽かぬは花の

皆々　眺めぢやなア。

トこの時、淀町、書き仕舞ふて

淀町　石川や、眞砂の數は盡くるとも、實に戀草の種は盡きまじ。

皆々　なんと。

ト眞砂路、エ、と驚く。手に持ちし文を引く。仕掛けにて中程より裂け、半ばは淀町の手へ殘る。久次、つか／＼と行く。伴作も附いて本舞臺へ來て、淀町と顏見合せ、ちよつと恟りのこなしにて、上を見込む。權六は門の方へ行かうとする。淀町、眞中にて、双方よろしく留め

淀町　こりや巡禮に御報謝か。

ト手に持ちし狀を、杓の柄にきり／＼と卷き、眞砂路に見せる。久次、伴作、權六、久秋、入れ替り擬勢する。見得よく留める。久秋、指をねぶる。上より

眞砂　入れませう。

トこの見得よろしく、チョンと頭、誂らへの鳴り物にて　　ひやうし幕

二幕目　　聚樂御所の場

役名――眞柴久次。眞柴久秋。お通姬。腰元、早瀨。粟津嘉門。岩城主稅。堅田の小雀。不破伴作。出雲のお國。名古屋山三。澤瀉小彌太。柳生監物。柏手左膳。奧方、吳竹。腰元、胡蝶。同、東雲。同、浮舟。同、常盤木。茶道、珍齋。幇間、頓八。奴、矢田平　實ハ安田作兵衞。岸田民部　實ハ四王天但馬守。淀町御前。辻浦十內。花園中納言時房　實ハ石川屋眞砂路　實ハ武智皐月姬。

造り物、通り二重舞臺、向ふ金襖、上手塗り骨障子屋體、幕のうちより腰元一、二、三、四、瓢簞の模樣、揃ひの着附けにて、二人づつ兩方に分れ、眞中に結構なる褥、脇息、蒔き繪の莨盆など置き、久次、廣袖、着附け、壺折り、丸絎けにて居る。この兩方に早瀨、胡蝶、東雲、浮舟、右四人もやはり瓢の揃ひ、腰元にて、早瀨は久次の太刀を持ち、扣へ居る。平舞臺に名古屋山三、空色繻子、桃色の素袍の上ば

かり着附け、紫繻子の振り袖、同じ素袍にて出雲お國、兩人とも小結烏帽子、半弓と矢を持ち、相舞ひの心にて、所作のかゝりの鳴り物にて、幕明く。

ト玉藻の前の舞ひになる。

くに　そも〳〵、御狩りの始まりは

山三　武をば忘れぬ戰場の、學びて用ゆる三つの弓。

くに　流鏑馬、笠縣ひ、犬追物、皆それぞれの例しあり。

山三　唐土にては文せん王

くに　我が朝にては鳥羽の院の御時に

山三　玉藻の前と身を變じ

〽容顔美麗世に勝れ、てんと堪まらぬ天人も、及ばぬ雲のかけ橋や、渡りに船の戀の闇、晝ともわかぬ妹背中、互ひに抱き月ならば、いつでも丸う添ひ寐して、この日の本も一と所に、よる程嬉しい可愛いと、迷ひ迷ふぞ淺間しき。

ト よろしく振りあつて

山三　實に神國の威徳にや、安部の保成占ひて

くに　忽ち玉藻は九つの、尾を古狐と顯れて

山三　那須野の原に飛びしざり

くに　往き來の人を惱ませば

山三　弓矢の道に勝れたる

くに　三浦上總の兩介へ

兩人　勅命下つて馳せ向ふ。

〽武門の晴れとたつか弓、矢猛心と引締めて、よつ引きひようと放つ矢に、流石三國傳來の、九尾の自在も忽ちに、消えて那須野の殺生石、由緒は今に隱れなき、弓矢の譽れぞ有難き。

ト兩人よろしく納まり、辭儀する。ト合ひ方。女皆々、ヨウ〳〵と褒める。此うち久次、不興のこなしにて

久次　父久吉が肥前より、送り越されし名古屋山三、出雲のお國とは其方達よな。

兩人　ハツ。

ト兩人辭儀する。

久次　若年ながら天晴れの風流、玉藻の前にうつゝを拔かし、四海の政事を怠り給ふ、鳥羽の君に准へて、この久次に諫言せんと、云はぬばかりの兩人が今樣。

兩人　エヽ。

久次　舞ひに事寄せ久次に、諫言せよと大領の云ひ附けか。但し何者に頼まれた。サア、眞直ぐに白状せい。

兩人　サア、それは。

久次　云はずば拷問にかけ、白状さゝうか。
兩人　サア、それは。
久次　但し手討ちにせうか。
兩人　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
久次　うぬ。
　ト早瀬が持ちたる太刀を取る。皆々とめて
皆々　マア〳〵、お赦し遊ばしませいなア。
　ト支へる。振り放し、此とき民部、奥より、上下にて、つか〳〵と出て、久次を留めて
民部　待つた、殿、暫らくお待ち下さりませう。
皆々　あなたは岸田民部さま。
久次　民部、妨げいたすか。
民部　なるほど殿の御賢察の通り、肥前よりこの者を送り越し、舞ひに事寄せ御諫言申し上げよと、加藤小西兩臣が計らひでござりまする。
久次　ヤア、奇ツ怪なる兩人が采配。かゝる若輩者を以て久次に諫言なぞとは、慮外な奴の。ヤイ、われ達も其まゝにはさし置かぬ奴なれど、云はゞ若年者、其まゝに赦す。山三は今日より久次が傍小姓、お國は直ぐに妾となし、三十餘人の列に加へくれる。よろこべ〳〵。
兩人　イヤ、私しどもは
民部　ハテ、お詞を返さば直ぐにお手討ち。マア、お受けいたしたがよいてや。
　ト顔にて兩人を呑み込ます。
久次　岸田民部、今朝其方に申し附けし儀、取り計らひしか。
民部　今日ツた例年の通り、當聚樂の館にて、瓢の神事に就き伴作をお使者として、當春よりお目通り遠ざけられしを、閉門御免遊ばさるゝ代り、先達て御父大領さま御懇望の、齋の宮の神木常世の松、父君を差措き、久次公に差上げよとの御難題、承はると其まゝ神職に對面いたし、御懇望の常世の松、某受取り立歸る。即ち次に控へさし置きましてござれば、只今取寄せ、御上覽に供へるでござりませう。ヤアヤア、家來、常世の松をこれへ持て。
侍ひ　ハツ。
　ト上下侍ひ、黒塗りの石臺植ゑの松を持ち出て、よき所へ直し、直ぐに入る。久次、松を見て
久次　いかに民部、見れば枝葉も枯れ〳〵の常世の松。ム

ウ、扨ては父大領の手前を恐れ、僞せ物を以てこの久次を欺くのか。

民部　イヤ、全く以て僞せ物ではござりませぬぞ。

久次　でも、斯くの如く、

民部　御秘藏の、常世の松は枯れにけり、おのが千歳を君に讓りて。

久次　ヤヽ、なんと。

民部　有難の松の心あり、久吉公と申し此方樣御親子、御所望の爭ひとなり、いかゞはせんと斯くの如く、自然と枯れし常世の松。老木の松はこの民部、千歳を君に讓る前表。

ト久次の傍へ詰め寄つて

久次公、エヽ、お情ないお心でござりまするなア。好色亂酒に性根を蕩かし、闇君よ愚將よと、世の人口は思し召さぬか。殿を三好のお鼠と云ふ事、これ迄深く包みしは、御眞實の御親子と、思し召されし久次公へ、なまなかの事申し上げ、却つて御親子の御仲隔たりては、四海の難儀と口を閉ち附き添ひしに、諸侯滿座の中に於て、眞柴の家は氏もたき、匹夫下郎とさみせられ、思はず三好の御血脈と、申し上げしはこの身の誤り。

ト我が腹を叩いて、思ひ入れあつて

それより今までのお行跡に引替へ、四海を横領せんなぞと、日頃に變りし大惡非道。コレ、この常世の松の枯れ枯れになりしも、この民部が一命は君に捧げて諫言ッさばき、久吉公へ申し譯なさんず知らせと思し分けられ、何卒御本心におなりなされて下されうならば、有り難う存じまする。

ト久次を見上げ、松の石臺を突き附け、愁ひの思ひ入れにて云ふ。

久次　ヤア、詞が過ぎる岸田民部。附け家老の身を以て、我れを僞り、よくも今まで三好の鼠と云ふ事包み隱せし不忠者。枯れたる松は所望にない。きり／＼持つて、立ち居らう。

ト石臺を踏み散らし、きつとなる。民部、思ひ入れあつて

民部　エヽ、淺間しい我が君、いかなる天魔の魅入りにて、斯くまで強惡非道の、お心にはなり給ひしぞ。今までの通り聖人の教へを守り、御座なさればその通り、自然と手に入る眞柴の四海。それを何ぞや、無法無體に奪はんとは、順に向ふ逆賊同然。明智が如き叛逆の、惡名がお

取りなされたいか。久次公、エヽ、情けない御所存でござりまするなア。

久次　ヤア、聞きたくもない諫言立て。詞を返すと手は見せぬぞ。

民部　三度諫めて身退くは本意にあらず。諫言のお手討ちは望む所。サア、久次公、遊ばせ〳〵。

ト居直り、首さし延べる。久次、立上つて

久次　よい覺悟、觀念せよ。

ト太刀を抜き放す。女皆々、心遣ひのこなしにて、支へる。

皆々　マア〳〵、お待ち遊ばしませいなア。

ト太刀にて切らうとするを留める。振り放し切らうとする。この時、橋がゝりより、伴作、瓢の揃ひの上下にて、つか〳〵と出て、久次を留めて

伴作　久次公、先づ〳〵お待ち下されませう。

久次　不破伴作、悪く留め立ていたすと、其方とても用捨はないぞ。

伴作　エヽ、お情ない、又御短氣が差起こりましたか。誰れかある。お藥を早く〳〵。

茶道　ハア、。

ト銀の天目に金の茶碗を載せ、持ち出づる。久次、取つて

伴作　イザ、お藥召上られませう。

女皆　マア〳〵、お心をお鎭めなされませいなア。

ト早瀬、無理に抜き身を取つて、鞘は納める。其ほか皆々、久次の顏を見てこなし。久次、物云はずに、伴作が差出したる茶碗を取つて、一口呑まうとする。向ふバタ〳〵にて、上下侍ひ走り出て、花道に手を支へ

侍ひ　申し上げまする。

伴作　何事ぢや。

侍ひ　ハツ、御簾中淀町さま、早川高景さまお供とあつて、火急のお成りでござりまする。

ト云ひ捨て入る。

民部　ナニ、御簾中淀町さま。

伴作　高景お供にてお越しとは。

女皆　又御意見にお入りなされたか。

ト久次、きつとなつて、藥の茶碗を捨て

久次　出迎へ。

ト早瀬が持ちたる太刀を引ッたくり、ついと奥へ入る。皆々跡を見て、ホツと息づく。

民部　よき折柄のお成り、御簾中とも申し合せ、又御諫言の申し様もあらう。伴作、其方常世の松を次の間へ。

伴作　畏まつてござる。

ト　もとの如く石臺を繕ひ、腰元に渡す。伴作、こなしあつて

伴作　山三お國にも、次の間にて休息しやれ。

兩人　ハッ、畏まつてござりまする。

ト　下がり葉になり、山三お國、橋がゝりへ入る。腰元二人は石臺を片附け、民部、伴作、早瀬、其ほか腰元皆々、見得よく出迎ふ。ト　向ふより淀町、瓢の裲襠、腰元静々出る。後より高景、瓢の長上下にて、後へ常盤木、岩城主税、澤邊小彌太、柳生監物、柏手左膳、着附け上下にて、皆々花道にて

民部　こは存じ寄らざる淀町の御方さま。

伴作　早川高景どのを始め、いづれもには

兩人　御苦勞に存じまする。

淀町　岸田民部、不破伴作、兩人ともに出迎ひ太儀。

高景　肥前名護屋より火急の早打ち、それゆゑ淀町さまの御供仕り、久次公へ申し上げたき一儀あつて。

主税　岩城主税景秀。

常盤　同じく妹常盤木。

小彌　澤邊小彌太。

監物　柳生監物。

左膳　柏手左膳。

主皆　皆々參上。

敵皆　致してござる。

民部　各々方にも御苦勞千萬。

伴作　イザ、先づ、これへ。

皆々　お通り下されませう。

ト　矢張り下がり葉にて、淀町、しづ〳〵と二重、褥に上がる。次に高景、上座相引にかゝる。早瀬、胡蝶、腰元二人、上手に並ぶ。淀町が下手に、民部、居る。その下手に東雲、浮舟、外に腰元二人並ぶ。下手下舞臺に作作、次に監物、左膳並ぶ。下舞臺上手に常盤木、主税、小彌太、各々並びよく座定まる。下がり葉打ち上げ

民部　先づ何かは差措き、肥前名護屋より早打ちとは、氣遣はしう存じまする。

淀町　なるほど民部の氣遣ふも道理。自らとても大領様の火急の御書到來、心も心ならぬ御上意の趣き。高景、民部

へ申し聞かせ、久次どのへ演説いたさせてよからう。
高景　ハア。いづれも、御書の趣き承はられよ。
民伴　ハツ。
ト高景、御書を開き
高景　第一の咎めは寳藏の金子我が儘になし、三十餘人の婆を愛し、諫言の者を短慮の手討ち。まつた南禪寺に於て、世尊寺中納言の裝束を剝ぎ取り、無體の打擲。其うへ奥庭に能舞臺をしつらひ、右近の橘左近の櫻を植ゑ、紫宸殿の粧ひをなし、禁庭を輕んずる奢りの沙汰。右三ケ條の條々、云ひ譯あるや。附き人たる面々、御返答いかに。
兩人　ハツ〳〵、ハア、
高景　久次公の御身持ち放埒、名護屋表へ、櫛の齒を引くが如く、告げ奉る者あるゆゑ、聚樂の御所、寳藏の改め、大領よりお譲りありし、御用金に相違あるや、改めの役はこの高景に、相勤めよとの御上意。
民部　スリヤ、久次公の御身持ち、名護屋表に御座なさる久吉公へ、逐一にお聞きに達し、それゆゑの早打ちとな。
伴作　其うち當聚樂の御寳藏に、納めある御用金の御改めは。
主税　コレ〳〵、伴作どの、さぞ御當惑。今日淀町さまの御入りは、寳藏の御改めと心附き、御供いたして推參。その寳藏の金子は不足いたしてござりまする。
民部　ナニ、寳藏の金子、不足いたして居るとな。
常盤　云ふも愛し、云はぬもつらし、久次さまの御放埒、斯う顯れたら是非に及びませぬ。なるほど寳藏の金子は、久次さまが、お遣ひ捨て遊ばしましてござりまする。
小彌　久次公に頼まれまして、拜借人の列に加はり
左膳　この度出陣の軍用金と申し立て
小彌　表向きをくろめんため
常盤　人聞きの惡い金の借り主。
主税　大抵迷惑な事では
敵皆　ござりませぬ。
ト三人、顏見合せ、當惑のこなし。
淀町　そんなら愈々、放埒の聞こえあるその上に、寳藏の御用金まで、ハア、。
ト當惑のこなし。
高景　イヤ、憚り乍ら、この高景が存ずるには、寳藏の金子不足せしとて、あながち久次公の落度ばかりでもござ

るまい。皆これにござる各々方の誤りと申すもの。

主税　イヤ、高景どの、こなた樣には我が君名護屋御在陣の御供、異邦渡海の役目にて、九州肥前に御逗留のお身、都の事は今日この頃知り乍ら、云はせて置けば方圖がない。何がどうして我れ〳〵が

皆々　誤りでござるか。

高景　假令久次公いか程にお賴みあらうとも、後日に大領へ聞こえたらば、申し譯相立たずと、始めに辭退もあるべき筈。一旦得心して、金子の拜借人となるならば、いか程詮議に會ふとても、明樣に云はぬが武士の誠。この場に及んで大領へ申し譯をなさんとすれば、久次公への不忠となる。但し久吉公ばかり御主人にて、久次公には御主ではござらぬか。

五人　サア、それは。

高景　ハヽヽヽ、いかに女中の淺慮なればとて、淀町さまのお側とも憚らず、ちとお嗜みなされい。

主税　成る程、こりや誤りましてござりまする。

五人　主税どのゝ仰せの通り、我れ〳〵どもが不調法。

高景　民部どのには久しく閉門の身の上。今日例年の通り靈の神事、行はるゝとのお赦しあつての御出仕と聞く。寶藏の金子不足とあるは、御存じあるまい、ナウ、民部どの。

民部　成る程御推察の通り、先達てより度々御讒言申せしを科とあつて、今朝まで閉門の某。金子不足の儀は、貴に只今承はり始め。今諸侯の奧方たちのお詞に、相違はないか。伴作、どうぢや。

伴作　身不肖なれど不破伴作、久次公のお傍に附添ひ、寶藏の金子不足の儀は、拙者めが申し譯仕る。

高景　シテ又、世尊寺中納言の官職を剝ぎ取り、無體の打擲いたし、其うへこの紫宸殿の學びの行跡はいかに。

民部　イヤ、その儀は世上の雜言、我が君久次公、かつ以て左樣の儀は

高景　ないとは云はさぬ。匹夫下賤の行ひより、今四海を切りなづめ給ふ程の大領公の御不審に、的の外れし譯はれあらうか。

民作　サア、その儀は。

高景　よも返答はいたされまい。

伴作　一命を的にかけても

民部　申し譯仕るが、臣たる者の道。

兩人　まさかの時は

伴作　拙者とても

　ト兩人、腹を叩き

　御推察

兩人　下さりませう。

高景　天晴れ、持つべき者は家來ぢやよなア。

常盤　スリヤ、お使者への申し譯には、伴作さま、お前はお腹を召す心か。さうした時は、わたしが望みは

　ト思はず立ち上るを、主税、引留め

主税　エヽ又、そちが出しやばらずと、控へて居やうぞ。

　トこれにて常盤木、指を啣へて控へる。高景こなしあつて

高景　淀町さまには、さぞ御滿足にござりませう。

　ト淀町、思ひ入れあつて

淀町　とは云へ寶藏の金子相違あるも、久次さまの奢りを鎭めんため、金井久秋さまには家來附添ひ、農業を營ませ、民の辛苦を思ひやる樣、この聚樂の奧殿へ田畑を拓かせ、久次さまに見する時は、自然と奢りの心も熄み、放埒懦弱も直まらうかと、自らが指圖を以て、久秋此村には、この程農業怠りなきか。早瀨、どうぢや。

早瀨　御臺樣の仰せの通り、久秋さまには大殿姬君お通姬さま諸共に、父上の指圖にて、日々怠りなう、農業を遊ばされまする。

主税　イヤコレ、早瀨どの、久秋さまには、うだしいお生れ附き、お姬さまには懷子、それに附き添ふ岸田どの、余り怠らぬでもござるまい。

小彌　農業に怠りないと、餘り立派には云はれますまい。

常盤　それをチッと押し默つて、見てござる此村さまも、よい氣なお人。なアお三人。

左膳　左樣々々、一つ穴の狐と云はうか、但し慾に目が見えぬのか。

四人　ハヽヽヽ。

　ト袖を引合ひ笑ふ。聞き兼ねて

伴作　コレ〳〵、早瀨どの、いづれものお詞岸田どのヽ、お耳に入つても氣の毒千萬。申し譯あらば、ソレ、いづれもへ。

　ト顏にて教へる。

早瀨　成る程お疑ひも御尤も、さり乍ら、この身に深い願ひもあり、さう〳〵久次さまのお心に、隨ひます心はなけれども、逆ふ時はたちまちお手討ち。それゆゑ皆さんと御一緒に、是非なうお傍に附添ひ居りまするわいな

ア。
浮舟　その事ばかりは私しどもが
女菅　きつと證據に立ちまする。
淀町　そんなら愈々噂に違はず、諫言すれば、アノ、お手討ちに。
ト當惑のこなし
高景　大領様よりの三ヶ條の、云ひ譯立たねば久次に、切腹いたせよとの御諚でござる。
作作　スリヤ、久次公に御切腹を
ト民部の顔を見る。民部、キツと思ひ入れあつて、ホイと俯向く。
淀町　自らとは義理ある久次どのに、切腹させよとの御上意は、ほんにお心強い久吉さま。同腹の子の久秋を世に立てんと、生さぬ仲の久次を、惡しざまに云ひなせしと、自らが繼しいゆゑと、世の取り沙汰。と云ふて久次どのの、本心を見屆ければ、大領さまへお詫びの願ひも叶ふまい。ハテ、是非にも及ばぬ事ぢやなア。
民部　イヤ、淀町さまには、恐れ乍ら、お氣遣ひ下さりまするな。お聞き入れあるまで、ならぬ迄もこの民部が、御諫言申し上げ、三ヶ條の申し開き仕りませう。

淀町　スリヤ、そなたが。
民部　申さば久次公の御大切の場所、御本心に立歸らせ、申し開き仕るが、主人のため四海のため。
主税　イヤ、心許ない。假令ふるなの辯舌とやらで、御意見申したとて、なんとして／＼、あのお心は直りますまい。
作作　そこを又岸田どのが御諫言あらば、お聞き屆けあるまいとも申されぬ。
小彌　シテ又、寶藏の御用金、不足いたした申し譯は。
民部　そりや先達て拜借召された樂中より、久次公の大事と聞き、返納あらば償ふ道理。
主税　ア、滅相な、拙者どもが借りもせぬその金を
小彌　これ皆久次さまに頼まれまして
民部　サア、その借らぬとは內證事、久吉公の御上聞に達したれば、今更異變は、下として、上を僞る大罪。
浮菅　ヤア。
作作　こりや金子返納なされずばなりますまい。
主税　然らば又第三番目のお咎め、御意見申す者をお手討ちになされた落度、この申し譯はよもやござるまい。
作作　イヤ、そりや見ると聞くとゝやら申す諺。なんぞや

科無き者を理不盡に、御成敗をなされうぞ。我が身に誤りあり乍ら、その科をくろめんため、忠臣顔の諫言だて、それと悟つて君のお手討ち。

小彌　スリヤ、三ケ條の申し譯は

伴作　なんとこれで立ちませうか。

民部　但し外に各々方の、御不審がござるか。

皆々　サア、それは。

皆々　サア。

民皆　サア〱〱。

民部　よもや御批判はござりますまい。

淀町　ホヽ、天晴れ忠臣の三人。それで自らの義理も立つ。久次どのゝ安穩、此うへともに、そなたをくれ〲頼んだぞや。

民部　ハア。

ト平伏する。奥より粟津嘉門、着附け上下にて、伴作が前に手をつき

嘉門　伴作さま、何卒淀町さまへお取次ぎを願ひ上げまする。

伴作　粟津嘉門、淀町さまへ取次ぎ願ふ仔細は。

嘉門　ハツ、即ち久次公の仰せには、この粟津嘉門にお茶を立てさし上げよとの御事。圍ひへ御入りあつて、恐れ乍ら拙者よりの手前、差上げたう存じ奉りまする。

伴作　お聞きあられましたか。

淀町　未だ三ケ條の趣き、承知の返答、聞かぬうちに圍ひへ。

高景　イヤ、憚り乍ら三ケ條の趣きは、三忠臣にお任せあつて、久次公の御返答あそばさるゝ迄、圍ひへ御入りあつて御休息。

淀町　久秋にも大江にも對面仕りませう。高景、そなたは有無の返答

高景　承はるでござりませう。

淀町　そんなら民部、二人の衆。

民部　追ツつけ御承知の御返答、申し上げませう。

伴作　いづれも圍ひへ入つて御相伴。

四人　有り難う存じまする。

伴作　イザ、淀町さま。

淀町　皆の者。

民高　先づ御入り

皆々　遊ばされませう。

ト琴唄になり、淀町先に、伴作、案内にて、敵役その

高景　外女形残らず、奥へ入る。跡に高景、民部、残る。合ひ方。
民部　民部どの、さぞ心勞にござらうなう。
高景　御推量下されい。
高景　シテ、この納まりは、如何召さるゝ御心底ぢやな。
民部　拙者が愚案は
ト邊りを眺め、吊り花生けの杜若を取上げ、高景に差出し
この花の一本。
高景　ムウ、こりや初咲きの杜若。
民部　切つてから、見るやあやめと杜若。
高景　見るやあやめと杜若。
民部　あやめに似たる杜若、切つて差出す拙者が心底。
高景　かゝる例しは源の満仲、臣たる仲光に、美女御前の首打てと、もつての外の御怒り。
民部　打てとあるもお主なり
高景　打ち奉るもお主なり
民部　如何はせんと當惑の、折に幸ひ我が子の幸壽、美女御前のお身替りと、打つてこの世に名を殘す。心は同じ忠義の道。その仲光には幸壽丸と云ふ、悴はあれども久次公の、お身替りにはあやめ草、明けてそれとは申されど、云はぬ心を推量あれ。
ト此うち上手の障子を開け、伴作、立ち聞きしてゐる。
高景　ハテ、面白き花の身替り。若しその花を見分ける時は
民部　仇花折るは落花狼藉、この薄端の水もこぼさず、まッこの通り。
ト薄端に生けある杜若の花を、一輪切つて
高景　スリャ、生けた儘にて、水も動かず
民部　切つて捨つるも主君のおため。
ト屹と思ひ入れ。伴作、一間にて思ひ入れ。高景、感心のこなしあつて
高景　ハテ、天晴れ
ト思はず上手を見る。伴作と顔見合せ、障子ぴつしやり。高景、扨てはと云ふ思ひ入れにて、民部の方を見て
花も生け手の手際ぢやよなア。
ト膝を叩く。民部、これを見上げる。唄の中へ序の舞ひ打ち込み、チョン〳〵にて、返し。

造り物、三間の間、二重舞臺、藁屋根、見附け赤壁、納戸、橋がゝり一面の柴垣、中門、上手落間、向ふ網代塀、この前上手へ行く廊下かゝり、舞臺前、卯の花の盛り、右二重の正面に葛籠を飾り、これに御酒を供へあり。下手に矢田平、箭を枕に相引にかかり、居眠り居る。二重上の方にお通姫、振り袖さげ附、着流し、置き手拭ひにて、極ざいしきの苧桶に、苧を績んで居る。次に呉竹、奥方の形にて、これも着流しにて、糸車にて糸を紡ぐ。次に腰元一、二、三、四、蒔き絵の双六盤にてじんきを巻き、箱置きの枠にて糸を繰りなぞして居る。この見得となり、柿の木の唄に機織りの音を打ち混ぜ、道具納まる。

呉竹　ほんに姫君樣には、馴れぬ手業の賤が方便、さぞお退屈にござりませう。

お通　イヤ、ナウ、呉竹、自らは母上の仰せにて、兄君久秋さま諸共、この程この聚樂のお館に滯留、永い日の、つれづれにはよい慰み、大抵面白い事ではないわいなう。

呉竹　成る程遂に御覽じぬ賤の業、これも大領さま昔のお身をお忘れ遊ばさぬあの葛籠。兄君久次さまの沓りを鎮めるためとあつて、姫君樣には夫高山右近どのに成り代り、この呉竹。又久秋さまには此村御親子附添ひ、結構づくめの聚樂の館へ、新たに建てしこの賤が家。附添ひの腰元衆まで、糸紡ぐやら苧績むやら、變つた所在ぢやないかいなう。

腰三　呉竹さまの仰しやる通り、木に竹ついだお物好き。

腰四　さり乍ら、お姫樣にはお退屈なされぬ筈、お氣に入りの伴作さま。

ト云はうとするを

お通　コレ〳〵、木端、何云やる。呉竹も爰にゐやるに、そんな事云やんないなう。

腰一　デモ、僞りではござりませぬ。今朝程からとんとお顔が。

お通　エヽ、云やんなと云ふに。まだ云やるかいなう。

ト呉竹の方へ氣兼れのこなし。呉竹、聞かぬ顏にて、矢張り糸紡いでゐる。ふつと矢田平を見て

呉竹　快う居眠つてゐるあの姿、ほんにけうとい矢田平。コレ、皆の衆、掃除仕舞ふたら休みやと云やいなう。

腰二　コレ、矢田平どの、掃除仕舞ふたら、早う部屋へ行

て休みやいなう。
腰三　イヤ〳〵、まだ用がある、ナア、青葉どの。
腰四　ほんにそれ〳〵、今日は瓢の祭りゆゑ
腰三　いつもの通り、瓢箪棚の掃除萬端、早う片附けてしまやいなう。
四人　コレ、矢田平どの〳〵。
ト四人、矢田平返事せぬゆゑ、顔を覗き見て
腰四　オヽ、可笑し、まだ居眠つてぢやわいなア。
四人　コレ、矢田平どの〳〵。
ト皆々口々に喧しう起こす。矢田平、目を擦り〳〵、伸び欠伸して
矢田　アヽ、ぐつたりと一寐入りやらかしてのけた。スリヤ、今のは夢であつたか。思はずまどろむ夢のうちにも、若殿様の御放埒、まつた久秋さまの農業仕事、いづれを見ても困つたものぢや。これにつけてもお附きの方々は、定めて御心配。かけ構ひのない俺でさへ、夢に見ても、アヽ、どうぞしてと思ふもの。ほんに思ひやられまするわい。
ト邊りを見廻し
これは〳〵、お腰元衆、暫時の睡眠、眞平々々、御免下さりませう。
腰二　矢田平どの、お前なんぞよい夢でも見てゐたのかいなう。
腰一　なんぼう呼んでも知らん顔
腰三　よう寐る奴ぢやなア、皆さん。
腰四　ほんにお前は人並より大きな體、なにかに附けて、さぞしんどからうなア。
矢田　イヤモウ、朝早くから、この大きな庭を掃き掃除、イヤモ、大抵の事ぢやござりません。
腰一　時に矢田平どの、いつぞはお前に問はうと思ふてゐましたが、アノ、このお屋敷は毎年のこの祭り、どう云ふ譯でござんす。
腰三　ほんにそれ〳〵、その譯知つてなら話して
四人　聞かしやいなう。
矢田　エイ、その譯でござりまするか。
四人　さうぢやわいなう。
矢田　この瓢の祭りと申しまするは、曰く因縁故事來歴がござりまして
四人　サア〳〵、早く、聞かしやいなう。
矢田　サア、話しまする。聊もこの瓢の祭りと申すは、そ

の昔、爰なお館の久吉公、春永さまに使はれて、丁度お
らが身分の時分、春永さま遊獵のお慰みに、お供を仕
りました所が、あの山口九郎次郎と云ふ侍ひが、假家に
釣り天井と云ふ物拵らへて
四人　それからどうしたえ。
矢田　所が今のお旦那久吉公が、陰氣とか金氣とかゞ立ち
昇ると、怪しい事がある、その證據には馬が向ふへ、少
しも行かぬとやりかけた所を、おら見る樣な奴が大勢寄
つて、大きに嘲弄いたした所、大將の春永公、蘭丸に云
ひ附けて、傍なる草井戸へ、かの鼈にあらぬ瓢簞を、
その井戸へ打込み、コリヤ、東吉、その瓢簞、手も濡ら
さず取り得る工夫あるや如何にと、云はれて久吉公が暫
時工夫の凝らし、傍へなる大きな樋の口を押破り、水を
井のうちへ流し込み、易々その瓢簞を取り上げなされた、
その功に依つて瓢簞を旗印しにせよと云ふて貰はしやつ
たげな。その砌りより家の寶となし、ソレ、三月十五日、
今日を瓢の神事と唱へて、いま天下取つても、昔忘れぬ
と云ふ故事來歷、あらかじめ斯くの通り。なんとお腰元
衆、瓢簞祭りの因緣は解りましたか。
腰一　ほんに詳しい矢田平どの。

腰二　瓢の話し、長々と太儀であつた。
腰三　掃除が濟んだら部屋へ往て
四人　休みやいなう。
矢田　ネイ。なんの事ぢや。瓢簞祭りの話しをせい。ネイ
ネイと云ふて、口のだるうなる程喋らして、大儀であつ
た、部屋へ往て休みやいなう、ネイ。あんまり阿呆らし
い。
　トこなしあつて
ドリヤ、部屋へ往て休息すべいか。
　ト唄になり、箒を擔げ、靜々下座へ入る。ト序の舞ひ
　になり、橋がゝりより常盤木出て
常盤　オヽ、姬君樣始め皆のお衆、怪しからぬ御精の出し
やう。ちとお休みなされませいなア。
　ト云ひながら二重へ上がる。皆々、手道具片附け
お通　オヽ、常盤木、おぢやつたかいなう。
呉竹　オヽ、常盤木さん、ようこそお越し。シテ、淀町さ
まには。
常盤　今日例年の瓢の神事、その上久次さまの事に附き、
名護屋より火急の御書、それで淀町さまのお供して、參
りましたのぢやわいなう。

呉竹　それはマア御苦勞な事。火急な御書とは、何も氣遣ひな事ではござりませぬかえ。
常盤　高山のおかもじ、まだな事云はしやんす。氣遣ひな事でなうて來るものかいなア。併し久秋さまの事でなうてお仕合せ。呉竹さん、要らぬお心遣ひ御無用〳〵。それはさうと、淀町さまにもお心遣ひ、久次さまは癇癪持ち、御實子の久秋さまは、あの通りのうんてれがん、お氣の休まる間はあるまい。ハテ、氣の毒な事なう。
呉竹　マア、その兄君御短慮と、久秋さまの御病氣を、兩方全うする様にと、淀町さまの思し召し、この通りの賤が業。
常盤　ア、、それも面長た御思案ぢやなア。
向ふ　久秋さまのお歸り。
お通　兄上様のお歸りとな。
常盤　ソレ、阿呆殿のお歸りぢや。
呉竹　お出迎ひ申しませう。
ト誂らへの鉦入りの在郷唄にて、向ふより久秋、衣裳でんちにて、横鉢巻き、淺黄繻子の手覆ひ脚絆、金張りの鋤を擔げ、もてあそびの繪本を持ち、啣へ煙管にて、小姓二人、蒔繪の煙草盆、小さ刀持ち、附き出る。次に珍齋、茶道の形にて、金張りの鍬を擔げ、附き添ひ出る。花道にて
小姓　若殿様、最早お館へ立歸りました。
同　お姫様始めいづれも様、お揃ひなされて
皆々　ござりまする。
ト久秋、舞臺を見て
久秋　もう戻つたか。又みなが澁い顔見にやならぬ。
呉竹　若殿久秋さまには、只今御歸館でござりまするか。
常盤　先づ以て今日は、例年の瓢の神事。
皆々　お目出度う存じまする。
久秋　オ、。
トベツかツこして
目出度い〳〵。
呉竹　先づ〳〵これへ。
皆々　お越し遊ばせいなア。
珍齋　イザ、若殿様。
久秋　オ、サ、やつたり〳〵。
ト右の唄にて本舞臺へ來て、矢張り鋤を擔げ、突ツ張つてゐる。常盤木、見て
常盤　ハ、、、、、いかさま取り所もない阿呆殿、武勇烈

しい大領さまのお胤なれど、眞柴の跡目は、マア、繼がれぬ。
久秋　珍齋、それへ出い。
珍齋　ハツ、御用でござりまするか。
久秋　常盤木があゝ云ふからは、おらは阿呆か。
珍齋　イヤ、左樣でもござりますまい。
久秋　ナント、つける藥はあるまいか。
珍齋　ござりますなら、わたしも一服
常盤　何を阿呆ばかり。
ト これにて珍齋、後へ寄る。此うち伴作、淀町の裲襠を肩にかけ、奥より出て
伴作　久秋さま。
ト これにて久秋、伴作を見て
久秋　構ふな、ア、
ト 伴作、傍なる糸枠を取つて、久秋を散々に打ち据ゑる。
ア、、伴作、堪忍ぢや〳〵。
ト泣く。吳竹、伴作の傍へ詰め寄つて
吳竹　コレ、伴作さま、お前は狂氣遊ばしたか。愚かしう在しても主人は主人、エヽ、あなたはなア。
伴作　ヤア、愚かなる一言、それをこなたに習はうか。
ト 突き放し
コレ、久秋さま、この召し物御存じあるか。コリヤコレ、御母淀町御前のお召し物。これをかやうに引ツかけて、只今の打擲は、即ち御母淀町さまの御折檻。
ト 久秋、矢張り手そゝぶりしてゐる。
何辨へぬ木石同然。勿體なや父君久吉公の、御名まで穢し遊ばすか。淀町さまにはそれをお悔み、コリヤ、伴作、この衣類を肩にかけ、何卒こなたを賴む程にと、くれぐれの御歎き。只今の打擲は、伴作にあらぬ御母樣が、御折檻のこの糸枠の、いとしさの餘り躾けの百杖は、あなたの心にこたへぬか。エエ、情ない鬼子さまぢやなア。
ト 愁ふる。久秋、伴作を見て
久秋　バア。
ト 後へ寄る。
吳竹　申し伴作さま、女子の淺墓、さうとは知らず、お赦しなされて下さりませ。申し殿樣、この程よりお教へ申した實語教、淀町さまの御前でお後習へ遊ばせ。
久秋　又本を讀むのか。ヤレ、情なや。

呉竹　小姓衆、文臺の書物を持たつしやれ。
小姓　ハア、。
ト小姓一人、文臺に實語教を乘せ、持ち出る。珍齋、受取り、久秋の前に直す。久秋、不承不承に本を擴げる。
呉竹　ソレ、珍齋どの、早う〳〵。
珍齋　玉磨かざれば光なし。
久秋　待て〳〵、玉は磨いても光らぬぞや。
珍齋　とは又なぜに。
久秋　俺が玉は
トこなしあつて
うぢや〳〵痒いばかりぢや。
珍齋　私しもその通り。
ト此ときチャン〳〵と時計鳴る。
伴作　ありや半時の時計、程なく瓢の神事の刻限。
呉竹　嘉例の如く廣間に於てお杯。
常盤　ドレ、私しも、お流れ頂戴せうわいなア。
お通　兄上樣にも御一緒に
久秋　さつきから待つてゐるのぢや。
伴作　いづれも

皆々　先づお入りあられませう。
ト唄になり、一件殘らず奧へ入る。あと合ひ方になり、伴作、殘る。
伴作　久吉公より三ケ條のお咎め、一つとして申し譯は相立たぬ。久次公の御身持ち、さある時は是非御切腹。高景どのと民部どのが、身替りにと花の謎々、あやめに似たる杜若とは、慥かな我が君久次公と、この伴作は同じ年、その面差しも似かゝれば、御身替りに死ねとの事。モシ、その贋せ首の咎めあらば、花器によそへし民部どの、我が身を捨てゝの申し譯と、云はぬばかりのさつきの樣子。もとより忠義に撓まぬこの身、願ふてもなきお身替り。さり乍ら、死する命は惜しからねど、生あるうちに久次公、御本心にお返りある事、見屆けて死すならば、此うへの悦びなし。どうぞ民部どのゝ御諫言にて、御本心にいたしたいものぢやがなア。
ト凝ッと手を組み、思案のこなし。此うち常盤木、そつと伴作の傍へ寄つて、物の云ひたきこなし心にて、云ひかけちやつと飛び退き、窺ふうち、上手の一間よりお通姬、そろそろ出るゆゑ、常盤木、ちやつと隱れる。始終柔かなる合ひ方。お通姬、奧口見廻し、思ひ

入れあつて、つか〳〵と伴作の傍へ來て、手を取つて

お通　伴作、よう忍んで來てたもつたなう。

ト抱附く。伴作、うつとりして、顔を眺め

伴作　ア、、申し姫君樣、淀町さまも御入りあるし、附き附きのお衆の目にかゝつたらどうなされます。お嗜みなされませいなア。

お通　なんの今始めてと云ふではなし、そなたと自らが仲は、誰れも知つてゐるわいなう。

伴作　アレ、また左樣な事を仰せられます。マア、爰お放しなされませ。

お通　イヤ〳〵、大事ない、自らは苦しうないわいなう。

伴作　イエ〳〵、さうぢやござりませぬ。人が見ては互ひのためになりませぬ。

お通　ハテ、斯うしてゐるを人が咎めたら、自らは庭の卯の花を眺めて居ると云ふわいなう。

伴作　ヘエ、この花をかえ。

ト卯の花を指す。

お通　イヽヤ、その花を。

ト伴作が顔へ指して、こなし。伴作も思ひ入れあつて

伴作　ハテ、きつい僞り。

お通　なんの僞り、神かけて。

伴作　なんぼう其やうに仰しやつても、この伴作は死出の旅。

お通　ヤア。

伴作　サア、四手の田長の郭公、

ト空を眺めて、紛らす。思ひ入れ。お通、恥かしき思ひ入れにて

お通　伴作、アノ、郭公と卯の花は女夫かや。

伴作　エヽ、何を仰せられますやら。なんぼうおぼこな姫君ぢやとて、郭公と卯の花を女夫とは。

お通　それでも倭繪にも、郭公と卯の花が一緒に畫いてあるわいの。

伴作　左樣な事を申しませうなら、梅に鶯竹に虎も、女夫ぢやと申さねばなりませぬ。

お通　自らはどうでもだんない。そなたは郭公、自らは卯の花、常住一緒に

ト傍へ寄り添ひ

斯うして居たいわいなう。

伴作　エヽ、面白さうに、そこどころぢやござりませぬ。

ト振り切る。

お通　そんなら伴作、今まで云やつた事は、皆嘘かや。

伴作　アヽ、申し、なんの僞り申しませう。

お通　そんならそなたと自らは

伴作　二世も三世も

お通　離れませぬぞや。

伴作　ハテ、どうなりとも

お通　エヽ、嬉しいなう。

ト思ひ入れあつて抱附く。此うち常盤木、そつと出て、この體を見て、悧りして

常盤　申し／＼、お姫様／＼、コレ、お姫様。

ト兩人の後にて、地團駄踏む。兩人、驚き、飛び退いて

お通　オヽ、常盤木、悧りさしやつたわいなう。

常盤　申し、うつとりの段ぢやござりませぬ。淀町さまの御馳走に、お能が始まります。ちやつとお越し遊ばせいなア。

お通　こちや能より爰に居て、卯の花を見る方がよいわいなう。

常盤　ナニ、卯の花を御覽じやるのかえ。卯の花／＼、卯の花すいとやらで氣はざんぎ。テモ、怖い卯の花なア。

伴作　アヽ、申し／＼姫君様、淀町さまのお召しとあらばお越しなされませいな。

お通　サア、行くわいなう。

常盤　サア、ちやつと召します。ちやつと／＼。

お通　エヽ、今行くと云ふのに。

トぴんとして奥へ入る。こちにて式三番の囃子となる。

〽とう／＼たらり、たらりらア、ちりやたらりらア、たら／＼たらりとう。

伴作　ハア、モウ、お能の始まり。ドレ／＼、拙者も拜見いたさうか。

常盤　伴作さま、お待ち遊ばせ。

伴作　イヤ、拙者は御前に御用もござれば。

ト行かうとするを、引留める。此うち始終、式三の鳴り物。

常盤　エヽ、聞こえませぬ伴作さま、ふつと見染めてそれよりは、伏見と聚樂と隔たつて、文玉章も幾度か、折々久次さまの御名代に、伏見の御殿へ上からしやんす、お顏を見るがせめての樂しみ。これ見て下さんせ、わたしが

大づけない振り袖も、どうぞお前と女夫になり、袖も留めたり眉取つて、見たり見せたりいつ迄も、互に手に手を執り持ち補ひ、所詮離れぬ惡緣と、思ふて色より御返事を、どうぞ聞かして下さんせいなア。

伴作　サヽ、度々お文に預かれど、一度も御返事を致さぬは、落ち散る事の恐れあり、殊に不義は武家一統の御法度なれば

常盤　イヽ〳〵、さうは云はしませぬ。不義は武家一統の御法度と云はしやんすお前が、たつた今お姫樣と、可笑しい素振、ありやなんでござりますえ。

伴作　アイヤ、あれは

常盤　ありや不義ではござりませぬかえ。

伴作　ハテ、滅相な。ありや姫君が、この卯の花を一本、折り取れよとの仰せゆゑ、それでお指圖を受けて居つたのでござりまする。

常盤　そんならマアさうにして、伴作さま、どうぞわたしが願ひをば。

ト取り附くを振り放し

伴作　ハテ、不義は御法度でござりまするわいの。

常盤　ハテ、誰れも知つた者はござりませぬわいなア。

ト又取り附く。

伴作　ハテサテ、お放しなされい。

ト振切る。此とき奥にて式三の鳴り物。常盤木、イヤアと鼓の掛け聲ともに、伴作振り切る。この模樣のうち、お通姫、下手の家體より出かけ、この體を見て、腹立て、つかつかと出て、常盤木を引退け

お通　コレ、伴作、兄上がお呼び遊ばす。ちやつとおぢやいなう。

ト伴作が手を取る。

伴作　ナニ、久次公のお召しとな。

常盤　申し、今の御返事を。

ト又手を取る。

伴作　ハテ、御前のお召しでござるわいなう。

ト此うちもみの段の仕舞ひにて、イヤアと掛け聲とゝもに、むこう突放し、お通姫と手を引き、上手の屋體へ入る。此とき鳴り物やむ。常盤木、むこう轉げたなりに

常盤　エヽ、胴慾な男づら、わたしが此やうに思ふて居るのに、せめて一度は聞き入れてくれたがよいわいなう。

ト此とき、奥、鈴の段になる。常盤木、そろ〳〵起き

上がりて

常盤　今のお姫様との素振りでは、どうでも譯があるに相違ない。それで、たしが云ふ事を、聞き入れてくれぬのぢや。エヽ、腹の立つ〳〵、どうしたらこの腹が癒えうぞ。

トこの前より矢田平、下座より出かけ居て、この時ずつと出て

矢田　そりや何の恨みを。

常盤　アノ、わたしの戀男の邪魔するお姫様に

ト矢田平の顔を見て

オヽ、お前は矢田平どの。

矢田　ハイ、常盤木さま、戀男とは誰れの戀男。

常盤　知れた事、わたしが

矢田　アノ、お前が

常盤　アイ。

矢田　そのラツで。

常盤　どうぞ仕樣はないか、矢田平どの。

矢田　イヤ、ずんと仕樣がある。

常盤　仕樣があるとは。

矢田　サア、その戀の叶ふ仕樣がある。

常盤　そりやどうしたら。

矢田　俺が云ふ通りにしたら、それは〳〵、どんな戀でも直ぐ叶ふ。

常盤　そんなら、どうぞ教へて〳〵。

矢田　イヤ、よしに致さう。

常盤　さう云はずと教へて下さんせ、矢田平さん。

トしなだれる。

矢田　そんなら仕樣ことがない、教へて上げるが、斯うぢや。天王寺のとう〳〵念佛、十申したらわたしが戀を叶へてやらうとなア、と息なしに十遍續けて云ふたら、どんな戀でも叶ひまする。

常盤　そんなら天王寺のとう〳〵念佛、十申したらわたしが戀を叶へてやらうといなア、と、息なしに十遍云ふたら叶ひますかえ。

矢田　さうぢや、どんな戀でも叶ひます。

常盤　でも、あられもない姫御前に、それがどうして

矢田　そんなら伴作さまは、思ひ切らしやりませ。

常盤　でも、惚れ込んだあの男を。

矢田　そんなら天王寺をやらかした。

常盤　ア、儘よ、そんなら思ひ切つて

ト眞中へ坐つて、膝に手を置き
天王寺のとう〳〵念佛、十申したらわたしが戀を叶へる
といなア〳〵〳〵。
ト夢中になつて云ふて居る。矢田平、吹き出してゐ
る。

向ふ　お勅使の御入り。
トこれにて矢田平、恟りして

矢田　コリヤ。
ト常盤木、恟り、口を塞ぐ。
たはけた事を。
ト、チョン〳〵にて　返し

造り物、通り二重、見附け金襖、平舞臺に下手に民
部、上下にて、次に呉竹、瓢の襦襠、次に早瀬、次
に胡蝶、東雲、浮舟、上手の方、主税、小彌太、監
物、左膳、皆並よく並び、出迎への體。向ふより管
絃打込む。誂らへの合ひ方にて、花園少納言時房、
冠、装束にて、後より子役二人、指貫にて、一人
は小弓にて警護、一人は太刀を持ち、次に雜掌、つ
ぎ上下、仕丁大勢、沓臺、長柄を持ち、花道より出
て、中程にて留まるうち、道具一ぱいに納まる。

民部　思ひも寄らざる臨時のお勅使。それゆゑお出迎へさ
へ何かの不都合、無禮の段は眞平御高免。拙者ことは當
聚樂の主、久次が附け家老、岸田民部。

呉竹　高山右近が妻、呉竹。

主税　岩城主税。

早瀬　此村が娘早瀬。

浮舟　唐津主水が姉浮舟。

小彌　澤邊小彌太元光。

監物　柳生監物。

左膳　柏手左膳孝久。

胡蝶　齋藤平左衞門が娘胡蝶。

東雲　本間彦六が姉の東雲。

主税　その外外樣の面々。

監物　お勅使のお出迎ひ

皆々　申し上げまする。

時房　誰れも〳〵、出迎ひ大儀。

雜掌　當今の勅諚を蒙り、花園少納言時房、わざ〳〵こ
れまで。

民部　お勅使には遠路の御下向、御苦勞千萬、イザ先づこれへ。

皆々　お通りあられませう。

ト右の鳴り物にて、時房、本舞臺へ通り、二重眞中に相引にかゝる。指貫の子役、後に附添ふ。仕丁皆々、橋がゝりへ入る。管絃打上げ。

民部　今日は例年の吉例にて、瓢の神事取り行ふ折から、思ひ寄らざる勅使のお入り、勅諚の趣き、仰せ聞けられ下さりませうならば

皆々　有難う存じまする。

時房　勅諚。

ト合ひ方。

皆々　ハア、。

時房　さいつ頃、眞柴久吉、禁庭へ參内の折柄、當今より仰せ出だされ候ふ吳羽中將の娘九重姫、金吾久秋と娶合すべき旨、有難くお受け申し、結納の印しとして、吳羽家よりは清少納言が自筆の春曙抄、まつた眞柴家よりは瓢の御判、取交すべき約諾。

雜掌　然るに久秋は病氣の由にて、輿入れの沙汰も延引に及び、未だ兩家の寶も取替へざるは、察する所この緣談を嫌ひ、打捨て置くに相違ない。さある時には違勅の科。急ぎ久秋に對面の上、有無の返答承れよとの勅諚。

時房　急ぎ評定いたしてよからう。

民部　何事と存ぜしに、先達て大領勅を蒙りし兩家の緣邊、寶取交せし上、輿入れ延引の御咎め、我れ〳〵に至るまで、專ら心構へ致し罷りあれど、久吉肥前名護屋に御在陣にて、聊か軍事に暇なければ、存じ乍ら延引に及び。

吳竹　其うへ久秋多病に附き、打臥すとまではござらねど、樣々に保養いたさせますれば、追ひ追ひには病氣も平癒。

早瀨　其うちには大領さまにも、目出度く御歸陣遊ばし次第、ナア。

民部　吉辰の相選み、結納の二品も取交し、目出度く婚姻取結びませう間、輿入れ延引いたせし儀、天機よろしくお執成し願はしう存じまする。

雜掌　スリヤ、久秋には、未だ病氣本腹せぬとな。

主税　イヤ、いかやうに保養あつても、あの病氣は直りますまい。去年や今年の煩ひと違ひ、生れ附くから愚かな若殿。

鑑物　左樣でござる。あの病氣を本腹させうには、孔明の爪の垢、啄木の耳の糞でも用ひたれば知らぬ事。
左膳　我が君久吉公御歸陣あつて、お傍で折檻たされうとも。
小彌　おいそれと御縁談の調ふ事は覺束ない。ナウいづれも。
皆々　左樣でござる、笑止千萬。
　ト皆々顏見合せ。
ハヽヽヽヽ。
民部　コリヤ〳〵、いづれも、お勅使の御前とも憚らず、何事でござる。
皆々　でも、有體の儀を申し上げるのサ。
民部　エヽ、ざわ〳〵と、扣へ召され。
　ト敵役四人、扣へる。
雜掌　當春南禪寺にて、系圖改めの折柄、勅使へ對し久次の狼藉、帝へ聞こえ甚だ逆鱗。これとても病ひの業と、諸卿の取沙汰。兄弟ともに病氣の容體、見屆けて歸れとある、重ねて勅諚。
民部　こは畏き御諚恐れ入る。元來虚弱の金吾久秋、鬱性を散ぜんため、典藥の勸めに依つて、農業の營みを學ばさんがため、この聚樂の庭前に、田畑をしつらひ、まつた惣領の久次公には、近頃短慮の病ひ發し、醫療手を盡せども効驗なきゆゑ、心のまに〳〵保養を遂げさせ、酒宴亂舞に心を紛らし、今日は淀町さまも御入りゆゑ、取紛れ、出迎ひ延引。程なく御對面申し上げまする。
時房　スリヤ、兩人ともに。ハテナア。
兒竹　お勅使樣のお慰みに、粗茶お菓子を持たつしやれ。
瑤元　ハアヽ。
　ト高坏に小判、茶碗に一分金を、渦高く盛り上げ持ち出て、時房の前へ置く。
腰一　粗茶作ら、銘は山吹。
腰二　イザ、召上がられませう。
　ト下座へ退る。時房、凝ッと見て、取り得ぬこなし。
時房　岸田民部、兩人が病氣は僞りぢやなア。
民部　なんと仰せられまする。
時房　久次は奢りに長じ、久秋は質素を守ると、詞に似合はぬこのもてなし。黃金花咲く陸奧への家苞。こは時房望みにない。次へ取り置いてよからう。
　ト民部、ムウと思案のこなし、思ひ入れあつて、手を叩く。侍ひ一人出る。民部囁く。頷き入る。

民部　御勅使へ對して無禮の至り、お目ざはりとなるその品、下げて次へ立ちやれ。

腰兩　畏まりました。

ト兩人、茶菓子を持ち、奥へ入る。ト時房、こなしあつて。

時房　岸田民部。

民部　ハツ〳〵。

時房　當家の重寶千鳥の香爐と云ひ、聚樂の寶藏に納めある、瓢の御旗もろとも紛失の聞こえ。

雜掌　正しく叛逆の仕業と思はるゝ。又久次は奢りの身持ち、久秋は倹約の行ひ、兄弟が身の行跡は、天地雲泥の相違。但し兩人所存あつてか。

時房　有無の知れざる家の政道、それにて謀叛の詮議なるか。

民部　いかにもなりまする。

時房　ヤ、なんと。

民部　奢りと見せて金銀を費し、下を賑はす久次公。華麗を好むと沙汰させなば、慾に耽るは小人の習ひ、何がな云ひ立てゝ入り込むは必定。その手より詮議せば、謀叛の族、紛失の寶、相知れまいものでもないと、大領が存念かくの通り。

時房　これも尤も。

雜掌　流石は眞柴の忠臣、斯うありさうな事。

ト此とき向ふより

向ふ　お勅使のお入り。

トこれにてぎつくり

呉竹　ハテ、心得ぬ、先達てお勅使御入りあるに。

主税　又ぞろや勅使のお入り。

皆々　是非一方は

主税　有無を糺すは奴矢田平、早參れ。

矢田　ハア、。

ト矢田平、尻からげ、十手持ち、出る。

御用でござりまするか。

主税　又ぞろや勅使のお入り、糺して參れ。

矢田　委細承知。この奴が腕先で、召捕つて參りませう。

ト意氣込む。向ふへ行きかける。

民部　矢田平、待て。

矢田　なぜお留めなさるゝ。

民部　お身が參るに及ばぬ事サ。

矢田　それぢやと云ふて。

民部　ハテ、扣へて居らう。
矢田　ヘイ。
ト扣へる。皆々、時房の顔を見る。合ひ方になり、時房、衣紋繕ひ、兩人の子役に顔にて、來いと知らせ、供に連れ、花道へかゝる。民部、構はずに居る。時房、又そろ／＼行きかかるを、皆々見て
呉竹　岸田さま、あなたのお詞が出ぬゆゑ。
皆々　あの勅使は
民部　歸つても苦しうない、ありや贋物ぢや。
皆々　スリヤ、あの勅使は。
民部　合點行かぬと思ひしゆゑ、始めより諸士に云ひ附け、勅使お入りと聲をかけさせしに、色を變じて立歸りしは慥かに盜賊。
皆々　エ、。
ト恟り。
呉竹　盜賊とあれば千鳥の香爐、御旗の紛失、詮議の種。
矢田　さうぢや。
ト矢田平、又行くを、民部、聲かけ
民部　扣へと申すに、扣へぬか。
矢田　でも。
民部　エ、、扣へい。
矢田　ネイ。
ト控へる。トの神樂、嬌いた三味線入りの合ひ方にて時房、この時つか／＼と花道中程へ立戻り、ぺつたり坐る。
時房　皆さん、堪忍して下さんせいなア。
皆々　ヤ、なんと。
ト時房こなし。
時房　頓八さん、大儀でござんした。きついお骨折り、もうよいわいなア。繁香、文字野、莨盆を爰へ持つておちや。
禿兩　アイ、、。
ト一人は莨盆を、一人は煙管を持つて來て、莨吸ひ附け、時房に渡す。時房、何氣なき體にて、莨のむ。
雜掌　ハイ／＼／＼。
ト時房の前を通り、戸家際へ行き
ヤレ／＼、嬉しや／＼。太夫さんのお頼みで、もとは堂上方で勤めてゐたゆゑ、少しくそしりはしり覺えたを幸ひに、太夫さんに勸め込み、押し強うやつて見ましたが、御家老さん方の今の勢ひには恐れ／＼。

ト胸をさする。

サア、これから先はあなたの心任せ。併し今一つのお望みが行きますまい。

眞砂　ハテ、よいわいなア。お公家樣の拔けからは、お前そこへよい樣に、この二人は殘して、お前方は皆早う去んで休んで下さんせや。

頓八　ハイ／＼、畏まりました。子供衆、太夫主に氣を附けや。

禿雨　頓八さん、これから又今の所へおしげりかえ。

仕丁　惡い事さしやんしたら、太夫さんに告げるぞえ。

頓八　ヨウ／＼、爰なませ樣／＼。

ト捨ぜりふにて頓八、向ふへ入る。これに構はず、民部、皆々、銘々二重へかゝり、よろしく思ひ入れあつて、眞銃扣へ居る。皆々座定まる。

禿一　太夫さん、斯う見廻して尋ぬれど、今のお方は見えぬぞえ。離れ座敷へ行て搜して來う。お前もおぢや。

禿二　合點ぢやわいなア。

ト兩人、立ち上がるを

眞砂　アヽコレ、郞と逢ひ、どうで勝手も違ふてある程に、マア、わたしの傍にゐやいなう。

兩人　アイ。

ト下に居る。眞砂路、皆々を見て

眞砂　ホヽヽヽ、オヽ恥かし。皆さん、堪忍して下さんせ。

ト合ひ方。

わたしや騙りを仕損ふてな、去にたうても去なれませぬ。どうぞ去なしておくれいなア、どうぞ騙らして下さんせいなア。

民部　そりや何を。

眞砂　若殿久秋さんを。

皆々　ヤア。

眞砂　サア、騙り損ふたわいなア。

矢田　イデ、この奴が腕先で、騙りの女を

ト立ちかゝるを、眞砂路、思ひ入れ。民部、留めて

民部　矢田平、待て。

矢田　なぜお留めなさるゝ。

民部　我が推量に違はぬ僞り勅使、高の知れたる傾城遊女、召捕るには及ばぬわサ。

矢田　それぢやと云ふて。

民部　ハテ、籠のうちなる小鳥同然、世話燒かいでも大事

ない。
矢田　でも。
民部　控へて居らうぞ。
矢田　エヽ、コレ、摑み殺してくれたいわい。
　ト抑へる。民部、こなしあつて
民部　ヤイ、女、何故に久秋公を騙りに來た。
眞砂　恥かし乍ら惚れました。
民部　なんと。
眞砂　久秋さんを見染めたゆゑ、貰ふて去なうと思へども、ついした事では逢はれまいと、思ひ附いた今日の趣向。あられもない形をして來たも、どうぞ逢ひたいばかり。皆さん、笑ふて下さんすなえ。
矢田　ヤイ〳〵、賣女め、云はして置けば樣々の譫語。こりや大方誰れぞに頼まれて來たか、但しは惡性がし足らいで、若殿樣を引ツかけて、大金にせうと云ふけちぶとい事。よいワ、此うへはいつそ俺が女房にして、得心さしてやらうかい。
　ト矢田平、おこづくを、眞砂路、こなしあつて
眞砂　オヽ、ほめやの傾城なら惚れぬものかえ。なんぼう武將の若殿さんでも、戀に上下の隔てはない。奴さん方の知らぬ事、默つて聞いてゐやしやんせいなア、ホヽヽ、ホヽ。
　ト眞砂路、長煙管取り、莨を吸附ける。嬌いた合ひ方になり、眞砂路、こなしあつて
サア、御家老さん、これ程までた企んで來た事、近頃押附けがましいが、どうぞ久秋さんを貰ひまして、去にたうござんすわいなア。
民部　傾城、そちや何者に頼れた。
眞砂　エヽ。
民部　武將の公達久秋公に逢はんとて、わざ〳〵騙りに來たりし其方、天下を望む謀反の族か。
眞砂　なんのマア。
民部　但しは山賊夜盗の類か、眞直ぐに白狀いたせ。
眞砂　アイ、盜人ぢやわいなア。
　トこなし、心意氣。矢田平、きつとなつて
矢田　扨てこそ、いつぞや釜煎りの刑罪受けし、石川五右衛門が同類の奴等だな。
眞砂　アイ、その石川と云ふ名に緣ある、種こそ變れ色の道、誠に戀は曲者、その身を盜む石川屋、眞砂路と云ふ傾城でござんすわいなア。

民部　大切なる御方乍ら、左程まで戀しくば、望みに任せまじきものでもないが、功を立てい。
眞砂　功とはえ。
民部　我が君御秘藏し給ふ御寶のうち、信長公より拜領ありし、千鳥の香爐、まつた神事に用ふる瓢の御旗、疾より紛失。サア、廓は諸人の入り込み場所、詮議して取り得る手段は、手管とやら、ナ、心に覺えがあらうがな。
　ト眞砂路の懷に、寶物持つてゐるであらうとの心意氣。眞砂路、思ひ入れ、氣を替へて
眞砂　ありと見て、手には取られず見ればまた、行くへも知らず消えし陽炎。
民部　反逆人の餘類の者か。
矢田　但しは誰ぞに頼まれしか。
眞砂　底の知れぬが遊女の心。
民部　奧の一間で逢はした上は
眞砂　その時白狀するわいなア。
民部　ソレ、いづれも、女を奧へ伴ひ、馳走たつぱい。
皆々　畏まりましてござりまする。
　ト敵役四人、眞砂路の先に立ち、女五人は後に立ち上がり、矢田平、思ひ入れあつて

矢田　サア、賣女め。
　ト十手振り上げ
皆々　サア、阿女め。
　トきつと圍ふ。眞砂路、こなしあつて
眞砂　オヽ、忙しな。
　ト此とき時計鳴る。
矢田　程なく瓢の神事の刻限。
眞砂　兎角馳走は久秋さん。
民部　首尾よう騙り終せなば
眞砂　その時こそわたしが身の上。
民部　先づそれ迄は油斷なきやう。
女皆　サア、歩みやいなう。
敵皆　きり〱立たう。
眞砂　ばた〱しやんすな、つむりに
　ト裲襠はれて
　埃がかゝるわいなア。
　トこれにて、こは情なの青葉の獨吟になる。眞砂路を中へ取り卷きながら、女、敵役、靜かに眞砂路を圍ひ、奧へ入る。民部、矢田平、殘り、民部、思ひ入れあつて

矢田　御用でござりまするか。
民部　料紙硯を持て。
矢田　ハア。
ト料紙硯、持ち行く。
民部　立て〳〵。
矢田　ハツ。
ト奥へ入る。おらが在所の唄になり、向ふより堅田の小雀、百姓の形にて、若蕪菜を籠に入れ、後より中間二人、棒を持ち、退れ退れと云ふて出る。花道よき所にて
中間　ヤイ〳〵、待ち居らう〳〵。おのれ爰をどこだと思ふ。恐れ多くも眞柴のお館。
中二　お座敷とも憚らず、大老職の切手を持ち居るゆゑ、通し來たれば方途がない。しかもむさい形をして。
中一　慮外者め。
兩人　きり〳〵退り居らう。
小雀　コレ〳〵、お前方も、餘りぎごつに物を云はぬものぢや。むさくるしいと云はつしやつても、お前方の形から見ては、これ見さつしやれ、借り着せうより洗ひ着と、春は早々御用がある、早うぢや〳〵と、御領分をお預かりなさる、おいらがためには天下樣より、大切にせにやならぬ岸田さまの、急ぎのお使ひで來たこの雀。通り切手に胡亂はない、お殿樣にお目にかけたら解る。堅田村小雀と云ふ男、村ではちつと小口もきく、サアと云ふたら何百人でも、人足ござれ、一揆でござれの、惡い事にも大分仕込まれて來た。コレ、この若蕪菜、これも祝ひの物ぢやと、エヽ、發句とか發氣とか、重たくも雪つけて來い若蕪菜でありつる、ハヽヽヽヽ。殿樣への手土產ぢや。これを屆けて、奴さん達、早う來てゐる譯を云ふて、御用を聞き、去んで二合半ひきかけたいわいなう。やつとせい、マア、爰らで一服。こりや火の用心がよい。矢ツ張り畑で調法な貢入れが、間に合ふてけつかるわい。
ト眞中へへたり、火を打つて、莨のむ。
中二　まだ〳〵無遠慮な百姓め、滅多に足を踏ン込めば、我れ〳〵が身の上。
兩人　サ、立たう。
小雀　これは又聞き分けのない衆達ぢや。俺ぢやて、御領分の百姓、其やうにけん〳〵とは云はぬものぢや。百姓は國の寶。なんと正月早々から寶が入るとは、ぎえん

であらうがな。
中一 ヤア、こまごと云はずと、立ち居らう。
中二 立たずば、いつそ。
ト兩方より、棒にて打つてかゝる。
小雀 滅相な、こりや俺を、なんとするのぢや。
ト立ち廻つて、小雀、兩人の足を掻いてこかし
へゝ、どんなものぢや。
民部 ヤレ、待て者ども、この者に用事がある。兩人、控へい。
兩人 ネイ。
ト控へる。民部、こなしあつて
民部 立て／＼。
兩人 ネイ。
ト兩人、入る。
小雀 あなたは岸田さま。
民部 苦しうない、近う／＼。
ト合ひ方、
律義なる者と見込み、密かに頼み入りたき一大事、頼まれてくれまいか。
小雀 ソリヤはや、國の殿様の御意なりや、善い事でも惡い事でも、いつちするが一國一心。
民部 オゝ、頼母しい、善に強きは
小雀 惡にも強し。
民部 何事によらず身が頼み、人に洩らさぬ一大事、コリヤ。
ト小雀 囁く。小雀、頷き、呑込む。
合點か。
小雀 私しを見込み頼むとのお詞、委細承知は百姓氣質、人に洩らす事ぢやござりませぬわい。
民部 オゝ、何かの手配り、詳しき事はこの中に。
ト今書いてゐた手紙を渡す。
小雀 そんなら花火を目當てにして
民部 何事も主君へ忠義。
小雀 今からそろ／＼やりかけう。
民部 必らず密かに。
小雀 心得ました。
民部 早う行け。
小雀 してこいな。
トきつとなる。
民部 コリヤ。

ト兩人、見得にて、返し

造り物、もとの道具に戻る。右二重の上に眞砂路、やはり裲襠にて、貫盆を控へ、下手に伴作、結構なろ掛盤の御膳を差出し居る。この見得、和らかな琴唄にて、道具納まる。

伴作　眞砂路どのへ、久秋公の心を籠められたるこの配膳、名代として不破伴作、給仕の役目。イザ、賞翫いたされよ。

眞砂　コリヤ丁寧のこのかけ盤、まだ欲しうはござんせぬわいなア。

伴作　でござらうが、折角の馳走。

眞砂　この眞砂路への馳走なら、お菓子よりお膳より、兎角馳走は若殿さんの、お顏が見たうござんわいなア。

伴作　テモ、きつい惚れ込みやう。即ち久秋公のお居間とて、新たに建てしこの館が家。

眞砂　そんなら爰が久秋さんの、お座敷かえ。

伴作　如何にも左樣。幸ひの折柄なれば

眞砂　そんなら

伴作　又この配膳は、久秋公の御料理。これが馳走の第一番。

眞砂　そんならこれが、若殿樣のお手づから

伴作　いかにも左樣。

眞砂　ほんに嬉しい

伴作　アノ、それ程までに

眞砂　惚れたと云ふはまたな事、賤しい勤めのこの身でも、貴人高位の、酒の相手に召さるゝ身。日外ふつと久秋さんを、テモ、可愛らしい殿御ぢやと、思ひ染めたがわたしが初戀。

伴作　イヤ、戀路ばかりではあるまい、誠の心は

眞砂　ナンノイナア、傾城に、誠ないとは世の諺。

伴作　誠は慥かに明智の

眞砂　エ。

伴作　イヤサ、他家へ洩れては殿の瑕瑾、サ、、その大切な若殿に

眞砂　どうぞ早う逢ひたうござんすわいなア。

伴作　罷りならぬ。

眞砂　とは又なんで。

伴作　久秋公は眞柴の公達、傾城遊女の其方に、及ばぬ事叶はぬ事。

ト なじつて云ふ。

眞砂 賤しい遊女のこの身でも、まさかと云へば、久秋さんは愚かた事、父御の雛儀になる事もござんせう。

伴作 女の及ばぬ望みをせうよりも、叶ふた樣に廓の勤め大事にせいと云はしやんすか。

眞砂 それが卽ち女の操。

伴作 イ、ヤ、思ひ立ちたる女の一念。

ト 碎けて

むづかしい事は堪忍して、どうぞお前の計らひで、久秋さんに、早う逢はして下さんせいなア。

伴作 江南の橘を江北に移せば枳となる。それは非情、人は有情。白きは色の司なれども、墨に纎せば黑く染まる。朱に交はれば赤くなる。柳は綠、花は紅い、なんと左樣ではござらぬか。

眞砂 心ありげな其お詞、愚かな女の才覺では

伴作 粟を植ゑて桃は實らず。

眞砂 麥を蒔いて粟は得られず。

伴作 植ゑて見よ、花の育たぬ里もなし

眞砂 心からとて身は賤しけれ。

伴作 お傾城。

眞砂 オ、、恥かし。

ト 思ひ入れある。

伴作 とくと思案の召されいサ。

ト 獨吟になり、伴作こなしあつて入る。眞砂路こなしある。

眞砂 あの糸竹は奧殿にて、久次さんの御遊興、お妾達の調べと見ゆる。エ、、斯う云ふうちも戀しいは、久秋さん、どうぞお顏が見たいもの。逢へばどうして斯うしてと、思ふたばかり片思ひ。

トまた獨吟あつて

廊下傳ひの上の間は、久秋さんのお居間と見ゆる。若しやあそこに、オ、、さうぢや。

ト 又獨吟になり、眞砂路、色々こなしあつて、上手を見込む。トチョン〱にて、この道具下手へ引く。始終獨吟にて、返し

上手より三間の間、高二重、向ふ金襖、前側塗り骨障子、緣張りにて、明けたてあり。此うちに黑棚、御所文庫など飾りある。此うちに淀町、裲襠にて、褥の上に脇息にかゝり居る。この見得、獨吟にて、

静かに引出す。正面に納まる。下手は廊下一ぱいになり、上手は落間、網代塀、庭木のあしらひ、舞臺前やはり卯の花の盛り、後に上手より一間半の障子屋體を突き出す。眞砂路、居流れにて、段々上手へ歩ゆむ。よき程にて、この道具留まる。右獨吟の切れにて、眞砂路、障子の際へ行くと、千鳥の香爐、音を出す。この時障子のうちより、呉竹、胡蝶、東雲、揃ひの形にて、櫻の花を持ち、つか／＼と出て、眞砂路を取巻き

四人　扨てこそ曲者、動きやるな。

ト取巻く。唄の立ち廻り色々あつて、きつと見得にて留まる。ト正面の障子、引抜く。

淀町　思ひ余ね、いもがり行けば小夜更けて、川風寒み千鳥啼くなり。

眞砂　エ、、なんとえ。

ト又唄の切りにて、きつと留まる。

淀町　自らが居間へ、忍び入りし其方は。

ト眞砂路、こなしあつて

眞砂　わたしは九條の傾城、石川屋の眞砂路でござんすわいなア。

ト淀町、こなしあつて

淀町　扨ては其方が噂に聞いた、石川屋の眞砂路とな。この淀町が初見參の引出物、其方にくれうぞ。

眞砂　アノ、わたしに引出物とはえ。

淀町　その引出物は、エイ。

ト簪に文結び附けたるを、手裏劒に打つ。丁と摑んで

眞砂　ハテ、姫御前には似合はぬ引出物。

ト云ひながら、簪を見て、恟りして

ヤア、この簪は

淀町　なんと覺えがあらうがな。

眞砂　こりやこれ、いつぞや南禪寺にて

淀町　時は櫻の眞ツ盛り。

眞砂　入相告ぐる黄昏時。

淀町　身にも降り積む花吹雪。

眞砂　見下ろす下に數多の殿達。

淀町　上には伊達な傾城遊女。

眞砂　中に怪しき女の巡禮。

淀町　落書きせしは石川や

眞砂　眞砂の數は盡くるとも

淀町　盡きせぬえにし戀草の
眞砂　落首に思はず見合す顏。
淀町　見上げる目先へ打込む手裏劍。
眞砂　半ば切れたる文もろ共
淀町　我が手に入つたる報謝の一品。
女皆　勅使となつて入り込む曲者。

ト皆々、擬勢する。淀町、顏にて押へて

淀町　傾城變じて勅使となり
眞砂　賤の姿の政所さま。
淀町　ハテ、不思議の縁で
眞砂　今日のお出合ひ。
淀町　思はず姿で
眞砂　變りしお姿。
淀町　コリヤ。
兩人　話せるわいなう。

ト淀町は脇息に凭れる。眞砂路はこれを見上げる。兩人、碎けるこなし、皆々、思ひ入れあつて

吳竹　ア、勿體ない、誰れあらう大領さまのお愛妾、淀町さまともあらう身が
胡蝶　勅使となつて入り込むのみならず、賤しい勤めの君傾城、その身も恐れず
女皆　不敵の曲者。

トきつとなる。淀町、押へて

淀町　イヤ、苦しうない、この眞砂路には、尋ね問ふべき仔細あり、皆立ち騷ぐには及ばぬわいなう。
皆々　お、と申して
淀町　ハテ、苦しうない、控やと云ふに。
皆々　ハアイ。

ト皆々チッとなる。眞砂路も下に居る。

淀町　假令如何程に包むとも、その身に凶事ある時は、自然と音を出す千鳥の香爐。
眞砂　エ、。
淀町　其方が所持してゐるやらうがの。
眞砂　御推量の通り姫御前の、身にも應ぜず、不思議に手に入る千鳥の香爐、思はず時雨の間へ忍び、音を出す事を知つたれば、蜀江の錦の袱紗をかけ、音を止めたらよかつたもの。
淀町　ハテ、傾城に似合はぬ、名器は名錦を以て音を止めんとは、天晴れの心がけ。
吳竹　この者を拷問しなば

浮舟　謀叛人の詮議の手蔓。
胡蝶　荷擔人のあらんも知れず。
東雲　召捕る時は四海も穏か。
皆々　必らず御油斷遊ばしまするな。
眞砂　ホヽヽヽ、テモマア、仰山な。さつきにも云ふ通り、賤しい流れの勤めの身が、大領さんの御公達、久秋さんに思ひ込んだ女の一念、願ひ叶へうばつかりに、あられもない今日の仕儀、推量して下さんせいなア。
淀町　ハテ、思ひ込んだ其方の願ひ、勅使となつて入り込みし上、香爐所持してゐやるゆゑ、盜賊ならんと皆の疑ひ。傾城遊女と賤しめど、貴人高位に召さるる身の上、こりや疑ふは誤りぢやわいなう。
眞砂　傾城と盜賊は、品こそ變れ夜の商賣、退いた仲でもござんせぬなア。
淀町　こりや尤もな悟り、なか〳〵話せる傾城ぢやなア。
呉竹　賤しい流れの眞砂路に、はしたない淀町さまのお詞。
皆々　慮外者、退りやいなう。
淀町　ハテ、ざわ〳〵と、控へてゐや。今日の珍客稀人には、自らが話しがある。其方衆は次へ。
皆々　スリヤ、あの此まゝで。
淀町　苦しうない、行きやと云ふに。
皆々　畏まりました。
ト合ひ方變つて、皆々顏見合し、よんどころなう下座へ入る。跡に淀町、眞砂路、殘つて
淀町　ナニ、眞砂路とやら、皆を立たせたれば自らと差向ひ、殊の若殿の久秋を戀ひ慕ふとあれば、嫁女も同然。そこは端近、マア〳〵、爰へ。
ト碎けて、招く。眞砂路、もじ〳〵ともとの座へ居る。
眞砂　ハイ。
淀町　サア、斯うして置いて、淀町の無心があるが、聞いてたもるか。
眞砂　そりやもう、斯う打解けました上からは、この身に叶ふた御用なら。
淀町　イヤ、外でもない、何より以て安い事。
眞砂　千鳥の香爐をわたしに返してくれいと仰しやるのか。
淀町　イヤ、さうでない。我が子の金吾久秋を、近頃世話にござらうが、どうぞ抱いて

眞砂　エヽ。

淀町　寐てやつて下されい。

眞砂　エヽ、エヽヽヽヽ。

　ト悄りしながら

　そりやマア、ほんまの事でござんすかいなア。

淀町　サア、斯う云へば、押付け業と思やらうが、義理ある仲の久次は、あの通りの一徹短慮。又ほんの子の久秋は、もとより虚弱の生れ附き。それ程までに思ふてたもる事ならば、どうぞ其方が一夜の添臥し頼むわいなう。

眞砂　エヽ、嬉しうござんす。戀しう思ふ一念屆き、なんと申してよからうやら、淀町さま、エヽ、お嬉しう存じまする。

淀町　オヽ、その悦び道理々々。眞砂路どの、後とも云はず今すぐに、母が取り持つ、イヤナウ、眞砂路どの、とてもの事に香爐も。

眞砂　義理ある仲の久次さま、お命を助けうため、お入用な香爐と、それを察して眞砂路が、頼み代りに差し上げませうが、一つ添寐をした上で。

眞町　そんならその時

眞砂　なんの僞り申しませう。

淀町　エヽ、忝ない。

　ト眞砂路を拜んで、氣を換へ、手を鳴らす。腰元四人出て

四人　御用でござりまするか。

淀町　コレ。

　ト一人に囁く。銘々囁き合ひ、錦の夜着、布團、くゝり枕、金屛風にて圍ひ、寢床を敷く。此うち眞砂路、こなしある。淀町、又囁く。四人、頷き、下座へ入る。淀町、眞砂路の手を取り、蒲團の上へ乘せて、こなしあつて

　眞砂路どの、日頃の思ひも今この時、必らず今の事を。

眞砂　アイ。久秋さんのお心一つで。

淀町　閨の下紐うち解けなば

眞砂　その時こそは千鳥の香爐、必らずあなたへ

淀町　くれ〴〵嬉しいその詞。今とは云はぬ、後までに

眞砂　そりや合點でござんすわいなア。

淀町　そんなら跡でしつぽりと、あの嬉しさうな顏わいなう。

　ト唄になり、淀町、奥へ入る。

内方　サア〳〵、お越し遊ばしませ。

ト合ひ方になり、腰元みな〳〵、手を叩き、出る。久秋、めんない千鳥にて、手拭ひにて目をくゝり、出る。

呉竹　めんない千鳥。

女皆　手の鳴る方へ〳〵。

久秋　とらまへたら酒呑ませ。

ト云ひ〳〵出て來る。呉竹はよき程に、久秋それなりに眞砂路の手を取る。皆々下座へ入る。久秋、眞砂路を捕へて

オヽ、とらまへた、誰れぢや、胡蝶か、胡蝶ぢや胡蝶ぢや。胡蝶、こちら向きや、東を向きや。

ト膝を持つてこちらを向かす。眞砂路、默つてゐる。

物を云はぬか。其やうにして居ては面白うない。何も怖い事はない、名を云へ〳〵。

ト眞砂路、矢張り恥かしきこなし。

名を云はぬか。アヽ、何やら甘い樣な名ぢや、有平糖でもなし、金平糖でもなし、オヽ、さうぢや、みどり〳〵、さうぢやあらうが、さうか〳〵。氣味の惡い。

ト久秋、逃げうとする。眞砂路、捕へて

眞砂　アヽ、申し久秋さん。

久秋　ヤア、化物ぢや〳〵。

ト逃げうとする。此ときめんない取る。

眞砂　申し、なんにも怖いものぢやござりませぬ。

久秋　バア。

ト子供の樣に云ふ。眞砂路の顔を見て

ついに見た事もない女子、俺が顔をじろ〳〵見て、なんぢや氣味の惡い。これよりは牛に乘つて畑遊びの方が、なんぼう面白い事やら知れぬ。

ト股尻になり、手そゝぶりする。眞砂路、いろ〳〵思ひ入れあつて

眞砂　申し、そんな事仰しらずと、なんぞ面白い事して遊ばうぢやござりませぬか、

久秋　オヽ、遊ばう〳〵。と云ふても、なんにも遊びやうがないもの。

眞砂　イエ、なんぞ常々、遊びなさる事がござりませうがな。

久秋　常遊ぶのは、いつち早瀨と遊ぶが面白い。

眞砂　そりやどんな事をしてえ。

久秋　ソレ、こんな事を。

ト不器用にこなし。

眞砂　そんならお前、早瀨どのと、アノ、おせうし。

久秋　羽子つく眞似を。
砂砂　エ、、なんの事ぢやぞいなア。
　ト困つたこなし。ふと黒棚の方を見て、幸ひと云ふ思ひ入れにて、料紙文庫を取つて、蓋を明ける。中に結構なる軸物の繪ある。これを明けて
申し〳〵、爰によい物がござんすわいなア。ちやつと來て、これを見やしやんせいなア。
　ト紐を解き、擴げて見せる。久秋、見て
久秋　ア、、こりや可笑しい事をしてゐる。ア、、面白い面白い。
　ト寢轉びながら眺める。眞砂路、段々擴げ
眞砂　コレ〳〵、こんな可愛らしい繪がござんす。とつくりと見やしやんせ。
　ト云ひながら、寄り添はうとして、上氣のこなし。久秋、段々繰り出し、余念なう見てゐる。
コレ、此やうにして遊びませうかえ。
久秋　これか。この男は大きな形して、乳呑んでゐる。笑ふてやれ〳〵。
眞砂　サア、さうやつて、この手を斯うして
　トこなしあつて、久秋の手を取る。久秋、びり〳〵と震ふて
久秋　なんぢや、こそばゆうなつて來た。
　ト身震ひする。眞砂路もわな〳〵震ふて
眞砂　ソレ、承知かえ。
　ト抱き附いて
オ、、嬉し。
　ト屛風引廻す。障子閉まる。此うち下手より早瀬出て、障子の所へ行かうとする。此うち矢田平、窺ひ出て、此とき
矢田　早瀬さま。
早瀬　ヤア、こなたは矢田平。
矢田　申し、今のを御覽じましたか。思ふ殿御を寐取られ乍ら、それでこなたは心が濟むか。テモ、腑甲斐ない御所存ぢやなア。
早瀬　サア、口惜しうは思へども、御臺様の仰せと云ひ、お家の大事忠義ゆゑに、凝つと辛抱するものゝ、思へばみす〳〵大事の殿御を、アノ、傾城づらにのめ〳〵と……とは思へ忠義とあるからは、辛抱するも、やつぱり殿御が大切さ。
矢田　ア、、おいたはしや、流石はおぼこなお育ちゆゑ、

現在のめ〱殿御を寐取られ、剰さへ情を商ふ賤しい傾城づれが、誰れあらう久秋さまと、あの體裁。何もかけ構ひのない下郎でさへ、腹が立つて〱堪へられぬ。その上最前も若殿の仰せには、これまで早瀬と女夫ぢやと、約束はしたものゝ、あの傾城を見ては又格別。もうこの後は、早瀬の事は思ひ切り、眞砂路と二世かけて、夫婦になると云はつしやつたぞや。それでもこなたは腹は立たぬか。

早瀬　ヤア、なんと云やる。そんならアノ、殿様が、エヽ、聞こえませぬわいなア。

矢田　まだある〱。その上あの賣女めが云ふには、さうなる時はあの早瀬、生けて置いては邪魔になるゆゑ、無實を云ひかけ殺して仕舞へと申しましたぞや。さうとも知らずおめ〱と、遂にはあの傾城に命まで、やつて仕舞ふが忠義になるか。こりや御思案なされずばなりますまい。

早瀬　エヽ、思へば〱恨めしい傾城づら。恨みはこつちにあるものを、却つてそちから殺さうとは、心は鬼か、エヽ、口惜しい、どうぞ仕様はないかいなう。

矢田　仕様と申すは戀の敵、若殿はじめ傾城もろとも、物の見事に斬つて仕舞はつしやれ。

早瀬　それぢやと云ふて殿様を。

矢田　ハテ、こなたも、武士の娘の様にもない、卑怯な性根。こなたがえゝ殺さずば、下郎がぶち殺さうか。

早瀬　サア、それは。

矢田　但しはこなたが殺さつしやるか。

早瀬　サア。

兩人　サア〱〱。

矢田　エヽ、腑甲斐ないお心ぢやなア。

早瀬　オヽ、さうぢや。此うへは恨み重なる久秋さま、わたしを退けて、エヽ、胴慾な。思ひ込んだる女の一念、ソレ。

　ト行かうとする。

矢田　コレ、待たつしやれ。心を鎮めて仕損じぬやう。コレ、この一腰は覺えの切れ味。これを以てたつた一突き、合點か。

早瀬　合點ぢやわいなア。

　トきつとなる。

矢田　コレ、密かに〱。下郎は忍んで窺ひませう。

　ト兩人、きつと見得。矢田平は下手の柴垣へ忍ぶ。早

瀨、血相して行かうとする。上手より伴作、出かけゐて、此とき早瀨を留めて

伴作　そちやいづれへ。

早瀨　ヤア、あなたは。

伴作　アノ、爰な不忠者めが。

早瀨　エヽ。

伴作　親の赦さぬ不義いたづら、武家一統の堅い戒め。

早瀨　イヤ、そりやあなた方の得手勝手。現在騙りの女と知りつゝ、見せつけらしいこの場の仕儀。假令不義と云はれても、譯のあるのはわたしが先。なんぼう家來の娘でも、そんな片手落ちな事は、否ぢや、否ぢやわいなう。

伴作　淀町御前のお指圖を。こなたは妨げ召さるゝか。

早瀨　アイ、いたしませいぢや。

伴作　コリヤ、其方がためにも久秋さまは、お主ぢやがや。

早瀨　斯うなつたら主も家來も、無茶苦茶でござりまする。

伴作　こなたが今妨げすると、千鳥の香爐は戻らぬぞや。

早瀨　エヽ。

伴作　さうなる時はお家の大事。

早瀨　エヽ。

伴作　淀町御前に義理のある、久次さまは御切腹。廻り廻つて若殿の、久秋さまにもかゝはる大事。それでもこなたは悋氣するか。

早瀨　サア、それは。

伴作　サア〱〱、どうぢや。

早瀨　ハア、。

ト泣き落とす。伴作こなしあつて

伴作　とは云ふものゝ日頃から、御大切に思ふ久秋さま、寢取られたら腹の立つは尤も。そこを辛抱するがお主への忠義。不義者になつて名を穢すか、二つに一つは料簡次第。早瀨どの、とつくりと思案の召されい。

ト下に置く。早瀨、ハアと泣き落とす、こなしあつて

早瀨　伴作さま、あなたの御意見はこの身のため、左樣ならばわたしは奥へ。

ト立ち上がり、思案して、恨めしさうに振り返り

とは云ふものゝ、コリヤモウ、どうも。

トつか〱と障子の傍へ行く。伴作、これはしたりと支へる。早瀨、無理に放さうとする。伴作、留める。

この途端に兩人、障子の傍へたぢ／＼と行く。早瀬、障子を無理に明ける。ト此うちに高景、以前の形にて、莨盆扣へ居る。兩人、恟りして

早瀬　ヤア、あなたは。
伴作　早川高景さま。
兩人　シテ、殿樣や傾城は。
高景　久秋公に添ひたくば、一つの功を立ちやれ。
早瀬　エヽ。
高景　伴作どの、三ヶ條の申し譯は相立ち申したか。
伴作　サア、それは。
高景　久秋公の預かりたる、瓢の御判は疾より紛失。早瀬、其方が忠義の立て所。
早瀬　さうぢや、戀に凝つては劒の中。
高景　例へば生みの親をも捨てる。
早瀬　思ひ立ちたる女の一念。
高景　伴作、心得難きは下郎の矢田平。彼れが族姓糺すは貴殿。
伴作　三ヶ條の不審晴れなば、身はひしびしほになるとても、
高景　唐土にては望夫山。
伴作　我が朝にては
早瀬　松浦小夜姬。
高景　ひれふる山の
早瀬　昔と今に
伴作　見事詮議し御覽に入れん。
早瀬　私しとても詮議の仕遂げ
高景　でかした兩人。
伴作　然らば此まゝ。
兩人　オヽ、さうぢや。

ト　ばた／＼と行く。

高景　コリヤ、必らず短氣を。武士の嗜み。
伴作　ハツ、忠義の二字を頭に戴き、お家の興廢。
高景　天晴れ。急げ。
兩人　ハツ。

ト早瀬は橋がゝり、伴作は奥へ、凜々しく入る。ばたばたにて、腰元、走り出て

腰元　情なや久次さま、又御短氣が出まして、お傍衆誰れ彼れなしのお手討ち。御上使の御威光にて、何卒お鎭め下さるやうとの、淀町さまの御意にござりまする。
高景　打捨て置かれぬ天下の大事、ソレ。

ト早鉦ひにて、腰元連れ、凛々しく入る。返し

造り物、三間の高二重、御殿、欄間、半簾、向ふ金襖、上手一間半の簾屋體、下手落間、網代塀。右二重の眞中に民部、上手に久次、衣裳壺折にて、刀を拔きかけ居る。民部、留めて居る模樣。下舞臺に伴作、お通姫を突き据ゑ、常盤木、眞中に立つて居る。次に主税、小彌太、監物、左膳、二重の後に腰元四人、久次を留めて居る。この模樣、ばた／＼にて、序の舞にて、道具納まる。

久次　ヤア、留め立てせずと、放せ／＼。

女皆　マア／＼、お赦し遊ばしませいなア。

常盤　イヤ、赦されぬ不義の科人。毛利家へ許嫁あるお通姫さま、伴作どのと忍び逢ひ。こりや赦しては

敵皆　置かれますまい。

久次　伴作はもとより、妹乍ら憎いお通、兩人とも手討ちにする。そこ放せ。

ト又立ちかゝるを、民部、きつと留めて

民部　御短慮千萬、先づ／＼お靜まりあられませう。

久次　政道には親疎を論ぜずと、妹お通、家來の伴作、討つて捨てるは久次が潔白。

民部　イヤ、恐れ乍ら、そりや御賢慮が違ひました。

久次　とは又なぜに。

民部　御家來の伴作は格別、お通姫さまには淀町御前のお胤にて、久秋公とは實の兄弟、なりや君とは義理ある御仲、直き／＼お手討ちあらんより、淀町さまへお渡しあり、公の御政道が、御母公への義理も立ち、君の御潔白かと存じまする。

久次　又しても其方等が依怙の沙汰。生さぬ仲の淀町は、先政所死去の後、大領の御意に叶ひ、久秋お通を生み落とし、淀町の御方と、諸大名の尊敬に、持ち長ずればのし上がり、久次が母呼ばゝり、奇ッ怪至極。誰れに憚り、不義の兩人生け置かうか。

民部　エヽ、お情ない御所存。日外より只貴きを嫉み、賤しきを侮り給ふ御氣質となり、聊かな事にも御憤り深く、日夜に募る惡逆非道。終には神佛の御咎め、悲しいとは思し召さぬか。國家のためをお辨へあり、何卒御本心になりなされて下されうならば、有り難う存じまする。

久次　よいワ、其方が諫言聞き屆けたが、其方にも又久次

が詞、よもや違背は致すまい。
民部　何が扨て、あま逆さまの仰せでも、なんの違背を仕りませう。
久次　然らばこれにて、予が見る前で、妹お通、家來の伴作、兩人が、不義の政道いたして見せよ。
民部　スリヤ、あの拙者に。
久次　久次に諫言いたす其方、よも違背はなるまいぞや。
民部　ムウ。
ト手を拱き、思案のこなし。伴作、前へ出て
伴作　毛利家へ許嫁ある、姫君と知り乍ら、不義いたせしはこの身の誤り。お手討ちは覺悟の前。岸田どのの御推擧にて、姫君は御助命あつて、切腹御免下さりませう。
ト刀に手をかける。お通、縋つて
お通　コレ、伴作、待つてたも。こなたは固よりいなみやつたのに、こちから仕掛けた不義いたづら。自らこそ死ぬるは覺悟、必らず其方は、早まつてばしたもんなや。
伴作　イヤ、姫君に科はない。
ト兩人、死なうとする。常盤、地團駄踏み
常盤　エヽ、小舌たるい受けさしやう。これぢやに依つてさつきの時、くれぐ\口說いた伴作さま……イヤサ、くどい程證據は見て置いた。死なうとはよい覺悟。
敵吉　サア／＼、すつぱりと切腹々々。
伴通　南無阿彌陀佛。
ト兩人、死なうとする。
民部　待つた／＼、不義の兩人、早まるまいぞ。
兩人　イヤ、申し譯に。
民部　イヤ、久次公より預かつた、科の落着、未だ某が云ひ渡さぬうち、自殺などゝは叶はぬ事。
兩人　ホイ。
ト顏見合せ、俯向く。
久次　さすがの民部、でかす／＼。シテ、落着はいかゞいたす。
民部　兩人ともに此まゝ追放。
敵吉　ナニ、追放とな。
民部　切腹なぞとは誠の武士、姫君とても毛利家への聞こえ、自害なぞとは思ひもよらず、西と東へ引分けて、阿呆拂ひが以後の見せしめ。
久次　コリヤ、民部が妹をやるわい。
民部　ソレ、いづれも、伴作が大小捥ぎ取り召され。
敵吉　畏まりました。キリ／＼渡さつしやれ。

　ト伴作の大小を取り、むごく突き放す。
民部　腰元衆はお通姫を、合點か。
腰皆　心得ました。
　トお通が裲襠を脱がせ、懐劍を取る。
兩人　スリヤ、我れ〳〵は
民部　この場より追放。腰元衆はお通姫、伴作にはいづれも方、門前まで引立て行き、家來に云ひ附け拂はつしやれ。
敵皆　畏まりました。
腰皆　サア、お立ち遊ばせ。
敵皆　サア、立たう。
　ト唄になり、お通を勞りながら、腰元、附添ふ。敵役、伴作を引立て、捨せりふにて入る。
民部　久次公、御賢慮に叶ひましたか。
久次　いかにも、これにてちつと腹が癒えた。父久吉が名護屋より、この久次に箇條の一々、申し參つた高景め、淀町親子も呼び出だし、ついでに此奴も、ぽッ拂はせい。
民部　こは怪しからぬ久次公の仰せ。上使に立ちたる早川高景、何誤りあつてのお怒り。
久次　君辱めらるゝ時、臣死すと云ふ本文も辨へず、濫りに主の非を數へ、上使呼ばゝり奇ッ怪千萬。大領ばかりが主人で、この久次は主ではないか。
　ト此うち淀町、高景、出かけゐて、この時
淀町　イヤ、主ではないぞ。
　ト淀町、前へ出る。
久次　ヤア、よい所へ淀町どの。
　ト久次、切つとかゝる。淀町は裲襠衣裳、高景は長上下にて、杜若の生け花にて、りゆうりゆうと打据ゑる。久次、その手を取つて
高景、そちやなぜ主を打つた。
高景　イヤ、家來ではござらぬぞ。
久次　ナニ、家來でないとは。
高景　久吉公の上使に立ちたるこの高景は、今日一日の久吉公。花物言はぬ諫めの一枝、その御短慮がお身の禍ひ、四海の跡目治むべき身が、輕々しき御振舞ひ、非道の働き奢りの條々、大悪非道を矯め直す、花の折檻、なんと骨身にこたえたか。
久次　ムウ。
　ト無念のこなし。

淀町　常々我が君の仰せには、柔弱の久秋は、四海を知る器に非ず。久次は器量骨柄、天晴れ大將の器なれども、阿波の三好の胤と聞けば、我儘の募らんも知れずと、後を見透す、大領さまの御眼力。次第に募る我儘非道。諫める者は日々に遠ざけ、親に刃向ふ謀叛の氣ざし、我が君具にお聞きあつて、切腹させよとの御上意。どうぞ久吉公へ、申し譯もあらうかと、心を碎く岸田民部、とは知らずして、忠臣を苦しめ、その惡逆は何事ぞ。エヽ、情ない所存ぢやなア。

久次　ヤア、聞きたくもない諫言立て。久吉は匹夫下郎、この久次は三好が嫡子。親に優りし氏系圖。マア、繼母の淀町から。

ト切らうとするを、民部、留めて

民部　ハテ、勿體ない。假にも御母公に、劍戟を振ふての狼藉、天の冥罰、恐ろしいとも思されぬか。

久次　大位に登る久次が、親子の緣を、切り斷つてくれう。

民部　スリヤ、如何程に申しても

久次　何を小癪な。

民部　是非に及ばぬ。

ト久次、民部を振り切り、行かうとする。民部、久次を突き廻して、立ち廻り。久次、民部を切りかける。民部、その刀を取つて、久次を突き、又我が腹を切る。兩人惆り。

兩人　ヤア、これは。

民部　お騒ぎあるな、どうでこの身は覺悟の前。

兩人　なんと。

ト久次、苦しみ乍らこなしあつて

久次　親人樣、その身の痛手は苦にもせず、我が子の最期は悲しかろ。

ト淀町、高景、合點の行かぬこなしにて

淀町　ハテ、合點の行かぬ、久次が最期に短慮も鎭まり

高景　岸田民部を手にかけしは、共に殉死の覺悟と見え、其うへ民部を親人とは、血迷ふての僞か久次公。

淀町　樣子があらう。

兩人　ナヽ、なんと。

ト民部、久次を見て

民部　オヽ、血迷はしやつたに相違あるまい。心を靜めて久次公、必らず粗相仰せられな。

久次　燒野の雉子、夜の鶴。

民部　ヤア。

久次　知らいでならうか、親人、エヽ、こなたはなう。

ト苦しみ乍ら、こなしあつて云ふ。篠入りの合ひ方になる。

コレ、この年月の積悪を、人は知らぬと思ふても、天道は明らかな。三好の胤と我が子をば、襁褓の上より取り替へて、眞柴の四海を横領させ、主君の胤を苦しめる、悪事の報い廻り來て、その身は元より我が子まで、一つ刃に死するも天命。

淀町　今久次の詞では、岸田民部が悪心にて、取替へ子に相違はない。

民部　口外せぬ一大事、それをどうして何時の間に。

久次　隠しても隠されぬ、親子の恩愛。忠義一途と見せかけても、争はれぬその情愛、合點行かずと思ふゆゑ、當春南禪寺にて、三好の系圖開くと其まゝ、謀叛と云ひなし世鐔寺始め、その日の面々手疵を負はせしその時に、民部が腕斬り附けて、刃に傳ふ生血と、我が血汐をば合し見れば、慕ひ寄つたる親子の印し、なんと相違はあるまいがの。

トきつと云ふ。民部、悔り。高景、こなしあつて

高景　ホヽオ　驚き入つたる頓智の程、民部の倅と知り乍ら、今日までの悪逆非道、諫める者を手討ちにせしは、様子ござらう、ナヽなんと。

久次　血寄せに依つて素性も知れ、空恐ろしき我が身の上、所詮四海に望みなし、誠の久次ましますか、尋ね問はんも面伏せ、わざと短氣に身をもてなし、眞柴の四海は久秋公、父の悪事に荷擔の者、それと云はずに手討ちになし、いづれ終りは切腹と、兼ねて覺悟を極めしこの身。

高景　一々解る民部が陰謀、父々たらねど子は子たり、假に名乘りし久次公、天晴れ名察驚き入る。サア、速かに岸田民部、今はの懺悔してしまやれ。

民部　アヽ、誤つた／＼。只情ないは身の慾心、子ゆゑに迷ふ親心。先年三好に仕へし頃、主人の若君、我が倅、同年同月の誕生なれば、眞柴の家へ御養子と、ならせ給へる途中にて、取替へ置きしが我が悪心。人は知らぬと思ひしに、却つて我が子に見透され、親子一度にこの最期は、三好と眞柴の人々が、目をくらました天罰か、巡る因果にこの場の有様。

淀町　シテ／＼、誠の三好の胤は、今に存命へおはする

か。
民部　サヽ、その若君こそ我が手で育て、年成長の後、我が母方の名を譲り、小姓頭の不破伴作。
久次　スリヤ、我が推量の通り、伴作は三好のお胤であつたよなア。
高景　主人の胤の伴作を、最前かけし謎々に、久次公の身替りとは、
民部　我が子に替る寶はなしと、勿體なくも主人の胤、まさかの用に立てんため、殺さんものと企んだが、惡の報いは因果覿面、その伴作は姫君と、わりなき仲になり給ふは、これも前世の約束事。
高景　追放せしは勿怪の幸ひ、後を尋ねて世に出だし、再び名乘らす久次公。
淀町　高景の云やる通り、姫と娶合せ四海の跡目。
久次　エヽ、有難い淀町さまの御仰せ、それ聞く上はこの身の本望、肌身放さぬ瓢の旗、今こそ元へ、お返し申す。
ト懐中より旗を出して高景に渡す。
民部　我れも疾くより、奪ひ取りし瓢の印、差出すが、今際に善に返りし印し。
ト懐中より袱紗包みの御判を出す。高景、受取り
高景　久次さまがお預かりの、瓢の印は疾くより紛失、密かに詮議する所、我が推量の的を外さず、民部の手より戻りし悦び。まつた千鳥の香爐は、順慶が奪ひ取り、今に行くへ知れねども、今日某が上使は、久次公へ三ケ條のお咎め。さるに依つて假の久次公、イヤ、誠の久次公切腹ありしゆゑ、三ケ條のお咎めも反故たるべし。
淀町　高景は上使の役目、久次申し譯の切腹見屆けし上からは、名護屋表の我が君へ、よう執成し頼むわいなう。
高景　委細承知仕る。この場に用なき早川高景、お暇申す。
民部　高景どのには御役目御苦勞。
高景　おさらば。
ト鳴り物入りの合ひ方になり、こなしあつて、花道まで行き
大切なる千鳥の香爐、お家を望む逆意の仕業、佞人賢人に紛ふおやよなア。お暇申す。
ト右の合ひ方にて、向ふへ入る。
淀町　イデ、此らへはお通姫と伴作を、迎ひの人數を、ソレ、民部。

民部　ソレ、いづれも達、早く／＼。
敵四　ハア、。
ト主税、小彌太、隣物、左膳、出て
御用でござりまするか。
民部　伴作と云ふは誠三好のお胤にて、取替へありし久次公。お通姫様もろとも、追手をかけてお運び申しやれ。
四人　スリヤ、伴作どのは、久次さまとな。
民部　猶豫のうちも事遅れる。ちつとも早う。
四人　心得ました。
ト凛々しく向ふへ入る。
淀町　腰元どもは、久秋を爰へ伴なや。
腰皆　ハア、。
ト皆々、上手の屋鋪へ入る。ばた／＼にて、橋がゝりより嘉門、上下股立ちにて、走り出て
嘉門　ハツ、淀町さまへ申し上げまする。
民部　粟津嘉門、あはたゞしい、何事なるぞ。
嘉門　只今桃山の御殿まで、名護屋表より火急の早打ち。
淀町　ナニ、早打ちとは氣遣はしい、なんと／＼。
嘉門　されば大領久吉公、名護屋表で俄かの御不例。
淀町　ヤア／＼、我が君には

民部　アノ、御不例とな。
嘉門　お傍の諸侯も俄かの敗亡、典薬達も手を盡せども、その甲斐もなく、即刻御他界遊ばされしとの事でござりまする。
淀皆　ヤア、／＼／＼。
ト大驚り。向ふバタ／＼にて、敵役四人、走り出て
主税　先刻御門前まで送りし後、二方ともに家來ども
小彌　四五丁ばかり追ふたる所へ
隣物　狼藉者通り合せ
左膳　二方ともに搦め立ち退き
四人　生死の程も相分りませぬ
皆々　ヤア／＼。
ト大驚り。バタ／＼にて、腰元皆々走り出て
浮舟　仰せに任せ久秋さまを、尋ねる所に
胡蝶　最前の眞砂路とやら
東雲　久秋さまを奪ひ取り、いづくともなく
四人　立退きましてござりまする。
ト淀町、驚りして
淀町　一方ならぬこの騒動、皆手分けして久秋を、此方へ奪ひ取り立歸れよ。

腰皆　畏まつてござりまする。

トばた〱にて、腰元、奥へ、敵役、橋がゝりへ入る。淀町こなしあつて

淀町　世の成り行きとは云ひ乍ら、我が君と云ひ久秋まで、ハテ、是非もなき有様ぢやなア。

ト愁ひのこなし。合ひ方になる。民部、刀抜いて、むつくと起き上がる。

民部　今こそ本望、眞柴の斷絶、ハテ、心地よやなア。

トきつと見得。淀町、久次、恟りして

兩人　ヤア、なんと。

ト民部、懐より晒を出し、捨て、靜々と二重へ上がり

民部　この年月をうま〱と、忠臣顔に見せたればこそ、倅と久次めを取替へ置き、今日が日までも活計歡樂。又誠の三好が胤と云ふは、不破伴作と名乘らせ、あくまでもこき使ひ、うま〱やつたる計略を、なまなか倅が忠義立て、父々たれども子々たらぬ、不孝の倅はあつて甲斐なし。切つて捨てるもこれ幸ひ。馬鹿者の久秋は、行くへ知れず。伴作、お通は、味方の人質。肥前名護屋に在陣の、大領久吉は病氣と云ひ、ハレ、心地よい。

ト淀町、久次、一々恟りして

淀町　スリヤ、我が子の愛に絆されて、伴作久次を取替へしとのみ思ひしに

久次　根深き企みの親人様、扨ては三好の臣下にもあらず

淀町　四海を望む反逆人。

久次　シテ、こなたの

淀町　本名は。

民部　ホヽ、不審な尤も。語つて聞けん。耳を浚つてよつく聞け。

トきつと見得。誂らへの大小入りの合ひ方になる。

元來某は眞柴の敵、惟任日向守光秀が家臣、四方天但馬守なるわい。

兩人　ヤア〱〱。

但馬　山崎の一戰破れ、小栗栖の里にて無念の御最期。我れは主君の忘れ形見、一人の姫君を乳人に抱かせ、又我が外戚腹の倅一人片手に抱き、大山崎の合戰に、我が影武者を討死させ、虎口を破つてその場を落ち延び、跡見返れど姫君と、お乳の在所見失ひ、倅を抱きそこかしこ、見やる向ふに數多の敵勢、一々に討つて捨て、影を隱して四國に落ち延び、傳手を求めて三好にあり附き、三好の胤と我が倅、連れて敵たる眞柴にあり附き、名も

改めて岸田民部。

兩人　扨ては但馬であつたよな。

但馬　今日まで色にも見せぬは、時節を待つて眞柴を亡ぼし、忘れ形見の姫君を、尋ね出だして四海の主。瓢の印は旗もろとも、疾くより奪ひ取つて、二品ともに斯くの通り。

ト旗と印を出し、見せて

我が計略に陷つたよな。無念にあらう、口惜しからう。アラ、嬉しや、悦ばしやなア。

ト淀町、久次、こなしあつて

淀町　民部が本名、二品の寶の在所。

久次　それ聞からばつかりに、命を捨てた甲斐ある悦び。

淀町　イデ、この上は。

ト淀町、庭へ礫を打ち、遠攻めの太鼓を打つ。但馬、ぎつくり、こなしあつて

但馬　ハテ、心得ぬ。あの遠攻めは。

淀町　明智の殘黨、四方天但馬守。

久次　こなたを取卷く知らせぢやわいの。

但馬　ヤ、、なんと。

トきつとなる。伴作上手の門より

伴作　ヤア／＼、四方天但馬守、誠の久次これにあり、改めて見參々々。

但馬　ヤア、なんと。

ト大小入りの鳴り物にて、伴作、久次にて、陣立ちの形にて、後より主税、小彌太、監物、左膳、嘉門、おつう、裲襠衣裳、長刀を持ち、後より腰元皆々、襷、鉢卷きにて附添ひ出る。始終遠攻め。

但馬　ヤ、、そちや不破伴作、この有樣は。

ト愕り。

淀町　いかに岸田民部、其方が日頃の振舞ひ、合點行かずと思ひしゆゑ、わざと久次に放埒を盡させ

久次　我れ相果てゝもあらうならば、その虚に乘つて本名も名乘らせ、かく計らはん我が心底。

伴作　底の底行く苦肉の手段、斯く八方を取卷くからは、最早遁れぬ、四方天但馬守。

淀町　サア、尋常に切腹するか。

伴作　但し押へて搔き首にせうか。

但馬　サア。

皆々　サア／＼／＼。

皆々　返答は、なんと／＼。

ト皆々きつと詰め寄る。この時本鐵砲にて、淀町にあたる。

皆々　ヤア、こりや淀町さまを。

ト皆々、介抱する。ト向ふバタ〳〵にて、矢田平實は作兵衛脱ぎかけ衣裳にて、本鐵砲を提げ、つか〳〵と出て、花道に留まる。皆々見て

皆々　ヤア、そちや下郎の矢田平。

但馬　安田作兵衛、大儀であつた。

作兵　四方天但馬守、まんまと首尾よう。

但馬　この上は兼ねての計略、水攻めの用意。

作兵　合點ぢや。

ト作兵衛、本舞臺へ來て、鐵砲を投げつける。狼煙あがる。二重舞臺には但馬、四人の諸士、軍兵を相手に立廻る。平舞臺には作兵衛、久次、立廻り、きつと見得になる。但馬、印を結ぶ。舞臺前一面に浪手摺り上がる。正面の屋體搖り出し、よき所にて右の屋體碎ける。軍兵皆々、流れる模樣。屋體の屋根、ばつたりと落ちて、この道具下手へ引く。向ふ一面の浪幕になる。この間に、襖、戸、障子、流れる模樣。よき程に小彌太、屋根の上にて軍兵を相手に立廻り乍ら、上手より流れ出る。立廻り色々あつて、皆々を川へ切り込み、その身も川へ飛び込み、色々立廻りあつて、入る。平舞臺上手の切穴より、小雀、江戸腹掛け、ゆがけにて、岩に取り附き、迫り上げる。

小雀　ヤレ〳〵、恐ろしや。岸田さまに頼まれて、水の手の切り口頭取り損じて、思はぬ深入り。すんでの事に命を失はうとした。どうぞよい具合な所へ、上がりたいものぢやが。

トうろ〳〵そこらを見廻してゐる。向ふより高景、好みの形、吹きさらしの陣笠、馬上にて出て、花道にて、きつと止まる。浪の音、一聲、合ひ方になり

高景　ヤア〳〵、淀町の御方はいづれに在するや。早川高景途中より引返し、御先途見屆けんためこれ迄推參仕つたり。いづれも乘船の出し召され。オヽイ〳〵。

ト此うち小雀、向ふを見てゐる。此うち高景、本舞臺へ來る。

小雀　オイ〳〵、お侍ひさん、丁度よい所へお出でた。どうぞ助けてたまへ〳〵。

ト拜む。高景こなしあつて

高景　怪しき匹夫め。

ト鞭打つて行く。小雀、搔い潜つて、ざんぶと飛び込み、馬の足を支へる模樣。高景、馬上より、槍にて突き、色々立廻り乍ら、橋がゝりへ入る。チョン〳〵にて、向ふの浪幕切つて落とす。

一面浪の遠見になる。舞臺正面の大岩の上に、作兵衞、大童にて、刀を構へ居る。捕手四人取卷く。きつと見得。花道は伴作、獣物を踏み附け、きつと見得にて、セリ上がる。下手より高景、小雀、小舟に乘り、立廻り乍ら出る。三方一時の立廻りになり、空より數多の千鳥、舞下がる。千鳥笛。上手の岩臺、介に眞砂路、しどけなき形にて、久秋の手を取り、介抱の體にて、傍に葛籠を置き、セリ上がる。双方、空を、きつと見得。雲氣の合ひ方。

皆々　ハテ、怪しや。
皆々　忌はしやなア。
伴作　俄かに覆ひし黑雲も、只一陣の風につれ
作兵　忽ち一天晴れ渡り、月の出汐に數多の千鳥。
高景　殺氣を含む千鳥の音律。
小雀　人も恐れず群がる有樣。

作兵　今眞柴家に傳ふる重器、千鳥の香爐紛失と聞き及ぶ。
伴作　これを所持なすその者に、仇なす者の窺ふ時は
高景　即ちその音を發すとやら。
眞砂　まつたその音を止めんには、古代に渡りし蜀江錦。
高景　心得がたきそちが俗姓。
小雀　イヤ、俗姓はない、堅田の小雀。
伴作　明智の殘黨、齋藤内藏之介光興。
高景　敵の荷擔人、堅田の小雀。
作兵　何にもせよ、合點の行かぬ。
伴作　不思議のさまを
皆々　見る事ぢやよなア、

ト双方立廻りになる。眞砂路は久秋を葛籠へ入れる。捕手二人出て、眞砂路にかゝる。右の葛籠、立廻りにて水中へはまる。眞砂路も水中へ飛び込む。皆々、上下に分れ、立廻り乍ら、皆々入る。知らせに依つて、チョンと木を入れる。この舞臺、所返しにて、一面に山吹の庭、所々に柵、眞中にお茶屋の亭座敷になる舞臺前、浪手摺り下りる。一聲にて、道具納まる。

ト合ひ方。ドロ〳〵にて、平舞臺の眞中へ但馬、手負

ながら、きつと見得にて、セリ上がる。

但馬　ハテ、心地よや、嬉しやな。主君の仇たる眞柴の奴原、一人も殘さず水攻めにて、滅ぼしくれしこの身の本懷。さり乍ら、多勢を相手に急所の深手、所詮生き在命へること思ひも寄らず。兼ねて習ひ得たる伊賀流の忍術にて、流れ殘りしこの濱館の庭先。さり乍ら亡君の忘れ形見、姫君に巡り逢ひ、忍術の捧げ、瓢の印、又旗もろとも相渡さば、この身の本望。イデ、この上は我が忍術久以て、姫君を爰へ呼び寄せん。

ト印を結ぶ。ドロ／＼にて、眞砂路と葛籠、上手へセリ上がる。

眞砂　ハテ、不思議や、最前久秋さんを連れて立退く時、水責めにて思はず水中へ飛び込むと思ひしに、體も其まま爰へ來りしは。

但馬　そりや某が妖術にて。

ト眞砂路、但馬を見て

眞砂　ヤア、お前は

但馬　順逆二門無大道源に徹す。

眞砂　五十五年の夢醒め來つて一源に歸す。

但馬　某ならで知らざる辭世、どうしてそちは

眞砂　知らいでならうか、お父上の形見。

但馬　スリヤ、某が察せし通り、主君の姫君、皐月姫樣にてありしよな。

眞砂　互ひに名乘り合はさねども、順逆二門の佛學にて、誠の家來と察せしぞや。

但馬　エヽ、有難いそのお詞。今はに語るも主君光秀公、眞柴大領久吉がために、小栗栖村にて無念の御最期。主人の恨みを受け繼いで、名も改めて岸田民部。御身二才の時、坂本の城中にて、御對面のその後は、行くへを尋ぬる今日只今まで知れざる所、御最期の一首にて、名乘り合ふたる上からは、サ、父御の無念をお晴らしあれ。

ト此うち眞砂路、無念のこなしあつて

眞砂　父が最期は小栗栖村、恨みを晴らすは父への孝行。

但馬　嬉しや、それ聞いて安堵いたした。イデこの上は主君の形見、伊賀流忍術の一卷、お渡し申す。

ト一卷、出して渡す。

まつた疾くより手に入る瓢の印、赤旗もろともお讓り申すが拙者の形見。

ト判と旗を渡す。

眞砂　父と家來が無念の魂、今より受繼ぎ、晴らして得さ

せん。

但馬　エヽ、忝い。

ト眞砂路、一卷を開き見て

眞砂　シテ、忍術の行ひ樣は。

但馬　九字秘文をお讓り申さん。

ト但馬、九字を切る。この時、捕手二人、出て、但馬にかゝる。兩人と立廻つて、きつと押へ、九字を教へるこなし。眞砂路、呑み込むこなし。又但馬、立廻つて、九字を切ると、捕手の腕、拔け落ちる。眞砂路、惕りし乍ら、九字を覺えるこなし。但馬、立廻つて

但馬　我が手で死なれぬ邪法の忌。

トわざと捕手に切られながら

隨分御無事で、皐月さま。

眞砂　草葉の蔭より見物しや。

但馬　エヽ、忝い。

ト捕手をぽん／＼と切つて、合掌する。眞砂路、愁ひのこなし、拜む。但馬、もとの切穴へセリ下がる。この時、捕手四人出て、皐月にかゝる。ぽん／＼と投げて、右の葛籠を前へ出して、こなしある。又捕手、かゝる。皐月難儀になる。この時、燒酎火、炎々と燃え出て、皐月に乘り移るこなし。これより皐月、一卷を出して、九字を切る。皐月、自在に働く。立廻り色々あつて、葛籠を背負ひ、よき所へ行く。捕手、總出にて、大勢出て、取り卷く。ト葛籠は宙に殘り、皐月、セリ下がる。葛籠ばかり、花道よき所へ行く。

捕手　アレ／＼、葛籠が宙を。

皆々　動くワ／＼、ハヽヽヽ。

ト皆々可笑しがる。よき程に葛籠、花道の切り穴へ落ちる。ドロ／＼にて、右の切り穴より皐月、葛籠を背負ひ、セリ上がる。皐月、皆々を見て

皐月　葛籠負ふたが可笑しいか。

皆々　ヤア。

皐月　伊達な姿が目に見えぬかえ。

皆々　ヤア、あの聲は。

ト又印結ぶ。捕手皆々、悶絶し、皐月、とつくりと見てこなし。

皐月　ホヽ、オヽ、可笑し。

ト、チョンと頭を入れると、一時に返し。

向ふ一面の嵐山、隨分見事にあるべし。花道よき所

に、大きなる岩山、セリ出す。桟敷両側とも櫻山の打返し。向ふ遠見の所、大瀧あつて、櫻の吊り枝、段々に見事なる道具納まると、辻浦十内、ぶッ裂き股引きにて、足もと提灯を點し、向ふより出る。皐月、こなしあつて、向ふへ行かうとする。十内前より提灯を突附ける。皐月、提灯叩き落とし、振り切り、十内かゝるを、刀を構へる見得。舞臺の正面の蘆原より、作兵衞、好みの形にて、薄原より久次、好みの形、下手より伴作、久秋、好みの形にて、双方一時の見得にて、色々好みの立廻りあつて、皐月、本舞臺へ戻り、立廻りある。皐月の懐より旗を取出し、皆々引ッ張る。立廻りにて、千鳥の香爐を出す。千鳥舞ひ下がる。皆々旗をかせに、きつと見得。

眞砂　ハテ。

ト、チョン／＼、木の頭。

皆々　不思議やなア。

ト双方引張りの見得、よろしく　　ひやうし幕

三幕目　　膳所鮒屋の場

役名──辻浦十内。同娘、お瀧。同乳母、お松。腰元、お咲。同、お春。平野屋平平。宗匠、景伯。社中、女好。同、馬物。同、歸帆。同、暮雪。同、夕照。同、晴嵐。仲居、おらく。同、おかん。口入れ屋せち兵衞。嬶、お乙。表具屋幸助。手代、元助。小鮒の源五郎。

造り物、二重舞臺、上の方床の間、違ひ棚、向ふ塗り骨障子、鴨居に紅摺提灯、これに鮒屋と記し、澤山に吊りあり。下手落間、少し後へ寄せて客露地。右二重上手に景伯、坊主頭に十徳やうの物を着て、點者の拵へ、文臺にかゝり、巻開きの體。側に元助、手代の形。女好、馬物、着附け羽織、辨慶の體、歸帆、暮雪、夕照、晴嵐、いづれも着附け羽織、社中の形、拔句を力み居る見得。少し離れて平平、大髻、濡事師の拵へにて、着附け羽織、豪家町人の形、随分嫌味なる莨入れ紙入れの類ひを側に置き、但し

額に大きなる瘤あり。煙草盆を扣へながら、卷開きを聞いてゐる體。傍におらく、おかん、仲居の形にて、酒肴を取り散らし、平平の機嫌を取り居る見得。床の間に景物の扇、花簪、軸、煙草入れの類ひを飾り、すべて膳所船屋の座敷、繪口合ひ卷開きの模樣。水かゞみの唄にて、幕開く。

皆々　卷軸はどうぢやな〳〵。

平平　こりや皆急くまい〳〵。卷軸も卷頭も、第二も第三も俺ぢや〳〵。

元助　イヤ、申し旦那、この間からの繪口合ひには、なんぼうあなたが勝ち續けぢやと云ふて、あんまりでござりませうぞえ。

馬物　美男さん、今日の卷きは是非わたしが取つてお目にかけう。

平平　イヤ〳〵、馬物子、柴屋町邊では、貴公が押へてゐるかも知らねど、及ばず乍ら繪口合ひでは、この美男が玉ぢや。

女好　所をこの女好が、圖を上げて見せう。湖龍も重かずも跣足で逃げると云ふ名句を入れて置いたて。

景伯　ハヽヽヽヽ、默つて各々の味噌を聞いて居ると、腹筋がよれる。何かはない、今土俵で判る事ぢや。サア、卷軸を讀むぞ〳〵。

皆々　サア〳〵、やつたり〳〵。

景伯　エヘン。

　ト咳拂ひして

卷軸の表題、薩摩芋。

皆々　薩摩芋とは、なんであらう〳〵。

景伯　仙臺高尾を目にかけて。

平平　美男。

元助　ヤア、旦那か。

平平　勿論々々。

　ト平平、咳拂ひする。

景伯　十軸表題毎日風呂。

歸帆　なんぢや毎日風呂とは。

景伯　妾は朝寐の恥知らず。

平平　美男。

皆々　ヤア。

景伯　第三卯の日參り。反橋跣足になりかゝり。

平平　同じく。

元助　又旦那か。

景伯　第二木太刀の音。鼻杉の根に突きあたり。
晩鐘　こりや面白い。よい句ぢやなア。
暮雪　その句は誰れぢやな。
平平　ハテ、知れた事ぢや。
馬物　又美男か。
元助　なんの事ぢや。なんでも今日は、俺がしてやらうと思ふてゐたに、又してやられたわい。
仲居　美男さんには、えらいお勝ちぢやなア。
平平　そりやもう云ふは愚かぢや。景物の花簪は貴様らに進上々々。
仲居　そりや大きにお有り難う。
馬物　評者の野亭もよりが戻つた。恐らく繪口合ひはこの馬物がとゞめ刺さぬ事はないに、今日はどう云ふ事やら一句も拔けずに、ずいくろうとは叶はぬ〳〵。
女好　併し巻頭はこの女好が取つて見せう。
元助　イヤ、弓は他へは渡さぬ、この白鼠が取つて見せう。
女好　イヤ、さうはさゝぬ。
　ト迫り合ふ。
景伯　アヽ、これはしたり、其やうに迫り合はいでも、今讀んだら直きに知れる事。併し三評のうちどれも〳〵上座になると、續けて取る旦那の手並。又巻頭も
　ト平平、その筈と云ふこなし。
元助　イヤ、今度は旦那に
女馬　やらぬぞ〳〵。
景伯　巻頭。
皆々　サア、皮切りぢや〳〵。
景伯　表題が音羽の瀧。やすりめ〳〵奉納太刀のやすりめ。
平平　美男。
景伯　ヨヽヽヽ、こりや手嚴しい、上座は皆吹いて仕舞ふた。
皆々　アヽ、しまうた〳〵。
景伯　サア〳〵、これで三評ともに片附いた。ソレ、仲居衆、景物をあちらの間へ、運んだり〳〵。
仲居　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。
夕照　おいらはえらい敗北ぢや。
晴嵐　わしらはたつた二句ばかりはか出なんだ。
五人　開きは濟んだ。去なう〳〵。
　ト捨せりふにて、仲居兩人、社中五人、奥へ入る。跡

合ひ方。

平平　どうぢや、へ、、、、、どんな物ぢや。凡そ縮口合ひにかけては、この美男に所詮折つけまいによつて、措け〳〵と云ふのに、下手の横好きと面妖したがる。皆の衆、ちつと修業せい〳〵。

景伯　イヤモウ、恐れ入つた事ぢや。やう〳〵後の月からし習ひの旦那、ハテ、上がれば上がるものぢやなア。

元助　さうでござりますとも。天神足は長いなア、折れたら痛いなアとなされた口とは、きつい違ひぢや。併し一月經つや經たぬうちに、この様に上がる筈はないが、なんでもこりや、大方てつきり誰れかゞ代句を。

ト平平を見る。平平、紛らすこなしにて

平平　オヽ、元助、最前鮒を作れと云ふて置いたが、まだか。

元助　イヽエ、わたしは承はりませなんだ。

平平　これはしたり、われも傍で聞いてゐながら、何をうつかり。出來次第に吸ひ物と一緒に、早う出せと云へ。

元助　ハイ〳〵、畏まりました。

ト元助は奥へ入る。

馬物　鯉とは有り難い。時に旦州ほど果報いみじき方はない。歴々の金満の旦那でも、屋敷勤めはせにやならず、ちつと巫山戯すぎると別家どもが頭を押へ、自由にはささぬのに、お勤めはなし、金は遣ひ次第、茶屋へは行き次第、山海の珍味は食ひ次第、ほんにお羨ましい境涯でござりまする。ナア、女好子。

女好　その上茶の湯やら俳諧やら、碁將棊揚弓などゝ、何一つ不足のない極樂世界。この膳所や大津は扨て置き繁華な京大坂でも、眞似の出來る者は只の一人もあるまい。

景伯　いかさま喜見城の樂しみ、邯鄲の榮華と云ふは、旦那のことの大名公家も仲々及ばぬ〳〵。

平平　遊山船を岡から見ると、どうも云へぬ樂しみの様に見ゆれど、乘つて見るとさのみ面白ない様なもので、岡目の料簡とは違ふた物ぢやて。

女好　なんと云はつしやる、そんなら旦那にも不足がござりますかえ。

平平　ある段か、不足だらけぢや。

景伯　こりや聞き事ぢや。

馬物　一體旦那の不足と云ふは、何であらうな。

平平　女子ぢや。

三人 エヽ。

平平 されば、双六の骰子と加茂川の流れは、王位の身でも任せぬと云ふ事は、昔から云ふてある戀の述懷。この平野屋平平は、もとは京のさる堂上方の諸太夫であつたが、ちと様子あつて、お暇を貰ひ、今この江州路で町人とはなつたれど、貯へた金の威光で、何事も心の儘なれど、どうした事やら女子が靡かん。もつとも少々瘤はあれど、さのみ捨てられた男でもないに、妾を置きや逃げて去ぬるし、女郎買ひに行けば振り居るし、又藝子と雜魚寐せうと云や、いつの間にやら脱けて去に居るし、この鹽梅を見ては、どうでも前生が岡島屋見る様な男で、無性に女子に惚れられた、返しが廻つたと見えるわい。

馬物 イヤ〱、そりや旦那のじやいの惡いのでござりまするわい。爰にゐておや女好さんなぞは、痣はあるし平い顏ぢやが、それでも大の色事師でござります。

女好 オイ〱、馬物、そりや何を云ふのぢや、俺を照らすのか。

馬物 イヤ〱、嘘ぢやない、それと云ふが、これが鮮からの事ぢや。

ト三絃弾く眞似をする。

景伯 さうであらう。又唄三絃と云ふ奴が、面妖娘の來る物ぢやてな。

平平 サア、俺もさう思ふてこの間から、大坂の釘徳を招待して、唄三味線をやりかけてゐるぢやて。

景伯 偉し〱。心掛けある侍ひは、轡の音でなうて糸の音締めで、娘の心を蕩かさうとは、天晴れ手取りの、この追從庵景伯も、感心々々。

平平 宗匠の何を云はるゝやら。

ト云ひながら嬉しきこなし。この時、奥より、おかん出て

かん 申し〱、お吸物も作り身も出來ましたが、どういたしませう、爰へ出しませうかいなア。

平平 オヽ、出せ〱。

かん アイ〱。

ト行かうとするを

平平 アヽ、コレ〱、待つてくれ〱。俺は爰でちつと宗匠と、話したい事がある程に、その間馬物子女好子、次の間へ往てやりかけた〱。

女好 イヤ〱、旦那と一緒でないと冴えぬ。お話しの間は爰で待つて居りませう。ナア、馬物。

馬物　さうとも〳〵。大方陽氣なお話しであらう。我れ我れも色道修業のため、ちとこれで聽聞いたさう。

平平　イヤ〳〵、全く左樣の浮氣にあらず、宗匠と差し向ひで眞面目話し。俺を構はずと次へ〳〵。ソレ、案内せんかい。

かん　ハイ〳〵、斯うお出でなされませ。

馬物　左樣なら、旦那、宗匠。

兩人　サア、構はずと、お出で〳〵。

　ト唄になり、おかん先に、馬物、女好、奧へ入る。跡合ひ方。

景伯　時に我れらと差向ひのお話しはな。

平平　イヤ、別の事でもない、昨日宗匠のお話しの事に附いて、内々のお頼み、なんと聞き入れては下さるまいか。

景伯　これは又改まつたお詞。俳諧の點者、追從庵景伯とは假の名、誠は西塔の武藏坊辨慶、君ゆゑならば御馬の先の討死でも

平平　そんならきつと。

景伯　假令石臼を箸にさせよとの難題でも、いつかな違背は仕るまい。

　トむづかしう云ふ。平平、につたり笑ひ

平平　聞き入れあつて先づは祝着。イヤ、別の儀でもござらねど、兼ねて貴公も御存じの通り、我れら當年まで妻もなく、閨淋しう暮してゐるが、なんでも小町か楊貴妃かと云ふ樣な面すの女性を迎へて、死ね死なうとの仲を契らんと思へども、未だ似合ひの緣もなく、千々に心を碎きしが、緣と月日を待ち終せたら、昨日貴公がお話しの志賀の鄕士の息女、未だ定まる夫もなく、難波生寫しの縹緻と聞き、見ぬ戀に憧れて、昨夜まんじりともよう寐ず、今朝起きると早々、この鮒屋での卷開きを幸ひに、出かけて來たは宗匠に、この事お願ひ申さんため、平野屋平平が一生のお頼み、その娘を拙が呼び迎へる樣に、取結びをお願ひ申す。これぢや〳〵。

　ト慇懃に手をつき頼む。景伯、此うちギヨツとする事あつて

景伯　エヽ、そんならアノ、志賀の鄕士の娘を、アノ、貴公の女房に。

　ト平平の顏を見る。平平、ちよつと袖を翳して

平平　近頃おはもじい。

景伯　エヽ。

ト大愕りして
アノマア、うつやかな代物を。
ト平平を見て吹き出して、思はず
アノ、その顔で
平平　ヤア。
景伯　イヤサ、アノ、うつやかな娘を、いけしめんとは。
平平　どうぢやな〳〵。
ト景伯、呆れて
景伯　ヤア、妙ぢや。
平平　妙かな〳〵。
トぞく〳〵する。
景伯　イヤモウ、妙どころではない。
平平　それ程妙なら一時も早う掛け合ふて、落着をお頼み申す。サヽ、早う〳〵。
ト迫り立てる。景伯、もじ〳〵して
景伯　サア、參る事は參るけれども、所詮がこれは
平平　ヤア。
景伯　イヤサ、所詮力業にも才覺にも、行かぬ所がござるぢやに依つて、この仲人は餘人をおやりなされい。どうぞこの儀ばかりは眞平々々。
平平　なんと云はつしやる。凡そこの仲人を仕負せる者は、宗匠ならで他にないと思ふて、この通りお頼み申すに、この儀ばかりは眞平とは、アノ、鄕士の娘ばかりは、どうして貴公が仲人は出來ませぬな。
ト景伯、ぐじ〳〵して
景伯　サア、そこでござるて。
平平　どこでござるな。
ト影伯、色々術なきこなしにて
景伯　サア、出來ないと申す譯は斯うでござる。かの娘の親は大の偏屈者。所でなんぞが一つ差支へがござつて、なまなか中へ入りかけ、若し縮尻つたその時には、愚老とんと申し譯がござらぬ。そこでお腹立ちも顧ず、斯やうに辭退申すのでござる。
ト額を撫で、ぐづ〳〵云ふ、平平、合點の行かぬこなしにて
平平　どの偏屈で、何が差支へで仲人は出來ませぬ。その譯を聞いた上では、外に又頼りを求めて見ませうが、マア、その譯を有體に承はりたい。
ト景伯、これを聞いて、南無三と云ふこなしにて
景伯　そんならどうでも譯を云へかな。

平平　ハテ、譯を聞かにや解らぬ。どうでござるな。

ト急き込み、こなし。景伯、仕方がないと云ふこなしにて

景伯　サア、その譯と云ふは斯うでござる。かの娘の親は、偏屈を石漆で固めた樣な仁で、あの娘を貰はうと云ひかけたら、それこそ聞き合せた上にも聞き合せを入れて、マア、第一聟殿の男附きを見ねば、なかなか得心はいたしますまい。

ト平平、これを聞いて、なんでもないと云ふこなしにて

平平　それこそ何より易い事。貴公と連立ち先方へ行て、舅にも又娘にも、我れ等が面體、穴の明くほど見せたれば、それでよいではござらぬか。

ト景伯、これを聞き、吹き出さうとして、ちやつと口を抑へ

景伯　そりやもう貴公ぢやと云ふて、まんざら捨てられた男ではなし、マア、十人並と云ふ者ではあらうが、なかなかあの偏屈さでは、十人並では得心せまい。ハテ、困つたものぢや。

ト平平、こなしあつて、手を叩くと、奥よりおらく出て

らく　お召しなされまするか。

平平　ちよつと鏡があるなら貸してたも。

らく　ハイハイ。

トおらく、鏡二面取つて來て、平平の前へ置き、奥へ入る。平平、右の鏡を取つて、二面鏡にて、口を歪めたり、色々妙な顏して、よくよく見る。トゞ我れながらほつとしたこなしにて、鏡を捨て、吐息つく。此うち景伯、これを見て、腹を抱へ笑ふてゐる。

平平　宗匠々々。

景伯　ハツハツ。

平平　コリヤ、どうぞ我れ等を見せずに、この談合は出來まいかな。

景伯　イヤイヤ、見せねばなりませぬ。

平平　ヤレ、情ない偏屈者ぢやなア。併しそこが魂膽工風で、其許の働きで、見合ひなしにこの縁談を、やりつけて下さつたら、コレ、恩賞は、柴屋町の六間間口を進上いたす。

景伯　エヽ、そんなら、アノ、見合ひなしにちやらくらで、仕負せたら、柴屋町のかけ屋敷を。

平平　嫌かな〳〵。
景伯　滿更でもござらぬ。
トにつたりと笑ふ。平平、この體を見て、紙入れより小判十兩ばかり出して
平平　ソレ、當座の手附け。
ト景伯にやる。
景伯　そんならこれが、アノ、手附け。
ト景伯、しごいて見て
こいつは一番、骨を折らにやならぬわい。
平平　善は急げぢや、直ぐに返事は聞かれまいかな。
景伯　丁度幸ひ、今日は慥かに三井寺の坊中まで、舅太夫の來てゐらるゝ筈。一走り行て參らう。
ト立ち上がるを
平平　ア、コレ、俺は足づへぢやが合點かな。
景伯　ようござりまする。何事も愚者が胸に。然らば且州。
平平　早く行きやれ。
景伯　してこいな。
ト唄になり、十德の裾をまくり、尻からげの樣にして、橋がゝりへ走り入る。平平、跡見送り

平平　ハテ、うい奴な。
ト合ひ方になり、こなしあつて
手廻しよう、埒が明けばよいが。
トこなしあつて、最前の鏡を取り上げ、又我が顏を見て、右の鏡を打ちつけ、睨みつけ、こなし。唄になり奧へ入る。ト又唄になり、切戶口より源五郎、木綿やつし、肴屋、前垂れ、料理人の拵へにて、提げ桶と手い、だまを持ち、下駄がけにて出て
源五　オイ〳〵、まると鮒とか。合點ぢや〳〵。
トこんな事云ひながら出て、ふと思ひ入れある。合ひ方になり
ア、人の行くへと水の流れ、もとは由ある武士の胤と生れ乍ら、この通りに流浪して、又後月から緣でがな、この膳所の鮒屋へ男奉公。料理場やら煮焚きやら、出來合ひに呼ぶ源五郎。これに附けてもかの一品、大津の豪家に質物に、入れてあるとの噂ゆゑ、どうぞその在所を聞き出したいばつかりに、仕つけもせぬこの奉公。イヤイヤ、役にも立たぬ獨言。畢竟人が聞かねばこそ。ドリヤ、濱へ下つて丸と鮒を揚げて來うか。
ト橋がゝりへ行かうとする。ト此ときせち兵衞、口入

れの形、お乙、雇はれ嚊の形にて出て、源五郎を見附けて

兩人　オヽ、源五郎どんか。

　　ト これにて源五郎、逃げうとするを

せち　オツト、逃げまい。見附けたぞ〳〵。

なと　逃げてゐて濟むかいの、お前は〳〵。

　　ト 兩人して源五郎を捕へ、上手へ連れて行く。源五郎、こなしあつて

源五　アヽ、コレ〳〵、聲低に云ふて下さりませ。

せち　なんぢや、聲低に云ふて下され。イヤ、聲高に云ふわい。貴樣はマア、この鮒屋の内へ、このせち兵衞に口入れさして置き乍ら、判代はどうするのぢや。サア、逢ふた時に取らねばならぬ。サア、今おこしや〳〵。

なと　イヤ、コレ、お前はな〳〵、わしに腹ごろ洗濯させて、今日が日まで、ぶつともすつとも云はずにゐて、それでなんと濟むかいなア。サア、積もりに積もつた洗濯代が、〆めて百五十六文。サア、今おこしや〳〵。

兩人　サア、早う出しやいなう。

源五　サヽ、御尤もぢや〳〵。遲なつたは氣の毒ぢやが、まだ内から、給銀は貸して下されず、馴染みのないのに早々とは云ひ憎し、それでつい思はず遲うなりましたが、いづれ其うち借りて持つて行きます程に、どうぞもう四五日。

せち　イヤ、ならぬ〳〵。久しい物ぢや。誰れぢやと思ふ、口入れのせち兵衞ぢや。埒が明かねば、その布子なと、剝いで持つて去ぬのぢや。

なと　さうぢや〳〵、その布子なと早う脫ぎや。

　　ト 兩人、源五郎を引附ける。

源五　ハア、申し〳〵、さうしられましては

せち　つまらいでも、こつちは構はぬ。

なと　それが否なら、錢下んすか。

源五　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵。

兩人　どうぢや。

源五　ホイ。

　　ト 當惑のこなしにて、俯向く。

せち　エヽ、面倒な。きり〳〵脫ぎやいの。

なと　サア、脫いだり〳〵。

　　ト 兩人して無理に着物を脫がしにかゝる。此うち平平、奧より出かけ、これを見てゐて、この時前へ出て

平平　待て、源五郎を剝ぐには及ばぬ。

雨人　ヤア。

源五　あなたは平野屋の旦那様。

平平　源五郎、なんぼ程の事ぢや。

せち　イヤ、俺への禮は錢で六百。

なと　わたしの貸しは八百足らず。

源五　お客の前で面目ない。

ト顏を隱す。平平、思ひ入れあつて、紙入れより金一分出して

平平　ソレ、金百疋。

ト投げ出す。源五郎、取つて

源五　スリヤ、このお金を。

平平　二人に渡しや。

雨人　そんならあなたが。

平平　取替へてやらうぞ。

源五　エヽ、有り難う存じまする。ソレ、二人の衆。

ト雨人へ右の金を渡す。せち兵衛、取つて

ちな　エヽ、忝ない。そんなら去んで分けませうか。

なと　それがようございませう。サア、行かしやんせいなア。

ト雨人、捨ぜりふにて、唄になり、下の方へ入る。源五郎、旦那、平平を拜み

源五　旦那、大きに有難うございまする。

平平　なんのあれしきの事、常住使ふ心附けぢや。禮には及ばぬ。

源五　エヽ、有難う存じまする。イヤそれはさうと、魚揚げに行て暇取つたら、又お目玉ぢや。左樣なら一寸濱まで行て參りませう。

平平　オヽ、早う行きや／＼。

源五　ドリヤ、行て參りませうか。

ト唄になり、源五郎、橋がゝりへ、桶と手だまを持つて入る。平平跡見送りて

平平　きやつ、料理人に似合はぬ、俺よりはちつとばかり好い男。あゝして置けば、まさかの時は……フム、よしよし。

ト頷き、下に居る。ト切戸により元助、幸助を連れて出る。幸助着附け羽織、風呂敷包みを持ち、連立つて出て

元助　丁度よい所へござつた、旦那にさう云はう。

ト云ひ／＼出るを、平平、見て

平平　オヽ、元助、なんぢや。
元助　イヤ、問屋町の表具屋が尋ねて見えました。
幸助　平野屋の旦那、御機嫌ようござりまする。
平平　オヽ、幸助どのか、なんぞ用があつてか。
幸助　ヘイ、イヤ、この間お誂への軸物が、表裝出來ましたゆゑ、お內まで上がりました所が、この納屋で卷開きとやらがござりまして、これへお越しと承りましたゆゑ即ち右の品を持つて、わざ〳〵爰まで參りましてござります。
ト右の風呂敷を解き、結構なる卷物、箱入りにして、一對出し。元助、取り次ぎ、平平に渡す。平平、取つて
平平　オヽ、それは御苦勞〳〵。イヤ、思ひの外早う出來た。ドレ〳〵。
ト箱の中の卷物を出して、兩方較べ見て
イヤ、誠に奇妙々々。寸分違はぬこの拵へ。どちらが贋やら正眞やら、持ち主の俺さへ解らぬくらゐぢや。よしよし、斯うして置けば大丈夫。
ト元の通りに箱へ納める。元助、これを見て
元助　旦那、そりや兼ねて大事になさるゝ、淸少納言とやらの正筆。
平平　春曙抄とも又俗には枕の草紙とも云ふて。ま一つとない大切の寶物ぢや。
幸助　そりやなか〳〵千兩や二千兩では買はれぬしろ物。それを旦那のお誂へで、生寫しの贋筆に書かした上、よう似た布で表裝さし、寸分違はぬこの片しろ。
元助　どう云ふ物で其やうに、お拵へさせなされましたのでござります。
平平　サア、廣い天下に、二つとない寶物ゆゑ、よう似た物を拵へて置くも、なんぞの時の間に合はす魂膽。なんと心得のある者は違ふたものか。
幸助　イヤモウ、其くらゐ大事のしろ物になれば、きつと片しろがなければならんものでござりまする。
元助　ハテ、旦那は、なんに附けても孔明々々。
平平　イヤ、時に元助、貴樣は一遍うちまで去んで、この書き附けの物を取つて來て貰はねばならぬ。
ト書附けを出し、元助に渡す。
元助　ハイ〳〵、畏まりました。
平平　その次手にこの卷物、大事の品ゆゑ、正眞の方だけは、間違のない樣に持つて去んで置いてくれ。

元助　そんならその巻物を、わたしが持つて歸りませうか
平平　オヽ、大事に直して置け。
元助　ハイ〳〵。
　ト右の箱ゝ一つけ殘し、正眞の方を風呂敷に包む。
幸助　番頭さん、お歸りなら連立つて歸りませう。
平平　經師屋どの、座敷へ行て一つ呑まんか。
幸助　イヤモウ、有難う存じますれど、私はもう直さまお暇。
元助　そんなら貴樣と連れ立ちませうか。
平平　元助、隨分ともに早いがよいぞや。
幸助　左樣なら旦那樣。
平平　オヽ、御苦勞々々々。
元助　サア、行きませうか。
　ト唄になり、兩人連立ち、切戸口へ入る。跡に平平、贋物の箱を見て、
平平　アヽ、餅は餅屋ぢや。箱の古びと云ひ、表具の工合まるで眞物ぢや。斯うして置くも品玉の種、うまいうまい。
　トこなし。トばた〳〵にて、橋がゝりより、景伯、勢込んで走り出る。平平、見て
ヤア、宗近か、早かつた〳〵、シテ〳〵、首尾は。
景伯　えらし〳〵。マア、爰へ〳〵。
平平　オット。
　ト平舞臺へ下りて
時に向ふの受け方は、どんな物ぢやな。
景伯　イヤモウ、手重からうと思ひの他、先は名に負ふ大津の豪家、平野屋平平さまと聞いて、ぐつと嵌つた樣子と見えます。
平平　なんぢや、嵌つたとは有難い。シテ〳〵、どうぢや
景伯　サア、あんまり受け方がよいから、木に餅のなる樣に、味噌をあげた程に〳〵。
平平　どうあげたな〳〵。
景伯　先づ家柄は大津一番、岸原もそこ退け。
平平　フム。
景伯　男は當時色事師のぴんぬき。
平平　フム。
　ト襟附きを直す。
景伯　手跡は江戸の小影流。
平平　フム。
　ト物を書く仕方する。

景伯　茶は家元の直弟子。
平平　フム。
ト袱紗を捌くこなし。
景伯　學問は頼の門人で、詩文はお茶の子。
平平　フム。
ト書物を見ろこなし。
景伯　歌學は固より景樹の門人。
平平　フム。
ト歌を詠ずるこなし。
景伯　俳諧は正風で、蒼虬も跣足。
平平　フム。
ト短册を書くこなし。
景伯　小笠原はえらし
平平　フム。
トしかつめらしうする。
景伯　料理は抜け切つてあるワ。
平平　フム。
ト物を切るこなし。
景伯　仕舞はもとより
平平　フム。

景伯　笛。
平平　フム。
景伯　鼓。
平平　フム。
景伯　太鼓。
平平　フム。
景伯　琴。
平平　フム。
景伯　三絃。
平平　フム。
景伯　胡弓。
平平　フム。
ト此うち一々仕方して、段々忙しう云ふゆゑ
待つてくれ〳〵。さう諸藝が忙しうては、飯食ふ暇もないわい。
景伯　ほんになア。つい、お拍子にかゝつて、やつて退けた。シタガ、よい時は臍とやら、けうとい事が嵌つたてや。
平平　どんな事が嵌つた〳〵。
景伯　詩歌連俳が達者なゆゑ、兼ねて御所持の清少納言の

自筆、春曙抄の事を話した所が、かの舅太夫が大執心。
平平　ナニ、アノ、春曙抄が大執心か。こいつはちつと手重いけれど、娘ゆゑには代へられぬ。娘さへ得心して、舅が娘さへくれる事なら、まゝよ、思ひ切つて頼みの印しにやるワ。
ト右の贋物の一卷を見て、ふと思ひ入れあるべし。
景伯　サア、我れらも、爰は一番切れ所と存じたゆゑ、その春曙抄を頼みの印しに、遣はさうとやつたのぢや。
平平　乘つたかた〳〵。
景伯　イヤ、まだ乘らぬ所があるぢやて。
平平　ハテ、乘りさうな物ぢやがな。
冷伯　サア、乘りは乘つたが、偏屈とは爰の事ぢや。
平平　どこぢやな〳〵。
景伯　サア、清少納言自筆の春曙抄を御所持とあれば、聟どのゝ人柄も嘸と思はれ、此方にも望む所なれど、何を云ふても一生の縁談ゆゑ、つい假染には定められぬと、むづかしいひねりかたぢや。
ト平平、頭を掻き
平平　オヽ、自裂たい〳〵。そこを手輕うに、どうぞ脱けやうはないものかの。

景伯　サア、愚老に於て、そこに如才はなし、樣々と辯を振るひ、なんでも早うやり附けうと、こみ附けた所が、つゞまる所で彼の舅が云ふには
平平　どう云ふたな〳〵。
景伯　此方も時分の娘、心急かぬではなけれど、先づ一應見合ひがてら、聟どのに對面して、娘にも見せた上、相定めたいと云ふたぢやて。
平平　ヤレ、情ない。それをどう受けられた。
景伯　どうと云ふたとて、ならぬと云へば埓は明かず、マア一時遁れに、こなたを逢はしませうと云はにやアならぬて。
平平　そいつは一向やくたいぢやが、爰に一つ、取つて置きの妙計があるて。
景伯　ナニ、妙計とは、その妙計とはどんな妙計。
平平　サア、その妙計と云ふは、斯うぢや。我れらはあんまり男前が好過ぎて、萬一値が出來ない物でもないゆゑ一番替へ玉をくらはすのぢや。
景伯　ナニ、替へ玉とは。
平平　ハテ、妹を見せて姉をやる手も世間にある事。そこで我れらより少々男は劣つたれど、瘤のないだけ、舅

に見せたら嵌らぬ事はあるまいぢやないか。
ト景伯、これを聞いて、恟りして
景伯　ナニ、旦那より劣つた男。
ト平平の顔を見て、頭を撫で
それより劣つたら化物ぢや。
ト云はうとして、ちやつと口を押へ
イヤ、シテ、その聟の心當りは。
平平　外でもない、この紺屋の下男、源五郎を使ふつもり
景伯　妙計々々、人柄はよし、男はよし。
平平　なんと屈竟の替へ玉であらうがな。
景伯　そいつはえら山ぢや、なんでも今日中にやり附けうと思ふに、幸ひ今日は彼の舅太夫と、おむすも一緒に來てゐるから、若し聟どのを御覽じやるなら、三井寺の坂前で、見合ひの手合ひもしてあれば、今から直ぐにでもやりつけませうか。
平平　テモマア、素早い。しやりやくは感心々々。此方も大のいらくら、幸ひ爰に春曙抄も取寄せあり。
ト右の箱を見せる。
景伯　そんならもう、頼みの印しに。
平平　サア、やるはやるが、正眞正銘の物を、うか／＼とやつては引合はぬぢや。そこで我れらが兼ねての目論見。
景伯　スリヤ、アノ、これも吹替へが
平平　知れた事。マア、太夫を御覽じ。
ト景伯、一軸を開き見て
景伯　ハテ、ようした細工の、とんと正ぢや。
平平　コレ、何事も隱密々々。
景伯　シテ、源五郎は得心せうかな。
平平　そりや得心する樣に、最前ぽちが切れてあるぢやて
景伯　何から何まで拔け目のない旦那ぢやなア。
ト此とき橋がゝりより源五郎、以前の提げ桶に鮒と丸を入れ、手だまを持ち、出で、平平を見て
源五　旦那さま、まだこれにござりまするか。先程はお有難う。
ト小腰をかゞめ、切戸の方へ行かうとするを
平平　ア、コレ／＼、源五郎、一寸待ちや／＼。
源五　ハイ、御用でござりまするか。
平平　オ、ちつと頼みたい用がある。サア、爰へ／＼。
源五　ヘイ／＼、左樣なら御免下さりませ。
ト桶を下手に置き、平平の傍へ來る。此うち景伯、源

五郎を見て、こりや余ッ程よいと云ふこなしにて、見てゐる。

平平　頼みたいと云ふは外の事でもない。貴様でなけりやならぬ用ぢやが、なんと聞き入れてくれるか。

源五　これは又改まつた仰しやりやう。私しが身に叶ひました事なら、何事によらず

平平　聞いてくれるか、忝ない。ちとばかり面目ないが我れら今日までまだ定まる妻もなく、閑淋しう暮らす事を、爰にゐる宗匠が世話で、女房持たうと云ふぢやてな。

源五　それは何よりお目出度い事でござりまする。

平平　所が先は志賀の里の郷士の娘。差當つて困つた事は宗匠の仲人口で、我れらを十分よい男ぢやと云ふたさうな。そこで先づ得心して、その詞に違ひなくば、見合ひせうと云ふて來たぢやて。そこで貴公に頼みと云ふは

源五　お頼みと云ふは。

平平　サア、その譯は

ト云はうとして、ぐづ／＼して、云ひ憎いとこなしにて

宗匠、俺が口からどうやら云ひ憎い。其許から頼んで下され。

景伯　ハテ、氣の弱い。イヤナニ、源五郎、高が斯うぢや旦那を見合ひさしては、あの面すではむづかしいぢや。そこで貴様を頼んで見合の間を、替へ玉になつて貰ふのぢや。

源五　ハ、、、、何事かと存じましたら、左様な事でござりまするか。そんならその見合ひの聟様に、アノ、私しがなるのでござりますなう。

平平　發明々々、何かに馴れた男と見える。我れらが頼みよもや否ではあるまいの。

景伯　なんと面白い役ではないか。

ト源五郎、もじ／＼して

源五　イヤモウ、たんとござるお客のうちにも、別して御贔屓に預かりまする旦那の事、辭退申すのではござりませねど、後で知れましては却つてあなたのおために。

平平　イヤ、その氣遣ひは無用々々。見合ひさへして、頼みの印しをやつたら、後で納める手段は様々。今日の間にさへ合してくれたら、それでよいのぢや。

源五　それぢやと云ふて、あんまりみす／＼な拵へ事。

景伯　サア、それにこそ手段ありぢや。マア、斯うぢや、貴公が一寸袴に羽織、旦那もその通りに仕立てゝ、一家

衆の様な顔で同道して、見合ひの場所で我れらが中取りして、あれが聟様ぢやと教へるが品玉の種ぢや。

源五　サア、其くらゐの事なら、旦那のお頼みなり、どうなりといたしませう、

平平　聟になつてくれるか。我れ〳〵のためには結ぶの神エヽ忝ない。

ト悦ぶ。

源五　さうして、いつの事でござりますな。

景伯　いつ所か、然も今日と云ふて今の事。

源五　そりやマア、壁に馬を乗かけた様なことでござりまするなア。

景伯　サア、その馬のほめきを冷さうとこの御相談。時に旦那、着附けのあとは。

平平　オツト、その事なら氣遣ひなし。色々と晴れ着の向きを、番頭に云ふて取りにやつたて。

景伯　テモ、早い手廻し。それ聞いて落着いたが、我れらは一寸一走り、舅の方へ知らして參らう、

平平　アヽ、貴公が居いでは萬事暗闇。誰れなと外に使をやりたい物ぢやが。

トこなし。此うち女好、馬物、出かけゐる、此ときズツと前へ出て

女好　そのお使ひは

馬物　私しどもが

兩人　受取りませうか。

平平　そんなら貴様達は、様子を聞いたか。

馬物　それ聞かいでなりませうか。酒肴をほつて置き、ひそ〳〵との御相談、襖のあちらで様子聞けば

女好　美しい娘御の噂。平常お出入りする者は、こんな時が附け目の仕事。しつかりとしたお祝ひを

兩人　頂かにやアなりませぬ。

平平　ヤレ、情ない、喰ひ口がふえた。斯く露顯の上は仕様ことがない、二人ともに働け〳〵。

兩人　畏まりました。

トこの時橋がゝりより元助、大風呂敷に着附け持ち物の類を包み、持ち出て

元助　サア〳〵、書附け通りの衣裳から、腰の物、提げ物の類まで、ひつさらへて參りました。

景伯　ヤア、御大儀々々々々。衣裳が參つた。

平平　物事も、斯う手都合よく行けば行くものかい。

トぞく〳〵して、風呂敷を明け、着附け紙入れを出し

色々配合を見ろこなし。

景伯　幸ひ〳〵。時に斯うぢや。蒲更平野屋平平さまの見合ひに、供を連れんも貧乏らしい。先づ役割りを致さうかい。

平平　ナニ、役割りとはどうぢや。

景伯　貴君はマア知れた事よ。袴はいた手代も要る。

馬物　所へ我れらが出かけざなるまい。

平平　馬物の手代とはきつしりぢや。

景伯　次が差詰め草履取り、なまこ袴には女好子々々〳〵。

女好　そんなら我れらは草履取り、ハテ、悪い役に當つたなア。

ト頭を掻く。此うち銘々衣裳を撰り取り

平平　時に宗匠、舅太夫の方へ案内にやるは、番頭の元助はどうぢや。

景伯　これも幸ひ。白鼠、御苦勞乍ら行て貰はにやならぬ

元助　行くなら行くが、全體なんでござりますな。ハヽン狂言でもなさる心か。

平平　エヽ、何ぬかす、譯を云ふてゐる暇はない、詳しい事は後で知れう。

元助　シテ、行く先は。

景伯　所は何ぢや、三井寺の坊中で、金藏院と云ふ所で、志賀の郷士、辻浦十內どのと尋ねて、先づ行て云ふには先づ頼みませうとくらはして、扨て取次ぎが出たら、追從庵景伯申しまする、此方は支度も調ひ、只今三井寺へ向け出かけまする。貴家様の方も御勝手よくば、直さまお出かけ下されと、しとやかに云ふて下されい。

元助　合點々々。金藏院とは緣起もよし。

平平　無駄口云はずと、ちやつと行け。

元助　心得ました。

ト橋がゝへ走り入る。此うち銘々、着附けを着る。源五郎、平平、袴を穿きにかゝる。

景伯　サア〳〵、これとあらかた極まつた〳〵。

ト浮いたる合ひ方、この見得よろしく、チョン〳〵にて、返し

造り物、少し奥深に三井寺坂の下の道具、下手寄りに坂、上り下り、正面石垣、上の方二階建この茶店の居體、半分出しかけ、よき所に茶屋床几、何脚も置き、辻打ちにて、道具納まる。仕出し大勢出て

仕一　なんとこの三井寺の觀音は、いつでも賑やかな事で

はないか。

仕二　ソレ〳〵、取り分け柴屋町には芝居もあり、遊所近くて賑はしい事でござるわいの。

仕三　イヤ、又此やうに人寄りのよい所はないわい。

仕四　イヤ、人寄りの次手に、俺は輕業を一切れ見て去なう。みな附合はしやれ〳〵。

二三　そんならさうせうかい。

仕一　おいらはこれから唐崎へ參らうか。

皆々　サア、ござれ〳〵。

ト又辻打ちになり、仕出し、わや〳〵云ふて、橋がゝりへと上手へ別れ入る。ト又謠への鳴り物になり、向ふより辻浦十内、着附け羽織、袴、大小、次にお瀧、振り袖、置き帽子、お松、前帶、乳母の形、お咲、お春、腰元の形にて、附添ひ出て、花道にて留まり、十内、向ふを見て

十内　ハヽア、こつちが早かつたさうな。この邊にそれらしい人物は見えぬが。

トお松も本舞臺を見て

まつ　わたしの方は、ついそこからそこへおやに依つて、急く事はないと餘ッ程見合して居りましたが、まだお仲人の先生もござらぬ樣子。旦那樣、こりや間違やしませぬかえ。

十内　なんの〳〵、方々この三井寺の坂の下で用合ひいたさうと、景伯老へ約定いたし、しかも先方から案内のあつたことなれば、間違ふ筈はないが、もう程もあるまい先づ〳〵あれへ參らう。

ト又右の鳴り物になり、皆々本舞臺へ來て、床几に腰かける。三次、茶屋男にて、茶を酌み、運ぶ。十内、邊りを見て

ハテ、三井寺は、繁昌な事だな。

ト煙草などのみ居る。お松、もう來さうなものぢやと云ふ思ひ入れにて、橋がゝりや向ふを見て

まつ　これは又、辛氣な事ではあるぞ。

トこなしあつて、お瀧に向ひ

申し、御寮人樣え。もう追ッつけでござりませう程に、さつきにも申します通り。恥かしいと云ふと聟樣を見損うたら、一生の損でござりまするぞえ。とつくりと御覽じやれ。

トお瀧は十内の手前、恥かしきこなし。

はる　さうとも〳〵、聟樣の目利きが第一でござりまする

さき　イヤ〳〵、聟様はどこに一つ、申し分のないよい殿御ぢやと、先生が仰しやつたぞや。

まつ　ハテ、よいわいの。御寮人様より、旦那様とわしの目が淨玻璃の鏡ぢや。滅多に片輪者は掴みはせぬわいなう。

ト此うち十内、莨のみ乍ら、これを聞いて

十内　おらが秘藏だと思つて、皆世話焼くワ〳〵、ハヽヽハヽ。

ト吸ひがらを灰吹きに明ける。此とき橋がゝりより景伯、出て、皆々を見て

景伯　これはお早うござりました。

十内　ホヽオ、景伯老、お待ち申した。シテ、平平どのはどれにござるの。

景伯　イヤ、これはこの近邊に、小休みいたし、お待受け申してゐられます。

十内　然らば御案内下されい。

景伯　畏まりました。併し一寸申し上げて置きませう。御縁の儀は調不調もござりませうから、先づ双方の御挨拶は、不肖が預かり置きませうでござりませう。

十内　御尤もの儀、承知仕つた。

景伯　然らば御案内申さう。

ト向ふを見て

イヤモウ、あれへ見えました〳〵。

ト壬生の鳴り物になり、お松、懐より延べ紙を出し、お瀧の顔を直してゐるこなし、向ふより源五郎、着附け羽織袴、一腰さし、次に平平同じ形、馬物、元助、手代の形にて、附添ひ、後より女好、なまこ襟、草履取りにて附き出る。十内、お瀧、お松、お春、お咲、見合ひ、入れ違ひの模樣。トヾ十内の方は上手の床几へ、源五郎は下手の床几へ、皆々よろしく腰かける。女好はつくばる。源五郎は行儀正しく腰かけゐる。平平は嫌味に衣紋繕ひなどして、お瀧の方を見る思ひ入れ。元助、女好、馬物、皆々、お瀧の方を見る。十内は源五郎に目を留め、見てゐる。お瀧、源五郎を一寸見て、恥かしきこなしにて、俯向く。お松、お春、お咲は云ひ分なしぢやと云ふこなしにて、お瀧に見いと云ふこなし。お瀧は恥かしがるゆゑ、辛氣なこなし、女好は草履取りの役を忘れて、延び上がつて、お瀧を見る。馬物、シツ〳〵と押へる。女好、これにて元の樣に居る。源五郎は十内が目を放さず見てゐるゆゑ、

底氣味の悪いこなしにて、もじ〳〵する。平平はお瀧に見惚れ、門に立つ様に嫌味するゆゑ、源五郎、景伯兩人これを押へる仕方、色々。この體を十内、思はず見る。景伯は言ひ譯のこなしにて、十内の方へ來る。十内、聟と云ふはあれかと云ふ仕方して、源五郎を聟かと云ふこなし。景伯、平平と源五郎の眞中を指す。十内見て頷き、氣に入つたと云ふこなし。景伯、お瀧に、聟はどうぢやと云ふこなし。お瀧、恥かしがる。お松、えらいと景伯へ云ふこなし。景伯、追從笑ひする。平平は始終景伯に目を附け、このとなりに景伯を招く。景伯、こちらへ走つて來る。平平、どうぢや娘ば俺に來てゐるかと云ふこなし。景伯、エヽ、阿呆らしいと云ふふり。源五郎は早う去にたい、幕を切つてくれいと云ふ思ひ入れ。景伯、呑込み、こちらへ又走つて來て、十内に、左樣なら引取らしませうと云ふこなし。十内然るべくと云ふこなし。景伯、心得て、源五郎、平平の方へ、立てと云ふこなし。これにて皆々向ふへ出て、双方一寸目禮して、源五郎は皆々と上手へ行く。十内は下手へと摺れ違ひの模樣にて、源五郎の方は上の方へ入る。十内は皆々を連れ、眞中の床几へ腰かける。景伯は殘る。十内、跡見送る。

十内　景伯老、サヽ、これへ〳〵。

景伯　ハツ〳〵。

十内　サテ、早速乍ら、段々のお世話、聟殿の男振りと申し、御人物、甚だ氣に入りました。

景伯　エヽ。

ト　ぎつくりする。お瀧、お松、皆々悦ぶこなし

十内　イヤサ、手前娘には過ぎたる聟殿、直さま相極める所存でござるが、先方に違變はござらぬかな。

景伯　滅相な、貴丈の方さへ御得心なら、なんの此方に違背がござりませうぞ。

十内　シテ、愈々お話しの淸少納言の自筆の春曙抄、結納に遣はさるゝとな。

景伯　その儀も愚老、抜かりなく先方へ云ひ入れ、大金出して買ひ求めた一品なれど、結納とあらば早いがよいと、我れら受取り、双方見合ひ相濟みましたら、直さまお渡し申せよと、先方の云ひ附け。

ト　懷より袱紗包みの箱を取出し

ハツ、結納の一品、御受納下されう。

ト　十内、會釋してこれを受取り、思ひ入れあつて

十内　ハテ、早速のお結納、左程娘を御執心の儀なれば、此方も相極めるでござらう。

ト　お瀧の方を見て

娘、聟殿をとつくりと見たか、よい男だな。なんと氣に入らうか。

ト　お瀧は恥かしきこなし。

只今相極めるぞよ。後で異變はならぬぞよ。どうぢやどうぢや。

ト　矢張りお瀧、恥かしきこなし。お松、お春、お咲、側にて、ちやつと返事仰しやれと云ふ仕方。お瀧、もじ〳〵する。

これは果てぬ事ぢや、どうぢや〳〵。

ト　お松、辛氣なと云ふこなしあつて

まつ　ア、申し、旦那樣、御念には及びませぬ、聟樣は日本一、氣に入り過ぎてござりまする。ちやつと極めてお上げなされませいなア。

十内　オ、、さうであらう〳〵。ナニ、景伯老、あの通りでござれば、承知仕つた。

景景　左樣ならば願ふたり叶ふたり。ちやつとこの由知らせませうが、併し途中にて略儀乍ら、結納の一品お納め下さるか。

十内　納めませうとも〳〵。此方とても略儀乍ら、拜見いたして。

ト　十内、箱の紐を解き、袱紗を解き、一卷を開き見る。此うち合ひ方。景伯は案じるこなし。お瀧、お松は、じつと見てゐる。十内、とつくりと見て、思ひ入れあつて

誠に春曙抄と云ふは、別名清少納言枕の草紙とも呼び、これぞ今昔和文の詞、殊には自筆のこの軸物、ア、、見事ぢや。

ト　感心のこなしにて、箱へ入れ、蓋をして、紐をしつかとくゝり

拙者が多年懇望の一品、結納に遣はされ、千萬忝ら受納いたすと傳へて下され。

ト　これにて景伯、嬉しやと落着く思ひ入れ。

景伯　ハツ、執心の結納相調ひ、お目出度う存じまする。

十内　貴公にも段々とのお世話、忝うござる。

景伯　お禮に預かり痛み入りまする。先づ結納も納まりし由、先方へ達し、悦ばしませう。

ト　景伯、驅け出さうとするを

十内　アイヤ／＼、一寸お待ち下されい。味な物で、相極めぬうちは左もござらぬらぬが、相極めましたれば一日も早く、取り結びがいたしたうござる。

景伯　そりや早お互ひ、先方も早いが勝手と存じられまする。

十内　然らば手廻しよう婚禮をさせませうが、秘藏娘が一世一代の晴れでござれば、拙者は萬事本格に致したうござる。

景伯　御尤もの仰せ、左樣取計らひまやう。

十内　然らば聟入りは嫁入りより、三日以前でござるが、御承知でござるかの。

景伯　エ、。

ト大きに仰天する、

十内　景伯老には御存じないかな。

景伯　イエサ、隨分承知いたして居れど、聟入りが嫁入りより前になつては、ちつとこつちに勝手の惡い事がござつて。

十内　ナニ、勝手が惡いとは、變改しめさるのか。

景伯　ナンノマア、左樣ではござらねど、その聟入りは後へ廻して、嫁入りから先へ致したう存じまする。

十内　それでは本格に相成らんてや。

景伯　エ、、これは又情ない事ではあるぞ。

ト頭を撫で、迷惑なこなし。上手の茶屋より女好出て

女好　先生さま／＼。

景伯　ハツ／＼、それへ參る／＼。

女好　何か早うとお急ぎなさる、、ちやつとござれ／＼。

ト手を取り、引立てにかゝるを

景伯　サア、承知々々。

ト十内に向ひ

イヤ、仰せの趣き、一寸先方へお達した上、お返事申しませう。

十内　ナニサマ、その由、御相談下されい。

景伯　ハツ、然らば暫らくお抑へ下されい。

女好　ハテサテ、ちやつとお出でなされませ。

ト心忙しく、女好、捨せりふにて、景伯連れ、上手茶店へ入る。十内、跡を見て

十内　ハテ、倉卒な男だなア。

まつ　御客人樣、お聞きなされたか。今日云ひ出して今日直きに見合ひも濟むし、頼みも納まり、この上の目出度い事はござりませぬなア。

はる　ソレ〳〵、今日に限つてこの三井寺へ、御參詣遊ばしたりやこそ、あのやうなよい聟樣をお貰ひ遊ばすと云ふもの。

さき　ソレイナア、道理で今日は志賀の里から三井寺まで駕籠にも召されず、おひろひ遊ばした筈ぢやないかいなア。

まつ　エヽ、この子等が何を云ふやら、今日この三井寺へお出でなさるゝ迄は、見合ひのみの字も御存じない事。俄かに出來たこの相談。それをお前等が口々に云はしやんすと、只さへおぼこな御寮人樣、直に恥かしがつて、物さへ碌に仰しやらぬ。ちと遠慮して物を云ひなア。

兩人　それでもあんまり花聟樣の男がよいゆゑ。

まつ　ハヽア、それでの燒き餅ぢやの。そりやお前方がけなりがるは尤も。色氣離れたこちらでも、あの堅苦しい旦那樣さへ惚れるもの、御寮人樣はお仕合せ、嘸お嬉しう。

三人　ござりませうなア。

たき　そんな事云ふてたもんないなう。

ト袖にて顔を隱す。十内、此うち莨のみ、思案のこなし。此とき振返つて

十内　女どもと云ふものは、一つに寄ると、なんぢや、がやがやと、姦しい物ぢやて。ハヽヽヽヽ。

ト此とき上手の茶店より、源五郎先きに、平平、元助、馬物、女好、附き添ひ、づッと出て、十内の前を目禮して、花道へ行きかゝる。十内の方も會釋して、皆々じつと見送る。此うち景伯出て、目禮する。平平は以前の通りに嫌味の心。源五郎は迷惑なこなし。皆皆、心々の思ひあつて、源五郎の方は向ふへ入る。景伯は殘る。十内の方は跡を見送る。景伯、皆々の入り切つたるを見て、十内の側へ寄り

景伯　仰せの趣き、何事も其許のお差圖通りいたすとの儀でござりまする。

十内　スリヤ、聟入りの儀も御承知かな。御不承知ならば如何やうとも。

景伯　これには又お氣の短い、承知いたしたと申して居るに。

十内　然らばようござるな。輿入れの儀は最上吉日を撰み、貴老方まで申し上ぐるでござらう。

景伯　畏まりました。左樣ならば辻浦氏。

十内　でござるかな。



初世中村富十郎のお瀧　八世片岡



我童の源五郎（初演當時の錦繪）

ト景伯、お瀧の傍へ行き

景伯　御寮人、來春は石山で開帳が始まるとの事、その節はお供いたしませうぞえ。

たき　ハイ。

ト恥かしきこなし。お松、見て

まつ　エヽモウ、此お子わいなア。ソレ、御挨拶を、遊ばされませいなア。御覧じませ、おぼこでどうもなりませぬ。ホヽヽヽ。

景伯　左樣ならばいづれも。

まつ　御苦勞樣でござりました。

ト唄になり、一寸十内目禮して、向ふへ走り入る。此うち始終お瀧は向ふを見詰め居る。お春、お咲はともども延び上がり、お瀧の袂を引き、源五郎の跡を敎へこなし。十内は始終思案のこなし。お松は景伯が走り入りし跡にて、ふとお瀧を見る。お瀧は矢張り向ふを見詰めゐるゆゑ、十内の袖を引いて、御覧じませと云ふこなし。十内、見て、につこり笑ひ、思ひ入れ。お松、お瀧の傍へ寄り

まつ　申し〳〵、モシ、御寮人樣。

ト脊中を叩く。お瀧思はず手に持ちし扇を取落とし、ハツと思ふて袖にて顔を隱す。十内、お松と顔見合せ、お瀧を敎へ

十内　乳母、餘ッ程

ト膝を叩くを、チヨンと木の頭。

嵌つたさうな。

トこれをキザミに、お松、頷く。お瀧は袖にて翳し乍ら、向ふを見る。皆々よろしく

ひやうし幕

四幕目

唐崎の場
十内邸の場

役名――辻浦十内。同娘、お瀧。同乳母、お松。腰元、お朝。同、お源。お菊。同、お福。宗匠、景伯。平の平平。手代、元助。下男　久三。同、百助 實ハ吉川隼人。稻見平馬。九重姬。社中、笹浪。同、守安。小舟の源五郎 實ハ岩本東馬之丞。

造り物、見附け淺黃幕、上手二重、この前石垣の書割り通りにして、二重の上に松の實樹、隨分見事な

ろを据ゑ、これに何本も杖突かせある。上より松の吊り枝。すべて唐崎一ツ松濱邊の體。舞臺前、低き浪手摺り、正面に見事なる屋形船一艘、下手に出しかけの屋形船、兩方とも一ツ巴とエの字の紋附きの幕を張り、所々に蘆生ひ、よろしく、幕の内より源五郎、着附け、袴、羽織、聟入りの形にて、挾み箱に腰を掛け、舳先に居る。此ほか平平、元助、袴、羽織、景伯、頭巾、十徳。久三、新しき看板、尻からげ、三尺帶にて、各々船に乘り、茶、辨當箱、火鉢、風呂敷包み、毛氈など、船頭二人、船中へ運ぶ。時の鐘。松は唐崎の唄にて、幕開く。

景伯　旦那、案じるよりは產むが易いと、マア、聟入りも首尾ようやりつけて、我が家へ歸る喜悅の眉。巴の紋は聟方の船、エの字の紋は嫁方樣、供人數多引連れて、やらん目出度やのほゝんへと謠ひ連れて、大津へついた所は祝言の盃、なんお心持ちはどうぢやえ。

平平　イヤモウ、心持ちは諸事夢中ぢや。併し景伯老、仲人の分として、やんら目出度やのほゝんとはどうぢやえ。

景伯　エヽ。

トぎつくりする。

源五　イカサマ、やらんとは嫁取りの忌詞。宗匠、ちとお嗜みなされい。

景伯　これは近頃無調法、旦州の差合ひぐりには困りますて。

源五　サア、その差合ひに今日の聟入り。この間の見合ひさへ、どこやらかこそばうて、玉の汗をかきましたのに、段々とのお頼みで、今日の聟入りも、續けさまの見世手本。どうやら斯うやら役目も濟み、それから嫁御も船に乘らせ、旦那のうちへ屆けたら、私しもそれで助かりまする。

平平　サア／＼、貴公の云ふ通り、なんぼうこれが本格ぢやとて、嫁より先に聟入りは、この平平も不承知なれど、爰まで出來た相談を、滿更あとへも引かれまいと、嫌がる貴公を無理に頼み、聟舅の二膳込み、段々と世話でござつた。これからはお娘を俺のうちへ取込むまで、もちつとの不承ぢや、堪へてたも。

景伯　さうとも／＼、嫁さへうちへ取込んだら、本名お名乘る旦那の心底。件の段にかゝれば、人に勝れた道具もあり、貴公の贋はお役に立つまい。ナント、旦那、嘘で

はあるまい。ハヽヽヽ。
平平　宗匠の何を云ふやら。追從庵とはよう附けたぞ。時に嫁の方も、もう揃ふて來さうなもの。何をぐづぐづしてゐるやら。元助、そこらにまだ見えぬか。
元助　左樣でござりまする、女中方と云ふものは、兎角暇のいるものでござりまする。併し奧御は急きこなされば、もう彼れこれ見えませう。
久三　イヤ、私しが出ます時、奧御はもう支度なされて、臺所まで出やしやつたを見ましたが、なんで此やうに遲いか存じませぬ
平平　此やうに引張つてどうする積りぢや。船が遲う着くと、祝言の間に夜が明けて、肝心要の閨中がすかぢや。
景伯　オット、旦那、すかへはどうぢやな。
平平　ホイ、今度は出損ふた。
源五　出損ふたとは出船には忌みまするぞえ。
平平　ハヽヽヽ、續けさまに味噌をつけてのけた。忌々しい。あやかしの附かぬ先、早う來てくれいではなア。
ト向ふを見る。
源五　イカサマ、これは。
皆々　遲い事ぢや。

ト皆々向ふを見る。合ひ方やんで、風の音になる。
船頭　なんぢや、えらう風が出たぞよ。冷い風なア。
ト船頭二人空を見る。皆々も空を見て
源五　俄かに一面曇つて來た。アレ／＼、比良の邊りから凄じい雲が出て來ましたぞや。
ト風の音ひどうなる。
景伯　コリヤマア、雪でも降るのか、恐ろしい樣な風が吹いて、眞黑になつて來た。
ト平平周章て
平平　サア／＼、やくたいぢや。時化になぞなつてはつまらぬ。船頭々々、時化にはなるまいかの。
船一　時化どころか、雪になり損ふて、叡山颪が危ない。お前方、今日は所詮乘られぬわいなう。
船二　もとの宿へ戻らんせ／＼。
平平　宿へ去んではつまらぬ。邪でも非でも今夜去んで、祝言せにやならぬわいなう。
船二　何を阿呆らしい、祝言も命あつてぢや。今日船に乘つたら、大津までの眞中でずぶ／＼ぢやわいの。
平平　ずぶ／＼と入りや、きしむ氣遣ひがなうてよからう。なんでも乘らにやならぬ、船を出せ／＼。

船兩　イヤ、出されやんせぬ。

平平　何を出さゝずと置かうか。

ト立ちかゝろを、景伯、留めて

景伯　アヽ、旦州、待つた／＼。

平平　イヤ、放せ／＼。

ト源五郎も立ちかゝつて

源五　イヤ／＼、船頭がとめまするのに、船を出しては、危なうござりまする。其うへ雪か霙が、チラ／＼降つて來ました。

元助　しかも吹き降りなりや、ずぶ濡れになります。マアあとへお歸りなされませ。

皆々　平に／＼。

久三　アレ、もう降つて參りましたぞえ。

ト矢張り風の音、雪ちら／＼降らす。

景伯　これは扠てやくたいぢや。下駄傘の用意して來たらよかつたに。

ト上手より百助、木綿やつし、下部の形にて、傘五本背負ひ、下駄五足繩にてくゝり、提げて、すた／＼云ふて出て來る。景伯、見て

オヽ、百助、來て下さつたか。

百助　ハイ／＼、御難儀でござりませう。

ト云ひ／＼下駄を解き、傘を下ろす。元助、久三も共に手傳ふて、平平、源五郎、景伯へ下駄を穿かし、傘を渡す。此うち源五郎のさす一本は蛇の目傘、あとは番傘にて、トヾ元助、久三も下駄を穿き傘をさす。此うち船頭二人は、簑、ばつてう笠を着て、船の幕を外し、道具の上へ苫をかける。各々捨せりふよろしくあつて、百助、景伯に向ひ

百助　サテ、先生樣へ旦那申されます、今日の天氣は甚だ危なうござりまするゆゑ、私し方は延しまする。あなた方も私し方へお歸りなされまして、お見合はせなされまするやうに申し附けましてござりまする。

景伯　コレハ／＼、お心遣ひ、千萬忝ら存ずる。申し、旦那。

トうつかり平平に云ふ

平平　アヽ、何事。

ト兩人、百助の方を見て、ちやつと思ひ入れ。景伯、源五郎に向ひ

景伯　イヤ、頭殿方もあの通りの御案内、マア、今日は見合はして、十内さま方に御一宿が

ト平平にこなしあつて

ナ、宜しい様に存じまする。

ト平平、むつと怒るこなし。源五郎、見て、ぐづ〳〵する。景伯、百助に氣を兼れて、こなしある。

サア〳〵、尤もぢや、大事な祝言が延びる事ゆゑ、腹立ちは尤もなれど、力業にも才覺にも、叶はぬものは雨風動亂、腰提げならぬ腰掛けに、ナ、舅御の方へお歸りなされずばなりますまい。

ト平平へかけて、源五郎へ云ふ。

源五　サ、わしはさう云ふ腹ぢやなけれど

ト平平を見る。平平、かぶり振る。

サア、あれぢやに依つて、矢張り船に乘らにやなるまい。

ト景伯、ア丶情ないと云ふこなし。

百助　イエ〳〵、それは惡い御料簡でござりまする。私し方の旦那は天文を見られまするが、今日の日和は大時化で、雪になるまで吹き荒れると申して居られました。

ト源五郎はげんなりする。

どうで湖水の船は引ツくりかへるは定の物、是非々々お歸りなされませ。

景伯　なんでもかでもさう云ふ鹽梅では、命には代へられぬ。風も段々えらなりさうな。マア〳〵、お出でなされませ。

源五　ア丶、仕方がない、そんなら行かうか。

ト平平を見る。平平、どうなとせいと云ふこなし。

景伯　サア、どうやら斯うやら訴狀が留まつた。サア、お出でなされませ。

百助　御案內申しませう。

ト此とき銘々の傘、風の音にて、杯になる。

皆々　ソリヤ、えらい風ぢや、吹き散るまいぞ。

ト源五郎、平平、景伯、元助、久三、連れ立ち、百助案內して、上手へ入る。風の音烈しく、出しがけの船、下手へ引込む。チョン〳〵にて、し

造り物、三間の二重舞臺、見附け唐紙襖、瓦燈の切戶へ續き、錆壁に丸窓、上の方落間、客露路附きの板塀、吊り燈籠のあしらひ、橋がゝり落間、後へ寄せて供部屋の横手を見る。門構へ、門の表札に辻浦と記す。二重上手に笹浪、守安、裃羽織にて莨のみ居る。お源、お朝、お菊、上の腰元、お福、お松、

下女にて、各々前垂れ襷、椀、家具、膳組みなぞを拵へ居る見得。和らかなる唄、風の音にて、道具納まる。

笹浪　今日は何かお目出度い儀と承はつて、これなる網代の守安公を誘引仕り、伺候いたしましてござる。

守安　宿許に居りましたる所、膳所の笹浪公がお知らせに預かり、直さま同道いたした。

あさ　兼ねてお聞き及びもござりませう、旦那十内さまの御寵愛の御寮人様、御時分におなりなされし事ゆゑ、似合ひの聟様を御吟味の所

げん　粟津義仲寺のうちにて、俳諧の宗匠遊ばする景伯さまのお世話にて、一昨日見合ひも相済み

きく　聟様には大津石場の町人、平野屋平平さま、御結納も納まり、即ち今日が聟入りにて

まつ　直ぐに今晩お嫁入り遊ばす筈

ふく　何やら彼やらでこの取込み

あさ　あなた方をお招きなさらなんだ様子と申しまするは

皆々　この通りでござりまする。

守安　それで讀めました。大家の御婚禮とあらば、前かどにお拵へもあらうし、我れ〳〵は新弟子なれど、先生の高弟衆へ前日に、廻状をお廻しなさるゝ筈

笹浪　謂はれを聞いて會得いたした。その儀ならばさぞお取込み、今日は先づ歸らうではござるまいか。

守安　ア、モシ〳〵、聟入りの日に歸らうと仰しやるは、どうやら氣にかゝつて惡うござりまする。

瀧浪　これは大きに粗相申した。然らば暫らく相待つて、十内どのゝお目にかゝり、お悦びを申さうか。

守安　何さまそれがようござる。

あさ　程なう旦那様にもこれへお出で、御ゆるりとなされませ。

ト此うち銘々、椀家具を片附けて

きく　マア、お膳組みも片附いた、どうやら風も凪いだ様子。

げん　これでは聟様もさぞ御難儀。百助さんがお迎ひにござんしたが、お戻りなさるゝか知らん。

あさ　サア、この風で船は危ない、方々お歸りなされいと旦那様の云ひ附け。是非お戻りなされうわいなア。

よつ　そんならこちらは臺所で、お膾の拵へ

ふく　お吸ひ物の品も調へて置かう。

瀧守　わし等も手傳はうかえ。

まつ　もうよいわいなア。サア、お菊どん。
きく　お福どんもござんせ。
ふく　アイ／＼。
　ト三人、膳組みを持つて入る。奥より十内、着附け、袴、羽織にて出る。又風の音、雪ちら／＼降る。
十内　ハレ、怪しからぬ天氣ぢや。舞殿にさぞ難儀であらう。迎へにやつたが、もう歸りさうなものぢやが。
　ト前へ出て、兩人を見て
　これは御兩在、よくこそ御入來。ちと客來を得ましたから、お　しも存ぜす失禮仕りました。眞平御免下されい。
　トよき所へ坐り、煙管を取り、莨をのむ。
篠浪　これは／＼御挨拶。只今ちよつとお召使ひより承はる所、御息女の御縁談相調ひ、御婚禮も今夕との事。
守安　前方にお噂も承はらぬゆゑ、只今始めて承はり、驚きながら、先づ／＼お目出度う
兩人　存じ上げまする。
十内　これは／＼御挨拶。拙者事に御案内の通り、當志賀の里にて少々の田畑を持ち、所の支配も致す身なれば、ひま／＼に國學又は和文なぞを講じ、老の歡樂この上はなけれども、跡を繼ぐべき悴もなく、一人の娘を他家へ嫁入らし、男子數多出生いたさば、其うへ一人を貰ひ受け、養育して辻浦の苗字を、讓り度き存念にて、毎度入魂に致す景伯老と申す仁の媒介にて、大津石場の町人平野屋平平と申す方へ嫁入らす約諾。即ち今日祭入りにて事相濟み、唐崎の濱より船二艘にて送りがてら、今晩直ぐに娘をば輿入れの手積もり。その中へこの雪風、どうも船中お氣遣はしう存じ、只今舞殿を呼び迎へに遣したる所、幸ひ貴公達の御入來、奥へお通りあつてお取り持ち賴み存ずる。
篠浪　それは早速お／＼お目出度き儀。よき所へ參り合せ、お相伴仕りませう。
守安　ソレ／＼、御辭退申すは却て失禮、奥へ參つて御酒宴の御だんざ。
篠浪　舞公の三味線で我れ等が今様、隱し藝をお目にかけう。
守安　成る程それはよくござらう。此方も取つて置きの一藝、亂舞猿樂なぞを見知らしませう。
篠浪　ハテ、その猿樂は婚禮の忌詞でござる。
守安　これは粗相、先生、必らず御心におさへ下されな。

十内　ハヽヽヽヽ、なんの〳〵、爰はあんまり端近でござれば、奥の間へお通り下されう。

兩人　然らば先生。

十内　ソレ、女ども、御案内申せ。

朝湖　斯うお出でなされませう。

ト唄になり、四人、奥へ入る。跡合ひ方にて、奥よりお松出て

まつ　旦那樣、これにお出でなされまするか。

十内　オヽ、乳母か、もう歸られさうなものぢやがなア。

まつ　サア、ひよんなお天氣になりました故、今日の天赦日の御祝言が延びましたら、今度の天赦日は六十日目とやら、さりとは、とけないものでござりますなア。

十内　なんの〳〵、婚禮は強ち天赦日に限つた事ではない、天恩月德鬼宿大名母倉なぞは最上の吉日なれば、左程相待たいでも相成る。親みを取り交し聟入りさへ相濟め置けば違變はない。最早大船に乘つた樣に存じて居るがよい。

まつ　イエ〳〵、その船に乘られぬから延びた婚禮。聟樣が美男おやによつて、嫁御樣が船を、イエサ、御寮人樣が大抵辛氣がつてゞはござりませぬ。折角夜の目も寐ずに結ふてあげた髪がひねになつて、わたしも大抵辛氣な事ではござりませぬわいなア。

十内　それだと云つて不時の天災、致し方がないわサ。ナ、併し無理もない、奥が死んでからは、そちが手一つで育て上げた娘たき、その身の年の寄ることは思はず、引延ばす樣に思ふた今度の嫁入り、聟がよい男で、其方もさぞ嬉しからうな。

まつ　イヤモ、嬉しい段ぢやござりませぬ。あんまり嬉しいのでこの二三日は、根ッから飯もたべられませぬ。それはさうと、百助どのを迎ひにおやりなされた聟樣、もうお歸りでありさうなものでござりまするなア。

十内　サレバサ、遲い事ではあるぞ。

まつ　但しは船にお乘りなされたかいなア。

ト向ふを見る。

十内　なんの〳〵、この天氣でどう乘られるもので。程なう歸らるゝであらう。お手前は風呂に氣を附けて置け。

まつ　畏まりました。

十内　行け〳〵。

ト唄になり、お松、奥へ入る。十内、煎茶を焜爐にて沸かすこなし。風の音止んで、雪チラ〳〵降る。玉の

井の唄になる。ト向ふより、源五郎、平平、景伯、元助、久三、皆々雪持ちの傘を持ち、後より百助つき出て

景伯　ハヽア、風が凪いだら大雪になつた。

平平　エヽマア、意地の惡い、雪になりざまはなんぢやい。

百助　兎から云ふうち歸りました。

皆々　オヽ、もう宜いぢや〳〵。

ト捨ぜりふにて本舞臺へ來て、表にて傘をすぼめ、百助と久三に渡す。兩人受取り、皆々うちへ入つて下駄を脱ぐ。十内見て

十内　オヽ、これは皆様、いづれもお歸りか。さぞ御難儀し召されたであらう。

源五　左様でござりまする、怪しからぬお天氣で、甚だ迷惑いたしました。

十内　さうござらうとも〳〵。見れば餘程濡れさつしやつた。これはしたり、餘り取り急いで、合羽を持たせて遣はす事を、とんと失念いたした。さぞ心惡うござらう。

平平　イヤモ、心惡い段ぢやござりませぬ。乘らうと思ふた船には乘られず、嫁の船には猶乘られず、ほんにほんに、ほうげたいが惡うてなる事ぢやござりませぬ。

トぶり〳〵する。十内、平平に目を附ける。源五郎、くッと思ふこなし。景伯、ちやつと咳拂ひして、平平を退け、向ふへ出て

景伯　へヽヽヽ、ヤレ〳〵、怪しからぬお天氣で、實に難澁仕つた。併しお氣を附けられて、下駄傘をお持たせに預かり、歸つて逗留せいと御懇切の仰せ。お詞に甘へ、また御厄介に相成りまする。

十内　ナンノ〳〵、世の譬へにさへ、聟は子と申すではないか。さすれば我が家も同然、必らず遠慮召されずと、御休息なされたがようござる。

平平　それは有り難う存じまする。

トうつかり云ふ。十内、顔を見るゆゑ、ちやつと口を押へ、引ッ込む。十内、こなしあつて

十内　ハヽヽヽ、ナニ、平平どの。

平平　ハツ。

ト景伯、顔で教へて

景伯　ソレ、聟君。

ト源五郎へ知らす。

源五　ハツ〳〵。

十内　爰で一服差上げたく存ずれど、見ればいづれも怪しからぬ濡れやう、さぞ心悪うござらう。斯う召され、風呂も申し附けござれば、直ぐに中戸から座敷へお廻りなされて、せんぐり湯に入らつしやつて、衣服をお取替へなされい。サヽ、聟殿、お通りなされい。
源五　左様なら御免下されう。
十内　ソレ、百助、御案内申せ。
百助　ヘイ〳〵、斯うお出でなされませ。
ト唄になり、百助、下駄を直し、皆々穿いて、上の切戸口へ、目禮して入る。平平ば、一人ぶり〳〵腹の立つこなしにて、目禮せずと入る。十内、後を見て
十内　聟殿はどう見ても人物だが、一人の手代は、ハテ、味な奴なア。
ト合ひ方。
この十内壯年の砌り、何に依らず斯やう致さうと存じ附きたる事、仕遂げぬと云ふ事もなく、兼ねての煩ひは娘が聟がね、思ひ込んだ心の黒星、射當てたと思ふ今度の婚儀、選みに選んだ最上吉日、今日となつて斯やう天氣が不承になり、身の望みを塞げしは、ハテ、氣にかゝる事どもぢやなア。

ト煎茶を呑みながら思案のこなし。此とき鴨居より歌歌留多、四五枚落ちる。十内、これを手に取上げ
コリヤコレ、娘が慰みの歌がるた、この所へ落ちたるは、ハヽアン、鴨居を傳ふ鼠の業か。ハテ、鼠と云ふものは、悪戯な事をするものぢやなア。
ト歌留多を前へばらりと抛つて、茶を呑みながら歌留多を見て、心附きし思ひ入れにて、膝を叩き、空を見て、手を叩く。うちより
まつ　ハイ〳〵。
ト出て
旦那様、お召しになりましたかえ。
十内　オヽ、急用がある、來やれ〳〵。
トお松、氣遣ひのこなしにて、傍へ來て
まつ　急用とは氣遣はしい、何事でござりまするえ。
十内　婚禮の支度をさゝねばならぬ。肴屋も八百屋も呼びにやりやれ〳〵。
まつ　オヽ、旦那様のなんぢやぞいなア。あなたはお氣が狂ひはいたしませぬかえ。
十内　イカサマ、譯を云はねば心得ぬは尤も。その仔細は斯うだワ。

まつ　どうでござりまするえ。
十内　待ちに待つた娘が婚禮、餘儀ない風雪に依つて延引、ありやうはこの十内も、殘念に存じたなれど、束ねをする俺が、左樣申さば、そちや娘がさぞやかましい事であらうと心に祕して、只今までは默つて居つたが、今ふと鼠がこの歌かるたを、あの鴨居から落したゆゑ、晋子其角が茸狩りの句、鼻の先たる歌かるたを、存じ出して、思ひ見れば、嫁は手のもの、聟どのはツイ鼻の先、今日は天赦日、今宵此方にて婚禮を調へ、明朝聟の家へ遣はせばよい事と、サア、爰が其角の骨髓、茸狩りや鼻の先たる歌かるた。ハテ、馬鹿な事に心配をしたわい。
　ト　お松、膝を叩いて
まつ　ほんにさうでござりまするなア。サア、忙しうなつて來た。
十内　イヤ／＼、あはてる事はない。何事も手分けすれば調ふ事。ソレ、女どもを呼べ／＼。
まつ　ソレ、皆の衆、召しますぞや。
女皆　ハイ／＼。
　ト　奥より出て
なんぞ御用でござりまするか。
十内　用どころではない。ソレ、お源、料紙を持て。
けん　畏まりました。
　ト　硯箱を出す。
十内　お朝は八百屋と肴屋を呼びに遣はせ。又お菊は藏へ參つて、道具萬端運ぶがよし。又お福お咲は娘の化粧、お歌は百助をこれへ呼べ／＼。
女皆　畏まりました。
　ト　立たうとするを
十内　待て／＼、乳母、何をうろ／＼、この書附けを百助に持たせ調へにやり、其方萬事指圖を致せ。
まつ　ハイ／＼、畏まりました。サア、銘々に、用をせうぞや。
　ト　一人うろ／＼する。女形皆々も俱にうろ／＼して
女皆　どうしませうぞいなア。
まつ　エヽ、もどかしい、婚禮ぢや／＼。
女皆　エヽ。
　ト　矢張りうろ／＼する。十内見て、我れも立ちながら
十内　エヽ、さりとては、よくあはてる奴ぢや。
　ト　頭を搔く。女形皆々下に居る。この見得、チョンチヨン、靜かに、返し

造り物、三間の間、二重舞臺、一面に塗り骨障子、上手折廻り、下手板塀、これに上雪隠の屋根を見せかけ、昇りかけの松、つくばひ手水鉢、柴垣のあしらひ、すべて雪持ちにて、右二重に源五郎、平平、景伯、火鉢を扣へ居る。雛鶴の唄にて、雪チラ〳〵降らし、道具納まる。

ト三人、空を見て

景伯　扨て、吹き荒れた後が雪になつて、ア、降るワ降るワ。

源五　雪ばかりなれば知れたものぢやが、所詮今夜は去なれまい。これは又つまらぬものぢや。

平平　つまらぬ所か、俺は忌々しうてならぬ。今夜爰に泊つたら、いつそ自暴で、娘に這ふてこまさうかしらん。

景伯　ハテ、やくたいもない。そんな事したらあんぼつ上つて水の泡ぢや。

平平　それぢやと云ふて、あんまり阿呆らしいわい。

ト灰吹きを無性に叩く。

源五　ハテ、氣の短い。もう爰までやりつけたら、手に入つたも同然。急いては事を過つとやら、マア、やわやわとおやりなされませ。

平平　サテ、そのやわ〳〵とやられぬから、氣が苛つのぢや。

ト空を見て

ホン〳〵、時も時とて、又この様な日和もあるものか。エヽ、忌々しい、怪ツ體が惡い。耳がうぢや〳〵するわい。

ト色々踠く。この時奥より、元助、走り出て

元助　申し〳〵、合點の行かぬ事がござりまする。

平平　合點が行かぬとは、なんぢや〳〵。

元助　サア、いま風呂場で聞いて居れば、勝手はお娘の祝言ぢやと云ふて、八百屋が來て居るワ、肴屋が來るワ、藏から道具を運ぶワ、雜返して居りまする。

平平　なんぢや、お娘の祝言ぢやと云ふて、勝手は雜返して居るか。

元助　左様でござりまする。あんまり心得ぬよつて、娘の部屋を覗いて見たら、乳母が云ひまするには、あなたも今夜祝言が出來て本望でござりませうと云ふて居りました。

源景　なんの事ぢや、とんと解らぬ。

ト平平、腹の立つこなしにて

平平　まざ〳〵しい、とんと解らぬも凄まじいわい。

源五　そりやなんの事でござりまする。

平平　なんぢや所か、知れてあるわい〳〵。

源五　知れてあるとは、どうぢやな。

平平　サア、面妖な、跡へ戻りたがると思ふたが、こりやてつきり源五郎が好い男ぢやによつて、お娘めが惚れやがつて、景伯めを取込んで、內證で今夜祝言をさらすのぢやあらうがな。

ト疊を叩いて云ふ。源五郎、景伯、阿呆らしいと無性に笑ふ。平平、猶腹立て

なんぢや、笑ひさらすな、面白ないぞよ。

源五　お嗜みなされませ。そりや何を仰しやりまするぞいな。

平平　何云ふとはどうした。

ト源五郎の胸倉を取る。

源五　こりやどうなされまする。

平平　どうするの斯うするのはない。サア、ありやうに白狀せい〳〵。

源五　これは又迷惑千萬。

平平　イヤ、聞かぬ〳〵。

ト景伯、中へ分け入つて

景伯　旦那、お前氣が狂やァ致しませぬか。

平平　オヽ、戀女房を人に取られ、氣も狂はいでなんとせうぞい。

景伯　ハヽ、笑ふまいと思ふても、可笑しうてお臍に茶が沸く。源五郎とお娘と、內證でもちや〳〵らかなら、表向きで祝言してつまるものか。

平平　ヨウ。

景伯　お前も氣の早い。ようマァ胸に手を置いて、思案して御覽じろ。この景伯が恩のある人を皮にして、源五郎に附いてたまるものか。

平平　イカサマ、云へばそともあるワ。

源五　七度尋ねて人を疑へぢや。とつくりマァ、調べて見たがようござりまする。

平平　サア、俺もさうは思へども、とんと解せぬから、貴樣達を疑ふたのぢや。よう思ふて見りや、俺を侮りさゝうと思ふて、元助めが拵し居つたのぢやな。

元助　滅相な、嘘ぢやござりませぬ、嘘なら覗いて御覽じませ。

平平　ハテ、合點の行かぬ。
　ト襖の間より覗く。
源五　どうぢやな〳〵。
景伯　ほんの事かな。
　ト平平、走つて戻り
平平　サア、大事ぢや〳〵。
源景　大事とはどうでござりまする。
平平　これが大事であるまいか。勝手は右往左往に雑返して居るワ。覗いて見や〳〵。
源五　それはマア、合點の行かぬ。
　ト覗く。
景伯　どうぢやな〳〵。
平平　違やせまいがな。
　ト源五郎、戻り
源五　違ひない〳〵、盃の用意も、島臺も出來てある樣子ぢや。
景伯　ヤア〳〵〳〵。
　ト覗き、戻つて
　サア、事ぢや〳〵。
平平　源五郎、出し拔かれては、この平平の一分が立たぬ、どうせう〳〵。
源五　どうと云ふて、これには譯がござりませう。マア、とくと聞合はしてからの分別がようござりませう。
元助　成る程こりや源五郎どのが云ふのが尤も。私しが聞合はして參りませう。
平平　出かした、行け〳〵。
元助　ハイ〳〵。
　ト奥へ入る。跡に
三人　ハテナア。
　ト同じ樣に手を組む。ト障子のうちにて
十内　イヤ〳〵、聟どのに會ふて、一寸譯を話して來る。
平平　あの聲は舅の聲。
景伯　いま爰へ出て來る樣子。
源五　ナント、事の分るまでは、お前は矢張り手代分。
平平　イヤモ、手代もほろなへがするわい。
　ト十内、うちにて、咳拂ひする。景伯、周章てゝ、平平を下座へやる。合ひ方になり、十内上手より出て
十内　聟殿。
源五　十内さま。
十内　いづれも。

景平　ヘエヽ。

十内　今日はさぞ御退屈にござらう。

ト坐る。皆々、居住ひ直して

源五　あなた樣にも、さぞ御徒然にござりませう。

十内　イヤモウ、拙者なぞは、不斷田舍に住みまする事ゆゑ、左樣にもござらねど、お手前方は繁華の地にお住ひゆゑ、御難澁に思し召さう。扨て、先刻より一寸御案内申す筈の所、取り紛れ延引いたしました。誠にこの度は不思議の奇緣によつて、存じがけなう聟舅の因みを致し、愚拙が大慶これに過ぎず。さるに依つて、今日の婚禮、風雨にて事延引、殘念に存じたなれど、よく存じ見れば、聟殿はこれにござるし、元より今日は日柄もよし、今宵此方にて祝言の儀式を調へ、明日お歸りになればよいと心附き、その用意申し附けてござる。左樣御承知下されい。

ト三人大悶り。平平、景伯に否と云ふこなし。景伯、押へる。源五郎は胸を抱く。十内、これを見て、心得ぬこなしにて

聟殿。

ト源五郎默つて居る。

聟殿、御不承知かな、どうでござるな。

トきつと云ふ。源五郎、ぎつくりして、平平を見る。平平、頭振る。十内、目を附け

心得ぬ各々方の有樣、娘が一世一度の大禮、先折するは殘念ゆゑ、今宵此方にて婚儀の調へんと相談いたすに、一言一句の返答なきは、近頃以て無禮でござらう。

トきつと云ふ。源五郎、もじ〳〵する。平々、堪へ兼ね、ずつと出て

平平　イヤ、舅御樣、こりや聟樣が御尤も。ハイ、一言一句の返答はない筈でござりまする。

十内　ナニ、ないとは。

平平　今晩の祝言は不承知でござりまする。

十内　ヤア。

平平　不承知とも不承知、金輪際から生え拔いた、ハイ、不承知でござりまする。

十内　ムウ、ソリヤ、又どうしてな。

平平　ハヽヽヽヽ、あなたに似合はぬ仰しやりやう、あんまり阿呆らしうござりまするわい。

十内　阿呆らしいとはどうな。

平平　ハイ、阿呆らしうござりまする。どこの世界にか嫁

入りと云ふものは、聟の内でする筈に、神武以來定つた式法。それになんぢやゝら、藪から棒突き出した樣に、嫁の内で祝言さゝうとは、馬鹿々々しうござりまするわい。

十内　ハ、、、、、お身も一圓不通の者と見ゆるわい。大聖人禮を立つる元は四海國家の始まり、その家を治むるには、男女相逢ふて誼みを結ぶ、これ人倫の大禮。俗に稱へて一家と呼ぶは、その睦まじきを生ずるの詞。聟の家も嫁の家も一つに云ふて一家と呼ぶ。夫婦相別れて親子兄弟の道擴がる。改めて婚儀を結べば、平野屋の居宅も此方が茅屋も一家同然、さるに依つて此方に於て婚禮を取結ばうと存じ附いた。

平平　コ、。

十内　某が不調法かな。

平平　サ、それは

十内　サア

兩人　サア／＼／＼

十内　十内が眼は黑い。馬鹿な事は申さぬわい。自體また聟殿より、否とも應とも發言なきうち、附き人の分として推參至極、扣へさつせい。

平平　イヤ、扣へますまい。

十内　ナント。

平平　俺は附き人ぢやない。

十内　ナニ、附き人ぢやないとは。

平平　オヽ、附き人ぢやない。あなづつて貰ふまいぞ。

ト景伯、源五郎、手に汗握つて

源五　これは又どうしたものでござりまする。

ト十内の方を見て、氣を替へ

手代を忘れてどうしたものぢや。

ト色々こなし。

平平　忘れたらなんぢや／＼。

景伯　これは又情ない。手代が我れを忘れてたまるものか。我れを忘れると河口で船ぢやぞ／＼。

ト源五郎、景伯、色々押へ、景伯、十内を見て

へ、、、、、とつと、この者は癇症がござりまして

ト平平むつとするを袖を引いて

サア、癇症が起こりますと、何も彼も申す事に他愛がござりませぬ。この癇症にはお構ひなされず、そこへよろしう聟樣と、御應對なされて下さりませ。この者の儀は眞平御免下さりませう。

十内　イカサマ、日附きから顔立ちから、何とやら心得ぬ所あるは、左様の儀でがなござらう。かれこれ申すうち時刻遅滞いたす。箕殿、どうでござるな。

源五　エ、。

十内　イヤサ、今宵の取結びの儀は如何仕らうな。

ト源五郎、じり／＼舞ふて、景伯へこなし。景伯、頷く。

それは扨てどうでござるな。

景伯　イヤ／＼、十内さま、箕様は生得虚性で眩暈ながち病ひでござる。それゆゑ兎角即席に返答が出來ませぬ。あなたの思し召し、愚老は重々御尤もに存ずれば、篤と申し聞かし、納得をさせまして、追ツつけ御返答申し上げるでござりませう。

十内　ナニ、箕殿は眩暈とな。お手代は癇症、ハテ、病人の多い事ぢや。ハ、、、、。

景伯　ヘ、、、、近頃申し兼ねたが、何か篤と申し含めるうち、暫時この場をお開き下さりませう。

十内　何さま左様承れば無理ならぬ儀、拙者は暫時引取り申さう。

景伯　左様ならば暫らく

十内　景伯老。

景伯　十内さま。

十内　早々返事相待ち申す。

ト唄になり、十内、一間へ入る。三人、跡に、溜め息をついて

源五　ヤレ／＼、宗匠、よう幕切つて下さりました。私しはどうせうかと、生きた心地はござりませなんだ。なんのためにこんな術ない目をする事ぢや、とんと譯が知れませぬ。

景伯　尤も／＼。併し男は侍ひ、此方の返答が悪いと、なか／＼切り兼ねぬ面魂。一寸遅れに後から返事せうとは云ふたもの、、所詮あの體なら、今夜祝言さゝにや置き居らぬわえ。

平平　滅相な、祝言は構はぬが、その後の寝間を人に渡しては詰らぬ。そればつかりをさすまいと、手代にまでなつて附いて來て、難行苦行こけの行をするのぢや。そればつかりは不承知々々々。

源五　サア、それぢやに依つて否ぢやと云ふものを、無理矢理に往生づくめで連れて來て、ほんにあんまり貪慾と云ふものぢや。

景伯　サア、我れらもこんな事であらうと思ふたが、六間闇口に搦められて、今では雪の最明寺、後へも先へも行かれぬ〳〵。
平平　ぢやて、此くらゐ元入れしたもの、これなりにするのも殘念。二人とも、もう一分別して見てくれ。
源五　私しは聟入りまでの約束でござりますれば、この後はもう御免でござりまする。
景伯　御免も千めんもない、これからもう逃げて去ぬるより外、思案はない。
　　ト内にて足音する。
南無三、はや返事を聞きに來たさうな。世なをし世なをし。
　　ト三人、うろ〳〵する。元助、出て
元助　サア、事ぢや〳〵。
平平　事ぢや〳〵とは
源景　どうぢや〳〵。
元助　氣取りました〳〵。
三人　氣取つたとはどうぢや〳〵。
元助　サア、今舅が入つて云ふを聞けば、聞き合せの樣子では、聟の身元は慥かなものに相違なけれど、今夜娘と祝言さゝうと云へば、轉倒の樣子と云ひ、初手から心得ぬ手代の有樣、聟は虚性者と、てにはを合す仲人が振舞ひ、どうもその意を得ぬ。よつて今にも祝言せうと云へばよし、どぎまぎと今宵を延ばせば、企みのあるに違ひはない。四人ともに引ッくゝり、代官所へ連れて行くと云ふて居りました。
三人　ヤア、やくたいぢや〳〵。
　　ト三人、愕して、震ふ。
元助　モシ〳〵、震ふてござつては濟みませぬ。どうなと分別をなされませ。
平平　それぢやと云ふて、斯うなつて分別も出るものか。ナウ、景伯。
景伯　さうとも〳〵、この上の思案は、一番源五郎を賴まにやならぬ。
平平　源公、思案を賴む〳〵。
源五　わたしぢやと云ふて致し方はござりませねど、胸を定めにやなりませぬ。マア〳〵、お下にござりませ。
平平　オット〳〵、宗匠も元助も、下に居い〳〵。
　　ト三人、下に居て
サア、下に居たが、思案はどうぢやな。

源五 サア、思案と云ふは、濡れぬ先こそ露をも厭へ、この事が露顯いたせば、代官所の沙汰になり、一同に面皮をかく事、ぢやと云ふて此まゝに、逃げても去なれず。この源五郎が納得して、今夜祝言するより外、思案はござりませぬ。

平平 どつこい、さうは立會はれぬ。祝言の後は直ぐに新枕、お娘をばつちりと云はさうでな。

ト源五郎、むつとして、平平の胸づくしを取つて

源五 平平さま。

平平 なんぢや。

源五 お前はなア。

ト合ひ方きつぱり。

この源五郎も今でこそ此ざまなり、その以前は武士の胤。こんな事で公儀へ出て、面皮を捨てるが口惜しさに、もう／＼針の莚に坐るやうな、祝言を請負ひ、心にあらぬ女子と一つ床に寐るとても、燈火を明らかにして、坐つた膝は崩すまいと、心の誓ひ。今夜一夜さゝへ過ごしたら、お前の望みも叶ふ道理と、彼れこれを思ひ合して定めた思案。源五郎は恥を知つて居りまする。それをお前が疑ふとは、曲がない曲がない。

ト泣いて云ふ。景伯、横手を打つて

景平 けうとい／＼、源五郎見上げた。その鮮かな料簡を聞いて、旦那も得心であらうがな。

ト平平、ぐじ／＼して

平平 サア、得心は得心ぢやけれど、まだ少々氣の濟まぬ所もある。

元助 これは又旦那、どうでござりまする。私しが聞いてさへ、解つてある源五郎どのゝ潔白。此うへ疑ふは惡い。ナア、先生樣。

景伯 さうとも／＼、源五郎の請け人には我れらがなりまする。

平平 そんなら景伯老、貴樣きつと受合ひおぢやな。

景伯 受合ひ／＼、證文でも書いて上げまするワ。

平平 さう云やマア、一分別して見ようかい。

景伯 ヤレ、嬉しや。どうやら斯うやら納まりさうな、雲が出たぞ。

あさ ハイ／＼、畏まりました。

ト障子のうちより、お朝、お菊、お源、出て

先生樣、お返事はどうでござりまする。

げん 聟樣は御得心で

三人　ござりますかえ。

景伯　得心の段か、聞きに來やうが遲い〳〵。あなたの方さへよくば、此方は何時なりと。

あさ　そんならお支度はこなたでさせますよつて、聟樣を御同道申せと仰せ附けられました。

三人　聟樣、サア、お出でなされませいなア。

景伯　サア、急になつて來たワ。御苦勞乍ら、ソレ、早う早う。

源五　そんならもう行かにやならぬか。辛い事ぢや。

きく　辛い事とはどうでござりまする。嫁御樣も彈み切つてお待ち兼ねぢや。

三人　サア〳〵、お出でなされませ〳〵。

ト尻込みする源五郎を無理に連れて入る。平平、恨めしさうに見送り、手を組み、投げ首するを見て

景伯　ヤレ、情ない、矢ツ張りかいな。

元助　今得心であつたものが、そりやマア一體

兩人　どうでござりまするな。

平平　サア、大概得心ぢやあつたけれど、今腰元が云ふた事、貴樣等はなんと聞いた。嫁が彈み切つて待ち兼ねてゐるとは、この胸がくら〳〵燃えるやうなわい。

景伯　なんぼう嫁御が彈み切つても、聟の心が鐵壁なれば、そこに於て氣遣ひなしぢや。併し誠心許なう思し召すなら、後に人が鎭まつてから、源五郎が割り膝でゐるかゐぬかを、見屆けてお出でなされい。

平平　いかいお世話ぢや、それに恐かがあらうかい。

景伯　サア、そんならそれほど慥かな事はない。マア、それでよいにして、扨て上げられたり下られたり、ほつこりと草臥れた。ちと飼ひ水がしたいものぢや。元助、勝手へ行て、なんぞこまへて來い〳〵。

元助　オツト、合點ぢや、呑込んだ。

ト入る。

平平　時に昨夜はえらう馳走しをつたが、今夜はとんと構ひ居らぬ。

景伯　その筈ぢや。聟と一緒に祝言が降つて湧いて、勝手廻りは亂騷ぎぢや。

ト元助、茶碗と樽と硯蓋を持ち出て

元助　料理人は切れた奴ぢやなア。サア、おあがりなされませ。

景伯　こいつはえらい。サア〳〵、旦那。

ト平平、茶碗を取つて

平平　白湯ぢや、注げ〳〵。

トこれより酒樽を持つて、元助注ぐ。捨ぜりふにて、酒を呑む。うちにて高砂の謡ひになる。

景伯　ありやもう祝言の謡ひ。

ト平平、きつとなる。景伯、元助、留めるを、振切り行かうとすると、一寸立廻りあつて、きつと留めて

コレ、三々九度から祝儀の雑煮。

元助　配膳あつて色直し。

景伯　僅の盃濟んでお性根ぢや。

元助　マア、人音の鎮まるまでは

景伯　潜んでゐるが

兩人　奥の手〳〵。

ト平平、おこづくを、兩人よろしく押へる。平平、きつと見得。雉子の獨吟になり、チョン〳〵、返し

造り物、平舞臺、見附け一面の襖、上手大床の間、取合せよく掛け物、置き物、床柱に花生け、花生けてあり、この續き袋棚、違ひ棚、下手折廻り障子屋體、上手に源五郎、着附け麻上下、一腰差し、聟の形。下手にお瀧、白小袖、裲襠、帽子、嫁の形。正面に十内、着附け上下、大小にて坐り、眞中に大島臺、熨斗、昆布、船盃、葉杯、置ぶな、三寶に飾りある。お源、お朝、着附け、裲襠、長柄、くはえを持ち、扣へ居る。蝶花形の飾りあり、但の本酌はお瀧の傍、くはえは遙かの下座に扣へる。お菊、お松、お福は、着附け、裲襠、待女郎にて並び居る。土器を三枚重ねたる三寶、お瀧の傍にある。お瀧、杯を持つて居る。お源、本酌にて注ぎかけ居る。お松一人傍に扣へ居る。この見得、祝儀の謡ひにて、道具納まる。

トお瀧、土器にて三度呑む。呑む度事に長柄をくわえる。ト、この土器を下へ入れ、上の土器を取り、三度呑み、源五郎へ差す。お松引渡す。お源、附いて行く。源五郎、右の通りにして、又お瀧へ差す。又源五郎へ差す。この趣き、立合ひにて、程よく盃納め

十内　先づ盃も納まつて目出度い〳〵。舅が祝儀仕らう。

ト目出度き小謡ひを謡ひ

ハ、、、、サ、、雑煮々々。

ト待ち女郎皆々立つて、雜煮の膳を運ぶ。うちにて謠ひになる。チヨン／＼、返し

造り物、もとの道具に戻る。

ト平平、障子屋體に凭れ、手を組み、謡面作つてゐる。景伯、元助は、酒に醉ひ倒れて寢て居る。獨吟にて、道具納まる。平平、よろしくあつて

平平　扨て祝言と云ふものは、暇の入るものぢや。今雜煮を引いて配膳の樣子ぢやが、それから閨はもう直ぐか知らん。

ト一寸思案して

イヤ／＼、元助めが色直しとやら何とやら、怪體な譯の知れぬ事吐かしたが、つい仕舞ふ事か暇の入る事か、婚禮に當りつけん依つて譯が知れぬ。さうぢや。元助めに聞いて見やう。

ト兩人を見て

扨ても／＼、二人とも寢ざま惡う寢居つたワ。元助元助、コリヤ、元助。

ト起こす。他愛なう寢てゐる。

これは怪しからぬ、食ひどれて他愛がない。元助元助、コリヤ、ヤイ、元助。

元助　娘はよつぽど美しい。

平平　ヤ、なんぢや、娘は美しい。サア、美しいよつて此やうに頭を痛めるのぢやワ。ヤイ、一寸問ひたい事がある、起きてくれ、元助々々、こりやどうぢや。

ト覗く。元助、鼾かく。

矢ッ張りぐう／＼寢てけつかる。エヽ、扨ては今の寢言ぢやな。ハヽ、あんまり阿呆らしい。こんな奴に構はずと、坊主めに問はう。

ト傍へ來る。景伯、鼾かく。

こいつも同斷ぢや。景伯老々々々。エヽ、臭い、えらうどち食ふた。

ト飛び退き、我が鼻を撮み乍ら

宗匠々々、コリヤ、宗匠、起きんかいやい。

トいさぶる。

景伯　ムニヤ／＼／＼。

ト鼾かく。

平平　こいつも一向他愛がないワ。矢ッ張り元助。

ト元助の傍へ寄る。足にて蹴る。元助、平平の足を突き放し、シヤンと起きる。平平、見て

元助々々。

ト元助ころりと寢る。

扨ではうつゝか。なんの事ぢや。

トげんなりする。この時百助、丸盆にたんぽ鉢、肴を持ち出て

百助　お手代衆、定めてお怠屈にござらう。寒い時分ぢやこのたんぽで燗をして、この鉢肴でくつゝり上がれ。

平平　エ、、穢らはしい、そこ所か。

百助　悪い受けぢやな。こりや何か、雜用なしに理屈がよいのか。ハ、ア、祝儀の金で柴屋町へでもお越しの氣かな。成るほど理屈ぢや。かゝる目出度い悦び續き、祝儀の事ならお手代様、我れらがぐつと承知承知。

ト平平、これに構はず思案して

平平　彼奴は元來正直者、最前の樣に誓言立てしたからは、嫁に逢ふても俺への面晴れ、よもぱつちりでは割りはせまい。

百助　そりや、なんの事ぢや。

平平　と云ふて又稻荷に油揚げ、猫に鰹、若し疵者にしはせまいか。ア、、さりとては辛氣な事ぢや。

百助　エ、、何を云ふぞいの。油揚げや鰹で呑めるものぢやない。肴はぐつと張込んで、若狭の鹽燒き、蛸のふくら煮、干魚の吸ひ物も追つゝけ來るぞ。

ト前に鉢肴を置く。

平平　イヤモ、どの樣な馳走でも、肝心の事が片附かにや、胸に痞へて咽喉へ通らぬ。

百助　肝心の事とは、ア、、聞こえた、聟君のお立ちの事か。

平平　サア、そのお立ちが提灯で餅、堪えてさへ居りやよけれど、ひよつと又立ちなされうかと思へば、氣がゝりでならんのぢや。

百助　イヤ〳〵、そりや決して御案じ御無用。お立ち所か、祝言の後は直ぐに比翼の床入り。しつぽり雪の降る晩に、雪の肌えの姫御寮、蒲團の上で雪こかし、膝で突いたり手でいろたり、解けてぴつたり抱き附き、朝日出るまでお歸りあるまい

平平　ア、、情ない雪盡し、じく〳〵濡らしてたまるものか。こりやもう斯うしては居られぬわえ。

ト驅け込まうとする。百助、留めて

百助　これは又悪い合點。聟様がお泊りなさると、貴公もゆつくり寢られると云ふもの。蒲團も枕も持つて來う。

寢酒をぐつと熱燗で、コレ、申し、よう寢やんせ。
ト背を叩く。平平、ぐんにやりとなる。唄になり、百助、奥へ入る。跡に平平、地團駄踏んで

平平　サア〳〵、やくたいぢや。相談相手の二人は熟柿の樣に醉やがつて、當てにはならず。もう此うへは破れかぶれ、ぶちまけて仕舞はにやならぬわい。
ト血相して奥へ行かうとする。上手より稻見平馬、出かけ居て、この時前へ出て

平馬　小雀が弟、平野屋平平。
トこれにて平平、振り返り

平平　お前は稻見平馬さま。
ト云ひ乍ら、奥を見込みゐる。

平馬　先刻一寸見受けたが、今日の聟入りはお手前と思ひの外、餘人の若者。これには何か仔細があらうと、詞もかけず扣へて居つた。

平平　イヤモ、これに就いては、段々の謂はれのある事。むやくしうて〳〵なる事ぢやない。
ト矢張り奥を見ながら云ふ。

平馬　この家の主十内が召使ひのうち、小田彈正が隱れてござる、吳羽家の九重姬、匿ふてあると慥かな噂。篤と實否を糺さんため、門弟となつて入込む某。眞柴家の權威を以て、家來を引連れ召捕り歸れとある、彈正さまのお賴み。

平平　それは近頃御苦勞〳〵。
ト矢張り奥を見て云ふ。

平馬　それにつけても吳羽家より、結納の印に用ゆべき、春曙抄の一卷、其方へ預けあると聞く。今に其方、手放しはすまい。

平平　サア、その春曙抄の一卷は、爰の主がえらい執心。娘が欲しさに賄つてのけた。

平馬　スリヤ、アノ、大切の一品を、この家のうちへ。

平平　やつたはやつたがそれは贋物、誠の物は肌身離さずこれに在はすぢや。
ト懷より一卷を出して見せる。

平馬　ホヽ、天晴れ、惡い事には拔け目のない其方。

平平　兎にも角にも、案じらるゝは娘が事。

平馬　腰元のお咲と云ふが、疑ひなき九重姬。
ト始終、平馬は上手、平平は奥を見込みながら

平平　これから奥へ踏ん込んで、何もかもぶちまいて

平馬　今一應實否を糺し、愈々姬に極らば

平平　委細構はず取つて押へ、我れこそ誠の平平と名乘り
平馬　引ッ立て歸つて、彈正さまの闇の花。
平平　源五郎めに鼻あかせ
平馬　十内は三寸縄。
平平　味見は我れら。
平馬　褒美は十分。
平平　やつちやして來い。
平馬　手柄はこの時。
平平　座敷へ踏ン込み
平馬　勝手へ廻つて
平平　行かんせ。
平馬　さうぢや。
ト別々の思案にて、平馬は上手へ、平平は下手へ入る
景伯、頭を上げて
景伯　ア、、くつさみ。オ、、寒や。とろ〳〵とやつたら
どうも云へぬ鹽梅ぢや。誰れぞゐぬか、煎茶一つ下さら
んかいの。誰れもゐぬか〳〵。ア、、醉醒めかして寒う
なつた。
ト寒さうに邊りを見廻す。元助、帯解け廣げの樣にな
つて寢てゐる。これを見て

オ、、あるぞ〳〵。蒲團代りは番頭の着物、枕は直ぐに
この體。
ト云ひ乍ら、元助の上着を取つて、すつぽり被ぎ
扨てまア、大分醉ひは醒めたが、平旦に頼まれたもより
草で、一向やくたい。ア、、まゝよ、所詮今更跪いても
仕方がないワ。こんな折には茶の代り
トたんぽにて酒をとつかけ〳〵引受けて
ア、、しんこく〳〵。盧生ならねど邯鄲の、枕代りは番
頭の體。ドリヤ、面白い夢でも見ようか。
ト寢轉び、着物を被り、元助の上へ頭を載せる。元助
寢返る。景伯、べたりとへたる。元助起きて身震ひす
る。謠ひ
〽假寐の夢を見るやと、邯鄲の枕に臥しにけり〳〵。
ト、チョン〳〵にて、返し
造り物、二間の敷立の屋體、上下とも落間、但し上
手に雪隱、これに人登る事あり、後、木賊塀、手水
鉢のあしらひ、石二重に遠州行燈を置く。爰に源五
郎、矢張り上下にて、立ちかけ居るを、お朝、お菊
お咲、お福、お松、引留めて居る見得。本釣り鐘、

合ひ方にて、道具納まる。
あさ　サア、これから御寢所を中の間へ敷きまする所
きく　其やうにそわ／＼せずと、爰へお坐り
皆々　遊ばせいなア。
源五　イエ／＼、坐つてはゐられませぬ。お座敷の勝手は知れず、このマア平平さまは、どこに居られる知らん。
あさ　アヽ、何を仰しやるやら、平平さまはあなたぢやわいなア。
源五　ヤア。
ト一寸思案して
エヽ、さりとては惡い聞きやう。この平平が附添ひの、手代どもは、どこに居りますと申すのぢや。
さき　附添ひのお衆は、俳諧の先生と、次の間にお出でなされます。御用あらば呼びませうかえ。
源五　いかにも用がござる。しかも大事の用。次の間とはどこぢや、案内を頼みまする。
あさ　イエ、御用なら私しらが、お取次ぎ申しますわいなア。
源五　イエ／＼、取次ぎでは間に合はぬ、なんでも直きに
ト行かうとするを、皆々取卷き
きく　御寢所へお入り遊ばし、色直しの濟むまでは
女皆　どこへもやらぬ／＼。
源五　その色直しがこつちの禁物。ハテ、退かつしやれ。
皆々　お待ちなされませ。
ト立塞がる。これを退けんとする。この模樣のうち、お菊行燈の火を吹き消す。皆々源五郎を突き退け、奧へ走り入る。源五郎、恟り
源五　アヽ、明しを消したか、コレ、待たつしやれ。
ト探り寄つて明けんとする、あちらより襖を持つて明けさゝぬ心。始終合ひ方。奧よりお松、お瀧の恥かしさうにする手を引き、そつと出て、お松囁き、傍へ行けと云ふこなし。お瀧、それでもと、恥かしがる思ひ入れ。源五郎、これを知らずに、色々こなしあつて
それは又いかなる責め苦に遭ふ事ぢや。斯う心遣ひをするとは知らず、定めて又やかましう云ふて居られう。アア、なんとせう、是非がない、今宵一夜は一緒に寐るとても、行ひの潔白は、天神地祇こそ御覽あらう。アヽ、コレ、明しを呼んだら又女子衆が出て、なんの彼のと云ふも氣の毒。エヽ、コレ、ちつとも早う夜が明けて、この苦患をどうぞ助かりたいものぢやが。

ト此せりふのうち、お瀧を下手へ坐らせ、默つて居いと囁くこなしあろ。この時うちより

女皆　三國一の聟取り濟ました、シヤン〳〵のシヤン。

ト手を打つ。源五郎、悔り、飛退き

源五　ア、コレ、悔りするわい。

トお松、傍へ來て

まつ　申し〳〵、聟樣へ申し上げまする。お次の間に御寢所も敷きましたよつて、ちやつとあなたにもお入りなされて、色直しのお盃やら、何やらかやら早うして上げて下さりませいなア。

源五　イヤモウ、それには及びませぬ。火は消える、勝手は存ぜず、いつその事これにゐるが、私しの勝手でござりまする。

まつ　オヽ、モ、聟樣の何仰しやるぞいなア。祝言の晩は寢るものとしたもの。なんの遠慮があるものか。此方の御寮人樣は仕合せ者、こんなマァよい殿御をお持ちなさると云ふ樣な、果報な事があるものぢやござりません。同じ人でも仲好かんはあの手代さんの相ぢや。いかん癖に頭高うて、そして女子を見くさる目のその厭らしさ。緣ならあんな男かぶる女子もあらうが、そりやもうよくよくの因果人ぢや。

トこれにて源五郎、ぎつくりのこなし。

イヤモウ、話しても虫酸が走る樣な。モシ、ちやつとお寢間へお入りなされて、嫁御のお盃をお上がりなされませいなア。

トお瀧、愈々嬉しきこなし。

源五　イヤモウ、お赦し下さりませ。私しは御酒機嫌ぢやでござりませぬ。

まつ　なんぢや、御酒機嫌ぢやない、オヽ、さうぢや、あなたは御酒機嫌ぢやない筈。大分夜も更けたに依つて、嘸お氣が急くでござりませう。そんなら御酒は強ひますまい。

ト思ひ入れあつて、外す方がよいと云ふこなしあつて

モシ、さう思し召すなら、ちつとも早う、お寢間でしつぽり。

トお瀧にそつと囁き

シタガ、モシ、聟樣へ云ふて置かねばならぬ、肝心の事がある。モシあのお子はまだ手入らずござります依つて、どうぞそこへあしらうて、ホヽヽヽヽ、私とした事が、さつきから余ッ程呑んで、管卷くさうな。御用があるな

ら、何時でもお呼びなされませ。
源五　そんならもう休まつしやるか。
まつ　あなたもお休みなされませや。
源五　御苦勞でござりました。
まつ　左樣なら
源五　明朝
まつ　お目にかゝりませう。
卜お瀧に囁き、奥へ入り、直ぐに手燭の上へ竹花生けを被せ、持ち出て、そつと源五郎の前に置き、お瀧に又囁き、早う床へ連れて行けとする。お瀧、それでもと云ふこなし。お松、まゝよと奥へ入る。此うち源五郎、立つて見たり坐つて見たり、色々あつて、右の花生けの手燭に行き當る。卜こけて、明り射す。お瀧と顏見合せ、ハッと思ふこなしあつて、立上がる。お瀧直ぐに裾を持つて
たき　ア、、申し。
卜源五郎、ぎつくり。和らかな合ひ方。お瀧こなしあつて
親々のお許しうけて、結び合した妹背の御緣。斯う差向ひになりましては、誰れに遠慮も要る事か。今宵は夜とも平々さま。
卜云ひさし、恥かしきこなしにて、袖を顏へ當てる。源五郎、手燭を取つて、思ひ入れあつて
源五　見れば見る程よい御器量。祝言までしたからは、嫁に取る身は大きな果報。何を云ふても名代で、壁越しの天の川。わたしは矢ッ張り勝手へ行て、臥りたうござりまする。
卜邊りを見て、次へ立ちたき心。此まへより平々、上手の雪隱の上へ登り、見下してゐる。
たき　其やうに仰しやるからは、不束な私しゆゑ。お嫌ひ遊ばすのでござりませう。
源五　ア、、なんのマアお前、さら／＼嫌ひは致しませぬが、聟君の本體はあちらの間に、イヤサ、この平々が斯うして居りましては、どうぞしたであらうと、覺えもない不義の取り沙汰、得てはなんぼも云ひたがるもの。人の口には戶が立てられませぬ。
たき　何を仰しやるやら、御緣を結べば世間晴れて、あなたは夫、わたしは妻。
源五　イヤ、妻とは云はれますまい。
たき　そりや又なぜでござりまするえ。

源五　ハテ、今日はマア聟入りなれば、始めより本格の約諾。此方のうちへ迎へ取り、新枕を並べた上で、夫なり妻なりと、事改めて世間へ吹聽。ナント、左樣ではござりませぬか。

たき　イエ〳〵、そりやお約束が違ひまする。最前それゆゑ色々と、父上が仰しやつて、舅の家で祝言は、あなたのお家も同じ事、御得心遊ばした事ではないか。どうでお心には染むまいが、御機嫌直して平平さま、どうぞ夫婦におなりなされて下さりませいなア。

ト取り附き云ふ。源五郎、思ひ入れあつて

源五　親の許した緣定め、聟と名乘るは平野屋平平、我が俗性を割つては云はねど、深い願ひのある身なれば、この儀はお免し下されい。

たき　スリヤ、どのやうに申しても。ハア、。

ト大泣きに泣き落す。此ときお松、奥より出て

まつ　申し、まだお休みなされぬかいなア。サア、申し、よい加減に氣を揉まして、御寢なれ〳〵。

ト源五郎の手を取る。

源五　イエ〳〵、私しは寢る事は嫌ひでござりまする。

まつ　これは又果てぬ事、そんならマア、こちらから片附けう。

トお瀧の傍へ來る、お瀧、泣いてゐる。

サア、マア、お前から先へ寢床へ行て、御寢なれ御寢なれ。

ト手を取る。お瀧、かむり振り、泣いて居る

エ、、なんぢやぞいなア、シク〳〵泣いて。

トふと思ひ入れあつて

オ、、此お子も嗜みなされ。どうで初手は恥かしいもんぢやと、云ふ聞かして置くのに、さうしてマア、寢間へも行かずと

ト云ひ乍ら、お瀧の體と源五郎の體を見て、まだぢやせぬとの思ひ入れあつて

さうも見えぬな。コリヤモウ、兩方から負惜しみ同士で埒が明かぬのぢやな。女夫の仲に負惜しみは要らぬ事。サア〳〵、ちやつと中の間の寢所へ。

ト又源五郎に向ひ

そんならサア、早う行て御寢なれ。よい〳〵、わたしが帶解きませうか。

ト源五郎、減相なと云ふこなし。

帶解く事はお厭かえ。そんならマア、此お上下など解い

て。

ト無理に上下を取らして

サア〳〵、ちやつと。

トお瀧に連れて行けとする。お瀧は少々拗れた心にて

たき　それでもあなたが

まつ　オヽ、辛氣、サア〳〵、早う、平平さま。

源五　サア、その平平が大きな間違ひ。

まつ　エ。

源五　これには段々。

まつ　サア、その譯は床のうち、積もる睦言しつぽりと。

ト無理にお瀧に抱き附かして

お話しを遊ばせいなア。

トこにて双方抱き附く。この間始終、平平上より見てゐて、此とき雪隱の家根より、ばつたり落ちて、目を廻す。皆々、吃り、飛退き、源五郎、下りて、直ぐに活を入れる。平平、ウンと氣が附き

平平　間男見附けた。

ト源五郎へかゝるを、振切る。お松、隔てる。お瀧、俯向いて、震ふてゐる。

まつ　大事の彦様をどうするのぢや。

源五　聊爾なされな、言ひ譯あるぞ。

平平　何をおのれ源五郎め、どうしてくれうぞ。

ト又行くを、お松、隔て、支へ乍ら

まつ　コレ、お手代、酒に醉ふての譫言か。狼藉しやると免さぬぞえ。

平平　ぬかしやアがるな、十內が花聟、平野平平は俺ぢやわい。

たき　エイ〳〵〳〵、そんならあなたは。

源五　餅屋源五郎と云ふ者でござりまする。

平平　約束違へた大騙り、取持ちひろぐと料簡せぬぞよ。

まつ　ムウ、スリヤ、此お人は聟殿であつたか、ホイ。

平平　サア、斯う云ひ出すからは、娘は俺が抱いて寝る。

まつ　アヽ、滅相もない。

ト震ふお瀧を圍ふ。平平、源五郎を引附け

平平　うぬ、源五郎め、よう生物を通しさらしたな。

源五　アヽ、疑ひ深い、不義の仕業は微塵毛頭。

平平　ないとは云はさぬ。坐つた膝は崩すまいとぬかして置いて、上下解いたがむか〳〵するわい。

源五　サア、そりやいんま。

トお松の方を見る。

平平　うぬ、どうしたら腹が癒えう。

ト又かゝるを、源五郎、一寸支へる。お松、お瀧、双方より留めて

まつ　それは短氣な。

ト程よく源五郎を庇ふ。

平平　ヤア〳〵、留めた〳〵、大騙りめが。

トきつとなる。この見得、チョン〳〵、返し元の門口附きの道具に戻ると、この眞中に十内、刀を構へ、お咲を後に圍ひ居る。上手に平馬、大小になり、反打つてゐる。下手に捕手大勢、取卷き居るを、百助、留めて居る、この見得、ばた〳〵にて、道具納まる。

百助　これは狼藉な、マア、待たつしやりませ。

平馬　辻浦十内へ眞柴大領より御上意。

捕手　動くな。

十内　心得ぬ、この十内へ上意とはな。

百助　シテ、その仔細はいかゞでござるな。

平馬　某は眞柴家の陪臣、稻見平馬と云ふ者。斯く入り込みしは吳石家の息女、九重姫を詮議のため。

十内　九重姫は眞柴久次公の御舍弟、金吾久秋さまへ御許嫁と聞き及ぶ。

百助　そのお姫樣がこの所へ匿ひあると、疑ふての狼藉かな。

平馬　オヽ、サ、金吾久秋いづくともなく出國ありし、跡を慕ふて逃げ出した、九重姫は遁れぬ同罪。その女が懷中より落ちたる、守りのうちに記せし本名。

ト守りを出す。

さき　ヤア、その守りは

平馬　十内、ナント、これでも諍ふか。

十内　サア、その儀は。

平馬　尋常に姫を渡すか。

十内　サア

平馬　云ひ分あるか。

兩人　サア〳〵〳〵

平馬　面倒な。ソレ、引ッ立てい。

百助　待つた、待たつしやりませ。

トよろしく支へる。

平馬　下郞め、なぜ妨ぐる。

百助　イヤ、妨げはいたしませぬ。假令そのお姫樣にもせ

よ、窮鳥懷に入る時は、獵師すらこれを赦す。此ままに渡しては、辻浦の苗字の疵になります。それとても御用捨なくば、郷士と云へど武士も同然、見やう見眞似の百助が、この鐵こぶしの續かんだけ、お相手になりまするぞ。

十内　百助、扣へい。平馬どの、先づお待ち下されい。吳羽家は我が故主、去春眞柴の公達久秋公、お行くへ知れず、跡を慕ふてお出ましありし姫君を、計らず我が家に伴ひ、腰元と御身をやつし、お匿ひ申せしが、實にや紅は園に植ゑて隱れない、御身の行く末。ハテ、是非もない。

　ト こなし。九重、向ふへ出て坐り

九重　辻浦十内が故主の緣とて、情の介抱忘れは置かぬ。嬉しうござるぞや。久秋さまのお行くへ知れねば、とてもこの身は覺悟の一命、

百助　ア、申し、お姬樣、あなたがお果て遊ばしては、旦那十内さまのお心盡しも水の泡。只何事もお命全う。

平馬　粗忽あつては役目の落度。繩打つて差出すか、首打つて渡すとも、二つの返答。さもなくば十內が家名、從類ともに斷絶だぞ。

十内　ム、ウ。

　ト當惑の體。この時ばた〳〵にて、源五郎着附け破れし體、平平に引立てられ、お松、これを支へ乍ら、お瀧よろしく

平平　サア、うせう〳〵。

　ト景伯、留め乍ら、ばら〳〵と出て

滿座の中で不義の成敗。動きやがるな。

　ト源五郎を突き据ゑる。

たき　なんのあなたに誤りない事。

　ト寄らうとするを、景伯、分けて入り

景伯　さりとは御息女の知らぬ事ぢや。平平さまに賴まれながら、源五郎、惡いぞよ〳〵。

まつ　景伯さん、變つた五音。そんなら初めから云ひ合せた事かな。

百助　間違ふた譯でもあつてか。御寮人樣、お乳母殿。こりやマアどうでござりまする。

たき　サア、詳しい譯は分らねど

まつ　聟樣と云ふは贋物で、あの手代衆が平平さまぢやといな。

百助　なんの事ぢや、テントごて〳〵分らぬわい。

ト此うち十内、これを聞いて思ひ入れ。平馬、相引にかかる。

平平　不義の證據はこの通り、上下から帶まで解いた間男め。サア、有りていにぬかさぬかいやい。

ト源五郎を蹴据ゑ、景伯が胸づくしを取つて

ヤイ、俳諧師のど坊主め、こりや何か、源五郎と一つになり、この平平をやり事にかけたのか。望んだ娘は疵物になつたわい／＼。

景伯　道理ぢや／＼。アヽ、氣を鎭めたがよいわいの。

ト平平を宥め、源五郎が胸倉を取つて

ヤイ源五郎、見合ひはもとより、聟入りまでが名代で、俄かになつた今夜の祝言、假令寢床へ入るとても、粗相はないと思ふたに、辷り込んだ井戸の端、茶碗を無慘に割つたかいやい／＼。

平平　エヽ、生ぬるい、退かつしやれ。四も五もない間男は、重ねて置いて四つにする。マア、おのれから覺悟ひろげ。

ト景伯を引退け、源五郎に反打つてかゝる。源五郎、留めて

源五　サヽ、腹立ちは尤もなれど、この身に不義の覺えはない。エヽ、さりとては、危ないと云ふに。

ト刀を引取り、突き放す。平平、ひよろ／＼となる。

無成敗にはえゝなりますまい。

平平　ムウ。

ト此うち十内、源五郎の手のうちに心を附ける思ひ入れ。平馬、捕繩を出し、繩捌きして

平馬　サア、十内、九重姫を渡さずば、先づ其方をくゝし上げて糺命する。

捕手　腕廻せ。

ト十内目がけ行く。源五郎、これにて悔りのこなしにて、九重姫を見ろ。百助は捕手を支へて

百助　イヤ、さうはこの百助がさすまいわい。

トきつとなる。皆々、取卷き

平皆　コリヤ、手向ひか。

十内　平馬どのへ十内が、一つのお願ひ。

平馬　ナニ、願ひとは。

十内　お聞きの通り娘が縁談、善惡邪正を分つうち、九重姫樣のお身の上、此まゝ貴殿へ差出すとも、首打つて差出すか、又匿ひし科とあつて、十内もろとも縛らるゝとも、とくと思案の一決するまで、暫時御猶豫願ひ上げま

する。
平馬　猶豫なり難い所なれど、平平が緣談の間違ひと云ひ、暫時のゆとり致しくれう。
十内　スリヤ、お聞き屆け下さりませうとな。
平馬　それとても長うはならぬ、七ツの鐘の鳴るまで、勝手へ行て相待ちくれう。
九重　スリヤ、自らが事を七ツまで
平馬　如何にも。コリヤ、家來ども、九重姫をふけらさぬやう、出口々々に張り番いたせ。
捕手　ハツ、畏まつてござりまする。
十内　ソレ、女ども、姫君を奧の間へお伴ひ申せ。
腰元　ハツ、畏まりました。
　トお松、お福、出て
　サア、お越し遊ばしませう。
　ト唄になり、お先にお松お福つき、平馬、奧へ入る。捕手皆々、橋がゝりへ入る。平平、景伯、居直り
平平　十内どの、間違ひはお聞きの通り。愈々聟はこの平平。
景伯　橋渡しはこの景伯、今更よもや違背はなるまい。
兩人　御息女を申し受けますぞや。

　ト十内、默り居る。お瀧、お松と顏見合せ、前へ出て
たき　申し父上樣、假令枕は交さずとも、あなたと祝言した上は、ならう事なら、ナウ、二人。
百助　御家人の仰しやる通り、贋せ聟を拵らへて、舅を僞る平平どのゝ誤り。
まつ　源五郎さまとやらに科はない。どうぞあなたを聟樣に、定めて上げて下さりませいなア。
伯平　イヤ、どうあつても、聟と云うたらこの平平。
百助　イヤ、聟樣は、あの源五郎さまとやら。
景伯　イヽヤ、こつちぢや。
まつ　イヽヤ、こつちぢや。
百助　味に縺れたこの緣談。申し旦那樣、こりやどちらにお極め
皆々　なされまするな。
　ト双方より十内の顏を眺める。十内、思ひ入れあつて
十内　オヽ、この十内が聟に取るは、これなる平野屋平平どの。
三人　エヽ。
　ト恟り。平平、景伯は、巧いと云ふこなし。
十内　何驚く事がある。一昨日三井寺に於いて、見合ひの

時より合點行かざる聟の振り。附添ひの手代と云ふが、慥かにそれと存じ乍ら取り極め、聟入りさせなば實否も知れうと、呼び迎へた今宵の仕儀。

たき　そんならあの父上には、初手から御存じでござりましたかえ。

まつ　そりなりやこちらが勸めはせぬもの。エヽ、憎らしいこの仕方。

百助　みす〱知れた拵へ事、惡事の者を聟にせうとは

十内　サア、贋せ聟を以て、十内を欺くとは知り乍ら、この緣談の破られぬは、結納に差し贈つた品に惚れた。

皆々　エヽ。

十内　頼みの印しは春曙抄の一卷、しかも淸少納言が自筆にて、天下に稀な大金の一品。

ト源五郎、ヤアと愕りの思ひ入れ。

それを惜しまず遣つたは、餘人にあらぬ平野屋平平。假令猪口鼻缺けでも、改め娘と祝言させ、この辻浦十内が聟と定めにやならぬ。娘を始め其方達も、その心構へ致してよからう。

ト お瀧、お松、百助、顏見合せ

三人　スリヤ、アノ、改めて祝言を、ホイ。

ト當惑の思ひ入れ。源五郎は始終俯向き居る。平平、景伯、斯うありさうなものぢやと云ふこなしにて

平平　それ見たか。利は元にあるとは爰の事。大金になる春曙抄は、以前金のかたに取り、この平平が所持なれど、舅太夫が懇望と聞いて、ほつかり贈つた頼みの印し。

景伯　その仲取りはこの景伯。雨降つて地固まると云ふ事はあれど、これは風に吹きとめられ、丸う納まる雪ころばし。コレ、平平さま、申し分はござりますまい。

平平　イヤモウ、云ひ分所か、嬉しうてこの三四日の痞へが一時に下りた。

百助　シテ、この贋せ聟殿の納まりはな。

十内　知れた事、ぼッ拂はす。

三人　エヽ、スリヤ、あのお人を

十内　假令頼まれたる事にもせよ。惡事と知りつゝ、聟となり、人柄ばかり作れども、表裏多きは人の屑。斯やうなやから、家内に置くも穢らはしい。景伯老、仲人の役ぢや。とつとと外へ抛り出してしまやれ。

ト苦り切つて云ふ。景伯、心惡きこなしにて、源五郎が傍へ行て

景伯　サア〱、源五郎、お役は濟んだ、御苦勞〱々々。

とは云ふものゝ氣の毒や。初手から厭がる貴公をば、無理に頼んでこの體裁。ひどい目に會ふたゞけは、暫らくでも聟になつた過怠と見て、引ッくゝられぬがまだしも仕合せ。サア〳〵、早う去んだり〳〵。

ト源五郎を門口へ抛り出し、橋がゝり切り幕へ突き出して、入口を締めて、こちらへ來て

へ、仰せに任せ、贋せ聟殿は抛り出しましてござりまする。

平平　景伯老、御苦勞々々。サア、これからは改めて祝言の盃が肝心。

景伯　その仲人が鰥夫では濟まぬ。幸ひ爰のお乳母殿を、假の女房。

ト平平はお瀧の手、景伯はお松の手を取るを、兩人、振拂ふて

兩人　エヽ、忌らしい、知らぬわいの。

平平　アレ、びん〳〵と、あの通りぢや。

景伯　舅御樣、どうしませうな。

ト兩人、甘へる樣に云ふ。

十内　ハテ、あいら兩人が不承知でも、舅が承知いたすからは、嫌でも應でも祝言はさすと申すに。

兩人　それ承はつて先づは安堵。

十内　聟殿とお仲人は、あいらの者にお搆ひなくと、奥へござつて用意をしめされ。

平平　そんならこちらは奥へ行て

景伯　祝言の拵へせいと、許しが出た。

平平　さらば立派な、男振りを見せうか。

景伯　そんなら十内さま、モシ、嫁御寮。

トお瀧、つんとする。平平、アレと寄らうとするを、十内、隔てゝ

十内　ソレ、百助、御案内申せ。

百助　ヘイ〳〵、斯うお越しなされませ。

ト唄になり、平平、景伯、百助先に立ち、奥へ入る。跡に十内、屈託のこなし。お瀧、お松と顔見合せ、お松、お瀧に、早う云ひ出せとする。お瀧、思ひ切つて前へ出て

たき　申し父上樣、今のやうに仰しやつても、わたしやあの平平さまと、祝言の盃は嫌でござりまするぞえ。

十内　ムウ、スリヤ、あの平平と祝言は嫌ぢやと云ふは、ア、聞こえた、今の贋せ聟、源五郎とやらへ操を立ててか。

たき　アイ、常々あなたや、お過ぎ遊ばした母様のお示しにも、一旦祝言したら夫、假令死別れても外の殿御には身は任さぬものと、女大學にも教へてあるとの御教訓。わたしやよう守つて居りまする。それぢやに依つて改めて、外の殿御と祝言は嫌でござりまするわいなア。

まつ　左樣でござりまする。申し旦那樣、こりやあなたが御無理でござりまする。今御寮人の仰しやる通り、あの源五郎さまとやらは、贋せ聟にもせよ間に合ひにもせよ、三々九度の杯も濟み、色直しまでした仲を、いとしほらしい外へ抛り出し、あの憎てらしい鰡面と、どう祝言がなりませう。よし又平平どのから賴みの印しが來た事ゆゑ、是非ともにと仰しやる程なら、何故見合ひをば遊ばしましたぞ。

十內　ヤア。

　トぎつくり。

たき　ぢやに依つて父さん、どうぞ堪忍して下さんせいなア。

十內　スリヤ、娘はもとより、乳母、われまでが祝言不承知とあるは、身どもの詞を背くのぢやな。

たき　アイ、父さん、この事ばかりは背きますわいなア。

　ト泣いて居る。

十內　オヽ、どうあつても不得心か。ハテ、是非がない。コリヤ、わいらは物の噛み分けの分らぬ者、賴みの印しは春曙抄、兼ねて望む狗ぶくら、どの樣に意地張つても、あの平平と祝言さゝねば、この十內の詞が立たぬ。且つは今のお身替りと……イヤサ、身が悪い事は申さぬ親の一分が相すたつても、わいら構はぬか。

　トお瀧、泣き入る。お松、俯き、相手にならぬこなし、

コリヤ、默つて居つては事が濟まぬ。返答はド、どうぢや。

まつ　ハイ、御返答申しまする。なんぼうおぼこな御寮人でも、又私しの樣な者でも、思ひ詰めた事は同じ事。まして御寮人は一途の御氣性、正眞正銘の婿樣は、十人並にはづれた醜男、押附け業の祝言は、そりや親の慈悲ぢやない、お胴慾と云ふものでござりまする。

　ト十內、尤もぢや、さう云ふ譯ではと云はうとして、氣を替へ、わざときつとなつて

十內　默れ、乳母。もうよい。親の詞に背く不孝の娘は、あつて益なし。詞交はすもむやくしい。後とも云はず今爰で、手討ちにして眞ッ二つ。

トきつとなつて刀に手をかける。お松、悔り。お瀧は覺悟の體にて

たき　サア、切つて下さんせいなア。

ト身を向ける。十内、この體を見て、持余したる思ひ入れ。又きつとなつて

十内　コリヤ、脅しではないぞ、うぬ、貫ッ二つ。

トお松、隔てながら、私しを切つてと、突き附ける。お瀧、我が身は知らぬ事と、互ひに身を突き附ける。十内、困つたるこなしにて

おのれ親を困らせ居るか。エヽ、くたばりたくば勝手にくたばれ。

ト唄になり、思ひ入れあつて、ツイと奥へ入る。

たき　ハア。

ト泣き落とす。お松、よろしく介抱して

まつ　オヽ、お道理ぢや〳〵。あゝした旦那樣のお心ではなかつたに、どうしたものか沒義道な、取附く島もない體裁。併し、これには樣子のありさうな事。申し、早まつて必らずども、短氣な心を出して下さんすなえ。

たき　おやて、あの樣に仰しやるもの、わしや死ぬるより他仕樣がない。乳母、なんとせうぞいなう。

まつ　サア、さう思し召すは御尤もなれど、マア、それよりは氣にかゝるは表の聟樣。この雪降りに門中に、只お一人でござつては、なんと身も世もあられうか、この隙にツイちよつと。

トお瀧も氣ならぬこなし。お松、門口を明け、邊りを見て

ヤア、こりや外にもござらぬか。扨てはもうお歸りなされたか。エヽ、遲かつた〳〵。エヽ、コレ、相談せうにも相談はなし、どうしたらよからうな。

たき　エヽ、そんならもうお出でなさらぬかや。どうせうどうせうぞいなう。

トおろ〳〵する。お松も立つたり居たりして

まつ　どうせうと云ふて今更仕樣もなし。もう一遍旦那樣に、ならぬ所まで理解を說き、今宵の祝言揉み消すやうに、この乳母がしまするほどに、何事もわたしに任して、奥の間へ。

ト泣いて居るお瀧を引立て、立ち上がる。

たき　それぢやと云ふて。

ト表の方へこなし。お松、手を持つて

まつ　ハテマア、お出でなされと云ふに。

ト唄になり、お松、お瀧を、無理に奥へ連れて入る。ト跡しつぽりとした合ひ方になり、雪チラ／＼降る。下手より源五郎、最前の形、頬被りにて、立ち戻る。門口よき所に立ち止り

源五　この間膳所の鮒屋で、ふと平平どのに頼まれしより、三井寺での見合ひと云ひ、昨日からの聟入り、祝言もし、贋せ聟と知れた時は、物堅い舅の腹立ち、どうで終ひは爰らの事と、心で得心してゐれば、今更人を恨みはせねど、心得ぬはこの家のうち、親人の御主人吳羽家の姫君、九重姫樣を匿ふと云ひ、眞柴の家來平馬とやらに、繩かけて渡さうと、約束をして置き乍ら、落着き顔に娘の祝言。まだ其うへにあの平平より、結納に贈つたは春曙抄、故主吳羽家の重寶より外にはない筈。さすればこの身の親の敵。

トうつかり云ひかけ、又こなしあつて

その結納にほだされて、得心せぬ娘を娶合せ、九重姫のお身の上、餘所に捨て置く十内が心底。こりや迂濶にこの家は、歸られぬわえ。

ト奥にて、又祝言の謠になる。

ありや祝言の謠、慾には耽ける人心、その身の科を遁れんため、又二つには褒美の金子と、九重姫さまを平馬とやらに、繩かけて渡さんも知れず。若しその時は奪ひ返し、久秋公の御行くへ尋ね、逢はせ申すが忠義の道。春曙抄の出所、敵の實否、詮議の種はこの家のうち。明け方まではこの邊に窺ひ、何かの樣子を、オヽ、さうおや。

トきつとなる。鷺娘の唄になる。返し

造り物、軒並びの夜の景色、書割りの帳り物、藁屋と瓦葺き混りあり。よき所に露地口、出入り。橫通りに又出口あり、下手にも同じく、右の軒、門口に軒附け四人、頬被り、傘、下駄にて、三味線、米袋を持ち、立つてゐる。舞臺一面雪幕、其ほかすべて雪持ち。右の唄にて、靜かに道具廻る。

ト又唄一くさりあると、臆病口よりお瀧、帽子、白小袖にて、雪持ちの紅葉傘、細目に差しかけ、高下駄にて、ツカ／＼と出て、邊りを見て

たき　エヽ、胴慾な父上樣、お心強いも程のあるもの。あの憎らしい平平づら、初手から聟と知り乍ら、いとしほらしい源五郎さんと、祝言までさした上、さつきの樣

に惡口雜言。さぞお腹が立つたでござんせう。一旦斯うと思ひ詰めた殿御を退けて、なんとマア、おめ〳〵と縮と添はれう。あた穢らはしいと思ふゆゑ、拔けて來るは來たものゝ、もうお歸りなされたが、これほど慕ふわたしが氣を、思ひやりはない事かいなア。

ト又唄一くさりあつて、向ふを見て、花道眞中へつかつかと行く。向ふ戸屋のうちより、犬の聲凄じくする。これにて花道に立ち止まり、此うち始終、雁の聲。

つれないは源五郎さま、まだ下紐は解かねども、この身に過ぎたよい殿御。二世も三世も先の世も、一つ夫婦と思はして、捨てゝ去ぬとは胴慾な。結ぶの神も聞こえませぬ。祝言ばかりの男なら、これ程までに惚れさして、下さんせぬがよいわいなア。エヽ、コレ、どこへ行かしやんした。どうぞ逢ひたい、逢ひたいわいなア。

ト雪しきりに降る、又唄になり、本舞臺へ戻る。これにてこの道具、靜かに上へ引く。

エヽ、折惡いこの雪降り、どこをせうどに尋ねうぞ。乳母を呼び出し尋ねうにも、又瘤面の目にかゝつたらなんとせう。

ト此うち誂への道具、町續き、野はづれの模樣。番部屋、人出入りあるべし。囃子連中、歩みながら上手の露地へ入る。トばた〳〵にて、平平、景伯、出て來て、お瀧を見附け

兩人　サア、お瀧坊、見附けた〳〵。

たき　ヤア、お前は平平さま、景伯さま、穢らはしい、放しや〳〵。

平平　イヤ、放さぬ、よう待ちぼうけに合はしたなア。

景伯　祝言の場から拔け出すとは、テモ、手の惡い。

平平　サア、戻つたり〳〵。

たき　エヽ、其方達に、相手になる隙はない。爰放しや。

平平　そんならどうでも不承知か。

景伯　さう云やア、もう厭ふてゐられん。

平平　景伯、合點か。

景伯　呑込んだ。

ト兩人、ちよつと支へるを、お瀧、逃げうとする。逃がすまいと、危ふき事あつて、お瀧はトヾ正面の露地へ逃げ込む。兩人、追はへ入る。横手の露地よりお瀧逃げて出て、下手の露地へ逃げて行く。兩人、出て、うろ〳〵搜しかねて、又もとの路地へ入る。ト上手より夜番、頰被り、半纒、安下駄にて、火の用心と書き

し夜番提灯を持ち、傘を差し、おちよぼからげにて、
出て來て

夜番　エヽ、今夜はお庄屋樣の所の婚禮で、それで肝心の番を忘れてのけた。エヽ、横飛沫で、びつたりと半纏を濡らしてのけた。ヤレ／＼、寒やの／＼。

ト捨せりふにて、番部屋へ脱ぎ捨て、拍子木を出して

如何に何もないかて、お館にお留守居なしの明渡し、ない程氣樂なものもないて。ハヽヽヽ。ドリヤ、一遍廻つて來う。火の廻り／＼。

ト云ひながら拍子木を鳴らし、上の方へ入る。又唄になり、ばた／＼にて、お瀧、下手より逃げて出て、うろ／＼して、右の番部屋を見附けて、番部屋へ隱れて、うちより戸を締める。平平、お瀧を捜し草臥れし體にて、ひよろ／＼しながら出て來る。後より犬一疋附いて出て、橋がゝりにて寢腹這ふ。平平、番部屋を見附けて、傍へ行き

平平　夜番はゐぬか／＼。

ト戸を叩き

今爰へ白い娘は來なんだか。どうぢや、知らんか／＼。

ト戸を叩く。お瀧、中より太鼓の撥を窓から出す。平平、愕りして

寢とぼけてゐても、我が商賣は忘れぬかして、太鼓の撥は放さぬな。ハヽヽヽ、さうして白い娘は、來たか來たか。

トお瀧、撥にて招くゆゑ

どつちへ行た／＼、知つてゐるか。

トお瀧、又撥にて、あつちへ行たと仕方する。平平、見て

ナニ、あつちへ逃げたか。エヽ、最前から軒附けに彈いて居るは鷺娘、こちの尋ねるも鷺娘。鷺かして早い飛びやう。おのれ、マア。

ト又駈け出す。よき所にて、溝へ踏み込みし思ひ入れにて

アイタヽヽヽ。

ト此とき犬そろ／＼出て來て、平平の頭より小便をかける。平平、愕り、飛び退き、直ぐに犬の樣に四つ這ひになり、犬の眞似して、追はへる。犬、逃げて入る。引違へ景伯、ばた／＼にて走り出て、平平に行き當り、愕りして双方へ飛び退き、よく／＼見て

景伯　そこにござるは平旦ぢやないかえ。

平平　オヽ、平且々々、平且蜘蛛になつてゐる。時に鷺娘の行くへは知れたか。

景伯　長屋の雪隱は云ふに及ばず、くま〴〵すみ〴〵捜しても、どこへ逃げたやら、とんと知れぬぞや。

平平　知れぬでは詰らぬ。とても脇へは行く筈はない。なんでも爰ら邊りに、隱れてゐるに違ひはないて。

景伯　サア、この大雪に、高が娘のか弱い足で、高ぶけりせう筈がない。鷺娘から思ひ出した、氷に足でも閉ぢられて居りはせぬかと、力一ぱい尋ねても、一向に知れぬ知れぬ。

平平　イヤ、知れぬと云へば、アノ、寶せ物の一軸、舅めが一ぱい食ふて居ることそ幸ひ、かの娘が手に入つたら、云ひ分なしぢやが、物事と云ふものは、十分には行かぬものぢや。

景伯　シタガ、あの春曙抄は、どえらい金になる物と聞いてゐるが、全體どこから廻つて、貴公の手へは入つたのぢやな。

ト此うち上手の軒に、源五郎、以前の形にて、窺ひ居る。お瀧も番部屋より、ちよつと顏を出し、窺ふ。始終犬の聲、鳴子雁の聲。

平平　サレバ、あの卷き物の事に就いては、段々の曰く因緣のある事。貴樣は譯は知るまいが、もと俺が親仁は、小田彈正さまのお出入りの町人で、この近江路の堅田は小田の領分と云ひ、親仁から持ち傳へた田地もあつたれど、俺が兄の小雀と云ふ男は大の極道、それゆゑ、親仁が死ぬや死なずに、暴れさらして出居つたが、彈正さまのお世話になり、小いがみの一つも仕兼ねぬ器用肌。俺は又堅田の田地を賣拂ふて、大津へ出て平野屋平平と名乘り、一二を爭ふ長者株となり、親仁の手筋で彈正さまへは、今に折々の折見舞ひ。所がある日、兄の小雀めが、彈正さまのお使ひに來居つて、これはしか〴〵高家の寶物、大金になる代物ぢやほどに、われにしつかりと預けるほどに、深う隱して置けとの傳言。

景伯　オヽ、さう云ふ物なら、なんでもやぼな代物と見える。それをマアうか〳〵と、寶せ物にもせよ手放したら、跡でやかましかりさうなものぢや。

平平　サア、そこぢやて。この元を尋ねる所、さる高家の娘が嫁入りの、賴みの印しに贈る一品。その附け人に岩城刑部とやら云ふ侍ひがあつて、この一卷を持つて行く役ぢやが、どうでもかの彈正さまが、その娘に惚れてる

ると見えて、この緣邊を邪魔せうために、俺の兄貴と云ひ合し、その刑部とやらを闇打ちにせうとした所が、思ひの他の手剛い奴で、兄くらゐの手くさいでいけぬ奴、所を見澄まし彈正さま、手裏劍で病ひ附かし、難なく刑部を殺した上、してやつたこの一卷、手許に置くは心がかりで、それで俺が預かつたのぢや。

景伯　それをマア、よう今まで詮議もないなア。

平平　そこは又此方の人柄ぢやてな。レコ持ちの事なれば、どうで質になと取りさうなものぢやと、貴樣らまで思ふぢやないか。それほど大事のものなれど、登の盜みに戀の唄と、娘は欲しゝ、本間物やるは惜しゝ。そこでこの間云ふた通り、贋物の片しろをやつて、正眞正銘の代物は、褌に括りつけて、卽ちこれに存じますぢや。

ト肌より一卷を、出して見せる。

景伯　ホヽオ、適れ〳〵、色慾の隨一。誰れしもさうはありたき事。事成就したら、コレ、六間間口を忘れまいぞ。

平平　そりや呑込んでゐるわいの。

景伯　當分の小遣ひも、よいかの。

平平　サア、何もかも合點ぢやが、何を云ふても肝心の娘が居いでは話しにならぬ。まア一遍捜してくれ〳〵。

景伯　オットヽ、合點ぢや〳〵。

ト此うち始終、お瀧、源五郞、聞いてゐて、此ときお瀧、番部屋より出て、右の一卷に手を掛け、取らうとする。兩人、恟りして、立廻り。源五郞も分け入り、四人、等しく連れて立廻り。この間、唄。トヾ平平、上手へ逃げて入る。源五郞、やらじと、これも追ふて入る。景伯、お瀧にかゝるを、お瀧、よろしくはづして、これも上手へ逃げて入る。景伯、後より追ふて入る。右の唄、烈しく、一ぱいに、道具、元へ戻る。

もとの門口附きの道具へ戻る。但し、この時上手へ屋體附きになる事。

ト直ぐにばた〳〵にて、橋がゝりより平平、源五郞、取り合ひ乍らうちへ入る。續いてお瀧、出て來り、立廻つて、留まり

平平　うぬア源五郞め、何さらす。

源五　その一卷、こつちへ渡せ。

たき　ようマア戻つて下さんしたなア。

ト三人、思ひ〳〵の心にて、屹度とまる。此とき上手

屋體より、エイと手裏劍を打つ。源五郎、よろしく打ち落す。平平、うぬとおこづくを、源五郎、突き廻し、ポンと當てて、小柄を取り上げ見て

源五　ヤ、、、こりやこれ小田家木瓜の模樣の小柄。

十内　ホ、、、その小柄を打かけしは、この十内。源五郎、お身や敵討ちであらうがな。

ト云ひ乍ら、屋體よりつか〳〵出て、源五郎の顏を屹度見る。源五郎、思ひ入れあつて

源五　委しう聞いた敵の證據、小田彈正が小柄を以て、我れに打ちかける證と云ひ、扨ては彈正と心を合し、我が父を打ち取りしは、十内、そちであらうがな。

ト屹度なつて、十内に切つてかゝる。十内、あしらふ。奧よりお松、駈け出て、源五郎を留める。お瀧は十内を留めて

兩人　マア〳〵、待つた、お待ちなされい。

十内　急かれな、東馬、云ひ譯あるぞ。

瀧五　待てとは卑怯な。

ト屹度なつて

後れたか。

十内　イヤ、後れもせぬ、この十内が云ひ聞かす一儀あり。マア、お心をお鎭めなされませ。

二人　云ひ聞かするとはいかなる仔細、早く云やれ、サ、、なんと〳〵。

ト刀を構へ、きつと詰め寄る。十内、どつかと下に居る。ト合ひ方になる。

十内　流石は岩木刑部が子息、同苗東馬、無事であつたな。

東馬　ハテ、心得ぬ、名を僞つて來りし某、本名を知られしは

十内　貴殿の親父刑部どのとは、竹馬の友たる、吳羽家の近臣、古田織部、今改めて辻浦十内。

東馬　ム、、。扨ては幼少の頃、親人の噂に聞きし、古田氏にてあつたよな。

十内　互ひに好む和歌の道、同朋輩の事なれば、それより入魂相憎して。

東馬　父は行年長ずれば、兄と定めて其許には

十内　兄弟の約をなせしは、骨肉にも勝る信義と實義。

東馬　其ころ我れは四才にて、幼稚の昔は物も朧ろげ。

十内　我れに當才の娘出生、末々に至れば夫婦にせんと許嫁の約を定め

東馬　仔細は父より成人の後、噂に聞いた十内さま。
十内　扨てこそそれと睨んだ黒星、岩木東馬之丞。
たき　エイ／＼／＼、そんなら矢ッ張りわたしの聟君。
東馬　舅殿。
十内　互ひに間違ふ
東馬　假名の相違。
十内　知らず計らず
東馬　不思議の對面。
十内　盡きせぬ縁で
二人　あつたよなア。
ト兩人こなしある。トお瀧、お松、ぞく／＼して
まつ　申し、御兩人樣、嘸お悦びでござりませう。雇はれてお出でなされた聟君は、矢ッ張りほんまの許嫁。
たき　さうとは知らず最前から、わしや死んでも仕舞はうかと、大抵案じた事ぢやないわいなう。
まつ　イヤモウ、案じた段か、最前からのしだら、腹が立つやら阿呆らしいやら、あの瘤面を掻きむしつてやりたうござりました。
十内　シテ、東馬どのには、小柄の事より父御の敵と仰せあるは、どうして御存じでござるな。

東馬　成るほど御尤ものお尋ね。その仔細と申すは、この東馬成人の後、同朋輩と射術の事より口論なし、疵を負はせし若氣の誤り、殿の御仁心にて命助かり、勘氣を受けて國を立退き、あり附きを求めんため、九州路に永らく漂泊ひ、久々にて去年の夏、京都まで立歸りし所、その春南禪寺の藪蔭にて、何者とも知れず、父刑部どのを闇討ちになせしと知音の噂、聞きし無念さ口惜しさ。敵を討たんと思へども、證據なければ狙ひもならず。まだも頼みは春曙抄の一卷、親人を手にかけし曲者が、奪ひ取つて立退きしとの風聞。この一品を所持する者を引捕へなば、親人の敵の假名も知れんと、これよりこの江州路を、そこ爰と尋ぬるうち、此ほど膳所の町、鮒屋と云へる料理屋へ下人奉公。名も源五郎と改めて、密かに寶の詮議する所、それなる平野屋平平に頼まれ、一昨日三井寺の見合ひより、昨日の聟入り、今宵の祝言、贋聟の事顯れ、惡口せらるゝは覺悟の前。然るに召使ひの女のうち、主君の姫君九重姫さま、匿ひあるとは心得ず、まつた聟の頼みは春曙抄の一卷、大金になる一品と、舅の懇望合點行かず、慾に耽るは人心、若しも姫君の御身に凶事やあらん、又春曙抄の出所を詮議し出だし、父

の敵を討たんずものと、心の目算。窺ひ聞いたる甲斐あつて、父の敵は小田彈正、その荷擔人は平平が兄弟、堅田の小雀とやらんと、問はず語り。父の止めを刺したるは、彈正が所持の小柄と聞きたるに、我れを目がけ打ちかけし、小田の紋は覺えの品、扨ては敵の片割れと、切つてかゝりし十內さまは、許嫁せし緣の端、父のためには兄弟たる舅御の古田氏。巡り逢ひしも不思議の緣。サ、この小柄はいづくの誰れより、貴殿のお手には入りましたな。

ト この前より百助、出かけゐて、この時つか〳〵と出て

百助 イヤ、その仔細は私しが申し上げまする。去年の春南禪寺に於て、お大名方の系圖改めの、儀式拜見したさに、旦那へ暇を願ひ參りし戻りがけ、白川道へ過ぎる藪蔭、血に塗れたる死骸の傍、立ち寄る曲者ござんなれと窺ひ聞くとは夢にも知らず、一人の武士と一人の惡者、惡事のもくろみ、話しを聞けば、刑部さまを手にかけて、春曙抄の一卷を、奪ひ取りしと聞くよりも、噂に聞いた旦那の兄御、岩木さまと思ひしゆゑ、曲者待てと挑みしかど、跡くらまして逃げ去つたれば、その證據とこの小柄、持つて歸つて旦那へ知らせ、下部づれには要らざる品と、主人へ讓つてこの場の仕合せ。その平平が云ふたとあれば、愈々彈正に相違なし。又荷擔人は堅田の小雀と、口走つたを其ときに、この地獄耳に挾んで居ります。樣子と申すは斯くの通りでござりまする。

たき 成る程それで小柄の事も、最前平平が話した通りに、微塵も違ひはないわいなう。

十內 ホヽ、敵は彈正、小雀と承りながら、某に疑ひかかるは尤も。その仔細は百助が物語りが慥かな證據。この身とてもその昔、九重姬さまには繼母たる、御臺所の妬み深く、繼子を憎む憤り、諫め兼ねて身退き、この志賀の里には緣りもあれば、家內引連れ當地に閑居し、姓名を變へたるは御臺所の惡事を包まんがため。然るに去春南禪寺に於いて、我が義兄たる岩木刑部、橫死の砌り、久秋公へ贈るべき春曙抄は紛失と聞き、姬君の輿入れ延引、久秋公にもお行くへ知れずと街の風說。南無三寶主家の大事と、密かに姬君を迎へ奉り、腰元となして我が家に隱ひ、貴殿の行くへ尋ね求め、助太刀して兄の仇、修羅の妄執晴らさせんと、思ふに付けて證據の手蔓、淸少納言が枕草紙、所持する者は敵の片割れ、何卒尋ね得

させんものと、心を碎く折も折、一昨日三井寺にて、ふと俳諧師景伯が媒介にて、娘を望む平野屋平平、春曙抄を所持する由、聞くと其まゝ婚儀の趣き、承知と云ひやり三井寺にて、聟の面體見定むれば、小雀とやらんが族とも覺えず。親みに迯りし春曙抄は、眞赤なる贋物なれば、仔細であらんと我が家に呼び入れ、俄かに催す今宵の祝言。心得ざる手代の振舞ひ、篤と樣子を探らんため心を碎くこの十内。

まつ　それ程にまで御合點作ら、最前聟は贋物と、知れた時にどうしてあなたは、ツイ斯う〳〵と私しどもにも、お話しないは。

十内　サレバサ、先刻我が門弟と思ひの外、眞柴家の家來とあつて、九重姫を詮議の折柄、云ひくろめんにも證據の守り、いかゞはせんと手詰めの時、贋聟の事顯れしかど、わざと平平に道理を附け、道に背きし祝言を、娘に勸め自滅させ、姫君の御身替りと、且つは又贋聟を、よく〳〵見れば、爭はれぬ刑部が俤、見覺えある左の耳の下、一つの黑子。扨ては敵を討たんがため、恥辱をこらゆるものなるかと、心で褒めて上べには、平平に娘を娶合せ祝言さすと心を許させ、誠の一卷取り得んものと、事を謀つてこの場の仕合せ。見合ひに雇ひし贋聟が、娘が兼ねての許嫁、刑部が忰東馬之丞と、解くれば同じ谷川の見ず知らずの聟舅が、思はず出會ひし今宵の奇遇。つれなくもてなす十内が、心の底はこの通り。なんとみな合點が行たか。

東馬　東馬之丞が身に取つては、盲龜の浮木、優曇華の、時節に會ひしての身の本懐。

十内　後見せんとの念願も、叶ふ今宵が娘の祝言。これも偏へに主家の重寶、淸少納言の正筆と、名に聞こえたる春曙抄、再びもとへ取り得んと、心を盡す忠義の一心、御恩は重いものぢやてなア。

ト皆々、凝ツとこなし。七つの時計、チヤン〳〵と鳴る。奧より平馬、出て

平馬　ヤア、十内、約束の七つの時計。九重姫をからめて渡すか。返答はナ、なんとぢや。

ト此とき百助、立上がつて

百助　イヤ、さうはなるまい。先づ待ちやれ。

平馬　ナ、なんと。

百助　ヤア、家來、大小。

家來　ハア、。

ト家來、橋がゝりより出て、大小を渡す。これを取つて差す。ト皆々見て

まつ　エヽ、スリヤ、百助どのは、下男と思ひの外。

百助　眞柴家の昵近、吉川隼人と云ふ者。家內の樣子を探らんため、疾くより入り込む隱し目附け。

ト家來、引返し入る。隼人、上へ通る。

十內　ムウ、スリヤ、こなた樣が、吉川隼人どのとな。ハテナア。

ト思ひ入れ。平馬、立ちかゝり

平馬　九重姫を引立て來よと、小田彈正さまの下知を受け、入り込んだるこの平馬、妨げするは所存あつてか。

隼人　ムウ、九重姫には何科あつて。

平馬　知れた事、久秋公の跡を慕ひ、國遠ありしが科の第一。

隼人　ハヽヽヽヽ、許嫁ある久秋公、お行くへ知れぬと慕はせ給ふは、これぞ即ち女義の操。道を守るが科になるか。

平馬　ムウ、サ、その儀は

隼人　事によそへ奪ひ取り、我が物にせん彈正どのゝ橫戀慕、よもや相違はあるまいがな。

平馬　ムウ、ハテ、きめ細かに吟味するなア。

隼人　ソレ、いづれも、姫君をこれへお伴ひ申してよからう。

腰皆　ハアヽ。

ト九重姫、腰元皆々附き、出る。

九重　十內親子が永らくの介抱、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。

たき　アヽ、勿體ない其お禮、さつきの父上のお心は、お身替りに立てよとの、祝言の謎々。

まつ　わたしも其あとでそれと心附き、大抵案じました事ぢやないのに、隼人さまのお情で、それも濟み

十內　イデ、此方へは平平。ソレ、聟どの、活を入れ召され。

東馬　ハツ。

ト平平に活を入れる。ウンと起きて、あたりを見て、恟りし

平平　ヤイ〳〵〳〵、源五郎め、ヤア、下男が大小を手挾み、こりやどうぢや。

ト呆れて下に居る。

まつ　コレ〳〵、瘤どの、もうあかぬ。百助どのは誠は吉

川隼人さま、又源五郎さまは幼少からの許婚ぢやわいなア。

平平　なんぢや許嫁ぢや。頼みの印しを取り乍ら、源五郎が許嫁では事が濟まぬ。娘はどこまでも俺が女房ぢや。

十內　ハヽヽヽヽ、盗人猛々しいと、さま〴〵の譫けを盡くす。彼の一卷は吳羽家の重寶。

たき　其うへ景伯との話し、贋物を拵へた事まで、みな最前聞いたわいなう。

東馬　もとあの一卷は親人刑部どのゝ預かり、誠の一卷もこつちへ取り得て、斯くの通り。

ト手に差し上げて見せる。平平、恟りして、色々探し

平平　ヤア〳〵、そんなら今の先、つんづんころりとやつた間に、本間物もしてやつたか。そいつは一向やくたいぢや。

東馬　サア、先程景伯に申した通り、今一應これにて申せ。サヽ、どうぢや。

ト刀に手をかける。

平平　ア、コレ、聊爾せまい、云ふ〳〵、云ふわいなア。

東馬　サア、きり〳〵と吐かし居らう。

平平　もう斯うなつたら自棄ぢや。俺が兄貴は臥山の小雀と云ふて、盗人仲間のぶい〳〵ぢや。小田彈正に頼まれて、去年南禪寺の藪蔭で、兄貴を先に刑部と出くはし、手裏劍を以て止めを刺いたは、これみな彈正さまの才覺ぢや。其うへ春曙抄の一卷を奪ひ取り、我れらの內へ預けに來たは、極道の兄貴。謂はれ因緣かくの通り。ナント、これで解らうがな。

皆々　扨てこそな。

平平　驚き給ふな、まだある〳〵。所で彈正さまからは、符徵替りに聚樂の用金、盗み取れよと兄への知らせ。シヤ、して來いなと盗み取り、それを取込みこの身の榮華。思へば夢であつたなア。

東馬　スリヤ、父の敵は、愈々彈正。それに一味の小雀、平平。

十內　聚樂御用金の盗人なれば、一先づ隼人どのゝお手に渡し、聟のためには父の仇、小田彈正を討ち取るが第一。

東馬　こは有難き舅の情、最早敵を討ちしも同然。イデ、誠の一卷。

ト十內へ渡す。十內、取つて、九重姬へ渡す。平平、それをとかゝるを、眉間をぽんと當てる。平馬、うぬ

とかゝるを、隼人、一寸支へる。此とき本釣り鐘、鷄笛。

女皆　ありやもう明け六つ。

十内　南無三。

ト空を眺める。

東馬　夜明けとあれば

ト立つを、お瀧とめて

たき　アレ、夜が明けたといなア。

ト十内を見る。十内、思ひ入れ。

ナア、お乳母。

トお松を見る。お松、頷く。

東馬　イヤ、此まゝ出立。

ト振切り、又行かうとする。十内、つかと〲下りて

十内　イヽヤ、暮れ六つ。

皆々　エヽ。

まつ　申し旦那様。

ト十内を見て、お瀧を東馬の傍へ突きやる。両人、びつたり抱き附く。

十内　いかさま、それが肝心

ト平平、おこづくを、十内、扇にてびつしやり押へる。チヨンと木の頭。平馬、おこづくを、隼人、引廻す。お松、簪にて頭を掻く。

要ぢやてなア。

トこの途端、一時に、よろしく　ひやうし幕

大詰　堅田の場

役名――眞柴久秋。堀尾帶刀。早川高景。吉川隼人。小西彌九郎。三二の五郎七。堅田の小雀。茶店、才助。馬士、甚九。同、三太。同、團八。同文六。雲助、番六。同、權太。同、岩松。中村彌藤次。猫舌の次郎。厄病の又六。生駒甚助。岩間のお峰。月の瀨のお熊。千茶山珍才。娘、早瀨。足柄金藏 實ハ安田作兵衞。石場の五郎藏 實ハ齊藤内藏之助。祇園のお梶。石川屋眞砂路 本名武智皐月姫。

造り物。向ふ板松、よき所に山城近江追分の立て石あり、橋がゝり葭簀圍ひの茶店あり。幕うちより岩

松、番六、權太、関八、三太、甚九、六人、馬方と雲助の拵へにて、喧嘩してゐる。才助、茶屋男にて、旅人を留めてゐる。在郷唄にて、幕開く。

四人 二人乍ら待てやい〳〵。

岩松 留めるな〳〵、どたまを打割つてこますのだ。

番六 うぬが胴腹を刳つてたやすのぢや。

岩松 見事割るかよ。

番六 われ見事打割るかよ。

岩松 打割らいでか。

皆々 マア〳〵、えいわい〳〵。

權太 高で伊勢參りの乘り手を外らしたからぢやないかい。

関八 さうぢや、海道でいちやがあると、馬方が困るばかりぢや。

權太 千も萬もない、おいらが中へ

皆々 貰ひぢや〳〵。

岩松 何ぬかすぞい。蹴上げから附けて來た土山まで通し、巧うなりかゝつたのを、いちやつきさらしたので、あつたら鳥を蹴散らして退けたわい。

番六 よい口な事ぬかせ。奴茶屋で値をして、俺が馬へ乘せる所を、うぬが邪魔さらしたぢやないかい。

權太 マア〳〵、えいわい〳〵。なぜ又馬か駕籠か、鬮取りにせんぞえ。

関八 番六めは酒くらうてけつかるさうな。

皆々 熟柿臭いわい。

岩松 エ、ツ、馬方は當つて碎けろぢや。

番六 まん直しにきすでも入れやうかい。

皆々 さうせい〳〵。

ト在郷唄になり、向うより、五郎市、木綿布子に笈摺をかけ、駕籠に乘り、次郎、又六、雲助にて、駕籠舁き出る。後より、五郎七、木綿やつし、旅の形にて、附き出て

五七 コ、コレ、駕籠の衆、カ、堅田までは、ダ、大分の、ミ、道程、ゼ、ぜつぴ、キヨ〳〵今日中に着かねばならぬ。ヒ、一息に、ヤ、やつて貰はう。

次郎 ア、忙しない人ではあるわい。いかに錢出して雇へばとて、ちと目を明けて見るがよい。

又六 こちとらはその日〳〵の商賣、今日ばかりは休むと云ふ體ではなし、年中あるきづめにしてゐるに依つて、

足損ふては、明日から食ふ事がならぬわいの。

五七　オヽヽヽ、ドヽ、道理々々。コヽ、こりや俺が、アヽ、誤つた。ヒヽ、久しぶりで、タヽ、尋ねて行くのに、ヒヽ、日は傾くし、コヽ、心は急く。ソヽ、それで今の様に、イヽ、云ひました。コヽ、こなた衆の、カヽ、カ肩背は盗まぬ、サヽ、酒手も屹度、ハヽ、張込まう。

次郎　なんぼ酒手を張込むと云ふても、明日明後日の雇ひ賃は出さんすまいし、ちと休まねばならぬわいの。

五市　コレ、ぺいよ、駕籠の衆さへあの様に云はつしやる。今夜行かすば又泊つて、明日行きやア尋ねる勝手もよし。

五七　イヽ、イヤ、キヽ、氣遣ひさつしやるな。コヽ、この間が山道、アヽ、跡は、ヒヽ、平地ぢやゆゑ、コヽ、此やうに急くのぢやないわいの。オヽ、大津繪忘れてのけた。

次郎　何が蹴上げから、息なしにやり附けたに依つて、荷は輕うても、ナア、又よ。

又六　俺はこんなどえらい事なら來やせぬ。其くせ安い仕事で元が切れる。

五七　ソヽ、そんなら、ヒヽ、一走り行つて取つて來る程に、カヽ、駕籠の衆、コヽ、爰に、チヽ、ちつとの間、マヽ、待つてゐて下され。

次郎　安いこつてごんす。こちらが取つて進ぜたいけれど

又六　戻る代りに、こちらはそろ／＼やりかけやんせう。

五七　ソヽ、そんなら、ソヽ、さうして下され、アヽ、跡から行かう。

兩人　早う取つて來てござれいよ。

五七　ツヽ、イ追ツつきませう。ナウ、駕籠の衆。

兩人　氣遣ひさんすな。

五七　ドヽ、ドリヤ、ヒヽ、一走り、イヽ、行て來ませう。

ト在郷になり、駕籠を舁き、兩人は橋がゝりへ、五郎七は向ふへ引返し入る。と向ふより堀尾帶刀、着附け、野袴、引肌の大小に菅笠を持つて出て

帶刀　いかさま大津は繁華な土地ではある。ドレ／＼、暫らく休んで行かう。

ト本舞臺へ來て、床几に腰を掛ける。才助、茶を汲んで出す。

才助　お茶上げませう。

帶刀　イヤナニ、亭主、當所は鎌倉の往還とて、桃山へ參勤の武士多く、取り分けての繁昌と見えるな。

才助　左樣でござりますが、晝とは違ひ夜に入ると、怪しからぬ物騷にござります。

帶刀　ナニサマ、去年七條河原にて、五右衞門と云へる盜賊、釜煎りの罰に會ふたる後は、盜賊の種も盡きしと思ひしに、此ころ又物騷なとは、矢張りそれらの手下でゞもあらうか、

才助　イエ〳〵、今度のは、一通りの盜賊とは違ひ、女盜賊でござりますさうな。

帶刀　ハヽヽヽヽ、何事のすぎはひでも、女のするが流行りとて、盜賊まで女とは、ハテ、珍聞もあればあるものぢやてなア。

ト莨のむ。

才助　オヽ、さつきから水が切れた。幸ひのお客樣、暫らくお賴み申しまする。

帶刀　オヽ、サ、行て來やれ〳〵。

ト唄になり、才助、下座へ入る。帶刀、殘り、馬士の番六、皆々を連れ出て來て、前へ出て

番六　親方、堅田までの戻りぢやが、乘つてやらんせんかいなう。

帶刀　堅田とあれば幸ひの道、案內がてらに乘つて行かうか。

番六　そりや忝いが、親方、云ふても四里の道、酒手もしつかり貰はにやならぬ。

帶刀　シテ、いくらで乘せるぞ。

番六　されば小判で百兩かえ。

帶刀　ナヽ、なんと。

團八　斯う見た所が立派な侍ひ、爰らで云はにや押し前が利かぬ。

番六　うんと云ふて出せばよし

甚九　否とあれば我れ〳〵が

三太　ばらしてしまはうか。

團八　金がなくば身ぐるみ脫いで、行きやアがれ。

皆々　侍ひ、返事はどうぢや。

帶刀　さてはうぬら、盜賊めらぢやなア。

文六　エヽ、疊んでしまへ。

皆々　合點ぢや。

ト皆々かゝる。ドン〳〵太鼓にて、帶刀、皆々を相手に、きつと立廻る。チョン〳〵。この見得。返しに、

造り物、向ふ黑幕、後蘆原、松の實木、吊り枝、

小凄き道具、此まへに駕籠を下し、五郎市を入れ、次郎、又六、火を焚き、あたり居る。本釣り鐘、暮六つにて、道具納まる。

次郎　コリヤ、厄病よ。今の叱りが行きやうでは、つい戻り居らう。ナント、爰で仕舞はうかい。

又六　オヽ、人が來るか頑張つてゐる程に、猫舌よ、やつて仕舞へ〳〵。

次郎　オヽ、合點ぢや。オイ、その子、爰へごんせ。

ト五郎市、こなしあつて、そろ〳〵と向ふへ行かうとする。又六、首筋摑んで引留め

又六　待ちやアがれ。コリヤ、厄病よ、なんとませた餓鬼ぢやないかい。今云ふたを聞き居つて、そろ〳〵とふけろとさらす。コレ〳〵、この首にかけて居る物、出しやアがれ。

五市　イヤ、なんにも其やうな金のやうな物は、持つてはゐやせぬわいなア。

又六　ハヽヽヽヽ、問ふに落ちんと、金のかの字も問ひもせぬに、コリヤ、さつきに大津繪買ふた時、今附けた金は四五十兩、出さんとぬかすと叩き殺すぞ。

五郎　イヽヤ、金と見えたは土産に買ふた檀上の餅。どうぞ堪忍して下され。

次郎　默りやアがれ。子忰に似合はぬませた餓鬼、この猫舌を馬鹿にさらすか。サア、きり〳〵と出しやアがれ。

五市　どうぞ堪忍して下され。

次郎　命が惜しくば金を出せ。

五市　イヽエ、金はない。

次郎　エヽ、どし太い餓鬼め、ちやツ〳〵とおこせ。

トころ石を持つて振上げる。五郎市、ちやつと飛び退き

五市　どうぞ助けて下されいなう。

又六　くたばりともなくば

次郎　きり〳〵出し居れ。

ト兩人して五郎市を引立て、兩方より懐へ手を入れ、探し

又六　そりやないワ。

次郎　どこへふけらし居つた。

五市　イヽエ、初手からないのぢやわいなう。

兩人　エヽ、野太い餓鬼め、いつそ

ト兩人、五郎市を石にて叩き殺さうとする。五郎市、砂を摑んで焚火へかける。これにて暗がりになり、兩

人、互ひに五郎市と思ひ、摑み合ひ、五郎市は蘆原へ逃げ込む。うちにて、エイと殺す音して、お梶、好みの形、血刀を提げ、片手に五郎市の死骸を提げ、すつと出る。次郎、又六、探りながらお梶へ寄る。お梶、兩人をぽん／＼と切り、蘆原より顏を出し、五郎市の血汐をこれへ絞り、こなしあつて、吐息をつく。ゴンと本釣り鐘。此とき空より月を出し、引張り。此とき守りを落す。お梶、財布を懷へ納め、守り袋を見て、取上げ、月明かりにて見るうち、上手より帶刀、以前の形、向ふより五郎七、出て來て、本舞臺へ來る時分に、お梶、明りをすかし

かぢ　河州石川村郷士倅。

ト思ひ入れ。

天正五年巳の年誕生。スリヤ、年月も丁度。

ト大悧り。五郎七、花道より出る。

五七　此やうに尋ねても、和子はどこへ行かしやつた。

ト本舞臺へ來る。五郎市の死骸を見て

ヤ、、、、コ、、コリヤ和子を。

帶刀　曲者待て。

かぢ　エイ。

ト手裏劍打ち、ついと向ふへ入る。五郎七、おこづくを、帶刀、きつととめる。この見得、チョン／＼、本釣り鐘にて、返し

造り物、平舞臺、向う鼠壁、納戸口、上手、折り廻り障子屋體、いつもの所、押入れ。下手ぬりたれ、切り戸附きの塀、いつもの所、藁葺の門口、すべて堅田在郷の體。よき所に、お峰、お熊、世話形にて苧績んでゐる。堅田の小雀、木綿やつしにて、藁を打ち、繩を綯ふてゐる。隣柿の木の唄にて、道具納まる。

ト小雀繩を綯ひかけて

小雀　ヤレ／＼、繩を二三間綯はうと思へば、肩も腰もめりめり云ふ。ドレ、息繼ぎに一服せうかい。

ト莨盆、引寄せ、のむ。合ひ方。

みね　小雀さんは久し振りで、この在所へ戻つてござんして、お梶さんの内に居候。

くま　在所手業の繩作りは、草臥れさんす筈ぢやわいなア。

小雀　云へばそんなもんぢや。俺は小供のうちから、この

堅田の生れ、ちよび〳〵とよう喋るから、小雀と異名を取つたが、成人するに從ふて、道樂つくし、内を飛び出し、後は弟の平平めが丸呑み。大津の富限町人にまで上がり居つたが、此お兄さんはお尋ね者同然。仕方がなさに故鄕へ戻り、爰の内に、居候と出かけたのぢや。

くま　爰の内のお梶さんは、この邊りでの切れ者、男も及ばぬ氣味なお方。

みれ　こちらも共に手下分なれど、晝は世間を思ふてのこの手仕事。

小雀　全體爰のお梶さんは、今は構はんせぬから一通りの女子なれど、前は餘ッ程うつし者。そこへこの頃娘代りに置いてある御妻は、ありや石川屋の眞砂路と云ふて、九條の里の傾城。あの馬鹿者の久秋を啣へて戻り、爰の内のお客分。色々樣々の者を、取り込む事は好きぢやなア。

みれ　アヽ、コレ〳〵、この頃は眞砂路さんも、あの殿さんを連れまして、浮御堂への出養生。

くま　お梶さんは世間の聞こえを憚つて、あの殿さんをお頭あしらひ。どうぞお頭の御本腹あるやうと、色々との心遣ひ。

みれ　どう手を盡しても直らぬ御病氣。ほんに氣の毒なもので

兩人　ござんすわいなア。

小雀　なんの氣の毒、ありや、ついやちよつとの病氣ぢやない。もう一生阿呆仕舞ひぢや。

みれ　コレ〳〵、小雀さん、又そんな事云はんして、お梶さんや弟御の、金藏さんに聞こえたら、やかましかりさうな事ぢやぞえ。

くま　ソレ〳〵、常から大事にかけいと、云ひ附けてあるお頭さんの身の上、コリヤ、滅多に惡う云ふ事はなるまいぞえ。

小雀　ぢやと云ふて嘘ぢやなし、命懸けの野暮な仕事は、おいらにさして置いて、お頭は寢たり起きたり、眞砂路どのと引ッ附き通し。一體おいらが晝寢は、目的がなけりやせんのに、兎角あの和郎は樂寢ばつかり。

　卜此うち橋がゝりより足柄金藏、ぼつとせの木綿やつし、手玉網と釣の道具を持ち、門より出かけ、聞いてゐる。

自體生れ附いた土阿呆、おいらが仲間の頭と云ふも勿體

ない。爰のお梶さんも女子でこそあれ、おいらが樣な者を、大勢使ふ頭の癖に、兄弟と云ゃァ足柄金藏、九州路へやつてある筑紫の權六、その次は、この小雀。この大粒の頭を除けて、あれが何品にやしよの頭、ア、ぐにやついた生れ附き、あれが本の芋頭と云ふものぢや。

ト此うち、網道具を捨て、小雀が後へ來て

金藏　ほんにさうぢや。

小雀　ナント、芋頭とはよからうが。俺が又お梶さんや足柄どのなら、あゝ云ふ芋頭をやめにして、頃合ひなしつかりとした者がある。それとアノ眞砂路どのとを女夫にして、頭を勤めさすのぢや。

金藏　ハア、、そりや誰れぢやな。

小雀　誰でもない、俺ぢや。

金藏　ヤア。

小雀　サア、この堅田の小雀を頭にすると、仕事はようする、恰幅はよし、恐らくどいつも不足あるまい。

金藏　さうすれば何頭と云はれるぞ。

小雀　ハテ、どんな野暮が押しに來ても、滅多に動かぬ、堅いと云ふて方々の金頭。

金藏　そんなら小雀、我れを頭に直さうか。

ト前へ出る。小雀、心附き、金藏を見て

小雀　ヤア、こなさんは金藏どん。

ト愕りする。

金藏　ヤア、方々の金頭どの。

小雀　ヤ、そんなら最前から。

みれ　奥から出て、相手になつてゐやしやんした金藏さん。

くま　それとも知らず、色々の事を云ふて、テモ、よい氣味なう。

小雀　ア、、根性の悪い。それならさうと知らしてくれたがよい。

金藏　アノ、爰な猿松めが。

ト手網にて打据ゑる。

小雀　アイタ、、、、金藏どん、御料簡〳〵。

金藏　イ、ヤ、ならぬ。姉貴が指圖の頭の事を惡うぬかす。おのれ滅多に料簡はならぬ。

小雀　ア、、コレ〳〵、二人の姫達、ちやつと詫言してくれぬかいなう。

みれ　もうよい加減に留めてやらうかいなア。

くま　金藏さん、マア〳〵、ようござんすわいなア。

金藏　イヤ〳〵、どいつも、詫言さらすな、料簡せんぞ。

兩人　サア、さうではあらうか。

金藏　俺がきめた今のお頭、なんによらず云ひ附けを背くまい、惡う云ふまいと誓紙に血判まで取つたお頭の事に、楯つく此奴ぢやに依つて。

ト又散々に打据ゑる。

小雀　ヤレ、痛いよ〳〵。

トほんまの痛みのやうに會ふ樣に泣く。

金藏　おのれ、なまたれさらすと、いつそ打ち殺すぞ。

ト小雀、身を縮める。兩人の女形、金藏を止めて

兩人　料簡してやらしやんせいなア。

小雀　申し、これぢや〳〵。

ト手と足とで拜む。

金藏　ヤレ、その頬桁。

トきつとなるを、兩人、留めて

兩人　そこをわたしら二人が挨拶。

金藏　假にも惡うぬかす蔭口、姉貴に代つて。

ト此うち始終合ひ方。納戸よりお梶、返し前の形にて、出かけ、窺ひゐて、ヅッと出る。金藏は小雀を毆りにかゝる。小雀、逃げる。兩人、留める。この模樣にて、一時に顔見合せ

皆々　ヤア、お梶さん。

かぢ　けたゝましい、なんぢやぞいなア。

金藏　オヽ、姉貴か、最前からの樣子を

かぢ　いんまの先戻つて、納戸口から、小雀が云ひ出す事を聞いたによつて。

金藏　アレ、アノ、姉貴の耳へ入つたからは

かぢ　ア、コレ〳〵、金藏、もう料簡してやつてたも。

金藏　ぢやと云ふて、他の奴等へ見せしめ。

かぢ　ハテ、よいわいなう。小雀が事は構はずと、さうして手下の衆は、皆來てゐるかや。

金藏　オイ、夜明けがたにドヤ〳〵とうせて、六疊でふさつてゐるて。

小雀　コリヤ、皆來い〳〵。お梶さんは戻つて見えた。

皆々　オヽイ。

ト切り戸より岩松、番六、權太、三太、甚九、團八、いづれも返し前の形にて

皆々　お梶さん、眠たうごんせう。

かぢ　イヤ、もう目に癖がついたので、其やうにもないわいなう。

番六　時にお梶さんは、よいまぶでもあつたかの。
皆々　戻りが今朝は遅うごんしたなア。
かぢ　アイナウ、兎角用心が嚴しいゆゑ、思ふ樣な事もない。さうして皆の符徴はえ。
金藏　イヤモウ、昨日も一日かゝつて、よい鳥がかゝりかけても、邪魔が入り、なんの仕出した事もごんせぬ。
番六　この鐵挺の組は馬方となり。
岩松　おいらは又雲助駕籠舁き。
權太　大津八町で名うてのおいら。
三太　晝は馬士、夜は追剝ぎ。
團八　夜商ひ躍り込みは云ふに及ばず。
甚九　掏摸ぱつたりまでやつて見ても
番六　こなんのさんす樣な、まぶな仕事はごんせぬて。
小雀　イヤ、そりやその筈ぢや。この小雀は餘ッ程この商賣では猛々しけれど、以前の樣なぼろい事はなし、やうやう此ころ歸り新參、どうでも仕事は姫の事ぢや。
金藏　エヽ、又小雀めが、ちやは〳〵と差し出くさるか。
みれ　最前叱られた取返しか。
くま　テモ、素早い人ではあるぞ。
小雀　イヤ、兎角郷に入つては郷に從へおやて。

番六　イヤ、その郷で思ひ出した、郷の和郎は昨日の仕事。折角巧うやつた衒妻を振つて仕舞ふし、その跡のりやんこめは、慥かにこちらを詮議にうせう。
金藏　なんぢや、さぶがおいらを詮議にうせるか。
小雀　コリヤ、又づきの巡りぢやあるまいか。
皆々　エヽ、鈍緣の惡い事云ふない。
かぢ　ムウ、若し侍ひが詮議にとあれば、油斷のならぬお頭の身の上。皆の衆、今日は遠くへ散らずと、この界隈へまいついて、サアと云ふたら用船で浮御堂へ駈けつけて、お頭夫婦を大切に、合點かえ。
小雀　オヽ、俺は其さぶめがうせるを張つて色づかさう。
金藏　コリヤ、小雀、どこへ行く。
小雀　ハテ、山中まで行て、さぶめがうせるを。
金藏　そりや無駄骨ぢや、よしにせい。
小雀　デモ、最前の俺が縮尻り、取返しに一働き。
金藏　イヤ、以後嗜めば料簡してやらう。
小雀　そりや忝い。
金藏　それよりは姉貴の云ふ通り、その手合ひにとつくりと云ひ合して置け。
小雀　オヽ、そりや合點ぢや。

かぢ　ハテ、お前等二人は、いつもの樣に浮御堂へ行て、お頭夫婦の世話を。
峰熊　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。
小皆　そんならお二人。
金藏　早う行け。
皆々　オヽイ。

ト小雀先に、番六、手下皆々、向うへ、お峰お熊、橋がゝりへ入る。あと合ひ方。お梶、金藏、殘つて

かぢ　あゝして置けばマアよいが、女子の身で大膽な、アノ大勢の手下を廻し、道ならぬ盜賊の生計も、死なしやんした夫の遺言。御主人光秀さまの忘れ形見、皐月姫さまへの忠義の一つ。
金藏　されば、この安田作兵衞が兄弟と云ふは、こなたの夫石川傳吾どの、後の假名は盜賊五右衞門。この身は矢田平と變名して、眞柴の家へ奴奉公。思ひ出だせば去年の三月、四方天但馬どのには、岸田民部と變名して、折角忠義の旗擧げをと、思ふに甲斐なく、久次淀町がためにこれも討死。五右衞門どのにはその前年、釜煎りの罪にてこれも先立ち、殘つた者は主君の姫君と、嫂のお梶どの。
かぢ　サア、この身は先年光秀公、小栗栖にて御最期の砌り、姫君を抱きしまゝ、危ふい所を切り拔けて、時節を待つうち姫君を見失ひ、もとの夫は石川村で、傳吾と呼びし郷士の胤、後には盜賊五右衞門と、名を改めてこれも最期。その遺言には、主君の皐月姫さまの行くへを尋ね巡り逢ひ、力になれと今はのお頼み。去年三月、不思議とそれと聞いたゆゑ、身請けをしたそのあとへ、連れてござつたあの戀人は、眞柴の公達久秋どの。
金藏　其ときこの身も跡を慕ひ、顏見合はせなばこなたは兄嫁。主人へ貢ぎの盜賊商賣。我れも人目は弟とやつし、今は足柄金藏と、名も改めてとも〴〵盜賊、何をするも主人のため。それはさうと姫君が、うつ惚れて連れて戻つた久秋は、丁度こつちに人質代り、迂濶に指もささぬ筈。それに此ころ詮議とは、どう思ふても合點の行かぬ。
かぢ　サア、斯う詮議の嚴しい筈。街道筋へは數多の手下日毎にやれど知れた仕事。久秋どのと姫君を、あゝ結構に育てるも、金の要る事ばつかりゆゑ、そなたはもとよりこのお梶、夜々出ては切り取り強盜。昨夜も小關の山蔭で、幼い者を手にかけて、やう〳〵盜つた五十兩のこ

の金。

ト財布を出し、見せろ。金藏、取つて

金藏　オヽ、コリヤ血塗れ、そんならその子悴を。

かぢ　イヤサ、お前は近頃御苦勞ながら、この村の谷川昌成と云ふ醫者まで行て、藥を取つて來て下さんせぬか。

金藏　スリヤ、アノ、いつも來る醫者の所で。

かぢ　この五十兩で金も揃へば、約束の藥をば渡すやう。

金藏　オヽ、合點ぢや、呑込んだ。

かぢ　ちつとも早う、欲しうござんす。

金藏　オヽ、直ぐに行て取つて來う。

かぢ　オヽ、そんなら足柄さん。

金藏　ドリヤ、一走り行て來うか。

ト唄になり、金藏、右の金の財布を門口に捨て、思ひ入れあつて、橋がゝりへ入る。お梶、跡を見て、守りを出して

かぢ　マア、あれで、藥の金は調ふたが、夫に呑ます妙藥には、十に足らぬ男子の血汐と、壯年の男女の血汐、この三つを合して、呑まさねば叶はぬとの事。昨夜小關で、只一思ひに手にかけた幼な子は、笈摺かけた巡禮姿。その懷から落ち散つたこの守り、石川村の傳吾が悴五郎市と、見覺えのあるこの手跡は、夫の形見。去年の春家來五郎七に預けたが、どう云ふものでこの邊りへ。若しあの巡禮が、五郎市であつたらどうせうぞ、どうしたらよからうぞいなう。

ト立ちつ居つして、愁ひのこなしにて、泣き落とす。向ふより千菜山珍才、和尚の形にて、後より同宿五人皆麻の法衣、頭巾の上に坊主笠を着て、脚絆、草鞋がけ。珍才、千菜山と書きし幟を持ち、先に立ち、同宿一、二、は鉦を鳴らし、三四五は太鼓を打ち、右の人數、太鼓念佛、後より男一人、佛性箱を擔ひ、附き出る。

珍才　京都今出川千菜寺本堂建立。

ト云ひ／＼本舞臺へ來り、門口にて太鼓念佛囃す。お梶思ひ入れあつて

かぢ　エヽ、心の揉める最中へ、太鼓念佛はさうがましい。通つて下され／＼。

ト これにて念佛をやめて

珍才　これは一通りの修業ではござらぬ。久吉さまへ千菜を差上げた、その恩賞として陣太鼓を拜領して、許しを受けた太鼓念佛。

同三　干栄の文字を其まゝに、干栄山光福寺と寺號を名乘る。
珍才　干栄寺ともこれを名付く。
同二　京今出川東の河原に、御朱印の地面を賜はり、衆生濟度の融通念佛。
同四　この近江路を修業に廻るも、功德をすゝむる佛法の世の中。
珍才　利劍卽是彌陀名號の功力を以て、二世安樂の
皆々　供養々々
かぢ　ほんにこの守りばかりか、あまたの人を……先祖の佛へ追善供養。
　ト立つて門口へ行て
イヤ、御出家達、ちと志しの供養もござれば、暫らくこれへお入りなされて
珍才　佛事追善は出家の役目。
かぢ　と申して大勢の御出家達。
　ト表へ出て、切り戸口を敎へ
あの露地をお入りなさると、六疊の小座敷。あれへございつて
珍才　一休み仕らう。

皆々　愚僧どもゝ、草臥れ休め。
かぢ　ゆるりとお休みなされませ。
珍才　サア、皆おぢやれ〳〵。
　ト珍才に皆々附き、同宿五も附いて、露地口へ入る。又在郷やうの合ひ方になる。向うより帶刀、以前の形に簑を着け、三度笠を持ち、後より五郎七、泣く〳〵附き出て、花道にて
五七　オ、お侍ひ樣、ダ、段々、オ、お世話になりました。
帶刀　なんの〳〵、旅と申すものは相互ひ。殊に連れの小兒を死なせ、さぞ賴りがあるまいが、いつ迄申しても返らぬ事ぢや。もう諦めたがよいて。
五七　サ、ソ、その、ア、諦めは、ツ、附けても、イ、行た先で、ド、どうも云ひ譯が。
帶刀　ぢやと申しても仕方のない事。もうコレ、爰は堅田の浦、身どもゝこの邊に用事あれば、サ、先づ身どもに、附いて來やれ〳〵。
五七　カ、河內の、イ、石川村、サ、三界から、ワワ、わざ〳〵來て、ム、慘たらしう、コ、殺されると云ふは、ナ、何事ぞ。

ト泣く〳〵本舞臺へ來る。帶刀、此うち、こなしあつて

帶刀　ムウ、お手前の在所は、河州の石川村とか。

五七　ハ、、ハイ左樣で、ゴ、、ござりまする。

ト云ひながら、フト門口に落ちてある財布を見附け、拾ひ上げ

テ、、てもよう似た、サ、、財布。オ、、、ソ、、さうぢや、ワ、、和子の首に、カ、、かけさせて置いた、コ、この財布。

ト色々改める。

帶刀　ナニ、その財布が、小兒の所持とな。

五七　コ、、この財布が、チ、、血だらけに、ナ、、なつて、コ、、爰の、カ、、門口に、ス、、捨てゝあるからは、ワ、、和子の、カ、、敵は、マ、、正しくこの家。ソ、さうぢや。

ト、キッとなつて

モ、モシ、チヨ〳〵ちよつと、マ、、待つて下さりませ。

帶刀　オ、サ、事に依らば身共もとも〴〵、吟味いたしてくれう。早う〳〵。

五七　ハ、、ハイ。

ト辭儀して

ユ、許さつしやりませ。

ト帶刀は門口に立ち、五郎七は門口を明け、入つて、お梶と顏見合せ

かぢ　ヤア、そなたは、

五七　ア、、あなたは

かぢ　五郎七ぢやないか。

ト恟りの思ひ入れ。

五七　オ、、お家樣。

トこれも恟り。

かぢ　五郎七かいなう。

トはつとこなしあつて、若しやと云ふこなしにて、門口へ行て見て、ふと帶刀を見て、恟りして

コレ五郎七、あのお侍ひ樣は。

ト後へ戻り、五郎七に問ふ。五郎七、急きこみ、物の云へぬこなし

五七　イ、、イヤ、ア、、あなたは、オ、、大坂から、ダ、ダ、段々と

ト急げば急ぐ程物の云へぬこなし。帶刀、聞きかねて

帶刀　イヤ、女中、今朝未明より、それなる仁と途中に於いて近附きになり、參りかゝつた旅の者でござるて。

五七　セ、、せめて、オ、、お茶なりと

かぢ　それはマア、ようお連れ下されました。マア〳〵、こちらへお入りなされて、お茶莨なりと。

帶刀　然らばお詞に從ひ、暫時休息を願ひ申す。

トずつと進つて、上手に座る。お梶は莨を差出す。此うち矢張り、お梶は、若しや子供を連れては來ぬかと危ぶむ思ひ入れ。五郎七は術なきこなし。お梶、こなしあつて

かぢ　サ、、五郎七もこれへ寄りや。扨てマアこなたには段々と禮を云はねばならぬが、去年の春、五郎市の身の上を頼んで、そなたに預けてから、毎日々々、思はぬ事はなけれども、つい便り音信をせぬ、氣強い者ぢやと思やらうが、何事も堪忍してたも、こらへてたも、謝ります〳〵。

ト五郎七、術なきこなしにて、色々思ひ入れあつて

五七　ア、、、モ、、勿體ない。ナ、、なんの、ウ、ウ恨んでよい物でござりませうか。タ、タ便りのないのは、オ、、お達者なと、オ、、思ふては、イ、、居ながら、ワ、、和子樣が、マ、、毎日、オ、、お母樣に、アア、逢ひたい〳〵と、セ、、せがまつしやるゆゑ、ソ、、それで、ワ、、わざ〳〵、キ、、來ましたのぢや。

かぢ　オ、、。さうであらうとも、年齡も行かぬ者を、よくよくに思ひやればこそ、そなたの世話。さうしてその五郎市は、どうしました。

五七　サ、、、、、ソ、、その和子は、コ、、子供ながらも、シ、、信心者ゆゑ、コ、、今度、キョ〳〵〳〵京へ行く、ミ、、道も、サ、、西國の、フ、、札所を、メ、、メ巡り、コ、、この堅田まで、イ、、往たら、ミ、、三井寺や、チ、、竹生島へも、マ、、參りたいと、イ、、云はつしやるゆゑ、オ、、笈摺きせて

ト云ふうち、お梶おろ〳〵して

かぢ　ヤア、あの五郎市が、巡禮がしたいとて、アノ、笈摺を着せてとか、アノ、笈摺を。

五七　サ、、、、ソ、、それから、ア、、後は、ク、、口に、ホ、、頬張つて、イ、、云へる事ぢや、ゴ、、ござらぬわいの。

ト大聲上げて泣き落す。お梶もわつと泣きかけ帶刀を見て、ちやつと思ひ入れ。帶刀、始終思ひ入れあつて

帶刀　扨ては夜前、その男が見失ひ、過ちさせし巡禮姿の幼子は、この女中の子息であつたか。
かぢ　スリヤ、アノ、あなたも御存じでござりまするか。
帶刀　如何にも、今朝より道連れとなり、詳しう聞いた小兒の最期、小關越の山蔭にて、山賊夜盜の類にや、路用を掠めんためと見え、小兒を始め二人の雲助、物の見事に切り殺しあつたわい。
かぢ　スリヤ、アノ、小關の山蔭で、五郎市始め二人の雲助。アノ、そんなら矢ッ張り、ホ、ホイ。
ト當惑のこなし。五郎七、尤もぢやと云ふこなしにて身を跪き、口を抓つたりして
五七　ゴ、、御尤もだ、イ、、云ひ譯がないわい〳〵。
ト色々こなしあつて
キ、、、、
ト云はうとしても物の云はれぬこなし、色々あつて、さうぢやと云ふ思ひ入れにて、硯箱取つて來て、懷より塵紙出して
コ、、、、
ト揮毫を叩き、右の紙へ書いて見せる。お梶見て
かぢ　ナニ、去年和子を預かつた時、養育代の五十兩は、粒三文も遣はさず、首にかけさし昨日夕方、大津八町で駕籠に乘せ、土産に買へとせがましやつた大津繪を、來る道にて取落とし、ヤレ、取つて來い、早うぢやと、後先構はぬ子供のやんちや。
ト讀む。お梶、向ふを見て
そんならその大津繪を
トこなし。五郎七、頷く。帶刀、引取つて
帶刀　その男が、取りに歸つたそのうちに、十町ばかりも道を遲れ、探せど邊りに影もなく、詮方盡きて入り込みの、小路々々を尋ね彷徨ひ、今朝小關の山蔭にて、見當る死骸はその小兒。折節身どもゝ行き合し、旅にて大事の預かり子を、人手にかゝつて死なせし悲しみ、餘り不便と存ずるゆゑ、共々身どもゝ力となり、志賀の墓所へ假送り、致させ來たる證據は身ども。樣子と云ふは斯うでござる。
かぢ　そんなら五郎市は、矢ッ張り本間に死にやつたかいなう。
ト大泣き。五郎七、右の財布を出し
五七　所で爰へ參つたるところ、和子の首にかけさして置いた、この財布が血だらけになつて、爰の門口に落ちて

あつたは、敵の手懸り。なんでも敵は、この邊りにゐるに違ひあるまい。詮議の仕様は御座りませぬか。

ト書いて、我が鼻を欹へ、握り拳して、財布を打附け

五七　俺は口惜しい〳〵〳〵。

ト泣く。お梶、色々ぎつくりのこなしあつて、共におろ〳〵して

かぢ　オヽ、その歎きは尤もぢや、道理ぢやが、神ならぬ身は情なや、現在我が子の五郎市とも知らず

トうつかり云ひかけ、又帯刀の方へ心附き

サア、現在我が子の五郎市が、人手にかゝつて死にやつたとも知らず、子供と云ふ者は、一年經つと見違へる程大きうなつてゐやらうと、樂しんだ甲斐もなう

ト色々愁ひを堪へるこなしあつて

こりやマア、なんたる業ぢやぞいなう。

ト大泣きに泣き落とす。五郎七堪り兼ねて、刀に手をかけ、死なうとする。お梶、慌てゝ留め

コレ、五郎七、刃物に手をかけなんとしやるぞ。必らずともに早まるまいぞ。

五七　ヂヤ〳〵ぢやと云ふて、カヽ、敵は知れず

かぢ　イヤ、敵は知れてある。

五七　エヽ、エイ、ソヽ、そりやどうして。

かぢ　サア、滿更敵が、知れぬとも云はれぬは、コレこの財布。然も血だらけになつてあれば、大概この邊の者に相違はあるまい。それぢやによつて、敵を詮議し、そなたに討たす。サア、わたしも討つ。ぢやに依つて、マアマア、待ちや。

五七　ソヽ、そんなら、タヽ、大概、カヽ、敵の、テ・ヽ手筋が

かぢ　知れるは追ッつけ、それ迄は、必らずともに短氣を出さずと、奥へ行て回向なりと、してやつてたもいなう。

ト刀を引取り、泣き落とす。五郎七、思ひ入れあつて、やう〳〵止まり

五七　ナヽ、成る程、カヽ、敵の、テヽ、手筋の、シヽ、知れるまでは、シヽ、死に急ぎは、ソヽ、損ぢや。

帶刀　何さま、それよりは佛間へ參つて、香花なりと取つて遣はすが佛のため。

かぢ　ソレ、あなたもあのやうに仰しやる事、佛間へ行てそなた回向を。

五七　ユヽ、行くならば、ユヽ、行きませうが、カヽ、必

らず敵を
かぢ　後かた迄に尋ね出し、きつと敵を取らすわいなう。
五七　ソヽ、そんなら、アヽ、あなた、コヽ、これでゆる
りと
帶刀　身どもゝ程なうお暇申さう。隨分短氣を出さぬや
う。
五七　ハヽ、ハイ。ナヽ、南無阿彌陀佛〳〵。
　ト合ひ方になり、五郎七、愁ひ乍ら、上手の屋體へ入
ろ。お梶、ぢつと愁ひのこなし。帶刀、思ひ入れあつ
て
帶刀　ハテ、忠義一途の正直者、あの仁の心底と云ひ、主
の愁傷察し入り、氣の毒千萬な。
　トこれにてお梶、心附くこなしにて
かぢ　段々と御深切、お世話になりまするお方樣。悲しみ
に紛れお構ひも申しませぬ、無禮の段、眞平御免下さり
ませう。
帶刀　ナンノ〳〵、餘ほど休息もいたしたれば、足の草臥
れも休まり申したが、近頃御無心ながら、空腹にござる
から、なんと湯漬けをお振舞ひ下されまいか。
かぢ　オヽ、お易い事、申し附けませう。暫らくお待ち下さ
れませう。
帶刀　それは祝着に存じまする。
　ト兩人、氣味合ひある。又在鄉唄になり、向ふより石
場の五郎藏、木綿褞袍、博奕打ちの形にて、出て來て
五郎　なんでも今日は、めつきしやつきせにやならぬ。內
にけつかればよいが。
　ト捨ぜりふにて、本舞臺へ來て、ズツと內へ入り
お梶、內に居るか。來たぞよ〳〵。
　ト仰山に云ひながら、ふとお梶を見て
オヽ、珍らしい、內に居たか。
かぢ　誰れぢやと思ふたら石場の五郎藏どん、なんと思ふ
て
五郎　イヤ、なんとも思はずに來た。コリヤお梶、餘り見
ぬ顏すなよ。
　トどつかりと眞中へ大胡坐を搔き
この五郎藏ぢやとて、來るすべがあつて來たのぢや。が
い〳〵と頤をあがらずと、肝魂を臍の下へ押附けて挨拶
さらせ。
かぢ　なんぢやマア、きよと〳〵しい。こなさんの云ひ前
は、大概こつちに知れてゐる程に、今日はマア、去なん

せ〳〵。

五郎　イヤ、去ぬまいわい。段々と釣られた貸しのこと、今日はどの道、せりふせにや聞かんのぢや。さう思ふてけつかれ。

　ト胴亂より煙管を出し、帶刀の前の莨盆を引寄せ、すぱ〳〵莨をのむ

かぢ　これは又仰山な云ひやう。見てぢや通りにお客もあり、ちと靜かに物を云はんせいなう。

五郎　ぬかすない〳〵。その客のあるのが猶附け目ぢや。大聲あげて唸つても、怯えぬ樣な衒妻、なんぼうでも去なぬが、どうするえ。

かぢ　ハテ、是非がない、去にとむなきや、勝手にさんせ

五郎　さうぬかしや破れかぶれ。誰れぢやと思ふ、五十三驛を股にかけて、顏の賣れた石場の五郎藏、去年の秋から、大津の立場へ、臺座を替へてまだ新顏から、雲仲間のお大將だ。云ひかかつた事、素手で通した例しがない。高でわれが弟の金藏に、博奕場のいき先、百兩と云ふ大枚の取替へ、その金の催促すりや、姉の我れが物云ふて、屹度百兩戻さうとの事。そんな甘ちい事聞いて居る俺ぢやなけれど、しぶ皮のむけた居候の衒妻、もとは九條の女郎とやら。若し金を返さぬ時には、あの衒妻を俺が女房におこすかと云や、どうなとせいと當座遁れ。今日が日までも金は返さず、娘もおこさうとはぬかしやアがらず、こりやおのれ等姉弟よつて、この五郎藏ざまをふづくるのか。斯う云ふが切なけりやア、百兩を戻すなりと、居候の衒妻を渡すなりと、二つに一つの返事さらせ。譯の立つまで石場の五郎藏、爰の內に居催促ぢや。さう思ふてうしやアがれ。

　ト睨め廻して、大聲にて云ふ。お梶、そ知らぬ顏にて

かぢ　なんとお客樣さつい冷えやうでござりまするなア。

帶刀　殊の外案じ申すて。

かぢ　ハイ〳〵

五郎　コリヤ、納めない〳〵。衒妻の癖に、テモ、不貞不貞しい土性骨、幸ひ來てゐるお客の前、どえらい事をぶち撒いてやらうか。表向きは美しう暮してゐれど、大勢の手下を廻し、女子の癖に掏摸商賣、或ひは追剝ぎ人殺し、夜盜を働く祇園のお梶、イヤサ、おのれは、大盜人ぢや。

　ト此うちお梶、ぢつと俯向く。帶刀、思ひ入れ。

つい斯う云や、金を戻さぬわんざんとも思ふであらう

が、この五郎藏は嘘は云はぬ。うぬが身に覺えがありやこそ、臆んだものが潰れたともぬかさぬ。衒妻、マア、返事はどうぢや。

ト帶刀聞き兼ねるこなしにて

帶刀　イヤ〳〵、只今聞けば、金子の催促よりさま〴〵の惡名、傍で聞いても聞きづらい仕儀、何事を申すも、まつと靜かに申すがよい。

五郎　貴樣誰れぢや。

帶刀　身どもはこの家に近附きではなけれども、參りかゝつた身の不肖、近頃差出がましけれど、金の抵當に娘を嫁取る約束とあれば、先づ仲人も入れ、賴みも遣はし、吉日良辰を選ばで相成るまい。

五郎　オヽ、賴みの印し、今やらう。

ト懷より、血の附いたる返し前の笈摺を出す。橋がかりより金藏、戻りかゝり見てゐる。

お梶　サ、これが結納ぢや、きり〳〵受取れ。

かぢ　ナニ、賴みの印し。

ト思ひ入れあつて、笈摺を見て、愕りして

ヤア、コリヤこれ子立の笈摺。

帶刀　殊に血汐に染めたるは、正しくさつきの話しの巡禮

五郎　ナント、心に、覺えがあらう。

かぢ　スリヤ、この笈摺を、五郎藏、こなたが。

五郎　持つて來たのも、外ならん、敵を貴樣に討たしたさ

かぢ　ヤ、ヽ、なんと。

五郎　昨夜小關の山蔭で、さもむけつしやうに殺らしてあつたこの子倅。傍には俺が子分厄病めと猫舌め。こいつら二人も殺らしてあるは、大概知れたおぬしの仕事。子分の奴等が敵とて、餓鬼を締めたは路用を盜るため、かなし〳〵も四五十兩は丈夫の仕事。この譯口は次にして餓鬼が着てゐた笈摺は、しかも河内の石川村、同行二人は子分の奴等、流れ灌頂の代旦那、堅い石場の五郎藏が結納の印しぢや。コレ、お梶、こりや納めずばなるまいがな。

トキッと云ふ。お梶、色々切なき思ひ入れ。帶刀、こなし。此とき金藏、ズッと出て

金藏　その賴みは、この金藏が受取らう。

トよき所へ座る。五郎藏、見て

五郎　オヽ、金藏、もと百兩の借り主は、盆蓙仲間の足柄金藏。出難い場所へ、よう出たなア。

金藏　オヽ、出る、ずんと出るのぢや。借つたに相違ない

百兩、若し金を返さぬ時は、一人の姪を渡さうと、初手からの約束通り、貴樣にやれば云ひ分あるまい。

かぢ　アヽ、コレ、金藏、それをやつては。

金藏　大事ない。もとから借りの其うへに、頼みの印しはその笈摺、彼れこれ事の縺れぬうち、得心さして姪をやり、丸う濟ますがよさゝうなもの。姉貴、とつくりとまア、思案をさんせ。

かぢ　ムウ。

ト思案のこなし。帶刀も思ひ入れあつて、懐より百兩包みを出し

帶刀　この縁談預からう。

三人　ヤヽ、なんと。

帶刀　いま餘所ながら聞く所、あの五郎藏とやらが百兩の金子に替へ、嫁取らうと云ふこの家の娘、縹緻も無やと思ひやり、この百兩を身どもが用立て、秘藏の娘を申し受けたい。

かぢ　スリヤ、一目も見ぬあの娘に

金藏　アノ、百兩を、がらりと出し

五郎　この場の臺詞をいたすとは

三人　ハテ、變つた事なう。

帶刀　いづれの道にも金子の抵當に、渡さねばならぬ娘とあれば、この百兩を用に立て、身どもと縁を組む方が、よかりさうなものぢやがや。

トお梶、こなしあつて

かぢ　心ありげなこの百兩、どの道返す金なれば、娘を抵當にこの金は、きつとわたしが借り受けませう。

ト財布を取上げる。金藏、これを取つて

金藏　サア、百兩は出來て來た。五郎藏に借つたは盆の上、場所へ行た上のるかひぞるか、手が合ふたらば倍にして、あのおざぶへも返す分。サア、一軍出かけようかえ。

ト懐へ入れうとするを、五郎藏、引ッたくつて

五郎　どつこい。さうはなるまいて。今日の切端のこの百兩、まだ添へ物に笈摺を、附けてやつたがこつちの仕組。そこで我れらが取つて置くのぢや。

金藏　デモ、その金は

五郎　云ひ分あれば詮議をせうか。

金藏　なんの事ぢや、忌々しい。

五郎　時にお梶、斯う改めてあの衒妻、女房に貰ふ花聟が敷金の百兩、取る氣はないか。

ト右の財布をお梶の前へ投出す。お梶、こなしあつて

かぢ　一旦渡した百兩を、又改めて敷金に、入れても望む五郎藏どん、納めて置くまい物でもなけれど、それではあなたへ納まりが

ト帶刀の顔を見る。帶刀も思ひ入れあつて、財布を取り

帶刀　扱ひ金は身どもへ納め、改めて仲人いたさう。

金藏　なんと。

帶刀　ハテ、見す／＼用立つ百兩を主の手より弟へ渡し、五郎藏とやらへ償ひしを、又改めて敷金とは、ア、通れぬ理の當然。假令主は得心でも、肝心の娘が不承知なれば、納まつて納まらぬこの金子。そこを存じて仲人が、首尾よう縁談調ふまで、身どもの方へ預り置かう。ナント、女、さうではないか。

ト財布を懐中する。

かぢ　不思議の御縁で五郎七が、お連れ申したお侍ひさま、見ぬ戀に惚れたとあつて、用立て給はる今の金子。

金藏　姉の物は弟の物、姪をやらうと取つた金。

五郎　初手から俺が貸したゆゑ、俺へ取つたも算用詰め。

かぢ　その又金を結納ぢやと、改め贈つた五郎藏どの。

帶刀　娘が得心するまでは、この仲人が預つた。

金藏　金は手着かず、もとの百兩。

かぢ　廻り廻つて

金郎　虎の子渡し。

帶刀　なんと申し分は、ござるまい

かぢ　樣子ありげなこの場のしだら。

金藏　とき／＼として合點が行かぬ。

五郎　敷金取つたらこの家の花聟。

かぢ　ハテ、何事も後までに

帶刀　仲人やら

金藏　小舅やら

五郎　一家は揃うた。

かぢ　奥で改め

四人　ドリヤ、近附きにならうかい。

かぢ　ござんせいなア。

ト唄になり、思ひ／＼の心意氣にて、お梶、帶刀、は上の屋體へ行く。金藏、五郎藏は納戸へ入る。跡合ひ方。五郎七、納戸より、ソツと出て

五七　サヽ、最前、オヽ、お家さんの、コヽ、詞つきと云ひ、ヨヽ、樣子ありげな、サヽ、さつきの侍ひ、コヽ、殊に、イヽ、今來た、ワヽ、惡者が、シヽ、證據に持つて來た、アヽ、アノ笈摺、ワヽ、和子の敵は、フヽ、二人のうち。

ト小雀の綯ひかけた荒繩を取つて來て

ヒヽ、引ツくゝつて、ワヽ、和子の敵、ソレ。

ト行かうとして、フト心附き

待て暫し、相手は侍ひなり、今一人は、一筋繩では行かぬ惡者。殊にこれぞと云ふ證據とてもなく、迂濶に踏み込んだら事の破れ。

トちよつと思ひ入れあつて

と云ふて見遁し置くも殘念。

ト又思案して

こいつは一番、思案もんぢやわい。

ト繩を投げて、とんと下に坐り、手を組み、思案のこなし。この見得よろしく、チヨン〳〵

返し

造り物、三間の數寄家、見附け唐紙、上手障子屋體下手、落間、建仁寺垣、植込み、いつもの所に柴折門、すべて奥座敷の模樣、爰にお梶ゐる。この見得よろしく、七つの半鐘にて、道具納まる。

〽既にその日も暮れ近く、日影堅田に雁がねの、渡る掉さへ揖たえて、一人侘しく奥の間に、越し方わぶる獨り言。

ト上下打合せの合ひ方になり、お梶、こなしあつて

かぢ　今更云ふにはあらねども、思ひ廻せばこの身ほど、世に味氣ない者が又とあらうか。女子のざいに恐ろしい、盗み騙りもお主へ御奉公。頼りに思ふ現在の

〽夫は遂に釜煎りの

死罪も餘所に熱湯の、涙の種の五郎市は、せめて誠の人にして、行末永う夫婦の者が亡き跡の、問ひ弔ひも頼まんと、それとは云はず譜代の家來、三二の五郎七に頼み置き、只姫君の御介抱、又二つにはお貢ぎやら、まさかの時の軍用と、集める金銀財寶も、我が身に附けぬ夜毎の斬り取り。

〽廻る因果は小車の、この世からなる劍の山。

現在生みのこの母が、神ならぬ身の、白刃にかけ、いとし可愛の一人子を

〽殺すと云ふは何事ぞ。不便の者よと血に染まる、笈摺顔に押當てゝ、人目なければ聲を上げ、泣き崩れ伏し沈む。稍あつて氣を取り直し

ア、泣いたとて悔んだとて、歸らぬ我が子が死出の旅、賽の河原で今頃は

〽一つ積んでは父のため、二つ積んでは、その母は、嘸鬼よりも

その時は

〽恐ろしかつたであらうぞいなう。

トのりになる。

四十九日が其うちは、家の棟離れぬ魂魄の、宙を彷徨ふ魂の

〽その家の棟はどこぞいなうと、肉身分けし恩愛の、我が子の別れに取り亂し、前後不覺に見えけるが、やうやう涙押し拭ひ

位牌代りは形見の二品、せめて未來を助かるやう、心ばかりの手向け草。さうぢや〳〵。

〽佛間へこそは

ト送りにて、しを〳〵上手屋體へ入る。直ぐバタ〳〵にて、奥より五郎七、五郎藏、出て來り

五郎　待て〳〵、待てと云はゞ待ち居らぬか。

五七　サア扨ては、キ、貴樣庇ふのか。よいワ、いつぞ手短かに代官所へ。

ト行かうとする、此とき奥より

同宿　イヤ、兩人待て。

珍才　我が君の御意。

ト同宿五を先に、珍才、皆々、出る。

皆々　扣へ居らうぞ。

ト云ひ乍ら出て來る。

五七　ヤア、あなたは

同五　桃山の執權早川高景と云ふ者。

五七　スリヤ、あなた樣が

五郎　アノ、高景さまで

ト兩人、思ひ入れあつて

兩人　あつたたよなア。

五郎　その高景さまが何故に、この所へ。

高景　斯く托鉢の修行者と姿をやつし、この近江路を徘徊なすも、逆意の輩を詮議のため。

兩人　エヽ。

高景　イヤナニ、五郎七とやら、其方にも尋ね問ひたき仔

細もあれど、先づ差當たる逆賊の詮議。
五郎　スリヤ、なんぞお心當りでもござりまして。
高景　わざ〳〵參つたこの家のうち。
五七　そんなら人殺しの御詮議と仰しやつたが
五郎　その御詮議は取り措いて、逆賊とやらのお吟味とは。
高景　いかにも。シテ、われ達は。
五郎　イヤ、私しは五郎藏と云ふて、しかもぬく〳〵の入り聟。
五七　又私しは、以前召使はれました、三二の五郎七と申します者でござりまする。
五郎　シテ、その逆賊の手がゝりとは、私しどもへその詮議をせいとの事でござりまするかな。
高景　いかにも。逆賊たる明智が餘類、姿をやつし樣を變へ、眞柴の家に敵たはんとする、既に内藏之助と云ふ奴、明智に劣らぬ極重惡人、この者どもを召捕つて、逆磔の刑に行ふ、高景が役目。明智が娘皐月姫は、九條の里の傾城となり、眞柴の公達久秋公に心を懸け、盜み出したる不敵の曲者。又齋藤内藏之助は、もと道三が甥と聞く。君臣の禮を亂し、光秀如き逆賊の、幕下に屬する狼狽者、智勇兼備とは云はれまい。
五郎　イヤ、光秀は士卒を愛し、武將に於いては古今の英雄、況んや齋藤内藏之助、忘れ形見の皐月姫、うか〳〵爰らにまい附いて、詮議の罠にかゝらうか。高景さまには似合はぬ仰せ、トサア、存じまする。
高景　さばかりの勇士、去る山崎の一戰、光秀滅亡と聞きなば、潔く討死も遂げずして、その場を立退き、落人となつて年月送るは、名將勇士でも命ばかりは、惜しいぢやよなア。
五郎　イヽヤ、戰場を斬り拔けしは、齋藤が卑怯でない。一命を全うし、時節を待つて主君の仇、久吉を一太刀なりと恨みんと云ふ、大丈夫の志し。運は天なり、なす事は人にあり、晉獪豫が義心に叶ふ。
高景　愚か〳〵、晉獪豫が智伯が仇、光秀は四海の逆賊、獪豫が例は天地雲泥、譬を引くには足らぬ〳〵。
珍才　本能寺の旅館に於いて、信長公を殺害したる大惡非道。
彌九　主君久吉、朝敵退治の綸旨を請ひ受け、これを攻め討つ。
彌藤　仁義の鋒先鋭くして、忽ち亂るゝ明智が敗軍。

隼人　落ち行く先は小栗栖の、土民原が竹槍にて

甚助　むなしく軀は野外の土くれ。

珍才　主君を討ちたる

五人　天罰神罰。

ト此うち五郎藏、愁ひを隱すことなし。お梶、一々悧りの思ひ入れ。高景と顏見合せ、障子を立てる。

高景　日向守が餘類の者は、無念にあらう。五郎藏とやら、なんとさうは思はぬか。

ト五郎藏、こなしあ云つて

五七　タヽ、高景さまのお入りとて、イヽ、入れ合ひに、クヽ、內藏之助を。

ト行かうとするを、五郎藏、留めて

五郎　イヤ、この家のうちに匿ふた浪人、繩かけさす事、マア、ならん。

皆々　スリヤ、內藏之助を。

帶刀　イヤ、その齋藤內藏之助、逃げ隱れする武士でないぞ。

ト云ひ乍ら、すつと出て、よき所へ居る。

皆々　さてこそな。

ト立上がる。五郎七も寄るを、五郎藏、睨む。五郎七、控へろ。

高景　コリヤ〳〵、人違ひして粗忽いたすな。

皆々　ナニ、人違ひとは。

高景　內藏之助と名乘つて、誠の內藏之助を見出さんとする天晴れの手段、堀尾先生帶刀どの。

帶刀　早川高景どのには、一別以來

高景　御健勝にて、珍重に存ずる。

五七　ソヽ、そんなら、サヽ、齋藤でなうて。

皆々　誠は堀尾帶刀どの。

ト皆々、下に居る。五郎藏、帶刀を見て、こなし。

高景　帶刀どの、シテ、久秋公を伴ひし石川屋眞砂路は、在り所は相知れましたか。

帶刀　去春千鳥の香爐、瓢の旗、一時に紛失なし、御病身たる久秋公の御行くへ知れず、察する所眞砂路は、明智が形見の皐月姬、戀に事寄せ連れ退きしは、我れ我れの鋒先を避けんがための正しく人質。事なく君を取返すまでは、不破伴作と名乘つたる、三好のお胤を假の關白。某役目を蒙り、この近江路へ來かゝる所、大津にて噂を聞けば正しくこの堅田にと、聞くと其まゝ當所へ賴り、樣子を窺ふ今日只今。

五七　ハヽアヨヽ、讀めたわい。クヽ、内藏之助と云ふマヽ、正しくおのれ。
五郎　イヤ、五郎藏は、腹からの駕籠舁きぢや。出しやばらずと扣へて居らうぞ。
高景　合點行かざるこの家の有様、堀尾氏はこれに殘り、かの眞砂路は云ふに及ばず、久秋公を取り得る工夫。
　トこれにて五郎七、後へ寄る。
帶刀　委細畏まつてござりまする。
高景　五郎藏とやら、人相骨柄と云ひ、天晴れ一器量のあるべきもの。明智が餘類、内藏之助が詮議、其方に申しつけん。
五郎　アノ、駕籠舁き風情の私しに、、齋藤とやらの顔も存ぜず、ましてこれぞと云ふ手懸りも
高景　何事も、ならぬと云ふはなきものを、ならぬと云ふはなさぬなりけり。
　ト五郎藏ちよつと思案して
五郎　なるかならぬか、マア、やりつけて見ませうかい。
　ト、ヂヤン／＼と時の鐘鳴る。軍兵、ばら／＼と出て
軍兵　お迎ひ。
高景　我れはこれより坂本の陣所へ退き、何かの用意。いづれも、お來やれ。
　ト高景、立上がり、珍才、皆々、後へ軍兵附き、花道へかゝつて
高景　堀尾帶刀どの。
帶刀　ハツ。
高景　石場の五郎藏。
五郎　ハアイ。
高景　かの柳下惠、とうせき、と云へる二人の兄弟、兄柳下惠は賢人なり、飴を見て老人の口を養ふよき物なりと云ふ。弟とうせきは盜賊を行ふとなし、これ錠に塗りてよからんと云ふ。善の一字も誠その始めの心によりて不善となり惡となる。帶刀どのは久秋公、又五郎藏は内藏之助が詮議、兩人ともにしかと申し渡したぞ。
　ト唄になり、高景、皆々を連れ、向ふへ入る。跡に三人殘つて、顔見合せ。
帶刀　柳下惠とうせきが飴の故事、その、とうせきと云ふは。
　ト五郎藏を見て、こなしあつて
　イヤ、花聟五郎藏どの。
五郎　思ひがけない眞柴の御家來、こなたの願ひは明智の

姬。

五七　ク、、内藏之助が詮議まで

五郎　なんでもしてこい。

帶刀　敵が味方か。

五七　味方が敵か。

五郎　からくり的を見るやうな。

帶刀　ハテ

五郎　心々の

三人　世の中ぢやなア。

ト唄になり、三人こなしあつて、五郎藏、帶刀、納戸と上手へ、別れ入る。五郎七、殘つて

五七　なんぢやご〳〵と、何が何やら、氣の濟まぬ事だらけ。どう思ふても合點の行かぬはアノ五郎藏、マア、彼奴めを、さうぢや。

ト刀を拔いて見て、錆びてあるゆゑ、これでは行かぬと云ふこなしにて、庭石にて研ぐ、此うち金藏、納戸より出かけ見てゐる。五郎七、研ぎ仕舞ひ、ツカ〳〵と行かうとする。金藏、ちやつと立塞がり

金藏　ヤレ待て、五郎七、どこへ行くのぢや。

五七　シ、、知れた事、ワ、、和子の敵を。

金藏　イヤ、五郎藏と云ふは内藏之助、こちの味方で、同志討ち同然。

五七　タ、、誰れでも構はぬ、カ、、敵を討つのぢや。

金藏　ちつさが敵をねらふ事より、マア、さしあたる敵と云ふは、一間に居をる堀尾帶刀。

五七　ソ、、そんなら、ア、、アノ、タ、、帶刀めを。

金藏　討つて捨てるが主人へ忠義。

五七　ソ、、そんならこなたも。

金藏　イヤ、俺や今の高景め、去ぬ道筋を駈け拔けて、手下の奴等を、討つて取るのがいつち近道。

五七　ソ、、そんなら伯父御。

金藏　拔かるな五郎七。

五七　ノ、、呑み込んだ。

金藏　オ、、さうぢや。

〽かしこを指して走り行く。跡には一人五郎七が、あたり窺ひ折よしと、親の讓りの藤卷柄、忠義の刃金草履の寐刃、若し仕損じては事むづかし、欺すに手なしと白鷺の、小鮎を狙ふ拔き足差し足。

ト床のメリヤスにて、色々とあつて、屋體の方へ行く。ちよつとこなしあつて

五七　コヽ、爰の一間に、シヽ、忍んで居るは、マヽ、正しく帶刀。ダヽ、欺し討ちでも、チヽ、忠義の一心。

〽柄も通れと突込む切先、うちにはアッと女の一聲、こは心得ずと引明ける、一間のうちには血に染むお梶、それと見るより恟り轉倒。

〽其まゝ傍へ駈け寄つて、なんと詞もうろ／＼眼、お梶

ヨヽヽ、コヽ、コリヤ、お家樣、ヨヽヽヽ。

は苦しき息をつき。

かぢ　忠義に凝つたるけなげの働き、五郎市を殺したる、敵は目前この通り

〽云ふにこなたは二度恟り。

五七　ヤヽ、ヤア。

かぢ　五郎市の敵と云ふは、現在親のわしぢやわいなう。

五七　エヽヽヽ、エイ。

〽顏うち眺め默然と、夢に夢見し如くなり。手負ひはほつと一息つき。

　ト篠入り

かぢ　ムウ、その驚きは尤も／＼。この身のためには大事の姫君、廓の苦患を救はんため、これ迄の盜み騙り。又あの五郎藏に借つた百兩と云ひ、我が子を手にかけ奪ひ取つた、その五十兩の金と云ふも、姫君樣の戀人たる、久秋さまの御難病、治さうための藥の價。

〽忠義ゆゑとは云ひ乍ら、報ひは覿面、刀の錆。

シタガ、やう／＼手に入れたこの妙藥。

　ト懷より藥を出し、押入れより血汐の入つた以前の壺を出して

得難い藥は手に入つても、今一品の調合には、十に足らぬ幼子の血汐と、盛りの年の男女の血汐。幸ひ昨夜死したる五郎市、又この母と二人の血汐に、今一人の男の血、お役に立てるが忠義の仕納め。

五七　モヽ、もう、コヽ、此うへは。

　ト腹切らうとする。

〽既に自害と見えけるが

かぢ　イヽヤ、そなたは死なされぬ。

五七　トヽ、とは又なぜに。

かぢ　今日につゞまる姫君のお身の上、そなたはわしに成り替り、この血汐とお藥を、姫君へ渡して、かくと告げてたも。

五七　ソヽ、そんならこれを、トヽ、屆けねば、シヽ、死

ぬる事も出來ませぬ。
かぢ　オヽ、姫君の隱れ家は、この濱の浮御堂。ちつとも早う。
五七　チヤ／＼ぢやてゝ、コヽ、此まゝ、ミヽ、見捨てゝは。
かぢ　主の詞を背くのか。
五七　ナヽ、なんのマア、ソヽ、さうではなけねども。
かぢ　さなくば、そなた、ちつとも早う。
五七　オヽ、ソヽ、さうぢや。
ト思ひ切つて行かうとする。小雀かゝつて
小雀　ドッコイ、やらぬ。
〽と支ゆる小雀、エヽ面倒なと突き放し、跡をも見ずに驅けて行く。跡には小雀、口あんぐり。
エヽ、思ひの外な吃めが藪力、雀に藪とは出合ひ物。よいワ、此うへはお梶めを。
〽寄らんとするをかけ隔て
かぢ　ヤア／＼、そなたは手下の小雀。
小雀　ヤア、手下呼ばはり事可笑し。我れこそは高景公の家來、粟津藤太と云へる者、なんと肝がつぶれたか。サア此うへは反逆人の片割れ、首にして恩賞に預からん。觀念いたせ。
トお梶へかゝるを、ちよつと立廻り。危き所へ、五郎藏、ツカ／＼と出て、小雀をポンと當てる。合ひ方きつぱりとなり、お梶、見て
かぢ　ヤヽ、こなたは
五郎　亡君明智光秀公が臣、齋藤内藏之助利之なるわい。
かぢ　スリヤ齋藤どのであつたよなア。
内藏　そちが年頃匿ひ居る、石川屋眞砂路こそ、誠主君の忘れ形見、皐月姫さまに相違あるまい。
かぢ　そんなら疾くより。
ト顏を見る。大小入りの合ひ方になり、内藏之助、ドッカと居直り
内藏　梅の林に入る時は、染めざるにその絹香んばし、君傾城とやつされても、天晴れ備はる貴人のお胤。それにつけても、目指す敵は眞柴久吉。一太刀なりとも恨みを晴らさんと、卽座の手段に討死と僞り、その場を立退き姿を變へ、折を窺ふこの年月。まつたこの一品は、兼ねて語らふ一味の連判。これを以て義の旗擧げ、草葉の蔭から見物いたせ。
ト連判を差出す。

かぢ　ホヽ、頼母しゝ〳〵、齋藤どの、眞柴を討取ることの場の血祭り。

ト刀を取り直して、咽喉を突く。

內藏　女心も丈夫の魂ひ、殘念ながら、身どもが介錯。

ト刀を取上げる。お梶、首さし延べる。內藏之助、エイと打つ。小雀。心附く、遠攻めの頭を打つ。內藏之助、キッとなつて

ハテ、心得ぬ。兼ねて語らふ味方の者が、高景、帶刀を追ッ取り圍む手筈とも覺えず。二品の寶を奪ひ取り返す帶刀めが我れを取り卷く銅羅太皷か。ハテ、小ざかしい

ト內藏之助、空を見上げ、殺氣に氣を附ける。始終遠攻め。

ムウ、火星夭々として盛んなるは、未だ運命盡きざる印し。ムウ。

トきつとこなし。此ときバタ〳〵にて、番六先に、以前の手下皆々出て、

番六　お頭、爰にか。四方八方は眞柴の伏勢。此うちに圍みを斬り拔け

皆々　ちつとも早う、落ちた〳〵。

內藏　なにこれしきにそち達は濱手へ船を廻し、彼の兩人を助け乘せ

皆々　オイ、心得やんした。

內藏　急げ〳〵。

皆々　オヽイ。

ト橋がゝりへ走り入る。バンチャンきびしく軍兵大勢出て

軍兵　內藏之助、動くな。

內藏　ヤア、面倒な蠅蟲め等。うぬ等が手に合ふ利之ではない。すさり居らう。

軍兵　捕つた〳〵。

ト大勢を立廻り、皆々追ふて入る。チョンチョンにて浪幕かぶせる。矢張りドンチャンにて、橋がゝりより軍兵大勢に、金藏、立廻り。

軍兵　安田作兵衞、やらぬ。

作兵　何を小癪な。

ト鳴り物替つて、華々しく、皆々相手に立廻りあつて下手へ追ひ込み

心がゝりは皐月姬さま。さうぢや。

ト凜々しく、向うへ走り入る。チョン〳〵にて、返し

造り物、正面上手よりにて、二間の本堂、垂木、柱高欄、ともに結構にあるべし。東へ續きの回廊、高欄附き、各々かけ造りの見得。奥、打抜き、湖水の景色、近江八景、よろしく飾り附け、右本堂に、久秋、儼ひ居るを、眞砂路、軍兵二人を取りをさへ居る。廊下の上に五郎七、以前の形にて、これも軍兵二人を捻ぢ伏せ、キッとなつて居る。座より月出る舞臺前、低き浪手摺。所々に篝火を焚き、一聲、浪頭、遠攻め打込みにて、浪幕切り落とし、道具納まる。

ト眞砂路、五郎七、よろしく立廻つて、ポン〳〵と投げ

眞砂　乳母が噂の五郎七とやら、この所へは何用あつて。

五七　オヽ、お梔さまには、ムヽ、無慘の御最期。イヽ、今はの際まで、アヽ、あなたを案じ、ヒヽ、久秋さまのナ、ヽ、難病を治す藥は、コレ、コヽ、この一品。マヽヽ又この、ツヽ、壺は、フヽ、二人の血汐。

ト壺と藥を眞砂路に渡す。

眞砂　ヤヽ、ヤア、スリヤ乳母も自らゆゑ、もう死にやつたか、可哀やなア。

五七　此うへは今一人の男子の血汐を調へ、ちつとも早う久秋さまへ。

眞砂　シテ、今一藥の男子の血汐は。

五七　オヽ、お氣遣ひなされますな。その生血は、コヽ、この五郎七。

ト刀を引抜き、腹を切る。眞砂路、恟りして立ちかゝり

眞砂　こりや何故に、そなたが生害。

五七　うつかり思ふたこの身の生害、最前死なうとした時に、十に足らぬ小兒とは、幸ひ和子の五郎市さま、壯年の男女とは、一人は奥樣、この二人は揃ふても、今一人の男子とは、我れを教へし詞とも、知らず居たは片輪の悲しさ。どうぞ忠義に捨てる命、お役に立てゝ下されいなう。

ト吃らずに云ふ。眞砂路、恟りして

眞砂　ヤヽ、マア、そなたの言語、明らかになつたるは

五七　ヤヽヽ、ヤヽヽヽヽ、こりや物が云へるワ〳〵。さては癇の病ひにて、言語吃り、物云ひ自由に云へなんだか、今どん腹をかツ捌くと、癇の釣り緒を切つたゆゑ、生れ附いたる吃りも直り、物ごと自由に云はるゝか。

眞砂　スリヤ、忠義のために、三人が命を捨てゝ、
五七　サア、物はためし、ちつとも早く。
眞砂　合點ぢや。
ト愁ひながら寄らうとする。此とき上手より、岩松、番六、團八、權太、四人上がつて、久秋と眞砂路にかかり、甚九、三太は、五郎七にかゝり、久秋は震ふ。眞砂路は支へる。三方立廻りにて、此うち、前に船を出す。岩松、番六は、久秋を差し上げ、前の船へ飛び込む。眞砂路、ついて行かうとする。又二人支へる。身をあせりながら、拔き切り、同じく船へ飛び込む。藥を久秋にくゝめる。五郎七は上にて、二人と立廻りながら、血汐を掴み出し、船へ打ちつける。權太、團八は、眞砂路と立廻りながら、きつと留まる。岩松、番六は、久秋へかゝる。危き所にて、久秋、すツと立上がつて、兩人をポン〳〵と取つて投げる。此とき一時大ドロ〳〵、千鳥笛にて、千鳥數多、群れる。三人思ひ〳〵にて、きつとなる。ドロ〳〵、雲氣の合ひ方になる。
三人　ハテ、怪しや
皆々　いぶかしやなア。

久秋　今一滴の生血、のんどを通すや否、忽ち心神健かに
眞砂　以前に變りしそのお姿と云ひ
五七　堅田に落つる雁ならで
久秋　友呼び集ふ數多の千鳥。
五七　奇瑞を見するも、血汐の妙藥。
眞砂　心を盡せし甲斐あつて
高景　おのづと知れし香爐の行くへ。
内藏　味方に取つての吉事なるか。
五七　何にもせよ
久秋　不思議の様を
皆々　見る事ぢやよなア。
五七　エ、有難いそのお詞。イデ、此うへは。
ト五郎七、落入る。高景、此とき、船より堂の上へ上がる。
高景　下郎に似合はぬ適れの若者、それは格別、久秋公にも御病氣平癒。眞柴の榮え、これに上越す事やあらん。
ト此とき下手蘆原より、内藏之助、鐵砲を持ち出て
内藏　小雨もなきに、火氣自然としめりしは
ト軍兵、ヤアと兩方より取り卷くを、ポンポンと切りツカ〳〵と本舞臺の方へ寄り、すつと立つて、鐵砲を

捨てる。
ハテ運强き眞柴の奴原。
皆々　さてこそ、齋藤内藏之助。
トきつとなる。内藏之助、ツカ〳〵と出て
うぬ高景、いつそ。
ト高景の方へ行かうとするを
眞砂　アヽ、申し。
ト内藏之助、心意氣。高景、こなしあつて
高景　一旦この場は見逃すとも、晴れの勝負は戰場にて。
内藏　云ふにや及ぶ、久秋さらば。
久高　さらば。
内藏　さらば
ト此とき軍兵大勢出て
軍兵　動くな。
ト取卷く。
内藏　何を小癪な。
トきつと太刀を構へる。江戸シヤギリにて

幕

けいせい濱眞砂（終り）

散書戀文章

（ちらしがきこひのぶんしやう）



この脚本の繪がありませんので、前篇「けいせい濱眞砂」の錦繪を入れて置きます。初演の折ので、富十郎の眞砂路、二幕目です。

散書戀文章

序幕　阿州屋敷の場

役名——安田小十郎。石坂兵藏。谷澤久次。馬澤長九郎。牛島小平太。間淵軍兵衞。番頭、忠兵衞。金屋金五郎。腰元、千草。手代、藤兵衞。

造り物、一面の瓦塀、上手前に門、人の出入りあり、この前に、間淵軍兵衞、着付上下大小にて、床几に腰かけ居る。下手に、奴八内控へ居る。すべて、阿州屋敷の體、時の太鼓にて幕開く。

軍兵　ありや午の正刻、ナニ八内、安田氏にはまだ出仕召されぬな。

八内　イヤ、申しお旦那樣、毎年々々相知れしことながら、この土用干しのお役目は御大役なことでござりまする。

軍兵　何サ、畢竟がお役目と云へど、申さば、腰拔役も同前、家中は云ふに及ばす何者にもせよ、蟲干し拜見は、この軍兵衞が心次第。それにつけても、大坂の町人、忠兵衞が下り居るとのこと、まだ其方は逢はぬか。

八内　アヽイヤ、まだ屋敷へは參りませねど、何かお旦那樣に密々にて、お話しの儀あつて、それゆゑ未だ舟宿に居るとのこと、追つけ、これへ參りますでござりませう。

軍兵　密々とあれば、彼れに賴み置きし額の小三のことであらう。アヽコレ、早う樣子が聞きたいものぢやが。

ト太鼓謠ひにて、向うより、安田小十郎中老の拵へ、後より若黨一人つき、次に金屋金五郎、袴羽織、町人の拵へ、次に藤兵衞、同じ拵へにて、出る。

軍兵　これは安田小十郎どの、只今御登城でござりまするか。

小十　イヤ、軍兵衞どのには、お役目とは申しながら御苦勞千萬。別して今日は器物の土用干し、八つ時までは、その元さまのお番、それにつきこれへ同道いたしましたは、お出入りの町人、金屋金五郎、何卒、器物拜見の願ひ居りますれば、軍兵衞どの、よろしくお願ひ申し上げまする。

軍兵　成る程、承知仕る。殊に金屋とあれは、利右衞門

が悴、よい男だ。其方は仕合せ者ぢやぞよ、大切なる殿樣のお蟲干し、なか〱拜見は叶はぬ。シテ、あれに扣へ居るは何者ぢや。

藤兵　イヤ、私しは、金屋金五郎の別家、金屋小兵衛が手代めでござりまする。

軍兵　その手代が何しに參つた。

藤兵　ハイ、親方は菓子商買、砂糖の買ひ廻しに、讃岐へ下る所、金五郎さまと同道いたしまして、爰へ參り、蟲干しの樣子を承はりましたゆゑ、モシ、旦那のお供を致しましてござりまする。

軍兵　わいらは果報者ぢやぞよ。よいワ、この軍兵衛が拜見いたさせくれう。

兩人　有り難う存じまする。

小十　まことに其方たちは、よい折に下り合せた。御城下の町人どもでも容易く叶はぬ拜見。ナニ軍兵衛どの、あの者に代り、小十郎お禮申しまする。併し八つ時までは拙者詰所へ、この者どもは同道の下されうか。

軍兵　イヤ〱、苦しうござらぬ、拙者今暫らく、これに相待つ者もござれば、小十郎どのには、あの者を連れ立ち、その元の詰所にて相待たれよ。

小十　然らば左やう仕らう。サア、兩人も來やれ。

藤兵　萬事よろしうお願ひ申しまする。

ト唄になり、小十郎先きに、金五郎、藤兵衛、若黨も門内へ入る。後に、軍兵衛、八内殘つて

八内　旦那さま、今參つた、金屋金五郎と云ふ奴、あれが慥かに額の小三の深間とやら色とやら。

軍兵　オヽ、サ、この軍兵衛も、名は兼て聞いては居れど、今の二才めが、金五郎であらうとは知らなんだ。小三のことは金銀にて心任せ、心憎いは小十郎が娘千草、この軍兵衛が女房に申し受けうと再三、人を以て云ひ込んだれども、酢の蒟蒻のと聞き入れない。小十郎が金五郎めに、蟲干し拜見願ひしを、なんぞの種に……これにつけても、忠兵衛はもう來さうなものぢやが。

八内　お旦那〱、アレ〱向うから參る、旅がけ姿は、慥かに忠兵衛ではござりませぬか。

ト兩人向うを見て

軍兵　それ〱、八内。早く呼べ〱。

八内　オイ〱。

ト在鄕唄になり、忠兵衛、旅かけ町人の拵らへ、三度笠、脚絆、草鞋にて出て來て

忠兵　これは軍兵衛さま、早速お目にもかゝりませうと存じますれど、私しより先へ本家の若旦那、その上こなたの手代藤兵衛と云ふ奴、こいつ小ましやくれ者、見つけられては後日の邪魔と、そこで人目を憚る三度笠にこの旅姿。

軍兵　それはよく心がついた。今も申した兩人も、今日の蟲干しを拜見に參つて居るわサ。

忠兵　そんなら、金五郎と、こちの內の藤兵衛めも。

軍兵　オヽ、サ。シテ、文通を以て遣はせし小三のことは、どうぢや〳〵。

忠兵　サア、そこでござりまする。何が彼の小三に、うつつ拔かして居りまする金五郎、小三をお前さまの方へ、身請けさせますと半氣狂ひ、それで煽てゝ內を抛り出し、又こちの內の娘お八十も、金五郎めが云はして居るに違ひはない。金五郎より心が變れば、娘も、われらが心任せ。さうなると、後取りのない本家の金屋、お前さまから綂引いて、お屋敷ごかしに私しが丸のみの料簡、思案は積んでも積まぬは小三、金五郎がこの阿波へ下つて居る留守のうち、幇間仲居に手を廻し、口說いても、なかなか得心せぬ。コリヤ、急々に身請けするとも、また金五郎が下つて居るこそ幸ひ、爰で仕舞ひつける思案はござりませぬか。それゆゑ、わざ〳〵下つて參じましたのでござりまする。

ト此うち、軍兵衛思案なして

軍兵　ても、ほてくろしい金五郎小三。よい〳〵、忠兵衛其方が申す如く、この阿波へ下り居るのが、飛んで火に入る夏の蟲、よしさうなくとも先刻、安田小十郎より、兩人とも器物拜見の儀を願ひしこそ幸ひ。

忠兵　シテ、その仕返しの御思案はな。

軍兵　仕樣はさま〴〵。忠兵衛、これにあつて、人目に立たば何かの妨げ、爰を遠ざけ疋田へ參る濱邊にて、便りを待て。

忠兵　合點でござりまする。

ト花道へ行きかけ

申し、その時には、辛度代も。

軍兵　ハテ、よいてや。身どもはこれより今の手番ひ。

忠兵　左やうならば、軍兵衛さま。

軍兵　オヽ、早く行きやれ。

トこれにて行きかけるを

コリヤ、待て〳〵。まだ一儀申すことがある。コリヤ。

ト忠兵衛へ囁く。

忠兵　ア、、そんならあの藤兵衛、金五郎めを。

軍兵　コリヤ、靜かに致せ。

ト軍兵衛、忠兵衛あたりへこなし。チョン〳〵返し。

造り物、通しの二重、上手、大床の間、眞中に具足飾りあり、外に鎗、薙刀、太刀、棒鞘、かけ物など數多、よき所に三方に摩利支天の尊像を飾り、爰に三寶神酒など据ゑて、蟲干しの體、右二重に、兵藏、久次、長九郎、小平太、上下大小にて、煙草盆を控へ、並よく並び居る。下り葉のやうなる鳴り物にて、道具納まる。

兵藏　谷澤氏、もはや半時は廻りましたでござらう。

久次　左やう存じまする。なんと何れも、日本廣しと云へども、この阿州家に續く軍功の家柄はござるまいなう。

長九　成る程左やう、御先祖蜂須賀公、坂本の高名に依つて、武名は四海に響き、それなればこそ大國の御主。武具、馬具は申すに及ばず、斯くの如き數の器物。

小平　別して床の間に飾りある具足、あれこそ御先祖のお着長、まつた、摩利支天の尊像は、當家代々の寶、隨分ともに勤番、怠りなく致すが肝要でござりまする。

三人　なか〳〵左やうでござりまする。

トこの時、軍兵衛、橋がゝりより出て來る。後より、千草、振り袖の着附け、屋敷娘の拵らへにて出る。

軍兵　これは何れも、今朝より御苦勞千萬。各々方にも暫らく御休息なされい。

兵藏　これは千草どのにも、蟲干し拜見でござりまするか。

千草　ハイ、わたしも軍兵衛さまをお頼み申しまして、拜見に上りましてござりまする。

久次　イヤハヤ、女中を案内の拜見とあれば、我れ〳〵は粹を通して……ぢやない、暫時の間。

小平　爰を遠ざけませう、なう長九郎どの。

長九　左やう〳〵、お互ひに覺えのあること。

四人　左やうなれば、軍兵衛どの。

軍兵　何れも。

四人　後刻御意得ませう。

ト唄になり四人奥へ入る。軍兵衛、こなしあつて。

軍兵　サア〳〵、千草どの、近う〳〵。これからがこの軍兵衛が繪解き役、さらばそろ〳〵口上にかゝらうか。

トこれより鼓入り、なまめいたる合ひ方。兩人二重に上り。

コレ〳〵、この御掛物が狩野の永徳光信、或ひは安信、その外たが〳〵には申し盡されませぬ。別してあれなる鎧甲は、御先祖の物の具、その側にあるが、摩利支天の尊像、別して色氣を知らぬ女は、縁談を願はつしやれ願はつしやれ。

ト千草、尊像の前へ行き手を合し拜み居る。軍兵衞あたり見廻し、千草に抱きつく。千草恟りして

千草　コレ〳〵申し軍兵衞さま、何をなされまする、爰放して下さりませ。

ト無理に振り放す。

軍兵　ナニ其やうに、びこ〳〵することがあつて。その元を同道いたし器物拜見いたすからは、この方も又その元のお厨子の內の釋尊如來樣を、われらがこの手の圓光大師、かいげんいたして進ぜう。

トまた寄るを振り袖にて拂ひ退け

千草　ほんに仇みだらな、滅多に側へ寄つて下さりますなえ。

ト逃げやうとする袖を捉へ

軍兵　どつこい〳〵、逃がしはせぬ。こなたさへ得心なれば、小十郎どのへ申して、今夜からでも、この方へ呼び迎へる。斟酌せずと、これサ〳〵。

ト無理に抱きつきに行く、千草逃げ廻る。

これサ〳〵、滅多にや逃がさぬ……あきの宮島まで廻れば七里、浦は七浦七越し、ヨイ〳〵〳〵。

ト追ひ廻す、此うち、切幕より藤兵衞出て、この中へ來る。軍兵衞、藤兵衞を千草と心得、藤兵衞に抱きつく。

ヨイ〳〵〳〵。

ト藤兵衞と顏見合し、恟りして

ヨオヽ、コリヤ、最前の町人め、何時の間に。

藤兵　ハイ、若旦那さまは、小十郎さまと何かとお話し、その間に、ツイ一ト間越し、二タ間越し、三間越し、四間越し、ツイ浦は七浦七越し、ヨイ〳〵〳〵。

軍兵　あの、それを聞いたか。

藤兵　なんのお前さま、なんにも知らねど、ヨイ〳〵〳〵

ヨオヽ。

トこれにて軍兵衞、扇にて無性に煽ぐ。この時橋がゝりより、金五郎出て來て

金五　藤兵衞、爰に居やるか。
藤兵　若旦那さま、お前さまは、小十郎さまの側にござるゆゑ、その間にお庭をあちこち。
金五　それは仕合せなう。わしもより〳〵話し終り、今爰へ。これはどなたかと存じますれば、軍兵衞さま、何卒蟲干し拜見、お願ひ申し上げまする。
藤兵　申し若旦那さま、軍兵衞さまのお指圖で器物は元よりまだその上に、安藝の宮島、七越まで。
ト此うち、千草、金五郎に見惚れるこなし。
軍兵　ヤイ〳〵、素町人め、馴れ〳〵しく何を吐かす。間淵軍兵衞は小祿にもせよ、阿州の家來、素町人の器物拜見の繪解きは致さぬ。御用が繁いワ。拜見をいたしましたら、きり〳〵歸れ……千草どの、よう覺えて。イヤサ、ドリヤ、詰所へ行かうか。
ト唄になり、睨め廻し奥へ入る。始終合ひ方。
金五　藤兵衞や、軍兵衞どのは、なんであのやうに御立腹なされてござつたのぢや。
藤兵　イエサア、あれは。
ト云ひ憎さうに頭かく。
千草　イエ、申し、あの軍兵衞さまは、わたしを捉へて、てんごうばつかり、その時、あのお方さまがお出でなされて……オ、恥かし。
ト顏を隱す。この時、金五郎、千草をちよつと見て
金五　見事、京に田舍、田舍に京とは爰らを云ふかいの。
ト見惚れる。藤兵衞、金五郎の顏を見て
藤兵　情ない、ヨイ〳〵がこちらへ廻つたわい。
トこの間に、軍兵衞、尊像を摺り替へ、旨いとこなし入る。
千草　申し蟲干し、拜見なされましたら、わたしが屋敷へ同道して歸りませうかえ。
金五　さうして、お前さまわえ。
千草　安田小十郎が娘でござりまする。
金五　ハテ、小十郎さまには、よいお娘御がござりますなア。
藤兵　サア〳〵、一向やくたい〳〵、コレ若旦那樣。
金五　悒りするわいなう。
藤兵　情ない、お前さまは惡い病ひがござりますなア。こんな所に長う居ますれば惡うござります。サア〳〵次へお出でなされませ。
金五　サア、行くは行くけれども、折角、小十郎さまのお

娘御が、あのやうに御親切に。

藤兵　サア、その親切も今のやうに、ヨイ〳〵ぢやに依つて後がむづかしい。サア、お出でなされませ。

ト千草、藤兵衛の手を取り、こちらへ連れて來て

千草　申し、其やうに意地の悪いこと云はずとも、もちつと爰に居て、一緒に屋敷へ行くわいなう。

藤兵　情ない。こちらへも移つて來た。

金五　今日一日は大事あるまいかいなう。

藤兵　これはしたり、片意地仰つしやらずと、お越しなされませいなア。

ト無理に、金五郎の手を取り行かうとするを、千草支へる模様。この時、軍兵衛出かけ居て

軍兵　何れも、大切なる器物が、眞つ赤なる似せ物と摺り替へござるぞ。出合はつしやれ〳〵。

トばた〳〵にて、奥より、小十郎、四人の諸士皆々出る。金五郎、藤兵衛下手へ寄る。千草、小十郎下手へ控へる。

兵藏　軍兵衛どの、器物摺り替へあるとは、如何致した。

四人　シテ、摺り替へた紛失のその品は。

小十　イヤ〳〵、軍兵衛どの、其やうに仰々しく仰せられな。治世の折柄、金銀にあらぬ器物の紛失、何者が奪ひ取らう。

軍兵　イヤ、小十郎どの、盗みまするぞや。

小十　そりや何者が。

軍兵　外でもない、お手前さまが同道なされた金屋の悴、金五郎。

四人　スリヤ、あの町人が。

軍兵　尊像の盗賊でござる。

藤兵　イヤ〳〵申し軍兵衛さま、承はりますれば、大それた器物とやらを。

軍兵　ヤイ〳〵、默り居らう。うぬは何者ぢや。誰れが許してのう〳〵と、この間へはどうして參つた。イヤサ、誰れが案内いたした。エヽ、われたちも落着の濟む迄は、どこぞ隅へ寄つて、ちよ〳〵こなつて居れサ。

トこの時、藤兵衛きつとなる。小十郎押へて

小十　軍兵衛どの、申さば大切なる場所。シテ、金五郎を盗賊とは、なんぞ證據でもござるかな。

軍兵　イヤサ、その證據と云うては。

小十　それ〳〵、證據もなくして盗賊呼はり、舌三寸を以て人を損ずる。先づ一應も再應も御吟味の上がよろしい

やうに存じまする。
軍兵　ムウ。
　ト軍兵衞、詰まるこなし。
兵藏　イヤ、小十郎どのがお詞なれど、自體素町人めらを
　このお屋敷へ引き入れ
久次　大切なる蟲干し拜見とは、先例にもなきこと。
長九　こと更大坂者の金五郎。
小平　拜見願ふは、初めから器物に心をかける下企み。
軍兵　但し、盜まぬと云ふ證據があるか、金五郎。
金五　おやと申して、みす／＼知らぬこの場の災難。
千草　申し父さま、無體云うてゝあんまりな。軍兵衞さま、
　申し、今の先までお前さまが、これにお出でなされまし
　て、よう御存じありながら。
軍兵　成る程居つた。大切なる蟲干し、立合ひの役だゆゑ、
　これに居つた。そこが彼の盜人のひまはあれど、護りて
　手の隙の所、千草どの、あまり女子の差出さつしやるな、
　扣へてござれ。
　　トきつと云ふ、千草俯向く。
小十郎どの、並居る者は皆、殿樣の御家來だ。寶を望む
者は一人もないぞや。何れも方、金五郎に繩かけて、拷
問さつしやれ。
四人　心得ました。
　トばら／＼と行て、金五郎を挾み
御上意ぢや／＼／＼。
　ト扇にておち据ゑる。この時、藤兵衞皆々を突き飛ば
　し又、いろ／＼あつて、金五郎の楯になつて
藤兵　待つた／＼／＼、マア、待つて下さりませ。
四人　コリヤ、手向ひか。
藤兵　イヤ、全く手向ひではござりませぬが、コリヤ、ち
　と御吟味が行き屆きませぬかと、存じまする。
軍兵　ヤイ、素町人め、吟味が行き屆かぬとは、どこらが
　行き屆かぬ。
藤兵　さればでござりまする。今日の蟲干し拜見は、小十
　郎さまへお願ひ申し、あなたさまもお得心、元より金屋
　は代々御用達、その家の子たる金五郎どのを盜賊呼はり
　召されては、却つて當家の疵。
軍兵　ヤア。
藤兵　なんにも知らぬ者なれども、今承はり居れば、あ
　なたさまは蟲干し立合ひのお役目。なりやあなたの、コ
　リヤ、御油斷でござりまする。

軍兵　ヤア〳〵。
藤兵　金五郎さまが科に落ちて磔刑なれば、あなたは獄門。
軍兵　サア、それは。
藤兵　その祿を頂戴仕りながら、役目を粗略の科は、何者が繩かけまする。
軍兵　ヤア。
　ト藤兵衞四人に向ひ
藤兵　金五郎さまと御一緒に、軍兵衞さまに、あなた方が寄つて繩かけさつしやりまするか。
四人　サア、その儀は。
藤兵　御詮議が暗いと申しました、この藤兵衞が誤りでござりまするか。
四人　サア、それは。
藤兵　サア。
五人　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
藤兵　申し、罪の疑はしいは輕くせいと、なんぼうも立役が云ふ臺詞。マア〳〵、篤と御思案なされて下さりませ。
　ト皆々を押へ、金五郎を後ろへ圍ふ。
小十　藤兵衞とやら、そちや細心な者ぢやなア。併し、かかる折柄、參り合せし、金五郎が身の災難、この儘にては歸されぬ、定めて承知であらうなア。
藤兵　有り難いお詞、恐れながら藤兵衞めがお願ひがござりまする。
小十　ナニ、願ひとは。
藤兵　さればでござりまする。先き程も申し上げます通り別家の手代御本家の內にも、數多の手代衆もある中に、選り出された今度の同船。斯樣なことの出來ましたとは珍事ちうやう。若旦那さまを殘し、どの顏下げて大坂へ歸られませう。武家、町人とは替れども、忠義の道はたつた一つ、何卒お聞き分け下さりまして、若旦那の身の上を。
軍兵　イヤ、そりやならぬと云うたら又、この方へかゝるであらうし、小十郎どの、どう致さうと思はつしやる。
小十　イヤ、モウ、そこ元がさう御意なされば先づこの小十郎が所存と申すは、斯く並びし拙者を始め、その元さまにも遁れぬ吟味。コリヤ〳〵藤兵衞とやら、當家にて紛失せし尊像なれども、先づ遠き所へ盜り行かんも相知れず、大坂は繁華の地なれば、彼の地へ歸り詮議いたせい。その詮議の日數は、先づ二百日。

軍兵　コレサ、二百日とは、そりやあんまり。
小十　これサ、軍兵衞どの、八ツ時よりは拙者が役目なれども、時も切れぬにこの騒動、紛失の寶はこなたの身にも、かゝりあるぞや。
軍兵　然らば、どうなりとも。
ト軍兵衞、ぎつくりして
藤兵　小十郎さま、段々のお志。
金五　なんとお禮申してよからうやら。
二人　有り難う存じまする。
千草　ほんによしない、わたしが心から。
藤兵　申し、只何事も云はぬが祕密、左やうなれば私しどもは、心も急げば、直ぐさま出舟。
小十　心の急くは尤もなれども、寶の落去、今日よりは金五郎は、金屋利右衞門、藤兵衞、兩人に預け置くぞよ。
藤兵　委細畏まりましてござりまする。サア、若旦那、お立ちなされませ。
金五　左やうなれば、小十郎さま、萬事よろしう。
小十　コリヤ、必ず油斷なきやうに。
ト軍兵衞、四人へ眴にて、仕方。四人心得。
四人　命冥加な。
ト反り打つ。藤兵衞一寸目をつける。四人控へる。千草こなしあつて
千草　モシ。
ト金五郎へ行かうとする。藤兵衞、金五郎を引き廻して
藤兵　何れも樣。
ト軍兵衞切りかける。チョンと木頭。小十郎これを留める。
おさらばでござりまする。
ト、キザミにて、よろしく
直ぐに踊り三味線にて、早幕。

幕

二幕目

網島鯛卯の場
淀川七曲りの場

役名──後家、お幸。同娘、お八十。金屋金五郎。藝者、小さん。同、お鳴。幇間、一八。仲居、お竹。同、お夏。下女、お朝。同、お末。木造り杢

兵衛。丁稚、半吉。番頭、忠兵衛。亭主、卯兵衛。
手代、藤兵衛。

造り物、三間の二重、向う一面に長暖簾、上手落間にして後ろに塀、切戸口庭先の體、下手は板塀、後ろに浪幕、前側、浪の打ち寄せの書割、下座より船の出入り、いつもの所に、枝折り門あつて、欄間通りに、鮒卯と印せし紅摺りの提灯數多吊しある。すべて、網島鮒卯庭先の體。太皷入り騒ぎ唄にて、幕開く。

ト亭主卯兵衛、着附け袴にて、駒下駄を穿き庭を箒にて掃き、水を打ち床几を直し

卯兵　ヤレ／＼、忙しやの／＼。このマア、暑いのに、毎日々々のお客。取り分け今日は、金屋小兵衛さまのお内中がお越しとの知らせ。それに又、かてゝ加へて、南の富市から、去るお大盡の揚で、子供衆が大勢ござる、座敷を明けて置けとの案内。打つたり舞つたり俺一人が舞ひさうな。

ト向うを見て

ヨウ／＼／＼、あの大勢は慥かに、富市の方ぢやあらう。待ち兼ねて居りまする。オヽイ／＼。

ト卯兵衛奥へ入る。と十日戎の鳴り物になり、向うより小三を先きに、藝子お鳴、仲居お竹、華美なる拵らへにて、花道よき所まで出る。後より、幇間一八付き添ひ出る。

小三　ナア皆さん、舟もよけれど、また斯う上つた所は氣が替つてよいぢやござんせぬか。

なる　こちは又、今日は晒堤から、宗禪寺の方へ行かうと、樂しんで居たに鮒卯であらうとは思はなんだ。大方彈き詰めであらう。ほんにお許しぢやなア。

たけ　お鳴さん、一體お前舟へ乘りやうが、遲なつたわいなア。

一八　その叱られる所を逢ふのが樂しみでござりませう。

トわや／＼云ふ。この時、戸屋の内にて

忠兵　オヽイ／＼。

皆々　アレ、忠兵衛さまの聲がするわいなア。

小三　それ見やしやんせ、あんまりこだついて居やしやんすに依つて、忠兵衛さまが、とう／＼追ひついてゞあつたわいなア。早う鮒卯へ行かうぢやないかいなア。

一竹　さうせうわいなア。サア／＼お出でなされませ。

ト本舞臺へ來る。忠兵衞向うより、仲居お夏の手を引き捨ぜりふで皆々を呼び／＼出て、本舞臺へ來る。

小三　忠さま、お夏どんを捉らへて晝中に。

皆々　お樂しみぢやなア。

忠兵　お樂しみも、すさまじいわい。俺が堤で小便して居る間に、先へ來たぢやないかえ。大方これも小三さまの采振りぢやあらうなア。

小三　オヽイヤ、皆さん聞かしやんしたか。あの氣の惡いことわいなア。

なつ　お竹さん、生醉ひの忠さまを、わたしに、あてがうて置いて、よい腹なア。

トこの時、奥より、卯兵衞出て

卯兵　これは、どなたも、お早うございました。サア、これへ／＼。

一八　昨日御案内があつた筈ぢやが、座敷は空いてござりますか。

卯兵　左やうでござります。いつもの座敷を空けて置きました。サア／＼、申しどなたさまも、腰を据ゑてお遊びなされませ。斯う見渡した所が、どれも／＼見事々々、大方お大盡さまは、金五郎さまでござりますか。

皆々　さうぢやわいなア。

忠兵　コレ／＼卯兵衞、なんぢや、無性にえらがる。今日のほうぐわんは拙者の某、この方ぢや。最前から何故挨拶申さぬのぢや。

卯兵　そんならお前樣がお客樣でござりますか。ハテ、人は見かけに依らぬものぢやなア。

忠兵　見かけに依らぬとは、エ、何か、俺が此やうな安い形で居るに依つて、するな／＼。コレ、聞かしやれ、こんな安い形でも每節季々々、コレ、南の色拂ひは、馬につけて送つたり、舟に積んでも遣るし、又某が揚屋へ行くが最後、花車、藝子、仲居、料理人、小女郎菩薩に至る迄袖に縋つて、イヤ、申し日柄を買うておくれの、仲居は前たれ、小女郎はぽぺん、いろ／＼にせがみ居るて。

トこのセリフの内、皆々目はじきして、一人々々奥へ入る。忠兵衞これを知らずに

イヤ、又せがみ居る筈ぢや。女形藝子の無心でも仲居や小女郎の云ふことでも、ついに僞り云うたことがない。それと云ふも伯父御が死なれてから、金屋の家は何も彼も、この忠兵衞が引受けて、金銀は遣ひ次第、此やうに金を遣ふも胸が廣う捌け切つてあるからぢや。なう亭主

さうではないか。
トこちらを見て誰れも居ぬゆゑ、そこらを見廻し
ヤア、コリヤ、一人も居ぬワ、奥へうせたか。扨ては最前からしやべつて居たは、鰥の行水で、一人で云つとるのぢやな。
ト阿房らしいと云ふこなし。向うより飛脚、狀箱を持ち出て來て
飛脚　イヤ、ちと物が尋ねたい。モシ、爰へ金屋の甥御の忠兵衞さんは來てはござらぬか。
忠兵　アイ、忠兵衞はわしが忠兵衞ぢやが、こなさんは、どこからござんしたぞ。
飛脚　忠兵衞さんとは、あなたでござりますか。ヤレ〳〵嬉しや〳〵。
ト狀箱を出して
阿州の御家中間淵軍兵衞さまよりの御狀、お受け取り下さりませう。
忠兵　エヽ、阿州よりのお飛脚か。それは御苦勞でござりまする。
ト狀箱を取り、內より狀を出し披らき見て
わざ〳〵飛札を以て申し入れ候、然らば昨年蟲干しの砌り、盜み取りたる
ト心にて讀むこなし。
イヤ、お飛脚、お前はまだ御逗留か。
飛脚　イヤ〳〵、今宵は阿州への出舟がござれば、直ぐさま歸りまする。お返事を下さりませう。
忠兵　イヤ、お返事は、ちと入り組んだ譯ござれば、後より飛脚にて申し上げませう。其許へは念の爲め受取りを進ぜませう。
ト腰より矢立を出し受け取りを書き
大きに御苦勞でござりまする。委細は後より、よろしう申して下されい。
ト受け取りを渡す。
飛脚　委細畏まりました。
ト飛脚向うへ入る、忠兵衞狀を讀み
忠兵　一昨年蟲干しの砌り盜み取り、其元へ預け置き候摩利子天の尊像、また〳〵詮議嚴しく候間、その地にて金五郎藤兵衞、右兩人種々相尋ね候由承はり候、必らず御油斷これなきやう賴み上げ候……元この器物は、殿樣御秘藏の品、土用干しの折柄、本家の息子、金五郎御用金のことにて、こちの藤兵衞を連れ、阿波の國へ下

りし時、お頼み申して拜見の折柄、間淵軍兵衞どのが、ちよろまかした、この尊像。

ト首にかけた尊像を出し

その時金五郎に疑ひかゝり、入牢にもなるべき所を二百日の日延べにて、先づ金五郎は大坂へ戻れどもお預け同然。よいかと思うて、藤兵衞めが内證で詮議をし居れど、俺が出世の種のこの尊像、あいつらに知らして堪るものかい。マアこれは、これにして、あの娘のお八十め、疾から俺がつけつ、廻しつして口說いても、頓と合點し居らぬ。幸ひ今日は家内中が爰へ來る筈ぢや。どうぞ間を見て口說き落したいものぢやが。イヤ物はぎえんぢや、奧へ行て一杯入れて來う。

ト奧へ入る。また唄になり、金五郎着附け羽織にて出る。後より幇間喜八つき出て

金五　今日はお屋敷へ行かねばなりませぬゆゑ、涼みながら舟行きと富市へ云ひつけて置いたに、皆は先きへ行て、わが身が迎ひに來たゆゑつき合うて步いて來たが、えらう草臥れた。早う行かうか。

喜八　旦那の足は草臥れたか存じませぬが、心は今朝から、小三さんの方へ飛んで行て、紙治ぢやないが、とぼ〳〵うか〳〵と。

ト淨瑠璃を語る。

金五　エヽ、何を云ひくさる。

ト扇にて頭を叩き、後捨ぜりふにて、本舞臺へ來ると奧より、仲居お竹、お夏出て

兩人　アイ〳〵、ちよつと行て參じませう。

ト云ひながら出て、金五郎を見て

旦那さま、今でござりましたかえ。

金五　オヽ、さうして、小三も皆も來て居るか。

たけ　ハイ、小三さま始め皆疾から來て、お前さまのお出でが遲いゆゑ、今二人が見に參じました所ぢや。

なつ　その上、忠さんが座敷を十分にして、あんまり受け憎いので、子供衆たちは皆逃げ步いて居てゞござんすわいなア。

金五　そんなら奧へ行て、忠兵衞の頭を押へて遣はさう。

兩人　さうさしやんせいなア。

金五　サア、喜八、皆もおぢや。

兩人　サア〳〵、行かしやんせいなア。

ト踊り三味線にて皆々奧へ入る。引き違へて、卯兵衞出て

卯兵　サア、なんでも今日は一日の榮華に千歳を延ぶると云ふ日ぢや。時に昨日から人の來た菓子屋のお內方は、まだか知らんて。

ト下座の方を見て

アレ〱、向うから來る屋形船が、慥かにあれぢや。サア、皆來いよ〱。

ト賑やかなる鳴り物になり、奧より、お朝、毛氈を持ち出て床几の上へかける。此うちに下座より屋形船出て、船頭歩みの板をかける。內より後家お幸、四十五六の拵らへ、船底帽子、抱へ帶にて、後より、娘お八十振り袖抱へ帶、饅頭帽子、續いて藤兵衞着附け羽織手代の拵らへ、後より、お末下女の拵らへ皆々、船より上り

卯兵　これは菓子屋のお家樣、マヽ、これへおかけなされませ。

こう　これは卯兵衞どの、それから逢ひませぬの。サア娘おぢや。

卯兵　マア、お通り下さりませ。

トこれにて、お幸、お八十上手の床几へかゝる。お末その時引き添ふ。藤兵衞下手の床几へかける。よろしく座につく。

扨て、マア、御家樣始め御寮人さま、御機嫌よろしうお入り遊ばされまして、お目出度う存じまする。また、藤兵衞さんにも、御機嫌さんでお嬉しう存じまする。時に風呂が沸いてござりまするが、ざつとお流しなされませぬか。

藤兵　イヤ〱、御亭主、それはよう氣がついたが、何を云うても舟の內は涼しい、それには及ばぬ。併しお家や御寮人さまはどうでござりまする。

こう　イヤ〱、こちらもようござるわいなう。コレ、お八十、向うに見えるがこの春行つた櫻の宮、なんと爰から見ても、よい景色ぢやないかいなう。

八十　ハイ、申し母さま、京へ行くのも矢ッ張りこの川筋でござんすなア。コレお末、何時やら本家の若旦那樣のお供をして石山に開帳に行た時は面白いことであつた。こちやモウ一度、開帳詣りがしたいわいなア。

すゑ　なんの、マア、御寮人樣の仰つしやることわいなア土用の內の開帳は涼み場がござりませぬ。併しさう仰つしやるも御尤もぢや。その折の京登りは、金五郎さまのお供にて、あつちも開帳、細原屋も開帳、それでお忘れなされぬのぢやあらうなア。

トうか〳〵と云ふ。藤兵衛、咳拂ひして打ち消し

藤兵　これはしたりお末どん、お家もこれにござるのに何をマア、ひよろ〳〵と。ハ、、、併し御亭主、内方は何時でも御繁昌でお目出たいなう。

卯兵　お陰でこみを濁して居りまする。あの又奧の騷ぎは本家の若旦那樣のお越しでござりまする。

こう　そんなら本家の金五郎さまが。

卯兵　しかも島の內から美しい藝子さんや幇間さんも來て、騷いでゞござりますわい。

トこれにて、お八十奧の方を見て、そろ〳〵行きかける。

こう　コレ〳〵娘、わが身はマア、奧の騷ぎを聞いて、そわ〳〵と、見つともない。マア腰かけて居やいなう。

八十　イエ、わたしが奧を見ましたのは、あの、それ〳〵、本家の若旦那が來てござりますと聞きましたゆゑ、ちよつと奧へ御挨拶に行かうと存じまして。

こう　イヤ〳〵、そりや惡からう。あのやうに、どら盡くして居やつしやる所へ別家の者が知りながら意見もせぬかと外々の別家衆へ聞こえても濟まん。よしにしや〳〵。

トお八十、藤兵衛と顏見合せ、辛氣なるこなし。

八十　それでも同じ所に居ねば格別ぢやけれども、知らぬ顏して居るのも……いつそモウ。

藤兵　イヤ〳〵、御寮人樣、コリヤ斯うなされませ。お家樣こそお逢ひなされてはお惡うござりますけれど、お前さまは後に間を見合せて、なア申し御寮人樣、御挨拶に同道いたしませう。

八十　ほんに藤兵衛どのゝ云やる通りにして、ナア、母さん。

こう　そりやモウ、實の子でない悲しさぢや。どうなりとしやいなう。

ト卯兵衛引き取つて

卯兵　コリヤお朝、何をうつかりと。あなた方をお座敷へ早う御案內申さぬかい。

あさ　アイ〳〵、サア、どなたもお越しなされませぬか。

こう　旦那樣が死なしやつてから三年振りで、欝散せうか。サア皆おぢや。

藤兵　サア、先づお先きへ、御寮人樣。

あさ　サア、斯うお越しなされませ。

ト踊り三味線になり、この一件皆々奧へ入る。この鳴り物をかつて、向うより、木作り杢兵衛、單物夏ばつ

ち、腰に木鋏みを差し、小さき編笠を着て出て來て、後より、丁稚半吉、風呂敷包を背負ひ本舞臺へ來て

杢兵　アヽ、何時でも賑はしいことぢや。時に若旦那金五郎さまは、今日爰へ出てござる筈ぢや。大方あの騷ぎがさうであらう。

半吉　コレ、杢兵衞さん、あれに違ふことはない。昨夜旦那が呼びにおこして明日は大勢連れて舟行きぢや、われもさう云うて來いと云はしやんしたに依つて、濱の茶屋へ行たら、モウ皆行たと云ふ後ぢや。そこで透さず追ひかけて來たのぢや。

杢兵　おりや又本家の坪の内の木を作つて居たら、親旦那が金五郎の顏が見えぬ、一體伜は阿波の屋敷から預かつて居る囚人同然の體、夜泊まり日泊まりが屋敷へ聞こえては濟まぬと、端の知つたやうに喧ましう云はつしやる。又俺は菓子屋の藤兵衞さんとは懇ろにする身の上、その藤兵衞さんが何かに、世話になる金五郎さま、あんまり側で聞きづらさに、晝ちらりと聞いたゆゑ、晝休みの間に、お迎ひがてらに來たのぢや。

半吉　それならば幸ひのことがある。今日はこちの內も家內がお針に番さして、この餠卯へ來て居やんすわいの。

杢兵　そりや、マア、えらいこつちやなア。そんなら藤兵衞さんも一緒に來てか。但しは內にか。

半吉　來て居る〳〵。こちの御寮人さまの氣に入りぢやに依つて來て、居るに違やせぬ。

杢兵　そいつは幸ひぢや。おりや藤兵衞さんに、ちつと內證で云はんならぬことがある……コレ半吉どの、狀一本書くが屆けて下んせぬか。

半吉　狀ぐらいなら屆けて遣らう。お前よう書かんすか。

杢兵　舐め居るな〳〵、お家流ぢや。時に矢立はないか。

半吉　矢立か。

杢兵　あるなら貸してくれ。

半吉　それ。

ト腰より矢立を出す。

杢兵　オツト、よし、時に紙ぢや。

半吉　紙もか。

杢兵　オイ。

半吉　何も彼もぢやの。

杢兵　喧ましう云はずと貸してくれ。

半吉　そりや。

ト紙を渡す。杢兵衞書きかけるを半吉

ドレ、どんな手ぢや見てやらう。

ト覗く。その顔へべつたり墨をつける。

エ、、何をさんすぞいなう。

李兵 人の書く狀を覗くものか。阿房めが。

半吉 コレ、李兵衞さん、マア一つちよぼ打つて、狀の〆めさんせんか。

李兵 なに、阿房云ふな。

ト云ひ／＼狀を認める。奥より、お朝出て

あさ オヽ、半吉さんお出でたかえ。金五郎さまが待つて居てゞござんした。

ト半吉の顔を見て

オヽ、笑止、お前のその顔は墨だらけぢや。オヽ、可笑し。

半吉 これかえ、こりや今李兵衞さんが狀と取り違へて書いてゞあつた。

あさ ホヽヽ、何を阿房らしい。

李兵 コレ半吉どの、今の狀を、藤兵衞さんに逢うたらば知れぬやうに屆けて下んせや。

半吉 オツト、よし／＼。

李兵 コレ、落とすまいぞ。

半吉 氣遣ひさんすな。シテ。お前はどうさんす。

李兵 俺も奥へ行て、金五郎さまが來てござるなら、ちよつと逢うて來るのぢや。

あさ そんなら一緒にお出でなされませ。

半吉 これから奥へ行て、なんぞ喰べて來うか。

李兵 ドリヤ、行かうか。

あさ サア、ござんせ。

ト唄になり、三人奥へ入る。後に色めいた合ひ方になり、金五郎の手を取つて、お八十出て來て

八十 マア、ちよつとお出でなされませいなア。

金五 其やうに喧ましう云やんな。行くわいなう。

ト云ひ／＼出て

これはしたり、わが身も生娘ぢやと思うたら、あのマア大勢の幇間や藝子の中へ、ずつと出て、あんなこと云やつて悔りさしやつたがなう。

八十 どうで、あなたのお心には悔りでござりませう。お前樣は今日阿波の屋敷へお出でなされねばならぬのではござりませぬか。それに、マア大勢の藝子さんや女中さんの中でお遊びなさるゝが、阿波の屋敷でござりますかいなア。

金五　コレ〳〵、お八十どの、其やうに何も腹立てることはないわいの。これには段々。

八十　イエ〳〵、何も彼も存じて居りまする。この間は根つから便りもなくお顏も見えぬゆゑ、どうか斯うかと、わたしばつかり案じて居りました、それにあなたは、ちつとの思ひ遣りもなう、今日の樣子を、あの半吉に昨夜ちよつと聞いたゆゑ、母さんに無理云うて連れ立つて來て貰うた、今日の舟行き。ほんにわたしの思うて居る百分一、お前さまはお心にかゝりませぬかいなア。

金五　サア〳〵、さう一通りに思ひやりは尤もぢや。わしもこの間から行くのぢやけれど、そこには彼れやこれ、これや彼れと、オヽさうぢや、わが身も知つて居る通り、斯うやつて居れば居るものゝ、自體お屋敷から預け同然の身の上、この節は親仁樣が一向喧ましう云うて出る事がなり惡い。

　ト此うち、お八十、顏を反向け居る。金五郎、困つたる心にて、お八十の機嫌取ろこなし。

又今日爰へ來たのは、今朝藤兵衞どのに逢ふたら、お幸どの始め其方も爰へ來ると聞いたゆゑ、阿波の屋敷へ行くのを後へ廻して、態々こつちへ廻つたのぢやわいの。

　トお八十、耳を押へろこなしにて

八十　モウ〳〵云ふて下さんすな。そんな事は小三さんとやらに云はしやんせいなア。

金五　これはしたり、疑ひ深い。嘘ぢやない。眞實ぢや。コレコレ。

　トあちこちして居る。お八十、物云はぬゆゑ

わしがこのやうに云ふても、矢ツ張り本間にやせぬか。

八十　ソリヤ、小三さんに逢ふ計りでお出なされたのでござんせうがな。

金五　モウそのやうに執拗うわが身が云やりや、俺れもモウ云はん。なんの別にこんな所に、まい〳〵せうよりは、去んでくれう〳〵。

　ト行かうとする。お八十、引き留めて

八十　そんならお前本間に腹立つてお歸りなされますかえ

金五　わが身があんまり腹立るに依つて去ぬるけれど、機嫌直したら滅多に去にやせぬ。

八十　わたしが今のやうに、云ふたのが惡けりや堪忍して
　もそつと爰にお出でなされませいなア。

金五　さう云ふてたもりや、爰に居やうわいなう。

　ト抱き締める。此とき、奥より、お末出て

すへ　御寮人さん〳〵……申し御寮人さん。
八十　オヽ、恟りするわいなア。
金五　其方はお末、仰山な聲ぢやなア。
すへ　ハア、お樂しみ最中でござりました。然しお家さんが最前から、お八十は何所へ行たと仰しやつてゞござります。サアちやつと奥へござりませ。
八十　サア、それはさうぢやけれど、わしやもちつと爰に、
すへ　サア、又お出なされませぬと、お家さんが喧ましい。サアサア、ちやつとお出なされませ。
八十　それぢやと云ふて。
すへ　マアお出でなされませ。
　トお八十を無理に引つ張つて奥へ入る。引違へて小三出て
小三　金五郎さん、いから花やかな事ぢやなア。
金五　オヽ小三、逢ひたかつた。コレ、船では大勢の人目、何も云はれなんだがコレ。
小三　知らぬわいなア。人にばつかり氣を揉ませ、お前は精出して惡性さしやんせいなア。
金五　イヤ、今のはこちの別家の娘、それでツイ。
小三　ツイも凄まじいわいなア。
金五　コリヤ、粹のやうにもない、金五郎の女房になる者あんな事見て腹立てるものか。
小三　ソリヤさうぢやけれど、とんとわたしの身が片付かぬに依つてぢやわいなア。
金五　片付けんとは身請の事か。
小三　アイナア。
金五　サア、その身請の事が氣にかゝつてあるに依つて、それで今の事を藤兵衛に云ふては置いたれど、藤兵衛も寶の詮議やら何やら彼やら取込んで居るし、家ではとんと相談する間も無いに依つて、そこでマア今日爰へ來たのは、藤兵衛が來ると云ふ事、なんでも相談して急に身請をする積り。我が身はそれが嫌か。
小三　アイ〳〵、そんなら急に身請は出來るかえ。
金五　今日爰から去んだら直ぐぢやわいなう。
小三　金五郎さん。エヽ、嬉しうござんす。
金五　なんの嬉しからうまちつと悋氣をせい。
小三　エヽ、知らぬわいなア。
　トひつたり抱付く。此前より半吉出て、後ろに見て居て、此とき、半吉、大きな聲にて
半吉　ハヽヽヽヽ。

ト大きな聲にて云ふて中へ入る。兩人、恟り、双方へ
飛退き

金五　エ、阿房め、恟りしたわい、

半吉　若旦那、お前よりわたしが恟りしたわいなア、

金五　わりやなんぞ見たか。

半吉　見た段かいなア。わしや今のを見て、胸がどき〳〵するわいなア。さうして又

トこなしあつて

どつき〳〵するわいなア。コレ若旦那、お前の事をな。世間で唄にうたふたぞえ。

金五　なんと云ふ唄ぢや。

半吉　云ふて聞かさうか。金屋の濱に舟を浮かして小三を乘せて、戀の船頭は金五郎さんぢやないかいなアイなアイなア。

金五　何を阿房めが。コリヤ、今のを誰にも云ふなよ。

半吉　云やせん〳〵。おりや云はんけれど、ひよつとこの口が云ふたら、おりや知らんぞえ。

金五　コリヤ、われには好い物やる程に、必ず云ふなよ。

半吉　好い物おくれるなら云やせん。何をおくれる。

金五　待て〳〵。われには何をやらうぞ。

半吉　わしや虎屋の饅頭か。追付け藪入ぢやに依て、琥珀の帶が欲しいわいなア。

金五　ムウ。帶なと饅頭なと、われが欲しい物を買へ。

ト紙入より一步を出してやる。

半吉　ヤア、、コリヤ一步ぢや。アノたつた一ツかえ。

金五　ても慾の深い奴の。

ト又一ツやる。

半吉　オツト豪いワ。内の忠兵衞さんに一步を三ツ貰ふたわいなア。今あなたに二ツ貰ふたので一步が丁度五步になつた。

小三　金五郎さん、今の事をとつくりと話したい程に、アノ一間へ來て下さんせいなア、

半吉　ソレ〳〵、おりや誰にも云やせん程に、ちやつと行て、今の後を、たんとさんせ〳〵。

金五　エ、、ナニ吐かすぞい。

小三　サア、ござんせいなア。

ト引張り入る。

半吉　悠るりとしいえ。誰にも云やせぬぞえ。ア、、時にうまいワ。一步が五步になつた。なんでも晩には大與へ行て鯉と丸と玉子と一緒に炊いて貰ふて、誰にも喰はさず

と俺れ獨りして思ひ入れ喰てこまさう。さうして又戻りは野川の衣屋で姫を抱いて思ひ入れ樂んでこまさう。うまいうまい。エ、イ、。喰はぬうちからもたれさうな。

ト此とき、奥より、忠兵衞、出て

忠兵　オ、半吉、爰に居るか。わりや何をして居るぞ。

半吉　俺れかえ、おりやお針さんの所へ行て後から爰へ來て、いんま迄奥に居ました。

忠兵　さうして藤兵衞はどうした。

半吉　アノ藤兵衞さんは奥に

忠兵　そんなら伯母貴と一緒にか。

半吉　アイ。

忠兵　コレ半吉、われが帶に挾んで居る物は何ぢや。

半吉　これかえ、コリヤ狀しかも本兵衞さんが藤兵衞さんに內證で渡してくれと頼まれた狀ぢやわいなア。

忠兵　本兵衞から藤兵衞へ內證の狀とは、ドレ見せい。

ト取つて開き見て

なんぢや。手紙を以て申入候。然ればや印御申しには晩程と印をし印にして……何んの事ぢや、訝しい怪しい手紙ぢや。半吉、この判じ物をわりや判じられるか。

半吉　サア、このやうな手紙の文は習ふた事がない。

忠兵　阿房云へ。こないな手紙の文がある物かい……時に、や印のと印し印。こうつ、

ト手を組み思案する。

半吉　や印のと印。今度は二枚で三文ぢや、後は團扇と手拭が取れる。

忠兵　邪魔さらすな。

ト此とき、奥より、お幸出て

こう　忠兵衞、その狀を見しや。

忠兵　お前は伯母貴、こなさんの指圖の通り本家の金五郎を喫り上げ、今日も爰へ小三諸共連ては來たが、今半吉が渡したこの狀。とつと合點が行きやんせぬ。

ト　お幸に狀を渡す。お幸見て

こう　ソリヤこそな〳〵。わしが推量の通りアノ藤兵衞めが、娘のお八十へやるこの狀。

忠兵　ソリヤ又どうして。

こう　コリヤ見い。

忠兵　ドレ。

こう　や印とは、こちの娘のお八十の事ぢやわいなう。

忠兵　ナニ云はんすぞいなう。シテ又どう云ふ譯で。

こう　さいやい、晩程と印をし印にしてと書いてあるな。

ソレ、や印とはお八十の事、と印とは藤兵衞の事、し印は忍ぶと云ふ事。コリヤてつきりと常から、こちの藤兵衞とうまの合ふアノ木作りの杢兵衞を仲立にして、藤兵衞は若旦那の世話をするやうな顔をして、こちの娘を横取りとは娘も娘。

ト忠兵衞、腹の立つこなし。又狀を取上げて

忠兵　腹が立つわい〳〵。一體、金五郎とちゝくつて居るさへむかつくに、アノ藤兵衞めは……よいワ、仕様がある。この狀を證據に不義者にして、何も角も打割り拋り出す。時に斯う云ふ狀を渡した半吉、われが爰に居ると邪魔になる。わりや爰を先きへ去ね。

半吉　然し、晩に又藤兵衞さんが叱りやせまいかな。

忠兵　ソリヤ俺れが呑込んで居る。今日こそゆつくりと野良がわいて戻れ。

半吉　合點ぢや。ハツと計りに半吉は元來し道へ引返す。

ト向うへ一散に入る。此とき、藤兵衞、お八十、お末立出て

藤兵　お家さん。これにお出なされますか、最前櫻の宮の方へ行くと仰しやつたゆゑ、お八十さまをお勸め申したがお出なされまするかな。

トお幸、顏を反向ける。藤兵衞、合點の行かぬこなし

忠兵　オヽ藤兵衞なんぢや。獨り悅んで居やんすが、伯母貴ぢやと云ふて、今から櫻の宮へも行くまいかい。

こう　さうぢやお八十、藤兵衞、わが身達は遊び草臥たか本に今日は好い年をさして、こなた衆の先きに遣はれたやうな物ぢや。おりやもそつと爰に居ますわいなう。

八十　ソレ藤兵衞聞きやつたか、これぢやさかい。わしがもそつと爰に居やうと云ふ物を、滅多無性に母さんが云ふてぢや、お出なされませ〳〵と人を勸めてからに。

藤兵　でもお家が最前さう仰しやつたに依て。

八十　それでもこちや櫻の宮へ行ても、何も面白い事はないもの。

藤兵　さいなア申し。面白うなうても爰に長うござつては阿濟が浦に引く網の譬へ、人目に立つては申し、惡るうござりまするが。

ト金五郎の事を呑込す。お八十、ひんとそむける。忠兵衞、この間兩方の顏を見て居るこなしあつて

忠兵　藤兵衞、あんまり目遣ひしてくれなよ。まだマア嫁入りもせぬお八十さん、それになんぢやい。阿濟が浦で引く網も、そろ〳〵と顯はれてあるわい。

藤兵　イヤ忠兵衛どの、何やら替つた物の云ひやう、顯はれてあるとは何が顯はれたぞ。

忠兵　貴樣はマア、豪い白似せな男ぢやなア。表向きは實證に見せて。伯母貴聞かんせ、この藤兵衛は、こちの內のお八十さんと懇ろをして居やんすわい。

ト藤兵衛、お八十、悔りする。お幸、恍けた顏にて

こう　忠兵衛ソリヤ何を云やるぞ。なんぢや娘と藤兵衛と懇ろして居る。コレ家とは違ふ他所ぢや、人も聞く。わが身は又何んぞしつかりとした事でも見付けたか。粗相な事云ふたら甥子とて用捨はせぬ。このお八十には義理があるわいなう／＼。

忠兵　伯母貴喧ましう云はんすな。俺れもあんまり蔑ろにしられて阿房らしいから、でんど晴て云ふのぢや。お八十さん藤兵衛や、貴樣疾から色事して居やうがの。それに人が知らぬかと思ふて伯母貴の前でいつちや／＼斯うなつたら自暴ぢや。何も角も云ふて了ふのぢや。

八十　コレ忠兵衛さん、跡形もない。ソリヤ何云はんすぞいな。

藤兵　イヤ申し御寮人さん、お待ちなされませ。コレ忠兵衛どの、云ふ事と云はぬ事とがある。お前酒呑んで居るな。素面ぢやあるまい。又そんな事云はんすには何んぞ慥な

忠兵　コレ。そんな事にどんつかれるやうな男ぢやないわい。貴樣とお八十さんの仲立は出入りの杢兵衛、證據と云ふはこの狀ぢや。

ト狀を出す。藤兵衛、見やうとする。ちやつと持替る

この間に金五郎後ろへ出て立聞して居る。

どうぢや、斯う云ふ確な證據を捉へてあるぢや。コレ今讀上げたら、ぐつともすつとも云ふ事はあるまいがな。

ト此とき、金五郎、前へ出て藤兵衛に取付き

金五　コレ藤兵衛、わが身は／＼。これ迄わしに親切にして置いて、今忠兵衛どのゝ話しの樣子では。

ト云はうとするを藤兵衛打消して

藤兵　申し若旦那、かてゝ加へてお前迄が爰へ出て、コレこのやうな所で仰しやると、ソレ、何も角も世間一杯になつて。これはしたり、押し默つてござりませ。

ト此うちお末身拵らへして藤兵衛の側へ行き

すへ　コレ藤兵衛さん。

トあたりを見て氣を替へ

ではない若旦那樣、コリヤ吟味なされませ　何故と仰しやれ、こちの家はあなたの所の別家、その別家の內の御寮人

と家の手代と懇ろして居ると世間へ聞えては、第一本家の名が出まする。大概色事と云ふ事は御寮人さんなら御寮人のやうに、何所ぞの若旦那と懇ろするか、お手代さんならマア上の女中と忍び逢ふが當り前。藤兵衛さん、こちの家では、お前とわたしが似合ひ相應と云ふ物ぢや。それにマア人の心も知りもせず、狀の取交しとはあんまり氣強い、胴慾ぢや〳〵わいなア。

ト泣き落す。

サア、お前に惚れた女中があつたら、このやうに云はうのに、お八十さんをお前の女房にしたら、世間でお前を笑ふぞえ。申し金五郎さまコリヤきつとせいらくなされませ。

藤兵　コリヤ情ない、色々の者が出て來たわい。

忠兵　お末、喧ましう云ふ事はないワ。今この狀讀んで皆の眼を覺さしてやらうわい。

藤兵　イヤモウ、狀なりと何なりと、讀むなと饒舌るなとしたがよいわい。

忠兵　よまいでか。金五郎さん伯母貴お八十さん、お末も耳の穴を浚へて聞いたがよい……エヘン、手紙を以て申入候　然らばや印御申しには晩程と印とし印にして。

藤兵　ソリヤなんぢやい。

忠兵　コリヤ恍けない。このや印と云ふは娘のお八十、と印と云ふは藤兵衛われの事。し印とは晩に忍ぶと云ふ判じ物ぢや。知るまいと思ふかい。

ト狀を打ちつける。藤兵衛、その狀を取つて

藤兵　忠兵衛どの、お前のやうに云ふとソリヤ無理押へと云ふ物ぢや。や印と云ふはお八十さまの事ぢや、と印とは藤兵衛ぢやと云はんすが、お八十とも藤兵衛とも忍ぶとも書いてはないぞえ。

忠兵　ヤ。

藤兵　申し、誰方も御覽じませ。これが不義の證據でござりますかえ。それにめんめばつかり得心して。

ト一人〳〵に見せて、お末の側へ行き

コレお末どん、どうぢや解つたか。なんぢや淚まで零して喧ましう云はんしたが、手代こそして居れ、そんな譯の分らぬ藤兵衛ぢやござんせぬわいなう。

ト狀を忠兵衛の前へ抛つてお末の肩を叩く。

すへ　てつきりわたしが斯うであろうと思ふた。忠兵衛さん、そんな事に拔りのある藤兵衛ぢやないわいなア。

忠兵　喧ましいわい、この仲立は杢兵衛ぢや……杢兵衛や杢兵衛や。

杢兵　ト此前より、杢兵衛出かけ居て
忠兵衛さん、今聞いて居れば、藤兵衛は不義者ぢやと
云ふて、わしが名が出ましたが、その狀を見せさんせ。
忠兵　オヽ、われにも見せにやならぬ。一體この色事は、
われが仲立したのであらうがの。
杢兵　何をきよと〳〵云ふのぢや。マアその狀讀んで聞か
さつしやい。
忠兵　オヽ聞かさう。これぢや。
ト出す。
杢兵　ドレ。
ト取らうとする。
忠兵　イヤ、それから御覽じ。
ト持變へる。杢兵衛、見て
杢兵　アノ證據と云ふは、その狀の事か。
忠兵　知れた事ぢや。コリヤ、このや印と印し印と、おの
れが書いて覺えがあらう。うぬら三人云ひ合せた判じ物
ぢやわい。
杢兵　その狀か。しもうた。
忠兵　なんと膽に堪へたか。仲立めが出をつたからは、有
の儘に云うてしまへ〳〵。

杢兵　ハヽヽ。
忠兵　ヤイ〳〵何が可笑しい。證據を出されて云譯なさに
高笑ひして紛らすのぢやな。
杢兵　お前の心に引比べ、人の心も同じやうに思ふが、エ
ヽこなたは惡るい根性ぢやの。一體この狀の譯を知らぬ
に依てぢや、云ふて聞かさう。マア聞んせ。横町の井筒
屋の彌兵衛さんが今朝俺れへ手紙をおこさんしたには、
好い鳥を他所から貰ふたに依て、晩に來い一杯呑う、菓
子屋の藤兵衛さんも誘ふて來てくれいと、それゆゑさつ
きに半吉どのに頼んだその狀、證據と云ふは彌兵衛さん
の所から來た狀も爰にある。讀んで見やんせ。
ト狀を出す。
忠兵　なんぢや色々の事を吐かすわい。彌兵衛さんの鳥の
事を云ふておこすに又このや印と、と印とは何んの事ぢ
やぞい。
杢兵　さいなう、奉公人に酒一ッ上げうと書いてやつては
店の手前が惡るいに依つて。
忠兵　そんならこのや印は。
杢兵　横町の彌兵衛さんの事。
忠兵　と印とは。

杢兵　鳥の事。
忠兵　し印とは。
杢兵　汁にして呑うと云ふ事。
忠兵　そんなら最前から、や印と印とは、わいらが酒を呑む事か。
杢兵　本にお前もなア、實證も見屆けずに不義者ぢやの仲立ぢやのと、以後をきつと嗜みなされませ。
藤兵　コレ〳〵忠兵衞どの、や印とは矢つ張りお寮人さまの事かえ。
忠兵　ア、モウゑいわい。
藤兵　したが誰が忍ぶのぢやいなア。
忠兵　エ、、好い加減で置かんかい。
藤兵　本兵衞どの開かんしたか。あんな物で證據とは忠兵衞どの、お前もよつ程結構人ぢや。ハ、、、。
忠兵　ナニ、俺れを結構人と吐かすのは阿房らしやと云ふのかい。
杢兵　假名で云へばそんなものぢや。
忠兵　おのれ迄が同じやうに木造りの分際でその頰げたを
ト擲ぐらうとする。杢兵衞、その手を捉へて。
杢兵　コレ。何するのぢや。お前のやうに人に云ひがゝりすると、後には人が赦さぬぞや。これに懲りて惡企みも止しなんせ。
ト持たる腕を振放し、引こかす。忠兵衞、起上り又取りかゝるを杢兵衞握り拳にて忠兵衞の鼻柱くらはす。
忠兵　アイタ、、。
ト鼻をかゝへ、くろ〳〵と舞ふてへたる。
杢兵　鼻血なら毛を拔いて上げうか。
ト忠兵衞の首筋の毛を拔きにかゝる。その手を拂ふて
忠兵　おだてさらすな。
ト鼻を撫て見て
伯母貴、鼻血ぢや。
こう　エ、とつと、せうもない事云出して、埒もない怪我しおる。
忠兵　なにコリヤ皆、こなさんが判斷さんした
ト云はうとするをお幸額で抑へ
こう　コリヤ……ア、、ホツとした。モウそろ〳〵と行かうかい。
藤兵　左樣でござります。モウそろ〳〵と歸りませう。若旦那、お前樣は私しがお供して歸りませう。イヤ杢兵衞どの、大儀ながらお家や御寮人をお供して送つて下んす

まいか。

杢兵　ほんにお前さんは、若旦那様をお供なされませ。お家や御寮人様は、しつかりと私しが預りました。

八十　わたしも最前の時は案じて居りました。ならお末。

すへ　お前様よりわたしや藤兵衛さんとお前様の仲立の狀を聞いた時は、耳がぐわん／＼としましたわいなア。

八十　モウこつちも、腹が立つて／＼。

ト云はうとするを、藤兵衛、杢兵衛、顔にて抑へ。

藤兵　ア、申し、詞多きは品とやら、サアお家様、船へお乘りなされませぬか。

こう　去にませう／＼、忠兵衛、わが身も去にやらぬか。

忠兵　今船へ乘つたら醉ひやんす。歩いて去ぬるにも去なれはせず。

こう　ソリヤ又何故に。

忠兵　鼻血ぢや。

こう　何を阿房らしい。

藤兵　サア若旦那、お出なされませ。

トこれにて、金五郎、藤兵衛、花道へ行き、お幸お八十、お末、杢兵衛、船に乘り、お八十、金五郎と顔見合せ心意氣あつて。

金五　そんならお八十。

八十　金五郎さま。

ト船より伸上る。藤兵衛、留めて。

藤兵　お二人さん、お別れ申しまする。

杢兵　船の衆御苦勞。

ト唄になり、船は下座へ入る。金五郎、藤兵衛は向うへ入る。後に忠兵衛殘り、こなしあつて。

忠兵　どう思案して見ても金五郎のある内は、アノお八十めは俺れには靡かず、あいつを生れも付かぬ不具者にしてお八十に愛想を盡かさすワ。付てうせた藤兵衛は行く道を考へて人を頼み、消して仕舞ふが上分別、とは云ふものの忌々しいわい。伯母貴が色々の事を云ふたゆゑ、うまいと思ふてやりかけた所が、鳥を汁にして酒呑むのぢや、擧句には鼻柱をポンと怒るにも怒られぬわい。アア、これが一生はなじの種ぢやわい。

ト鼻を撫て見たり、いろ／＼可笑し味の振りにて、チヨン／＼、返し。

造り物、通りの二重、草土手、向う遠見に淀川の七曲りの書割、靜かなる合ひ方。

道具とまる。

ト下座より、仲間飛脚四人出て。

仲間　頼まれた事合點か。

飛脚　オヽ、ソリヤ呑込んで居る。向ふから來る二人連。

仲間　消してくれいと頼まれた金五郎め。

飛脚　首尾ようやつたら褒美の金ぢや。

ト斯んな事云ふて居る。ト上手より忠兵衛走り來て。

忠兵　オヽ二人の者、わいらに頼んだ事はよいか。

二人　ソリヤ呑込んで居ますわいなう。

忠兵　モウ爰へ藤兵衛と金五郎めが連立つてうせるに違ひはない。おりや彼奴らより近道を走つて、わいらに逢ふて、しまうて取る積りぢや。

ト向うを見て

アレ〳〵、向うへ見える提灯が慥かに藤兵衛金五郎。見付けられては一大事。どこぞそこらへ忍べ。

兩人　合點ぢや。

ト三人小隱れする。向うより藤兵衛、金五郎、連立ち出て、藤兵衛、提灯を持ち出て。

藤兵　若旦那、お靜かにおこしなされませ。

金五　最前は思ひがけない忠兵衛の惡企み、狀の事を聞いた時は、わしも本間かと思ふて腹が立つたわいの。

藤兵　私しに限りそんな事があつてよい者でござりますか

ト云ひ〳〵兩人本舞臺へ來る。ト四人出て忠兵衛の持ち居る提灯を叩き落す。これより、忍び三重になり、暗がりの模樣にて可笑し味の探りにて立廻りになり、藤兵衛、金五郎の胸倉を持ち捻付ける。

コリヤ、おのれ盜人めが。

ト捻付ける、ト金五郎。よろしく留め。

金五　コレ藤兵衛、わしぢや〳〵。

トこれにて、よろしく放して。

藤兵　オヽ、若旦那樣でござりまするか。堪忍しておくれなされませ。わたしや泥棒を捕へたかと思ひました。早うお出なされませ。

金五　わが身も怪我をしてたもるなや。

藤兵　宜しうござりまする。早うお出なされませ。

金五　合點ぢや〳〵。

ト此聲にて皆〳〵囁き合ひ、又敵役忠兵衛同士討の事いろ〳〵ある。ト金五郎先きに藤兵衛花道へ探り行く。惡者忠兵衛を捉まへ捻付けて。

皆々　コリヤ、藤兵衛金五郎め。

ト聲にて藤兵衞、心付きよろしくあつて。

藤兵　阿房よ。

皆々　エヽ。

藤兵　ございませ。

ト刻み、兩人花道へ入る。後は皆々忠兵衞を捉らへ無性に擲ぐる。よろしく

幕

大詰

伊豆久の場
金屋の場
眞言坂の場

役名——金屋金五郎。藝者、小さん。甥の忠兵衞後家、お幸。下女、お末。木造り、李兵衞。丁稚半吉。田虫の權。耳切の八。姉、お雪。娘、お八十。親方、長兵衞。手代、藤兵衞。

造り物、正面、大骨にて昌曼軒並びの書割、但し上手に伊豆久と云ふ掛け行燈かけ、茶屋の門口人出入り暖簾かけあり、幕の内より太鼓入り騷ぎ唄にて、

ト幕開く。

ト庚申詣りの仕出し、兩方より行違ひあつて

仕出　これは誰方ぢやと思ふたら久八さん、モウお詣りなされましたか。

仕一　ほんに伊兵衞さん、お前も參つてなら、連立つて行から物。ナゥ佐助さん。

仕二　左樣でございます。イヤ、私しどもは毎々庚申缺さず參詣いたしまする。御利生は靈驗な事でございまする。

仕三　イヤ又滅切り疱瘡が流行りますさうなゆゑ、七色の内にある猿を、ひどう人が受けに參じますさうな。

仕四　イヤ又今夜の人と云ふ物は、門際は中々通れる事ではございませぬ。こちらは庚申をかこ付けて、歸りは坂町か灘地で一杯やる積りぢや。アヽ、一緒ならばよかつたになア。

仕一　然し庚申詣りがあんまり遲いと、お内のお鹿さんが定めてかき付かつしやろぞえ。

仕二　それゆゑ爰で逢ふ事は、何事も見ざるにして

仕三　云ふた事は聞かざる。

仕一　何んにも云はざる。

仕二　隨分お早う

皆々　お別れ申しまする。サア／＼ござれ／＼。

トわや／＼云うて、皆々別れ入る。ト此鳴り物にて、向うより金屋金五郎、着付羽織、後より娘お八十、續いて下女お末各々好き所にて

八十　申し／＼、そのやうにお先へお出なされずと、もそつとお靜かにお歩きなされませいなア。

すへ　御寮人様ぐつとおつしやれ。申し金五郎さんお前様もどうした物でござります。今夜の庚申詣りは御寮人様とお前様と手に手を引かして園部薄雪の道行、わたしはまがきの役、手代の藤兵衞さんを妻平にして四人が連立てかうと思ふたに肝心の藤兵衞さんは來もせず、その上お前様は御寮人さんを撒て置て、人が見ると怖はがつておぢ／＼と先へ立つて、それ程人が怖うござりますか。但しは御寮人さんと連立つてお出なされまするかお嫌やでござりますか。

金五　ハテ扨さうではなけれどもこのお八十はこちの別家金屋小兵衞の娘、その娘をば本家のこの金五郎が娶なかしたと云はれては、纔しい生さぬ中のお子なり、殊更舅の忠兵衞が滅多無性にお八十を許婚ぢやと云ふて居る。サアさう云ふ中ゆゑ、人中では別るゝやうにするは互ひのため。コレお八十、必ず嫌ふではない、腹を立ちやんな。コレ／＼お末このしよ萬の毘沙門坂を上つて行けば人も來ず、なんぼ手を引て行ても大事ないぢやないかいなう。

すへ　さう仰しやれば爰からお手を取てお出なされませ。

トお八十を金五郎の側へ突きやり、お八十、恥かしさうに顏隱しこなし。金五郎、手を取つて

八十　左樣なら申し、どうぞ連れて參つて下さりませ。

すへ　ヨウ／＼、しつくりと好い御夫婦。お八十金五郎宵庚申道行の始り／＼、テンチン／＼。

ト口三味線にて云ふ。三人顏見合して

金五　ハ、、、何を譯もない。サアおちや。

トお八十の手を引き、本舞臺へ來る。上手より、耳切の八、田蟲の權、惡者の拵らへに、酒に醉うたるこなし、金五郎と行違ひ、兩人、足を踏まれたる體にて

兩人　ヤイ／＼、待あがれ。

ト三人悔りして立ちどまり

金五　待てと仰しやるは、私しどもの事でござりますか。

權　私しどもゝ氣が強いわい。人に足を踏んでおのれら足に覺えはないか。待あがれ。痛いわい／＼。

八　コリヤ、おのれら衒妻連れて面白からうぞい。おい

らは働人ぢや、足を損じては明日から商賣が出來ぬわい、商賣の出來るやうに直しやアがれ。アノ委な引裂れめ。

ト金五郎、お八十、どうせうと悚ふ。お末、兩人を押へて權と八との側へ行き

すへ　コレイナアお二人さん。何ぢやいなア、屈強な體をして御牢人や若旦那が一寸踏んだ位で足の立たぬ事もござんすまいがな。云はうならこの廣い大道、こつちのお二人が手を引てござると見えたら、なんでもコリヤ工合のある庚申詣りぢやと思ふて、お前の方から除けんならんのを無理に行當て、イヤ足に覺があるかのと喧嘩を喰はしやんすは無理と云ふ物。こつちの足に覺のないより、お前方に目がないやうな物ぢやぞえ。

八　エヽ、ほさつめ、何を吐かすぞい。見えてありやこそ、こちらへ除けりやこちらへ失せる。あちらへ行けばあちらへ付いてうせたぢやないかい。

權　エヽ八よ、ごて〳〵云ふ事はないワ。アノ二才め。衒妻めも爰へうせて謝りさらせ。うせやアがれ。

八　なんぢや、なめた頰さらしてうせやアがらぬか。うせずばこつちから行くワ。權よ來い。

權　合點ぢや。

ト立ちかゝる。お末、支へるを、上手へ蹴飛し、金五郎、お八十、兩人を引摺つて來る。金五郎支へる、お末又中へ入り、色々揉み合ふうち、下座より[illegible]の忠兵衞、着付羽織、庚申詣りの形にて出て、この體を見て、眞中へ來て、權と八を世話立にて投げ廻す。皆々[illegible]り。

金八　オヽ、忠兵衞どのか、

忠兵　マア、片脇へ寄つてござりませ。

ト三人を片脇へ寄せる。權と八起き上がつて、

權　何ぢや〳〵。足の立たぬその上に、首の骨まで歪んだがな。

八　コリヤ權よ、見たか。待て。斯んな時には好い男が出さつてボン〳〵と投げる事は兼て心得ては居るが、見りや埒抜けもせぬ男の態で、無理無體に人を投げさらすゆゑ、錆た出刃で腹切つたやうで、痛いわい〳〵。

忠兵　喧ましう吐かすな。コリヤうぬら、參詣の女中を見て物云ひ付けて喧嘩するを、ぱつたりと云ふぞよ。

兩人　エヽ。

忠兵　イヤサ、うぬらこの喧ましいのに、そんな事しても大事ないか。定めて酒が足らんのぢやあらう。爰に賽錢

の殘りが二百ある。これで一杯呑んで濟ませ〳〵。
ト錢二百抛り出す。兩人、顏見合せ、コリヤモウいけんと云ふこなし。
權　八よ、錢が二百出た。ごて〳〵云ふて顏赭めうよりは、この二百を貰ふて一杯やらうかい。
八　われがさう云や仕方がない。然しわれの天窓とおれの天窓と、どやされたが百、二人の足を踏まれたが百、四八宛に當るなア。
權　何ぢや四八ぢや。安い物ぢやが、足一本四八なら蛸の割すると高い物ぢや。モウ料簡して行かうかい。
八　さうせう〳〵。
ト錢を分けて、金五郎お八十の方を見てとは云ふ物の、
忠兵　まだ云分があるか。
兩人　何んのお前、百でころりの夜鷹がサ。ヤレ〳〵。
トぞめき唄をうたひ逃げて入る。
忠兵　ほんに太い奴らでござるわい。
ト此うち、お八十、癪の起つたこなし。金五郎、介抱して。
金五　コレ忠兵衞どの、お八十が癪が起つたわいの、

すへ　今の奴らで恟りなされたのぢやあらう。なんぞ藥はござりませぬかいなア。
忠兵　藥と云ふて何にもないが、幸ひ爰の家をかつて、ちつとの間氣を靜めたら癒るであらう。
金五　デモ、ツイに行付けぬ所へ。
忠兵　ハテ、ぼんやの內へ男と女子が入るのは、けんたいぢや。お八十さん、若旦那一緒にござりませ。
八十　イエ〳〵、わたしや恥かしうござんす。痛うても其方と參りまする。
忠兵　なんの恥かしい事があつて……お末、われが手を引いてちやつと行かんかい。
すへ　アイ〳〵、サア御寮人樣金五郎樣、お出なされませ
ト此うち、忠兵衞はいづ久の內へ入り、捨ぜりふにて直ぐに出て來て
忠兵　サア〳〵、蒲團も綺麗なをかつて置いた。サアお末、早う連れて行かんかい。
すへ　合點ぢやわいなア。申し忠兵衞さん、爰は盆屋ぢやなア。
忠兵　それがどうしたぞい。
すへ　サア、御寮人樣と金五郎樣は二階へお上りなされま

し、私しはたつた一人、下に居るのかいなア。

忠兵　エ、何吐かすぞい、早う連まして行け。

すへ　サア、好いわいなア。御浪人樣金五郎さま。

八十　忠兵衞さん。色々のお世話を受けまする。

金五　そんなら忠兵衞どの。

忠兵　挨拶なしに行たり〳〵。

ト安藝の宮島の流行唄になり、金五郎、お八十、お末付き添ひ、いづ久へ入る。忠兵衞、後を見送つてこなしある。此とき、八に權戻り來て、顏見合せ

兩人　忠兵衞さん、首尾はどうぢや。

忠兵　首尾は上首尾ぢやが、まだ發端ぢや。これからが肝心かんもうぢや。

八　上首尾なれば二百では、あんまり安いではないかえ。

權　こなさん氣があらうと思ふて後戻りして來たが、あれならば、こつちも思案があるであらう。なア八よ。

ト此うち、忠兵衞、紙入れより二朱を二ツ出し、兩人の手へ渡し

忠兵　わいらは俺れに德のあるやうな物の云ひやう、二朱と首の立まへなら惡るい事はあるまいがな。最前の時に斯うするは合點なれどアノお末めがけつかると內でべりべり饒舌るのが面倒さ。この間鮒卯での目論見、藤兵衞と李兵衞めにちやつちやほやさにしられた。それから狂言を仕替へて立役仕込み。一體アノお八十は死んだ旦那の遺言狀で俺れの女房なれど、兎角にぴんしやん仕居る。合點がいかぬと思ふて見たりや金五郎とちゝくつて居る。捕まへて云はうにも本家の若旦那ゆゑ云はれもせず、伯母貴は仕樣があると俺れを押へてばつかり。所でわいらが常から話しする通り、阿州のお屋敷の彼の摩利支天の尊像、彌々知れぬ時には盜人の疑ひかゝつて金五郎の身の上、詮議の日延べの日限りも今日明日、尊像が手に入らにや阿波から囚人。邪魔になる手代の藤兵衞はその時に屋敷から金五郎を預り主、さうなれば金屋小兵衞の家は伯母と俺れが心任せ、金五郎と藤兵衞は阿波の國で首はころり。後とへ廻つてこの忠兵衞が尊像を差上る。お屋敷の請けは段々上首尾。本家も菓子屋も俺れ任せ。殘つたお八十は一家のお雪を始め金屋小兵衞の家が立んとあつてお八十を女房に持つてやつてくれいと賴むワ。俺れは嫌やと頭を振るワ、尊像を上げた手柄でお屋敷から御上意で謝まらして、お八十を女房に持つワ。好きな嚊を持ち、本家も菓子屋も丸呑みの忠兵衞さまの出世は目

權　前〻なんと二人とも、けうとい物か。ア、辛度。
　そのやうにとん〳〵と行かうかの。
八　それに又二朱百では
兩人　安い物なア。
　ト二朱二ッ出してやる。兩人取つて
これは。
忠兵　心祝ひぢや。取つて置け。
兩人　なんとぎゑんぢや。打ちませうか。
忠兵　打つてくれ。
三人　打ちませう。シヤン〳〵。モ一ッせい、シヤン〳〵。
祝ふて三度。
忠兵　コリヤ。
　トあたりへこなしあつて
靜かに〳〵。
ト三人よろしくこなし。チョン〳〵にて　返し
　造り物、二間の二重、見附障子、前側高欄付き、東
西落間、この後ろは植込の書割、總ていづ久盆屋の
二階の模様、右二重の眞中に蒲團を敷き、後ろへ屛

風立て、お八十、矢張り癪の痛むこなし。金五郎は脊
中を撫で介抱して居る、賑かなる合ひ方にて、道具
とまる。
金五　コレ〳〵お八十、ちつと癒つたかや。
八十　アイ、最前よりはちつとましでござんす。さうして
お前様は退屈にござりませうなア。お末は下に居ります
かいなア。
金五　イヤ、お末は其方を駕籠に乘せやうと思ふて、爰の
家のお人と一緒に行たが、まだ戻らぬわいなう。
八十　さうして忠兵衞さんは、どうさしやんしたえ。
金五　サア、忠兵衞どのは最前門口で別れたなりで、去な
しやつた事ぢややら。
八十　忠兵衞さんが去なしやんしたら又最前のやうな事が
あらうかと、わたしや怖うござんすわいなア……アイタ
アイタ。
　ト又さし込むこなし。金五郎、脊中を押へ
金五　コレ〳〵、そないに思ふと尙突ッ張るがの。ぢつと
辛抱しや〳〵。
　ト介抱する。此とき、忠兵衞、息きらして出て
忠兵　申し金五郎さん、最前の奴らが、何でも連を誘ふた

かして、遊行寺の門前で五六人が何やらほしや〳〵。お前さんのお歸りを待伏せするやうな樣子、今辻の方へ參じました。お前さんは大事の體ぢや程にお八十さんを乘せる駕籠が來てござりまする。先きへ乘つてお歸りなされませ。お八十さんは私しがお供して、後とから歸りまする。サア〳〵、早う駕籠にお乘りなされませ。

ト うろ〳〵して云ふと、金五郎も立つたり居たりして

金五　それはさうなれど、お八十がこのやうに惡いに依つて。

八十　イエ私しは大事ござりませぬ。お前樣、ちやつと駕籠に乘つて早う去んで下さんせ。

忠兵　ソレ〳〵、爰にござると却つてお八十さんが心遣ひぢや。ちやつとお歸りなされませ。

金五　そんならお八十、わしは先きへ去ぬる程に……忠兵衞どの、賴みますぞえ。

忠兵　サア、ようござります。サア〳〵早うお歸りなされませ〳〵。

ト 金五郎捨ぜりふにて入る。後に色めいた合ひ方になり、忠兵衞、よろしくあつてお八十の側へ行き

申し〳〵お八十さん、ちつと痛みはようござりますか、少し和らいだら、そろ〳〵歸りませうか……申し。

ト 後ろへ廻りお八十の脊中を撫る。お八十も手を取り我が懷へずつと引込む。忠兵衞、悸りして慄へながら

申し、コリヤ何なされまする。

八十　とても撫つて下さんす氣なら爰らあたりをぐつと撫つて下さんせ。

ト 胸落の所へ手を入れさす。忠兵衞、身慄ひして

忠兵　申し〳〵、こない所へ手をやつて、コリヤどうやら勝手が違ふたやうな。ぐつと押へても大事ござりませぬかえ。

八十　アイ。モチツト下を。

ト うつむく。

忠兵　エ、、、、まだ下かえ、

八十　アイ。

忠兵　そんならこの位かえ。

八十　エ、つツとモウ。。

忠兵　申し、そないに下へいたら、宇治橋渡つて先へ行きますが。

八十　トこなし。お八十、ぢつと顔を眺めて
忠兵　忠兵衛さん、お前わたしと一緒に伊勢詣りはお嫌やかえ。
忠兵　滅相な。いつから〳〵、ひつ付て放れいでも大事ござりませぬかえ。然しお前様とこないになつたら、金五郎さんが
八十　怒らしやんしても大事ない、どうぞ叶へて下さんせいなア。
忠兵　コリヤマア、どうなつたのぢやいなア。
八十　但しはわたしが嫌やかえ……こちやどうもならぬわいなア。
ト忠兵衛の手を持ち、しどけなうなる。忠兵衛、お八十を引寄せる。
八十　フヽコレ、
忠兵　コレとは噓かえ。
八十　なんのマア。
ト寄り添ふ。
忠兵　そんなら本間に
八十　二世も三世も
忠兵　四世も五世も
八十　替つて下さんすなえ。
忠兵　滅相かいなア。
八十　オヽ、嬉し。
ト抱き付く。忠兵衛、お八十を抱いて屛風を引廻す。少し薄ドロにて、チョン〳〵

返し

造り物、三間の二重、見付け納戸口、上手、重れ戸棚にて錠前付き引き出し入用、下手、淺黄壁、注文差し、上手は折廻り障子屋體、この前に大木の松の實木、人昇り降り入用、下手、橋がゝりの方菓子店、金屋と書いた暖簾かけ、後ろに戸を締める事入用、例の所に門口、右二重下手に帳箱、折障子、かけ硯など直しあり、この後ろに忠兵衛、晝寝の體にて横になり居る、眞中に下女お末、着付をたゝみ居る。道具の納る迄矢張り薄ドロ〳〵、納ると合ひ方になる。

すへ　なんぢややら、昨日は祭りでなんでも、俄かを見やうと樂んで居た物を、一家のお方様がお出なされ朝から晩迄料理拵らへで、片びたしになつて、日がな一日てん

てん舞ふのはわし一人。このマア下女には何がなる。

ト忠兵衞の方を見てこなしあつて

オ、笑止、忠兵衞さんも草臥てか、ふんすん〳〵と心惡るい寐やうするお方ぢやなア……アレ聞て居ると、ア、心惡。おかしい。こつちの氣がもだ〳〵して來るワ。

ト捨ぜりふあつて、其所らを直す。奥より、半吉、出て

半吉　お末どん〳〵、コレお末どん、お家樣が呼んでぢやさうして屋敷からの註文の水菓子が出來たら、持て行てくれいと云ふてぢやあつた。

すへ　何を云はんすぞいなア。店の註文持て行くは丁稚の役ぢや。お前持て行かんせ。又袋物が出來てあるか出來て居ないかは、忠兵衞さんに問ひいなア。

半吉　成る程、註文を持て行くは丁稚の役ぢや。そんならお前はお家樣の側へ、早ふ行かんせ〳〵。

すへ　丁稚だてらお前に差配受ふかいなア。何を揚枝屋の看板め。

半吉　俺れを揚枝屋と吐かすおのれの顏を見い。しつかい公事の對決ぢや。

すへ　對決とはえ。

半吉　ハテ、兩方が出て居るわい。

すへ　エ、お前の口には勝たれぬ。早ふ註文を持て行かんせいなう。こちや奥へ行かうか。アノせんまめが。

半吉　ペ、、、、。

すへ　ベ、、、、。

ト兩人惡體云ひながら、お末は奥へ、半吉、後とに殘つて

半吉　ひどう怒つてけつかる。なんぢや忠兵衞さん、爰に寐て居るのか。ア、おいらが晝寐すると喧ましう云ふ癖に、味う寐て居るなう。起きさんせ忠兵衞さん、日が暮れるわいなう。何んぢや可笑しい。眉に八の字入れてフンスン〳〵云ふて何の事ぢや。コレ忠兵衞さん、起きさんせ起きさんせ。

ト脊中を叩く。忠兵衞、悧りしてむく〳〵と起きて下舞臺へ降りる。薄ドロ〳〵、半吉に抱き付く。半吉、忠兵衞を突き放しこちらへ退く。忠兵衞、うつとりとして居る。

半吉　エ、、なんぢやいなう、忠兵衞さん、お前襲はれて居たのか。氣を確かに持たんせ。

半吉　ヤアわりや半吉……ハ、ア、爰は矢ッ張りこちの內

か。所はいづ久の二階で。
半吉　何を云ふのぢや、どんな夢を見やんした。
忠兵　そつくり俺れの狂言に嵌つて、まんまと上へのつかかり。
半吉　なんぢや、お前どうさんした。
忠兵　半吉聞いてくれい、われも知る通りアノお八十には首丈けのこの忠兵衞、寐ても起ても忘れた事はないわい。所に昌曼の盆屋でお八十の癪を撫でゝやるその內に、あつちから持付けて、俺れが手をじつと持つたり。上をなで下を撫で、サア爰一番の所で。
半吉　どうさんした。
忠兵　おのれが起しさらした。
半吉　なんの事ぢや、今のは夢で本間ぢやなかつたか。
忠兵　エヽ忌々しい……コリヤ、急に目論見をせにやならぬわい。
ト手を組んで思案をする。
半吉　コレ忠兵衞さん、お前が常々云はんすには、コリヤ半吉、俺にも思ふやうにならば、われも元服さして手代ぢや、樂んで居いと云はんしたが、ソリヤマア何時の事ぢやい。
忠兵　コリヤどうあつても、今日明日の內にやり付けにやならぬわい。
半吉　エ、怪體な。めん／＼ばつかり呑込んで、コレ、一體俺れを何時元服さす積りぢや。おりや元服しやんしたら物嫁を止めて、おやまを買ふて見たいわい。
忠兵　ムウさうぢや。コリヤ半吉、隨分われを手代にしてやらうが、今急に先度來た阿波の飛脚屋へ、一走り行てくれるか。
半吉　合點ぢや。行て何と云ひやんせう。
ト忠兵衞、懷中より狀を出し
忠兵　コリヤ半吉、この狀を飛脚屋へ持て行き、阿波の屋敷へ間淵軍兵衞樣が登つてござるゆゑ、これを渡してお返事をと、とつくりと云ふて來い。早ふ／＼。
半吉　合點ぢや／＼、戻りに芝居一切見たら惡いか。
忠兵　情ない奴ぢやわい。芝居は盆替りに角も中も見せるわい。早ふ行け／＼、これが首尾よういたらば、直ぐにわれは元服ぢや。
半吉　オット任せと云ふ儘に飛ぶが如くに急ぎ行く、
ト淨瑠璃を語りながら半吉向うへ入る、
忠兵　落すなよ…思ひがけなら軍兵衞さまが、今朝到着と

はこつちの仕合せ。尊像の日延べも今日明日。こいつでいら立に阿波の屋敷へ呼付けさせ、金五郎藤兵衛はお屋敷から直ぐに阿波の國へ引つ張られてうせるワ。後とは暗闇、所でお大事の物は矢ツ張りこれにお在しますぢや、

ト首にかけたる尊像を出して

これさへ持て居りやこつちは大丈夫、抑々これに渡らせ給ふは摩利支天の尊像でござる。

トいろ／＼戲れ居る。此とき內より

すへ　忠兵衛さん／＼。

ト呼びながら出る。

忠兵　オイ／＼、今行く／＼、

すへ　コレ忠兵衛さん、さつきにから行水の湯を取つて水になりさうな。早ふ浴びさんせぬかいなア、

忠兵　イヤ、おりや半吉を一寸使ひにやつて、それを待つて居るのぢや。誰なと先へさせてくれい。

すへ　イヽエイナア、お家さんも御家人さんもお了ひなされた。お前の後とか藤兵衛さんとわたしと半吉どんで了ひぢやわいなア。早う浴びて了ひなされ。

忠兵　そんなら藤兵衛を入れてくれい。

すへ　藤兵衛さんは町內の葬ひに行てゞあつたわいなア。ちやつと了ふておくれいなア。

忠兵　本に藤兵衛は葬禮に行つたなア。そんならせうかい。

すへ　サア、早ふ行かしやんせいなア、

忠兵　忙しない奴ぢやなア。

ト唄になり奧へ入る、

すへ　本に何かに付けて、ど根性の惡るい。お家さんへ笑ひ顏しくさつてぽん／＼と大嫌ひぢや。それとは違ふてアノ藤兵衛さん、男が能うて氣が能うて、その癖で物和らかい。こつちは好い事ばつかり思ふて惚ては居れど、あつちはわたしの體が不容色ぢや。先づ色黑で餧尻で出歯で髮薄でその癖おまけに何所やらも臭いと思ふて居やしやんすが、目顏で知らしても素知らぬ顏は、わしが思ふて居る心が通じんのか。本に女子程味氣ない物はないわいなア。

ト唄になり奧へ入る、ト向うより、木造り杢兵衛、單物、夏ばつち、腰に木鉄を差し、鋸を持ち出る。後より手代藤兵衛、上下一本差し、葬禮戻りの拵らへにて、戸家の內より聲をかけながら出て、花道好き所にて。

藤兵　ヤア、植木屋の杢兵衛どのぢやごんせぬか。

杢兵　オ、お前は藤兵衛さん、なんぢや上下を着て、どつちへお出でなされた。

藤兵　イヤ、今日はお町内に不幸があつたゆゑ、小橋迄野邊送りの戻りがけでごんす。さうしてこなさんは仕事の戻りがけか。

杢兵　ハイ、中寺町の本正寺へ仕事に參じましてその戻りがけ。この間お家から松の葉を透してくれい、中が暗いと仰しやつたゆゑ、遲うございますなれど一寸寄て見ませうと存じまして參りまする。

藤兵　それは幸ひぢや。一緒に行きませう。

杢兵　左樣いたしませう。

藤兵　サア、ごんせ。

ト右の鳴り物にて、藤兵衛先きに後とより、杢兵衛、門口に留り、藤兵衛、内を覗いて

お末どん、鹽と灰とを持つてごんせ。

すへ　ハイ〳〵、藤兵衛さん、お歸りなされましたか。

ト納戸より出て、鹽と灰とを敷居へかけるこなし。

藤兵　オツト、それで可し。サア、杢兵衛どの入らんせ。

杢兵　ハイ〳〵。

ト兩人内へ入る。

すへ　申し藤兵衛さん、ひどう遲うございましたが、千日か小橋でございましたかえ。暑うございませうなア。

ト女房のやうに團扇を持つて來て無性に煽ぐ。藤兵衛此うち、脇差を取つて上下を脫ぐ。

藤兵　コレお末どん、この脇差をわしが半がいの中へ入れて置いて下んせ。

すへ　アイ〳〵、畏まりました。

トお末、脇差を取り、いやらしうしながら段々下手へ寄り、杢兵衛に行當り、兩人お末を見て、困つた者ぢやと云ふこなしあつて

藤杢　ハ、、、。

杢兵　コレお末どん、ゑろう色氣付いて來たなア。

すへ　ナニ、おだてゝおくれな。

トびんとする。此とき、奥より、お幸、後家の拵らへ、莨盆を提げ出る。

こう　藤兵衛今戻りやつたか。暑いのに大儀ぢやなう。さうして伊勢講の寄金は持つて戻りやつたか。

藤兵　成る程、堺屋で殊の外暇が要りまして金子を受取まして、直ぐに小橋迄走つて參りまして、あつちで上下を着たり脇差をさいたり、それさへ既の事に間に合はん所

でございました。ヘイ、二十兩お受取り下さりま。
ト懐ろより金財布を出してお幸に渡す。お幸、受取つて戸棚の引出へ入れ、元の所へ來て居る。
杢兵　本に金のせいらくから、葬禮のお供迄、八宗九宗の御用で、定めて夜分はお草臥でございませう。
こう　オヽ、コレ杢兵衛どの、この間から呼びにやるに、アノ松の枝をおろして貰はぬと、中は暗し、うん氣な時分は暑うて成りませぬわいなア。
杢兵　私しもこの間から、仕事が支へて能う參りませなんだ。今日枝を少とおろしまするでございませう。お末どん、梯子は何所にあるえ。
すへ　アノ切戸の内に横にしてあるわいなア。
杢兵　オツト可し〳〵
ト下舞臺上手へ入る。直ぐに梯子を持ち出て松の木へかけて、よろしくあつて
お家様、藤兵衛どの、御免なされませ。
ト松の木へ昇る。
こう　コレお末、行水の湯も微温うはないか。藤兵衛は片びたしぢや。早う湯を取てやりやいなう。
すへ　ハイ〳〵畏まりました。申し藤兵衛さん、湯を取ります、ちやつとお召しなされませ、お前さんの後とで行水すると思や、こんな嬉しい事はない。ドリヤ湯を取つて置かうか。
ト入る。
こう　本にお末とした事が、わつけもない事ばかり。サア藤兵衛、行水しやらぬか。わしも一緒に行きませう。
ト立つて行かうとする、藤兵衛、一寸留めて
藤兵　イヤ申しお家様、一寸お待ち下さりませ。
こう　藤兵衛、わしを留めやつたのは何の用ぢや。
藤兵　イヤ申し、外の事でもござりませぬが、先日からお前様に、お話し申しました今の事は、まだ解りませぬかな。
ト小聲にて云ふ。お幸、わざと恍けた顔にて
こう　今のとは何やらであつたなう。
藤兵　申し、阿州の屋敷で紛失いたしました尊像の事、お前様はまだ忠兵衛さんに。
こう　サアその事も如才はないが、いよ〳〵アノ忠兵衛が持つて居ると云ふ事を、其方は知つて居やるか。
藤兵　サア、其所でござります。自體アノ尊像の儀は阿波のお屋敷蟲干しの折柄、拜見をお願ひなされた本家の若

旦那金五郎さん、その日に限り尊像の紛失は、若旦那の災難、盗賊の疑ひかゝり、既に囚人とおなりなさるゝを、御家老安田小十郎樣へ段々とお願ひ申し、二百日の日延べお聞き屆け下され、大坂へ歸つて詮議をすれど、なんの知れう。その上金五郎さまは空吹く風、二百と口では仰山なれど今日と暮し明日と暮し、段々迫る日延べの日限不圖聞き合したる阿州の御家中間淵軍兵衞さま、目當はそれと知れてはありながら、先きはお侍ひ、こつちは町人、その軍兵衞さまに懇意な忠兵衞どの、若しや訝しい事がお屋敷へ聞えては手代分とは云ひながら、お前樣の甥御の忠兵衞、ひよんな事があつては、このお家はお上のお咎めあつて、家内は缺所、なんと私しが見て居られませう。又尊像が出ぬ時は、本家の金屋の家は退宅、本家にも當家にも恩を受けたこの藤兵衞、どうぞ忠兵衞さんが御存じならば尊像を尋出し、阿州屋敷へ差上げなば、兩家共に浪風立たず、本にこの事を思ひますると、この藤兵衞は碌々に、夜も寐られませぬでござりまする。

こう　ほんに今では手代なれ、生れは正しい人と聞いた程あつて、常の奉公人とは違ふて本家を思ひ、こちの家を大事にしてたもる、志は嬉しうござる。然し、なんぼうわしが甥子でも、人の心は油斷がならぬと云ふて、證據もないのに、わが身は軍兵衞さまから、尊像を預つて居やうがなと、押し付けて云はれもせず。

藤兵　と云ふて期の延る程日切りは切れて、金五郎さまのお身の上、忠兵衞どのゝ身の上にも拘はる事。

こう　サア、案じたかてゝ、今云ふ通り明らさまに忠兵衞にも云はれもせず、コレ、こりやいつそ其方が尋ねて見ぬかいなう。

藤兵　滅相な事、私しの口からそんな事。

こう　サア、下世話の譬へ、頭巾越しに天窓を掻くとやらハテモウ、なるやうにほかなるまいぞいの。

　トずつと立つ。

藤兵　申し、この事計りはお前樣の御勘辨で、必ず忠兵衞どのには沙汰なしで、今一應御勘辨を。

こう　アイ、わしも思案をして置きませう。こなたも思案をして置かつしやれ。

藤兵　ヘイ、、、。

　ト唄になり、お幸、心意氣あつて奥へ入る。藤兵衞、見送つて。

安田小十郎さまの御内意の書面にて、目當は忠兵衞とは

知れてはありながら、お家さんの御縁家なれば、明らさまに云はれもせず、それゆゑお家さんより手繰る詮議も今の樣子では、容易には知れぬ寶……ハテ、どうしたらよからうなア、

ト思案する。この時、向うより、牛吉、ぞめき歌を唄ひながら出て、門口へ來て。

牛吉　エヘン〱、牛吉さまお歸り。

ト云うても藤兵衞は思案して居る。

牛吉登城。

ト大きな聲にて云ふ。藤兵衞、愕りして。

藤兵　誰ぢやえ。

ト大きな聲で云ふ。又牛吉愕りして。

牛吉　アレエ、、、。

ト門口へ飛んで出る。藤兵衞見て。

藤兵　牛吉、われかい、大きな聲で何事ぢや。

牛吉　俺れよりは、お前の聲が大きいわやい。

藤兵　わりや、何所へ行たのぢや。

牛吉　おりや忠兵衞さんの使ひに、阿波の飛脚屋へ。

藤兵　何しに行たのぢや。

牛吉　狀を持つて、然かも軍兵衞さまへやる狀ぢや。

藤兵　なんぢや、軍兵衞の所へやる狀持つて行つたのか。

牛吉　狀だんも何もしやせぬのぢや。

藤兵　そんなら、軍兵衞は登つて、阿波の屋敷へ來て居るか。

牛吉　アイ、さうぢや。

ト云はうとして心付き

イヤ〱、阿波ぢやない〱、狀でもないで。今のは俺が云損ひぢや。

藤兵　でも、阿波の飛脚と云ふたぢやないか。

牛吉　イヽエ、アノ阿波、オヽさうぢや、阿波の岩おこしを買ひに行たのぢや。

藤兵　でも、軍兵衞と云ふたのは。

牛吉　サア、その軍兵衞は。

藤兵　軍兵衞は。

ト競り込まれ、いろ〱もがいて。

牛吉　ソレ、軍兵衞〱軍兵衞呼んだる花嫁御〱。

ト手を叩き、唄ひながら奥へ逃げて入る。藤兵衞は後を見送つて。

藤兵　ヤイ〱、牛吉待て〱。とう〱紛らして逃げてうせたわい。なんでもコリヤ、忠兵衞がかしこう口留め

したと見えるわい。今吐かした阿波の飛脚屋へ行つた狀を、此方へてまへたらば、拔差しならぬ慥かな證據、ソレ。

ト門口へ行きかけ、ちよつと思案して。

とは云ふ物の、阿波の飛脚屋とばかり、屋敷の多い飛脚屋仲間。

ト内へ戻り。

それよりは、この事をお家に話し、半吉めを騙してその上で、アノ忠兵衞と、オ、さうぢや。

ト唄になり、奥へ入ろ。引違うて忠兵衞出て。

忠兵　今半吉に樣子を聞いた、こつちの手番ひ。なんでも藤兵衞めが、伯母貴や半吉めら探らす思案。コリヤ滅多に油斷はならぬわい。

ト此とき、暖簾の内にて

八十　藤兵衞や／＼。

ト此聲にて忠兵衞、店の方へ隱れる。なまめいたる合ひ方になり、お八十、内より出て。

藤兵衞や、今爰に聲がしたぢやないかいなう。

ト此うち、忠兵衞、後ろよりお八十に抱き付く。

忠兵　藤兵衞爰に居りまする。

ト抱締める。

八十　アレイ、誰ぢやいな／＼。

ト振放し顏を見て。

ヤア、お前は忠兵衞どの、何しなさるぞいなア。

忠兵　何しなさるとはお八十さん、慘いぞえ／＼。よくよく思へばこそアノわしが、顎の外れる程口說いても、嫌ぢや／＼と馬の跳ねるやうに、つれなうしてもあつても、こちや今日晝寐の夢に見たぜ、いらうたぜ、畢竟あれが夢なりやこそ、あれが本間で見たがよい、拔き差しはならぬとなア。これが彼の鮑の貝の片もうざうと云ふ物ぢや。なんぼお前が嫌やがつても、死んだ旦那の小兵衞さまの末期の水を取つて、遺言狀にはお前さへウムと合點なされますれば、直ぐに女夫ぢや、又伯母貴はお前と生さぬ仲、その甥のこの忠兵衞、そんならお前、豪い不孝者ぢやぞえ、あつたら器量して不孝者にならいでもよからうがなア。どうぢやなア／＼。

ト又抱き付きにかゝる。お八十、忠兵衞を叩き退け。

八十　エヽモウ、又しても／＼いやらしい、そつちへ寄つて下さんせ。

忠兵　そんなら、どのやうに云ふてもお前嫌やかえ。

八十　知らぬわいなア。
　トひんとする。
忠兵　モウ可い。さうお前が嫌らや、こつちも自暴ぢや、本家の金五郎さんと譯のある事、本家へ行てめつきしやつきして來うわい。
　ト行きかゝろ、お八十、縋りて。
八十　コレ滅相な、金五郎さんと覺えもない事を、本家へ行てそんな事云ふてよい物かいなア。
忠兵　譯もない事も凄まじい、蛇の道はへびぢや、知つて居るわいなア、黙ろばかりぢやない、お前がほてれんになつた事迄……云はんぞえ。十分顔がすたつても、其所を云はぬがお前が可愛さ、これがでんどへばれると、金五郎さんは間男、殊に阿波の屋敷からお咎めの證、首が落ようも知れぬぞえ。
八十　エヽ。
忠兵　さうなると、わしもお前を去らにやならぬ、それが悲しさばつかりで、ぢつと辛抱して居るわいなア。お前が嫌やでも遺言狀の男は手前、但し金五郎さんを間男にする氣かえ。
八十　サア、それは。

忠兵　但し本家へぶち割に行かうかえ。
八十　サア、それは。
忠兵　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
　ト振袖を持つて。
忠兵　コレ、好い加減に得心しなされいなア。
　ト無理にお八十を捻付け、抱き付きにかゝろ。此ときお末、出て中へ割つて入る。忠兵衛、お八十と取違ひ、抱き付きにかゝる。お末、忠兵衛の顔平手にてくらはす、忠兵衛、眼を叩かれたろこなしにて、
アイタヽヽ、コレお八十さん、なんぼわしぢやて、あんまりむげつしよに。なんぼ眼を叩かれても、ちつともいとはぬいとやせぬ。
　トお末の顔見て愕り。
ヨウ〳〵、今俺れが眼を叩いたのはわれか。おのれマア色々の所へ出さつて、其所退きさらせ……お八十坊、こつちへおいで。
　ト及び腰にお八十の方へ行かうとする。お末、又忠兵衛を突き飛ばし。
すへ　忠兵衛さん、お前もこのやうに、御寮人さんが嫌や

がつてござる物、それをば油樽に犬の付いたやうに、見ともない措かしやんせ……サア、御家人さんも奥へお出でなされませ。

忠兵　何を、おどれが知つた事ぢやないわい。

ト又行かうとする、お末、忠兵衛の足を持つて引きこかし、忠兵衛、おこづくを忠兵衛の顔へ唾を吐きかけ、お八十の手を取つて。

すへ　ござりませ。

ト奥へ入る、忠兵衛、顔の唾を見て、こなしあつて。

忠兵　どうした過去の因縁で、これ程迄に女子に嫌はれる物かいなア。揚句の果には、ぼさつ廻しに唾まで吐きかけられ、無念口惜しい目に遭ふても、アノお八十は思ひ切られぬとは、我が身で我が身に愛想が盡き、口惜しいわい／＼。

ト我が體を我が手に叩き泣落す。フト前なるお八十の落とせし笄を目に付け取上げて。

妙々、惡るい思案は斯う快う出る物か。最前ちらりと聞いたが、藤兵衛が持つて戻つた伊勢講の二十兩、あいつをこつちへてまへ、後へお八十が定紋のこの簪を入れて置けば盗人はお八十、金輪際憂き目を見せ、仕舞ひには二十兩を出して貸したら、お八十の心にもこれ程に嫌ふて居るのに、親切な忠兵衛さんと、ずるずると來るは必定。うまい／＼。

トあたりを窺ひ、下戸棚の錠を煙管にて叩き開け、中の金を取り出し、右の笄を後へ入れ、戸棚を締め、下舞臺へ下りて。

時にこの金を俺れが持つて居るは危い。何所ぞへどめて置きたい物ぢやが。

ト門口の上へ上げたり、股倉へ入れたり、いろ／＼してトゞふまへをして鴨居へ隠す。下手へ行つてこれをいろ／＼見てこなしあつて。

斯うして置けば、ナツト可し／＼。

ト唄になり、奥へ入る、ト此とき上手の松の小枝大分ばら／＼と落ちる仕かけある。ト向うより親方長兵衞、着付け三尺帯、手に手拭を持ち出て來て、門口にて

長兵　大方爰に居るに違ひはない。藤兵衛に逢ふて、めつきしやつき。さうぢや／＼

ト内へ入り、

イヤ御免なされませ。お手代の藤兵衛さん、お内にござ

りますか。藤兵衞さん／＼。

ト大きな聲にて呼ぶ、内より。

藤兵　オイ／＼、俺れに逢ひたいとは誰ぢや／＼。

ト云ひ／＼出て、顔を見て。

オヽ、誰かと思や額風呂の親方長兵衞どの、暑い時分にいきせきと、何所へ行かんすのぢや。

長兵　なんぢや、何所へ行かんすぢや、何所へ行かんすとも凄まじい、こちの小三は駈落ちをしやんしたわいの。

藤兵　なんぢや、小三が駈け落ち。ハテなう。

長兵　ハテなう所かい。今日河内屋から下のお客で身請けの相談、大臣對が付いて、本人にも得心さうと部屋へ行けば、駈け落ちして内には居らぬ。コリヤ、てつきりこなたが腰入れで、金のかゝつた大切の奉公人を動かしたのぢやな。そんな事しても大事ないのか／＼。

藤兵　默らんせ、長兵衞どの、色町とは違ふて、店を張つて居る通り筋、そんな事しさうな物か。こつちに覺へはない。コリヤてつきり門違ひ。但し又こつちへ入つたと云ふ事を、誰ぞがお前の所へ云ふて行きやんしたか。

長兵　イヤサ、それは。

藤兵　それに當てずいな詮議呼はり、こなさんよつ程逆上せて居るさうな。ちつと風でも入れさんせ。

ト無性に煽ぐ。

長兵　イヤ、そないに爆てゝ下んすな。證據なしに云ふて來たはこつちが悪るい。然し、小三の身請はお前の請合ひ、今日の明日のと引張つた、胴ぶくらへ身請の相談、そこからの駈け落ち見え透いてあるわい。そりやモウ云はぬ……が約束の手附金二十兩、サア今貰はうかい。

藤兵　成る程小三の身請は俺れが請合ひ、二十兩の金も渡すまい物でもないが、本人は駈け落ちしたぢやないか。人前には金五郎さんの相方のやうに見えても、外に又惚れた色客があつて知れぬ所へ埋めて置くか、又無分別で心中でもして見やんせ、こつちは二十兩の出し損ぢやに依て、小三の出る迄二十兩はエ、渡さぬわい。

長兵　本にどういへば斯う云ふと、ようそのやうに云はれるなア。そんなら金も取らぬ、その代りに爰な家で居催促ぢや。動きはせぬのぢや。

ト喧ましう云ふ。此とき、奥より、お幸、忠兵衞、お八十、半吉、皆々出て。

こう　オヽ、コリヤ誰方ぢや、ようお越しなされました。なんぢや喧ましいが藤兵衞、アノお方は何所のぢや。

藤兵　イヤ、このお人は。
忠兵　島の内の置屋、額風呂の長兵衞、今聞いて居れば小三は駈け落ちしたとの云ひ前ぢやが、コリヤ貴樣の方が尤もぢや、金五郎さんの事と云へば身を入れて世話をする藤兵衞、コリヤ、臺詞してやらざアなるまい。なう藤兵衞や。
藤兵　イヤ、忠兵衞どの、こなさんは訝しい根のある物の云ひやう、小三が駈け落ちすりや俺れが知つた事かい、きよろ／＼と何を云ふのぢやい。
忠兵　俺れも貴樣のこつきには閉口ぢやわい。
こう　なんぢや、忠兵衞と云ひ藤兵衞まで、可笑しい根のある物の云ひやう。さうして二十兩と云ふて居るが、イヤイヤ用心には繩ぢや。最前入れて置いた二十兩の金も俺れが持つて居やうわい。
　ト戸棚を開けて悔りして中を見て。
ヤア／＼、先刻に入れた二十兩の金がないわいの。
皆々　エヽ。
　ト皆々悔りする。忠兵衞、引き出しを取つて來て。
忠兵　ほんにコリヤ、錠前が叩き開けて金はないワノ／＼。
　ト仰山に云うて、中にある笄を出して見て

イヤ伯母貴、氣遣ひさんすな、盜人は知れてある。
こう　なんぢや。盜人が知れたか。
忠兵　同類も知れてある……やうごんす。俺れが今詮議して見せる。
　トこなしあつて
お八十さん、ちよつと爰へお出で。
八十　アイ。
　ト下舞臺へ來て
忠兵衞さん、なんぞ用がござんすかえ。
忠兵　用も用、怪しからぬ用ぢや、出してしまひ。
八十　出せとわえ。
忠兵　お前が盜んだ二十兩の金を。
八十　アヽコレ／＼忠兵衞さん、ソリヤお前何を云はしやんす。恐ろしいそないな事が。
忠兵　恐ろしい。コレ恐ろしいとはお前の爰が恐ろしいわいなア。コリヤ何か。ちらりと聞いた小三の手附は二十兩。ソレ、どこやらの奴が、おぼこいお前を蕩し込んで、二十兩の金を小三が手付に打たすれば。金五郎さんがお前を愛しぼがると云ふ。爰らから狂言を持ち込んだ事、孔明ぢや、知らいでならうかい。

ト藤兵衞に當付けて云ふ。お八十は金五郎の事を云うてくれなと忠兵衞の袖を引き、ちやつと俯向く。

本に憂しぼいはお前ぢやわいな。うろたへ探して金は取つたれど後に殘つたこの笄。コリヤ家内中が知つて居る檜扇の紋ぢや。伯母貴藤兵衞、ソレずつと御覽じ。お八十さんの笄ぢやあろうがな。サア直ぐに出してなら可し、又知らぬ者がこの笄が、どうして金の入れた内に落ちてあつた。仰しやらぬか云はぬか、云はにや療治が逢ふぞ。

ト箒を取つて來て、意氣込む。藤兵衞、留めかゝると

なんぢや〳〵藤兵衞。この金貴樣が持つて戻つたぢやないか。入れ所も知つて居るこなたぢや、それに外から差出るとソレ、今云ふた二十兩の智惠の付け手が、何所へ疑ひかゝらうも知れぬ。すつ込んで居やんせ。

ト藤兵衞、抑へる。お八十の手を引つ張り出て

サア、云はんせ、云はんせぬと、この箒の胸打ちぢや。人我れに辛ければ、我れ又人に辛しぢや。云はんか。云はにや、いつそ斯うして。

ト箒振り上げる、此とき、松の上より

李兵　忠兵衞どの、待たんせ。

ト　これにて、忠兵衞、愕りしてあたり見廻し、又振り上げる。

これはしたり、待たんせと云ふに。

忠兵　滅多無性に待て〳〵と吐かすが、一體マア何所からぢや。

李兵　外でもない、松の木からぢや。

ト　松の上より李兵衞降りる。忠兵衞、見て愕りして

忠兵　コリヤ李兵衞、大枚二十兩の金の詮議。木造り風情が挨拶するとは、分が違ふわい。

李兵　イヤ、違はんなう。

忠兵　なんで違はん。

李兵　サア、二十兩の金は最前入れたのに失せたとは、コリヤ外から盜人の入らう筈もなし、いとしなげにお八十さんが知りなされた事ぢやない。

忠兵　その知らぬお八十さんの笄が、どうして又金の入つた引出しの内へ。

李兵　足が生えて入りましたか。

忠兵　ヤ。

李兵　サア、こりや芝居で裁き役が云ふせりふぢや。それよりは盜人を捕へて見れば我が子。

忠兵　エヽ。
　ト顔を見る。
李兵　イヤサ、我が子なりけり。ナ申しお家さま、そんなものぢやござりませぬか。
こう　なんぢや、わし獨りはごみに醉ふたやうな、何所からでも金さへ出ればよいぢや。
李兵　イヤ、只今出してお目にかけませう。
　ト松の木にかけてある、梯子を取つて來て、欄間へかけて、登りかける。忠兵衞、悃りして、李兵衞を突き退け。
忠兵　待て〱、李兵衞、わりや鴨居へ梯子をかけて、どうするのぢや。
李兵　どうもしませぬ。金の工面をしますのぢや。
　ト又梯子へ登りかける、忠兵衞、李兵衞を突き退け、梯子を横に倒す。李兵衞、忠兵衞を突き退け、鴨居へ又梯子をかける事二三度あつて、トヾ兩方梯子の先を持つてよろしく留まり
忠兵　わりやマア妙な事をする者ぢや。梯子を鴨居へかけて金の工面が出來る物か。わりや氣が違やせんかよ。
李兵　イヤ、滅多に氣が違やしませぬ。今お前が云ふてぢやのには、木造り風情が金の才覺は出來ぬけれど、知つての通り木の上での商賣、そこで金のなる木を見付けたぢや、それゆゑ二十兩の金を今生らさうと思ふて。
忠兵　待て李兵衞、なんぢや金のなる木。その生る木は何所にある。
李兵　サア、その生る木は內方のこの鴨居。
忠兵　エヽ。
李兵　その金の生る木から二十兩出して見せまする。退かつしやりませ。
　ト梯子を引き取り、忠兵衞支へろ。李兵衞、梯子にてちよつと忠兵衞を當て、手早く鴨居へかけて、金を取つて來て
　なんと金の生る木に花が咲きませうかな。
忠兵　ムウ。
李兵　忠兵衞さん、どんな物ぢや。
　トお八十の前へ金を持ち行く。
八十　母さん、二十兩の金。
　トお幸に渡す。
こう　ほんに二十兩の金。何奴も此奴も、油斷のなる事ではないわい。

長兵　時に藤兵衞さん、最前からのごて〳〵、一體マアわしの方の事はどうたされて下さります。埒が明かにや本家へ行て、金五郎さんを捕らへて小三の在所云はすが近道。ドリヤ行うか。

こう　イヤ、親方どの、待たつしやれ。

長兵　なんぞ用でござりますか。

こう　二十兩の手付、わしが打ちませう。

忠兵　コレ〳〵伯母貴、ソリヤお前何を阿房盡すのぢや。本家の野良息子の阿房遣ひの金を、別家の家から出すと云ふ法があるかい。

こう　何を知つて、默つて居や。金屋の家から別家した金屋の小兵衞。金小の家ぢやなりや皆おも家の物同然。默つて居やう。藤兵衞、アノ人に二十兩の受取書かしや。

藤兵　サア、二十兩の受取書かんせ。

長兵　ハイ〳〵、畏まりました。

ト矢立を出し、半紙に二十兩の受取を書く。此うち、お幸、財布の金と硯箱の水入れと掏替へて居る。長兵衞、請取を書き了ひ。

これで宜しうござりまするか。

ト藤兵衞に渡す。藤兵衞、お幸の側へ持ち行く。お幸、財布出し

こう　ソレ二十兩、受取らんせ。

長兵　ハイ〳〵、有り難うござります。然し小三が在所が知れたれば、後金の儀をお頼み申しまする。

藤兵　ソリヤ承知でごんすわいの。

長兵　左樣ならモウお暇申しまする、おさらばでござりまする。

ト長兵衞、捨せりふにて、橋がゝりへ入る。

こう　コレ藤兵衞、本家の若旦那の阿房遣ひの金をわしが出したと云つては一家へ云ひ譯がない。この證文はこなたが矢ツ張り持つて居て下されい。

藤兵　ハイ〳〵、左樣ならわたしが慥かにお預かり申しまする。

ト唄になり、向うより、お雪、着付け掻へ帶、日傘をさし、後より、下女付き添ひ出て、門口へ來て

ゆき　コレお美代、わしはどうで暇もいらうし、其方は中町の高我へ今の禮を持つて行て、家へ直ぐに歸つてたも、わしの歸りは又爰から送つて貰ひまする。

下女　ハイ〳〵、左樣ならさう致しまする。お家樣お先へ。

ト下女は直ぐに下手へ入る。お雪、内へ入り

ゆき　ハイお免し下さりませう。オヽお幸さん、此間はお目にかゝりませぬ。

半吉　申し、お雪さまのお出でござりまする。

こう　本にようお出でなされました、マア／＼こちらへお上りなされませ。

ゆき　コリヤ誰方も、今日も矢ッ張り暑い事でござりまするなア。

八十　姉様、ようお出でなされましたなア。

藤兵　これはお雪さま、お暑いに御機嫌さんにござりまする……コレお末どん／＼、ソレ、お茶を汲みませや。

すへ　アイ／＼。

トお末、内より茶臺に茶碗のせ出て

お雪さま。ようお越しなされました。お茶一ッお上りなされませ。

ゆき　オヽお末か。構つて下さるなや。

ト茶を取つて

イヤ申しお幸さま、この間は長話しを致しました。それからモウ今日は來うか明日は來うかと、心で思ふばつかりで、今日は又この間のお返事、何かに付けて來たのでござりまする。

こう　それはマア、この暑いのによう來て下さんしたなア、わたしも此中から、お前の返事を待つて居たのでござんす。して、あつちの返事はどうでござんす。定めて得心でござりませうな。早う樣子を聞かして下さりませ。

ゆき　サア、折角の話しゆゑ、あつちへも色々云ふて見たけれど、お八十を嫁に貰ふことは、マア不承知のやうに聞えますわいなア。

こう　そんならあつちは不承知のやうに。ハテナア。

忠兵　ソリヤさうぢや。先は何所かは知らねども、一人娘で居て、他人の辛抱がなんの出來やうぞい。

こう　忠兵衛默りや。可愛い娘を嫁入らす所、窮窟な所へなんのやらう。爰に居てぢやお雪さんを頼んだは、歴とした大家の兩替屋へやるのぢや。娘も嫌ぢやあるまいがの。

八十　イヤ申し母さん、今忠兵衛さんの仰しやる通り、わたしのやうな不束の者が、なんの其やうな大家へ嫁入りが出來ませう、コリヤモウ變替へなされて下さりませ、お雪さん、あつちは嫌がつてぢやあらうなア。

ゆき　ソレ／＼、本人のも氣乘りせぬ嫁入り。お幸さま、

ぢやに依つて變改に參りましたのでござんす。
忠兵　コリヤ、尤もらしい事でござりまするわい。
こう　又しても差出るか。お八十、斯うなつたら有りやうに云はう。わが身を嫁らさうと云ふは、本家の若旦那金五郎さん。
八十　エヽ。
　ト愕りする。
こう　わが身それでも嫌か。但し變改せうか……ほんに親の心子知らずとは、よう云ふた譬へぢやわいなア。ホヽホヽヽ。
　トこれにて、お八十、嬉しきこなしあつて
八十　そんならアノ金五郎さんの嫁に……ハイ／＼、嫁入り致しませう／＼、今でも參じます。お雪さん、どうぞ其所へよろしう仰しやつて、さうして嫁入りと云ふ物は一日でも早いが宜しいようにござります。申し／＼お雪さん。なうお末、さうぢやげななう。
すへ　左樣でござります。嫁入りの先きも多いに本家の金五郎さんの嫁御とは、粹なお家樣の裁き。申し、お禮を仰しやれ／＼。
八十　母さんお嬉しうござりまする。お雪さんに宜しうお頼みなされて下さりませ。
　ト悦ぶ。お雪、お八十の顏を見て
ゆき　ほんに今の今迄、嫁入りは嫌ぢやと云ふて置いて、餘りの事で可笑しいわいなう。ホヽヽヽ。
藤兵　イヤ／＼申し、コリヤ斯うでござりまする。外の大家では氣兼も多し、それで變改なされたなれど、御本家とあれば内に居るも同然、このやうな目出度い事はござりませぬ。なう杢兵衞どの。
杢兵　左樣ぢや、別家内から本家へ嫁入りとは重緣と云ひ世間體も可し、こいつは豪い。忠兵衞さん、これはよい相談ぢやなう。
忠兵　イヤ、惡いわい。
　ト前へ出て、膝まづき
お雪さんは死んだ旦那のお娘御なれども、幼少から他家へ養子にござつて家の委しい譯は御存知あるまいが、表向きは手代分なれど、母方に付いた甥のこの忠兵衞。しかもお八十の爲には、てんど晴れての夫は俺れぢや。その俺れを差措いて、本家ぢやあらうがチョンぢやあらうが、嫁入りさす事はなりませぬぞ。

ゆき　忠兵衞さん、お八十をお前の女房ぢやと云ふ事は今が聞き初め。それにはなんぞ〻

忠兵　へ、、、、、そんな事が出やうかと、こつちに拔りはござりませぬ。

ト懐より、遺言狀を出し、前へ置いて

これぢや。死なれた旦那がこの忠兵衞を慥かに思はつしやつたゆゑ殘して置れた遺言狀ぢや。何奴も此奴も、耳の穴浚へて聞かつしやれや……一ッ遺言狀の事、所持の家屋敷は申すに及ばず金銀諸道具に至る迄譲り申し候所實正なり、然れば娘八十其方女房にして家相續心任せに致すべく候依て遺言狀如件。藤兵衞や本兵衞伯母貴〻聞かれたか。斯う云ふ事を差し措いて外へ嫁入りしたら先きの男は間男ぢや。本家の息子であらうが誰であらうがさんぴん横ぢや。オヽ、間男ぢやわいの。お雪さん但し本家の聟を間男にして一家の娘に疵を付けるのか。返答はどゝどうでござりまする。

ト遺言狀を皆々へ見せ、お雪の前へどつかりへたる。

ゆき　成る程、コリヤ仰々しい物を持つて居やしやんす。然し、この譲り狀がなんぞになるかえ。

忠兵　なんぞになるかとはお前、聾か無筆か。然し、聾無筆でも、この判は目にかゝらう。コレ、下の字が金屋小兵衞上が甥の忠兵衞どのへ。よいか。この丸いのが判ぢやわいなう。

ト高聲で云ふ。

ゆき　ほんにマア大きな聲をして暑いのに、いら〱すると眩暈がするぞえ。ホヽ、、、、。

ト扇にて、忠兵衞を煽いで

わたしが今見せる物がある。よう聞かしやんせえ。申し藤兵衞どの。御苦勞ながらコレ讀んで下さんせ。

ト懐より遺言狀を出し、藤兵衞に渡す。

藤兵　ハイ〱畏まりました。

ト遺言狀を開いて

遺言狀の事、一ッ我れら所持の家屋敷は申すに及ばず金銀諸道具に至る迄、其方心任せに致すべく候、且つ又家名相續の事も娘八十儀も其方かんぼう致し宜しく取計らひなさるべく候、分て申し殘し候は甥の忠兵衞日頃我れら心底に叶はずこれ迄養育いたし候へ共心得難く候、その上我れら病中の枕頭へ參り遺言狀認めくれ候やういろ〱と無體を申し責め候ゆゑ是非なく認め遣はし候へ共後日の事を存じ印形を逆様に押し遣はし候間

後日にはこれを證據に申し開き致すべく候。依つて如件。娘お雪どの御町内御年寄樣、金屋小兵衞判。

忠兵　ドレ。

ト我が遺言狀と比べ見て惘りして

ヤア／＼、コリヤ印形が皆な逆樣ぢや。死んだ親仁が俺れを一杯やりさらしたな。エヽ、忌々しい。

ト遺言狀を破らうとする。藤兵衞、ツカ／＼と行て遺言狀を引き取り、忠兵衞の方の遺言狀を突き付け

藤兵　オットその手もあるやつ。破つてよくばこちら／＼。

ト忠兵衞の遺言狀を抛つてやる。忠兵衞、腹を立て右の遺言狀を引裂き鼻をかみ打ち付け踏み躙る。

こう　ほんにマア、大病の旦那樣をいぢつて書かしたとは憎い奴、お雪さん、この事はこの座切りにして下さりませ。

ゆき　なんのお前さん。畢竟が一家なればこそ、今のやうに申しまするも父さんの位牌所が大切さに。

こう　御親切忝なふござんす、又お前には外にお話しもござんすし、ちよつとの間奥の間で。

ゆき　成る程わたしも今のやうに、忠兵衞さんに云ふて去ぬるもあぢいな物。暫く奥でお前の御用の濟む迄待ちませうわいなア。

藤兵　イヤ、申しお雪さま、お家樣のお話しはどう云ふ事かは存じませぬが、差し出がましい事ながら、御緣談の儀ならば、モウ一應お話しなされて下さりませ。

こう　アノ藤兵衞の云やる事はいなう。この緣談の事はお雪さんで行にや、このお幸が直き／＼に本家へ渡つても娘、わが身を貰ふて貰ふ。コレ／＼、どうなるやら知れぬ程に奥へ行て髮も撫付けて置きや。お末、氣の付かぬ、連れて行きやいなう。

すへ　ソレ、お家さんのお許しが出た。お八十さま奥へ行て湯も遣ふて、髮もさつぱり撫付け遊ばせ。どうやらわたし迄氣がしやき／＼となつて來た。御寮人樣さ、ぞお嬉しからうなア。

トお八十、顏を赧す。

藤兵　私しはこの間に、昨日の爲替のせいらくに行て參りませう。

こう　そんなら行て來てたもるか。

藤兵　ツイちよこ／＼と、行て參りませう。

トこれにて、門口に出る。

こう　お雪さん、奥へ行てお休みなされませ。

ゆき　ほんに、めん〳〵ばつかりの婚禮沙汰、杢兵衞どの、こなたも奥へ。お幸さん、お先きへ參りまする。

ト唄になり、お雪、先きにお八十、お末、杢兵衞、こなしあつて入る。後にお幸、忠兵衞殘り、忠兵衞、お幸へ詰かけて

忠兵　コレ伯母貴、こなたぼれたな。おりやこなさんの爲にやなんぢや、現在の甥ぢやぞや。それに最前から聞いて居れば、俺れに隱してお八十を本家の嫁にやろうとは、どう云ふ氣で約束したのぢや。その上死んだ親仁に無理無體に遺言狀書かしたも、こなさんとの云ひ合せ。その遺言狀は最前の通り、お雪にだい上げられてこつちは手も足もごんせぬぞや。それに俺れが肩を持うとはせず、嫁入り變改に來たお雪にこじ付けてお八十をやらうとはなんの事ぢやい。モウこなさんを當てにはせぬ。今夜中にお八十を引つかたげて退く工面。せめて伯母甥の好誼、路銀なと貸して下んせ。よもや否とは云へまいがの。

こう　ほんに惡いやうでも忠兵衞、若い〳〵。コリヤよう聞け。今われがどのやうに思ふても、金五郎のある間はお八十はわが心には從がはぬぞよ。アノお雪を賴んで本家の緣組は、義理のあるお八十を可愛がると、一家の奴らに思はせ、よし本家へ行た所が、小三と云ふ賣女に喰付いた金五郎、所詮長うはぢんぢくせぬ。又ぢんぢくした所が尊像の日切りは今日明日、阿波の國へ引渡され、刀の錆になる金五郎、さうなればお八十は若後家、今あれに恩をかけて置けば、さうなつた時退つ引きさせず、お八十はわれが女房、殊に寄つたら本家の家もずる〳〵べつたり。なんと合點が行たか忠兵衞。

忠兵　さう云はんすりや、ちつとは落ち付いた。然しアノ藤兵衞めが居つては何かの邪魔。

こう　彼奴を拋り出す仕樣はこれぢや。

ト最前の金を懷から出して見せる。

忠兵　コリヤ、二十兩の金。

こう　情らしう貸して見せたは、お八十や藤兵衞に肌身をゆるさせうばつかり。この金と水入れと摺替へたれば、追つ付けこのもくわれで、藤兵衞がぎつちかわ。それをたかに拋り出す思案ぢや。又喰違ふたらば毒喰はゞ皿まで。何んとこの思案はどうぢや。

忠兵　ほんに伯母貴は伯母貴だけぢや。

トこれにて、ジヤン〳〵暮六ツの鐘鳴る。内より

ゆき　お幸さま、何所にお出でなされまする。モウ私しは

歸りますぞえ。

ト納戸よりお雪出る。半吉も付き出て

半吉　申しお家樣、お雪さまはモウ、お歸りでござります
る。

こう　ほんにわたしとした事が、お前さんを待たして置いて勝手ばつかり、お許しなされませ。

ゆき　イヤモウ、差して用はなけれども、日は暮ますし、お忙しけりや、明日でも出まして參じまする。

忠兵　イヤ、お雪さん、伯母貴がお前にお話しもありや、マア御悠るりとなされませ。

こう　コリヤ半吉、日が暮れた。表も締めて忠兵衛と一緒に奧へ行け。

半吉　ハイ〳〵畏まりました。

ト暖簾外し、店へ戸を締める。

忠兵　お雪さん、御悠りと。半吉來い。

ト半吉を連れ奧へ入る。お幸、お雪の側へ寄つて

こう　お雪さん、この間も呉々頼んだお八十が縁組、本家へ嫁入りすればアノ子の仕合せ、家も大慶、お前の爲にも親元のこの家、悦んで勸めてゞあらうに、コリヤお前が計らひで變改をさしやんすのであろうがな……コレ、お八十と金五郎さんは、疾から縁を組んで居るが、お前は知らずか。

ゆき　サア、それおやに依つてこの縁組は、どうあつても切らにやなりませぬ。

こう　ソリヤ又何故にえ。

ゆき　サア、その譯を云ふはお幸さん、ちよつとあれへ。

トこれにて、合ひ方きつぱり、兩人、下舞臺へ降りて

お幸さん、お前は後妻の事ゆゑに、お八十の身の上、よも知つてゞはあるまいなア。

こう　あの娘の身の上、知つて居るかとわえ。

ゆき　アリヤ、本家の金屋利右衛門さまの落し胤。

こう　エヽ。

ゆき　サア、この事は云ふまいと思ふたれど、義理ある娘のアノお八十を、大切に思はしやんすお前の心根思ひやり、有りやうに申しませう。

こう　シテ又その樣子は。

ゆき　サヽ、今迄語らねば、御存知ないは御尤も。

ト此とき、納戸より、藤兵衛、出かけ居て、聞いて居る。

本家の旦那利右衛門さま、上の女中に手をかけられ、お

家の手前一家を憚つて、里で産ましたアノお八十、その後旦那が竊かに父さんにお逢ひなされて、思ひ廻せば不愍な娘、其方が貰ひ取つて育てゝたもと手を合はしてのお頼み。お氣遣ひなされますなと、六日だれも濟まぬ先から こちの内へ引き取つて育てたるアノお八十、その時分は私しもなんの差別もなく暮すうちにも父さんの云はしやんすには、コリヤお雪、アノお八十はお主の胤なれば、必ず必ず粗略にすなとの云ひ付け、それより月日も經つうちに、金五郎さんとの忍び合ひと、聞い時のわたしが徇り。どうせうか斯うせうかと思ふうち、お前の話し嫁入りの相談、目出度くなれば畜生道、好き合ふた二人が仲。すげなう云ふたのは、この入譯でござんすわいなア。

こう　そんなら若旦那とアノお八十は、

ゆき　腹は替はれど眞實の御兄弟、

　ト藤兵衞は入ろ、

こう　そんなら二人は犬に劣つた畜生道、

　トお幸、大きな聲にて云ふ。

ゆき　アヽコレ、何事も隱すが秘密。

こう　成る程さうぢやなア。お雪さん、何はなくとも奥へ行て御酒なりとも、

ゆき　そんなら御馳走になりませうか。

　ト立上がる。

　世の習ひとは云ひながら。

こう　あるが中にも結んだ惡緣。

ゆき　儘ならぬ。

兩人　浮世ぢやなア。

　ト唄になり、兩人、奥へ入ろ、ト藤兵衞ずつと内へ入り思ひ入れあつて

藤兵　始めて聞いたお二人のお身の上。さうとは知らず今の今迄。

　トあたりへこなしあつて、緣側へ腰かける。チョント木の頭。

ムウ。

　ト思案のこなしにて返し。

　造り物、三間の二重、見付け綺麗なる貼交襖、東西落間、高塀植込み、柴垣、好き所に手水鉢、所々夏菊の盛りの畦、例もの所に枝折門、總て奥座敷の體、道具納る。

ト右二重の眞中にお八十、綺麗なる鏡臺に向ひ髮を撫

付け居る。お末、手傳ふて居る模樣。但し鏡臺の前に小燭臺、火を灯しあり、後ろには遠州行燈、これにも火を灯しある。

獨吟〽黑髮の結ぼれたる思ひをば解けて寐た夜の枕とて

すへ　イヤ申し御寮人樣、日頃の願ひが叶ふて、思ひがけないお雪さまのお話しで、金五郎さんとの緣組、お嬉しうござりませう。

八十　アノお末の云やる事わいなう。最前嫁入りと聞いた時は、どうならうと案じて居たが金五郎さまぢやと聞いた時は、わしや夢見たやうにあつたなう。

すへ　本にそのやうに思し召すはお道理、お前樣の願ひが叶ふても、とつと叶はぬはわたしが戀路、アノ藤兵衞さんは、一體どのやうに思ふての事ぢややら。

トこの前より藤兵衞、思案しながらそろ〳〵後ろへ出て居る。

八十　コレお末や、わしや彌々本家へ行たら、皆がひどうおだてるであらうなう。

すへ　なんのお前さま。

八十　本に嬉しいやうな、恥かしい物ぢやわいなア。

すへ　サア、嬉しい物の橋渡しは藤兵衞さん、きつとお禮を仰しやらにや成りませぬぞえ。その次手にわたしが事も仰しやつて下さりませ。

八十　サア〳〵それも合點して居るわいの。それはさうと今夜お雪さんと一緒に行くのなら、今の間に藤兵衞に禮が云ひたい。一寸呼んでたもいなう。

すへ　本に最前から藤兵衞さんの聲がせぬが、私しが呼んで參じませう。

ト奧へ行うとして、フト藤兵衞と顏見合せて、悄りして。

オヽ、誰さんぢやと思うたら藤兵衞さん、お前も最前から爰に居てなら、物を云はしやんしたがようござんす。コレ申し、御寮人樣がお前に、ひどう禮を云はねばならぬと仰しやつてぢやわいなア。

トこちらへ來て、向うに藤兵衞さんが居てぢやと教へる。

これはしたり御寮人樣、ちやつとお禮を仰しやりませいなア。

トお八十を藤兵衞の方へ無理に突きやる。お八十、側へ行て恥かしきこなし

八十　コレ藤兵衞、これ迄は段々と金五郎さんの事、たんと

世話になつた効あつて、今日思ひがけなう、こちや本家へ嫁入りするのぢやげな。これと云ふもモウ〳〵深いお前のお世話。こちや死んでも忘れはせぬ。拜んで居るぞえ。

藤兵　お八十さま、金五郎さまの事お世話申しましたが、それ程迄にお嬉しうござりまするか。

　トぢつとお八十の顔見詰めて居る。

八十　これが嬉しうなうて、なんとせうぞいなう。

藤兵　申し、左樣にお嬉しう思ふてござるなら、この藤兵衛がお前樣へ御無心がござります。聞いて下さりますか。

すへ　アノ藤兵衛さんとした事が、結ぶの神のお前ぢやもの、どんな事でも御寮人樣が、お聞きなされいでならうかいなア。申し御寮人樣、

八十　成る程、其方の云やる通り、何なりと遠慮なしに云ふて下さんせや

　ト藤兵衛、云ひ惡くさうにして居る。

藤兵　外の事でもござりませぬ。叶へて下さりませ。

八十　叶へてくれいとは何をえ、

藤兵　ハテ知れた事、私しが戀を。

八十　ソリヤ誰さんぢやえ。

すへ　わたしかえ。

藤兵　なにを。

　トきつと睨め付ける。お末、心意氣。

申し、私しが戀は、金屋の娘御お八十さま、お前さんの事でござりまする。

八十　エヽ。

　ト悔りこなし、

〽ひとりぬる夜の仇枕、藤兵衛其方はと下舞臺へ降りる。

藤兵衛とした事が、わしを悔りさゝうと思ふて、じやらじやらと。

藤兵　イエ〳〵、じやら〳〵ぢやござりませぬ。大眞實でござりまする。

八十　エヽ。

〽袖はかたしくつまぢやと云ふて、

藤兵　内方へ奉公に參つた始めから、美しい娘御ぢやと、心で思へど雉子と鷹、思切つても切られぬ煩惱、今日は云はうか明日は云はうと、口迄は出たれども、生中云出してもこの身は儚ない奉公人、今にでも家を抛り出されなば、ソレ〳〵その美しい顔見る事もなるまいと、辛抱するうち金五郎さんと忍ぶ戀、仲立したがこの身の因果、猶思切られませぬ。お前に義理をかけたのも、せめて一

夜さ半夜さなりと、抱て寝やうと思ひに迷ふ今日の切端、本家へござればゞ今迄のやうに心安う物も云はれぬこの藤兵衛。申しどうぞ、得心して下さりませいなア。

八十　そんならお前は、眞實に云はしやんすか。

藤兵　噓に斯んな恥かしい事が云はれませうか。

トお八十、逃げうとする、引き廻す。お末、寄るを手にてくらはす。ハア、と云ふてくろ〳〵舞ふてへたる。

〽愚痴な女子の心と知らで、しんと更けたる鐘の音。

ト此うちお八十逃げうとするを引戻し、兩手を持つてこなし、始終合ひ方、トゞお八十の帶を解いて引つ張る。此の間付け廻しになる、お末、藤兵衛の後より付廻る。藤兵衛、お八十の顔をきつと見て

金五郎さまと云ふ、主の極つたお前様に云出すからは百年目、御得心なけりやお前を殺してわたしも死ぬる。さうなる時には腹なお子は闇から闇、この世の明りを見せぬが可愛いと思はつしやるなら、フムと仰しやれ。サア否か應か一口商ひ。得心して下さりますか。

八十　サア、それは。

藤兵　但しは否か、

八十　サア。

藤兵　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

藤兵　お八十さま、人間僅か五十年、雪まで保つ花はござりませぬぞえ。

〽昨夜の夢の今朝覺めて床し懐かしやる瀬なや積ると知らで積るしら雪。

ト藤兵衛、お八十を引寄せ、ヂツと抱き締める。お末こなし、藤兵衛にたゝみかけて

すへ　コレ藤兵衛さん、お前は胴慾と云はうか惨いと云はうか、これ迄目顔で口說いたわたしは見向きもせず、コレ、今迄の御寮人とは違ふぞや、今日からは金五郎さまと云ふ男のあるお八十さまに無理口說き、無茶と云はうか自暴と云はうか。エヽ、お前はなア。

藤兵　喧ましいわえ。

トきつと云ふて

このやうに云ふても得心なけりや、ござりませ。

トお八十の手を取り立上がる。お末、立ち塞つて

ヤヘ　コリヤ御寮人さんを、何所へ連れて行くのぢや、

藤兵　ハテ知れた事、この坂の下にばかり日は照らぬ。江

戸長崎へでも行て女夫になるわい。

すへ　さうはわたしがさゝぬ。

藤兵　エヽ邪魔な。

トお末を退けて行きかゝるを又留めて

すへ　コレ申し、藤兵衞どのが御浪人さんを連れて行くわいなア。來て下さんせいなア〳〵。

ト此とき、奥より、お雪、杢兵衞、ツカ〳〵と出ておゆき、お八十を圍ふ。杢兵衞、忠兵衞の胸倉を取て下に据ゑ、お幸、忠兵衞、半吉皆々出る。これにて藤兵衞は面目なきこなしにてぢつと俯向き居る。お雪、杢兵衞、詰めかけて

ゆき　藤兵衞どの、コリヤなんの事ぢやえ。日頃の實體よもや誠ではあるまい。定めてさゝ機嫌でござんせう。コリヤマア、どうとも斯うとも云ひやうのないお方ぢやなア。

杢兵　コレ藤兵衞さん、コリヤお前なんぞの罰が當つたのぢやな。申し、斯んな事云ふではなけれども、お前は東在のお代官のお別れ、この杢兵衞も同じ在所の生れ、この大阪へ來てから、風はあふたお前の身の上、今では爰の手代とやら。それからお前さんも心安うして下さつて、寺町弓手馬手の得意は、皆お前さんの引合せゆゑ、本に親切な忝いとお前の恩を忘れた日はござりませぬ。外町から内外の衆が藤兵衞と云ふ男は、お主大事にする發明な者ぢやと褒められさつしやる時には、本に役に立たぬ事ぢやが身内のやうに思ふて居りますわいなう。それには引替へ最前からの仕儀、ツイした事ぢやござりませぬぞえ。コリヤなんぞの魔がさいたのぢや。サア〳〵、心をきつぱりと入れ替へて、お雪さまに詫言なされ。

ゆき　コレ藤兵衞、今杢兵衞どのが云はしやんす通り、今夜のしだら、わしやどう思ふても合點が行かぬわいなう。何故と云ふて見やしやんせ、日頃の親切實氣があればこそ、大體家内はこなたの心任せ、知らぬお人はアリヤ菓子屋の聟どのになるのぢやと云はれる程になつてあるぞえ。その上金五郎さんの身にかゝつたお屋敷の寶とやらも、共どもに力になる程に、お主を大事にするこなたの親切、それも何も角も打忘れ、お八十へ無體のあり條。但しこなたの親切が行届かぬゆゑ腹立からの事か。それならそれでどうとも話しが出來る程に、氣の濟ぬ事あらば、男らしう云ふたがよいわいなう。

トこれにて、藤兵衞、ヂツと顔を上げ

藤兵　お雪さま、杢兵衞どの、段々の御意見忝うござりま

す。又在所から出て來まして、四五年この方のお家の御厄介、本家のお引立、何もこの身に不足はござりませぬ。又お家を大切に致します事は、今仰しやつた世間話しで申しまする通り。末々では爰の家の聟にならうと思ふてでござりまする。

ゆき　なんと云はしやる。

藤兵　それに引替へて、金五郎さんと云ふ聟が極りましたら、これ迄いたしました事は皆水の泡でござります。畢竟は私しが心の間違でござります。私しも又お八十さまが片付きなされましたら、外町で云はれた手前、阿房らしうて爰の内にも居られませぬでござりまする。

ト　お雪、杢兵衞、顔見合しこなしある。

こう　申しお雪さん、女の主と云ふ物は口惜しい物ぢや。實體に見せかけても根が在所者、愛想もこそも盡き果てた。今日向暇をやつた。さう思や。

忠兵　伯母貴見やんせ、地金の夢が漸々覺めた。暇が出たら出てうせい。

ト　立ちながら足にて藤兵衞を蹴る。

半吉　本に今迄は、おいらに澁い顔したが、暇が出たらむごい物ぢやなア。

杢兵　コレマア、心がらとは云ひながら、せんまめ迄にアノやうに云はれ、情ない。この杢兵衞も懇は、これ切りでござりますぞえ。

ゆき　本に由ない事で夜を更かしました。お八十や、其方も今のもや／＼で、顔の色も惡し、今夜は早う寐や。コレお末、其方もちやつと奥へ連れて行きやらぬかいなう。

すへ　ハイ、畏まりました。サアお八十さま、奥へお出なされませ。

ゆき　時にわたしはモウ歸りませう。

杢兵　お歸りならば、道まで私しが送りませう。

ゆき　それは御苦勞でござりまする。

ト　お雪、杢兵衞、花道へ行きかけて、お幸、こなし

こう　本に折角お出なされても、よい事は聞さず、お氣の毒に存じまする。

ト　お雪、杢兵衞、藤兵衞が俯向き居るを見て

杢兵　人の心と川の瀬とはよう云ふた事でござりまする。

ゆき　昨日の淵は今日の瀨と、浮む世もない藤兵衞どの。

八十　姉様、ようお出なされました。

ゆき　早う寐ねしや。

ト　唄になり、お雪、杢兵衞、向うへ入る。お八十、お

末、兩人は奥へ入る。後にお幸、忠兵衞、こなしあつて

忠兵　コリヤ藤兵衞、又しても理屈くさうやりかけたが、おのれマア俺れが、お八十の事と云や、なんぢやゑら／＼吐かしたが、おのれがこの顏で惚れたも氣が強いわい。コレ皆見やんせ。しつかい獄門顏ぢや。

ト藤兵衞を蹴飛す。ト橋がゝりよりバタ／＼にて、親方長兵衞、走り出て、藤兵衞を見て

長兵　コレ、貴樣は太い人ぢやなう。人の大切の奉公人を水入で自由にせうとは、さうはさゝぬワ。最前の受取戻せ。大方懷中へ入れてあるであらう、サアおこしくされ

ト財布に入れた水入れを打付け、藤兵衞の懷ろへ手を入れて一札を取出す。藤兵衞、それを取る。

藤兵　何を云ふのぢや、この金はこなさんが知つて居る通り、お家さんから出た儘の金。どうして水入れと。

トお幸に云ふを打消して

こう　なんの俺れが知らうぞ。吟味してよけりや、そちらで吟味せいせい。

長兵　サア、この上は爰の內もかゝり合ひぢや。なんでもこれから金五郎を尋出し、めつきしやつきするのぢや、待つてけつかれ。

ト行うとするを藤兵衞、留める。振放し走り入る。お幸直ぐに藤兵衞の襟髮を取つて

こう　ヤイ動きやアがるな。おのれマア是迄主の飯を喰ひながら、俺れが甥の忠兵衞を明盲同前にあしらひさらしたなア。まだその上に俺れをたらして、忠兵衞が尊像を持つて居れば、あれを盜賊にして、おのれ獨りが好い事をせうでな。その上お八十に惚れたも押が太い。自體、アノお八十は忠兵衞と女夫にして本家の家も自由にせうと思ふものをば、おのれがじやむじやにさらしたぞよ。それがよいか、これがよいか。

ト散々にくらはして。

ア、辛度、忠兵衞、ちつと代つてくれい

忠兵　合點ぢや。

ト胸倉を締上げて

コリヤ、おのれは俺れを一體なんぢやと思ふてけつかる。家の甥ならお主も同前ぢやぞよ。この間餅卯でも俺れをきう／＼云はしさらしたぞよ。この頬桁でか／＼。どうならずめ。

ト蹴飛す。この時、お末、奥より最前の藤兵衞の脇差

を持出し、藤兵衞の側へ行つて、
すへ　本に可愛さ餘つて憎さが百倍とはお前の事ぢや。ようも〳〵今迄わしをつん〳〵さんしたなア。その筈ぢや御寮人さんに惚れるも氣が強い。わしぢやとて御寮人さんぢやとて、今の所に替つた事はないわいなア。その上三度の菜廻り、板子當りに氣を付けたが今で思へばわしや腹が立つ。コレ、この脇差は最前預つたのぢや。早う持つて行きなされいなア
ト古着一枚と脇差を渡し、いろ〳〵あつて突飛す。半吉、薪雜把を持出て
半吉　俺れも相伴せうわい。
こう　お八十に手出しをしたら間男同前。
忠兵　間男の成敗せうわい。
ト皆々寄つて散々に呵責み
サア、出て行け〳〵
ト門口へ抛り出す。ばた〳〵にて、向うより小三、走り出て
小三　ヤア〳〵藤兵衞さん、爰にかいなア、どうせうぞいなア。
ト藤兵衞の手を取つて、うろ〳〵する。
藤兵　小三さん、どうせうとは、どうなされました。
小三　さいなア、お前が打たしやんした手付が似せ金ぢやと云ふて、わたしを親方が外へ身請さすと云ふて居るわいなア。
藤兵　スリヤ、外へ身請を。
小三　その上金五郎さんを、阿波のお屋敷から引立に來たわいなア。
藤兵　スリヤ、金五郎さまをお屋敷から引立に。ヤア〳〵コレ、一ツならず二ツ三ツ。
小三　どうぞ仕樣はないかいなア。
ト藤兵衞を捉へていろ〳〵こなし。藤兵衞、思案極て
藤兵　小三さん。ござりませ。
ト小三の手を取り、向うへ一散に走り入る。
半吉　お家さま、忠兵衞さん、今藤兵衞さんが云はんしたのお聞かんしたか。怪體な事を云ふたぢやないか。一ツならず二ツ三ツ、七ツ道具を脊に負ひ、五條の橋へ急がるゝ。はりやドツコイしよ。
忠兵　何吐かすぞい。時に伯母貴、藤兵衞めはまんまと抛り出した。これからがお八十の一件、こなさんはどうせうと思ふて居やんすぞ。

こう　コリヤモウ手延びにはならぬワ。斯うせい。今夜の明け方から、お八十を連れて暫らく影を隠せ。

忠兵　それでは明日お雪が迎ひに來た時には、

こう　サア、そこぢやわいの。金五郎お八十は兄弟と口走つたアノお雪、それをお八十が聞いて面目ないと死に出た、後からわが身が追ひかけたと世間一杯になりや、金五郎も畜生に落る、そこで金五郎めが小三を連れて死に出る。本家の後取りはないワ。日が經つてわが身がお八十を連れて戻るワ。尊像を阿波の屋敷へ上るワ。それが功になつて本家の後はお屋敷から、私が身へずる／＼べつたり。この思案はどんな物ぢや。

すへ　成る程、コリヤいつち好い御思案、然し忠兵衛さんを嫌ふてござる御寮人、所詮一緒には連立ちはなされませぬ。金五郎さんに逢はすと嘘八百で、内を釣出すはこのお末。

半吉　コレ／＼忠兵衛さん、大分味ようなつて來たが、俺れを手代にする事を忘れまいぞや、

忠兵　ソリヤ、呑込んで居るわい。

こう　コレ忠兵衛、藤兵衛は出て了ふ。モウ外に遠慮のないこちの家。押へてなと出來るならして了へ。

ト忠兵衛、合點の行かぬこなし。

忠兵　して了へとはソリヤ何を。

こう　鈍な奴ぢや。してしまへと云ふたは、お八十の寢所へ行つてなア。ソレ／＼。

トお末、半吉、居るゆゑ恥かしさうに忠兵衛の袖を引いて

俺れがせいと云ふは。

トこなし。皆々顔見合し

イヤ話しを。

トこれにて皆々吹出し笑ひを留める。

南無阿彌陀佛／＼。

トこなしよろしく、チヨシ／＼にて、返し。

造り物、元の菓子屋へ戻る。

ト囃子りんの音になる。橋がゝりより、駕籠一挺出て向うへ入る、次に夜番、太鼓を打出る、後より酒の醉ひぞめき、唄をうたひながら皆々入る。ト本釣鐘、合ひ方きつぱりとなる。ト向うより、藤兵衛、白手拭にて頰冠りして手を組み、そろ／＼出て、花道好き所に立ちどまり、本釣ゴンと打つ。

藤兵　アリヤ寺町の八ツの鐘、金五郎さまの御難儀を取留めるも、尊像が手に入らねば、明日は叶はぬ面目の辱。お八十さまに仲立したは行合兄弟、心に思はぬ無體の戀慕は、畜生の名を取らすまいばつかり。本家を大切忠兵衞どのの身も大切と、お幸さまに賴んだ事は皆裏腹。却つてこの身に憎しみ受け、忠兵衞どのゝうち打擲、それを無念とは思はねども、見す〳〵知れし尊像が、手に入らねば本家は元より、別家も沒落。かてゝ加へて小三どのゝ、身請の事も白化な、お幸さまの最前の仕方。お八十さまの腹には因果な子胤、金五郎さまのお身の上、小三どのは金事。こちらは子。あちらは金、金子の家の絶體絶命。コリヤ、無分別をせにやならぬわい。

トこれにてそろ〳〵門口へ來て戸を開うとする。締てあるゆゑ、窺ふて居るうち、納戸より、忠兵衞、尊像を首にかけ、腹這ひにて、あたりを見廻す。

忠兵　なんぼう伯母貴がせい〳〵と云ふたとて、そないに理不盡な事が出來る物ぢやない。それはさうとこの尊像を、俺れが持て居てはどうやら心惡るい。何喰はぬ顏で何所ぞへ預けて來るが捷徑。さうぢや。

ト門口を開け出ようとする。此うちに藤兵衞内へ入り兩人顏見合して

ヤア、藤兵衞か。

ト云ふを藤兵衞、直ぐに肩先を切る。その儘向うへ逃げて入る。それより藤兵衞、そろ〳〵二重へ上り、行燈の火をかき立てる。此とき、奧より、お末、出て來て藤兵衞に行當り、悶り。藤兵衞、直ぐに肩先切付ける。蘇袍になる。二重へ逃げ行燈に行當りながら苦しむ。藤兵衞、トゞ切倒し、此とき行燈をこかす。暗がりゆゑ、そろ〳〵上手へ來て。

藤兵　モシ、お家さま〳〵、火が消えました。火を一ツお貸し下さりませ。

こう　オイ〳〵、火が消えたら用心が惡るい。待ちや〳〵。

ト云ひ〳〵手燭を灯し寢卷の形りにて、上手より出る所を手燭を持つたる腕を切落す。お幸、ハツト云ふ所直ぐに腹へ刀を突込む。苦しむ事あつて下へ落る。好き所に下より腕出る。これより上手障子引拔く。内に蚊張吊つてある側に行燈を置きある。藤兵衞、釣手を切り落す。内にお八十目を覺せし體にて。

八十　オ、氣味の惡るい。誰ぢやいなア。

ト蚊張あげてお八十出る。藤兵衞、肩先へ切付ける。

心のうちにて念佛を唱へ拜み打ちに切倒し扶ぐる。ト納戸より半吉出て

半吉　今のは誰ぢや。なんぢや喚くが、夢でも見て居るのか。誰ぢや〳〵。

ト云ひ〳〵お八十の死骸を見て愕り。この時、藤兵衛を見る。藤兵衛、刀振上る。これにて半吉門口へ逃うとして何遍もこけ〳〵して門口を開ける、ト藤兵衛、半吉を上手へ投付けて門口ぴつしやり締めて刀を口に啣へキツと見得、これより付廻しになつて半吉を見事に切倒し二重へ腰かける。お末、よろめきながら藤兵衛の首筋を持ち引付る。半吉寄るを刀振り上げキツと見得にて、チヨン〳〵、返し。

造り物、正面、大骨に土藏の書割、續き軒並びよろしく、眞中に二ツ井戸の井戸側あり、これに忠兵衛凭れ、蘇枋だらけになり居る。始終時の太鼓にて、道具納る。

忠兵　豪い所へ藤兵衛のうせおつて、あつたら肝を飛して退けた。然しあいつめが門口迄うせおつたのは合點が行かぬ。何んぞ内に騷動がなけにやよいが、

ト斯んな事云ひ〳〵我が疵口を見て愕りして

なんぢや冷や〳〵心の惡るい。どうやらピリ〳〵とするやうな。

ト腹當にて糊を拭き

コリヤ糊ぢや。然かも俺れが血ぢや。アイタ、、、コリヤ最前藤兵衛が切りおつたのぢや。痛いわい〳〵。

ト喧ましう云ふ。町人大勢、弓張、棒を持ちばた〳〵にて出て

町一　人殺しは何所に居る〳〵。

町二　こいつぢや〳〵。

町三　提灯見せい〳〵。

ト提灯の火にて忠兵衛を見て

町一　コリヤ、東の菓子屋の番頭ぢや。

町二　斬つた奴はどいつぢや。

忠兵　こちの手代ぢや。今内へ入りおつた〳〵。

町一　ソリヤ内へ行け〳〵。

ト皆々入る。忠兵衛、腹當を捨置き、紙屑拾ひ、籠をかたげ出て來て、右の腹當を引つかけ籠へ入れやうとする。忠兵衛、見付け俺れがのぢやと引合ふ可笑し味あつて、忠兵衛を突飛し入る。トばた〳〵にて、杢兵

李兵 衛走り出て、忠兵衛に行當り見て
忠兵衛か。尊像はおのれが持つてけつかるな。こつちへおこしあがれ。

忠兵 イヤ、ならぬわい。

李兵 何をさらすぞい。

トこれより兩人尊像をもみ合ふ。李兵衛、尊像を取つて忠兵衛を引立て入る。チョン／＼にて、返し。

造り物、淺黄幕。

トどん／＼にて下手より町人の棒突き大勢出て

町一 なんと皆の衆、豪い大變な事ぢやないかいの。

町二 サイなら。俺れは又非戸おろしぢや／＼、切つた切つた誰ぞ來てくれやいと聞いたに依て、コリヤ暑さがひどいゆゑ、西瓜の流行ぢやと思ふたて。

町三 何を阿房らしい。ソリヤ祭りの俄ぢやわいの。

皆々 ハヽヽヽヽ。

町三 時に金子屋の內でも手代の藤兵衛は、溫順しいよい人ぢやなう。アノ人に怪我はないかしらぬて。

町二 サア、その藤兵衛が切つたのぢやげな。

町一 ハア、わしや又番頭の忠兵衛と云ふ奴かと思ふたわいの。彼奴めこそ、ひどい目に合へばよいになう。

町二 イヤ、アノ忠兵衛めは惡い奴ぢや。

町三 時にこれから、仲の町から坂の下へ行かうか。

皆々 さうせう／＼。ござれ／＼。

ト皆々入る、淺黄落す。

造り物、向う打拔き、眞言寺の體、どん／＼太鼓にて、道具納る。

ト棒突き大勢、アリヤ／＼にて出て來る。後へ半吉蘇枋塗りにて逃て出る。棒突き皆々追廻す事いろ／＼あつて、トヾ又入る。直ぐに大ばた／＼にて棒突き皆皆逃げて出る。後より藤兵衛、拔刀にて追ひ出て、入り亂れ立廻りあつて、トヾ町人皆々逃げて入る。後に藤兵衛殘り、刀を腹へ突込み、ばた／＼にて、李兵衛尊像を持ち、金五郎、町人大勢忠兵衛を引張り出て。

金五 コレ藤兵衛、早まつて腹切りやつたの。

李兵 コレ、尊像は手に入り、金五郎さまの身の明りは立ちました。お八十さまと金五郎さまを、兄弟と云ふたは僞り。皆なお幸どのゝ拵らへ事。

忠兵　ヤア〳〵、そりや尊像は手に入つたとな。チエ、忝ない。

金五　不愍なはお八十の身の上。

ト李兵衛、藤兵衛を介抱して

李兵　申し藤兵衛さん、疵は淺い、養生は叶ひます。コレ町人衆、元の起りはこの忠兵衛。早う御代官所へ、

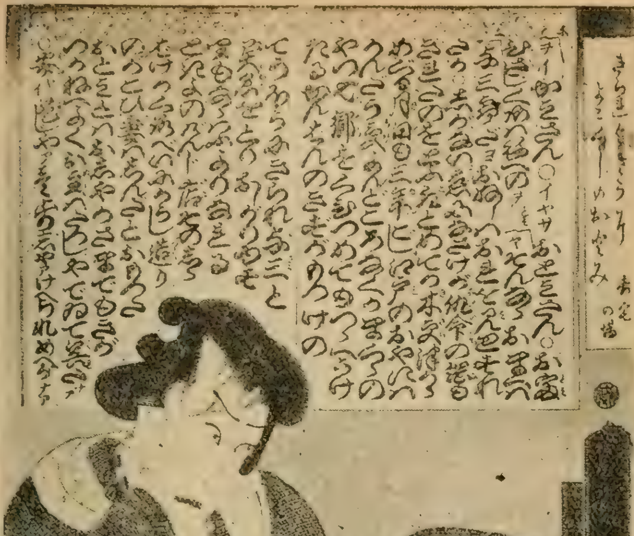
皆々　合點ぢや。

ト忠兵衛を皆々引立る。

口上出て、東西先づ今日はこれ切り。

目出度く打出し、ひやうし幕。

散書戀文章（終り）



河原崎權十郎の與三　岩井粂三郎のお富

（萬延元年上演）

與(よ)話(は)情(なさけ)浮(うき)名(な)横(よこ)櫛(ぐし)



河原崎權十郎の與三郎　市川小團次の蝙蝠安

(萬延元年上演)

與話情浮名橫櫛

序幕

木更津濱邊の場

役名━伊豆屋與三郎。噺家、相生。子分、岩吉。茶店亭主、五八。娘、お市。下女、お竹。同、おきの。雇ひ婆、お熊。丁稚、三太。鼈甲屋金五郎。赤間の妾、お富。

本舞臺、三間の間、向う、淺黃幕。上手、梅の立ち樹。鳥居、玉垣、眞中に茶屋床几。下手、葭簀張りの團子店に草鞋、紙、竹の先に火繩など差してあり、爰に五八、團子を燒きゐる。岩吉、その外大勢の子分。漁師の娘お市、噺家相生、立ちかゝつてゐる。すべて木更津海邊の體、よろしくあるべし。辻打ちにて、幕明く。

岩吉　なんと、賑かな事ぢやねえか。から云つて、親分を褒めるぢやねえが、この木更津で、飛ぶ鳥も落ちる赤間源左衞門親分が、今度、江戸から請け出し、伴れてござつたおとみさんを、濱見物に出さつしやるので、昨日からの大趣向、なんと大仕合せぢやねえか。

子分　さうよ、おとみさんも、親分の内に居れば、大概な大名の奥さまよりか、いふ目が出るの。

團平　イヤ、大さうな褒めやうだ。

五八　おいち坊、大さう蛤を、取つたの。

いち　ハイ、これは、おとみさんが濱見物と聞いたゆゑ、それでわざ〳〵汐干狩りに出て、此やうに拾うて、おとみさんに上げようと思ふて。

五八　ハイ〳〵、團子が燒けました。

皆々　オイ〳〵、これは、御馳走だ。

ト この内、團八、蛤に挾まれ

團八　アイタ、、、、、人殺し、助けてくれ〳〵。

皆々　どうした〳〵、氣を確かに持て〳〵。

ト見て

岩吉　ハ、、、、、大笑ひだ。蛤に手を喰ひつかれやがつた。ドレ、おれが取つてやらう。時に、おとみさんは、遲いこつちやねえか。

團八　大かた、濱の武藏屋で、飲んでゞあらう。

いち　申し〳〵、向うへ見えるが、おとみさんぢやわいなア。

皆々　オヽ、ほんに姐御だ。オヽイ〳〵。

ト摺り鉦入り、世話の流行唄になり、向うよりおとみ、妾宅の拵らへ、おくま婆、子分大勢、下女二人附き添ひ出る。花道、よき所にて

くま　モシ、おとみさんえ、この間から、旦那の源左衞門さまが、お勸めなさつたが、やう〳〵の事でこの濱見物。しかし、なに不自由なく、派手にしてござつた江戸深川の藝者衆だから、こんな所はつまらないが、又、折り節は、田舍の景色も、いゝものでございますわな。

とみ　ほんに、おくまさんの云はしやんす通り、から出かけて見れば、氣が晴れて、よいと云ふもの。然し、いま濱の武藏屋で、一つ過ごしたゆえに、大さうに醉うたわいなア。

くま　ナニお前さん、濱風に、少し吹かれりや、直ぐに醒めますわな。

相生　イヤ、それと云ふも親分が、この木更津で羽振りの利くゆゑに、源左衞門さんのおかみさんに、近づきになりてえと、その取り持ちでこの相生なども、近年の大繁昌でござりました。

子分　モシ〳〵姐御、向うにも、子分の手合ひが待つてゐる樣子、サア〳〵あれへ、行きませうか。

くま　何はともあれ、あれへお出でなされませいなア。

とみ　サア、ござんせいなア。

ト唄になり、本舞臺へ來る。子分大勢、出て

岩吉　姐御、最前から待ち兼ねた。お早うごんしたの。

とみ　オヽ、こゝへござんしたは、黑戸の濱の衆たちだの。

岩吉　されば、姐御がござる事は、昨日から聞こえてゐたゆゑ、途中の間違ひ防ぎの爲めに

皆々　出やんしたわいなう。

とみ　ほんに、お前がたのその心配、マアお氣の毒な事でござんした。もう皆さんは、構はずと、汐干狩りなさんすとも、酒になさんすとも、心任せにしやしやんせいなア。

岩吉　そのお許しが出るからは、今日一日は無禮講、汐干に命の洗濯場。したがおとみさんは、江戸の結構な所からござつては、どこを見てもこんな田舍、慰みにもなり

ますまい。

相生　イヤ、たま／＼江戸から爰へ稼ぎに來て、この土地でお世話になつて居ると、行く先々が氣が變つて、餘ほどようござりますぞえ。

とみ　ほんに、お前は江戸つ子だの。イヤ、江戸から來ると云へば、この南町、藍玉屋善右衛門さんの所へ、江戸から逗留の客があるさうだが、その客は、ア、、江戸のなんとやら云ふ所の、小間物屋の息子さんで、放蕩をしつくして、預けられてゐると云ふ話し。お前がたは、聞かないかえ。

五八　成る程、わしらは、其お方は見た事はなけれども、大さう、いゝ男だと云ふ話し。

相生　ムウ、そんなら江戸から來てゐるいゝ男とは、もしや、この相生の事ぢやござりませぬか。

岩吉　何を、馬鹿な……併し、その藍玉屋の内には、おつると云ふいゝ娘がある筈だ。

相生　その美しい娘のある内へ、江戸のいゝ男の江戸つ子が、預けられて居るとは、危ねえものだ。

岩吉　イヤ、よつぽど、お前は苦勞性だぜ。

相生　コレ／＼、いま話した藍玉屋の娘おつるとやらは、親分が懇意にさつしやる、この濱の御領主、千葉家の役人、山鹿毛平馬さまが惚れてござると云ふ話し。どうぞしておつるを求め貰ひ、ひきがしたいとやら。此奴を取り持つて上げたなら、褒美はずつしりであらうぞや。

子一　そいつは耳よりな話しだ。時に、黒戸の若い者中より、姐御の待ち受け、贈り物を披露して下んせ。

岩吉　違ひねえ、忘れてゐた。コレ姐御、黒戸の若い衆から魚が一舟、酒を一駄、お前の所へ贈り物でござります。

子二　濱牛の納屋へ受け取つて、みなの衆には御馳走しておきました。後に、挨拶して下んせや。

とみ　アイ／＼、それはマア、御心配をかけました。そんならかうしませう。みなもこれから濱手へ行て、汐干狩りなとしませうわいなア。

岩吉　それがよからう。みなも一緒に

とみ　サア／＼

皆々　ござんせ／＼。

ト唄になり、みな／＼入る。ト直ぐ與三郎、丁稚を連れて出る。後より金五郎、呼びかけ

金五　モシ／＼。

丁稚　モシ、呼ぶのは、わたしらの事かね。

金五　そこへお出でなさるは、伊豆屋の若旦那、與三郎さんではござりませぬか。

ト與三郎、振りかへり見て

與三　オヤ、さう云ふは、金五郎どんぢやないか。

金五　ヤ、これは若旦那、誠にお久しうござります。

與三　ほんに久しく逢はなんだ。幸ひ、向うに茶屋がある。ちよつと一服やりませう。

金五　サア、お出でなされませ。

ト鳴り物おやし、舞臺へ來る。この時、丁稚三太、下手へ入る。

五八　どなたさまも、お早うござりました。サア、一服お上がりなさいませ。

ト茶、煙草盆、持つてくる。

與三　アイ〳〵、構やんな〳〵。金五郎どん、なんの用で、こつちへ來なすつた。

金五　サア、お聞きなさいまし。黒戸の親類へ用たしながら、成田へも參りたし、こつちの方も初めてゞござりますから、通つて見ようと、江戸を立つ前の日に、お店へちよつと參りましたら、あなたの弟御、與五郎さまからお手紙が參りました。この上書の所を宛てゝ、上總木更津南町、藍玉屋善右衛門さまの所へ、お尋ね申さうと存じましたが、幸ひ、この所でお目にかゝりました。マア、これを御覧なされませ。

ト狀を出す。手紙を取り上げ

與三　それは、大きにお世話でござりました。又、弟がいつもの事を云つて寄越したのであらう。

金五　イヤ、なんの御用か存じませぬが、モシ若旦那、お前さまに對しまして、私しがかやう申すは、如何なやうではござりますが、親どもの代から、お店の仕事をして、それで渡世をする私し、大事の旦那だ、惡い事は申しませぬ。あなたのお身の上も、親仁から承はる。大旦那與左衛門さまが、三十をお越しなされてもお子さまが無かつたゆゑ、お前さまを御養子にお貰ひなさつたその後へ、御出生の與五郎さまなれども、御惣領と極まつてゐるお前さま、あの與五郎さまは御別家と、事のきまつた時分まで、物がたいお前さまが、どうしたはずみか御放埒、御親類へお預けの身の上、それを案じて弟御の、與五郎さまがお手紙だらうと、推量いたして居りまする。マア、こんな事は、人情本などに、よくある事で

ござります。實のお子へ義理立てして、お前さんが放蕩をして、與五郎さまを名跡に、立てうと云ふお心ではあるまいかと、どうやら私しは思ひまする。そりや、御實子への義理立ては、御尤もでござりまするが、お前さんは、先から內へ。

與三　コレサ〳〵、そりや、何を云ふのだ。なんの、あれに義理立てが要るものか。第一、義理と云ふ字を辨へてゐれば、親類や兩親へ、こんな厄介をかけるものか。

金五　サヽ、そりや、お前さんは御別家なさつて、氣樂にお暮らしなさるも、萬ざらでもなけれども、それでは世間が。

與三　ハテ、又そんな事、つまらねえ事は止してくんな。おれも今日は、退屈したから遊びに出たのだ。それに、つまらねえ事を云つて、氣鬱がしちやア、いけないではないか。

金五　ほんに、さうでござりました。つまらない事を云ひ出して、私しが惡うござりました。お氣に觸つたら、眞平、御免下さりませ。

與三　ハテマア、そんな三指では恐れる。イヤ、久振りでこなたの顏を見たゆゑ、どうか江戸へ歸つたやうだ。そこらで一口やらう。

金五　ようござりませう。久し振りで、お供いたしませう。然し、あの小僧どんは、いつの間にやら、どういたしましたらう。

與三　大かた、磯へ出て、汐干の景色でも、見てゐるだらう。

金五　天氣はよし、ぶら〳〵行つて見ませうか。

與三　それもよからう。

五八　モシ旦那さま、これから先は、煙草の火が不自由でござります。これを、お持ちなされませ。

ト竹に挾みし火繩を出す。

與三　こいつは、氣が利いてゐる。ソレ、茶代ぐるみに、これを取つて置きな。

五八　アヽ、モシ〳〵旦那さま、こんな事を。

金五　ハテ、何も云はずに、取つて置きなよ。

五八　そんなら、戴きまする。大きに、有り難うござります。

金五　サア、參りませう。

ト鳴り物になり、東の歩道にかゝる。

時に若旦那、私しは、この木更津は、初めて參りました

が、イヤ、噂に聞いたよりは、よつぽどよい景色でござりますな。

與三　さうよ、こんな所が江戸にあつたら、錢儲けになるであらう。

　トこんな捨て臺詞を云ふて、眞中の歩道まで來ると、木なしにて道具、變る。淺黄幕、きつて落す。

　本舞臺。向う、一面の總浪の遠見。前に常足の二重蹴込みとも浪。右袖、山蘆原。日覆ひより松の釣り枝。よろしく、道具、納まる。

金五　若旦那、向うに見える岩の景色は、どうも云はれませぬ。

與三　サア、あの岩の上は、七八疊ばかりもあるだらう。あの上で、一ぱいやる所だ。なんと、いゝ岩ぢやないか。

金五　左やうでござりまする。イヤモ、歩むともなしに、磯邊に參りました。

與三　ほんにさうだね。

　トこんな事を云ひながら、上手へ入る。ト直ぐにバタバタになり、上手より相生、鰈を持ち、走り出て來る。後より丁稚三太、追つかけ、來て

三太　コレ相生さん、その鰈は、おれがつかまへたのぢや。こつちへ返しなさい。

相生　馬鹿を云へ。おれが突きあてた。なんで、おのれにやるものか。

三太　それでも、おれが見つけて、捕らうとしたのだ。こつちへ寄越せ／＼。

相生　なにを小癪な。

　トをかしみの鳴り物になり、立ち廻りあつて、たうとう鰈を蘆原へ抛り込む。相生、三太を當てゝ、向うへ走り入る。三太、脾腹を押へながら、起き上がり

三太　相生のべら棒め、ソレ。

　ト行かうとする。與三郎、金五郎、出て

與三　コレ、三太／＼、てまへマア、そりや、なんの態だ。いたづらも、大概にしろ。

三太　いたづらぢやござりませぬ。大きな鰈を、わしが見つけて、捕らうとすると、相生の馬鹿面めが奪つたゆゑ、それで爭ふてゐるところでございまする。

與三　又しても惡戲ばかり、大概にしろ。そして、てめえは濱の湊屋へ行て、今におれが行くから、支度をして置

けと、云ひつけて來い。

三太　ハイ、畏まりました。

ト鳴り物になり、三太、入る。相生、捨て臺詞を云ひ云ひ、出て

相生　オヤ、お前さんは、伊豆屋の若旦那、與三郎さんではございませぬか。

與三　オヽ、さう云ふは、幇間の甚八、どうしてこつちへ來てゐるのだ。

金五　オヽ、甚八さんか。今日はモシ、よく近付きに逢ふ日ぢやござりませぬか。

相生　イヤモウ、江戸でも、お前さんのお噂たら〳〵、實は、戀しくつて、遙々とお後を慕ふて參りました。

與三　うまく云ふ奴サ。しかしマア、どう云ふ事で、こつちへ來たのだ。

相生　左やうでございます。有りやうは、江戸に居つても、お前さまは、こつちへ來ておいでなさいますし、この節は、色の方もちつと隙になりますし、だから、お前さんの後を追つかけて來ました。併し、これから夏場をかけては、幇間の甚八も、五行亭相生と名乘つて、夜は川端へ寄席をかけ、昔噺しの兩名、たんまりとしめる積りで參りました。

金五　ムウ、そいつは、うまい錢儲けだ。

與三　さうして、今日はお客で來たのか、又、一人か。

相生　サア、今日はこの木更津での、赤間源左衞門さんと云ふお人の内室、濱見物に行くから、取り持ちに行けと、所の若い衆に誘はれて參りました。かう云ふ片田舍にも、おつりきな人もあるものサ。

金五　ナニ、おつりきとは、どう云ふ譯だ。

相生　されば、その赤間源左衞門さんと云ふ人は、この木更津での利き者、今こゝへお出でなさる道で、若い衆大勢よつて、酒を飮んでゐる所がございましたらう。あの手合ひもみんな、赤間さんの子分。今日、姐御の濱見物といつて、取り持ちのあの騒ぎ。なんと、大さうなものぢやござりませぬか。

與三　ムウ、そいつは大さうな事だな。

相生　モシ、おつりきと云ふは、その姐御の事でござります。お前さんなんぞは、お會ひなすつたら、御存じでござりませう、ソレ、あの深川の藝者富吉さんでござりますわな。

與三　なんだ、富吉……オヽ、さうか、あいつがこの木更津

へ、どうして來てゐるであらう。

相生　イヤモウ、私しもこの間、こつちへ來て顔を見て、互に吃驚りさね。併しそれからの手續きで、所の衆の贔屓になり、マア私しも大きな仕合せ。そんなことや何やらで、今日も取り持ち役と、出かけましたのサ。

與三　誠に、江戸の者はなつかしい。これから濱川の湊屋で、一口やる積りだ。用が濟んだら、後から來ねえか。

相生　そりや、仰せなくとも、是非とも推參。

ト花道にて話すうち、唄になり、上手より以前の子分大勢、酒に醉ふたるこなし、妻揚子を使ひながら、出る。後よりおとみ、おくま婆、下女、附き添ひ、出る。相生、これを見て、直に本舞臺へ來て

これは皆さん、お早うござります。モシ、御新造さん、申し譯もござりませぬ。お近附きに逢ひまして、お供におくれました。眞平、御免下さいまし。

とみ　なんだね、固くろしい。

トこんな事を云ふうち、子分、一人づゝ與三郎と摺れ違ふ事、よろしくあるべし。子分の岩吉、摺れ違ひながら、懐劔を懐中より出す。與三郎、金五郎、慄える。みな〳〵、摺れ違ふ事あつて、おとみと與三郎、見合ひ、おとみ、扇を翳す。色合ひの摺れ違ひありて、子分は引つ込み、おとみ、おくま、おきの、おたけ、殘り、花道まで行きながら、さては噂あるあの男かと見惚れる。

くま　モシ〳〵、おとみさん……コレサおとみさん、なにを。

とみ　エ、。

くま　エ、モウ、ござんせいなア。

ト無理に引つ張り入る。與三郎、うつかり見とれて、羽織、脱げる。金五郎、思ひ入れあつて

金五　モシ〳〵若旦那……コレサ若旦那。

ト羽織を着せる。木の頭。與三郎、羽織を着ながら、藻ぬけのやうに向うを見込み、見惚れるこなし、よろしく、

ひやうし幕

二　幕　目

赤間別莊の場
木更津濱邊の場

役名——赤間源左衛門。山鹿毛平馬。屑ひ婆、お

態。下女、おきの。海松杭の松五郎。子分、段平。同、丈助。同、藤六。同、百藏。同、市助。庄屋、杢兵衞。村娘、お牛。和泉屋多左衞門。赤間妾、お富。伊豆屋與三郎。

本舞臺、三間の間、常足の屋體。向う、赤壁、櫛形窓の欄間。正面、誂へ塗り下げの瓦燈口、更紗暖簾、かゝりあり。上手、一間、風流なる障子屋體。これに續き、一間の床の間、この向う、茶壁、こゝに餝り付けよろしく、平舞臺、上の方に以前の團平、藤六、百藏、市助、いづれも前幕の子分にて住まひ、この前へ酒肴の道具、置き並べ、ずつと下手、若い衆、村方若い者にて扣へ居る。おはん、おいち、これも前幕の在所娘にて、酌して居る。いづれも振舞ひに招かれし體。すべて赤間別莊の體。濱祭りの唄、鳴り物にて、よろしく賑かに幕あく。

藤六　マアみなの衆、いゝではないか。もう少し寛りと、飲んで行きなせえ。

段平　親分が、御地頭の御用を達する身分になり、心祝ひの今日の酒盛り。

はん　それゆゑにわたし等も、お前がたを振舞ひに

いち　御酒のお酌や、御飯の給仕

兩人　手傳ひに來た今日のよろこび。

若一　されば、爰の親分の赤間源左衞門さまは、この木更津では羽のきく親方。

若二　近郷近在を、男を磨く手合ひが、時折りふし折り見舞ひ。

若三　その悦びだと云つてこの通り、酒肴もたつひつに

若四　村方のわし等へまで、酒をたらふく振舞はしやるからは、

四人　さて〳〵、氣を張られた事でござる。

藤六　もう一度、座敷のついでに

段平　熱燗で、もう一ぱいづゝ

兩人　すごして行きなせえ〳〵。

若皆　モウ〳〵、澤山にたべました。

若四　これで、お暇申しませうかえ。

若皆　よろしく、禮いふて下され。

子皆　そこは承知……ようござりました。

ト右の鳴り物にて、村方若い衆四人、橋がゝりへ入る。

段平　イヤ、百姓衆と云ふ者は、律義なもの。その代り、

云ふ事がみな、おあひだゞから、

藤六　違ひねえ。時に、肝心の正客、山鹿毛さまを

段平　座敷に一人、沖の石、人こそ知らじ、かわくまゝ

藤六　手酌で大かた、飲んでゞあらう。

段平　併し今、庄屋の李兵衛爺さんが見えたに依つて。

藤六　また直に、酒盛りになるであらう。

段平　何にしろ、おいら達は

藤六　勝手で、別にやらかさうか。

段平　それがいゝ〳〵。

岩平　サア〳〵、ござんせいなア。

ト右の鳴り物にて、この人數、殘らず下手へ入る。舞臺へ床几を二脚なほし、これにて右の鳴り物、活け殺し、よき程に上手より山鹿毛平馬、着流し、挾み帶、大小にて庭下駄。李兵衛、庄屋の拵らへ、草履を穿き、次におきの、平馬をなだめながら出て來たり

きの　マア〳〵、何ごとも、御料簡なされませ〳〵。

平馬　イヤ、止めるな〳〵、その方が、存じた事ではないわい。

庄屋　どうも今さら私しも、思案につきました。マア〳〵、御料簡なされませ。

平馬　イヤ、相ならぬ。武士たる身どもを嘲弄するか。今日までは、耳よりな返事を聞かせるであらうと、心待ちに待つて居つたが、小兒を欺く只今の云ひ拔け。

庄屋　でも。それは、有り體のことでござりまする。

平馬　吐かすなやい〳〵。察する所、元々から事をたくみ、武士たる身共をうまうまと、一ぱいはめた不屆き奴、それへ直れ……いで、ぶッ放してくれん。

ト刀へ手をかけ、血相して拔きかける。

庄屋　ア、御免なされませ〳〵……桑原々々、萬歳樂萬歳樂。

きの　なんであらうと、今日の事は、アレ、あのやうに詫びてゞござりまする、御堪忍なされませ。

平馬　イヤ〳〵、退け〳〵、ならぬ〳〵。

庄屋　これは手酷い目に逢ふものだ。

平馬　うぬ、どうするか……覺悟いたせ。

ト刀を拔き、嚇しに追つかける。庄屋李兵衛、逃げ廻る。右の唄、祭りの鳴り物になる。向うより赤間源左衛門、羽織、着流し、一本ざし、誂への柾の下駄、後より丈助、子分の拵らへ、風呂敷包みを提げ、同じく一本ざし、次に相生、前幕の幕間にて附き添ひ、出て

來たる。舞臺にはおきの、平馬を止め、よろしく雙方見合つて

源左　イヤナニ平馬さま、なんの間違ひか存じませぬが、マア〱お待ちなされませ。

平馬　イヤ〱、退け〱、ならぬ〱……ヤ、さう云ふお主は、源左衞門。

きの　よい所へ、旦那さま。

源左　それへ行つて、マ、とつくり譯を聞きませうか。

ト これにて平馬こなしあつて、床几へかける。おきの後へ控へる。庄屋李兵衞、下手に控へる。赤間源左衞門、丈助、相生、舞臺へ來たり、めい〱、床几へかける事。

きの　旦那がお出でなされた事を、おとみさんへ、お知らせ申して置かうわいなア。

ト 上の方へ這入る。丈助、こなしあつて

丈助　山鹿毛さまには、今日はよく、早くお出でなされましたなア。

庄屋　この李兵衞などは、馳走になるかならぬうちに、平馬さまにお目にかゝり、誠にひやいなところへ、主のお戻り、ヤレ〱びつしより、汗をかきました。

平馬　第一は斯うぢやて。貴公も兼ねて知らるゝ如く、この度、身共も殿さまより加增を賜はり、鎌倉へ出勤いたすについて、未だ定まる妻もなく、閨さびしく思ふ折りから、兼ねてその許も存じの如く、當所の町人、藍玉屋善右衞門が娘のおつる、恥かしながら一目見るより、ぞつこん執心、どうぞ宿の妻にいたしたく存じてゐる折りからに、これなる李兵衞、藍玉屋へは入魂とやら、私しが申し入れ、媒介の儀、然るべく取り計らはんと、立派に請け合ひしゆゑ、時をり〱に心を用ひ、過分のまひなひ賄賂をもつて、身身を捨てゝ相賴めば、承知いたし先方へ首尾相なるやう媒介せんと、日々夜々に刻を延し今日のたゞ今と相なつて、埒明かぬのと、人を白痴にいたした申し譯。それゆゑこの平馬……武士道が相立たぬ貴公がこれへ、いま少し戻らずば、眞二つに討ち放さんもの、殘念な事いたしたわえ。

源左　それぢやア腹を立たつしやるも、御尤もだ。して又李兵衞どの、こなたはなんと、平馬さまへ御挨拶をしたのだ。

庄屋　サア、わしも、どうか彼のおつるどのを、平馬さまへ媒介をする心なれば、だん〱藍玉屋へ掛け合つたと

ころだ、初め、先方で申すには、まだおつるは年も參じませず、殊に病身ゆゑに緣組みもまだ早い、また平馬さまは、御地頭の御重役、こちらは町人の事なれば、下世話に申す提灯に釣り鐘、釣り合はぬは不緣のもと……なんのかのと、九段目もどきの斷り口上。わしも、平馬さまへ濟まぬゆゑ、たび〱手を變へ、品を變へ、掛け合たら、そのうちに、肝心の彼の娘のおつるが、どこへ行つたか行き方が知れず。なんでもこれは神隱しとの事ゆゑに、有り體に申したばかり、何ぶん親分、平馬さまへ、そこをよろしく執り成しを、偏にお賴み申しまする。

ト思ひ入れあつて、云ふ。

源左　ムウ、よし〱。併し平馬さま、こりや何か、先方に込み入つた、譯がありますわえ。

平馬　それゆゑ、身共、猶さら存外。きやつ、有德なる藍玉屋へ抱き込まれ、却つて先方より扱ひ金を取り、致した言葉を反古にいたす、それゆゑ彼奴をぶち放しくれるわえ。

ト立ちかゝるを、源左衛門、ちよつと止めて

源左　マア〱、お待ちなされい……マア、待たつしやりませ。この事は、初め私しにも、お前さまがお話しはなされたが、世間なみの媒介人へ、大人氣なくかゝり合ふ事もねえと、それなりに聞き流して置きましたが、こりやてつきりその娘を、どつかへこかしたに違ひねえわえ

ト丈助へこなしあつて

カウ丈助、お主やア、なんぞ心當りがねえか。

丈助　されば、わしも先刻から考へて見るに、たしかあすこの藍玉屋には、江戸から預けられてゐる與三郎とか云ふ若い野郎、いゝ男だと世間の噂。

平馬　ムウ、そんならその與三郎とやら申す奴が、彼のおつるとちゝくり合つたのだな。ホイ、つるの初物を、左やうな奴にしめられては、いよ〱武士が廢るわえ。これと云ふも、われが掛け合ひがまだるいゆゑだワ。

ト杢兵衛へ立ちかゝる。杢兵衛、驚き入つたる思ひ入れ。

源左　これはしたり、お前さまも取り越し苦勞な。まだ、どうだか知れやしねえ。若し、藍玉屋が拵らへ事で、玉を隱して置くやうな、實正を突き當てたら、そこはこつちが男づく、私しが一番のり出して、忽ちかゝりを付けますワ。高が小娘一人の事、マア、落ち付いてござりませ。

平馬　何ぶん骨折りを頼み申す。
丈助　モシ〳〵、あの通り親分が、平馬さまの方へは、譯を付けると云はつしやるが……モシ杢兵衞さん、早く爰をば歸んなせえ。
庄屋　歸る事は歸るが、既に斬られる事と思つたゆゑ、がつかり腰も拔けかけて、足がぶら〳〵。
トそろ〳〵立ち上がる。
丈助　早く行きなせえ。長居は、却つて爲めにならねえ。
庄屋　戻ります、歸ります……さて〳〵親方、お前がござつたばつかりに、斬られるところを命拾ひ、忝ならござりまする。併し、振る舞ひ酒はすつぱり醒めた……アア、怖いこと〳〵。なんぼこの木更津が、貝が所の名物でも、ア、恐しい拔き身の馳走。
丈助　エヽ、何を馬鹿云はつしやる。
庄屋　イヤ、馬鹿は今年は、切れ物でござつた。
ト橋がゝりへ入る。テンツヽになり、向うより海松杭の松五郎、好みの拵らへにて、誂への小さき藁苞を堅に提げ、出る。松兵衞、手代の拵らへ、合羽を着て、脚半に手甲、中拔き草履、旅形にて、出て來たり、直に舞臺へ來る。みな〳〵見て
源左　オヽ、海松杭の松五郎か。お主が來るのを、待つてゐた。
松五　兄貴……平馬さま、爰にござりましたか。
平馬　オ、松五郎どのか……して、同道したあの者は。
松五　こりや、鎌倉で心易い藤八どのゝ、名代にござつた手代衆サ。
平馬　ハ、ア、こりや一件の和泉屋のか。
松兵　ハイ、松兵衞と申す者でござりまするが、どなたも初めてお目にかゝりました。
ト此うち源左衞門は丈助へ囁き、丈助、呑み込み、相生に向ひ
丈助　時に、親方が爰へござつたから、これからが酒盛りだ。相生先生、奥へ行つて、座敷の支度を頼みますぜ。
相生　それでこそ、私しの世界となりました。そのこと、そのこと。
源左　今に行くから、用意をしやれ。
丈助　そんなら、親方。
相生　お早くお出でなされませ。
ト兩人、入る。此うち松五郎は、提げて來た藁苞を下手へ片寄せ



、初演の上場前に發行された錦繪。畫工には斯



うした内容に傳へられてゐたと見えます。

松五　サテ、早速、話さねばならぬのは、いつぞや、平馬さまが兄貴へお頼みの

ト あたりへ思ひ入れして、みな〳〵、こなし。

かの鶴の香爐は。

平馬　その眞鶴の香爐は、某が肌身はなさず、所持して居るて。

ト 懐中へこなし。

源左　して、あの仁を同道したは。

松五　されば、いつか話した藤八と云ふのが、實は私しの兄でござります。

松兵　道理で、お前に似てゐると思ひました。その藤八が參るべきでござりましたが、この節、大番頭の多左衛門が、魚油仕入れの事に就いて、留守中ゆゑ、藤八は後を預つて居りますれば、代りに私しが參りました。

松五　まだその上に。

ト 小判の形をして見せ

レコも、直に屆けて遣はしました。

源左　それは、手筈がよかつた。

平馬　重疊々々。然らば、直に取り替せませう。

松兵　私しも大事の品、お預り申して戻るからは、拜見いたしたうござりまする。

平馬　尤もな儀ぢや。これが即ち、千葉家の重寶、眞鶴の香爐ぢや、とつくりと見やれ。

ト 懐中より蒔繪のしたる香爐の箱を出し、紐を解き、紫の袱紗より件の銀にて拵らへたる鶴の香爐を出し源左衛門へ見せる。源左衛門、受け取り

源左　ムウ成る程、話しに聞いたが、見るは初めて……これが千葉家の重器、眞鶴の香爐かな。成る程、こりや結構な品だわえ。

ト 松兵衛もよく〳〵見て、合ひ方。

平馬　その香爐の儀について、込み入つた仔細と云ふは、斯やうぢやて……先達て頼朝公、南都東大寺を御建立、その供養の事につき、近きうちの御上京、その折りから諸大名より禁廷へ、家の寶を獻上と事きはまり、主人千葉家には、一つの重寶と申すのは、往昔……下總の相馬より傳へ受けし、夜光の玉と名付けし名玉、これを時の帝より御懇望なさるれども、世にも得難き品なれば、この木更津の鎭守たる吾妻大明神の末社の裡で、稻荷の神と祀り籠めある事は、こりや、世の人の知るところ……その事を委く云へば、橘姫の由來を說いて、開帳の云ひ立

てめくゆゑ、左やうな事は申さぬが、夜光の名玉のその代りに、獻上いたす鶴の香爐、近く寄つて、御拜とげられませう……ハ、、、、。

源左　成る程委い由來は、初めて承はりました……この品が彼の譯で、お前が持つてござるゆゑ、兼ねて一味企ての、邪魔になる穗積隼人……悴の左近は。

平馬　二人ともに咎めの身の上……さうして始終は兩人とも、痛い腹は安いもの……して、松兵衞とやら、この香爐を、いよ〳〵その方へ預りくれるか。

松兵　それゆゑにこそ、參つたからは、お頼み通り金子と引き替へ……百五十兩、持參いたしました。

源左　サア、それなれば香爐は。

ト箱へ入れて、手代松兵衞へ渡す。此うち松兵衞、內がへより百五十兩、取り出し

松兵　金は封金、私しの主人、和泉屋の極印がござりますれば、兩替仲間の、いづ方で引き替にならうとも、お氣遣ひはござりませぬ。

平馬　よし〳〵、百五十兩、確かに落手。

ト金を源左衞門へ渡し

鎌倉に參り、金子は貴公へ。

源左　しつかりと、預りました。

ト松兵衞、右の箱を受け取り

松兵　さうして、この香爐の質請けは、いつ頃なされて下さりまするな。

平馬　ハテ、そりやいづれ鎌倉へ行つた上、此方の諸用が片づき次第、早速に請け戾す。氣遣ひさつしやるな。

松兵　お前さまのお言葉なら、此方も安心、左やうなら私しは、日の暮れぬうち、少しも早く。

源左　道をば、氣を付けて行きなせえ。

松兵　左やうならば平馬さま、源左衞門さま、これから直に。

源左　大儀でごんした。

松兵　其うち、お目にかゝりませう。

ト松兵衞、橋懸りへ入る。兩人、邊りへこなしあつて

平馬　まづ、あの香爐を、和泉屋へ、こつそりと埋めて置く時は。

源左　それでお前も身分の安心、これから直に鎌倉へ上る支度を。

平馬　源左衞門どの、先刻申し入れた婦人の一件は。

源左　なんの高が女一人、どうなりと來る事でござります

るワ。

松五　なんのお前さん、どんな堅い女でも、靡かないと云ふ事はござりません。

平馬　ムウ、畜類め。

ト思ひ入れ。この時、上手よりバタ／＼と駒下駄の音して、おとみ、出で來たり、つんとこなし。源左衛門と顏見合ひ

源左　オヽ、おとみか。

とみ　お前、今お出でかえ。

トつんとしたこなし。

源左　さうよ……假に爰にござる平馬さまと、お屋敷の御用で鎌倉へ行つて來にやアならねえ。立ち振る舞ひの心で、急に思ひ付いた今日の催し。さぞごたごたと、忙がしかつたらうの。

とみ　お前も亦、かうした事なら、一昨日にも、ちよつと知らせておくれならよいに、足元から鳥とやらで。

ト思ひ入れ。

平馬　ムウ、分つた／＼。さては、主人が急の旅立ちゆゑそこでお内儀には、ちと逆鱗の體と見えるわえ。

源左　コレおとみ、なんだえ手めえは、平馬さまへ御挨拶もしねえのか。

平馬　ア、イヤ／＼、先刻、奥でちよつと逢ひ申した。さておとみどのは、源左大人が、江戸から苦勞して呼び寄せた程あつて、さても／＼美しい。

松五　オイ／＼姐御、親分の旅立ちは、ちつと耳よりな事があつての事だ。惡う思つてはいけめえではあるめえか

平馬　マア、ちつとこれへ、かけ給へ。

とみ　イエ／＼、面白さうなお話しの、お邪魔になつては惡いわいなア。

ト思ひ入れ。源左衛門、平馬もよろしくこなし。松五郎キツとこなしあつて

松五　ハヽア、それぢや今の爰の話しが。

平馬　とんだ間違ひだ。

源左　コレおとみ、爰にはちつと、込み入つた話しがあるのだ。お主はマア、奥へ行きやれ。

とみ　その込み入つた、耳よりの話しゆゑ、わたしに聞かせては、惡いのかえ……急に鎌倉への旅立ちと云ひ、さぞ、面白い事でござんせうなア。

源左　なんだこいつは、爰へ來る早々、氣色な事を吐かしやアがる。サア、あつちへ行けよ。

とみ　高が女の一人ぐらゐ、男の働きで、どうでもしなさんせと云ふ事サ。

源左　べら棒め、おつに氣を廻しやアがる。いま云つたのは平馬さまへ、娘を取り持つ話しだわえゝ。

とみ　知らぬわいなア。

源左　どうしたと。

ト立ちかゝる、此うちに松五郎、間が惡いと件の苞を提げ、上の方へ入る。源左衞門、立ちかゝるを、平馬止めて

平馬　ア、コレ〱源左衞門どの、ようござる〱。參る早々、おとみどのがひぞりかけたが、彼の悋氣の角文字いとしがられるとは……貴公は、なんたる果報者……アア、身共もせめて半分、あやかりたいな。

ト源左衞門、こなしあつて、あたりを見廻す。松五郎が見えぬゆゑ

源左　モシ、こいつに構はずと、マア奥で……サア、お出でなされませ。

平馬　コレおとみどの、こなたも奥へ。

とみ　イヽエ、わたしは後から、行くわいなア。

ト源左衞門は平馬をせり立つる。平馬は畜生めと源左衞門の脊中を叩く。おとみ、顏見合せ、顏をそむける心々のこなし。これを唄になり、源左衞門、平馬、上の方へ入る。後、なまめかしき合ひ方になり、おとみこなしあつて、人を待ち合せる思ひ入れ。

相生さんや、あのおきのへ頼んで置いた今朝の文、早く否やを聞きたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。此うち、下手より松五郎、うろ〱、出て來たり、おとみとちよつと顏を見合す事、おとみ、こなしあつて、上の方へ行かうとするを引き止め

松五　コレおとみさん、ちよつとお待ち。

ト呼び止める。

とみ　エヽモウ、恟りするわいなア。

松五　何もさう、恟りする事はねえ。マア、わしが云ふ事を聞きなせえな。

とよろしく止める。誂への合ひ方。

モシ、いま見た通り、聞いた通り、このわしが親分とか兄貴とか云つて尊敬しておく、當時マア御亭主の源左衞門どん、立派な男だ。働き者だが、あの人の性質で、直にもの倦のする男だよ。實は、鎌倉に引つかゝりの女が出來て……あの地頭の役人平馬どのが、殿さまの用で旅

立つを幸ひ、一緒に行つて、その女の始末を付けうと云ふさつきの目算。おれもこの前、江戸へ行つたその時分は、お前も藝者して、その時には、こつちも相應に間拍子がよかつたから、近附きになつて、萬ざら知らぬ顔の半兵衞と云ふ譯でもねえ。いま云ふ通り、赤間の源左衞門どんは、倦つぽい人だから、今にお前もおあひだにされて、その鎌倉の女をば、爰へ引つ張つて來やうも知れねえぜ。

とみ　ホヽ、わたしが倦られうが、倦られまいが、お前の世話にはならないよ。お前も餘ツ程、苦勞性だなう。

松五　ところがおらア、苦勞になるよ……ぞつこんお前に惚れてゐるから。ソレ、いつぞやから、たび〳〵あのおくま婆さんに頼んで、文で大ていおれが心意氣は、知れさうなものぢやねえかな。

とみ　アヽモシ松さん、お前、あの文は、本氣かえ。

松五　本氣でなくつて、どうするものかな……コレ〳〵おとみさん、娘子供ではあるまいし、親分のかみさんへ、から打ち出して惚れてゐると、男が口外したからは、だいてごつこの一か八、お前だつても苦勞人、察し心もありさうなものだ。萬ざら、恥をかゝせてもくれめえの。

とみ　それだと云つてわたしには、今は源左衞門さんと云ふ、主のあるこの體。

ト又、行きにけるを、よろしく止めて

松五　サア、その主の心が……もう裏はらになつてゐるよ。

とみ　エヽ、しつこい、放しておくれ。

松五　イヽヤ放さぬ……コレ、どうぞ。

トよろしく止める。おとみ、思ひ入れあつて、じつと留まり

とみ　ても、思ふに任せぬ。

トじつと思ひ入れ。

松五　エヽやつぱり亭主へ。

ト抱き付かうとするを、振り切り、また寄るところを

とみ　エヽ、それどころでは、

ト突き退け

ないわいなア。

ト唄になり、おとみ、上の方へ入る。松五郎、起きかへり、こなしあつて

松五　今度の話しをば、あのおとみめが穿き違へ、なんだか源左衞門どんへ、やきかける悋悔、いゝ呼吸だと持ち込んで、口說いても、けんもほろゝ。エヽ、忌々しい、

なんの事だえ。

トこなし。上の方よりおくま、出で來たり

くま　オヽイ……オイ松さん。

ト呼ぶ。松五郎、振りかへり、見て

松五　おくまか。

くま　おあひだゞね。

松五　面目次第もないわい。

くま　立たねえなう。

ト思ひ入れ。

松五　コレ〳〵、お主もいつぞや、初めて文を頼んだその時に、きつと骨を折つてくれると云ふから、それ相應に禮をして置いたぜ……それに、立たねえなうと、さう濟まして居られては、いけめえぢやねえか。さうして、文は屆けてくれたのか、おとみが、手へ受け取つたかえ。

くま　受け取つた事は受け取つたが、また返されたのサ。

松五　また返されちやア、いけめえぢやねえか。

くま　それでも、初めて文を遣つた時はね、十か九つ、出來さうな鹽梅サ。

松五　十か九つ、出來さうな鹽梅で。

くま　さうして、おとみさんが。

松五　なんとか、云つたか。

くま　この文は、アノ本當に松さんが書いたのかえと云ふから、アイ本當でござりますと云つたのサ。

松五　さうすると、どうした。

くま　ほんに、顏に似合はぬ、優しい人だとサ。

松五　その臺詞は、極いゝの。

くま　噓にも、かう云ふものをくれるのは、嬉しいが。

松五　ムウ……ムウ。

くま　文を遣はすとは、今どきには甘口な、時代な洒落はよしておくれ、人の目褄にかゝつては惡いと云ふから。

ト文を二三通、出して見せて

コレ、この通り、みんなわしが、持つてゐるのサ。

松五　文では惡いと云ふから、直ぶッつけにやらかしても、今のやうに……こりやア、おれが、氣を引かれたのだわえ。

くま　ア、いけねえ〳〵……おあひだ〳〵。

松五　なぜ〳〵。

くま　コレ……から云ふ譯だ。

ト囁く。

松五　なんと云ふ。それなら、今あのおとみには、とうか

ら外に。
くま　ア、コレサ。
　ト又、囁く。松五郎、こなしあつて
松五　そりや、嘘だ〳〵。今も、おとみが一寸した事で、源左衛門どんへ、やきもちを焼く塩梅式は、どうしてどうしてそんな事は。
くま　アレ、まだそんな事を云つてゐるなう……そこがお前、苦労人、下つ腹に毛のないのだ。これ
　ト親指を出し、思ひ入れあつて
をな、一ばいうまく、喰はせてゐるのだ。
松五　ムウ、こつちのは一杯も喰はせられねえだけ、猶さら腹が立つわえ……よい〳〵。こりや、此まゝでは置かれねえわい。
　ト立ちかゝるを
くま　ア、、コレ〳〵、そんなに荒立つてはいけねえよ。わしが、とつくり實正を見屆けたその上で。
松五　おれに知らせろ、骨折り代は。
くま　アイ〳〵、承知サ。
　ト邊りへ思ひ入れあつて、合ひ方になり、以前の藁苞を提げて、出て

松五　それとは知らないで、おとみは、よもやおれが云ふ事を聞くであらう……その時はあの源左衛門を仕舞ひをつけ、おとみをおれが女房にして、跡式を丸じめと、鎌倉に居る弟の、藤八が手をもつて、買ひ求めたこの毒薬。
　ト懐中より叺莨入れを出し、この中より薬包を二つ、薬法の書き付けを出し、また藁苞の中より誂らへの備前徳利に、保命酒と記したるを出し、こなしあつて
即ちこの保命酒の中へ仕込んで、道ならねども源左衛門を、キユウと云はせて……と、まづ殺すサ。仕事をするも、みな誰れゆゑぞ、おとみゆゑ……そのおとみがさう云ふ譯になれば、コリヤ、滅多には、源左衛門には呑まされねえわえ。
　ト思ひ入れあつて、徳利を持ち
併し、高い金で買つて薬、棄てゝ仕舞ふも惜しいもの、なんぞの役に、立つ事があらう。
　ト又、藁苞に入れて
こりや、かうして置いてと。
　ト右の薬の二つの包みと薬法の書き付けを持ち、思ひ

入れあつて

それにつけても、おれが弟の藤八も、馬鹿念の入つた、どぢな奴だわえ……コレ、金紙の包みに入つたは、南蠻祕法の大毒藥……これは、酒の中へ入れたから仕方がない。

ト藥紙へ入れし藥をこなしあつて

この藥紙へ入れたのは、その毒氣を消す藥…　これまで添へて遣はしても、肝心の毒藥さへ、今の分では不用なもの、毒消し藥は、なほ不用だ。

ト書いてありし封しめの手紙を出して

幸ひ、あの松兵衞に屆けるには、藤八へ送るこの手紙へ封じ込んで、戻して遣らう、それがいゝ／＼。

ト手紙の中へ巻き込むうちに、風の音して、舞臺へおきし以前の藥法書き、よき所へさし金にて引いて取ろ。松五郎、これに心づかず、手紙を見物に見えるやうに懷中して仕舞ふ事あつて、件の藥法書きの見えぬゆゑ、心づくこなしあつて

ヤア／＼、今まであつた毒藥の、用方を書いた清書きをどつちへやつたわえ。

トいろ／＼考へるこなしあつて

エ、まゝよ、こつちの名前のねえ品だ。風に飛んでも、かけ構ひはないのだ。よし／＼。

トこなし。この時、奥にて

呼び　オイ、松五郎さん／＼。

松五　オイ／＼、いま行くわえ。それにしても。

ト徳利の始末に困る思ひ入れ。

ア、コレ、どこぞへこれを。

呼び　オ、、松さん／＼。

松五　エ、、いま行くわえ、忙しない。

ト下手の葉蘭の茂みへ心づき

少しの間、爰へかうして。

ト右の包みのまゝ、中へ隠して

よし／＼、これで入り用の時に、引き出すワ。ア、コレ、此やうに齷齪するも、これも戀ゆゑ。

呼び　オイ、松さん。

ト大きく呼ぶ。

松五　エ、、思案もなく、呼びやアがるわえ。

ト唄になり、上手へ入る。奥よりお針、おきの、幇間相生、思ひ入れしながら出て來たり

きの　モシ相生さん、あのおとみさんがこの間から、お前

へお頼みなさんした彼のお文は、殘らず先へ、屆けたでござんせうな。

相生　そりや、屆けないで、どうするものか。不斷いろいろと、お世話になるおとみさんの事なり、又、先のあの人も、わしが江戸にゐた時分には、年が年中お世話になつた旦那の事……とんだ淨瑠璃の口說だが、いつか汐干の戻りがけ、互ひに見合す顏と顏、それから後は川端で、わしの席が大入りで、日延べを三日の續き物、おとみさんも彼の人も、聞きにござつたその時に、すべよく引き合せ、その時ものを云ひ交し、それからかうした文の取り遣り。文箱地藏と平内さまを、おれが二役つとめて居るのだ。屆けないで、どうするものか。

きの　そんならようござんすが、おとみさんが仰しやるには、こつちからお文を上げても、先からお返事が無いゆゑに、もしもお前がその間で。

相生　なんのお前、先からその度ごとに、きつと返事が屆いてゐる。

ト紙入れより二三通、文を出して

この通り、持つてはゐるがの、その中に、どんな事が書いてあるか、知れまいではないかえ。それを、お孃さんかなんぞならよけれども、おとみさんにはキツとした……源左衞門さまと云ふ旦那のある身の上だ……ナ、いゝかえ、互ひの爲めを思つて見たら……もしこの事が親玉の耳へ聞えたら、そりやァ事だ。第一おいらが、どんな目に遭はうも知れず、又、あの人の身分にもさはる事だ。それだから、向うから來た返事をば、おとみさんへ屆けねえわな。

ト思ひ入れあつて、云ふ。

きの　お前の詞は、尤もぢやわいなア。その事はおかみさんに、わたしが云ひ譯をする程に、どうぞ、もう一度このお文を、急に屆けて下さんせ。

ト云ひながら、文を出し、誂らへの金包みと文と共に渡す事。相生、思ひ入れあつて

相生　ムウ〳〵……それぢやア今日は屆けるがね、重ねては、お斷りだよ。

きの　どうぞ、早く屆けて下さんせ。

相生　よし〳〵、今日は屆けて。

ト懷中して、右の先方から來た文をば、片手に持ち

この先さまから來た文も、わしが持つて居ては、却つて惡い。こりやァお前、手拭き紙にでも、遣つてくんなせ

え、必ずおとみさんへ、手渡しては惡いよ、キッと斷つたぜ。

きの　アイ／＼、承知ぢやわいなア。

ト文を受け取る事。

相生　ドレ、行つて來やうか。

ト時の鐘、合ひ方になり、相生、橋がゝりへ入る。よき程に、以前の松五郎、出て、下手より窺ひ、又、忍ぶ事。兩人、これを知らず、おきの、後を見送りて

きの　ほんに、あのお方の云はしやんすも尤も。わたしも濟まないとは思へども、あれ程に仰しやるもの、この取り次ぎはするものゝ、ひよんな事を、頼まれたものぢやなア。

トこなし。この時、奥より丈助、思ひ入れあつて、出で來たり

丈助　おきのさん、何をしてゐなさるぞえ。

きの　アイ、わたしや、ちよつと用事があつて、今こゝへ。

丈助　コウ、うまく云ふぜ、あの相生とひそ／＼話し、おれも半口、乘せて下せえな。

きの　エヽ、又そんな事、おかしやんせ、知らぬわいなア。

丈助　知らざア、おれが教へてやらうか。

トちよつと手を引つ張る。

きの　何をしなさんすぞいなア。

丈助　オヽしなさる、するのぢやぞや……ハテ、よい事を、してやるのぢや。

ト引き寄せ、懐中へ手を差し込むを、拂ひのけ

きの　エヽ、惡い事ばつかり。御新造さまへ、告げるぞえ。

丈助　ナニ、告げる……つげる八ぽう、外が濱……ちよつとちよつと。

ト抱き付くを、振り切り、行かうとする。いろ／＼追ひ廻し、トヾおきのゝ袂より三本の文の一本、落ちる。兩人、これに心づかず。おきの、丈助を突き退け、奥へ入る。丈助、起き上がり、追ひかけ入る。この始終を、松五郎、窺ひ居て、邉りを窺ひ／＼出て來たり、右の落ちたる文を取り上げ

松五　なんだ……與三郎さま、參る、とみより……ムウ、こりや、いゝ物が手に入つたわえ。

トにつこりこなしあつて、懐中する。浪の音、かすめて、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、建仁寺垣。下手、芝の植え込み。小高き土手板へ、紅白杜鵑花の盛り。上の方に栗丸太、皮つき柱、花車なる枝折り門、眞心にかざり、この傍に、同じく杜鵑花の芝山。後、淺黄幕、誂らへの通りの飾り付け。時の鐘、合ひ方にて道具、納まる。

ト上の方の枝折り戸を開け、以前の山鹿毛平馬、先に、赤間源左衛門、旅支度、好みの形、一本ざし、麻裏草履、後より丈助を始め四人の子分、附き添ひ、海松杭の松五郎、以前の形にて附き添ひ出て

丈助　それぢやア親分、隨分ともに御機嫌よく。

皆々　めでたう、お戻りを待ちます。

源左　オヽ、みんな、達者でゐるがよい。

段平　モシ、供に立つた源十と竹藏は、荷物を持つて

藤六　山鹿毛さまの旅宿に

皆々　待たせておきましたよ。

平馬　イヤモウ、思ひがけなく馳走になつて、氣の毒千萬な。身共も、心急きの儀もあれば、お主と同道いたして、何かの事を申し談ずるであらう。

源左　成る程、さうおつしやれば、丁度よい折りからでござりまする。

松五　それぢやア、旦那も御同道でござりますかね。

平馬　さればの事よ、この源左衛門に話しもあれば、是非とも出帆いたす積りぢや。

松五　左やうでござりまするか。

源左　カウ松や、お主が兄の所へ、あの香爐を預けたので、平馬さまも氣が安し、その金も用を達して、よい都合ぢや、何かと骨折りであつた。

松五　何サお前、兄貴が身分の出世になりや、どうでこつちも仕合せと云ふもの。

源左　コレ、留守中の事は、何ぶん手めえに、頼んだぜ。

松五　アイ、頼まれやした。

源左　それぢやア、もう送るには及ばねえ。ゆつくりと、酒でも飲みやれ。

ト身拵らへして、立ち上がる

松五　オイ親分、マアちよつと、お待ちなせえ。

源左　用があるのか。

松五　ちよつと、耳へ入れて置きたい事がありますよ。

源左　それでも、旦那をお待たせ申しては。

平馬　ナニ源左衞門、その方に仕殘した用事もあらば、身共は先へ參つて居るから、後からお來やれ。

源左　左やうなら、自由ながら一足、お先へお出でなされて下さりませ。

平馬　承知いたした。

松五　そんなら、旦那。

皆々　わしらも一緒に。

平馬　必らずともに、お待ち申す。

ト唄になり、平馬、向うへ入る。後、合ひ方。

松五　カウお前、本當に留守を頼むと、云はつしやるか。

源左　分らないものぢやねえか。日ごろ、兄弟のやうにも思ふお主の事だワ。

松五　男と見かけ、頼むとあれば、おらアちつとお前に折り入つて、云はにやアならねえ事がある。

源左　ムウ、改まつたその云ひ分、云はにやアならねえとは、そりや、何を。

トなに心なく聞く。松五郎、こなしあつて、チツと俯向く。源左衞門、床几にかけ

云ふ事とは、そりや、なんだ。

松五　外でもねえ、おとみどんの事よ。

源左　あいつが、どうした。

松五　こんな事は、云ふめえとは思ふが、それについてもお前は、きつい日ごろから大腹中、些細な事には構はぬゆゑ……こなたはなんにも知らねえの。

源左　ヤ。

松五　かう云ふ譯だぜ。

トちよつと囁き

ノ、ソレ、モウ〳〵、マアかうだ。

源左　べら棒め、馬鹿を云ふな。あれに限つては、そんな事があるものかえ。

松五　これサ親分、そんな事を云ふから、今まで云はずに居たのだ。

源左　カウ手めえ、そりや大かた、あれに無心でも云つて、彈かれた悔しんぼうであらう。おれだからいゝが、滅多な事を云ふなえ。ハヽヽヽ。

松五　ア、コレ〳〵親分々々、それだから、人に鼻毛を讀まれるのだ。川柳點にもある、旅の留守、內へもごまの蠅がつき……カウ、お前の目にかゝるやうな姐御でもねえ。然し、こんな事は聞かねえ方がいゝが、あんまりこんたが氣の毒ゆゑ。

源左　それぢやアこれぞと云ふ、證據でもあつての事か。

松五　親分にも似合はねえ、證據のない事を、云ひ出されるものかな。

源左　さうして、證據は。

松五　慥かなものは、この文だ。

ト以前の文を出す。

源左　ドレ、見せやれ。

ト文を取つて見る事あつて

それならさつき、平馬どのが執心の娘が親元、藍玉屋へ江戸から來て居る與三郎、もしもお鶴と譯があつて、平馬どのと緣組みが叶はねえのかと感ぐつたら、却つて燈臺元暗し、手活けの花のあのおとみと、ちゝくり合つてうしやアがつたか……ムウ。

トきつと思ひ入れ。

松五　今夜お前が旅立つと、跡へあいつをば引き摺り込み、日ごろの念を、さぞかし二人が。

源左　エヽ……それとも知らずにおめ〳〵と、今までよくも。

ト思ひ入れあつて、立ち上がり、キツと思案のこなし。

松五　子分のやつらに觸れ込まし、女は元よりあの野郎を、いつそこれから。

ト身拵らへする。源左衞門、止めて

源左　エヽ、馬鹿を云ふなえ。

松五　なぜ、止めさつしやる。

源左　ヘテ、これが世間へ流布すれば、源左衞門は恥の恥、たとへ二人を殺しても、穢れた面は、雪がれないわえ。

松五　ムウ尤もだ。さうして兄貴が、思案の底は。

源左　コレ。

ト松五郎へ囁く。

松五　そんなら、今夜の實否を糺して。

源左　アヽコレ、靜かに。

ト思ひ入れ。

松五　ホイ。

ト口を押へる。

源左　野暮な聲だぞ。

トこなし、よろしく、時の鐘の送りにて、道具、ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の屋體、本緣付き、尤も亭

座敷の模様。四谷丸太柱、風流なる切り出し欄間、砂壁、つのがら窓、縁側、木地にて縁の下をすかし、上の方、下地窓前づら、下の屋體内の横壁の張り物。上の方、下地窓の内襖にて出入り。正面、見付け。上の方、床の間。次に四尺ほどの袋棚、本宮に拵らへ、襖、開閉、銀張り光琳風の彩色畫。これに續き、後したみへ一面の張り壁、間に合ひ張り、和かな跳れ込み彩色畫。平舞臺、上の方、よき所へ鏽びたる石燈籠、この前のよき所へ好みの春の下草。土堤板へしかけもの、後に崩れる誂らへ。下手、四つ目垣へ早咲きの卯の花。その外、松、檜、かなめ、黐などの生花を植え並べ、正面の家體へ伊豫簾を下し、下の前へ出し、下の道具にある丸木の枝折り門を押し出す事。浪の音、時の鐘の送りにて、道具、納まる。

ト本釣り鐘、誂らへの獨吟になり、少し窓ぶたを下ろし、暗くする事。

〽わが妻を、戀ひそむ昔妹と背の、契りかたしく神の露、君が情に去りし世を、かこつの國に與つぎの。

ト右の文句の内へかすめて風の音、本釣り鐘。向うより伊豆屋與三郎、着流し、誂らへの褄ざしの脇差しをさし、中抜き草履、頬冠りし、以前の相生、羽織をたたみ懐中へ入れ、素足、雪踏かけ、誂らへの提げ燈籠へ火を點し、忍び〳〵出る體。與三郎、件の文を讀みながら出る。始終、心いきよろしくあるべし。この中に

〽うなる處女にくらべこす、操にあらぬ仇えにし。

ト花道、よき所にて

與三　コレ、お主が手引きで、おとみどのへもの云ひ交せば、猶さらに、思ひがまして今日までも。

相生　私しがお文の取り遣り、お媒介をしましたが、今宵は、

ト親指を出し

これが旅の留守。

與三　忍んで來てくれ、繁々と話しがしたいと送つた文……見れば凡夫の淺ましさ、心も空につい爰へ

相生　お連れ申して來たれども、モシ

ト燈籠を下に置き、指にて仕方して

寐る事は、今宵はよしになされませえ。

與三　いゝわえ、承知だよ。

トかすめて本釣り鐘。

相生　モシ、遅くなりますよ。

トせき立てる。

與三　お主は、爰から

ト歸れと云ふ仕方して

早く行かつし。

相生　モシ、今の一件、必らず二人、寐る事は。

與三　エヽ、早く行けと云ふに。

トきつと云ふ。

相生　ハイ。

ト相生、考へ、怖氣立ちし心にて、與三郎がさしてゐる脇差しを貸せと云ふ仕方して、どうぞ貸して下さりませと云ふゆゑ、與三郎、こりや、戻りの犬嚇しだと、このせりふは捨ぜりふの心にて工夫あるべし。

〽結びかねたる夢見草、人目の關路やう／＼と、戀の扉におとづれを。

トこの中、與三郎、こなしあつて、舞臺へ來る。相生、よろしく與三郎へこなしあつて、件の籠燈籠を袖に覆ひ、提げて、揚げ幕へ入る。與三郎、門口へ來り、思ひ入れして、門の戸をちよつとおとづれ

與三　おとみさん／＼。

ト小聲に呼ぶ。思ひ入れあつてホト／＼と叩く。此うちに正面の伊豫簾、あがる。爰におとみ、好みの着付け、狭き袱紗帶を前にしどけなく結び、二重、上の方に絹布の夜着蒲團、取り出し、片よせあり。六枚屏風、黑骨のすきや行燈へ明りを點し、好みの莨盆に長煙管、莨箱、小取りまはしなる肴の鉢臺、重行器の類、本道具に拵らへし燗風呂など、酒宴の用意した體。杯猪口など置き並べ、おとみは、以前のおきのが受け取りし返事の文を、繰りひろげ、讀んでゐる見得。右、始終、文句の中のよき程に伊豫簾、巻き上げる。

與三　おとみさん／＼。

ト又、こちらへ來て、音づれる。

とみ　アイ／＼。

ト思ひ入れ。與三郎、答へありしと、内の様子、窺ひ、こなし。

〽聞くに轟く胸の浪、立つや蘆間の風そよぐ。

ト與三郎、邊りへ思ひ入れ。おとみ、よろしくこなしあつて、さすが心とどろき、足もと踏みしめ、やゝ下駄を穿いて下りたち、門口へ來る事、兩人、よろしく

あるべし。

〽雲間を漏れて水の月、

ト門口を明け、兩人、よろしく顔見合はせ

とみ　與三郎さんか。

與三　おとみさんだの。

トこれにておとみ、こなしあつて

とみ　ようマア、忍んで……來て下さんしたなア。

ト手を取り、じつと思ひ入れ。

與三　首尾はいゝかえ。

とみ　アイ。

ト思ひ入れ。

〽顔見るからについそれと、思ひ餘りて言葉さへ。

トおとみ、與三郎を内へ引き入れる。與三郎は手拭を取り裾の塵を拂ふ事、よろしく、内の樣子を窺ひ、上の方へ行く。おとみは後の枝折戸を閉し、締りをつける、思ひ入れあつて、双方、顔見合ひ、氣味合ひよろしく、與三郎、おとみを引き寄せ、囁く。おとみ、こなしあつて、小聲の心にて

暮れぬうちから旅立ちゆゑ、何も氣遣ひはござんせぬ。

與三　よくマアお前、たゞ一人で……外に内輪の人たちへは。

とみ　間を隔てたるわたしが部屋、誰れに遠慮もないわいなア。

與三　さうか。

トこれを聞き、與三郎、につこり思ひ入れ。

〽何から先へいは躑躅、ほのめく露の仇名草。

ト兩人、よろしく、おとみ、與三郎を上の方へ廻し、二重の上へ手を引き、伴ふ事、兩人、右の文句一ぱいに、これを右の合ひ方になり。

成る程なア、緣と云ふものは、乙なものだの。いつか汐干の群衆の中、ふと目に付いた形かたち、いづくの人の女房と……ア、コレ、男と生れた高下には、どうぞあゝ云ふ女子と、思ふたが戀の病みつき、どう思つても主ある花と、心で心を苦しめたに、

とみ　その心根がとゞいてか、過ぎし汐干に見交はせた、多くの人とは水ぎはも

與三　立つか立たぬか、過ぐる夜に、話しの寄席で仇口もその禮文の返し事、筆に云はせて心のたけを。

とみ　さぞ厚皮な女子ぢやと、愛想もつかさずに、よくこれまで。

與三　ナニ勿體ない、愛想どころか。
とみ　エヽ、憎らしい、その口は。
〽ゆるむ心の濁り水。
　トさまゞゝ眞似して、寄り添ひ
申し、變る心はござんもまいな。
與三　ハテ、變る心はなけれども、云はゞこつちの迷ひから、お前に惡名つけさせる、それのみならず彼の人へ。
　ト思ひ入れ。
とみ　エヽ、今さらそんな。
　ト與三郎、立ちかけるを、おとみ、止める。これを
〽變るの文字は誰が書きそめし、どうで浮氣な水莖や、ちよつとつけざし參らせ候の、無理な手爾波も酒の科、味な妹脊の八重結び。
　ト右の文句のうちに與三郎、こなしあつて、立ち歸らんとする。おとみ、これを止める枷に、燗德利、猪口、下物など取り出す。おとみ、大きなる杯に一つ飮み、こなし、文句一ぱいに、振り、よろしく納まり
サア與三郎さん、お前も一つ、飮ましやんせ。
與三　イヽヤ、飮むめえ。
とみ　とは又、なぜえ。

與三　ハテ、主ある花が獨り寐のところへ、夜更けて來るからは、わしが心はよくゝゝなと、推量してくんなせえ……かうして逢つて、思ひのたけを云へば、わしも心が晴れた。
とみ　サア、それ程思つて下さんす心なら、今夜はせめて爰へ寐て、わたしが思ひも。
與三　イヤ、愁い爰に長居して、情を受けりや、思ひが增す。それよりはモウ、これぎりに……おとみさん、隨分達者で、お出でなせえ。
　ト件の脇差しを持つて、出にけるを、おとみ、止め
とみ　モシ。
〽えゝ胴慾な戀風が、仇に嵐と吹き亂す、まつはり解けぬ藤かづら。
　ト兩人、氣味合ひよろしく、口說き模樣の振り、心のこなしあつて、トゞおとみ、與三郎の持ちし脇差しをとり
さうぢや。
　ト死なうとするを、與三郎、慌て止めて
與三　カウゝゝ、途方もねえ。
　ト大きく云はうとして、心づき

危ねえ、よしなせえ〳〵。
ト小聲にて止める。おとみもいろ〳〵あつて
とみ　放しておくれね。
與三　ならねえ……よしなせえ。
トこの爭ひ、きまらず、兩人、よろしくあつて、トヾ
おとみ、ヂッとなつて死なうとする心意氣、與三郎、
ヂッと見やり、兩人、氣味合ひあつて
どうでもお主は、死ぬ氣だな。
とみ　アイ、知れた事いなア。
與三　ヤ。
トこれより誂へ、變つた合ひ方。
とみ　思へば〳〵恥かしい、文で明したわたしが心根、配遇ふ人や内外の者へ、機嫌、氣づまをそれ〳〵に、面白をかしう取りおふせ、憂を忍ぶもお前を頼り、嬉しく逢ふ日を待つ甲斐もなう、あんまり氣强いお前の心根、此まゝ別るゝくらゐなら、今まで苦勞はなんのせう……モシ、どうぞ死なせて下さんせいなア。
ト思ひ入れあつて云ふ。與三郎もじつと思ひ入れして
與三　そんなら、女の操を破り、義理ある男を見かへるのみか、命を捨てゝ、おれへの心中立てる心か。コレおとみ。
とみ　アイ。
與三　心底、見えた、死ぬるには及ばぬ。
とみ　エヽ。
與三　コレ……も一つ、注ぎやれ。
とみ　アイ。
トあり合ふ此前の、さしたる盃を取り上げるゆゑ、おとみ、酒を注ぐ事。與三郎、ぐつと呑む。
〽思はせぶりに短夜を、仇に明かして三布蒲團、男心の氣づよさも。
ト此うち兩人、よろしくこなしあつて、與三郎へおとみ、囁く。與三郎、思ひ入れ、件の二重へおとみ、蒲團をしき、夜具を擴げる事。與三郎、もぢ〳〵と、手酌にて酒を注がんとするを、おとみ、止めて、トヾ床の上に寄り添ふ。兩人、よろしく右の文句一ぱいに納まる。
與三　どうするものか。併しかうなる二人が仲、いつがいつまで。
とみ　義理ある人にも、すべよく別れ、行く末ながう連れ添ふ心、よもや見捨ては。

與三　見捨てはしねえが、其うちに、どうかお主に、
とみ　エ。
與三　殺されさうだ。
トおとみ、エ、と抓る。兩人、氣味合ひよろしく、おとみ、上着、ぬげて長襦袢、兩人、こなしあつて、床の上へ上がる事。
〽窓の夜雨にしつぽりと、移り香のこる枕紙、解けて嬉しき卯の花の雪。
ト兩人、よろしく屏風を引き廻す。これにて伊豫簾を下ろす。時の鐘、合ひ方になり、下手より以前の松五郎、窺ひ出て來る。上の方の枝折りの外よりおくま、以前の形にて窺ひ出て、左にちよつと透し見て
松五　誰れだ／＼。
ト小聲に云ふ。
くま　海松杭さんか。
ト小聲に云ふ。
松五　おくまか……お主は内の樣子を見て、知つたか。
くま　お聞きよ、旦那が立たつしやると、その跡は、若い衆に小遣ひを持たして、遊びに出しをつてな、乙な鹽梅だと氣取つたから、態とわしは、息子が宅へ行くから、今夜は歸りませんと、早う内を出て、樣子をこつそり、物置きで聞いてゐたが、なんでも彼のが。
松五　そんなら、與三郎が、來てゐるか。
くま　部屋の樣子を窺つたら、忍んでゐるに、違ひはないよ。
松五　よし／＼、こつちも、源左衞門どのに云ひつかつた、手筈があるワ。
くま　さうして、手引きをした奴はの。
ト云ひかけるを
松五　マア／＼、それさへ聞けばいゝ……お主は、爰にゐては惡い、早く行かつせえ。
くま　それぢやア、後でまた話さう……ヤレ／＼、とんだ騒動を、おツ始めたなう。
ト下手へ入る。小凄き合ひ方になり、家體の伊豫簾を捲き上ぐる。爰に屏風、立て廻し、與三郎、おとみの帶、屏風へかゝり、行燈を屏風の外へ寄せてある事。
右の合ひ方にて枝折の外へ松五郎、窺ひ寄つて
松五　オイ／＼、おとみさん／＼……おとみさん／＼。
ト枝折を叩く。これにて屏風の内、驚ろきし物音して、くり開く。と又、外に叩く事。爰に與三郎、帶ひ

ろどけ下着、おとみは長襦袢、下締めの細帯、解けし體、兩人、驚ろき、起きて、うろたへる思ひ入れよろしく、與三郎、慄へ／＼起きて、狼狽へながら帶を探す。此うちおとみ、行燈の明りを消し、暗がりの仕組み、兩人、よろしく、與三郎、帶を探り取り、うろたへ締める事。おとみ、下締めを探す心にて、手にからむ枕元の打ちかへ仕立ての肌の守りが手に觸はるゆゑこれにて長襦袢の上締めして、枕元の下着を引つかけ、立ち上がる。此うち外にて松五郎、あせりながら叩き立て

オイ、ちよつと用だ。おとみさん／＼。

ト叩く事。おとみ、右の間に下りたち

とみ　エ、モウ、忙しない、今ごろ、誰れだえ。

ト云ひながら與三郎へ囁く。與三郎戸棚へ隱れんと探り／＼て、袋棚の襖を開けて、中を探る。内に物あつて忍び兼ねるゆゑ、下の方へ行く。この所、壁ゆゑ、また上の方へさぐり行く事。此うち外には、内より明けぬゆゑ、強く押す事、開きの壺、拔けて、バッタリ音して、松五郎、バッタリ轉げ込む。おとみ、思ひ入れ。

エ、、誰れだえ。

松五　わしだよ。

とみ　今ごろに、なんの用で騒々しい、寢てゐるものを。

松五　オ、、よく寢たらう、しかも二人で。

とみ　エ、。

トこの以前より源左衛門、上の方　襖を開き、窺ひ居て、この時、與三郎、上の方へ行く。突き廻し、双方一度に

源左　いけ泥坊め、動きやアがるな。

ト與三郎、おとみ、ぎよつと思ひ入れ。この時、以前の子分丈助、段平、藤六三人、手燭を持ち、上、下より出て、明りを差し出す。これにてみな／＼、顔見合はせ

とみ　ヤ、、どうしてお前は。

ト源左衛門の顔を見て、ハッとさし俯向く。

與三　そんなら、主の

子四　源左衛門さまだワ。

與三　エ、、、、……ホイ。

ト慄へて、どつかり思ひ入れ。

源左　さてこそ、われが。

ト きつと云ふ。この聲に與三郎、堪らず立ち上がり、駈け出さうとするを、止めるを、ちよつと振りほどくを、立ち廻つて、見得よく引き据ゑる。松五郎はおとみを押へる。源左衞門、兩人の眞中へどつかりと座して

大それた二人の奴ら、どうするか、見やアがれ。

ト きつとなる。これにて双方、引つぱりの見得。

ト 知らせにつき舞臺前、よき所へ一面の浪幕を振り落す。ト 浪の音になり、上の方より若い衆の漁師、褌の筒袖、栗下駄にて、酒樽を提げ、竹の皮包みなどを繩にて結び付け、三人ほど出で來たり

船一　なんと儀八、今日で三日の船がゝり、やうやう南が晴れたから、今夜にもふけるであらう。

船二　さればよ、追ひ風を待つて一走りと、前祝ひの酒盛りに、肴を買ふたが、まだ何やら忘れたやうぢや。

船三　イヤモウ、何を買ふにも、土地の勝手は知れず、夜更けではあるし。

船一　酒さへありや、それでいゝとして、早く船へ、歸らうぢやあるめえか。

船二　ソレ／＼、氣を付けて行かつし。礒先へ行くと、また浴びるぢや。

船三　なんにしても、風が強くなつて來た。もうかれこれ潮明けであらうなア。

船一　さうよ、九ツ半でもあらうか。

ト 矢張り浪の音にて、橋がゝりより若い衆の船頭三人、出で來たり

三人　コレ／＼、貴さま達は、天神丸の若い衆ぢやないか。

船一　慥かに、天神丸の若い衆ぢやな。

船二　さう云ふこなたは、專治丸の

兩人　親仁さんぢやごんせぬか。

船一　オヽ、よい所で逢つたが、貴さま達を、迎ひに來た。その譯と云ふはかうぢや。いま貴さまの所へ、長脇差し手合ひが、七八人舞ひ込んで

船二　何を尋ぬるのか、めつた無性、亂暴ぢや。

船三　なんでも、怪しいから、海賊ではあるまいかと、樣子を開けば、女の事ぢやげな。

船二　その女を、埋んだと云ふから間違ひ。

船三　なんでも、急いで歸らう。

三人　サア、ござれ／＼。

ト皆な／＼、上、下へ別れ入る。知らせにつき浪幕、切つて落とす。

本舞臺、向う一面、中遠見、海面の闇ぼかし。前の手摺り、地がすりへ浪の打ち寄せに、左右、蘆の茂み。眞中へ誂らへの蘆原。この後、あふりかへし、人の飛び込む仕掛け。日覆ひより松の釣り枝。東西の窓蓋を下ろし、すべて濱邊の物凄く、浪の音にて道具、納まる。ト向う、バタ／＼になり、おとみ、此前の形の上、綻び、千切れたる下着を引つかけ、つまみを取つて逸散に走り來て花道に躓く。

とみ　闇路を幸ひ、逃げ延びては來たれども、心にかゝるは與三郎さん、逃げ延びて下さんしたとは云ふものゝ、深手の惱み、多勢に一人の非力と云ひ、とても命は風の灯火。これも誰れゆゑ、心の鬼が身をせめて、ひよんな憂目に遭はせしも、わたしが科。たとへその場は逃げ延じても、生き延びる心ぢやない。モシ與三郎さん、堪忍して下さんせ。コレ、こゝから拜んで居るわいなア。

ト両手を合はせ、ハアと泣き落とす。バタ／＼と足音するゆゑ、おとみ、これに驚ろき、思ひ入れあつて又もや追手の樣子を云ひ、生き恥をかゝうより、オ、さうぢや。

ト立ち上がり、身繕ひして、舞臺へ窺ひ／＼行くを、大バタ／＼になり、向う揚げ幕より松五郎、逸散に出で來たり、おとみ、ぶる／＼慄へて歩かれぬ思ひ入れ。松五郎、窺ひ／＼する事。危ふくすれ違ふこと二三度あつて、トゞおとみ躓く音に、松五郎、さぐり當てゝ

松五　あまめ、逃がさねえぞ。

とみ　お前は松さん、見遁がして下さんせ。

松五　ナニ、見遁がしてくれ……さう巧くは行かねえ。よくも親分の面へ泥をなすつたな。まだそればかりぢやねえぞ。うぬが心に、覺えがあらう。サア、うしやアがれ。

とみ　イエ／＼、死ぬる覺悟で出たからは、一寸も歸られぬ／＼。

松五　エヽ、強情などらあまめ。常が常なら、情の道も知つてはゐるが、かうなつたら、日ごろの可愛さ餘つて、憎さが百倍、無駄を云はずと、歩みやアがれ。

とみ　そんなら、日ごろの事を根に持つて

松五　知れた事だ。われが體は、親分に貰ひ受け、一寸だ

めし刀の銹、不憫な奴は與三郎、よつてかゝつて斬りさいなみ、もう今ごろでは、くたばつたらう。それで心の雲も晴れ、これからわれが心の据ゑ所、云ふ事さへ聞くならば、われが命は助けてやるワ。

とみ　エヽ、穢らはしい。與三郎さんに憂目を見せ、おめおめ生きて居られうか。主が死んだと聞くからは、この世に心が殘らぬこの身。死んで、未來で云ひ譯を。

松五　エヽ、執念深く情を立てゝも、一寸さきは闇の夜だ。死んで行くさき、未來とやらが知れうか。おれと一緒に、マア來やれ。

　ト手を取る。

とみ　エヽ、放しなさんせ。

松五　そんなら、どうでも云ふ事を。

とみ　ふつ／＼お前は、嫌ぢやわいなア。

松五　さう云や、いつそ。

　ト切りかける。立ち廻りよろしく、浪の音、葛西念佛になり、おとみ、礫を取つて、打ち付ける。松五郎ふり拂ひ／＼、おとみの後へ廻り、しつかり組み付く。この時、下着、脱げて、松五郎、頭へ被る。おとみは手早く松五郎を突き退け、後の蘆間へ飛び込む。水の音、ドンとして、水煙、パッと立つ。松五郎、この音に驚き、被りし下着を引きめくり、其まゝキッと見込み、やはり波の音にて、この道具、廻る。

本舞臺、元の二重の道具へ戻る。爰に源左衛門、褥を敷き、二重に腰をかけ、左右へ大燭臺、蠟燭を照らし、拔き身を緣端へ突き立て、ギヤマンのコップを持つて、酒宴の模樣。靑貝へ肴鉢、丼、大平鍋、その外の道具、いろ／＼置き並べあり。平舞臺、眞中に與三郎、半面、血汐によごれ、體に太刀疵、惣身、血まぶれにて、細引きにてぐる／＼卷き、亂髮にて倒れゐる。左右に丈助、段平、市助、藤六、拔き身にて立ちかゝり居る。誂らへの合ひ方、時の鐘、鷄の聲にて、道具、納まる。

四人　親方、なんと、いゝ態ぢやござんせぬか。

源左　あら方こいつも半殺し、この蠟燭で面を見ろ。色氣も戀も覺めたであらう。見りやア見る程、みじめな態だなア。

丈助　さうさねえ。生ッしらけたしやつ面だが、ずた／＼に疵だらけ、今では二目と見られねえ。これぢやア三年

の戀も、覺めるであらう。

段平　さうよ……これからは、寄つてたかつて試し物、おれが刀も、値打ちがあるわえ。これで、蟲が落ち付いた。

藤六　とうからこいつは評判で、男のよいのを鼻にかけ、女たらしも斯うなつちやア。

市助　もうお陀佛と往生するのだ。わりやア僅かの娯みで、業恥を曝しやアがる、いくぢなしめえ。

源左　カウ黒淵よ、どうか手こねたやうだなア。

四人　何さ、まだ〳〵これぢや、死にきれめえ。

ト此うち丈助、二重の大蠟燭を取つて、與三郎の側へ行き、段平、市助、百藏、三人して與三郎を引き起し丈助、蠟燭の火を額の先へ出して

丈助　どうだ野郎、思ひ知つたか……コレ、物を吐せ。エエ、だらけやがるな。

段平　なんとマア、圖太い野郎めだなア。

源左　どうだ、息はあるか、その蠟燭で、面を焦せ。

丈助　成る程、こりやアいゝわえ。

ト丈助、蠟燭を額へあてようとする。風の音して、消ゆる。

エ、、忌々しい。その蠟燭を。

ト取らうとする。源左衞門、思ひ入れあつて

源左　明りが消えちやア眞暗だ。ドレ、おれが。

ト與三郎の側へ行き、此うち丈助、蠟燭へ火を移し、源左衞門が側へ持つて行く。源左衞門、とつくり見て蠟燭にて片頰を燒く。これにて動く事。

皆々　野郎め、しつかりしやアがれ。

トこれにて與三郎、目を見開いて、こなし。

源左　どうだ、苦しいか。成る程、變つた面だなア。

トこなし、誂らへの合ひ方。

ヤイ與三郎、今となつちやア思ひ知つたか。この木更津で隱れのない、赤間の源左衞門と云はれちや、鬼でも恐るゝ男と知らず、なま若輩な分際で、よくもこの面へ、泥をなすつたな。間男の成敗、これぢやア骨身に堪へたらう。コリヤ青二才め、よく開けよ。うぬばかり憂目は見せぬ。事の起りはあのあまだ。情の罠に罹つたが、因果同志の深い仲、これからあまめもしよびき出し、料理の仕やうは種々さま〳〵。並べておいて鱠り斬り、泣き面かはかし、その上で、この段びらをうぬがどん腹、それがこの世の別れの盃。これを肴に、酒でも飲まう…

…段平はじめみなの者、相手になつて、一ぱい飲みやれな。

丈助　何かに屆く、親方の志。

段平　切り身の鹽の、ずた／＼生酢。

市助　それを肴に、酒盛りは

藤六　こりやア格別、味からう。

四人　サア／＼、遠慮なしに始めろ。

　トまた杯を取り上げる。丈助、酌をする。

源左　ドリヤ、これから、樂まうかえ……くたばりかゝつた鹽梅を見りやア……ア、、氣障だなア。

皆々　ハ、、、、。

與三　その腹立ちは理ながら、命を果たすも覺悟の上、未練ではあるけれども、定めし、わしが身の上を知つてもござらう。云ふに云はれぬ譯あつて、それを知りつゝ江戸での放埒、この木更津の南町、藍玉屋の内へ預けの身の上。江戸には揃ひし二親の、勘當受けた譯でもなし、それにつゞいて諸親類、この始末を荒立つて、二親へ聞かせるも、不孝のみか世間の聞え。これ程にさいなんだら、こなたの顏も立たうから、苦痛をさせずと一思ひに、男らしくすつぱりと、なぜ殺さねえ。嬲り殺しは非道な仕方、それとも腕がたまつたのか、男を研く性根なら、怖ずと立派に殺さつせえ。助かる心は微塵もねえ。氣後れすりやア恥の上塗り、サ、すつぱりと、殺さつしやい。

源左　引かれ者の小唄とやら、血迷つて、さま／＼のたは言。コレ、よく聞け。いま一思ひに殺したら、うぬが勝手はよからうが、それぢやアあんまり曲がねえ。青二才で不憫だから、少しも娑婆の風にあて、ピコ／＼するも僅かのうち、死急ぎをしねえでも、どうでわりやア、たばる身の上。二親があらうとも、うぬが親なら犬畜生、義理も法も知りはしめえ、人並みらしい口巧者、默つて居やれな。くたばりかゝつた分際で、源左衞門が手の裡を、鈍つたと吐したな。コリヤ、その頰桁を、からしてくれるワ。

　ト又片頰を貫く。與三郎、苦しむこなし。

うぬは、この月玉で、迷はせたか。

　ト眼元を突く事あつて

イヤサ、このしやつ面でか。エヽ、癪に障らア。

　ト刀にて顋を擧ぐる事あつて

見りやア見る程まじ／＼と、いつその事に、からう／＼から／＼。

トさん〳〵に切りさいなむ事あつて

ア、これでちつとは胸が透いた。これからうぬを簀巻きにして、果ては海の藻屑となり、磯端へ打ち上げられ、犬や鳥の餌食となれば、定めしわれも本望だらう。面を見るのも穢らはしい、よく〳〵因果な、劫つくばりめ。

トきつとなつて、唾を吐きかける。トばた〳〵になり、向うより松五郎、走り出て來たり

松五　オヽ親分、爰に居やんしたか。

源左　手めえの歸りを、待ち兼ねた。さうして、あまを連れて來たか。

松五　親分、聞かんせ。あれから直に、磯端へ追つかけたら、あいろも知れぬ眞の闇、たうとうおとみを引ッ捉へ、さすが女も一生懸命、ぎしやばり廻るを騙しても、どうして〳〵動かねえ。暫く爭ふその暇に、ざんぶり浴る高波に、ハッと一聲聞えたが、定めしおとみが身を投げたと、めつた無性に探しても、かい目あとは白波と、松ふく風の音ばかり、それで女は、玉なしよ。

源左　業つくばりの、どちあまめ。くたばつたに違ひあるめえ。よし又、その場を助かつても、おれが眼の黑いうちは、貧乏ゆるぎもさしやアしねえ。

松五　さうして、與三郎はどうしやした。

源左　相手の野郎は、ソレ、そこに。

松五　ドレ〳〵。

ト與三郎をよく〳〵見て

アヽもうはや參つたな。

與左　まだ死にきるところへは行くめえが、なんにしても、女を玉なしにしちやア、事が面倒だ。せめて彼奴が居たならば、叩き責めて殴いせと、思つた仕事が間違つた。

松五　ハヽア、それぢやア、殺す心は無かつたのだな。

源左　知れた事よ。あいつを賣つたその金で、また樂みが出來る積りよ。エヽ、これと云ふも、二才野郎め、憎さも憎し、息あるうちは目障りだ。もう殺してもよい時分、いつそおれが、引導を。

ト刀を振り上げ、切らうとする。松五郎、止めて

松五　コレサ親分、マア待ちなせえ。

源左　なぜ、止めるのだえ。

松五　さればサ、短氣は損氣、おとみはさつぱり種なしだが、まだ〳〵野郎は半殺し、蟲の息でもあるこそ幸ひ、

南町の藍玉屋の宅へ持ちかけて。

源左　それをどうする。

松五　下だり蘇坊の賣り物と……コレ。

ト囁く。源左衞門、いち〳〵聞き取り、思ひ入れあつて

源左　それぢやアこいつを玉にして

松五　百兩ぐらゐは、大丈夫サ。

ト指を出して見せる。皆々、これを見て、さてはと心づき

源左　成る程、こりやアいゝ思ひ付きだ。今から藍玉屋へ押しかけて。

松五　然し、野郎を菰包みにして擔げば、雜作もねえ。

丈助　少しこの方で、仕事をしよう。

源左　納屋へ行つて、空俵を持つて來い。

段平　そいつが一番、手ッ取り早い。

松五　序に、棒も持つて來い。

市助　合點だ。

ト上手へ入る。

源左　コリヤ海松杭、御苦勞ついでに、野郎の始末を、頼んだぞよ。

松五　こんな事は、朝腹茶漬け……丈助、手傳つてくりやれ。

丈助　オットよし〳〵……思やア、をかしな理窟だなア。

ト云ひながら與三郎を引き立てる。松五郎、與三郎の耳へ口をよせて

松五　コレ與三郎、親分を賴んで、われが命を、助けてやるぞ。手めえ、よつぽど、命冥加な者だなア。

丈助　それに就いても、おとみは海へ飛び込んだが、手めえゆゑにくたばつた女だ。念佛でも云つて遣れサ。

松五　エヽ、餘計な事を云ふなえ。

丈助　オヽ、違えねえ、ちつと差しだなう。

松五　差しと云やア手めえ、かつぐか。

丈助　ソリヤ、どうでもしやせうよ。

源左　後の奴らは、何をして居やアがる。

ト時の鐘、合ひ方にて、上手より段平、百藏、米俵と天秤棒を持ち出て來る。

段平　オイ、松哥兄、これでいゝかえ。

松五　よい物があつた。口を切れ。

丈助　よし〳〵。

松五　段平、ソレ、足を持たつし。

三人　行かうか〳〵。

ト松五郎は與三郎の胴を抱へ、段平は足を持つて、後の三人、これを取りまき、此うちに吹き替へ、好みの通りの拵らへにて、皆々、俵の中へ荷ひ込んで、少し首ばかり出して、繩にてからげ、天秤棒を突き通し

四人　そんなら親分。

松五　これから直に、藍玉屋の內へ。

源左　色で商ふ下だりの蘇枋、その賣り主の代物は、然も赤間の源左衞門、極色よしの血まぶれ仕事。

松五　その染め賃は……小判で百兩。

源左　言葉の澤張り、すべよく行きやア

皆々　その時ずつしり。

源左　コレ、

ト本釣鐘。この時、市助、百藏、俵をかつぐ。

しつかり劫を、強くしやれよ。

トこれにてチョンと知らせにつき、淺黃幕をかぶせる

ト直ぐに褌のツトメになり、上手より以前の相生、繩にて縛られし體にて、其まゝ逃げ出すを、おくま、追つかけ出て、繩の先を捉へ、引きとめて

くま　逃がさねえぞ〳〵。

相生　放さつせえ〳〵。

くま　どうして〳〵、手めえを逃がせば、こつちがしくじるワ。太え奴だ。われがみんな此やうな、騷動をおッ始めたのだ。この起りは、手めえだ〳〵。

相生　べら棒め、うぬが喋舌りやアがつたから、こんな目におれが遭つた。やう〳〵と脫けて來たのだ。今つらまれば、直に殺されるワ。放せ〳〵。

ト足にておくまが手元を蹴上げ、逃げ出すと、おくま繩の端にて、たぐり寄せ

くま　こいつは、足の働く奴だな。

トまた駈け出すを、引き戾す。立ち廻りよろしく、トド相生、このはずみに繩、切れる事。

うぬ繩を切つたな。

相生　繩が切れゝば、われには恨みが。

くま　逃がさねえぞ。

相生　なにを。

ト立ち廻り、短くあつて、おくまを當て、相生逸散に橋がゝりへ入る。

くま　逃がしやァしねえぞ。

ト褌のツトメになり、後、追つかけて入る。ト後、波

の音になり、淺黄幕、切つて落とす。

向う一面の波幕になる。波てすりよろしく飾りつけてあり、この時、上の方にて

船三　エイサツサ〳〵。

ト三人とも、船頭にて、柿の筒袖、艪櫂を立て、船の舳の方へ誂らへの苫を覆ひ、船舷脇べりを入れて、好みの押し送りの漁船にて、出で來たり

船一　風がいゝ、急げ〳〵。

三人　エイサツサ〳〵。

トこの船、よろしく仕掛にて揺れて、浪の上を漕ぎ行く模樣。浪の音、はげしく、早笛にて、向うより波布給心に被りしおとみの吹き替へ、髪、振り亂し、手足をもがき、浪の間より黒髪、襦袢などヒラ〳〵出て、浮きつ沈みつ流れ來る模樣、花道を引き幕にて引く事中ほどまで來るうちに、皆々船頭が沖を見る心あつて

船二　アレ見やれ、赤いものが流れるワ。

船一　違ひなし、アレ〳〵向うを。

三人　流れるワ〳〵。

トこれにて浪幕を切つて落とす。

本舞臺、向う一面、奧深に木更津沖、海の遠見。舞臺、よき所に苫舟一艘かゝり、かすめて浪の音、コイヤイにて道具、納まる。

ト直ぐに件の苫を上げ、爰に和泉屋多左衞門、ふけたる町人の拵らへ、旅形、かたへに荷物あり。供男一人控へ居る。多左衞門、水死の者へ眼のつきしこなし。はやめし合ひ方、浪の音をあしらひ

多左　オ、……アレ〳〵浪間に漂ふは、黒髪をふり亂し着類はたしかに女の樣子、まだ死にきらずに浮きつ沈みつ……身投げの者か、海賊の手に打ち込まれしか知れねども、助ける仕やうはあるまいか。

船三　アレ〳〵、だん〳〵爰へ。

多左　コレ船の衆、働いた〳〵。

船三　合點だ。

ト此うち右の吹き替へ、花道に浮きつ沈みつして、花道際よりちよつと浮き上がり、艪櫂を入れる事よろしく、早めし合ひ方、浪の音。

皆々　しめたぞ〳〵。

多左　船へ、揚げた〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト浪の音、波煙はげしく、おとみ、上着ぬげ、長襦袢本水に濡れ、髪、振り亂し、手負ひし體、苦しみしながら半身、現はれる、

多左　さてこそ、女だ。

トそつと引き上ぐる事。おとみ、船へ上がる事よろしく

たしかにこれは刀疵……コレ、氣を確かに持たつせえ。

ト呼び生ける。これにておとみ、ちよつと眼を開くる事。

心をたしかに、コレ女中。

皆々　女やアい〳〵〳〵。

ト呼び立つる。おとみ、弛みしこなしあつて、がつくり落ち入る。多左衛門、この體を見て、こなしあつて

多左　そんなら、息が。

ト云ひながら、腹へ卷きし守り袋を見つけ、手をかけてこなしあつて

ムウ、若しやこれにいづくの誰れと、確な證據の手がゝりが。

ト件の守り符の切れをよく〳〵目を付けて見て

どうやら覺えの。

ト思ひ入れ。

皆々　エ。

ト見やる。多左衛門、守り袋を其まゝおとみの懐中へ入れて

多左　ア、コレ、なんにも云はずと。

ト手早く棄の金を紙に捻り、皆々の方へ出して見せて

ソレ。

ト皆々へ投げて遣る。チヨンと木の頭。

船をやらつせえ。

トこなし、皆々艪を立てる。おとみ、ばつたり落ち入る。多左衛門、守りを取り上げ見ろこなし。これをきざみ、一聲、波の音にて、

ひやうし幕

三幕目

吾妻明神の場

源氏店妾宅の場

役名——和泉屋多左衛門。同妾、お富。藍屋娘、お鶴。伊豆屋與五郎。番頭、藤八。下男、權助。

下女、お米。金神長吉。手代、清八。隼人妻。小笹。綾瀬主水之正。下女、お福。山鹿毛平馬。蝙蝠安。切られ與三郎。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて石の片鳥居、これに續き玉垣。ずつと上の方へよせて連理の樟の若木。この邊り、埒を結び廻し、件の建て札、石燈篭、玉垣。爰に吾妻大明神と記したる奉納の幟四五本、立て、これに續き、低き土堤の張り物。この後御手洗の水の流れを見せ、この上へ誂への藤棚、松の花ざかりの體。下手に藤の實木。この傍に掛け行燈、出茶屋の出し臺、葭簀たけかけ、土堤づらへ四つ目垣。この後、一面に淺黄幕。すべて相州鎌倉、大磯と梅澤の間、吾妻明神、神の宮の體。舞臺に床几二三脚、こゝに若い衆の仕出し大勢、思ひ／＼の拵らへにて床几にかけ、茶屋男一人、みな／＼へ茶を汲み出して居る。大拍子の鳴り物にて、幕明く。

茶屋　これは／＼、どなたも、よく御參詣でござりまする。マ一つ、お茶あがりませう。

ト　めい／＼茶を汲んで出す事。

仕一　アイ／＼……サア、みな飲まつしやれぬか。

仕二　盆のまゝ、そこへ置きなせえ。

茶屋　ハイ／＼。

ト盆の茶を置いて

御緩りと、御休息なされませ。

仕一　アイ／＼、構ひなさんな、忙がしからうに。

茶屋　左やうでござりまする。大さうな、お參りでござりまする。それに又、川向うには、大芝居がござりまする殊の外の、大入りぢやさうにござりまする。

仕三　成る程、そのせいか、爰の神の地までが、繁昌ぢやてなう。

仕二　さうぢや、爰な吾妻さまも、御利益があると見える

仕一　大さう近年は、賑はしくなつたではござらぬか。

仕三　サア、これと云ふも、願が利くからのことでござる

仕四　さうぢや／＼。女が男を思ふて、色ごとの願ひをかけると、直に御利益があると云ふ、云ひならはしでござるて。

仕三　兎角、色氣の世の中だなア。

仕三　それでは、わしらでも、お參りしたら……なら太郎兵衞。

仕一　今に色ごとで、喰へるやうになるかも知れぬわいの

仕三　時に、これからは、喰ひ氣の方へ趣いて

仕四　そこで一つ、遣りかけうかの。

仕一　それでも、店をかうしておいては。

茶屋　イヤ、大事ござりませぬ……今朝から、大ぶん儲けましたから、祝ひに一つ。

仕二　やりたいと云はつしやるは、余ほど正覺坊と見えるわえ。

皆々　サア、來さつしやい〳〵。

トみな〳〵、先に茶屋男、手桶を提げ、捨て臺詞よろしく橋懸りへ入る。ト直に三味線入り大拍子になり、向うより和泉屋娘おつる、町風、ふり袖娘の拵らへ、およね、下女の拵らへ、日傘をさしかけ、この次へ金神長吉、廣袖の一つ着、襟に手拭をまき、柾の下駄、花の枝へ土産物の烏帽子籠を三つばかりつるしたるを擔げ、この後より下男權助、ぼつとせ鬘、好みの布子、股引、風呂敷包みを背負ひ、同じく土産の菓子袋二つばかり、竹にて拵らへたる蝶々をかたげ、出て來たり花道にてみな〳〵こなしあつて

長吉　和泉屋のお姉さん、珍らしく今日は、お出かけなされましたね。

よね　どなたさんぢやと思ふたら、内へ出入りの、金神長五郎さんの息子さん。

權助　お頭の長吉哥兄、恰度いゝ、一緒に行きなせえ。

長吉　アイ、お供をしやせうよ。

つる　なんであらうと、鳥居まで。

よ權　マア、御休息なされませ。

ト右の鳴り物にて、みな〳〵舞臺へ來る。

權助　サア〳〵おつるさん、この床几で、緩りとお休みなされませ……ヤ、茶屋めが、店を明け放して、居らぬわえ。ドレ〳〵、自身に汲んで、飲んで來ませう。

トよろしく捨て臺詞あつて、みな〳〵床几へかける。

よね　アレおつるさん、御覧じませ。時も時とて、藤の盛り。

つる　ほんに、美しい事ぢやわいなう。

ト此うち長吉も腰をかけ

長吉　モシ〳〵お嬢さまえ、お前さまも、この吾妻さまへ御參詣でござりまするか。

づる　アイ、お參りしようと思ふて、來ましたわいなう。

それはさうと、この子とした事が、賢いやうでも頑是な

う。

權助　左やう〳〵、おつるさんを見つけて、お孃さん〳〵と、内の娘御と思つてゐるわえ。

よれ　エ、モ、お前もづけ〳〵と、おつるさんは、内のお娘御も、同じ事ぢやわいなア。

權助　そりやモウ、娘御も同じ事は、こなたが云はねえでも、知れてある。振り袖で居なさるから娘……今に嫁入りなされて、眉毛を落せば、年增となる。

よれ　エ、モ、そんなてんがうを云ひなさんすな、このおつるさんはな……和泉屋の爲めには、跡取りのお孃さんも同じ事。先だつて、笹目ケ谷へ御隱居なされた、大旦那のお配遇、去年おなくなりなされた御新造の爲めにはたつた一人の娘御さまぢやわいなう。

權助　一たい、あなたは木更津の、藍玉屋善右衞門さまのお娘御なれど、どうした事にか、この鎌倉へお出でなされて、もう今年で三年越し。

つる　それと云ふも木更津に、據ない譯あつて……ほんにモウ、思ふに任せぬ事ぢやわいなう。

よれ　これはしたり、おつるさん、其あなたのお願ひを

權助　叶へる爲めに神詣で、よく御信心なされませ。

よれ　爰の吾妻の明神さまは、橘姫さまをお祀り申し、殿御は妻を戀ひ慕ひ

權助　女子は男の爲めに、心中だてゞもしましたのかえ。

つる　殿御の爲めには命をかけ、操正しい其お方を、爰へ崇めて明神さまと……妹脊の仲を結ぶの神さま、お守りなさると聞くゆゑに、戀しいお方に

よれ　早う、御縁組みをなさらうと、お勸め申した、今日のお參り。

權助　さう云ふ事なら權助も、吾妻さまを信心して、女の方から思はれる、御利益を受けずばなるめえ。

長吉　モシ〳〵お孃さん、御願がけがあるならば、少しも早くお參りをなされませ。

つる　オ、よう云ふて下さんした。

よれ　少しも早く、御神前で

つる　この身に積るお願ひを。

權助　おいらは、お百度を上げうわい。

長吉　そんなら、おつるさんの爲めにかえ。

權助　サア、おつるさんの爲め、權助の爲めに。

つる　ほんにをかしい

兩人　權助どんではあるわいなア。

長吉　モシおつるさん。
よね　サア、お出でなされませ。
ト右の鳴り物になり、おつる、およね、長吉、權助、跟いて上の方へ入る。
ト「鎌倉みたか、江戸みたか」の唄になり、向うより伊豆屋與五郎、一本差し、旅形り、脚絆がけ、褄からげ、合羽にて出る。後より手代淸八、供の拵らへ、柳行李と風呂敷包みを割りがけにして、これを擔げ、菅笠を持ち、出て來たり
淸八　モシ與五郎さま、日は永いではござりませぬか。
與五　さればサ、今朝、ゆる／＼と立つたから、日の暮れる迄と思つたが、大きに早かつた。
淸八　しかし、お草臥でござりませう……向うの鳥居さきで、一服して參りませうか。
與五　ムウ、それがよからう。
トこんな事を云ひながら、兩人、舞臺へ來たり、床几へかけ、捨て臺詞あつて
淸八　時に若旦那、いつも鶴が岡の太々講の時は、津の國屋が定宿でござりますが、なぜ今日は、外の宿をお取りなされまする。
與五　ハテ、それには、少し譯があつて、どうで四五日はこの鎌倉へ逗留せねばならぬ。雪の下へ見たてゝ、宿を取らうとは思ふたが、今夜は、この大磯へ泊つて、少し聞き合せたい事があるゆゑ、マア、その譯は、今夜ゆつくりと話さうが……お主は、早くそこらで、宿を取つて貰ひたい。
淸八　ハイ／＼、それでは私しが、どこか綺麗な内を見立てませう。さうして、お前さまは。
與五　休息した上で、この吾妻の明神さまへ、參詣して行く積りよ。
淸八　モシ／＼、この吾妻さまは、色ごとの御願を、聞かつしやると申しますが、そんならあなたも、色の願ひを
與五　これはしたり、そんな譯ではない。このお宮は、江戸の本所に勸請した、吾妻森と、御神體は一つゆゑ……ソレ、江戸でも若し、家出をした人があれば……迷ひ兒たづぬるその初めに、吾妻さまへお參りして、それから方々搜すぢやないか。それゆゑにこの與五郎も、尋ぬる人に、片時も早う逢ふやうにと、信心こめてお參りを。
淸八　ハヽア、それで分りましたわえ。あなたが尋ねる、お人とおつしやるは、あの木更津で不慮な事から、御關

親さまは、以ての外のお腹立ちで、今は御勘當のお身の上、どこにどうしてござるか知れぬ……アノ、與三郎さまの行く方をば。

與三　ア、コレ、何かの話しは今宵ゆつくり。お主は早く泊り宿を。

清八　ドレ、見立てゝ參りませう。

ト右の唄になり、橋懸りへ入る。此うちに前のおつる、およれ、權助、附き添ひ、出かゝりゐる。おつる、與五郎を見つけ、あれぢやとおよれへ思ひ入れ。權助もこれを悟りしこなし、いろ／＼あつて、與五郎、これに心づかず

與五　ドレ、この間に參詣して、兄者人の身の行く方、何かの願ひを、さうぢや／＼。

ト立ち上がるところへ、右の三人、立ちより、よろしくこなし、これを三味線入り大拍子。

權助　ア、、モシ／＼、ちよつとお待ちなされませ。ちよつとお待ちなされませ。

與五　これはしたり、私しは往來の者、尋ねる事なら、所の人に聞かつしやれ。

權助　イエ／＼、さうぢやござりませぬよ。

よれ　あなた、ちよつと……ソレ、御新造さま。

トこれにておつる、與五郎へこなしあつて

つる　オ、違ひない、あなたぢや／＼。

權助　ムウ、さてはあなたが。

よれ　與五郎さまでござりまするか。

つる　オ、、與五郎さまぢや。

與五　わしが名を知つてござる、こなたは。

トおつるをよく／＼見る。

つる　申し、與五郎さま。

與五　オ、、ほんにお前は、木更津の

權助　藍玉屋善右衛門さまの

權よ　お娘御。

與五　おつるどのぢやの。どうしてこゝへ。

つる　アイ、與五郎さん、ようお顔見せて下さりました。お懐しうござんしたわいなア。

トこなしあつて、恥かしき思ひ入れ、差し俯向く。與五郎もよろしく

ほんに吾妻さまは、有り難いわいなア。

トおつる、こなし、與五郎、床几へかける。おつる、寄り添ひ、もどかしき思ひれ。

與五　誠にマア、思ひがけない所で逢ひました……して、おつるどのには、いつ頃から、この鎌倉へはござつたぞ

つる　サア、爰へ來たのも三歲ごし。それと云ふもあなたとは、父さんや母さんの、お許しあつた女夫の仲、片時も早うあなたのお傍へ、呼び迎へて下さんしたら、早う祝言した上で、天下晴れての妹脊事と、樂しんでゐる其うちに

よれ　木更津の、御地頭さまの御役人、山鹿毛平馬とか云ふ侍ひが、おつるさまへ惚れまして、たとへ外々へ緣組みがしてあらうとも、ぜひ〳〵貰ひ請けたいと、のつぴきならぬ無理所望。

權助　その樣子も、いま聞きました。なんでも、その平馬とやら、ひへまきとやら云ふ奴が、かれこれ云つて煩さに、そこで木更津をばおつるさまが、家出をしてござるとの事。

與五　ハヽア、それで、樣子が分りました……何にせよ、マア〳〵無事であつたゆゑ、爰で逢はうと云ふものぢやこの與五郎も、悅ばしう思ひますわいなう。

つる　それと云ふも、あなたの方へ、早う呼び迎へて下さんすりや、此やうな苦勞もせぬものを、胴慾でござりますわいなア。

　ト寄り添ひ、思ひ入れ。

與五　サア、その事も譯あつて、どうも心に任せぬ仕儀。

つる　さう仰しやるはどうしても、花のお江戸はまた格別世間にいくらも美しい、お女中さんが多いゆゑ。

よれ　なんであらうとこれ程に、御寮人さまがおつしやるからは、お心根をば、少しは察して。

　ト手を引き立てる。おつる、思ひ入れあつて

つる　これからどうぞ、わたしと一緒に。

與五　アヽ、コレ〳〵滅相な、どうして此まゝ。

よれ　ハテマア、ちよつと。

　ト見得よく引つ張る。爰へ下男權助、以前の土產物の蝶々を持ち出でゝ、指金のやうに遣ひ、思ひ入れあつて

權助　アレ〳〵〳〵、蝶さへも番ひ離れず、吾妻さまのお引き合はせ。

つる　御神前で此やうに、邂逅ふのは盡きせぬ緣。

よれ　なんであらうと

よ權　あそこの茶屋へ。

與五　コ、コレ、放して下され。

ト爭ふところへ、以前の清八、走り出で、この體を見て。

清八　ア、、コレ〱若旦那、どうするのだ〱。

權助　退いた〱。

よれ　退かしやんせ〱。

ト兩人、清八が止めるのを突き退け、與五郎を引つ張る。此うち清八、おつるを見て

清八　オ、、ほんにあなたは、木更津の

權助　與五郎さんの許嫁。

よれ　それゆゑ、あなたを伴れ申して。

清八　さう云ふ譯なら仕方がある。マア〱ちよつと

與五　爰を放して。

ト云ふうちに、又引つ張る事よろしく、たゞ五人、心心に引き合ふて、舞臺をぐる〱廻る。この時、上手より以前の山鹿毛平馬、少し醉ひたるこなしあつて、出て、來たり、この騷ぎを見て、この時、おつる、心づき、驚く事。

平馬　オ、、それに居るのは、おつるぢやないか……ゲエイ。

つる　あなたは、山鹿毛平馬さま。

平馬　よう、これに居つてくれたなア。

ト寄り添ふ。

皆々　ヤア〱〱。

ト思ひ入れ。おつる、振り切り、逃げんとするを、平馬、捉へ

平馬　コレ〱、戀ひこがれてゐる山鹿毛平馬、身共が先年、人をもつて女房に貰ひ請けんと、手をかへ、品をかへ云ひ入れたを、それなりにこの鎌倉へ身を隱すとは、胴慾なものぢやぞよ。盡きせぬ縁があればこそ、この所でめぐり逢ふ。國もとで見た時よりは、鎌倉風の一きは派手やか、コリヤどうも堪らぬワ。

ト寄り添ふゆゑ

つる　ア、コレ、滅多な事を、なされまするな。

平馬　此まゝに伴れて行く……サ、身と一緒に。

ト此うちみな〱、顏見合はせ、思ひ入れよろしく、平馬、立ちかゝり、おつるを引き立つるゆゑ、みなみな、立ち寄り

よれ　ア、モシ、御寮人さまを

權よ　どうなされまする〱。

平馬　身が屋敷へ、伴れて行くワ。

三人　どうして、さうは。
平馬　止め立ていたすな。
　ト又、引き立てに來るを、與五郎、隔てゝ
與五　アイヤ／＼、お武家さま、マア／＼、お待ちなされませ。
平馬　いらざる女が、肩持ち顔……それとも、差し出る思案があるか。
與五　されば、この娘は、成る程あなたが、木更津にお出でなされたその時に、御執心でもござりませうが、これにはいろ／＼譯があつて、今このまゝにお屋敷へ、伴れて行かうと仰しやりましても、さう自由にはなりますまい。マアその手をば、ちよつとお放しなされませ。
平馬　こいつが／＼、若輩者の分際で、出すぎた奴……ムウ、旅形でうせをるは、さては最前よりの樣子と云ひ、此おつるをば引きつれて、この鎌倉へ逐電の、不義の相手はおのれだなア。
よれ　ア、モシ、滅多な事を、おつしやりまするな。
平馬　エヽ、またわれも出しやばるか。
よれ　マアお聞き遊ばせ、あのお二人さまは、まだ御祝言はなさらねど、親御さま方のお約束で、疾に極まつた御夫婦仲。
平馬　何をたわけめらが。申さば在所に居る頃より、こつちが先約に申したのだ。ぜひとも屋敷へ、伴れ立つて行くわ。
皆々　滅多に、さうは。
平馬　あた面倒な……ソレ。
　ト追ひ廻す。早めし大拍子になり、およれはおつるをかばふ。清八は與五郎をかばふ。權助止めるを突き廻され、投げられる事などよろしく、此うち向うより穂積隼人妻、小笹、屋敷風女房の拵らへ、長合羽形、後より綾瀬主水之正、旅形りの侍ひ、脚絆、股引、褄からげ、大小にて、雨掛けの荷物を擔げし、若い衆の供男、一本ざし、胸當にて、荷物へ菅笠を二つ附け、出て來たり、舞臺の爭ひを見て
小笹　ハ、ア、流石は繁華のこの鎌倉、いづくへ行ても巷の賑ひ、その賑しきあまりにや、何やらあれにて、多くの人が
主水　立ち騒ぎまするは、正しく口論、往來の粗相と見えまする。
小笹　相手は、どうやら女子のやう……ソレ、鎭めて遣り

やれ。

主水　ハヽア。

トこのセリフにて、舞臺、みな〳〵へかぶせかけ、此うちに入り替り、動きあつて、見得よく與五郎へ斬りかける。爰へ主水之正、入り、ちよつと止める事。此うち小笹も舞臺へ來たり、扇子を翳し、この體を見る。みな〳〵よろしくこなし。

アイヤ、暫らく、マアお待ち下されい。

平馬　ヤイ〳〵、身共がこれなる若者をば、手討ちにしようと思ふをば、いらざる留め立て。見れば、兩刀、手挾むからは、物の辨へもあるべきに、退かつせい〳〵。

主水　サヽ、お腹立ちではござりませうが、刀を帶し居りますれば、見るに忍びず、主人の差し圖、それゆゑに分け入りましてのこの扱ひ。見ますれば、町人體、外には女子の事なれば、何か、不調法の段は、いく重にも、お詫び言仕る。

平馬　イヽヤ、詫びで濟む事ではないワ。

主水　でもござりませうか、そこをひたすら。

平馬　エヽ、面倒な。そこ、退かつせえ。

ト主水之正を突き廻し、取りつく權助を蹴返し、斬りかけるゆゑ、小笹こなしあつて、つか〳〵と立ち寄り主水之正も刀へ反り打ちかけ、きつとなるを、小笹、平馬を隔てゝ、主水之正をコレと制す。主水之正ハッと控へる。

小笹　マア、申し平馬さま、暫らく、お待ちなされませ。

ト前へ出る。これにてみな〳〵、小笹を見て、ホッと落ち付きしこなし。平馬、見て

平馬　ヤ、誰れかと思へば、其もとは穗積隼人どのの、御内室小笹どの。

小笹　思ひがけなき、この御出合ひ。何事はさて置き、この場の仔細、如何の譯でござりまするな。

平馬　事の顚末、御存知なくば、打ち捨てておいて下されい

小笹　サア、女の身にて差し扣へ、これなる主水に、何ごとか事を鎭めませうと思へども、お聞き濟みござらぬゆゑ……見ますれば、まだ年若き町家の人、その外とても女子供、例へ、どのやうの不調法がござりませうと、わたしがお詫びいたしまする。サア、かやうな者を、お相手になされましては、御仁體のすたる事。わたしとても武家に育ち、女ながらも侍ひの、道をば辨へ居りますれば、見るに忍びずこの場の仕儀。わたしが扱ひまする上

は、たゞ何ごとも御勘辨を、偏にお願ひ申しまする。

ト思ひ入れあつて云ふ。平馬、きつとなり。

平馬　默らつせえ小筐どの、侍ひの道を辨へて居るゆゑ、見るに忍びず、女ながらも扱ひに入つた……へ、ハハヘ、ハ、、、イヤ、片腹いたいワ。其もとが夫、隼人、又、忰の左近、二人ともにあの態だ。兼ねて、禁裏へ献上になるべき、家の重寶、預りの眞鶴の香爐を紛失させ、身共がこの鎌倉へ出立する其ころは、夫隼人は嚴しい蟄居、忰左近は牢舍の身の上、それになんぞやその方がこれへ參り、身共へ對し、刃向ひ立ても、氣が強い。そりや、誠の侍ひ、實の武士の云ふ事だワ。

トこの平馬のせりふのうちに、與五郎、小筐へこなしあつて、さては與三郎の母かと驚くこなし。

小筐　して又、誠の侍ひのあなたさまが、なんであれなる町人や、女子供を引つ捉へ、たゞ今のやうにはなされまするな。

平馬　オヽ、知れた事、この毛二才めは不義者ゆゑ……それゆゑこいつを、成敗するのだ。

小筐　して、何ゆゑに不義者とは、御意なされまする。

平馬　その譯、聞きたくば、云つて聞かさう。

トおつろへこなしあつて

あれなる娘は、御領所、木更津の町人、藍玉屋善右衞門の娘、つると申して、身共、兼ねて婦妻に貰ひ請けうと存じ、たび／＼親共へ申し込みしに、あの物のと返答等閑、其うちにこつそりと、木更津を立ち退いて當所へ參り、たゞ今これなる二才めとほてくろしい、とち狂ふは言語道斷、これゆゑに眞二つに、成敗いたすが如何いたした。

小筐　イヤ、そりやちと御成敗が違ひませう。

平馬　どうしたと。

小筐　たとへ、この娘御を御所望あつて、御内室になさらうと思し召すとも、そりやあなたの、手前ぎはめと申すもの。其とき娘の親方から、きつとあなたへ上げませうと、結納の取り交し、しかといたした御挨拶、申した事がござりまするか。

平馬　サアそれは。

トぎつくりこなし、みな／＼、思ひ入れ。

小筐　それが無ければ、遮つて、不義とは云はれぬ、この場の仕儀……オホヽ、、、しかしマア、あなたさまは兎もあれ、兩方きいて下知のたとへ。

ト與五郎へ向ひ
コレ、不義と云はれて斷の事、お手討ちとならうとしたこなたの身元は、サ、、何ものぢやぞ。
與五　ハツ、私しは、當所の者ではござりませぬ。故郷は武藏の江戸の生れ、元山町にて鼈甲渡世、伊豆屋喜兵衞が二男、與五郎と申すもの。
トこれを小篠、聞いて、恟り、こなしあつて
小篠　スリヤ、喜兵衞どの丶御子息、與五郎どのは、こなたであつたか。
ト思ひ入れあつて、また氣をかへ
ハテナウ。
ト思ひ入れ。
よれ　サア、お聞きなされませ、この與五郎さまへおつるさんは、御幼少のその折りから、親御と親御が御得心づく。
權助　又、嫁御も息子さんも、惚れて惚れて相惚れの、藍玉屋の娘おつるさん。
清八　與五郎さんとのその仲は、まだ祝言はなさらねど、とつくに極まつた
三人　御夫婦仲。

ト小篠、思ひ入れあつて
小篠　さうした時には平馬さまが、このおつるどのへ却つてかれこれ仰しやらば、どうやら不義の門ちがひ。相手が町人なればこそ、侍ひ同志の事ならば、其まゝにならぬ、こりや曲ごと。それでもあなたは彼の者を、やつぱり不義と仰しやりまするか。
平馬　オ丶、不義と云つても大事ない。ひつきやう二人が許嫁、親と親とが許したなどとは、今となつてきやつらが云ひ拔け、身共の方が先から執心。
小篠　然らば其とき親元から、あなたへなんぞ確といたした、證據ばしござりまするか。
平馬　サア、證據と云ふては。
小篠　證據がなければ水掛け論、それでも不義と仰しやるか。
平馬　サア、それは。
小篠　但しは、あなたが不義者か。
平馬　サア、それは。
小篠　サア。
平馬　サア。
兩人　サア／＼／＼。

平馬　うぬ。
ト與五郎へ抜きかけるを、小篠、よろしく止めて
小篠　アイヤ、そこを荒だて云はぬが花、往來も繁きこの境内、マア何事もこれなりに
トよろしくこなしあつて
御料簡あそばしませ。
ト思ひ入れ。
平馬　よいワ、女の事は此まゝに、許してくれるワ。
つる　エ、有り難い。これと云ふも、あなたがこれへ、お出なされしばつかりに
與五　無事に納まる、この場の一埒。
五人　エ、、有り難うござりまする。
トみな〳〵、小篠へこなし、平馬、小篠へ思ひ入れ。
平馬　其もとが、事を分け扱ふ上は、彼れらが事は許し遣はす……さりながら、其もとの夫、穗積隼人を始めとして、重き咎めを受けながら、何ゆゑあつてこの鎌倉へござつた。
小篠　サア、その仔細と申しまするは、殿の御内意、承はり紛失なしたる香爐の、詮議の爲めにわざ〳〵これへ。
平馬　ナニ、香爐の詮議とは。
トこなし。此うち主水之正、書狀の箱より封〆め狀を出し
主水　慥な證據はこの如く、御家老職より、其もとさまへこの添へ翰。
ト平馬へ差し出し、見せる。
平馬　ナニ、某へ、ムウ……ハテナア。
トこなし。
主水　即ち、これなる小篠さまへ、殿の御内意あつたる證跡……イザ、御落手下されい。
ト右の封狀を平馬へ渡す。受け取つて
平馬　ムウ、コリヤコレ、紛れもなき役所の印鑑、家老中より某へ、ハテナア。
といろ〳〵思ひ入れあつて
たとへ如何ほど尋ねても、なか〳〵香爐の在所は知れまい。どうして〳〵。
小篠　その知れ難き品ゆゑに、平馬さまにお目にかゝり、何かの樣子も承はり、詮議を遂げよと御家老中より。
平馬　ムウ、そんなら身共、配慮に任せて
小篠　御談し申す仔細もあれば、この場は此まゝ御同道を。

平馬　ハテ、二人の奴らを、見す〳〵爰に。

小笹　ハテ、なんであらうと、主命なれば。

主水　一まづ屋敷へ、お供をいたし。

平馬　とは云ふものゝ。

　トちよつと立ちかゝるを

小笹　ハテマア、お出でなされませ。

　ト唄になり、平馬、じつと思ひ入れ。小笹、こなし、みな〳〵、小笹へ禮を云ふ心いき、主水之正、附き添ひ、上の方へ入る。荷擔ぎの男は、この前に入る事

與五　アヽ、思ひがけなき今の災難。

おつる　小笹さまのおかげにて、納まのるみか、憎らしい平馬づら。

おつる　よい氣味であつたわいなア。

清八　ア、コレ〳〵、壁に耳、滅多な事を云つては悪い。

權助　又、災難のない中に。

與五　おつるどのには、マ、こゝを。

おつる　とは云へ、あなたに、今こゝでお目にかゝつて、それなりに。

清八　ハテ、それは、私しがこの女中へ。

よれ　お約束申したれば。

權助　わつちも共々手引して。

三人　お願ひは叶へまする。

與五　サ、少しも早う。

　トこれにて、皆々立ち上がる。捨せりふよろしく、この時、中通一人、紺看板の中間の形にて、窺ひよりて

中間　女め、われを。

　トおつるへかゝるを、權助止めて

權助　ヤ、おつるさんへ、手をさへるは

皆々　さては、今の侍ひが。

中間　オヽ、いかにも旦那へ。

　トかゝるを、この内、よき程より、以前の金神長吉、窺ひて、中間を突き廻し、きつと見得。中間見て

中間　ヤ、邪魔立てするな、この小僧めが。

長吉　オヽ、邪魔をしたが何とした。

　ト中間、何をとかゝるを、立ち廻つて、腕を捌ぢ上げ

この金神の長吉が、送つて戻るおつるさんへ、指でもさしたら、料簡しねえぞ。

　ト振りほどいて、締めに來るを、立ち廻つて引きつけ

子供そばへの一文奴め、きり〳〵消えてなくなれ、エヽ。

ト投げ出す。

清權　イヨ、親玉。

ト賞める。中間、逃げて入る。

つる　そんなら、必ず、與五郎さま。

與五　その內、わしが。

清八　ハテマア、こゝは。

權よ　マア、お出でなされませ。

ト唄になり、おつる、およし、權助、清八も送り心にて、長吉附き添ひ、橋懸かりへ入る。與五郎、殘り、後見送り、こなしあつて、

與五　ア、、思ひがけなき災難を、救つて下さる小笹さまは、兼て噂に聞き及ぶ、兄與三郎さまの實の母上……どうやらこちの身の上も、推量なされし先刻の素振り、何にしろ、今日こゝでお目にかゝるも、盡きせぬ……緣ア、、これにつけても、兄者人に、どうぞお目にかゝりたいものぢやがなア。

トこの以前、平馬がおつるへしなだれし折、下手へ落せし手紙を拾ひ、披き見て

ヤ、何やら手紙が……ムウ、心ならぬこの文面、もしも、噂の……香爐一つ、右の品、われら方へ相預かり、書面の金子御用立て申し候所、この程、御請け戻しなされ候趣、然る所、年月相經ち候ゆゑ、元利〆金二百五十兩に相なり候へば右の金子、並びに、この書面引き替へに、香爐相違なく、御渡し申すべく候。そのため一札、依つて件の如し……月日……和泉屋手代藤八……宛名は、山鹿毛平馬さまへ。ムウ、こりや、よい物を拾つたわえ。

トこなしあつて懷中する。合ひ方になり、上手より小笹、窺ひ／＼て來り。

小笹　オ、、そなたは、先刻の與五郎どの。

與五　誠にあなたは小笹さま、ようこそこゝへ。

ト兩人、こなしあつて

小笹　コレ、ちと、こなさんに尋ねたい事が。マア／＼爰へ。

トこれにて、與五郎床几へかける。

與五　シテ、私しに御用とはえ。

小笹　最前、この場で尋ねようとは思へども、人目もあればその儘に、早速に聞きたいは……コレ、こなたの外に、定めし兄弟がござらうがの。

與五　ハ、ハ、仰せの通り、私しの外には、與三郎と申し

まして、なさぬ仲ゆゑ、なほ以つて、私しが爲には義理ある兄……惣領の事ゆゑに、親父さまの名跡を相續なさるゝと極りしを、血脈の弟の私しへ、義理立てなさるるお心でか、うつて變りしお身持ゆゑ、窮命の爲と、木更津にござるその中に、又候、不慮の事起り、その風聞が江戸へも聞え、程なく親父さまが、久離きつての御勘當。

小篠　ムウ、そんなら、世間の噂に違ひなく、アノ、與三郎どのには勘當を。

ト愁のこなし

與五　今は、この鎌倉に漂泊なされてござると聞き、お目に懸つて屆くだけは、お力にならうと思ひ、それゆゑ、江戸からわざ〳〵と。

小篠　でも、優しいこなたの心根、それに引きかへ、不所存者の與三郎が、その爲には、コレ、實の母でござるわいなう。

與五　そんなら、いよ〳〵お前さまは、兄者人には、血を分けた、實みの母御でござりましたか。思ひがけないこのお目見得。

トこなしあつて、以前の一札を出し

早速ながら、あなたさまへ、お目にかけねばならぬ品が。

小篠　ナニ、わしへ見せるその品とは。

ト一札を出し

與五　モシ……これでござりまする。

ト小篠、取つて、披き見て

小篠　ムウ……コリャ一札……文面には、鶴の香爐を質入なしたる預り手形。

與五　その質入れせし在所は、さつき遇ひし、あのおつるが、縁ある家の和泉屋にて。

小篠　香爐の置主は、山鹿毛平馬、ムウ……この文面にて實否を糺さば、

與五　正しく寶の盗賊。

小篠　コレ、密かに〳〵。

ト兩人よろしく、この仕組、早大拍子にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、黒塀、上に忍び返し、よき所へ、三尺の出入口、この上、四方の板へ、誂への印つけ細みの三布中暖簾、この下へ竹の扉戸、こゝより出

入り、この上にも板塀、切拔窓、竹の打つけ、内より簾をかけ、下手の見切り地境路地に、建仁寺垣など、黒塀の下に、用水桶、これへ、雪の下源氏店と記したる所書、塀より見越しの松、海棠など、好み通りすべて妾宅裏手の模様。こゝに靑竹に拵らへし涼み臺据ゑてあり、中程より流行唄にて、道具納まる。

トこゝに、以前の和泉屋手代藤八、山鹿毛平馬の兩人。立ちかゝり居て、

藤八　モシ平馬さま、爰は、私しが店の大番頭、多左衞門が休息所、御遠慮はござりませぬ。

平馬　ムウ、さては貴さまが店の後見いたす、多左衞門とやらの妾宅かな。

藤八　マア、そんなものでござります。

平馬　しかし、餘人に聞かせるも如何。

ト竹床几を見て

幸ひの、この店先で話さうか。

藤八　では、これで承はりませうわえ。

ト右の床几へかけ

さて、ひよんな事をなされましたな。それでは、先刻お渡し申した、かの香爐の書付をば。

平馬　面目ないが、取り落したて。

藤八　これは又、お前さまも、麁相千萬、どうしたものでござります。

平馬　されば、こなたにも申した通り、先刻、かのおつるを見付けた時は、恥しながら心も空、有頂天へ魂は飛び上がり、直さま邸へ連れ歸り、當人を引きとめし上、赤間源左衞門を以つて掛け合せ、望を叶へうと思ふ所へ。

藤八　すりや、只今聞いた隼人の女房が參つたゆゑに、邪魔となつて。

平馬　おつるもそのまゝ見遁がす始末、勘平ではなけれども、する事なす事鶍の嘴、しかし、この儀はどうともならず、心ならぬは、かの書き付け。置き主は、麗々と、身共が名を記しあれば、もしひよつと、面倒な奴に拾はれては困るてな。

藤八　イヤ〳〵、そりや、御心配はござりませぬ。……何もあれに、眞鶴の香爐とぴつたり書いてありもせず、云ひ譯は、どうでもなりませう。

平馬　でも、あの書附を持つて、香爐をもしも、餘人が質請けしては、こつちの手段が。

藤八　ハテ、元利金二百五十兩といふ金高ゆゑ、大抵の者には、第一にその金が出來ますまいて。

平馬　然しながら、元利金二百五十兩へ、右の書附を添へ、引き替へに香爐を受け取る約束。その書付をなくしたゆゑ、身共が質請けするにもせよ、その方が店で、不承知を申しはせぬか。

藤八　そりや申します……大切な品を預かりました手形がなくなりましたゆゑ、一應は申しますが、……その時には、外の者では分らぬ程に、手代の藤八に掛け合はう……して、手代藤八は、いづくにあると仰しやると、そこへわたしが罷り出で、さら〳〵と埒あけまするワ。

平馬　ムウ、頼母しい〳〵。それで身共も安心だわえ。國元より、あの隼人めが女房か、罷り越した仕儀といひ、延延には相ならぬ。ムウ。

　ト こなしあつて囁く。

からいたしては、どうであらう。

　ト 藤八、聞いて

藤八　そりや、ようござります……そこで、お前さまにも申して置けば、かの品が。

　ト 又、平馬へ囁き

からでござりますぢや。

　ト 平馬、聞いて

平馬　ムウムウ……スリヤ、あの香爐は、とつくに貴さまが質藏から、ちよろまかして。

藤八　ア、コレ。

　ト 又囁く。

平馬　イヤ面白い〳〵。さする時には、その虚に乘つて、あのおつるめを、身共の方へ引き上げる、丁度手段の壺へはまるわえ。

藤八　それでは、今宵の事にも行きますまい、いづれあたは、わたしが店へ。

平馬　明日、表向にて、罷り出るぞ。

藤八　そこで、私しは店に居りませぬが、ようござります。外の者が出て、一應の掛け合ひいたし、所で、その時貴さまでは分らぬ、して、二番々頭の藤八は、いづくにあるとおつしやるをきつかけに、この藤八が出て、さら〳〵〳〵と片づけますわ。

平馬　よし〳〵、手筈は萬事吞み込んだ……然らば明日參るぞ。

藤八　よろしうござります。

ト平馬、この内立ち上がるを

ア、、モシ／＼平馬さま、只今申したかの一件。

平馬　ム、、……シテ、二番々頭の藤八は。

藤八　私しが出てさら／＼／＼。

平馬　コリヤ、そのきつかけを、必ず共に。

藤八　イヤ、私しより、その許さまが。

平馬　ハテ、呑み込んで居るわえ。

ト流行唄になり、橋懸かりへ入る。藤八、後に殘り、こなし。時の鐘、合ひ方

藤八　ハ、、、……まづ香爐の一件も、あの平馬さまが手形をば、取り落したが勿怪の幸ひ、丁度こつちの手筈の掛罠、あの品はわれらが手で盜み出し、松兵衞にも呑み込ませて置いたれば、これもよしと。この上は邪魔になる大番頭の多左衞門めを、仕舞ひつけるは……ムウ、それには、これぢやとて。

トこなしあつて、以前の海松杭の松五郎が、手紙にくるみし毒藥包を、紙入より出して

いつぞや、弟の海松杭めが、何か入用だといふから、わざ／＼屆けたこの藥、又戻したが天の與へ、これさへ用ふれば、譯はなしと……その上、きやつがこゝの宅へ、圍つて置くおとみとやらいふ、あの美しい中年増を、この藤八が獨占……それで、一生の望も足り……これが當時流行の藤八五文、奇妙ぢやて。ハ、、、、……さう巧く行けばよいが。

と思ひ入れ。この內、かすめたる風の音、雨車うすくおしらふ。

ヤア／＼、こりや、生憎ぼろついて來たわえ、いつそ爰へ入つて、傘を借りやうか、ア、、困つたものだ、どうせうなア。

トまご／＼思ひ入れあつて、手拭を出し、頭へのせ、見越しの枝の下にて、雨を凌ぐ思ひ入れ。これを流行唄になり、向うよりおとみ、好みの拵らへ、湯上りの形、垢摺りつきし手拭、糠袋を持ち、浴衣を抱へし下女のおふく附き添ひ、兩人とも駒下駄。好みの傘さしかけ、戻りし體、花道より出て來る。藤八、これと見て、わざと待ち合せる思ひ入れ。

ふく　申しおかみさん、この頃の日和ぐせにも、困るではござりませぬか。

とみ　それでも、きつい降りはあるまいよ。……しかし、この傘は、よく禮を云ふて、すぐに戻すがよいぞや。

ふく　畏まりました。

ト　こんな事云ひながら、舞臺へ來る内に、藤八を見付け、おふくこなし

アレ、どなたやら、雨を凌いで。

とみ　どうやら、見たやうなお方では。

ト　この内、藤八、花道の方へ行くを、下女おふく見て

ヤ、お前さまは、慥かにお店の。

ふく　藤八さんではござんせぬかえ。

藤八　ヤ、お前は……オヽ、大番頭の御内室おやな。

　と思ひ入れ。

ふく　相憎降り出して、さぞお困りなされませう。

藤八　さて／＼女中方は、目かどが強いわえ……私しは先達つて、多左衛門どのが、内にござるその時に、ちよとこゝへ來た事は來たが、この源氏店は、同じやうな内ばかりゆゑ、とんと氣が付きませんなんだわえ。

とみ　もう、今にやみませう。御遠慮なしに、少しやめてお出でなされませ……コレ、お連れ申しな。

ふく　サア／＼、お出でなされませ。

藤八　イヤ／＼、しかし、女中ばかりの所へ參つて、お世話になつては。

とみ　なんの、そんなお心遣ひがござりませう。

ふく　傘も、お店のが參つて居ります。

とみ　マア／＼やめて、お出でなされませ。

藤八　では、お言葉に隨ひませうかな。

とみ　サア、お入りなされませ。

ト　下女おふく先に立つて、件の入口へ手を入れ、掛金を外いで、開きを明ける。

藤八　ハハア、こゝに入口がござりますな。

ふく　ハイ、こゝは裏口でござりますよ。

とみ　マア、お入りなされませ。

ト　やはり雨車、かすめて、右の合ひ方にて、おとみ先へ入る。藤八、思ひ入れあつて、後より下女おふく、開きより入り、掛金をかける。これにて風の音、合ひ方かすめて雨車になり、この道具、ゆるやかにぶん廻す。

本舞臺、三間の間常足、大阪づくり、下地窓の欄間。上の方に三尺の床の間、これについて大阪土の壁、腰張りの好み。下に、一間上下二段の押し入れ。上の方、中窓、同じく腰板の羽目、家臺一面、大和



八世市川團十郎の與三郎（初演當時の錦繪）

ぶきの庇。二重の紐、腰障子、一間の家體。前づら竹の打ち附け窓。この前へ栗丸太の門口を押し出し、四つ目垣へ卯の花の盛り、海棠の臺實木、庭の模様よろしく。二重、よき所に箱火鉢、菓子簞笥鏡臺など置き並べある事。右の鳴の物にて、道具納まる。

ト下手よりおとみ先に、藤八、おふく、附き、件の傘を持ち出て來たり

藤八　成る程、こちらが表口ぢやな。この間は、これから參りましたゆゑ、裏口は、とんと勝手が知れなんだわえ。

ト此うちおとみ、先へ門口へ入り、上へあがる事。おふく、莨盆を出して

ふく　サア／＼一服、お上がりなされませ。

藤八　モウ／＼、構はつしやるな／＼。

とみ　コレ、お茶の支度をしや。

ふく　ハイ／＼。

ト立つて、明りのつきし行燈を出し、有り合ふ土瓶の茶を汲み出して

マア、これを一つお上がりなされませ。

ト有り合ふ菓子箱を出す。藤八、こなしあつて、茶をとる事。

とみ　モシあなた、御免なされませ。

ト會釋して、鏡臺を出し、おとみ、髪を搔き上げ、顏を直すこなしよろしく。此うち下女おふく、茶拵らへする。藤八、煙草をのみゐる。此うちおふくへおとみ、顏なほしながら差し圖する事。

ふく　たゞ今すぐに、お煮花が出來まする。マ、一つお取りなされませ。

藤八　ア、モウ／＼、構はつしやりまするな。多左衞門どのは、今日は爲替仲間の參會へござつて、どうで戻りは遲うござらう。その留守へ參つて、無遠慮千萬……アア、だん／＼雨が止みましたわえ……傘を一本、お貸しなされませ。これはお內室、お世話になりました。

トもじ／＼立ちかけるゆゑ

とみ　ア、申し、マアお待ちなされませ。珍らしいあなたのお出で、今、折角お茶の支度もいたしました。マア一つ、お上がりなされませ。其まゝにお歸し申しては、宅で戻ると、わたしが叱られまする。

藤八　ア、モシ滅相な、お前さんを叱らせては、私しが濟

みませぬゆゑ……そんなら、折角のお志、お煮花を一つ、下されませうか……ハヽヽヽ。併しマア、お前を呵らすまいとて、私しが長居して、却つて多左衞門どのに、私しが呵られうも知れぬわえ。

ふく　これはしたり、内の旦那は、其のやうな事には、とんとお構ひはござりませぬ。誠に粋なお氣質でござりますわいなア。

藤八　サア、その粋な多左衞門どのなればこそ、かうした粋なおとみさんを、世話しておかつしやるてな……とは云へ、女子二人の所へ、わしらがやうな男が、一人永居してゐるのは、譬へにも云ふ猫に鰹節。

とみ　エヽ。

ト こなし。

藤八　鰹節は本土佐ぢやが、肝心のこつちが、どら猫かも知れぬわいの。

ト思ひ入れあつて云ふ。これにて、おとみ、身仕舞しながら、思はず笑ひ

とみ　ホヽヽヽ……ほんに可笑しい藤八さんぢやわいな。

ト云ひながら、顏をしてゐる。この内、下女、茶を入れる事。

藤八　イヤ、又店向の格式などいふものは、堅いもので、先づ、お前方も、定めてお聞き及びでもあらうが、わたし共の大旦那は、二年後から、笹目が谷の別荘へ、隱居さつしやれて、店は、こつちの多左衞門どのを始め、わたし等が預かつてゐるゆゑに、猶々固くせにやならぬぢや。然し、多左衞門どのには、別して固いお人ゆゑ、かうした休息所はありながらも、滅多にはござらぬ樣子、所でわたしが呑み込んで、折々は行きなされ〳〵と勸めるやうにして、こつちへ泊りにおこしまする……モシ女中衆、あんな固い人でも、こつちへ泊りにござつて、おとみさんと、睦言の痴話などゝいふやうな事がござりますかな。

ふく　オホヽヽヽ、どうでござりまするか、そんな事は知りませぬわいなア。

藤八　所で、わたしが多左衞門どのに云ふには、あゝしておとみさんを、内密ものにして置かうよりは、表向き御内儀の弘めをしてはどうぢやと云ふたれば、イヤあれは、ちと仔細あつて三年以前、田舍より連れ戻つたが、わしが女房にすると云ふ譯にも行かぬ者なれば、どこか

相應な所があらば、嫁づけてやりたいと、此やうに云ふてゝあつたが、どうも一ゑん合點が行かぬて。併しマア、おとみさんが、どこへ緣づかうと、眞實思ふ料簡なら、隨分ソリヤ、こゝらあたりにも、望み手はないでもないが、かうやつて世話をして置きながら、今さら餘所へ遣らうとは、多左衞門どのゝ、料簡が分らぬて。

ト考へるこなし。

とみ　ほんに、さうでござんす。わたしもかうして三年越し、深いお世話になつてはゐれど、ほんの床の間の、置き物同然でござりますわいな。

藤八　ハア、それではいよ／＼、多左衞門どのゝ言葉が、本當かしらんて。

ト思ひ入れ。この時、おふく、茶を汲み、持ち出て

ふく　ハイ、お茶が入りました。

ト湯吞みの茶をおとみの側へそつと置き、藤八へ茶を出して

お煮花が出來ました……お一つ、お上がりなされませ。

藤八　ア、コレ、こんなお世話になる事なら、なんぞお土産でも、持つて來ねばならぬのぢや。アゝ、鈍な事して退けたわえ。

ト思ひ入れあつて、此うち紙入よりちよつと二朱金一つ、鼻紙へくるみ、外に一包み拵らへる事。此うち雨車止む。

ふく　ドレわたしは、傘をちよつと、戻して參ります。

ト立ちかけるを、藤八、おふくを引き止め、二朱の包みを出して、下手にて遣る事。

イヱ、こんな事は。

ト捨てぜりふのやうに斷る事。

藤八　ハテマア、よいわいの。

ト仕方でよろしく、一つの包みを出し、酒肴、云ひ付ける心にて囁くゆゑ、よせとおふく、手にて仕方する。藤八、ハテ行けと云ふ心意氣よろしく、おふく、是非なく

ふく　ドレ、傘を戻して、參りませうか。

ト傘を持ち、下手へ入る事。おとみ、これに心づかず、此うちに身仕舞ひしてしまふ事、鏡臺を片よせて

とみ　お前さん一人、捨てゝ置いて、身仕舞ひして居りましたゆゑ、お構ひも申しませぬ。モシ藤八さん、堪忍して下さんせえ。

藤八　なんの／＼、心おきなく、なんなりとも、さつしや

りませ。こちらも、遠慮なしに煮花をば、御馳走になりましたが……アヽ、大さうによい茶だゆゑ、どうやら浮かされて、今夜はどうか、寐られぬやうだわえ。

とみ　お前さんが浮かされなさんしたら、どこやらでさぞ、嬉しがる女中さんがござりませうねえ。

藤八　アハヽヽヽ、よしてもおくれぢや。おとみさん、おだてさつしやんな。

　トこなしあつて、少し摺り寄り

イヤ、さつき風呂から、戻らしやんしたその時も、綺麗なものぢやと思つたら、今また身仕舞ひをさつしやつたら、また格別に、美しいものぢやなア。

とみ　エ、モ、よして下さんせ。

藤八　ハテ、よせと云ふて、どうよされるものぢや……アア誰れに見しよとて、紅かねつきよぞ、みんな主への心中だて……とは、有り難い。

　ト好みの合ひ方、思ひ入れある。おとみ、心意氣あつて

とみ　ア、モシ藤八さん、そんな事、云はしやんすなら、早う戻つて下さんせ。

　トじつと腹立つ思ひ入れ。

藤八　なんぢや、戻れえ。それでもお前が、マア茶が入るから、ゆるりとして行けと、云ふたぢやないかいの。

　トこなし。おとみ、ひよんな事、云ひしと思ひ入れ。

ア、思へば、これが浮き世の習ひ、一つ旦那へ、奉公して居れど、多左衞門どのは、働き者とは云ふものゝ、よくせきに果報ものなればこそ、おとみさんのやうな女子に思はれ、それを自由に、寵愛してござるとは、よくよく、よい月日の下に、生れたと見えるわえ。マア、羨ましい事ぢやなア。

　トこんなこと云ひながら、だん／＼側へ寄る。おとみ、迷惑なるこなしよろしく右の合ひ方、時の鐘。此うち、向うより蝙蝠安、さきに、後より向う疵の與三郎、頬冠り、好みの形にて、出で來たり、花道にて、

　こなしあつて

與三　蝙蝠や、手めえがこの間、行つたと云ふのは、向うの内か。

蝙蝠　さうよ、隨分わかりのいゝ内だ、行つて見や。

與三　さうして今日は、どうするのだ。

蝙蝠　ナニ、今日は、小遣ひ取りをする積りだ。マア、おれが先へ行くから、手めえ、門口に待つて居やな。

　トこんなことを云ひながら、門口へ來て
おれか先へ入つて、段どつて置いて、それから呼び込むから、そこに待つてゐや。
與三　ムウ。よし〳〵。
　トおもひ入れ。蝙蝠安、門口を開けて
蝙蝠　ヘイ、眞平、御免なせえ……　モシ、御免なされませ。
　ト云ふ。おとみ、こなしあつて
とみ　アイ、どなたでござんすえ。こつちへ、お入りなさんせ。
　ト安、お辭儀して
蝙蝠　ヘイ、眞平、御免なされませ。
　ト　へ入り
御新造さん、この間は、大きに御厄介になりました、有り難うござります。
とみ　お前は、いつぞやのお方、なんで、ござんしたえ。
蝙蝠　ヘイ、ちつと、申し兼ねた事ぢやござえますが、また少々、お願ひがあつて參りました。
とみ　又お前、そんな事を云つて、この間も、あれほど譯を云つて、上げたではござんせぬか。殊に、緣もゆかりもないお前、そんな形をして、たび〳〵來られては、近所の手前もあり、誠にこつちでは、迷惑でござんすわいな。
蝙蝠　そりやモウ、おめへさんの仰しやる通り、參られた義理ぢやござりやせんが、この間、モシ、わつちが友達が喧嘩をして、大きな怪我をしました。そこでマア、わつちらが寄つて、世話をして、湯治にでも遣らうと思ひますが、御覧なさる通りの始末だから、御近所を少々づつ、お願ひ申しまする積りで。
　ト云ひながら、立つて、門口へこなしあつて
與三や、こつちへ入りな……モシ、この野郎でござえます。何分お頼み申します。コレ、お禮申せ〳〵。
　ト此うち與三郎、手拭を冠りしまゝ、内へ入り、下手へ小さく畏まりゐる。
與三　ソリヤ、大きに有り難うござります。
　ト思ひ入れ。
とみ　なんの事かと思つたら、その事でござんすか。折角のお頼みではござんすけれど、今日は、生憎と旦那も留守なり、さうたび〳〵は、わたしにも、しにくいに依つ

て、マア今日は、お斷り申しまする。

蝙蝠　モシ、さう仰しやつちやア物がねえ。例へ、旦那がお留守であらうとも、隨分わからうと思ふ、節があればこそ、來たのでござります。モシ、たんとの事ぢやござりやせん。どうかして遣つて、おくんなせえな。

とみ　モシ、いま聞いてゐれば、おつに絡んだ、物の云ひやう。何もわたしの所で、隱し賣女や、勝負ごとの、宿をしたと云ふではなし、何も後暗い事はござんせぬ。しらこの町家の住居、何も、お前方につけ込まれて、無心を云はれる、覺えはござんせぬわいなア。

蝙蝠　ソリヤ、仰しやる迄もなく、これが、天秤棒を肩へかけて、一貫の元手で、四百儲けると云ふ、しがねえ暮しの所なら、こんな事も云つちや來やせんが、マア、おめえさんなんぞは、年が年中、お蠶ぐるみで居なさる御身分だ。モシ、たんとの事ぢやこざりやせん、どうかしてやつておくんなせえ……モシ、一服、貸しておくんなせえやし。

ト此うちよろしく藤八、思ひ入れあつて、この時、中へ入り

藤八　最前から私しも、默つてこれに居つたが、何を云ふにも主の留守、どうも仕やうのない事ぢや。ところで、わしが扱ひぢや。甚だ輕少ではあるけれど、こりやわしが心ばかり。マア〱、これを取つて、今日は不承して、歸らつしやれ。

ト紙入より當百一枚、出し、鼻紙に包み、蝙蝠安に出す。

蝙蝠　こりや、有り難うござりまする。

ト手に取り、捻くつて見て

コレ、見や、草鞋錢が、たつた百だ……モシ、有り難うござりまするが、こりや、お返し申します。

藤八　ムウ、そんなら、その錢は要らぬのか。

蝙蝠　要らないから返すのよ。大の男が二人來て、足を薪にしても、一貫や二貫の代物はあるワ。それになんだ、たつた百とは、あんまり人を、虫變木にするなえ。べら棒め。年が年中、お蠶ぐるみの身で居やがつて、重いものと云つたら、箸か煙管、枕の下へ手を入れりやア云ふ目の出るおめえの體、それだから貰ひに來たのだ。それになんだ、たつた百ばかり、扱ひだも凄じい。そつちの方へ、すツ込んでうしやがれ。

藤八　おとみさん、こりや、えらう、六ケ敷くなつて來た

そえ。

ト後へ引き退る。

蝙蝠　ナニ、べら棒め、ぐづ／＼吐しやがると、擲きなぐるぞ。

藤八　ヤア、。

ト藤八、恐れるこなしあつて、よろしく捺へる。蝙蝠安、よろしく捨てぜりふあつて、きつとなる。おとみ、こなしあつて

とみ　コレ、あんまり騒いで、おくれでないよ、近所隣へ、恰好が悪いわな、靜かにおしな、わたしにも歴然とした主のある躰、何もおつう、嫌味を云はれる譯はないが、かれこれと面倒だ。

ト莨箱の引き出しより一分銀を出し、紙に捻り

サア、これを持つて、お歸り。

蝙蝠　それだからさつきから、こつちは、おかみさんに頼み申すのだ……それに、彌次馬が出やがつて、なんだ、その面ア。

ト藤八へ思ひ入れしながら、右の金を與三郎の方へこなしあつて

オイ哥兄、聞いたか。おとみさんは、流石に苦勞人だ。あの通り、だん／＼云ひなさるものだから……これをお貰ひ申して、行かうぢやねえか。

トちよつと見せる。與三郎、思ひ入れ。

與三　よせ／＼、けえしてしまへ。

蝙蝠　エ、……それでも、あんなに譯を云ふものだから。

ト合點の行かぬ思ひ入れ。

與三　けえしてしまへと云ふ事よ。

蝙蝠　そんなら、これでも少ねえかゝか。

與三　そりやアな……サ、たつた二百でも、けえる場もあり、百兩もらつても、けえられねえ場所もあらア……マア、おれが掛け合ふのを、そつちの方で見て居ねえ。モシおとみ、イヤサおとみさん、コレおとみ、久し振りだなア。

ト手拭を取る。

とみ　エ、、さうしてお前は。

與三　與三郎だよ……お主やアおれを見忘れたか。

とみ　エ、、。

ト呆れる思ひ入れ。藤八、慄へる。蝙蝠安、こなし、誂らへの合ひ方。

與三　しがねえ戀の情が仇、命の綱の切れたのを、どう取

り留めてか木更津から、めぐる月日も三年越し、江戸の親には勘當うけ、據所なく鎌倉の、谷七郷は喰ひ詰めても、面へ受けたる看板の、疵が勿怪の幸ひに、切られ與三と異名を取り、押し借り強請も習はうより、慣れた時代の源氏店、そのしらばけか黒塀に、格子造りの圍ひもの、死んだと思つたおとみとは、お釋迦さまでも氣がつくめえ。よくもお主は達者で居たなア……安やい、これぢやア一分ぢや、けえれめえぢやねえか。

蝙蝠　成る程、こいつは、一分ぢやけえられねえわえ。

與三　コレ、木更津に居たその時は、そつちも亭主のある體、それと知りつゝうつかりと、はまり込んだはこつちも不覺、その代りに、マアこの通り、

ト體の疵へよろしくこなしあつて

身に過りがあればこそ、ぢつと蟄して居るを見て、源左衛門めが非道の手籠め、殺しもやらず斬りさいなむ、その俤はこの疵だワ。手めえもその時海松杭に、追ひ詰められて木更津から、海へざんぶり飛び込んだと、聞いたる時のおれの心、今に忘れず思ひ出し、心で念佛を申して居たに、わりや、その場を逃げのびて、命を助かりかうした態は、なんの事だ。それぢやア濟むめえ〳〵が、エ、。

トおとみの胸倉を取り、いろ〳〵思ひ入れあつて

サア、誰れの世話で、こゝに居るのだ。今聞きやア、立派な亭主があると云つたが、亭主は誰れだ。どこのどいつだ、それを吐かせ、それを云へ。きり〳〵ぬかしやアがれ、エ、。

ト思ひ入れ。おとみ、この内ぢつと、こなしあつて

とみ　エ、も、靜かにおしな。マア、わたしが云ふ事も、とつくりと聞いたその上で、どうなとしたがよいわいなア。

與三　云ふ事があるなら、早く云へ。

とみ　わたしも、その時永らへる、心ならねば湊から、海の深みへ捨つる身も、漂ふ浪の夢うつゝ、漕ぎ行く船へ引き上げられ、藥よ醫者よと手厚い介抱、そのお蔭にや甦り、今はかうしてゐるものゝ、圍はれ女とは表向き、枕かはすはさておいて、色めいた事はこれ程もなく、今日まで暮すその中も、この家の留守を預つて、女の役の針仕事、勤着替の裾直し、樂すぎるだけ生中に、心苦しう今日明日と、過ぐる月日も三年越し、義理に迫つて暮す内、お前はこの世にござんすか、但しは、その

時死なしやんしたか、便り聞かねば逢ひ初めて、枕交はしたその日をば、お前の命日忌日ぞと、忘れる暇はないものを、今のやうな怨言、そりや聞えぬ胴慾ぢや、聞えぬわいなア。

トおとみ、思ひ入れあつて云ふ。與三郎、煙草のみゐて

與三　いゝ加減にやすめろえゝ、半死半生でゐるものを、醫者よ藥よと手當して、やう／＼達者な身體にして、この通り圍つて置く、誰れがたゞ置くやつがあるものかえ。なア、安や、さうぢやアねえか。

蝙蝠　違えねえ／＼、今お主が云ふ通り、この美しい代物を、金にはあかして療治をしたその上で、こんな内に圍つて置き、たゞ遊ばして喰はせておく、そんな奇特な篤棒が、今時に、何あるものか。そこはなんだか解るものかな。お主も、この女ゆゑにやア、すばらしい苦勞して今の身の上、切られ與三郎とか云はれる身體、おれも又蝙蝠安で、もう打つちやつてはおかれねえぜ。お主はどうする積りだ。

與三　知れた事よ。居所が知れたが幸ひ、今こいつを世話してる野郎をばつらまへて、その筋を立つた上、おとみをおれが女房にするか、又は手切れと下素ばるか、おれが面を立てにやアおかねえ。

トきつとこなし。蝙蝠安、うなづいて

蝙蝠　違ひなし、そいつが極だ……お主やア、おとみゆゑに、手ひどい仕置きも、滿足な身體ばかりか、その面へ受けた三筋の刀疵、おれも名代の蝙蝠安、三筋に蝙蝠は遁れねえ仲だ。これからは、おれが手傳ふのだ。

トこれまで藤八、始終の樣子聞く度に、驚ろく思ひ入れ。可笑味いろ／＼あつて、慄へゐる。この時、そつと二枚折の屛風の蔭より顏を出す。與三郎、見て

與三　先刻から、まじ／＼として居やあがるこいつ、おとみを世話をする野郎めの、慥かに友達だ。

蝙蝠　ムウ、いゝ所へ氣が付いた。

ト藤八、たまり兼ね、逃げうとするを引捕へて

手前は、どこの奉公人だ。

與三　おとみは、誰れが世話をする。

兩人　それを云へ／＼。

ト色々こづく。

藤八　イヤ／＼、わしは知らぬぞ。其やうな事は知らぬ知らぬ……コリヤマア、情ない目に遭ふことだ。ア、桑

原桒原。
蝙蝠　云はなけりやア、酷いぞ。サア、早く云へ〳〵。
　ト藤八を捕へ、胸倉をしめる。藤八、苦しむ。
藤八　ア、、切ない〳〵、許して下さい。云ひます〳〵。
與三　カウ〳〵、安や、云ふと云ふから、緩めてやれや
　やれ。
蝙蝠　サア、緩めてやるから、有り體に云へ〳〵。
藤八　かうなるからは、有り體に云はいで、云はいでどう
　せう。ありや、わしが勤めてゐる所の丁稚だ。
兩人　なんだ、篦棒め、何を吐かしやアがる。
藤八　イヤサ、一番々頭でござりますよ。
　ト云ひながら、うろたへ逃げて入る。
與三　なんだ、うろたへて、逃げやアがつたな……サア、
　これからは、手前が相手だ、有り體に云つてしまへ。
　ト詰め寄る。この以前より、多左衞門先に、丁稚つき
　添ひ、出て來たり、門口へ來て、内の樣子を窺ひ、丁
　稚に囁き、多左衞門、丁稚に戻れといふこなし。これ
　にて、丁稚引き返し、入る。この途端に、多左衞門、
　この時内へ入る。
多左　イヤ、おとみが口から聞かうより、わしが云つて聞
　かせませう。
　トこれを聞き、與三郎、蝙蝠安、見て
蝙蝠　ヤ、さういふお前は。
與三　おとみさんの旦那か。
　ト兩人、顏見合せ、居住ふ。多左衞門、二重へ直る。
　おとみ、よろしくこなし。
とみ　ほんにお前は旦那さん、今日は、お仲間の參會ゆゑ、
　まだお戻りには間があらうと思ひましたに、いつよりは、
　お早うござりましたなア。
　ト何氣なき體、湯呑みへ鐵瓶の湯をつぎ、ゆかりを入
　れ、多左衞門へ出す。
多左　サア、今日は、仲間の衆も、呑手も少いゆゑ、思ひ
　の外、早く濟んだが、さうして、この衆は、お主の身寄
　りか、近附きか。
　ト何氣なく聞く。おとみ、こなしあつて
とみ　近附でもあり、身寄りでもあり、打ち絶えてゐたも
　のを、今宵、俄かに訪ねて來られ、親切に世話して下さ
　んす、お前の思はく、恥かしうござんす。
多左　なんの恥かしい事があるものか、人の浮沈は色々だ、
　どこに、どんな所緣かゝりがあらうも知れねえワ。

ト莨のみながら、與三郎、蝙蝠安の方を見やり、蝙蝠安、多左衞門を見て、少し情氣て、顔を背ける事。與三郎、蝙蝠安へ、手前、口開きを云へと思ひ入れ。蝙蝠安は、與三郎に云へと云ふことなしある。

モシ、お前方は、どうで爰へ來るからは、何か用がありませう。用から先に聞きませうよ。

　ト與三郎、こなしあつて、前へ出で

與三　その用と云つて、外の事ぢやアござりません。こゝにゐるおとみが事サ。

多左　このおとみが、どうしました。

與三　ハテ、今、お前が推量の通り、わたしは、おとみの身寄りの者、足かけ三年、居所が知れぬゆゑ、打ち絶えたが、通りかゝつたこの新道、見れば立派なしまふた屋、云はずと知れた圍ひ者、よく〳〵見ればこの女、ちつと、こつちに色々と、込み入つた譯のある女、どうした譯で爰に居やす。誰れが世話をやきやした。どこへ斷つて、この家へ、圍つてはおかつしやる……とサア、かういふのは本筋だが、何か、こいつがお前さんに、お世話にもなつたさうだ。お禮は、お禮で申しませうが、一體、どういふお心で、世話をやいて下さるか、そこが聞きたうござりますよ。

　ト思ひ入れあつて云ふ。多左衞門、こなしあつて

多左　この女の、身寄りと云つて、どうで尋ねてござるからは、大方、その句が出やうと思つた。おとみをこゝへ置く事は、成る程、誰れにも斷はらねえ、又、世話もやいた者もねえ。樣子を聞いたか知らないが、丁度、足かけ四年前、魚油の仕入れに安房上總、銚子へ乘り越す漁船へ便船して急ぐ途、浪に漂ふ一人の女、海賊にでも遇ふたのか、但し、身投げか、助けんと、引き揚げて見れば、身內の疵、こいつはたゞ事ではねえと、心づけども仕やうもなく、船へ揚げたで氣も緩み、息が絶えたをその儘に、海へ萬更又流すは、不憫と思つて色々と、手當をする中、甦へり、本腹した後、譯を聞けば、仔細を包むおとみが樣子、元より、身寄はねえと、さつぱり云ふからこの家に置いたのも、きのふ今日だと思ふ中、月日の經つは早いものさ、たう。

　トこなし。

與三　成る程、そこは解りやした……その時、助けて下された御親切は有り難い、そこは、お禮を申しやす……お忝なうござりまするが、それから後が、氣に喰はねえ。

お前も見りやアお店勤め、大所の番頭さん、神さんといつても無え様子、どうやらおとみと差し向ひ、これから後は、云はねえでも知れたもんだ。女も女だ、默つてゐるのは時につれ、番頭さんの襟につき、このおれをば、突き出しものにしやアがるかえ。どいつもこいつも、性根をすゑて挨拶をしやアがれ、なんの馬鹿な面な。

　トどつかり座る。おとみ、この内立ちかゝつて

とみ　エヽ、コレ、お前もマア、先刻から、わしが默つてゐれば聲高に、モシ、近所の手前もござんすわいなア。

與三　何を吐かしやアがるのだえ。近所どころか、事によりやア、この人の主人へねぢ込んで、この譯をつけるのだ。

とみ　そりや、お前の云ふ所は解つてゐるけれど、今、且那のおつしやる通り、その時、わしは死ぬ所を、不思議な事で助けられ、身内の疵から色々と、介抱かけた命の親、その恩を仇にして、なんぼわたしでも濟まぬわいなア。ちつとは、浮世の人情を、察してくれたがよいわいなア。

與三　なんだ、人情を察してくれろ……ヘエヽ、箆棒め、人情を察しるにも、事によるわえ。命の親が氣に喰はねえ。命の親だ〳〵と吐かすからは、どんな事をするかも知れねえ。安やい、さうぢやアねえか。

とみ　やつぱり、まだそんな事を。先刻もあれ程いふ通り、主に限つてこれ程でも。

　ト云ひかけるを、被せかけて

兵三　エヽ、よしやアがれ。

とみ　コレマア、靜かに。

　ト取り抑へ、宥める心。多左衞門、これを聞いて

多左　コレ〳〵おとみ、打つちやつて置け、先刻から、この男が云ふのは、一々尤もだ。何にも云ふには及ばねえ、初めから、おれが推量通り……しかし、何とそつちで云はうとも、おとみをこゝにかうしておくも、氣障な事のない譯は、おとみが心を聞いて見りやア、知れる事だが、よもや、おとみもこのおれに、假にも一度も枕を交し、添寐をしたとは云はれまい。

　トおとみへこなしあつて、與三郎を見返り

然し、かう云つても、緣者の證據、こなたの方では疑つて、かれこれ云ふのは、云はずと知れた、おとみが爲には。

與三　オヽ、知れた事だ、おれが爲には。

ト云ひかけるを、この内、おとみ、こなしあつて、云ひ消す心にて留めて

とみ　アヽコレ兄さん／＼。

與三　ナニ、兄だ。エヽ、そりや何を。

とみ　アイ、兄さん／＼……兄さんでござんすわいなア。

ト思ひ入れあつて、與三郎へ呑み込ませる心意氣にて云ふ。

多左　ムウ、そんなら、こなたは、おとみの兄貴か。

與三　アイ……取り分けて、義理のあるおとみが兄の與三郎、切られと仇名のつく野郎サ。

多左　ハテ、いゝ兄を持つて、幸福だわえ。

トおとみへ思ひ入れ。與三郎、おとみへこなしあつて

與三　コレおとみ、わりやア遮二無二、兄さんごかしに云ひすくめるが、兄と云はれりやア親同然、お主が體は、おれが自由、この納まりはどうつける。

とみ　アイ、その納まりは。

ト云ひかけるを

多左　イヤ、おれがつける。カウ兄貴、少し待つて下され。

與三　早くしておくんなせえ。

ト居住ふ。多左衛門、蝙蝠安へこなしあつて

多左　そつちの男、爰へ出さつせえ。

蝙蝠　ハイ。

トもぢ／＼してゐる。

多左　コレ、手前は、安ぢやアねえか。こゝへ出ねえか。

ト蝙蝠安は、やはりもぢ／＼してゐる。

コレ安、こつちへ出ろと云へば。

ト合ひ方。

蝙蝠　ヘイ。

トよんどころなく出て、さし俯き

ヘイ、誠にお久しうござります……お目にかゝりますも、面目ない譯でござります。

ト色々こなし。

多左　コレ安、手前マア、なんと思つて爰へ來た。われが親仁の甚兵衛は、長らくおれが店へ出入りして、それで渡世する身分なれども、手前はよくせきに甚兵衛も見限つてか、十八の時、そつちを勘當、もう運上して心をば直さうとはしないで、とう／＼今のその身すがら、蝙蝠安と世間で云はれ、忌み嫌はれるを幸ひに、所々方々を強請り歩き。その根性を直さねえと、疊の上ぢやア死な

れないぞよ。門口の板に書いてある、山形に丸は、おれが印だワ。それを見忘れては濟むまいが。

蝙蝠　ヘイ〱、イヤモ、面目次第もござりませぬ。

トもぢ〱こなし。與三郎、こなしあつて

與三　なんだ〱、おれを待てと止めておいて、安にぐづぐづ云ふにや及ばねえ、おれが方の方はどうするのだ。

多左　その譯も、今つける。

トこの內、紙入れの中より、金入を出し、中より小判小粒南鐐など大分、鼻紙の上へ明けて、ちよつと數をあらましに見るこなしあつて

サア、與三郎どん、こなたも、おとみが兄だと云はつしやるからは、他人と思はないから云ふのだが、見れば、まだ年は若し、元より賤しい人の子とは、どうやら見えぬ棲はづれ。それに見りやア、顏は元より、總身へすさまじい刃物の疵……又過ぎし頃、このおとみを助けた時、やつぱり身中に刀疵、それと云ひ、これと云ひ、何か譯のある事だらう。然し、こなたの妹ゆゑ、達つて連れて行きたいと云はつしやれば、隨分こなたに遣りませうが、今日まで、爰に養つて置くには、思ふ仔細のあつてのこと、しかし、この譯は、今日は云ふまい……何かはおいて、爰に金が凡そ十四五兩、これをこなたに進ぜるから、これで當分どうかして、堅氣になつて商賣を初めた上、定めて親御もあらうから、この末ともに苦勞をば、かけないやうにさつしやるがようござる……サア、とにかくに、この金を持つて、今夜はすべよく歸らつしやい。

ト件の金を渡す。與三郎、見て

與三　それぢやア、妹のこのおとみを、爰に引き上げて置く代り……この金を持つて歸れとか。何のたつたこればかりの、こりやアお返し申しやす。

ト前へ置く。蝙蝠安、こなしあつて

蝙蝠　これサ〱、與三公、そりや何を云ふのだ。今旦那が云はつしやるのは、おとみを連れて行きたけりやア、遣らうと云はつしやるぢやアねえか。然し、今夜、オイソレと行かねえから、そこでこの金だらう。なう、ソレ、よしか。マア、この金を持つて、今夜は歸らつし。

與三　エヽ、よせ〱、こればかりの金で、どうなるものか。

蝙蝠　コレサ、解らねえ。手切れとか、足切れとか云つて、

判證文の取り交せする譯ぢやあるまいし、云はゞ十四五兩、無證據の……イヤサ、無商賣のお主の事だ。マアマア、金を持つて、エヽ、これを資本にして……な、よしか、又どうでもなる事だわな。

トよろしく取りなす思ひ入れ。與三郎、こなしなつて

與三　いゝわえ、解つた。お主もそんなに云ふものだ……今夜は、これを持つて歸らうよ。

蝙蝠　それがいゝ〳〵、サア〳〵、行かつし〳〵。

與三　コレサ、待ちやれな。

ト多左衛門へ向ひ、こなしあつて

おれが方には、云ひ分こそあれ、何にも恩情うける事のねえおれだが、手前が段々譯を云ふから、おれは、この金を持つて歸つてやらう。

多左　ムウ、そんなら、おれが詞に任せて。

與三　サア、例へ、今夜は歸つても、おとみが體は、これ限りにはすまねえよ。

トおとみへ思ひ入れあつて云ふ。

蝙蝠　ハテ、それは知れた事だ。そんなに駄目を押さずと早く歸らつし〳〵。

ト多左衛門へ思ひ入れあつて

コリヤもう、大きにお喧しうござりました……サ、歸らつし〳〵。

ト無理にせき立てる。門口へ出る。與三郎、捨ぜりふにて、門口へ出て、思ひ入れあつて、內を見廻し

與三　然しなア、歸つた後は差し向ひ

蝙蝠　へヽ、やきやアがるな。

與三　よしてくれ、そんなんぢやアねえわえ。

トこれを誂らへ、新內節の合ひ方になり、こなしあつて、花道へ行きかけ、思ひ入れあつて、蝙蝠安へちよつと囁き、懷より金を出し、蝙蝠安へ遣り、行けといふこなし。蝙蝠安、呑み込み、向うへ入る。與三郎、思ひ入れあつて引き返し、下手の路次口へ入る。おとみ、こなしあつて、それと立ち上がるゆゑ、多左衛門、よろしくとめて

多左　コレ、血相して駈け出すのは、あの與三郎が後を慕つて行くのか。

とみ　エ。

トつかへる。

多左　サ、さうでなくば何ゆゑに。

とみ　わたしや、お前に面目なさに。

多左　ナニ、面目ねえ……篦棒な、そんな事は取り措いて、マア、爰へ來やれと云ふに。
とみ　それぢやといふて。
多左　ハテマア、こゝへ來やれといふに。
とみ　アイ。
　トこなしあつて、多左衞門の側へ來る。
多左　さうして、お主やア、面目がないと云つて、どうする積りだ。
とみ　サア、お前に命を助けられ、三年この方この通り、なに不足なく養ふて下さんすその中へ、今のやうな人が來て、又もお前に苦勞をかけ、それを見てゐるわたしが辛さ。いつそこれなら木更津で、水に溺れて死んだなら、この恥辱を見まいと思ひ、それでわたしは。
　ト駈け出すを、よろしく止めて
多左　コレ、何を短氣な、そんな事を。手前を殺して濟む事なら、船から上げたその後に、この鎌倉へ連れて戻り、疵養生から後々の、肥立つやうにと醫者よ藥と、丹精をするものかえ……今戻つた與三郎が、例へおぬしが兄にもせよ、又、夫なら猶以つて、このまゝ添はせて遣る心、大方こんな事があらうと、推量したのは今日の日まで……コリヤ、今戻つた與三郎が、生脈正しい人ならば、後とも云はずあの人に、おぬしの身の上も埒あけるが、何を云つても今見た始末、向う疵とか切られとか、世間で風聞のある身の上、その心底をとつくりと見屆けた上、又、どうしやう模樣もある程に、短氣を出さずと落ち付いて、おれに任せてこの內に、時節を待つて居やれといふに。
　トおとみへ、よろしく思ひ入れあつて云ふ。おとみも、こなしあつて
とみ　それ程までに……お前の心は嬉しいが、今までわたしが、この身を任せたといふ譯でもなし、よしみもないてたしをば、左程に思つて下さんす、お前の心根、云ふわ聞かせて下さんせいなア。
多左　それは、今云はれねえ。マア〳〵、おぬしが體はどうなりと、納りのつくその時には、委しく話して聞かせるから、案じるには及ばねえ。
とみ　それ程におつしやるなら、時節を待つてゐやうわいなア。
　ト思ひ入れ。この內に、やはり新內の合ひ方、時の鐘になり、權助、提灯をさげ、以前の下男にて、橋かゝ

りより早走りに出て來り、慌たゞしく門口を明けて

權助　番頭さん、急用でございます。

とみ　オヽ、お店の權助どの。

多左　騒々しい、靜かに云へ。

權助　サア、お聞きなされませ……今、店へどこやらか、立派なお屋敷の奥さまといふやうなお女中と、男の侍ひが參りましたよ。

多左　なにをこいつ、云ひ居るぞ……女の奥さま、男の侍ひは知れてゐるわえ。

權助　サア〳〵、このお人が、四五年前に入つた質物の事で、内々聞き合せたい事があつて、是非々々、内の旦那にお目にかゝりたいと申しますが、どうも大旦那の御隱居所、笹目が谷は遠方なり、又藤八さんは、今以てお戻りなされぬから、そこで、あなたを呼びに參りました。

多左　ハテ、三四年あとの質物とは、ムウ……どこのお邸からござつたか。

權助　それから、まだも一つ用がございます。梶原さまのお邸から、明朝までに、爲替の金がお入用、六百兩、持つて來るやうにと、さつき申して參りました。

多左　梶原さまから、御用が出たか。

權助　わたしが思ふには、大方、若殿源太さまが、梅ケ枝の身請けの金と、鎧の遣り繰に、御入用かと存じまする。

多左　何を馬鹿な……何にしても、行かずばなるまい。

とみ　それではあなた、此まゝに又、お店へお出でなさるのかえ。

多左　もうかれこれ四つにもならう、どうで用が片づくと、戻るには遲くなる。今夜は店へ泊るから、戸締りをして、寐るがいゝワ。

權助　しかし、大番頭さんを呼びに來るには、ちと、不叩た役廻りだ。

とみ　また其やうな事を云はずとも、隨分、途中を氣をつけて。

多左　そんなら、おとみ。

とみ　旦那さん。

多左　明日、逢はうワ。

ト權助、提灯をつけ、先に立ち、多左衞門へこなしあつて、橋がゝりへ入る。おとみ、思ひ入れあつて、門口を締める。ホツと思ひ入れ。時の鐘、合ひ方になり

とみ　さつきはマア、思ひがけない與三郎さん、よもやこ



市川小團次の蝙蝠安（萬延元年所演）

の世に長らへては、ござんすまいと思ふたに、命が互ひにあればこそ、また邂逅ふ嬉しさも、過ぐる月日の其うちに、以前に變りし今の身の上。アヽ、なんとしたものであらうなア。

ト思ひ入れ。これをなまめきし合ひ方になり、以前の藤八、前もいくぢなく、以前あつらへやりし二つ物の廣蓋の上へ、白鳥の德利、杯、猪口など載せしを持ち、暖簾口より出て來る。おとみのせりふ、きれぬうちに、奥より出て、窺ふ體。これにておとみ、こなしあつて、門口の締りをせんと、立ち行くを、廣蓋を二重に置き、つか／＼と行きて、おとみへかぢりつく。

エヽ、誰れだえ、よしなさんせ。

藤八　アヽ、コレ、喧しう云ふまい、わしぢや／＼。

ト云ふを、振り切り、突き退けて

とみ　藤八さん、お前、今まで、どこにお出でだえ。

藤八　最前の強請の騒ぎ、臺所へ逃げ込んだ其うちに、多左衞門どのは戻られるし、歸るには歸られず、今まで忍んで、こゝに居た。

とみ　内では、お店から迎ひが來る、大さう店が忙がしい様子、惡じやれをせずと、歸りなさんせ。サア／＼、お歸り／＼。

ト追ひ立てるを、藤八、止めて

藤八　これは又、お前でもないぞえ。おとみさん、最前、おふくどのを賴んで、佃長へ酒肴を誂へて、多左衞門どのゝ留守事に、お前に一つ上げやうと思つたところへ、強請めがうせたゆゑ、ちや／＼無茶苦……下女のおふくは強請の騒ぎで、驚いたところをば、おどしかけ、法をもつて、宿へ泊りがけに遣つたれば、多左衞門どのは店へ泊り、今宵は、わしがこゝへ、最前のやうな、惡い奴のうせぬやう、留守番して、お前とさしで一つ飲み、樂しむ積りぢや。コレおとみさん、一つ上がらんかいなア。

ト手を引つぱるゆゑ

とみ　エヽ、よして下さんせ、よい機嫌な。それどころではないわいなア。

藤八　ハテ、そこを一つ飲んで、わつさりと氣を發散するが、よいわいの。

ト云ひながら、手酌で飲み、よろしくこなしあつて

コレ／＼、氣晴しに、一つお上がり。

ト猪口を持ち行く。おとみ、品よく拂ひのけ

とみ　わたしや、酒はたべぬわいなア。

藤八　ハテ、上がる所では、上がらうがな……コレ、ちよつと〳〵。

トしなだれ寄るを、拂ひ退けて

とみ　エヽ、又しても、いけ煩い。

藤八　コリヤモウ、自暴ぢや。

トかぢりつくを、拂ひ退ける。兩人、よろしく、この以前より與三郎、下手より忍び居て、窺ひゐる事。おとみ、躓くを、押し倒し、藤八、乘りかゝる。この時、與三郎、藤八の首筋を持つて、引き退け、突き廻す。

アイタヽヽ。

ト與三郎を見て、驚ろき

ヤ、おのれは……ハア。

ト顫へる事。おとみ、與三郎を見て

とみ　ヤ……與三郎さんかえ。

與三　おとみ、いけッ太い、野郎だなア。

ト此うち隙を見て、逃げ出す藤八を、引き据ゑて、思ひ入れ。藤八、顫へる事。

とみ　そんなら、今の樣子をば。

與三　今のどころか、さつきから、安を歸して裏から忍び、內の主におぬしが話しも。

とみ　それも詳しく、お聞きかえ。

與三　一間へだてた障子越し、大てい今の概略は。

とみ　それでわたしも落ち付いた。よく、戻つて來て下さんした。モシ、いろ〳〵お前に、云ふ事が。

與三　おれも手めえに、話しがあつてよ。

トこの話しのうち、藤八、そろ〳〵這ひながら、下手へ逃げて行くを、與三郎、見つけ

オイ番頭さん……藤八どの、こんたはどこへ。

ト聲かけられて、藤八、ヂツと止まり

藤八　ちよつと……尿しに。

與三　イヤ、貴さまには、用がある、爰へ來やれ……來いと云ふに……來られずば、いつそおれが。

ト立ちかゝる。これにて藤八、恟りして

藤八　コリヤモウ耐らぬ。

ト逃げ出す帶際を、止めるはづみに、藤八の帶とけて、くる〳〵と廻り、帶ひろどけになる。立ち廻つて、襦袢一つになるを、蹴返し、帶にて引き縛り

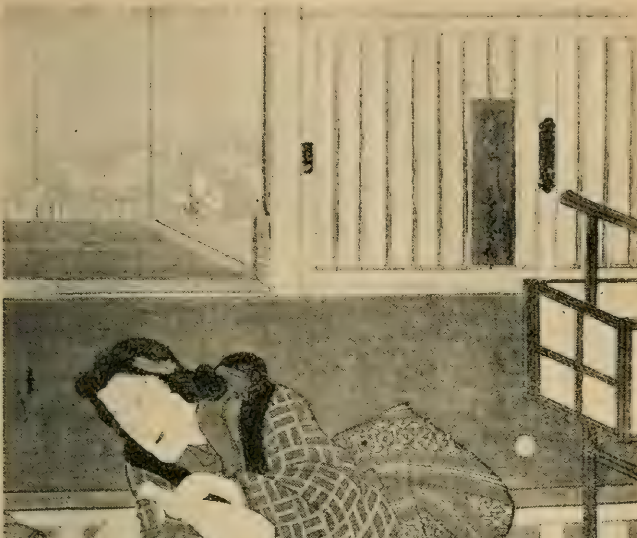
與三　滅多にわれは、逃がされねえ。

藤八　ハア……そんならわしに、見せびらかし。
與三　知れた事だ。そこで存ぶん、見物しろ。
藤八　ハ、ハア。
　ト思ひ入れ。好みの合ひ方。與三郎、おとみ、よろしく、よき所の柱へ、藤八を結へ付ける。此うちおとみ、白鳥の德利より別の酒を、燗德利へ移し、燗をつける事あつて
とみ　與三さん、もうなんにも、心づかひはござんせぬ。マアゆるりと、お上がりな。
與三　こいつは妙だ……たしか、いま聞けばこの酒は、あの野郎が買つたのだな。
とみ　アイ、奇特な人さね……モシ與三さん、今夜は、内の旦那も、お店に用があつて、來る事ではなし、泊つてお出でな。
與三　ナニ泊れ……内所はどうでも、表向き、圍はれてるおぬしが家、亭主の留守には、モウ〳〵、こり〳〵した。
とみ　アレ又、矢張りそんな事、亭主と云ふは、愛しいお前。
與三　今夜が婚アと云ひ初め……とんだ明けを、追ふ奴サ。

ハ、、、。
　トこれを又、新内節の合ひ方になる。
とみ　サア、お燗が出來た、一つお上がり。
　ト猪口を出す。與三郎、取り上げて、おとみ、酌をする事。與三郎、一口のんで
與三　こいつは、いゝわえ。あのべら棒が買つた酒を、亭主のおれが飲むと云ふは、恩もひらも、ない事だ。
　ト云ひながら酒を飲むこなし。
藤八　コリヤ、酷い目に逢ふものだ。間男の、まの字までも行かぬか知れぬうちに、この通り縛られて、買つた酒まで飲まれゝば澤山だ……ア、今日は如何なる、惡日ぞや……ハア、。
　ト思ひ入れ。此うちに與三郎、おとみ、杯を取り替はせる事あつて
與三　コレおとみ、さつきおれが、亭主だと打ちまけて、てきぱき片をつけうと思つたを、なぜ、兄だと云ひ張つたのだ。
とみ　亭主と云へば、もうそれ迄、それよりは、兄さんだと云うておいたら、又なんぞ、お前の力になる時の爲めに、却つてよからうと、それでわたしが、あの時に。

與三　おれも、そこらと察したが、ナニあの時、一か八か、片をつけたも、よかつたらう。
とみ　それぢやと云ふて、いま蔭で、聞かしやんしたら、疑ひは、お前、晴れたであらうがね。
與三　さればなア、一夜も枕を交さぬおぬしを、これ程までに世話をする、主の心が、分らねえわえ。
ト此うちに藤八が紙入、よき所へ落ち散り、中より書き附けなど出かゝりゐる事、これを與三郎、見つけて
なんだ、そこに落ちてゐるのは、紙入ぢやねえか。
トこれにておとみ、紙入を取り上げ、見る。藤八、見て
藤八　ア、、開けては、悪い〱。
與三　ドレ。
ト中の書き附けを見て
なんだ……一つ、金一兩二分なり、若浦さま……浪の戸さま……藝者一組……臺一つ……こりや、大磯の、書き出しだ。
ト此うちに紙包みを、おとみ、取り上げて
とみ　コレ、爰に何か、包んだものが。
與三　ドレ。

ト開き見る。中に錫の曲げ物へ入れし藥あり。與三郎、上包みを見て
ムウ、海内無比……ヨルトスル……交接堂君よし製……この藥は、この近所だ。オヽさうだ、畫師の程よしが頼まれて、弘める藥よ。
トおとみの方へ投げて遣る。
とみ　そりや、なんだえ。
ト與三郎、笑つて
與三　猪口屋藥を、見たやうな物サ。
とみ　オヤ、忌だなう。
ト投げ出す。此うちに一通の書翰を與三郎、紙入より引き出す。
與三　なんだ……兄藤八さまへ……海松杭の松より。
ト思ひ入れある。おとみ、この手紙の上書きを見て
とみ　どうやら覺の、その名宛。
ト思ひ入れ。この時、藤八、いろ〱藻掻き居て、縛られたる帶、とけて
藤八　それ、讀まれては。
ト驅け寄り、件の密書を取らんとするを、與三郎、手早く突き廻し、藤八を當てる。藤八、ハア、と倒れる。



岩井粂三郎のおとみ　河原崎權十郎の與三



郎　坂東村右衛門の藤八（萬延元年所演）

與三郎、こなしあつて

與三　これなる手紙に海松杭の、松と云ふ名は、木更津で、手めえもおれも、怨みのある奴。

とみ　兄藤八さまとあるからは。

與三　さてはこいつは、兄弟だな。

とみ　道理こそ、よく似た顔つき。

與三　とんだ奴に、巡り遇ふものだ。

とみ　早く、讀んで御覧なねえ。

與三　ドレ。

ト開き

先達て、その地へ罷り越し、御話し申し候ふ彼の一品、質入れの儀、其元さま、御取り持ちにて、百五十兩に御預け下され候ふ趣、忝なく、右は下總、千葉家の重寶、直鶴の香爐と申して、大切の品ゆゑ、其うちにぜひ〳〵、この方へ請け戻し候ふ間、左やう御心得下さるべく候ふ。猶、面談の上、萬々申し述ぶべく候ふ、以上……猶猶、この一藥、不用に相なり候ふ間、其まゝ、御戻し申し上げ候ふ、よろしく御計ひ下さるべく候ふ、以上……ムウ、この手紙の文體では、千葉家の重寶、直鶴の香爐を、質入れした密書。ムウ。

ト藤八へこなしあつて

こいつは滅多に、逃がされねえわえ。

ト此うちおとみ、外の藥包みに、能書を添へたるを見つけて、取り上げ

とみ　モシ、爰にも藥の、包みがあるぞえ。

ト出す。與三郎、取つて、開き見て

與三　なんだ、能書があるワ、ドレ〳〵……南蠻密法……アタリマンス、この一藥を、酒にて和し、服さしむる時は、人命を斷つ事、即妙なり……まつた、右の一藥に、辰の年月、日時、揃ひし男子の生き血を混じ、服する時は、年久しき金瘡、古傷たりとも、痕なく治する事、神の如し……こいつは、奇體な藥だな。

とみ　そりやマア、幸ひな、お前の顔や體の疵、治すには丁度よいではないかえ。

與三　違ひない。然し、取り得る事の出來ねえのは、人の生血だ。當時はおれが面や體の疵も、仕事の資本、治さねえ方がよからうよ……時に、この野郎を忍ばせて置く容物はあるまいか。

ト思ひ入れ。おとみ、こなしあつて、二重の押入れより、誂らへの葛籠を出し

とみ　アイ、丁度、おふくがこの葛籠。

ト與三郎、こゝへ出せと仕方する。おとみ、中に入りし風呂敷包みなど引き出す。

與三　中へこやつを。

藤八　コリヤ耐らぬワ。

ト立ち廻つて、中へ入れる事。兩人思ひ入れ。時の鐘。藤八は葛籠の中へ入る。與三郎、蓋をする事、おとみ、邊りへ思ひ入れあるべし。

與三　こいつを囮に、あしたの仕事。

とみ　モシ、それはさうと與三さん、どういふ譯でこの手紙の、千葉の屋敷の寶をお前が。

與三　その香爐は、ちつと、こつちに入用ゆゑ、コレ。

ト囁く。

とみ　そんなら葛籠の藤八を、玉に遣つて、和泉屋へ。

與三　出來合密男、つゝらもたせ。

とみ　何かの手筈は

與三　寐ながらゆるりと。

トこれを聞き、葛籠の中より藤八、窺ひ出て

藤八　どうやら、味な。

ト顔を出すを、與三郎、おとみ立ち寄り、ぴつしやり締めろ。

與三　からんだ惡緣。

とみ　切つてもきれない。

ト與三郎の顔を見る。

與三　命がありやア。

トおとみを引き寄せるを、チョンと木の頭。

話せるなア。

トきざみよろしく、　ひやうし幕

四幕目　名所町質店の場

役名――和泉屋多左衛門。山鹿毛平馬。藍屋娘、お鶴。手代、松兵衛。下男、權助。下女、お米。伊豆屋與五郎。隼人妻、小笹。番頭、藤八。妾、お富。切られ與三郎。

本舞臺、少し上の方へよせて、二重の亭屋體、正面、茶壁の土藏、扉前口の前の印つきし質屋の體。この前に、柴垣、庭模樣、石燈籠など、好みの通り、よ

き所へ枝折り戸。すべて和泉屋、庭内の模様、好みの通り飾りつけ、爰に松兵衛、以前の手代、前掛け、權助、前幕の下男、半蔵、油店若い者、若い衆兩人一二、同じ拵らへ、外に番人一二、下男二人は、六尺棒を持ち立ちかゝりゐる。皆々、前幕の藤八が行方が知れぬといふ捨ぜりふよろしく、テンツ、通り神樂にて、幕明く。

ト越後獅子の合ひ方になり

松兵　コレ、どうだよ、藤八が行方は知れたかよ。

番一　サア、昨夜から、どこへござつたも知れぬといふ話でござりまする。

若一　近所のお方もそれ〲に。

若二　庄屋さんのお骨折で

兩人　方々尋ねましたが、かいくれ行方は知れませぬ。コリヤマア、どうしたものでござらうなア。

ト皆々、この筋のせりふ、口々に云ふ。

權助　コリヤ、おれが察する所、藤八さんの行方は、松兵衛さん、お前知つてござらうね。

松兵　ナニ、おれが知つてゐる位なら、氣を揉むものか。心當りへは、大がい迎ひを出したワ。

番一　シテ、そのお心當りにも、番頭さんは。

松兵　されば、居ないから、安心ならぬ。サ、コレ〲、半蔵、權助、まぢ〲してゐずと、どこか、藤八が入りこみさうな所を、考へて見やれ。どうだ〲。

トこの中、權助、考へ

權助　ムウ、解つたわえ。

ト手を打つ。

皆々　知れたか〱。

權助　コリヤ、この權助が鑑定では、なんでも、店にござつては濟まぬ事が出來たから、そこで、藤八さまは。

半蔵　藤八どのは、どうさしやつた。

權助　寺號山號と、やらかしたのだ。

松兵　寺號山號とは、なんの事だ。

權助　云はずと知れた、引負の云ひわけなさに、寺號山號一目山に、隨德寺だ。

ト駈け落したといふ思ひ入れ。

松兵　エヽ、緣喜でもない事を吐かしやアがる。藤八に逃げられて耐るものか……コレ半蔵、きよろ〲せずと、心當りを考へろ。

半蔵　無理ばつかり、どうしてわたしが。

權助　コレ〳〵松兵衛さん、氣を揉まつしやるな。大方、煤はきには、出るであらう。

松兵　エヽ、なにを白痴漢が

半藏　それでも、お前は氣を揉みなさるが、大番頭の多左衛門さまは、平氣の平左衛門で居さつしやります。

權助　大番頭が、落ち付いてござるに、こなたが氣を揉むは、駄目な事だ。

ト松兵衛、ムツとして

松兵　こいつら、おれがいふ事、用ひねえな。

權半　それでも、どうも仕様があるものか。

松兵　エヽ、口答へを吐かし居るな。

ト有り合す棕櫚箒にて、權助、半藏を追ひ廻す。若い衆皆々

五人　マア〳〵、お待ちなされませ〳〵。

ト捨ぜりふにてとめる事。この時に、松兵衛、手拭に包みし物を取り落す。

權半　そりやこそ、何か落ちたぞ〳〵。

ト皆々見つけるを、松兵衛、その上へべつたり座り

松兵　こりや、何でもねえ〳〵。

ト内懐より手を出し、股より懐中へ引込み

ア、コレ〳〵、爰へ構はずと、もう一遍尋ねて見ろ尋ねて見ろ。

權半　それでも、今のは。

松兵　ハテ、おぬしたちは構つた事ぢやねえ。もしもしお庄屋さん……コレ、半藏々々……コレ〳〵權助々々、とかく朋輩の好みといふものは、さうしたものでもねえ。ともかくも、藤八を、今一應さがして見やれ〳〵。

庄屋　成る程、こんなに云はつしやる。サア〳〵、お前方もござりませ。

權半　マア、捨てゝお置きなされませ。

ト思ひ入れ。

松兵　エヽ、情の強い、行かねえかい。

五人　サア〳〵、探しなさい〳〵。

ト權助、半藏をせり立てゝ、皆々下手へ入る。松兵衛、後に殘り、今落したる手拭に包みし、前幕の鶴の香爐を出し、こなしにて

松兵　藤八が、いつぞやから、ちよろまかしておいた、鶴の香爐、昨夜から、あいつめが行方が知れぬ。若しもの時に危ないものと、こつそりおれが出して來たが、今のはづみで落したが、種を見つからぬで、仕合せ〳〵……

しかしマア、藤八は、どこへうせたか、いつその事に、これきり戻らぬ時は、又こつちにも仕様があるが……マア、天狗にでもさらはれたら。しかし、神隱しといふ顏でもない……ア、、なんにしても、この香爐、持つてゐても險呑だ……どこぞへしのばせておかずばなるまい。

トこなしあつて、奥へ入る。唄になり、橋がゝりより、前幕の與五郎、着流し、庭下駄を穿き、下女およれ、莨盆をさげ、庭下駄にて、案内しながら、附き添ひ出て

よれ　いづれにも、お心遣ひはござりませぬ。マアく、これへお通りなされませ。

與五　忝ならござりますが、しかしマア、何の仲でも、それくの禮儀もあるに、おつるどのゝ部屋へ、直々、かうして來るも、無遠慮千萬。

よれ　ハテ、何であらうと、おつるさまが、大抵お待ちかねで、お出でなさることではござりませぬぞえ。

與五　それでも、どうやら心が後れて。

トこんな事云ひながら、上の方へ來る。おつる、以前の形にて出て來り

つる　ヤ、與五郎さまか。

與五　おつるどのか。

つる　ようお出でなされましたなア。

よれ　マアく、これへお出でなされませ。

トこれにて、緣先へかけて、與五郞、懷中より、封を開きし文を出し、持ちて

與五　きのふ、不思議に、お前に逢ふて、この鎌倉に忍んでござる樣子も知れ、マア、安心をしましたわいの。

よれ　わたしも、その時、いろくと、何からお話し申さうかと思ふた內に、あの平馬づらが邪魔になり、本意ない別れをいたしました。

與五　それから宿へ戻りし所、今朝早う、お前からこの文が來る折も折……ちと、わしもお前に逢ふて、聞きたい事があつたゆゑ、それゆゑ、わざく、今日こゝへ。

よれ　何にせえ、おつるさまが、きのふはあんまり本意ないお別れ、どうぞ、しげくお話しがなされたいと仰しやるゆゑ、私しがお勸め申したそのお文。

つる　何であらうと、こゝは端近……何かの事は、わたしが部屋へ。

ト手を取り

よれ　ちやつとお出でなされませ。

　ト せき立てるゆゑ、與五郎、こなしあつて

與五　ア、コレ〳〵、待たつしやれ……どうしてマア、馴れ〳〵しう、おぬしが部屋へ行かれうぞ。

よれ　これはマア、お固いにも程がある。

つる　お前とわたしは、親と親とが、お許しなされた女夫仲、誰れに遠慮がござんせうぞいなア。

與五　ぢやと云ふて、表向き、婚姻とゝのはぬその中に、そなたの部屋へ落ち付いて話するも、何とやら、もしも猥らな事あると人の思はく。又、木更津の舅どのゝ手前と云ひ、殊にこれなる和泉屋は、わしが家とは、今以つて懇意ならぬ事なれば、猶更もつてすまぬこと。

つる　そんなら、なぜにわたしをば、早う江戸のお前の内へ、呼び迎へては下さんせぬ。

與五　されば、おぬしを江戸へ呼び迎ふるその時は、いやでも應でも伊豆屋の跡式、この與五郎が相續をせねばならぬわいの。

よれ　さうした時は、お前さんとは、天下晴れたる御夫婦仲、それをばとやかくと仰しやるは。

つる　どうでも足らはぬわたしゆゑ、外に江戸に増花の、移り心のあつての事か。そりや胴慾ぢや、御胴慾でござりますわいなア。

　ト思ひ入れ、與五郎、邊りへこなしあつて

與五　ア、コレ〳〵、おつるどの、決してさういふ譯ではござらぬ。さりながら、おぬしと明日にも婚姻して、伊豆屋の跡式相續すれば、はじめ、わしへ義理立の御放埒が元となり、不慮な事から親々の勘當の、身とならつしやれた兄者人へ、どうも濟まぬ。何であらうと、與三郎さまの、お身の納まりのつく迄は、どうも心に任せぬ仕儀。

　ト思ひ入れあつて云ふ。これにておつる、およれも得心の行く心よろしく、與五郎、こなしあつて

早速ながら、聞きたいは、この和泉屋の内へ、千葉家の重寶、眞鶴の香爐が、もしも質入れになりしといふ、何か話しは聞きやらぬかいなう。

　ト思ひ入れ。

つる　奥と店とは隔つゆゑ、詳しい樣子は知らねども、昨夜ちらりと話しに聞いたは。

よれ　オヽ、どこやらのお屋敷から、鶴の香爐が質入れしてあるならば、密々に請け戻したいと、尋ねてござつた、屋敷のお女中。

つる　そのお方をば、直々に見うけはせねど、話しの様子が、きのふ吾妻の境内で、平馬づらに逢ふた時に、難儀を救ふて下すつた、そのお女中に、似寄りのものごし。
　ト思ひ入れ。
與五　それこそ、てつきり小笹さま……スリヤ、あの書附を御持參にて、ゆふべの內にこの店へ。
　ト思ひ入れ。
つる　では、そのお女中は
よれ　御存じの
與五　サア、兄與三郎さまの實の母御、鶴の香爐紛失ゆゑ、穗積の家の難儀となり、お心遣ひの何かのお話し。せめてはあなたのお力にならうと思ふも、義理のある與三郎さまへ、われらが寸志……シテ、かの品を、質請けなされしか。
よれ　どうやら様子は知らねども、今日また、店へお出でなさる約束ぢやといふ昨夜の話し。
つる　もしも、あなたが御用があらば、わたしの部屋で。
よれ　お待ちなさる丶その間、おつるさんのお願ひを。
兩人　どうぞ叶へて。
　ト兩人より、與五郎を引き立てる事。

與五　それぢやと云ふて、この家の手前が。
つる　ハテマア、ちよつと。
　ト兩人、手を持つて、引き立てる事よろしく、捨ぜりふあるべし。この中に、松兵衞、窺ひ出て、與五郎を突き退け
松兵　どつこい〱、ならぬぞ〱。
よれ　お前は、松兵衞さんか。
　ト與五郎、およれ思ひ入れ。松兵衞、おつるに向ひ
松兵　コレ〱おつるさん、お前は胴慾なものぢやぞや。何やら面倒な譯があつて、緣組した聟どのの方へ婚姻もならぬ仕儀……段々年頃にならつしやるに、さぞ、けなるからうし、淋しからうと、心を通して、わしが日頃くどけども、ついに一度の挨拶なく……いつの時にか、男を引き入れさつしやつたな……それでは濟まぬ〱。
　トこなしあつて、與五郎に向ひ
コレ、野郎も、どこからうせた。
よれ　マ、コレ〱、滅多な事を云はしやんすな。このお方は、おつるさんの爲には大事のお方。
松兵　その大事のお方が、氣に喰はぬワ。ヤイ、二才め、わりや、どこの野郎だ。

與五　ア丶、コレ〳〵、滅多な事を。わしは、おつるどのと猥らな事はござらぬぞよ。

松兵　云ひ譯はならぬわえ。

ト立ちかゝる。

つる　ア丶、コレ〳〵、あなたは、わたしの殿御。

よれ　おつるさんの聟さまぢやわいなア。

松兵　イヤ〳〵噓ぢや〳〵、おつるさんの聟さんは、江戸にござると聞いたばかり、どうして、この鎌倉に居るものか……お前が、わしに見せつけて、色をすれば、もうもうこつちも自暴だ、あの野郎に見せつけて、お前をここで。

トおつるへ取りつく。

與五　これは無體な。

ト止める事よろしく

松兵　エ丶、退きやアがれ。うぬ。

ト以前の棕櫚箒にて、打つてかゝる。立ち廻り、この棕櫚箒を引つたくり、松兵衞、またおつるに縋りつく。これを、およれ隔てる仕組よろしく、與五郎が取りし箒を引つたくり、松兵衞、與五郎へ打つてかゝる。この仕組よき程に、前幕の多左衞門出て、松兵衞を突き飛ばし、又かゝる所を突き廻し、よろしく止めて

多左　コレ松兵衞、何を騷ぐのだ。

松兵　ヤア、さういふこなたは、大番頭。

つる　多左衞門さんか。

ト松兵衞、止められながら

松兵　ア、惡い所へ。

つよ　ようお出でなされましたなア。

多左　コレ、おぬしは、箒を持つて、誰れを打たうと思ふのだ。いやさ、誰れを打つ氣だよ。

ト安兵衞、箒を持つて、うぢ〳〵しながら

松兵　エ丶、コリヤ……今、つい、ちよつと蜘蛛の巣を拂はうと思つて、それで箒を持ちました。

多左　コレ、今日は、藤八も店に居らず、帳場も空いてゐるのに、こゝへ來て、蜘蛛の巣を拂はうとは、さて〳〵おぬしも、まめな男だ。こゝの事は構はずと、店をちつと、氣を付けさつせえ。

松兵　サア、店を氣を附けるのは、當然のわしが役だが、店ばかり氣をつけても、肝心の奥が猥ゆゑ、蜘蛛の巣どころか、預り娘のおつるさんさへ、蟲がつきますわえ。

トこの内に、ちよつと與五郎が、以前落したる、おつ

ろより渡したる文を拾ひ、人々に見えぬやうに袂へ隠す事あつて

それだから、蜘蛛の巣の次手に、その蟲めも叩きのめしてやらうと思つて。

ト立ちかゝるを、多左衛門とめて

多左　これはしたり……その蟲の譯ならば、わしもとうから知つてゐる。

ト與五郎、おつる、およね思ひ入れ。

コレ松兵衛、おぬしも、蟲の同類だらうが。

松兵　エ。

トぎつくり。

多左　要らざる事に構はずと、しかけた帳合を、片付けさつせえ。

松兵　それだと云つて、見遁しては。

多左　ハテ、この蟲より、おぬしが頭の蠅でも、逐やれと云ふ事さ。

松兵　とは云へ、よくも。

多左　どうしたと。

トきつとなる。松兵衛、こなし。

よね　ござんせいなア。

トこの内、およね、おつるへ囁く。はやり唄になり、松兵衛を引つぱり、兩人奥へ入る。後に、多左衛門、思ひ入れあつて

多左　ハテ、たわけたやつだわえ。

トこなし。與五郎、おつる、こなしあつて、おつるも奥へ、與五郎は、つか〳〵と橋懸りの方へ行きかける。

ア、もし、お待ちなされい。

ト兩人、構はず立ちかけるを

コレサ、お二人とも、マアお待ちなされい。

ト與五郎、こなしあつて、立ち止まり

與五　サア、お言葉ではござれども、初めて参りしこの家の内。

つる　さう云はるゝ程、今更に。

與五　あたりも見られ

兩人　面目なうて。

ト行きかけるを

多左　これはしたりおつるさん……與五郎さん。

兩人　エ。

トこなし。

多左　心遣ひには及びませぬ。マア、こゝへござりませ。
　ト兩人、こなしあつて、立ち戻ること
與五　そりや、われらをば與五郎と
つる　とくよりお前は
兩人　御存じあつて。
多左　さればサ……おつるどのゝ緣組あつた、伊豆屋喜兵衞どのゝ御子息と、一目見るからわたしが推量。
つる　そんなら、何かの樣子と云ひ
與正　われらが身分を推量あつて
　トこの内、三人、二重へ上り
多左　左樣でござります……チト、話したい事もあり……邪魔を拂つてとゞめたも、このおつるどのは、この家に繫がる緣の預り娘、さすれば主人の娘御も同じ事……この和泉屋の後見して、店を預かる多左衞門へ、御斟酌には及びませぬワ。
與五　サア、そのお言葉の尾について
つる　お前が、今のお話の。
　ト思ひ入れ。
與五　とは云へ、未だこなたとは、懇志にあらぬわれが親元……初めて參つて早急には。
　ト思ひ入れ。
多左　ハテ、おつるどののその爲には、お前は聟の與五郎さん。
　トこれにて、兩人顏合見せ、こなし。
ようこそお出で
　トこなし。三人よろしく
なされました。
　トこれを二度目のしらせにて、好みの合ひ方になり、
三人、話し合ひの模樣よろしく、この仕組にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、常足金網形の蹴込み。正面、暖簾口へ井印の紺暖簾をかけ、上の方に帳面、天秤など、誂らへの通り、兩替屋の店。上の方へ、附け家體を押し出し、こゝへも、別間より、奥への入口の暖簾をかけ、下手、平舞臺にして、一間折り廻し、油樽などの書割、こゝへ、風よけ障子、覆ひしあかり見の油皿、あかりを灯したる體。よき所へ戸棚、書狀さし、質物油の諸帳面、好みの通りに引つかけあり、家體、欄間へ燕の巣店へ釣つてあり、欄間外

へ、一間通りの塗家造り、二階の格子窓、庇瓦の體よろしく、下手の暖簾かけて、路次より庭つゞき、奧へ入口。この前、箱の用水桶、これへ、雪の下名所町と記し、軒口へ井の印、和泉屋と記したる暖簾かけあり、誂らへの通りに飾りつけ、いつもの所に門口、平舞臺へ薄べりしく事。この二重に、松兵衛、以前の手代にて、前幕の香爐の箱を持ち、片手に、以前の文を持ちゐて、立ち身、テンツ、角兵衛獅子の鳴り物にて、道具納まる。

ト稽古唄の合ひ方になる。

松兵　ア、、コレ、、どうぞして、木更津から預けられてゐる娘のおつる、手に入れやうと思ふ中に、先刻見かけたあの二才め……さては初物を占められたと思つたら。

ト件の文を出し、こなしあつて

おつるから遣つたるこの文の樣子では、あいつめは許嫁の與五郎と見えるわえ……道理こそ、あの多左衛門が邪魔をして、與五郎めを見のがす體、思へば〳〵腹の立つ。拾つたこの文を玉にして、與五郎めを罪に落す魂膽の、細工はりう〳〵、仕揚げを……さらば見せてくれう。

ト邊りへこなしあつて、右の箱の中より、中籠に吹きかへし、鶯鳥を出し、その中へ、件の文を一緒に入れて

藤八が、先達つて、ちよろまかしたるその後へ、この文を入れて置くワ。後日に詮議といふ時には、文の名宛は與五郎なれば、差し詰め、あいつへ疑ひがかゝり、あのおつるにも、氣をもませて、叶はぬ戀の意趣ばらし、巧いワ〳〵。

トこなしあつて

コレ久助々々、半藏はどうした。長松は居ぬかえ。

ト呼び立てる。半藏、出て來り

半藏　エ、、騷々しい、なにをお呼びなされます。

松兵　コレ〳〵半藏々々、これを、道具質の棚へ、上げて置かつせえ。

半藏　これをかえ……それに、險しう呼ばねえでも、よささうなものだ。

松兵　ハテ、大事の質物だから云ふのだ。エ、、庫へ持つて行かつせえ。

半藏　アイ〳〵。

ト立ちかける。

松兵　コレ、中を見る事はならぬぞ。
半藏　なんの、見るものかな。
ト小言いひながら、上手の暖簾口へ入る。松兵衞、後見送り
松兵　先づ、あの方はよしと。
トこなしあつて、又懐中より、以前の鶴の香爐を出し
然しながら、この香爐、どう考へても持つてゐるのは險呑だ。ア丶、どうぞい丶匿し所がありさうなものだわえ。
ト方々を見廻し
神棚の燈籠の中は、尤も古し、油樽の中へ入れては、取り出すに手がよごれる。植木鉢の中でもあるまい。
トいろ〳〵考へ、不圖、燕の巣を見つけて
あるわえ〳〵。この燕鳥の巣の中へ、鶴の香爐を出居衆に入れる。これは、誰れも氣がつくまい。奇妙々々。
ト好みの合ひ方となり、踏臺を持ち出て、これへ登り、件の香爐を、燕の巣の中へかくす事、捨て臺詞よろしく、この中に、下手より以前の權助、こなしあつて、下手へ忍ぶ。松兵衞、いろ〳〵よろしくこなしあつて、巣の中へ匿し、踏臺を下りて、下より見上げよし〳〵、どう見ても、燕の巣だ。こりや、誰れも氣がつかぬ。ア丶、われながら、智慧の程、遖れ感心。
ト又この中踏臺へのろ。
又とはあるまい。
トこの中に、揚げ幕より、前幕の山鹿毛平馬、羽織、袴にて、大小、雪踏がけ、後より、若い衆の中間一人附き添ひ出て來り、平馬、家來へ囁く。家來、ハッとこなしあつて、橋懸かりへ入る。平馬に、こなしあつて、門口へ立ち寄る事、この中に、松兵衞、右の臺詞きれて、仕組よろしく、門口より
平馬　頼み申す。
ト松兵衞、吃驚りして
松兵　ワア丶。
ト平馬を見て
ヘイ、どちらから、お出でなされました。
平馬　身共は、山鹿毛平馬と申して、鎌倉の昵近、先年、お預け申したる質物の事で、罷り越した。
松兵　ヘイ〳〵、それはようお出でなされました……コリヤ子供、お茶、莨盆もつて來い
トこの内、平馬、上の方へ通る事。この時、奥より、

若い衆兩人、幕明の手代、丁稚、茶を汲み出ろ。若い衆の手代、貢盆を平馬の前へ出す事など、よろしく

コレ、何を勝手へばかり入つてゐるのだ。そこの踏臺を片付けさつせえ。

若一　ハイ／＼……誰れが、こゝへ踏臺を出したのだ。

若二　今、松兵衞さんが使はしつたのだ。

松兵　エ、、早く片付けろ。

ト呵りちらすことよろしく、捨て臺詞あるべし。平馬この内に、松兵衞を見て

平馬　コレ／＼、お手前は、先年木更津にて見受けたる松兵衞ぢやな。

ト云ふ内、松兵衞も、平馬を見て

松兵　なる程、その時のお侍ひさま……でござりましたな。

ト以前、隱した香爐の事に心づき、燕の棚をきよろきよろ見ながら

もう、三年越前の事、大きに、お見それ申しました。眞平御免下さりませ。

平馬　なんの／＼、とかく、一人でも馴染の顏があると申すは、相談もいたしてよいて。

松兵　シテ、お出でなされました御用の筋は。

平馬　それは別儀でない。先年、質入れいたしおいた香爐を請け戻したい儀について、今日わざ／＼參つた。

ト松兵衞これにて、こなしあつて

松兵　イヤ、それは丁度よい……かの香爐を請け戻し下さるとは、私し方もつけの仕合せ、ようこそお出でなされました。

平馬　尤も、お手前には、一別以來ぢやが、藤八どのには、面會して話し合つておいた事もあるサ。

松兵　左樣々々、たしか右の品は、預りの手形が、お前さまの方へ、お渡し申してある筈でござります。

平馬　サア、その手形に、ちと仔細があつて。シテ、藤八どのには、いかゞなされたな。

松兵　ヘイ、藤八は

トこなし、この時、奥より權助、出て來り、平馬を見て

權助　ヤア、お前は、きのふの侍ひだの。

平馬　さういふわれが、この家の下男か。

權助　オ、さうだ、吾妻の森で、よくもおれをひどい目に遭はしやがつたな。

松兵　コレ〳〵、あなたさまを、何と思ふてゐる。大事の大事のお客さま、旦那さまぢやぞ。

権助　旦那どころか、團子のやうな瘤をこしらへてからに。

松兵　これサ、失禮いたすなと申すに、どうしたものぢや。

平馬　コレ〳〵松兵衞、そんならこゝは、おつるが内か。

松兵　何と仰しやりますえ。

平馬　イヤサ、おつりきな家ぢやと申す事ぢや。

ト云ひ紛らす。権助、こなし。松兵衞、制してゐる。誂らへの合ひ方になり、向うよりおとみ、好みの着つけ、着流し、ぶら提灯をさげて出て來り、直ぐに門口、くゞり内を窺ひ

とみ　モシ〳〵、権助どん、一寸お頼み申します。

ト門口を細目にあける。権助、思ひ入れあつて

権助　さういひなさるは、どなたでござります。

とみ　アレサ、わたしだわな。

権助　モシ、お前さんは、源氏店のおかみさん、マア、内へお這入りなせえまし。

とみ　アノ、藤八さんは、お内かえ。

権助　藤八さんは、今朝出て、まだ歸らないが、用があるなら、内へお入りなね。

とみ　そんなら、ちつとの中、待つてゐてもよからうかねえ。

権助　ナニ、構ふ事はござりませぬ。

とみ　お店にどなたか。御免なさいましよ。

ト内へ入る。平馬、松兵衞は、おとみへ思ひ入れ。

お店へは初めて參りましたが、あの藤八さんはお留守だと承はりましたが、わたしや、ちつとお目にかゝらにやならぬ譯で參りましたが、もう、お歸りなさうな時分でござりますかね。

松兵　されば、その藤八どのは、晝前から用達に出られて歸らぬが、シテ、権助、このお方は。

とみ　アヽ、わたしや、お前さんにはお初にお目にかゝりましたが、この権助どんには、毎日のやうに。

権助　逢はぬといふ事のねえ……モシ松兵衞さん、大番頭さんの、ソレ。

ト小指を出して見せる。松兵衞、思ひ入れあつて

松兵　ハヽア、そんならお前が、おとみさんかえ。

とみ　わたしも、お前さんのお名は聞いて居りましたが、

ついお出でなされねえから、碌に御挨拶もいたしません。堪忍しておくんなさい。

松兵　それはお互ひの事、しかし、お前が店へござつては、旦那の手前、多左衛門さんの思はく、何ぞ急用でも。

とみ　用と云ふのは、別の事ぢやないが、お店の藤八さんに、是非お目にかゝつて、ちとお話し申したい譯があつて。

松兵　アヽ、それで、夜分ござつたのかえ。

ト平馬、思ひ入れあつて

平馬　最前から、樣子を見るに、どうか見知りのある面ざし恰好、確かに以前は木更津で。

とみ　エ。

トぎつくり

平馬　オヽ、さうだ。物腰格好、寸分違はぬおとみぢやな。

とみ　ほんにあなたは、平馬さまではござりませぬか。

松兵　そんなら旦那さまは、おとみさんの身の上を、よく御存じでござりますかえ。

平馬　イヤモウ、ずんと入魂いたした某、しかし、その節噂に聞くには、水死とやらいたしと申す事、聞き及んだが、それは全く世の取り沙汰、まづは堅固で目出度い目出度い。シテその節に。

ト云ひかけしを

とみ　モシ／＼平馬さん　以前はともあれ、今ぢやアわたしも眞面目な堅氣、過ぎ去つた身の上話は、禁句だから、よしておくれよ。わたしや、こゝの藤八さんに用があつて來たから、その積りでゐておくれな。長い月日にやア、いろ／＼と變るものだねえ。

ト思ひ入れあつて云ふ。

松兵　カウ／＼おとみさん、お前、藤八さんに逢はうと云ふは表向き、家は多左衛門さんが歸らねえから、それゆゑ迎ひに來なすつたのであらう。さうだ／＼、それに違ひあるめえがね。

とみ　松兵衛さん、何だねえ。女だと思つて、馬鹿にしておくれでないよ。カウ權助どん、氣の利かぬ人だ、煙草と煙管でも貸しておくれよ。

權助　何だか、さつぱり樣子が解らない。モシ、煙草もあげるが、お前、そんなに云ふては、お店へすみますまいぜ。

とみ　なぜ濟まないのだえ。わたしや、藤八さんに逢ひに

來たのサ、お前方の知つた事ぢやないから、留守なら、歸るまで待たうわな。

　ト煙草盆を引き寄せ、一服呑んで通らぬ思ひ入れ。

エ、、煙管までつまつてゐるとは、通りの惡い辻占だなう。

　ト簪を取つて、火皿の掃除する事。

平馬　身も、先刻より、藤八が歸宅するを待ち申すが、それなるおとみも、藤八へ用事の趣、殆んど待ち草臥れたわえ。

松兵　イヤモウ、定めし、御退屈でござりませう。店でなければ、御酒一つ獻上と申す所でござりますが、心に任せず。

平馬　身共も、實はその心なきにしもあらず、然し、酒はたぼでなければ、飲めぬての。

松兵　左樣々々、なま中のお酌より、おとみさんのお顏を拜みながら一口やつたら、嘸うまい事でござりませう。

とみ　これサ、松兵衞さん、お前は、程のいゝ人だなう。その口車ぢやア、ぞつとする程惚れる氣になるが、わつちばかりは、挪揄と畚には、乘りたくないよ。

平馬　こりや御尤も。

松兵　なか／＼達者なものぢや。顏と口とは又格別、時におとみさん。藤八どのに用もあらうが、いづれ後方に來さつしやれ、その中には戻るであらう。

權助　然し、店は四ツ限りぢや。お前、こゝへ來てござつて惡いから、明日の事にさつしやれ、なう松兵衞さん。

松兵　さうぢや／＼、ちとこゝに內談もあれば。

權助　サア／＼、今夜はお歸りなせえ。

松權　女が店に居ては、見苦しいわいの。

　トおとみ、ムツとして

とみ　なんだえ、靜かにおしな、見苦しいとは、わたしの申す事かえ。から見えても、お孤ぢやないよ。いけ好かねえ、歸れと云やア猶のこと、藤八さんに逢ふまでは、川端へも出るものかな、悔しきやア指でもさして見なせえ。憚りながら、女が違ふよ。お店の邪魔になりやアしめえし、意地の惡いお品だなう。

平馬　イヤハヤ、呆れて物が云はれぬ……シテ、身共が香爐の一件、藤八は、何をしてゐるであらう。

松兵　されば、もう歸る時分、何にしても、大番頭さんを呼びませう……モシ、多左衞門さん／＼。

　トこの時、奥にて

多左　オイ〳〵、今、それへ行きませう。

　ト出て来り、平馬へこなしあつて

大きに失禮いたしました。

　トこれにて、平馬、思ひ入れあつて

平馬　初めて逢ひしお手前は。

多左　多左衛門と申す者でござります。先づ平馬さま、あなたさまには、初めてお目にかゝります。シテ、御用の筋は。

平馬　さればサ、先刻よりも、この松兵衛にも申す通り、かねて質入れいたし置いた、かの一品、近々殿の御用に付き、請け戻さねばならぬ仕儀、それゆゑ、わざ〳〵罷り越した。

多左　それは、有り難うござります。あなたさまからもお頼みで、御大切なる品物。お預りの手形へ、店の印形すゑまして、則ち元利の金子と、右の書付引きかへに、香爐をお渡し申しまする積りでござりまする。お請け戻しとおつしやるからは。元利合せて、金高は二百五十兩……右の手形、あなたさまが御持參下さる上からは、直さまお渡し申しまする。

平馬　イヤ、そこに話が、一つござるて。右の手形をば、われらが同役林庄助と申す者へ、預けおきしに、急に殿の御用向にて上京なし、粗相ながら右の手形、懷中いたした儘、出立したれば、取り戻すには時日もかゝり、その中に、右の品なければ、ならぬ仕儀なれば、たとへ手形がなければとて、置主は、かく云ふ身共の事、金子さへ出せば、よもや、仔細はあるまいと存じて、それゆゑ、請け戻しに參つたわえ。

　ト多左衛門、思ひ入れあつて

多左　そりやはや、間違ひもござりますまいが、もともとこの品は、藤八が呑み込んだ事、右の印鑑をすゑた書附がござりませぬ時は、どうも、あなたへ右の香爐をお手渡しいたす事は、なりますまい。

平馬　ムウ。

　トこなしあつて

成る程、貴公の言葉、そこも尤も……サア、これからが掛け合ひでござる、初めより藤八が呑み込み居る事、外の仁では話が解らぬ。シテ、二番々頭の藤八は。

　ト松兵衛、呑み込まぬゆゑ。

松兵　その藤八は、昨夜から出まして、留守で、内には居りませぬ。

平馬　コレ〳〵松兵衞、おぬしも少しはきつかけを、呑み込んで居りさうなもの、留守だとばかりでは相濟まぬ……シテ、二番々頭の藤八は。

　ト おとみ、思ひ入れあつて

とみ　その藤八さんに逢ひたいから、早く逢はしておくれなね。

多左　さう云ふのはおとみぢやないか……おぬしやア、ここへいつの間に。

とみ　アイ、わたしや、たつた今し方、來る氣もなしにお店へ寄りましたが、つい、藤八さんにお目に懸かつてお話したい事、すぐ歸らうと思ひましたが、生憎お留守でわからぬゆゑ、ついうか〳〵と待ち合せて、內所の事も知れ、もう隱れても惡いから、いつそ藤八さんがお歸りなら、頼みたい事もあり、又二つには、香爐の……イヤから〳〵と話をしたら解る事、よもや歸らぬといふ事はあるまいねえ。

多左　何の樣子か知らねえが、もうかれこれと五時過ぎ、內の事も不用心、ならう事なら明日にも解らう。今でなアけりや惡いのか。

とみ　アイ、ちつと都合が惡いから。

多左　ムウ、さういふ事なら、それでもいゝが、あの藤八は、何をしてゐるであらう。

　ト 煙草を吸ひつける。誂らへの合ひ方になり、向うより前幕の與三郎、以前の葛籠を背負ひ出て來り、本舞臺を見て

與三　向うの角が和泉屋だな、よし〳〵、素的に持ち重りがすらア。

　ト 本舞臺へ來たり、內の樣子を窺ひ、門口の用水桶の上へ、右の葛籠を下ろして、門口へ來たり、手拭を取つて

御免なせえ。

　ト 云ひながら、內へ入る。邊りを見廻し、おとみを見て

ヤア女め、何をしてゐやアがる。てつきりこんな事だらうと思つて來た。

とみ　與三郎さん、堪忍しておくれ。わつちやア面目ないよ。

多左　ナニ、面目ねえもいゝや。動きやアがるな、たたツ斬るぞ。

とみ　そんなに云はなくつてもいゝわな。

與三　モシ、どなたも御免なせえ。とんだ女つてうが、お内へ舞ひ込みましたねえ。
多左　誰れかと思や、與三郎どんぢやないか。
與三　ヘイ……番頭さん、その節は、大きに有り難うござります。
松兵　そんならこの人を、多左衞門どのには。
與三　アイ、番頭さんにはお近附き。
　ト平馬、與三郎の素振りを見て
平馬　さて〱、年頃と云ひ、屈竟の若い者ぢやが、面體と云ひ、體へも、さて凄まじい刀疵が。
權皆　ヤア〱、恐しい顏の疵。
　ト皆々、與三郎の顏を見て、仰山に呆れる事。
與三　なんだ、刀疵がどうしたと、あんまりキョロ〱、面ア見るなえ。晝狐でも逐ひ出しやしめえし、馬鹿な面な……コレ、年季野郎め、莨の火でも持つて來い。
　ト皆ぶる〱する。權助、氣味わるさうに
權助　ハイ、お莨盆。
松兵　してお前、こゝへ來なすつたのは、なんぞ用でもあつて御座つたのか、云ふ事があるなら。
與三　わつちやア、こゝの家へ、頼みてえ事があつて來やした。その頼みといふは、質に置きてえ物がありやす。
松兵　今聞けば、質に置きに來たと云はつしやるが、ふりに質を取らぬのが、仲間一統の規則だが、こゝの店は、二朱や一分の端質はとりませぬよ。
權助　大方お前、新道の伊勢吉と、間違へて來なすつたか。
半藏　たゞの質なら、伊勢吉へお出でなせえ。
松兵　手前で小質は
三人　取りませぬよ。
與三　やかましいわえ。こいつら、見くびつた事を吐かしやアがるなえ、二朱や一分の吝な質ぢやねえ。大金になる代物だ。
權助　さうして、代物はどこへ持つてござつた。
與三　その代物は表にあらア。カウ若い衆、手を貸して下つし。
皆々　ナニ、手を貸して。
　ト皆々手を出して、悧り思ひ入れあつて、懷へ手を隱すことなど、よろしく、與三郎。これを見て
與三　なんだこいつら、腕でも斬らうと云やアしめえし、びく〱するなえ……表にある葛籠を、こゝへ持つて來

い。

ト云ひながら、皆々を睨み廻すゆゑ

皆々　ハイ〳〵。

ト門口へ出て、用水の上にある葛籠を、門口の内へ荷ひ込む。平舞臺の眞中へ直す事

こりや、重い葛籠だわえ。

ト舞臺眞中、よき所へ直す。與三郎、思ひ入れあつて

與三　ソレ見たか、中には雜物はぎつしりと、錠前おろして預けてある代物、大金にせにやならねえワ。

松兵　成る程、錠のおりたこの葛籠、むやみにこゝへ擔ぎ込んだは。

權助　松兵衛さん。

松兵　なんでも、これには。

半藏　譯があるわえ。

與三　オイ〳〵松兵衛さんとやら、そつちの掛合がどうならうとも、こつちの質から先へ片付けて貰はう。サア松兵衛さん、こゝへ來なせえ。

松兵　おれが行つたと云つて、何が解るものか……さうしてマア、葛籠の中は、何だか解らず、殊にふりの質物は取りませぬ。

與三　たとへ、ふりであらうとも、大番頭さんは知つた顏だ。

ト多左衛門へこなしにて

何でも借りて行かにやならねえ。

多左　イヤ、餘所での惡志は別の事……今持ち込んだその葛籠、錠前おろして中ごは知れず、請判のねえその代物、どうして迂濶に取られるものか。

ト思ひ入れ。

與三　所を、取つて貰ふ氣だね……この鎌倉で人も知る、質兩替に油店、五德で儲ける大金物、雪の下での角屋敷、名所町の和泉屋を、見込んで持ち込む質入の、望の高は三百兩、是非とも借りて行かにやアならねえ。

ト思ひ入れ。

平馬　サテ、町人と云ふ者は、無法無體を申すもの。

松兵　こんな葛籠を三百兩とは

皆々　呆れて物が云はれぬわえ。

ト思ひ入れ、

平馬　見かける所、多左衛門も、かれに返答いたさぬは、深き仔細があると見えるが、町家へ害なす强請の所業。

與三　なんだ、强請だ……侍ひだと思つて默つて居りやア、

強請とは何の事だえ、この野次馬め、すつこんでうしやアがれ」

ト平馬、この權幕に恐れて、扣へる。

サア、云ひぐさなしに、三百兩貸してくれるか、但し、又その相談が出來ねえなら、こつちが望みの品物、入替にして貰ひたい……オイ番頭さん、早く挨拶しておくんなせえ。

松兵　コレ／＼、いゝ加減にさつしやいな。何だか知れねえこの葛籠を、三百兩とは何の事だ。夷子講の賣買でも、大抵相場のあるものだ。それに、マア、譯もわからねえ無法のいひかけ。マア、何にしろ葛籠の中を。

與三　オ、面白い、葛籠の中を改めろ。代物せえ見たならば、よもや貸されねえとは云はれめえ。

トこなし

松兵　オ、。改めてくれるワ。

皆々　改めろ／＼。

ト立ちかゝるを、多左衞門、こなしあつて

多左　ア、コレ／＼、待たつせえ／＼。

トでもと皆々立ちかゝるを

エ、騷々しい、扣えて居やれ。

ト皆々を制して、與三郎に向ひ

そんなら、愈々この葛籠で、三百兩貸されずば、入替にしてくれろと云ふが、品物は何でござる。それを聞かうかえ。

與三　その品物は、外でもねえ、こゝの內へ疾くにから、質に來てゐる代物サ。

多左　シテ、質入れのその品は。

與三　千葉家の重寶、眞鶴の香爐を。

多左　ヤ。

與三　どうぞ、入替へて貰ひてえね。

多左　そんなら、葛籠の入替に、眞鶴の香爐を。

與三　さうサ。

多左　それゆゑ二人が……乙なものが望ぢやなア。

ト平馬、じつと思ひ入れ。與三郎、この內連尺の間より、狹みし藤八の袷を引き拔き出し

ソレ、これが捨て利よ。

ト多左衞門、この品物を見て

多左　ハテ、見たやうな

多松　此の布子。

ト皆々も思ひ入れ。

與三　さて、利は、それで澤山だらう。早く入替へてくれなせえな。

トこなし、多左衛門、右の着物に、さてはとこなしあつて

多左　そんなら、葛籠を入替へて、あの眞鶴の香爐を……ハテ、妙なものを望まつしやるな。

トこなし。平馬へ思ひ入れあつて

平馬　先刻から承はれば、その汚い葛籠と、鶴の香爐を入替へる、途方もねえ事を申すやつがあるものだ。舌切雀なら、葛籠にも緣があるが、鶴に葛籠とは句がつかぬワ。そつちは何と申さうとも、身共が品もやつぱり鶴……何でも身共が方へ質請する、早く香爐を渡さつせえ。

トせり立つ。

多左　隨分、只今でもお渡し申しますが、肝心の手形がなければなりませぬ。

平馬　それがあるなら、氣は揉まぬ。

與三　その手形がなくつても、おれが方には慥かな證據、手形代りに手紙があるが。

平馬　シテ、又證據の手紙とは。

與三　サア、讀んで見さつし、

松兵　ト前幕の手紙を莨入れより出して、松兵衛へ渡す、先達て、その地へ罷り越し、御話申し候かの品、質入の儀、そこ許さまのお取持にて、百五十兩に御預り下され候趣、かたじけなく、右は下總千葉の重寶眞鶴の香爐と申し候て、大切の品ゆゑ、その內に是非とも請け戻し候ゆゑ、左樣に御心得下さるべく候。猶面談の上、萬萬申し述ぶべく候、以上……藤八さま、みるひの松より。

平馬　何につけても、藤八が居らねば、これも片便宜。

與三　その密書が、おれの手へ、廻り〳〵て勿怪の幸ひ、香爐はおれが請け出す、さう思つておくんなせえ、

平馬　ア、コレ、餘人では掛け合ひ難い、あれ程のきつかけ、この通り摑み合にするとは、何の事だ。ア、、藤八はどういたした。

松兵　イエサ、藤八は居りませぬよ。

平馬　エ、、居ないでは濟まぬわい。こゝが丁度よいきつかけ……シテ、番頭の藤八は。

トこの中、件の葛籠、むく〳〵動くこと、權助、半藏、手代皆々見て、顏見合せ、思ひ入れ。平馬、松兵衛はこれに心づかず。

松兵　その藤八、居りませんと云へば。
平馬　居らぬでは、事が濟まぬワ。
ト邊りへ色々こなしあつて
さりとは情ない……シテ、二番々頭の藤八は、
トきつと思ひ入れ、この時、バリ〳〵と葛籠の蓋を押し破り、前幕の藤八、顏を出し
藤八　その藤八はこゝに居る。
ト皆々見て、思ひ入れ
皆々　ヤ、そんなら、葛籠の
平馬　中には藤八。
皆々　ヤア〳〵〳〵。
平馬　あれ程賴んだきつかけを。
松兵　さては、先からあはせた手筈も
藤八　もうかうなつては、茶つ茶無茶苦茶。
平馬　エヽ、思へば怨みな番頭、藤八
藤八　御免。
ト思ひ入れ。與三郎、見遣りて、莨ふきかける。
與三　奇妙な面だワ。
トこれにて、藤八、ちやつと顏を引込ます。多左衞門、與三郎、見合ひてこなし。平馬、松兵衞、見合ひて
平松　エヽ、何の事だ。
ト思ひ入れ。松兵衞はこなしあつて、上の方へついと入ること、與三郎、葛籠へこなしあつて
與三　サア、見る通りの代物だ。いひ分通り三百兩貸しなせえ……それとも入替に、香爐をいさくさなしに渡す氣かえ。早く片をつけてくんなせえ。
多左　葛籠の中は、余所外では、とんとふめない品なれど、こつちの店だけ話合ひ、葛籠の中へ質種に、殘つた場合で兎も角も、相談はしませうが……然し、三百兩は貸し難いが、殊によつたら望みの品、その香爐と入替へに、口說を開くめえものでもねえでの。
ト思ひ入れ。
與三　ムウ……面白い、その句が出れば、居じかつて、片をつけて貰ひやせうよ。
ト思ひ入れ。
平馬　イヤ〳〵、そりやならぬ〳〵。その香爐の置主は身共おやぞ。どうして〳〵、外々へ、この通り、金は持つて來た。
トこの時、藤八、葛籠の中より顏を出し

藤八　これは、平馬さまの仰しやる通り、たとへ書附がないにせよ、その置主に違ひはない、あなたの手から受け取つたかの一品、この藤八が請け合ひました。松兵衞、香爐を持つておぢや。

松兵　ハイ〳〵、畏まりました。

ト上手へ入る。おとみ、思ひ入れあつて、葛籠の側へ行き

とみ　コレ藤八さん。

藤八　エヽ、吃驚するわいな

とみ　サア藤八さん、かうなつたら仕方がないと諦めて、與三さんへ云ひ譯の立つやうに、どうともかうとも、男らしく話をつけておくれ。さもない事なら、とても命は投げ出しもの、それともお前の料簡で、鶴の香爐をわたしの方へおくれなら、この與三さんの顏も立ち、お前も無事でこの場の納り、しつかりした返事をおしよ。

藤八　それでも鶴の香爐は、平馬さまの方へ手渡しをば。

與三　エヽ喧しい、鶴の香爐どころかえ、龜山の化物を見たやうな……引込んでうしやアがれ。

ト又引込む。この時に、奥バタ〳〵にて、以前の松兵衞、與五郎を引立て出る。後より、おつる、とめながら出る。松兵衞は、件の香爐の箱を持ち來たり

松兵　誰れでもかれでも用捨はねえ。

つる　ぢやといふて、與五郎さまが。

與五　身に覺えなき云ひかけ事。

兩人　滅多なことを云はつしやるな。

ト云ひながら、出て來る。

多左　ヤア、お前は與五郎さん、おつるどのを引提へ、松兵衞、おぬしは何を騷ぐのだ。

松兵　何を所か、香爐が紛失しました。

藤八　そりや、とんだ話ぢやな。

ト顏を出す。平馬、與五郎、おつるを見て

平馬　ヤア、おぬしはおつる、昨日の二才め、こゝにうせたか、不屆やつめが。

ト思ひ入れ。與五郎、おつる、よろしくこなしあつて、差し俯く。

多左　コレ〳〵、おつるどのゝ縁につれ、與五郎どのは、おろそかにならぬお内のお客人、手荒い事はならねえぞ。さうして香爐が紛失を、どうして知つた。

松兵　サア、それは……どの道、平馬さまなり、又外へ賣り渡すにしろ、大事の代物、今質藏で改めて見た時に。

ト箱を渡し、

中に入れたは、鶴どころか、こりや天神さまの鷽鳥と、中ごは變つたのみならず、中に入つたこんな文。

ト文を出すを、與五郎、おつる見て、ハッと思ひ入れ。與三郎、兩人へよろしく思ひ入れ。平馬、うろたへ、この文を取りて見て

平馬　さてこそ〳〵……與五郎さま參る、鶴より

ト松兵衛、權助外皆々

皆々　ヤア〳〵〳〵。

トこの内、平馬、文句を讀む心あつて

多左　そんなら、香爐の箱の中へ、その文があるゆゑに

平馬　オヽ、いけ舌たるいこの文體……コリヤ大切の品の盜人は、與五郎、おつるに極つたわえ。

多左　イヤ平馬さま、そりやお眼鏡が違ひませう。

平馬　とは又なぜに。

多左　ハテ、大切の品を、盜み取りしその中へ、自分の名宛の書いてある文を、入れておくといふ、そんなたわけは、今時はござりません。

ト平馬、こなし。

よしんば又、敵役が企んでも、餘りといへば甘口な……そりや、三十年も昔の事だ。

ト松兵衛へこなしあつて

コレ松兵衛、おぬしがさつき、その箱をいぢりまはし、あの半藏に、質藏へ持たせてやつた覺えがあらうが、半藏、さうか。

半藏　さつき、質藏へ入れました。

松兵　ア、コレ〳〵、詰らねえ事を喋舌るやつだ。ありやア、これではねえ、箱が違ふわえ。

多左　エヽ、云ひ譯をさつしやるか。たとへ何と云はうとも、この多左衛門がにらんだ黒星、その香爐の盜人も、大方にそこらに。

ト敵役に目をつける。皆々こなし。藤八、葛籠から顔を出し、多左衛門と見合せる、これにて、ちやつと顔を引く。

大概それと知れてあるぞ。

ト松兵衛、ぎつくり思ひ入れ。

それに、文を證據と云ひ立て、與五郎どのやおつるを、香爐の盜人にしやうとは、淺はかなこしらへ事、但しは外に、きつとした證據がござるか。

ト平馬へこなし。

平馬　ムウ……サ、それは。
多左　證據がなけりやア二人が、よもや所爲とは云はれますまい……もし、そんな物ぢやござりませんかえ。
　ト思ひ入れ。平馬、こなしあつて
平馬　アイヤ〳〵、例へ、その儀明白ならずとも、大切な品、なくしては相すみますまい。これはいかゞいたす。
與三　香爐がなけりやア、こつちはまだ外に、葛籠の中の雜物で、耳を揃へて三百兩、たつた今貸しなせえ……この質種が不承知なら、憚りながら店先で、生捕つた間男野郎、賣買にしてくれべいワ。どいつもこいつも見やがれ
　ト腰に狹みし、手拭に包みし出刄庖丁を出し
　サア野郎め、覺悟しろ。
　ト立ちかゝるゆゑ、中より藤八、いろ〳〵とめて
藤八　ア、コレ〳〵、情ない、人殺し〳〵、助けてくれぬか。
與三　やかましいわえ。
　ト出刄を見せびらかし、よろしく立ちかゝるを、藤八、蓋の方より手を出し、とめて
藤八　コレ〳〵平馬さま、松兵衞どん……多左衞門さま、留めてくれぬか、殺されるわえ。

與三　助けてくれろもすさまじい、どこから突かう。
　トいろ〳〵思ひ入れ。多左衞門、こなしありて、與三郎に向ひ
多左　コレ待たつせえ、與三郎どん……きのふこなたに初めて逢ひ、番へた言葉もある筈だが、その舌の根も乾かぬ中、又ぞろこゝの店へ來て、おれに難儀をかける氣か何で藤八が間男だ。その譯を云はつせえ。
　ト思ひ入れ、與三郎、じつとなり
與三　オヽ、間男の證據を見せうワ。
　トおとみを引き出し
　サアおとみ、こゝへ出ろ。われが命は、二つあつても足りねえワ。相手の野郎に、しらを切られては、男が立たねえ。譯があるとも、無えとも、有り體にぬかしてしまへ。
とみ　あれサ、靜かにおしな。わたしだつても、初めからお前の安否が知れぬゆゑ、多左衞門さんのお世話になり、どうかうかしてゐれど、ほんの床の間の据物ゆゑ、構うては下さんせず、流石に、行末始末の賴母しさうなお方ぢやと、藤八さんと色になり、寐てゐた所をお前に見られ……もう、隱されぬわたしが淫奔……モシ藤八さ

ん、かうなつては仕方がないよ。

藤八　アヽ、コレおとみどの、そりやあんまり酷いぞや。そつちばかりで覺悟されては、どうなるものぞ。わしや、そんなよい思ひは、たゞの一度でもした事はないに、情ない事をいひかけるなア。

與三　聞つておいたは三年越、旦那といふはこの店の、大番頭の多左衞門さん、たとへ抱寐をしねえでも、恐れながらと訴人して、抱きこむからは、その時にやア對決なしの拘引、形見がはりの密夫は、葛籠の中の藤八だ。おとみと二人で帶紐とき、寐てゐた所を寐首をおさへ、葛籠の中へ入れて來た。この密夫のあかりを立てるか、但し、こんたの惡事をいひ立て、拘引の罪を着るか、術よく事を濟ませるか。サア／＼、なんと動きは取れめえかな。

ト葛籠の中から、藤八、顏を出し

藤八　そりや嘘ぢや／＼、嘘だぞえ／＼。

與三　サア女め、あの通り吐すワ……われから痛い目をさせるのだ。野郎め、覺悟しろ。

ト前の穴より、出刃を入れかけるゆゑ、上へ首を出す所を、襟髮捕へ

うぬ、どうしてくれうな。

藤八　アヽ、コレおとみどの、そりやあんまり酷いぞや。そつちでばかり覺悟されて、どうなるものだ。わしやそんなよい思ひを、只の一度もした事はないに。情ない事を云ひかけるか。

與三　エヽ、いくら云つても仕方がねえ。われが弟の海松杭めが、喋べつたばかりで、おれもひどい目に遭つた事があるワ……その未進をわれでうめるワ、さう思へ、

藤八　知らぬ／＼、そりや、おれは知らぬわえ。

與三　手前が知らねえでも、御見物がよく御存じの事だ。

ト立ちかゝるゆゑ、藤八、いろ／＼こなしあつて、よろしく思ひ入れ。

藤八　アヽ、これサ／＼……そりや弟は弟、わしはわし、その時の廻り合せ、わしの知つた事ぢやない。みんな作者がする事ぢや……コレ／＼おとみさん、どうかして、助けておくれんかえ。

ト思ひ入れあつて、葛籠より手を出し

拜む／＼。

ト思ひ入れ。

とみ　エヽ、お前も未練な、男らしくもござんせぬ。もう

からなれば仕方がない、覺悟して一緒に死んで下さんせ……藤八さんと一緒に殺される氣ぢやわいなア。

與三　いゝ覺悟だ、二人ならべて。

トこの内に、藤八、たまらず葛籠のまゝ歩き出す事、この仕組よろしく、與三郎とめて、出刃の柄で、錠前をたゝき拔く。この内、藤八、中へ首を入れる事、錠前ぬけて、蓋あく、はづみに、中より藤八、ころげ出ること、二重舞臺の方へ行く。與三郎、追つて行く。多左衞門、藤八を引き据ゑ、與三郎をとめて、

多左　スリヤ、どうあつても、藤八を、間男にして斬る心か。

與三　知れた事サ。

ト立ちかゝるを、多左衞門とめる。ちよつと立ち廻り藤八、震へながら、よろしく蹲まる、見得よくとめて

それとも、店の迷惑を、思つて止める心なら。

ト藤八へこなしあつて

この代物を、質に取る氣か。

多左　それだと云つて、藤八めをば。

ト思ひ入れ。

藤八　ア、コレ〳〵、隨分ふめますぞえ〳〵。どうぞわたしを質に取つて、助けて下され、多左衞門さま。

ト思ひ入れ。

多左　エヽ、おのれが不間を働くゆゑ、重荷に小づけのこの混雜、旦那へ不忠の大癡漢め。

ト藤八へ思ひ入れ、

藤八　ア、面目ない、

ト差し俯く。

與三　こいつを質に取らねえなら、こつちが望の入替と。

多左　ソレ、入替に望の品、今さしかゝつた紛失ゆゑに、渡す事はマアならねえ。

與三　さういふならば、矢張り二人を。

トこなし。おとみも思ひ入れあつて

とみ　早く殺して、お前の心を、それで休めて下さんせ。かう云ひ出すからは、わたしも意地。

ト與三郎、おとみへ立ちかゝるゆゑ、皆々氣をあつかふ思ひ入れ。

與三　それとも、金で三百兩、それで無難に納める心か。

多左　サアそれは。

與と　サア。

多左　サア。

三人　サア〳〵〳〵。
與三　恐れながらか、但しは金か、この家體骨を引き合に、抱いて入るがこつちの性根、この納りのつく迄は、貧乏ゆるぎもするものかえ。
　ト與三郎、思ひ入れ。この中、與五郎、おつる兩人、
　與三郎
與五　先刻から見る所、そのお姿は變れども、
つる　お聲も覺え、物腰も
與五　正しくあなたは兄者人
つる　與三郎さんで
兩人　ござりませうかな。
　ト與三郎、思ひ入れあつて
與三　カウ、お前方はなにを云ふのだ、廣い世界に似たものはいくらもあるワ。總身の疵に片つらをかけ、四十五ケ所の刀疵、ひらだけだらけのしやつ面を、覺えて居やう筈もなし、しらばつくれても看板の、疵が異名で切られ與三、近づきでもねえおれを、馴れ〳〵しい物の云ひやう。滅多にその手は喰ふものかえ。遠島船を腰につけあるとあらゆる惡事も合點、乘りかゝつた今日の仕事、金か香爐か二つに一つ、カウ番頭さん、い、加減に往生しなせえ。この曉はどうしてくれるよ。
多左　奥開からより口とやら、成る程すはつた物の云ひやう。親御は斯程に産みつけはしやるまいに、朱に交ればと譬の通り……さても据つた性根だなア。
　ト思ひ入れ。この內、平馬立つて、おつるを引立て、
　連れ行かうとする。
コリヤ平馬さま、おつるをばどうさつしやる。
平馬　ハテ、預けし香爐が紛失ゆゑ、鶴の香爐のその代りおつるは身共が連れて行くワ。
多左　スリヤ、人質におつるをば。
　トこの內、松兵衞、平馬を止めて
松兵　イエ〳〵、さうはなりませぬ。鶴の代りなら、龜の甲の水入で、御勘辨下さりまし。
　ト有り合す水入を出すゆゑ
平馬　馬鹿をつくすな。
　ト突き退ける。
サアおつる、來やれ。
つる　イエ〳〵、わたしや。
　ト思ひ入れ。ト平馬、おつるを引き立てる。松兵衞、
　支へる。權助、思ひ入れあつて

権助　思ひ出した。

ト仰山に云ふ。

皆々　エヽ、吃驚するはえ。

権助　その吃驚は尤ぢや。まだ〳〵吃驚させませう……モシ、大番頭さん、あのおつるさんより、ほんまのおつるさんを出してお目にかけませう。

平馬　ナニ、ほんまのおつるさんとは。

権助　待ちなせえ〳〵。

ト以前の踏臺を出し

さらば、おつるさんを出しませうか。

ト燕の巣の中へ、手をかけやうとする。松兵衛、愕りして引き止め

松兵　ア、コレ〳〵、燕の巣の中へ手を入れて、何するのぢや。

権助　何であらうと、わしが胸にある事だ、マア、退きなせえと云へば。

松兵　胸にあらうが、棚にあらうが、われが知つた事ぢやない。

権助　よう知つてゐるぞや。

松兵　そりや何を。

権助　何と云はつしやつた、見所のある代物ぢや。

松兵　まだ吐すかえ、情ない。

権助　その置主も知つてゐる。

松兵　ヤ。

権助　それぢやに依つて、出して見せる。

松兵　飯炊の分際で、下がれ〳〵。

権助　イヤ、上がる〳〵。

ト兩人、せり合ひ、松兵衛を突き退ける。松兵衛、踏臺より轉ぶはずみに、燕の巣より香爐が出る。松兵衛取らうとするを、與三郎、松兵衛を引きつける。この内に権助、多左衛門へ香爐を持ち行き、多左衛門、取り上げ見て

多左　コリヤ、紛れもなき鶴の香爐。

與三　そんなら、燕の

と與　巣の中へ

多左　隠したやつめは

権半　松兵衛どの。

ト松兵衛をこづく。

與三　その盗人は

多左　たしかに藤八。

トうぬと、平馬切りかけるを、與三郎、突き廻し、刀を打ち落す。藤八、逃げ出すを、多左衞門、くゝし上げる。松兵衞をば、與五郎が引き付け、若い衆の手代權助、半藏などにて縛ること、平馬、皆々を見て

平馬　ヤ、松兵衞……藤八。

藤八　五文どころか、四文にもならぬ。

松兵　身にふりかゝる

藤八　この繩目、ホヽヽヽ。

ト泣く。

平馬　何のざまだえ。

ト思ひ入れ。

與三　サア、その香爐を約束通り。

多左　イヤ、この請主は、疾より奧に。

平馬　ナニ、請主が。

ト與三郎、おとみ、平馬の三人

三人　外にあるとは。

トこなし。

多左　その請主へ、一通り屆けずばなりますまい。おつるさん、與五郎さんと一緒に、奧のお客へ、この譯をおつしやつて下さりませ。

つる　アイ〱、そんなら、あなたも御一緒に。

與五　お女中さまへお知らせ申して

多左　香爐の取引。

つる　そんなら、わたしと與五郎さんも

與五　サア、お先へお出でなされませ。

ト唄になり、兩人奧へ入る。平馬、こなしあつて

平馬　合點の行かぬ香爐の請主、何人なるか、面談の上の事。滅多には請けさせぬぞ。

トこのうち、前幕の小笹、奧より出かけて窺ひゐる。

小笹　香爐の在所知れたる上は、約束通り手形と引替。

ト以前の手形を出す。平馬見て

平馬　ヤ、いつの間にか小笹どの……そんなら手形を、ムウ。

ト思ひ入れ。トこの内、多左衞門、手形を受け取る事小笹は打がへのまゝ金を出し

小笹　元利合せて書附通り、お役所より取り寄する。時刻うつさぬその爲に、取り替へて下された

ト與三郎へこなしあつて、與三郎も思ひ入れよろしく心づくしにつばめも合ひ、この場の手詰め、香爐も異議

なく受け取るこの手番ひ。
ト與三郎へこなしあつて
包のまゝにて、お渡し申す。
ト多左衛門、金の二百五十兩包みを、封目を見て
多左　確に金子は受け取りました……左様ならば、香爐はお手渡し仕ります。
ト小鋌へ渡す事
平馬　そんなら金も調ふて、その香爐を濡手で粟に、請けて行かうと申しても、手形の宛名は正しく身共。
ト多左衛門、書附を見せ
多左　いかにも、宛名は平馬さま。
平馬　サア、それおやによつて、身共が質請け仕るを、誰れが點の打ち手があるまい。
多左　成る程、御尤、然し元利合せて二百五十兩、それは御合點でござりませうな。
平馬　ソレ承知、いかにも金子はこの通り。
多左　左様なら、一寸金子を。
ト手をかけやうとする。
平馬　屋敷の封金、改むるに及ばぬ事。ア、コレ、便りに思ふ藤八は、あの通り。
多左　イヤ、藤八は心から、それはともあれ、念の爲。
平馬　これはいかな。疑ふてこの金を。
多左　改めねば不念とやら、失禮ながら。
ト多左衛門、包金を取る。平馬見せじと爭ふ。封目切れると、中より瓦の小判出る、皆々呆れて顏見合せ、面目なき思ひ入れ。
モシ平馬さま、コリヤ緣起の百兩、御冗談なされまするな。
平馬　そりや、ほんの見せ金、誠の金子は外にある。香爐持參の上、屋敷にて相渡す。必ず餘人に渡すまいぞ。身共が置主、外手へ渡さば、いづく迄も故障申すぞ。
小鋌　もしも、かれこれおつしやらば、お家の重器をいつの間に、御持參あつて質入なされた。
平馬　サア、それは。
多左　この書附をお屋敷へ參つて、あけすけに仕埒を付ければ、後腹痛めず。
小鋌　いつそ、荒立て詮議をせうか。
平馬　それは迷惑。
多左　そんならこのまゝ、香爐をお渡しなさるゝか。
平馬　サア、そりやア。



河原崎權十郎の與三郎　坂東村右衞門の



藤八　　岩井粂三郎のお富（萬延元年所演）

多左　サア。
平馬　サア
三人　サア〳〵。
多左　どうでござります。
平馬　かやうな所に長居をいたすと、武士道が廢ること、どうでも、勝手にいたせ。
ト思ひ入れあつて、門口へ出かける。
家來は居らぬか、エヽ、何をして居るぞ。梅八々々。
ト呼び立つる。橋懸りより、中間梅八出て
梅八　もう、お歸宅でござりますか。
平馬　知れた事だワ。
ト邊りへ思ひ入れあつて囁き、これにて梅八下手へ、平馬、橋懸りへ入る。
必ずぬかるな。
ト敵役、顏見合せ思ひ入れ。小笹、香爐の箱受け取る事。時の鐘、下手より、前幕の金平出て、門口より
金平　ハツ、香爐がお手に入ります上は、一先づこれより御旅宿へ、お供の用意仕つてござります。
小笹　妾もそろ〳〵歸宅いたさう。
トこなしあつて、立ち上がる事。小笹、與三郎、おとみへこなし、與三郎、おとみへ思ひ入れあつて
御縁もござらば、又その内に。
ト立ちかけるゆゑ、與三郎、おとみ、前へ出て
與三　仕込んだ強請も香爐が、ちつとこつちへ入用ゆゑ。
とみ　それも人手にみす〳〵渡り、馴れぬ仕事もとう〳〵顯れて。
與三　シテ、香爐を質請する
とみ　そのお屋敷のお女中さまは。
ト兩人、小笹へこなし、小笹は與三郎、おとみへ思ひ入れ。
多左　それぞ、千葉家の御蕃中穂積隼人が女房小笹。
小笹
與三　エヽ。
トぎつくり思ひ入れ。
とみ　そんなら、昨夕話に聞く
與三　誠の血筋の
とみ　そのかゝさんは。
ト兩人、小笹へ思ひ入れ。多左衛門、與三郎、おとみの三人
三人　ヤ。

小笹　さては、幼いその時に
與三　町家の養子の。
　ト思ひ入れ。
小笹　伜はそなたか。
與と　思ひがけない。
　ト與三郎も思ひ入れ、兩人よろしく、小笹、與三郎を突きのけ、行きかけるを、おとみ、モシと止める。三人よろしく、小笹、思ひ入れあつて、與三郎をつきのけ
小笹　不孝な伜は……持たぬわいなう。
　トこれを唄になり、小笹あとより、金平、件の香爐の筥を持ち、向うへ入る。與三郎、おとみ、ぢつと思ひ入れ。多左衞門おつるこなし。藤八、松兵衞は、縛られしまゝ、權助、半藏、その他多左衞門こなしあつて
多左　サア、權助、半藏、皆の者、この上は、藤八、松兵衞二人を。
　トこなし。
權半　どうしますえ。
多左　知れたこと、お定りの藏住居だ。

皆々　サア、立つたえ〳〵。
藤八　それでも、わしも質かいなア。
松兵　愚痴を云つても仕方がない。今まで人の器物を纏かけたる因果の廻り。
藤八　こつちは永らく葛籠の憂目、果ては繩伴で縛られるア、給なき世の
松藤　有りさまぢやなア。
　ト唄になり、皆せり立てゝ、藤八、松兵衞、權助、半藏、若い衆つき添ひ、この唄にて皆々、奥へ入ること。時の鐘、與三郎、おとみ、こなしにて
與三　來い。
　トおとめへこなし。兩人つか〳〵と
多左　コレサ、與三郎どん、おとみ、待たねえか。
與三　どうしたと、
多左　折角しかけた高强請、萬更すてゝは歸られめえ。
與と　ヤ。
　ト思ひ入れ。
多左　香爐代り、元利の金……ソレ。
　ト投げ出し
持つて行きやれ。

ト投げしを、與三郎、二包、おとみ、五十兩の包を取り上ぐる。

與三　そんなら、おれが云ひ狀立てゝ、香爐代りか、但し又。

とみ　あの藤八が納りを、つける爲に大枚の。

多左　些かなれども五十兩、心ばかりの趣旨をたて、摘んで云へばあの香爐、元はと云へば盜み物、それを承知で藤八が、質に取り込み主倒し、公事沙汰となる時は、曖嫌つ挺事、穩便にすませろと、主人が頼み、その時、序に話が出て、且那の爲の姪なれば、至つて秘藏のおつるどの、婿のためには義理のある、離れぬ緣の切られとやら、噂の人を見つけたら、身の納りをつけるやう、殊に世間の風說にも、よからぬ噂のお尋ね者、經目にかゝらぬその内に、この鎌倉を落ちのびて、その身の無事を思ふなら、路金の手當支度料、その出所も血緣から、身腹を分けたこなたの手へ、渡るも味な金の納り、月日もたつてほとぼりも、さめた時にやァ身の納り、及ばずながら助力して、資本位の事ならば、いつ何時でも否とは云はぬ。マア、それ迄は素直に取つて、この土地を離れた方が、よささうなものだらうぜ。

ト與三郎、こなしあつて

與三　何だか乙にからんだ異見のついたその金、氣障だ、よしやせう。

とみ　ハテ、心盡しの今のお詞、お前の身の上にかゝはる風說、無足にならぬ志。

多左　但し、おとみが手切の爲に、遣らうと云つてもこの金を、やつぱりおぬしは受けぬ氣か。

與三　おとみが手切といふ事なら、初手からつけめ、貰つておかうよ。

多左　それで、根つきり葉つきりに……ソレ。

ト金包五十兩を投げ出す。與三郎、受け取る。

とみ　そんなら、わたしの手切の爲に。

多左　その證には證文は、おれが方から添へてやるわえ。

ト誂らへの守袋を投げ出す事。おとみ、取り上げて見て、自分の掛けしのと引合すこと。

とみ　ヤ、これは、覺えの。

ト思ひ入れ。トこの内、與三郎、五十兩の包を見て

與三　ヤ、この包は元山町の。

ト印鑑へ思ひ入れ

多左　それは、義理ある誰れやらが、屋敷の女中へ取り替へて、その納りはこなたの手許へ。
與三　そんなら弟が……ムウ。
ト奥へ思ひ入れ。この内、おとみ、守袋より、自分の臍の緒と、多左衞門の守より、同じ書付添書を出し
とみ　モシ、これをば一寸。
ト與三郎へ渡す。兩方取り上げ見て
與三　ヤヽヽ、おとみが守を一對の、縁もつながる笹の裂
ト思ひ入れ。
とみ　その臍の緒の書付の、筆に割符の合うたのは。
多左　元は都の生れにて、治承の昔亂世に、かどわかされしこのおとみ、親の記念のお蔭にて、妹と知つて今日が日まで。
與三　昨日はこつちが兄だと云つて……實は譯ある女房の
とみ　旦那と云つたが血筋の兄さん。
多左　今ぞあかした名乘合ひ。
とみ　五歳か三歳の頃なれば、それもお顔を知らぬゆゑ。
多左　曾我兄弟なら十七年、それにもまさる年浪は
與三　二十年の星霜を……生んで貰つたお母に
とみ　逢へども親とは

與三　云はれぬ因果、
多左　廻る車も
とみ　兩輪と並ぶは
多左　兄と夫の
與三　思へば盡きせぬ
三人　奇縁ぢやなア。
トこの時に、上の方より、以前の與五郎、おつる、佇み窺ひゐる。與三郎と見合せる事
與三　とかうする内七つの鐘、夜更けさぶけに氣の毒な。ひよんなお世話になりやした。
とみ　それも、わたしが心から、現在兄に逢ひながら、親身の話もならぬ仕儀。
多左　又よい折もあらうから、夜更けぬ内に、ちつとも早く。
與三　アイ、お言葉に隨つて、餘計な苦勞をかけぬ内。
とみ　そんなら與三さん
與三　そろ〳〵行かうよ。
ト下手へ行く。この時、與五郎、おつる、窺ひゐて、與三郎と顔見合せること。
與五　せめては兄の

つる　與三郎さまへ。

トつか〳〵と寄る。與三郎、おとみ、この内財布を持ち、立ち上がる事。多左衛門は、與五郎、おつるを隔てて

多左　手先をやつたら、赤の他人サ。

ト思ひ入れ。

與つ　それでも一言。

多左　コリヤ。

ト與五郎、與三郎へ取りつくを、突き退ける。おとみこなしあつて、隔てる、多左衛門、與五郎、おつると兩人見得よく止めて

云はぬ言葉の花嫁花笄。

ト兩人へこなしあつて、與三郎おとみへかけ

おとみもこの末、夫婦の間を

トほろりと思ひ入れ

與三　切られぬ義理の與三郎。

とみ　いづくの果に暮すとも

多左　親は泣きより

とみ　血筋の兄さん

與三　逢ふは別れの

與五　兄弟他人と

多左　隔てる旅路も

與と　心の闇の夜。

トこの時、梅八、窺ひゐて

梅八　野郎め、觀念。

與三　迷ひ鳥の。

トポンと返し、與三郎、兩人ほろりとこなし、木の頭。

ア、泣き別れだなア。

トよろしくこなし、これをきざみについて、太神樂の切をかぶせ、この仕組よろしく、

拍子　幕

五　幕　目

稻瀨川三昧の場
野陣ヶ原の場

役名――赤間源左衛門。子分、丈助。山鹿毛平馬。品川碌碌右衛門。隼人妻、小笹。妾、お富。切られ與三郎。

本舞臺、正面少し上へ寄せて、石の六地藏、茅葺の



關三十郞の和泉屋多左衛門

雨除け。この傍に因果車、後ろ、生垣、所々に古卒塔婆、古塚をあしらひ、松の立樹、同じく釣り枝、後ろ淺黄幕、こゝに品川碑礫右衛門、袢天股引、大小にて、十手を持ち、若い衆の黒四天四人、十手を持ち附き添ひ、一二三四、對の着附け、脚袢、尻はしをりにて、腰の總付の十手を持ち、好みの形、目あかし、捕手の心にて控へゐる。靜かなる禪の勤にて幕明く。

捕一　この鎌倉で腕こきの、われ等が仲間を呼び出し

捕二　俄かに御用とおつしやるは、駈落者かお尋ね者

捕三　見つけ次第に訴人をするか、縛つて出せが紋切形

捕四　シテ、あなたさまは、いづ方の

四人　御家來さまでござりますな。

碑礫　その方どもを呼び出し、内々所用を頼む上は、身が姓名も云ひ聞かせん。某事は、海老名の郎黨、品川碑礫右衛門ゆで高と申すものだ。

捕一　さうして、あなたが

四人　御用の筋は。

碑礫　その仔細は、かやうぢやて……この鎌倉山の谷七鄕、市中は勿論、端々の町方豪家へ罷り越し、組せし惡漢を語らつて、多くの金銀をゆすりとるを渡世といたす發頭人、面體身體へ數ケ所の手疵、それゆゑに異名をば切られ與三郎と稱へる由……元は武藏の江戸生れ、舊惡もありとの事……われ等が主人海老名公、搦め捕つて參れよと密かに嚴命。

捕二　その與三郎なら、わたしも名がけた事がござりました。

捕三　さうして、今はどの邊に、匿れ忍んで居りまする。

捕一　その居所さへ知れるなら

捕四　押へたばつたで

四人　仲間の骨折。

碑礫　ハテ、居所が知れゝば仔細はないが、所々方々へ住家を變へれば、某事は毎日日日、かくの通りに家來を引き連れ、どこかしこの分ちなく、尋ね歩けど今に見かけず、それゆゑそち達を呼び出し、若しも見かけしその時は、その宿々の會所まで、知らさせんが爲、呼び出したり。

捕一　それなら、氣遣ひござりませぬ。

捕二　仲間中へ觸れをまはし

捕三　見つけたならば早速に

三人　お知らせ申すでござりませう。
硨磲　オヽ、出かす〳〵……尙も詮議の手掛りは、與三郎は江戶子の事なれば、武藏の土地には、その面體よく存じたる者あらんと、あの地へ申し遣はして、江戶で名家の豐國へ、かれ等が人相、正うつしに認めさせたるこの姿繪、詮議の手がゝりに遣はしおくぞ。
　ト この內に、豐國畫二枚つゞき、汐干見物の場、團十郞（與三郞）梅幸（おとみ）の錦繪を出す。
捕一　それぢやア、これが人相書でござりますか……サアサア、見やれ〳〵。
　ト 受け取りて
捕四　コリヤ、伊豆屋與三郞。
四人　素的に好い男だなア。
　ト 思ひ入れ。
硨磲　所が聞きやれ……それに描いたは、まだ手疵を受けざる前の面ざしゆゑ、その面體へ夥しく、刀疵のあるやつが、卽ち切られ與三サ。
捕四　ようござります。その面は
皆々　見覺えがござります。
　ト この內、一人、おとみの繪を見て
捕一　さうして、おとみと申すこの女は。
硨磲　それは、かの者の女房にて、横櫛のおとみと申す年増……與三郞に連れ添へば罪は免れず、夫婦もろ共搦め捕らば、おとみは身共が申し請け、女房にいたす積り……尤も主人の許はないが、これは身共が一人極め、念のために申しおくぞ。
四人　よろしうござります、呑み込みました。
硨磲　きつとよいな。
四人　ようござりますよ。
硨磲　よければ、いよ〳〵與三郞、召捕る手筈はその方どもゝ。
黑四　心得ました。
硨磲　尙も海老名公よりの仰せの趣、その宿々へ觸れ渡さん。案內いたせ。
四人　畏まりました……サア〳〵お出でなされませ。
　ト 硨磲右衛門、立ち上がり
硨磲　者共まゐれ。
四天　ハアヽ。
　ト 時の太鼓になり、硨磲右衛門へ、右の四人、外黑四天、捕手附き添ひ、上の方へ入る。しらせにつき、こ

の道具ぶんまはす。

本舞臺、正面常足の土堤、棕梠伏、土堤の上、少し上手へ廻して、古びたる板破目、引戸の建つけし九尺の作事小屋、この傍に高き作事の榜示杭、これに扇ヶ谷御修理の小屋場作事方と記し、これより上へ竹矢來、小屋より下の方へ、土堤の上、松の並樹、本枝を打ち、日覆より同じく釣枝、上下、植込み藪叢のあしらひ、うしろ黒幕、すべて鎌倉野陣ヶ原の道具、中程より早めし禪の勤めにて、道具納まる。

トこゝに女乘物をおろしあり、前の金平、右乘物を警護し見得、若い衆の供廻り兩人、荷をかつぎ、一人柿色の脚袢にて立ちかゝり、二幕目の丈助、赤間の子分にて好みの形、長脇差、中通り四人、いづれも非人の拵らへ、縫ひぐるみにて立ちかゝりゐて、立ち廻りよ宜しく止まり

金平　主君の御用で東路へ、この程下向の途中にて、道を遮ぎるこの狼藉、さては盗賊野盗だな。

丈助　イヤ、盗みをしやう爲ではねえ。われが送つて武藏へ下る乘物の、内の女に恨のある、その人の頼みに依つて、こゝで待ち伏せ

非一　附き添ふ人足供廻りは、こつちの仲間で追ひまくり。

非二　もうかうなつては、嚢の鼠。

非三　逃げても逃がさぬ今夜の手筈。

非四　われも息せいはらずとも

丈助　その乘物はこゝへおき、きり／＼逃げて

五人　うしやアがれ、エヽ。

丈助　ソレ、ぶツちめろ。

四人　合點だ。

金平　小癪な事を。

ト早めし禪の勤めになり、縫ひぐるみにて兩人は金平へ打つてかゝる。拔き合せ一寸あしらふ。後二人は、若い衆の供廻りを追ひ込み、四人一度にかゝること、皆々を斬り拂ふ事、こゝへ丈助、拔き合せ、一寸立ち廻り短く、ここへ皆々かゝり混ぜになり、金平、受け太刀になり、こゝへ丈助、この時斬りつける。右仕組の立ち廻りながら、橋懸かりへ入る。山おろしになり時の鐘、乘物の内より、小笹、脇差を持ち、件の香爐

を懐中して出で、四邊へ思ひ入れあつて

小笹　駕籠の中にて樣子を聞けば、荷擔の者等が今の一言、油斷のならざる今宵の仕儀、大事の名器を所持なす身體、いでこの隙に一先づこゝを。

ト こなしありて立ちかける。この内、下手、並樹の蔭より、前幕の平馬、頰冠り、尻はしをり、大小にて窺ひゐて、刀引き拔き斬りかける。小笹、一寸身をかはす、所へ又斬りつけるゆゑ、くゞり拔け、拔き合す。一寸こなしあつて立ち廻り、兩人、見得よくとまり

ヤ、さては、そちは山鹿毛平馬。

平馬　恨みの小笹、覺悟しろ。

ト 斬りかける。兩人よろしく一寸立ち廻りて、小笹、手利きの模樣、平馬、受け太刀心になり、普請小屋の方へたぢ／＼と寄る。この時、小屋の戸の内より、白刃出て、小笹を一かせ斬る。小笹、アッと苦しむ。躊躇ぐ所へ平馬、又一かせ斬りつけるゆゑ、小笹、たぢたぢとしてどつかりこなし。これにて、普請小屋の戸板、バラ／＼とくだけて、赤間源左衞門、尻端折にて出で、きつと見得、時の鐘、凄き合ひ方、小笹、きつとなり

小笹　これなる平馬へ荷擔の者か、卑怯未練な騙討ち……コリヤ、何ゆゑに手にかけしぞ。

ト思ひ入れ。平馬、あたりへこなし、源左衞門、思ひ入れあつて

源左　オヽ、そこにござる平馬どのに、頼まれたとは云ふものゝ、こつちも意趣ある血筋の女、それで手傳ひ殺すのだ。

小笹　心得ぬその一言、平馬はお家を窺ふ惡人、今浪々もお主の罰……殊更そちはついしかに、見かけし事もなき男、何の遺恨でこの如く。

平馬　オヽ、その譯、おれが云つて聞かせるワ……いつぞや、名所町の和泉屋で、香爐の質請け爭ふ時、强請にうせた下人めは、隼人が實の子與三郎、手前もその時思はずも、邂逅つたる覺えがあらう。

源左　その與三郎めは、このおれが、手活の花のおとみと不義、その懲しめに憂目を見せ、とつくに死んだと思つたら、命冥加に生き延びて、せちまいあると聞くからは、日頃出入の海老名さまへ、舊惡ありと讒訴をして、遲かれ早かれ網目の恥、どうで一度は由井ヶ濱、獄門臺に恥面を、曝させるのも内證は、源左衞門が軍略だワ。

平馬　與三郎めを蔭んだるわれゆゑ、この程、香爐手に入つて、隼人をはじめ、左近めが咎めもゆりて、身共は浪浪、その恨みをば晴らさうためだワ。

小笹　チエ、、さても手強きその謀計、たとへ悴が不義ありとも、あくまで憂目を見せるのみか、平馬へ荷擔し騙し討ち、謂はうやうなき非義非道、思へばく恨めしい。

ト思ひ入れ。

源左　やかましいわえ、われがこんど預つて、一度本國へ持ち歸る、眞鶴の香爐は、又もこつちへ奪ひ返し、隼人親子は縛り首、穂積の家はもう寂滅。

平馬　與三郎めは獄屋の憂目、後から冥途へやる程に、その時會つて泣面かわけ。

源左　匿し持つた香爐を、早くこゝへ出さねえか。

小笹　ヤア愚かや、やがて帝へ獻上となるべき大事の重器、女ながらも預つて、赴く途中で闇々と、なんじ等如きに渡さうや。

源左　いけしぶといその言葉、たとへなんと吐かさうと、どうで奪ひ取るその香爐、煙も丁度たきゝころ、鎌倉山につゞき野の、往來も稀な古戰場、野陣が原に卯の花の、雨の雫と消えてなくなれ。

トきつと見得。ト小笹、よろめきくく立ち上がり

小笹　非道の刃に朽ちはつるか、思へばく。

源左　きりくくたばれ。

ト雙殺の責めになり、これより兩人にて小笹を斬る事、よき程に、バタくく足音するゆゑ、源左衞門、平馬、ためらふ心にて、トゞ斬り伏せる所へ、以外の金平、傷を負ひし體、丈助と立ち廻りながら出で來り

金平　ヤ、小笹さまをば。

丈助　われもくたばれ。

ト立ち廻る。この内に、源左衞門、平馬、小笹をトゞ斬り倒し、源左衞門、小笹へ止めさす。この内に平馬、金平を一刀に斬り倒し、丈助もよろしく思ひ入れあつて、邊りへ思ひ入れ、時の鐘。

源左　思ひの外、骨を折らしやアがつた。

平馬　確かに香爐は懷中に。

ト平馬、丈助へ思ひ入れ。丈助、四邊へ心をつけること、源左衞門、香爐を取り出す事ありて、兩人、死骸を片寄せ

源左　ムウ……紛れもなき鶴の香爐……エ、、辱ない。

平馬　奪ひ返したので、ちつとは恨みが晴れたわえ。赤間

氏、さて〳〵貴公へ、いろ〳〵と骨折りをかけ申した。

ト刀を拭ひ、腰にさし

丈助　さうして平馬さまは、これからどこへ。

平馬　一度上方へ罷り越し、ほとぼりをさまして又候や、いづれ武藏へ趣く所存、香爐は道中筋、拙者が所持して參るも危險……いづれかの地へ住居を定め、書狀を以つて赤間氏の、旅宿までおしらせ申す。香爐はそれまで貴公が手許へ。

源左　ようござります。それぢやア、これはしつかりと預りました。

ト懷へ納める事。

丈助　どうでお前さまの御住居が知れゝば、直ぐにわたしが香爐を持つて上方筋へ。

源左　その內、わしは鎌倉で、梶原海老名の屋敷へ所用を……又、かの一條の手筈もあれば。

トこの內、丈助、向ふを見て

丈助　アレ〳〵、向うへ提灯の

平馬　灯影はこゝへ

源左　モシ。

ト囁く。

平馬　ムウ、この道筋を、夜明けぬ中に。

源左　隨分ともに平馬さま。

平馬　赤間氏

源左　その內に會ひませう。

ト靜かなる禪の勤めになり、源左衞門、丈助を伴れ、上の方へ、平馬は橋懸かりへ入る。右の鳴り物にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、すべて幕明の道具、夜更けし體に納まる。

ト時の鐘、好みの合ひ方になり、東の揚げ幕より、おとみ、好みの拵らへ、鎖にて釣りし模樣附きの提灯をさげ、後より與三郎、同じく好みの拵らへ、頰冠りにて出て來り、中の歩道を渡り、本花道へかゝる。內にこなしありて

與三　カウおとみ、こゝ迄くりやアもういゝワ。靜かに歩け。提灯の火でも消すと始末に惡いワ。

とみ　それでも、今日晝からの始末といひ、何だか頻りに胸騷ぎがするからね。それで心が急ぐのサ。

與三　びく〳〵することがあるものかえ……手前に逢はねえその前方、安の野郎が內にゐて、二年あまりも方々

と、漂泊いては居たもの丶、あの時分には高が小強請、
強借の錢貰ひ、あの位の事で食ひ込んでつまるものか。

とみ　それは知れてゐるがね……いつか和泉屋の一件で、
安が氣取つてそれからお前へ。

與三　なんの、あいつには、それ相應な事がしてあるか
ら。

とみ　それでも、わたしが考へでは、確かにあいつがお前
のことを、輪をかけて喋舌つたから、それでこんなにお
前をば。

與三　そこは、何とも云へねえワ。

トこんな事云ひながら、花道へかゝること。この内に
中通り二人、以前の目あかし、黒き手拭にて頬冠りし
て、西の揚げ幕より出て、身を潜め窺ふこと。兩人、
囁き合ふを、與三郎、ふと心づき

誰れだ、どいつだ。

トおとみ、提灯をさしつける。この灯かげに、兩人與
三郎を見て

兩人　與三郎だな。

ト打つてかゝる。おとみ、提灯を袖に覆ふ。與三郎、
兩人をくゞり抜け、一人を投げのけ、一人を縫ひぐる
みにて打たんとする。兩人、逃げて入る。

與三　何をしやアがるのだ。

ト手に殘りし縫ひぐるみを持ち、おとみへこなし。兩
人よろしく舞臺へ來る事

この間、笹目が谷へ、少しの內、店を借りた時、氣をつ
けてやつた目あかしが、きのふおれに用心しろと知らせ
てくれたが。

ト思ひ入れ。

とみ　それだから、氣になるわね。

與三　いゝワ、どうかすりやア、手前を連れて、生れ故鄕
の江戸へ巢をかへるワ。

とみ　いつそ、さうした方がよからうよ。

トこの內に、又一人、目あかしの拵らへ出て

捕手　われを。

トかゝる。これにておとみ、提灯を落し、燈火、消え
る。こゝへ打つてかゝる。立ち廻り一寸、與三郎、件
の捕手を引きつけ、

與三　こいつは、いよ〳〵。

とみ　モシ。

ト兩人思ひ入れあつて、與三郎、件の捕手をあてゝ、

思ひ入れ。

與三　氣をつけろよ。

トよろしくこなし。知らせにつきて、この道具まはろ。

本舞臺、もとの野陣ヶ原の道具になる。

トよき所に、小笹の吹替の死骸、倒れ居る事、時の鐘、送りにて納まる。ト又件の合ひ方になり、上の方より與三郎、おとみの手を引き、つか／＼と出て、血汐にすべる事

とみ　アレ、どうおしだ。

ト手を放す。

與三　道が濘るか、思はずすべつて。

トこの時に、手につきしこなしある。

とみ　暗さは暗し……わたしも何だか。

トこれにて、小笹の死骸へ躓く。

アレヽ。

トこなし。

與三　エヽ、どうしたのだ。

ト與三郎へ摺り寄り

とみ　たしかに人が。

與三　ヤ。

ト兩人、見やる。これにて、霞がくれ引き分け、灯入りの月出る。時の鐘、誂らへの合ひ方、日覆にて、郭公啼く。兩人よく／＼死骸を見て

コリヤ、女の死骸だわえ。ひどい事をしやアがつた。

とみ　よもや、意趣斬りぢやアあるまいよ。可愛さうにねえ。

ト見る事。與三郎、考へる。おとみ、月かげに見る事。郭公啼く。

どこでか、これは見たやうな。

ト與三郎もこなしあつて

與三　成る程、手前がさう云へば。

ト思ひ出し

エヽ……見た筈だ。コリヤ、過ぎし頃、和泉屋で、初めてその時めぐり逢ふ

とみ　お前の實のかゝさんか……コリヤマア、誰れが。

ト大きな聲をする。

與三　コヽ、これ。

ト兩人、思ひ入れあつて、おとみ、四邊へ心を配る

事。

とみ　血筋のしるしか、今こゝへ、お月にかゝれども絆も切れ。

與三　あとの祭りのこの亡骸。

ト思ひ入れ。又郭公啼く。

とみ　折も折とて空に音を

與三　血を吐く思ひ時鳥、

とみ　誰れの爲業か

與三　チエ、。

ト兩人、よろしく思ひ入れあつて

忌々しいなア。

ト思ひ入れ。時の鐘、月、雲に隱れる事、この時、人音するゆゑ、兩人、死骸を片寄せ、おとみへ囁く。おとみ、帶ひき上げ、點頭く。誂らへの合ひ方、上手より糺明の立衆、目あかし四人、十手持ち、窺ひ出て來る。後より以前の捕手、頭も窺ふ。

捕四　捕つた。

ト與三郎、おとみかゝるゆゑ、おとみ、拂ひのける。與三郎、突き廻し、捕手を投げ退け、きつと思ひ入れ。これを竹笛入、誂らへの合ひ方、又兩人かゝる。暗がりの模樣、與三郎、手拭にてくるみし、腰の出刄を出し思ひ入れ。右の合ひ方にて立ち廻り、四人は、十手にてかゝるを、出刄にてあしらふ。この内に、おとみへ硨磲右衛門、組つく。よろしく掻きのける仕組。與三郎、早くと捨臺詞。おとみ、逃げられはしねえわな、と捨臺詞いひながら、面白き立ち廻りありて、硨磲右衛門、おとみにじやらつき心、與三郎、出刄にて、みね打ちにあしらひ、ト寄つて、組みつくを、斬りつける仕組よろしくあつて、チヨンと月出る事。見得よく、與三郎、四人かゝる。

硨磲　お尋ね者の與三郎……そこ。

ト皆々はげしくかゝり、與三郎、おとみを引摺ゑ

皆々動くな。

ト與三郎、おとみへ繩かける。この見得よろしく、山おろし雙盤の責にて、よろしく、

拍子幕。後シヤンギリ

六幕目

女護島の場
離れ島の場

浄瑠璃『島廻色爲朝』常磐津連中

役名＝御曹子爲朝。八丁礫喜平治。女護島の梅薫女。侍女、小藤。同、龜菊。一向無忠太。切られ與三郎。

本舞臺、向う一面の淺黄幕、一聲浪の音にて幕明く。

トこゝに一向無古太、半素袍烏帽子の形にて、床几にかゝり、次に若い衆三人、柿筒袍、漁師の形にて扣へてゐる。無忠太、思ひ入れあつて。

無忠　その方どもは、漁師よな……かく申す某は梶原が家來、番場の忠太が又家來、一向無忠太と申す者、

漁一　ハイ／＼、私し共は、この濱に年久しく住ひまする漁師仲間の者でござりまする。

漁二　仰せの趣、何の御用でござりますやら、承はりたう存じまする。

無忠　その方どもへ、申し渡すは餘の儀にあらず、さいつ頃、鎌倉出生の與三郎と申す者、人殺しの風聞、まつた千葉家の女を殺害の上、所持の品々奪ひ取り、亂暴の振舞これあり、遁れ難き重罪につき、流罪仰せつけられしに、この度の法會によつて、流人の者共、赦免につき、人別御調べの所、右與三郎儀は、當月三日の夜、島紛失の訴へ、かれこれ以つて不屆至極、これに依つてかくの通り。

ト人相書を出して

配符を以つてお尋ねの與三郎、津々浦々は申すに及ばず、山林幽谷、詮議に及び、もし似よりの者に出會ひなば、早速からめ捕り、差し出すべきやう、きつと申し渡したぞ。

漁三　左樣なれば、その與三郎と申しまする流人、島脱けの御詮議。

漁一　それなる人相書を以つて、御吟味でござりますか。

無忠　いかにも、重罪の者なれば、只今より申し合せて、吟味いたせ。

漁二　ヘイ／＼、仰せの趣、委細畏まりました。

無忠　それにて、身共が役目も相すみ、この旨、役所へ返答いたさん。イヤサ、返答いたせ。身共は喋べつて空腹

ゆゑ、暫時これにて辨當つかはん。
ト此の時、バタ〳〵にて、向うより中通り二人、山立拵の形、書物を奪ひ合ひながら出て來り、無忠太、これを見て
ヤイ〳〵、かしましい、何事ぢや。
トこれにて兩人、無忠太を見て、思ひ入れあつて
中一 ヤア、あなたはお役人さま。
中二 何でも怪しいこの書物。
中一 それをこつちへ。
中二 なにを。
ト兩人、立ち廻つて一、これを取り上げ
中一 これこそ、慥かに萬國繪圖。
無忠 その品、これへ。
ト右の觸れを、無忠太へ渡す。披き見
ムウ、なんだ……淨瑠璃名題、弓張月に棹さして、女護の島へ男淺妻、淨瑠璃太夫
中二 三味線岸澤古式部、岸澤三造、上調子式松三次
無忠 ドレ〳〵……相勤めます役人。まて〳〵、役人とは身共が事。ハテ面妖な、それ讀み上げい。
中一 市川小團次、吾妻市之丞、中村歌女之丞、尾上梅幸
市川團十郎
無忠 コリヤ〳〵、團十郎とは聞き及ぶ、しかも身共が師匠であるわえ。
中二 そんなら、これは淨瑠璃觸れ、
兩人 いよ〳〵始まり
無忠 その爲口上……サア、來やれ。
ト上手へ入る。ドロ〳〵になり、心と云ふ文字を日覆へ引いて取る。しらせにつき、淺黄幕を切つて落す。
本舞臺、正面二間の茅葺、棕櫚の丸木柱、上の方へ張り出し、横に孫庇、下地窓に好みの簾垂れをかけ壁にひよわれ、この所、はめ網代の書割、家體の前面、瓦燈口の樣に塗り下げ、このまはりへ丸竹を折曲げし體、この内へ更紗の緞帳、正面見附、銀ばりへ好みの彩色畫、中へ中足位に一面に床、上の方、家體の下、荒礒の洞になりし岩組の張物、上の方へ畫心、誂らへの岩組、これへ牡丹の盛り、よき所へ靑石にて、女人國と記したる傍示杭異形に拵らへ、下手より後、銀張りの波、遠見の誂らへよろしく、この下手、常磐津連中の山臺、岩組、荒礒、蹴込み、

舞臺前に磯際の浪板、よき所へ置き並べ、日覆より櫻の吊り枝、爛漫と二重に下ろし、すべて、伊豆の七島女人島を、弓張月琉球國の寧王女配所と混じ合せたる畫面の道具、好みの通り飾りつけ、右の山幕切つて落し、一聲、浪の音にて、道具納まる。

トこゝに常磐津、中居並び前彈にかゝる。

〽緜蠻たる黄鳥は、丘隅に止まる。人はなほ、野暮を離れて憂きを身に、その配謫の爲朝を、色にやつして嶋廻り。

トこれを、誂らへのせり出しの鳴り物になり、花道より爲朝、若衆鬘、後茶筌、半大口仕立の縫模様の袴、好みの着付、小忌衣めきし狩衣の袖を絞り、小さ刀、金剛草履、誂らへの重籐の弓、弦を片しへかけて、釣竿に見立し好み、これをかたげ、藤蔓編の靱と見たる魚を入れる籠を、形よく背負ひ、尤、中へ箭を仕込みある心、右の出立にて花道へセリ出す。正面ハ梅薫女、好みの振り袖、衣裳の上へ薄桃の小忌衣めきしを引つかけ、これへ木の葉の模様、羽二重うへさらげ、誂らへの貝にて拵らへし簪、小藤、これに類したる好みの拵らへ、龜菊、同じく、梅薫女は女護島の姫君、あと二人はかしづき少女の拵らへ、梅薫女、異風なる好みの團扇を携へ、小藤は、誂らへの緒環を持ち、梅薫女、眞中に立身、上の方、小藤、下の方、龜菊と兩人座して、右舞臺、花道一度にセリ上げ、道具納まる。

〽八十島かけて汐路潟、うるまの國に幾日か、龍の都に釣りたれを、弓弦も戀に和らげて、矢武心を八丈と、後に傳へし妹が國、神の告げぞと御曹司。

ト右の文句にて、梅薫、小藤、龜菊、花道の爲朝、双方、心々のやすらかゝる振りあつて、文句の納りまでに梅薫女、爲朝をそれと見やり、待ちわびる心いき、振りよく納まる。後の文句にて、爲朝、舞臺へ來る。振りになる。

〽なまめく風も南や、色の汀につき給ふ。

トこれにて、爲朝、舞臺へ來る。梅薫と入替り、爲朝上に、梅薫、小藤、龜菊、上下より並び、見得よく納まる。浄瑠璃の合ひ方、浪の音、鼓のあしらひ

爲朝　ハテ、麗はしきこの景色、巖に開く牡丹花に、爭ふ色は唐詩にも、つらねし事も聞かざりし、梢まばゆき櫻のながめ、こゝも日本の中なるか。

梅薫　いかにも、同じ神の國、伊豆七島の中なれど、千里

の浪路はるか越え
小藤　浮世に遠く妹と脊も
龜菊　名のみ渚に片思ひ
梅薫　こゝぞ名に負ふ
女皆　女護の島。
爲朝　ムウ、すりや、扶桑國の東にありと唐書に見えたる
が、遊歴するは今日はじめて。
梅薫　サア、初めて來ませしあなたこそ、まさしく伊豆の
御曹司、爲朝公ととくよりも。
　ト爲朝、思ひ入れあつて
爲朝　合點行かざる女が振舞、いかにも、われは清和の末
葉、六條判官爲義が悴にて、鎭西八郎爲朝なるが、某、
この島へ渡海なすとは、何人が告げたるぞ。
梅薫　仔細といふは外ならず、コレ、御覽じて疑ひを。
〽薫の處女は懷中より、取り出す名玉、爲朝はつく〲
と見やり
　ト右の内に、梅薫、錦の袋を出し、中に入れたる名玉
を爲朝へ渡す。爲朝よく〲見て、好みの合ひ方にな
り
爲朝　ヤヽ、この名玉は、過ぎし頃、鳥羽の上皇が勅命
受け、琉球國へ押し渡り、放せし鶴の在所を求め、寧王
女が望によつて、その時鶴とかへ〲に、與へて戻りし
この玉を。
　ト梅薫をよく〲見て
どうしておことは所持なし居るぞ。
梅薫　お話申すも七日後、その曉の夢の告げに、この玉
を授りて、おッつけこゝへ……御曹司爲朝公のお出であ
れば、玉を證據におとゞめ申し、妹脊の縁むすべよと、
覺めて嬉しき夢見ぐさ。
小藤　浮世に遠き嶋少女、尊きお方へお言葉を、交はす術
さへ知らざるも、都の手ぶりそれ〲に。
龜菊　敎へられたるその上に、共にお側に宮仕へ、お情う
けよとわたしらも。
小藤　見たのは同じ
兩人　夢の告げ。
梅薫　それゆゑ待つて、今日が日まで
三人　ようお出で遊ばしたなア。
　ト爲朝、こなし、梅薫、爲朝へ思ひ入れ。
〽待ちあかせどもさながらに、桂男へ打ちつけに、あ
つかしじまのかね言を、云ふ戀草の下萌や、顔染め色の

山つゞじ。
ト右の文句の内、梅薫、爲朝へくどき模樣、尤も、恥かしき心いき。小藤、龜菊、兩人も傍より取り持つ心にて、自分も爲朝へ戯るゝ心、すべて女島へ男の渡りし心よろしく、これまで雲上なる、やすらかな節づけをくどき模樣にして、次の文句より賤の手業の機仕事によそへ云ふ心、この中を、梅薫、あと兩人へ割振り
〽緣のいとしさ、嬉しい妹脊、さすが結ぶの神さんも、ひねつて大倭唐土と、盡きぬ戀路ぢやないかいな。
トよろしく納まる。爲朝、思ひ入れあつて
爲朝　弓箭を取つては、數萬騎も、いつかな恐れぬ爲朝ながら、まだ初陣の少女らに、取り巻かれては殆んど當惑……シテ、この島の女のみ、何ゆゑあつて住果てるぞ。その譯語れ、どうぢや／＼。
ト思ひ入れ。梅薫、こなしあつて
梅薫　女護島なる故事は。
ト團扇を持ち、立ち上がり
〽語るも昔秦の御代、粋な始皇の色好み、鴛鴦の衾に玉の床、閨に手に手を筑紫琴、しらべも愛し可愛さに、夜晝なしの樂み。

ト梅薫、よろしく、やすらかな振り事、この内、小藤龜菊、誂らへの銚子杯、高坏へもりし木の實、みさこの鮨を盛りしを持ち出で、酒を侑める事、雙方、振りの模樣よろしく
〽猶幾千代も長かれと
〽方士徐福に命ぜられ、老せぬ藥をもとめらる。
ト梅薫、納まる。爲朝、思ひ入れあつて
爲朝　オヽ、その故事は聞き及ぶ……徐福は巨萬の寶をば
〽船にたゝへてとも綱とき、わが大御國の蓬莱へ、遙けき波路いとひなく。
トすこし振り模樣、こなしあつて
日本の地へはつきたれど、かの仙丹を求め得ず、遂に終りを三熊野に
〽今も古跡は著しき、徐福の宮といひ傳ふ。
トよろしくこなし。
龜菊　その折徐福が伴ひし、女夫の童を二つに分け
小藤　この東西へ捨てられて、年經るまゝに妹と脊の、その語らひはしたれども
梅薫　男女ひとつに住居せば、海神の祟を恐れ、南の風吹くその折は、年に一度の逢瀨さへ、一夜を千代とかこつ

のも、この奥島になみ〳〵の、男女の身の上にて、わらはは徐福のゆかりとて、今に定まる夫もなく、それを不思議にこのお目もじ、いつ〳〵迄もこの島に、止まつてたべ……わが君さま。
爲朝　ホヽオ、切なる妹が志、過分々々。
梅薫　サア、この上は、わが君を、慰め參らすその爲に。
　ト小藤、龜菊へこなし。
小藤　不束ながら
兩人　わたしらが。
　ト思ひ入れ。
〽何がな心なぐさめんと、海士の小舟の棹の歌。
　ト小藤、龜菊立つて
〽おらが脊子衆はなら、ヨウコレ、いづこへ越したよ、胸にやく鹽煙がたえぬ。サンサなうよ、なつかしむ唱歌も鄙のしほらしや。
　ト兩人よろしく納まる
爲朝　ハテ、珍らしき海士の小唄、面白い事であつたわえ
梅薫　シテ、又あなたは、何ゆゑに、今配所の御身には、ならせ給ふか、その譯を
女三　お聞かせなされて下さりませ。

爲朝　それぞ保元の初つ方、新院御謀叛のお思立、止む事を得ぬ招により、父爲義に從ふて、崇徳の君へお味方、左府頼長が舌頭に、われが捧げし計略の、軍慮も仇に獅子丸の
〽直垂の露八龍を、鎧の袖も只徒に、かたしく隙もあかつきの、不意に寄手の鬨の聲。
討手は淸盛、兄義朝、是非なきものは武士の
〽箭ごろ引つめ强弓、何の用捨も雨霰
百發百中射ておとす
〽猶もあらてに數千の官軍
しや、物々しき奴輩かな
〽われ西海にある時は、船を浮めて逆まく浪、風波の難に身を犯し、又は峨々たる山岳の、馬蹄あやふく大刀劒
今戰も時を得ず、あはれ君には松山に、音をのみぞ啼く濱千鳥、都を跡に滋賀の里、力なく〳〵落武者の、末さすらひに藻汐たる、露けき袖やいかにせん。
　ト右の文句のかゝりより、爲朝、扇を持ち、軍物語の振り、誂らへの通りよろしくあつて、よき程より、愁ひのこなしへ移る事、よき程に、梅薫を引き出す心に、一寸からんで、文句の納りに、兩人よろしく愁ひ

の思ひ入れに納まる事。小藤、龜菊兩人、右の銚子、
杯、肴の入りし椽高を持ち出て

龜菊　その御心を晴らすには、さもしけれどもこの島酒。
小藤　酒は愁ひの玉帚に、世の諺にも聞きますれば
龜菊　いざきこしめせ
兩人　わが君さま。

〽いざきこしめせと侑むるにぞ、爲朝取り上げ給ひ
トこの内、爲朝、杯とり上げる。龜菊、酌をする。
爲朝、一口飲み、こなしあつて、この内に、右の文句
チヤン〳〵と遠よせになる

爲朝　最前は、心なく一盞を傾けしが、いかゞいたしてこの酒を、この島へ貯へあるぞ。
梅薫　サア、それは徐福の昔より、島に生立つあした草と熟す木の實を取り合せ、造り設けし鹹草酒。
小藤　そのお肴の用意さへ、梅薫さまとわが君の、妹脊を千代もと鶚の鮨。
龜菊　お侑め申すこの酒も、御心に叶ひなば
三人　お嬉しう存じまする。
爲朝　ハテ、心深き乙女のもてなし、世にも得がたき鶚の鮨、殊更酒はあした草へ、木の實を合せ醸せしとは、珍らしい。

ト思ひ入れ。
〽人の情の盃は、なほ快よくめぐらして、こし方世々の語り種。
ト爲朝こなしある。梅薫女、小藤、龜菊、兩人も、それ〳〵に待遇す心いきよろしく、爲朝、杯を傾け

その上、豐後の山中にて、八町礫喜平治が、もてなす酒にさも似たり……その時の名は。
ト考へ
オヽ、猿酒とやら申したり……イヤ〳〵、今乙女等と、妹と脊の道を開かん爲の酒。
ト思ひ入れ。
〽猿とは禁句猿舞
ト扇を持ち、立ち上がる事
〽われもましらの水の月、及ばぬ袂さゞ波の、猿めでたく舞はうよ。
ト右の合ひ方にかゝり、囃子のあしらひよろしくあつて、ひとさし舞あつて
〽汲めや鹹草酒、あしたも汲めよ盃に、妹脊も千代ときくの酒、齡も延ぶる下露の、流れの末は絶えずとうた

り〳〵
ト又囃子へ移りよろしく、爲朝、舞の振りよろしくあつて納まる。
〽祝ひ興じて舞納む。
トこれにて、波の音はげしく、さしがれの千鳥、大分飛びかふ。皆々こなしあつて、
梅薫　風むらだちと、飛びかふ千鳥。
小龜　汐滿つしらせか、アレ〳〵〳〵。
爲朝　もしや、われを平家より、狙ひ討んず者共の、寄せくるしらせか……ソレ。
〽弓引かけ、番ふ矢の、君の後から喜平治が
トこの內、爲朝、以前の弓へ弦引つかけ、出端に背負ひし靱より、箭を引き出し、きつとなる。ト薫女、小藤、亀菊、居並びきつとこなし。これにて向うより、八町礫の喜平治、好みの着附の上へ、厚衣ひつかけ、脚絆、素脚、艪櫂をかたげ、ばつちやう笠を持ち
喜平　御注進々々々。
〽呼はる聲と諸共に。
トこれを、出の合ひ方になり、喜平治、件の拵らへにて、向うより出て、花道にて

〽逸散走りに韋駄天竺、支那韃靼、且那のお供で琉球の礫も八町八里半、妹が國とは妙でんす、兀良海上も鼻唄で、洒落ては居れど都では、まだどんちやんの眞最中、そこらを氣轉喜平治が、かけつけ三盃機嫌よく、うかれ磯邊を走り來る。
ト花道にて、喜平治よろしく振りあつて、舞臺へ來て爲朝皆々も、喜平治を見てこなしあつて
爲朝　ヤア、誰れかと思へば、八町礫。
梅薫　今おはなしの
女三　喜平治さんか。
喜平　こゝは名に負ふ女護の島へ、御安着あるわが君さま御滿悅なるこの場の體、お目出度う存じまする。
梅薫　御注進と聲をかけ、お出でありしは心がゝり
小龜　早う樣子が、聞きたいわいなア。
喜平　ハテ、御注進とやらかしたは、わが君はじめ、女中方へ、氣を持たしたわれらが計略……尤も君を大島より……落しまゐらすその後は。
ト思ひ入れ
爲朝　定めて、平家の討手の武士、大軍もつて押し寄せつらん。なんと〳〵。

喜平　ハア、。
〽されば候、そろ／＼と、三つ合せてさん候。
ト喜平治、こなしあつて、ノリになり
君が弓勢軍略に、恐れ戰く弱蟲ども、とても手勢で敵はじと。
〽わけも白浪風來我、まつくろ黑船とび乘りも、集めて四十八束擥、一眼國は足長へ、肩を東に遠望の目配り、しのぶ黑子へ長臂のかけ引、喇叭ちやめるやら銅羅太鼓鬨の聲々蛇味線も、オットセイ、蝦夷松前のお方でも、心にふたつはなんのかれこれ、六百餘騎を物の數とも手練の礫、八方十方も投げつけうちつけ、腹穴つん貫き、大人コレ／＼膝の皿。こいつは耐らぬ、蜘蛛の小人を散らすが如く、島の四方へ逃げ散つたり。
ト喜平治、よろしく振りあつて
この勢に空手のやつ原、殘らず討ち取り候へば、御心安かれ爲朝公。
〽島に手柄も高嶋や、釣地でしやべりするてけり。
トよろしく思ひ入れ。
爲朝　ホ、オ、勇まし、、頼母し、、出來した／＼。
〽喜び給ふ中空へ、羽を伸し渡る鶴の聲。

ト風の音、トヒヨになり、誂らへの鶴、足に黃金の札をつけしが、日覆より飛び交ふ。みな／＼見て
喜平　ヤ、、又もこの土へ飛び來る丹頂。
梅薫　まさしく君が
小龜　仰せのあつた
爲朝　うるまの國より持ち歸る、覺えの鶴が、又候や、南をさして飛び行く體。
喜平　君の御座所を指示する知らせか。
小藤　イエ／＼、それはお二方の、妹脊を壽く
小龜　目出度い知らせ。
爲朝　とは云へ、奇異なるこの振舞。
ト立ちかゝるを
梅薫　イエ／＼、あなたは。
ト引とめること
〽鶴の千歳の萬代も、妹脊は味な鴛鴦の、衾の裡へ入り給ふ。
ト皆々よろしく、爲朝、梅薫女、正面の家體へ入る。緞帳おりる。こゝへ喜平治、小藤、龜菊のこゝろ。
喜平　先づ、これで淨瑠璃の役目が濟んだ。
小藤　御苦勞さまでござりました。

亀菊　マア、御酒なりと上げませう。
喜平　どうして〳〵、こゝは女護の島、うつかりしては居られねえ、ドレ、この儘に。
ト立ちかけるを、兩人よろしくとめて
小藤　イエ〳〵、こゝへござる殿達は
亀菊　もう〳〵餘所へは遣らぬぞえ。
ト止める事。
喜平　これは迷惑な。
兩人　滅多にこゝは、歸さぬわいなア。
〽稀に北風より南風、吹くとは嬉し二人して、みつ懷の戀中の、嘘にも浮名異なら、緣は異なものいなさ東風色の浮世ぢやないかいな。
ト小藤、亀菊兩人、手踊り模樣に止める事、喜平治、あしらひ乍ら、逃げる仕組よろしく
〽踊る振りして逃げ出す、後を慕ふて
ト三重にて、喜平治、橋懸かりへ入る。あと兩人、追つかけて入る。これにて太夫座を消し、浪の音、トヒヨになり、以前の鶴、黒塀の内より、日覆を引いて向う正面へ引いて取る。大ドロ〳〵にて、道具、居所にてかはる。

本舞臺、眞中に誂らへの岩組丸もの、この周圍へいろ〳〵海藻、磯草生ひ茂り、岩間より葦の茂み、この前、高き浪手摺、一面に舞臺前に浪布、正面の後奥深に、三の手まで段々の書割、棧敷前、東西、水引をあほり反し、浪の水引。向う正面一面に浪手摺、これへ遠山茂りし板の引出し、すべて、伊豆相模の沖、巖が崎の模樣、大ドロ〳〵にて、淨瑠璃より道具だん〳〵に變り、よろしく納まると、この大ドロにて、金張りの心といふ字を、日覆より巖の影へ引いて取ると、こゝに、以前の傷朝、好みの着附け、繩の帶、月代伸び、窶れし體、實は與三郎にて、脫島の模樣、巖石の上に眠け覺めし體、かすめて本釣り鐘、ホッと思ひ入れ
與三　ヤ、……今のは夢か……とんだ話だ。
ト思ひ入れ。これを誂らへの合ひ方、鼓のあしらひ
鎌倉にゐるその時から、數へて見れば三年越、身の錆からとは云ひながら、海老名の屋敷に捕はれて、ある事ねえ事無實の罪、云ひ立てられてすんでの事、由井が濱邊に獄門の、臺座の別れが、又助かり、沖の小島へ流され

て、藻屑を刈り込み漁の、その伊豆海の境界は、死ぬにも勝る苦しみと、故郷の空が懷かしく、島を脱け出た丸木船、漂ふ波に碎かれて、打ち上げられた岩の上、命の綱と縋り付き、疲れて眠りもわれ知らず、姿はあり〳〵爲朝が、廻り廻つて女護の島、初夢ならば富士二鷹、似ても似つかぬおれが形……なんぼ家名が伊豆屋でも、かたちに伊豆の御曹司、爲朝さまたァ呆れけえるワ……夢は五臟の煩ひとは、大方こゝらであらうよなァ。

ト思ひ入れ。浪の音、生け殺し、邊りへこなしあつて

アヽ、なんだか、べら棒に寒くなつた。

ト邊りへこなしあつて

船は碎けて、搖り流され、取り付いてゐた板子さへ、どうかして仕舞つた。

ト邊りへ思ひ入れあつて

一體こゝは、どこか知らん、さつぱり分らねえ。平一面、汐煙、せめて方角を知りたいものだ。

ト此うち浪の音、千鳥笛などよろしくあしらひ、鼓コイヤイ、此うちこなし、窓蓋あけ、明くすること。

アヽ、有り難い。少しは靄が、霽れるわえ。

トこなし。浪の音になり、幕あきの油紙に包みし件の狀箱、差し金にて舞臺の浪手摺りの中へ漂ふ。與三郎、これを見て

ハテナ、なんだか、爰へ流れて來るが……ハヽア、金比羅へ上げた神酒樽か……なんだか、取り揚げて見たいものだ。

ト此うち浪の音、だん〳〵近よること、岩角へつらまり、手を伸ばし、取り揚げること、浪の音の鼓のあしらひよろしく、取り上げる。此うち浪の潮煙、はれし心、かざし見て

こりやア狀箱だ。油紙に包んであるが、こんな物が流れて來るからは、船の往き來のある所だ……なんだか中をば。

ト岩角へすり附け、染め綱を切ること。尤も透し見て、手さぐりの心意氣、油紙を拔き、箱をあけ、中より封狀を出し、波あかりに翳し見て

こいつは、たゞの手紙ぢやねえ……アヽ、讀んでみたいものだ。

ト此うち浪の音、始終、好みの合ひ方あつて、向う正面、岩山の蔭より少しづゝ紅絹ばりの日の出を上げること、これにつゞき、明るくなる心。

ヤ、こりや、夜が明けるわえ。

ト思ひ入れあつて、披き見て、空へかざしなどして、讀み取るこなしよろしく

飛札を以つて申し送り候……われ等こと、かの香爐を隱し持ち、暫く武藏に身を忍び候が、いづれ當秋までには、その地へ發足申すべく、就いては、その眞鶴の香爐、彈正公には兼ねて御懇望と承はり及び候、鎌倉表へ罷り越し候上、獻上申ずべく、われ等が身分の御吹擧、偏に頼み入り候……海老名軍次さまへ……某より……

……ムウ。

ト思ひ入れあつて

この手紙の文體では、千葉家の重寶、眞鶴の香爐、盜んで江戸へ身を隱し……海老名の軍次へ知らせの手紙……うぬが名前を匿すからは。

ト手紙へこなしあつて

手紙のぬしは胡散なやつだ……こいつは、いゝものを見つけたわえ。

ト思ひ入れ。浪の音、生殺しよろしく、これにて手紙、卷き納めて、油紙へ包み、腰へ纏ふ思ひ入れよろしく、この内に、向うの日の出、二分半か、三分通り上がる事、さし金の千鳥飛びかふ。與三郎、思ひ入れよろしく、この内、道具の後にて、うんじやうなる節附かすめて、船唄きこえる仕組。

〽やら〳〵目出たやア、山も見えけりゆたかな帆、幾十かへりの湊入り、ヨノオ。

ト船唄でかぶせ、浪の音のあしらひ、與三郎こなしあつて

ヤ、風の模樣が、聞える船唄……この邊りをば渡海の船が……ムウ……それと見たなら便船頼み、どこぞの湊へあがつた上で

トこれにて、日の出へ心づく仕組なり、よろしく日の出へこなしあつて、浪の手摺へ、日の影うつらふ仕かけよろしく、日の出へ與三郎、じつとこなし

ヤ、アレ〳〵、日の出が閃くこの浪間。

ト早めのやうな合ひ方、浪の音。

今の夢では爲朝が、放した鶴に巡り合ひ……又、手紙では、眞鶴の香爐の在所が知れるは正夢……その幸先に日の出の吉相。

トこれにて、向う揚げ幕の方に鳥笛。

朝日の影によく見れば……あすこは下田……相模の浦



八世市川團十郎の與三郎

浦。

ト見渡し、嬉しき思ひ入れよろしく、浪の音、右の合ひ方、日の出の方へ指さす心いきあつて

東はやつぱり故郷の江戸……天道さまは。

トうつかり立ち上がり、よろ〳〵として、どつかり坐す思ひ入れ、木の頭、千鳥、大分日覆へ立ちのぼり、千鳥笛、日は段々と高く昇る。

ありがてえなア。

ト嬉しきこなし、これをきざみ、すべて一度の仕組、一聲浪の音にて、よろしく、後シャギリ

ひやうし幕

七幕目

飛鳥橋の場
平塚道の場
王子堤の場

役名──赤間源左衛門。子分、團平。同、藤六。同、市助。同、百藏。同、丈助。小道具屋長九郎。左近妻、闇路。伊豆屋與五郎。手代、清八。相澤六郎。觀音久次。本田次郎親常。切られ與三郎。

本舞臺、上の方に、ちよつとしたる橋の欄干、この傍に、對の奉納の石燈籠、臺石の上へ、この傍に稻荷大明神と記したる石塚、これへ續き、川端の駒寄せ、これへ朱塗の開帳の提灯を立てあり、下手に酒肴いろ〳〵と記したる看板障子、床几二脚直し、後一面の淺黄幕、日覆より好みの釣り枝、すべて、王子道飛鳥橋の模樣、爰に鐵平一本差し、田舍道樂者の拵らへ、丈助、同じ　二幕目の役、赤間の子分段平、藤六、市助、百藏同じ後にて、外に若い衆の茶屋男の若い衆、酒肴の道具、酒宴の體、双盤太鼓にて、幕明く。

丈助　サア〳〵、皆が思ふやうに、飲むがいゝぜ〳〵。

四人　さう云はれねえでも、たらふくに吸ひ込んだ。

鐵平　時に、飲むのは飲むとして、あの頼んだ一件は、兩方ともに手筈はいゝかえ。

丈助　そこに間違ひつこはござりやせん……サア〳〵、鐵平どのが振舞だ、もう一つづゝやるがいゝ。飲まつせえ飲まつせえ。

段平　この大きなもので始めやう。
皆々　やらかせ〳〵。
　トこの内に、酒屋の亭主、燗の出來し大徳利、下物の鉢を持ち出て
亭主　サア〳〵、お誂らへのお下物、お酒も五合一時にお燗をつけました。
段平　オット奇妙々々。
皆々　サア〳〵、やれ〳〵。
　トこれより皆々、酒宴の模様よろしく
丈助　時に川口の兄弟分、お前いよ〳〵、今度はおれが親分の源左衛門さんと、一緒に、鎌倉へ行かつしやるかえ。
鐵平　されば、これからは鎌倉へ同道して、源左衛門さんにも世話になり、おぬし達にも入魂をば結ぶ爲で、快く飲んで下さい。
丈助　そりや有り難い、とかく一人でも、友達の多いのが氣が丈夫だ。
藤六　マア、鎌倉へ行つて見なさいまし。
四人　又格別でござりますぜ。
段平　時に、鐵平さんは、元は侍ひのあがりだと聞きやしたが
四人　眞實の事でござりますかえ。
丈助　ほんの噂のと云つて、ぬしはやつぱり下總の、千葉の家の知行取りだ。
四人　そりや、初めて聞きやした。
鐵平　かう心易くなるからは、云つて聞かせるが、國にゐる時分にはかけちがひ、源左衛門どのをはじめ、おぬし達にも近づきにならなんだが、こなた衆が懇意を結んでゐる山鹿毛平馬とは、われ等が朋輩、あの平馬が浪人したその時に、こつちも屋敷を梵天國よ。
市助　それぢや、平馬さんとは、遁れない間でござりますね。
百藏　それで、何かの話しも合ふといふもの。
藤六　今頼まれた一件も、なる程、山鹿毛どのへは友達の好みがひ。
段平　かうありさうな
四人　ものだてなア。
丈助　しかし、ぬしは浪人なすつて、いつ頃からこつちの方へ。
鐵平　されば、國元木更津は元より、鎌倉までにも當分は、

ちつと面伏の譯があるゆゑ、身よりを尋ねて武州の熊谷土堤…四郎頭の世話になり、郷士浪人の仲間へ入り、流れわたつて川口の、鑄鍋の釜六が組下で、名も改めて踏鞴の鐵平といふ長脇差…今度、赤間源左衛門どのが、あの島へござつて、同道されたあの平馬、廻り逢つて見れば昔は二輩、色色の話しも合つて、それから今度、鎌倉へ身を落つける積りだての。

丈助　成る程、人の行末は

皆々　妙なものでごんすの。

　トこの内、橋がかりより、序幕の手代長九郎、道具屋の形に拵らへ、小風呂敷を背負ひ、頬被りして出て來る。鐵平、皆々みて

鐵兵　ヤ、おぬしは道具屋の

子皆　長九郎どんではねえか。

長九　ヤ、鐵平さん、赤間の子分衆、この頃はついかけ違つて。

　ト云ひながら、頬被りを取る。

丈助　何だ、お前も、この暖かいに頬被りとは

皆々　どうしたのだ。

長九　ナニ、今あそこで、面倒なやつに逢つたからサ。

鐵平　面倒なやつとは、おれが事ではねえか。

長九　ナニ、とんだ事を云ひなせえ…お前方に、何の遠慮が。

　トこなしあつて、床几にかける。

鐵平　時に、こなた、どうする積りだ。

長九　どうするとは、何の事を。

丈助　これサ、しらを切んなさんな。平馬さまから頼まれた事があらうがな。

長九　ムウ、あの香爐の一件かえ。

丈助　コレ〳〵、こなたに逢つたら催促しやうと思つた所だ。いゝ所へ來さつした。

長九　いゝ所とはえ。

鐵平　ハテ、平馬どのがおぬしに。

　ト懷中より袱紗に包みし香爐を出しかける事あつて

こなたに逢つたら、くれ〳〵も、この節金が入用ゆゑ、早う捌いてくれろと云はれた。どうか働いて貰ひてえ。

長九　それだといつて、こんな賣物は、さう性急に行く譯のものぢやねえ。

　ト箱に入れしを出して見せて

この通り、どこへ行くにも持つて歩くが、から預かつて

ゐる代りには、平馬さまの方へも、十五兩といふもの、わたしが金を用立つてありますワ。賣捌きさへすれば、直々後金を上げますわえ。

丈助　さうして、いくらに賣るつもりだえ。

長九　本當の相場にする時は、三百兩か四百兩といつても、隨分にくゝない大名道具、しかし世間では不向きな品、急に金が入用ゆゑ、ばつたりに百兩に賣つてくれろと云はつしやるから、マア、百兩なら手放すつもりサ。

鐵平　コレ〳〵、積りばかりでゐても、賣れないではつまるめえ。

長九　サア、そこで方々と見せたらば、是非買ひたいと云ふ人がありやす。

鐵平　そんなら、鶴の香爐を

皆々　百兩に買ふ人が

長九　きつとあるね、間違ひなし。しかし、首尾よく賣つたその時は、わたしが貸した十五兩、差し引いた上で、きつとした、口錢は貰ふ積り、そこに間違ひはありますまいね。

鐵平　そこは、平馬どのに掛け合はつせえ。兎に角、急に金が入用、何分早く賣り拂ふ算段が肝心だ。

丈助　シテ、買手は侍ひか、町人か。

長九　ナニ、大した人ではねえが、必らず外々へ渡してくれるな、是非買ひたいと、かた〴〵の約束、金の算段さへ出來る時は、今夜にも譯がわかりやす……今日、その人にも逢つて來ました。おそくも明後日までには、金さへ手取れば、平馬さまへ。

鐵平　きつと頼みまする。

　トこの内、香爐をしまふ事。

丈助　さうして、今道具屋さんが、面倒なやつに逢つたと云つたは。

長九　ナニ、外でもねえ、わたしが以前、奉公した主人の息子を見うけたからサ。

段平　さうして、お前が

四人　主人と云ふわえ。

長九　されば、元山町の鼈甲商賣、伊豆屋の家の、わたしは番頭。

丈助　そんなら、お前はその以前、伊豆屋の家に奉公を。

長九　左樣サ、惣領息子は大の道樂、とても末始終、長い正月はあるまいと、わたしの方から伊豆屋を見限り……今は氣樂の道具屋商賣……所が惣領の與三郎は、色々

な事がたゝまつて、伊豆の離島へ流し者、そこで否應なしに弟の與五郎が、伊豆屋の跡式を丸どりで、りうと極り、この權現さまへ太々講で參詣に來た樣子、顏を見合せても面倒ゆゑ、そこで今の頰被り……時にわたしは、平塚の邸へも用を抱へてゐやす。ドレ、急いで行きませう。

鐵平　それぢやア香爐の一條は

長九　ハテ、呑み込みやした……そんなら皆さん。

鐵丈　長九郎どの。

長九　ゆるりとお出でなされませ。

ト右の鳴り物になり、上の方へ入る。後みな〱殘り

鐵平　今道具屋の話しでは

丈助　そんなら、伊豆屋の與五郎も

鐵平　追ツつけ爰へ來るとの樣子。

段平　それぢや、迂濶にあの女を

藤六　引ぱらふ

四人　手つがひが

鐵平　たとへ、與五郎がうせるとも、邪魔をひろがば、あいつぐるめに。

丈助　さうして、おつるのその外に、かの話しの女が形は。

鐵平　それも、こつちに見覺えが……コレ。

ト丈助へ囁く

丈助　ムウ、ようございます。そんなら邪魔のねえうちに、喧嘩じかけで一方から

鐵平　追つ片附ける手筈は道々。

丈助　みんなも一緒に

鐵平　サア、來やれ〱。

ト雙盤太鼓になり、皆々上の方へ入る。ト橋がかりにて

非人　歩みやアがれ〱。

ト早めし大拍子になり、橋がかりより、左近妻關路、窶れし拵らへ、好みの着附け、後帶、上へ坂東札所の笈摺を引かけ、これをお虎、老けたる女順禮の拵らへ、八、同じく贋六部の形、若い衆二人、襤褸非人の拵らへ、縫ぐるみを持ち、非人三・關路を引立て出て來り

とら　コレ〱姐さん、言ひ譯をしても駄目な事だ。

八　順禮の形でゐるからは、貰ひ溜めがあるに違ひねえ。

四人　早く出してしまひなせえ〱。

トロ々に云ふゆゑ
關路　これは、又無體な事、わたしは人の門に立ち、合力受けし覺えもなく、往來で袖に縋り、施行貰ふた事がなければ、貰ひ溜めとやらいふ、そのやうなお前方に取らする錢はござらぬ。滅多な事を云ふまいぞ。
非一　なんだ、こいつは、大層大風を吐かすからは、新米だな……そんな美しい新米乞食が、この邊で稼がれては、おれ達の咽がひるワ。
非二　その拵らへで貰ひ溜めがねえとは云はせねえ。
四人　早く出せ〳〵。
關路　又しても、無體な事。成る程、順禮姿をしてゐるゆゑに、さう云やるも尤もぢやが、わたしは、ちと譯があつて……サア、信心ゆゑに、坂東の札所へ參詣をする者ぢや。修業して通る者ぢやござらぬわいの。
八　ござらうが、ござるまいが、順禮の形で居るからは、おいら達が仲間へ、なぜ挨拶して通らねえ。
四人　なぜ仲間入りの挨拶をしねえのだ。
關路　其やうな法があるかは知らぬが、何をいふも修業者の勝手を知らぬゆゑの事、マア料簡して
とら　イヤ、料簡ならねえ。

四人　錢を出せ〳〵。
トこの爭ひの中に、向うより伊豆屋與五郎、羽織着流し、雪踏がけ、後より清八、手代の拵らへ、棧留の袴風呂敷を持ち出て、舞臺の樣子を見ながら、早足に來たり、よろしく見兼ね、止めて清八へ囁くこと。
清八　アヽ、コレ〳〵、女を捉へてどうしたものだ。
與五　見れば、其方達は、いつもこの往來へ並んでゐる修業者ではないか。
とら　オヤ、お前さんは、いつも手の內を下さる
四人　旦那でござりますね。
ト情氣る。この內、關路、與五郎を見て、恥かしき體に、顏そむける事。
清八　何だか知らないが、見りやア新米の修業者だ。
與五　可愛さうに、料簡するがいゝワ。
とら　そりやお前さんのお詞だがね……こんなべんべら物を着てゐながら、
非一　わしらが出張る場所へ、つか〳〵と踏込むから
兩人　商賣の邪魔になりますわな。
非二　それだから、仲間入の錢を
四人　出させるつもりで、かれこれ云ふのサ。

トこの内、清八、こなしあつて、錢を二百出して

清八　コレ〳〵、今こゝへ旦那がお通りかゝりなされて、料簡しろと仰しやるのだ。譯は何だか知らないが……サア、これを持つて、早くあちらへ行くがいゝ〳〵。

とら　それぢやア旦那がこの新米に

四人　肩を持つてかえ。

清八　なんで、旦那が肩を持つの、腰を押すのといふ譯ではねえ……通りかゝつて止めさつしやるのだ。それを持つて行けと云へば。

トこれにて順禮、皆々へこなしあつて

とら　仕方がねえ、いつも御報捨に預かる旦那が、堪忍してやれと云はつしやるから

八　料簡してやるがいゝ……コレ、おぬし達も料簡してやれ。

非一　仕方がねえ、料簡してやりませう。

非二　コレ新米、この近所へ來て、おれたちが商賣の邪魔をすると聞かねえぞ。

非一　旦那のおかげで助けるのだ。

四人　幸福なやつだなア。

ト皆々橋がかりへこなし。時の鐘になり入る。關路、始終さし俯き

關路　どなたかは存じませぬが、只今の難儀、お救ひ下されまする御恩の程、有り難う存じまする。なか〳〵お禮は、詞にも盡されませぬが……又あの者が、これへ參らぬ内に、私しはこゝを立ち去りまする。重々の厚志、御緣もあらば又その内、お目にかゝり、ゆる〳〵とお禮申すでござりませう。眞平御免なされませ。

ト顏見せぬ心意氣にて、禮云ふて上の方へ行かうとする。この内、與五郎、清八、こなたの床几にかける。關路へこなしあつて、關路行きかけるを

與五　ア、もし〳〵お女中。

ト呼びかける。關路、又行きかけるゆゑ

コレお女中さま、ちよつとお待ち下さりませ。

關路　ハイ。

トもじ〳〵こなしあつて

御用でござりまするか。

トとまる。

與五　お姿は變りはてたれど、正しくあなたは。

ト考へ、

その以前、元山町へ一兩度、御邸と御用が表向きで、お

尋ね下されました、關路さまではござりませぬか。

關路　お目立ちまする上からは、お隱し申さうやうもない、いかにも、穗積左近が妻、かゝる姿でこのお目もじ。

ト邊りへこなしあつて

お恥しう存じまする。

淸八　成る程、あなたは過ぎし頃、與三郎さまが、まだ家を外でござる頃、お出でなされたお屋敷の

ト呆れし思ひ入れ。與五郎、こなしあつて

與五　ア、コレ〳〵淸八、おぬしは……わしがこゝへ來た事を、母さまやおつるにもさう云つて、何か又用もあらう、わしは今、別當所へ行つて、講中の衆にも逢つた上、海老屋まで行く程に、その積りでおぬしは先へ。

淸八　ハイ〳〵畏まりました。

與五　早う行きやれ〳〵。

淸八　それぢやアお先へ、あなた、御ゆるりとお出でなされませ。

ト早足に、上の方へ入る。與五郎、邊りへこなしあつて

與五　モシ……どうした譯でこのお姿で、この地へお越しなされましたな。

ト關路もこなし、合ひ方になり

關路　お尋ねに預つて、かう〳〵いふ仕儀ゆゑに、お尋ね申すも今更に、申し上ぐるも淚の種。

與五　シテ、あなたの舅御、隼人さまはじめ、兄與三郎どのゝ實の母御、小篠さまには、何ぞお變りでもござりましたか。

關路　鎌倉と東とは、近いといふても國も隔たり、御存知ないも御尤、母人小篠さまには、奧さまのお執成しで、閉門のその中も、寶詮議のその爲に、鎌倉へお上りなされ……その折柄は、お前さまにもお心添で、首尾よう手に入る眞鶴の香爐を、一度下總の御館へ持ち歸り、殿の御覽に入れし上、禁庭へ獻上と事極り、本國へ持參の途中にて、母さまには人手にかゝりて、敢へなき御最期とげられました。

與五　して、何者の爲業にか。手掛りでもござりまするか。

關路　サア、これぞといふ證據もなく、取り得し寶は人手へ渡し、重々の失策とあつて、私しが夫左近どのには、云ひ譯なさの御切腹、知行はその儘召し上げられ、お年よられし舅御さま、わらはもそのまゝ永の御暇、無念に

送るこの年月、御推量なされて下さりませ。
與五　今日が日まで、夢いさゝか存じもよらぬその大變…
…尤も、小笹さまには、鎌倉でお目にかゝり、かの香爐の質請けのその折柄、お取り替へ申せし五十兩のこの金は、わたしが和泉屋へ逗留のその中に、御持參なされて、どうあつても返金すれば、受け取りくれよと、金を差し置きお歸りある……わたしの心では、義理ある兄の血筋の家へ、聊かなりとも貢ぐ心と思へど、そこは武家の一轍、それゆゑに打ち過ぎしに、只今あなたに承はれば、兄與三郎どのが、血を分けし、あなたの夫の左近さまは、御切腹なされし上、穗積の家は滅却とは、云はうやうなき世の浮沈…思へば／＼殘念至極、して、未だお目にはかゝらねど、舅御の隼人さまは。
關路　御同道申す途中にて、迷ひし道にはぐれしかど、志すその先は、この吾妻路に二ケ所の知方、それを尋ねて足を留め、お出であらんとそれをば便りに。
與五　ハア、、賴母しきお志、あなたは他家より緣組なされし御身でありながら、
關路　一度緣を組むからは、夫の家へ立つるが貞節、女子の常でござりますわいなア。

トこの内に、懷中の胴卷より、五十兩包み二つ出し、手早く一つを關路へさし出し、邊りへ思ひ入れして
與五　モシ、この金を、御用に立てゝ下さりませ。
關路　ア、、イヤ／＼…聊か路用の貯もござります。どうしてマア、滅相な、多くの金をこなたさまから、コリヤマア、そちらへ。
ト戻す。
與五　ハテ、この金は、先達つて、小笹さまに御用に立つるその時に、達つて受け取るまいと申したを、どうあつてもと御返金下されて、お預り申した金子の高…丁度太々講の預り金、わたしが今こゝに持つて居れば、これを幸ひ、半を分けお渡し申すのも、今の御身分、お前さまのお心を感心いたして、御用に立てば、どうぞ御辭退なされずと…お使ひなされて下さりませ。
ト邊りへ思ひ入れあつて云ふ。
關路　それ程に云ふて下さるを、無下にお斷り申すのも、
ト取り上げ
とは云ひながら、大枚の。
與五　ハテ、人の目褄にかゝらぬ内に、早う納めて下さりませ。

関路　チエ、、忝なう存じまする。

ト思ひ入れあつて懐中する事。この時、上の方にてバタ／＼の音するゆゑ

與五　物騒がしいあの人聲……コレ。

ト囁き

早く爰をば。

関路　ハイ／＼。

トこなしあつて、笈摺を脱ぎて、こなしあつて

左様なれば與五郎さま。

與五　御用がござれば、われらが店まで。

関路　おさらばでござりまする。

トこなしあつて、時の鐘、浪の音になり、橋がゝりへ走り入る。與五郎、こなしあつて

與五　思ひがけない関路どのにお目にかゝり、初めて聞いて驚く事ども、左近どのには御切腹……ア、、これにつけても、兄者人、與三郎さまは、未だに伊豆の島守の、憂目に遭ふてござる事か……もう、はやこの世を去られしか。それと云ひ、これと云ひ、いかなる宿世の因縁ぢやなア。

ト思ひ入れ。バタ／＼になり、上手より伊豆屋の下女、雪蹈がけにて、以前の手代清八、尻端折にて、いつきせき走り出て

下女　若旦那與五郎さま。

與五　エ、、けたゝましい、何事ぢや。

清八　何事どころか、大騒ぎ／＼。

下女　大事でござりますわいなア。

與五　そりや、どうした事ぢやぞいなう。

下女　サア、お聞きなされませ。今御老母さまや、おつるさんと御一緒に、地内の飾り物を御見物なされてお出で遊ばす所

清八　俄かに騒ぐ大勢が、喧嘩々々といふゆゑに、御老母さまへ怪我をさせ申しては済まぬゆゑ、附き添ふ者が手を引き申し、山續きに一手は逃げぬけ

下女　おつるさまは、猶以つて危いと思ひまして、清八どのゝ計ひで、おつるさんをば駕籠へのせ、子僧どのや男衆が附き添ふて、漸く裏手へ逃げる所

清八　大勢の悪者めが一度に來て、駕籠に附き添ふ者を逐ひ討ちに、駕籠舁もくると見え……どこをどうか雲霞。

清下　かついだまゝに逃げ去りました。

與五　マ、、……おつるは兎も角も、母者人にお怪我があ

つては猶々すまぬ。

兩人　少しも早うござりませ。

與五　オヽ、合點ぢや。

ト バタ／＼になり、この時、上の方にて喧嘩々々と人聲よろしく、與五郎、上の方へ走り入る。川水の音、時の鐘にて、前の道具、引いて取り、淺黄幕を切つて落す。

本舞臺、三間の間、五尺許りの高さに土堤前面の張物、尤、凹凸の赤土へ叢の書割、物凄き誂らへあつて、眞中より上へ、畫心に丸太、埋込みの段々、この上に古びし辻堂、土堤の上へ一面に二重の棚、向う竹藪、上下、植込みの見切り、日覆より松の釣り枝、古びし石の榜示杭へ「板橋辨天道」と記してあり、道具納まる。

ト 禪のツトメになり、四つ手駕籠へ垂れの上より繩を卷き、若い衆の駕籠舁二人、これを擔げ、以前の藤六、百藏附き添ひ駈け出る。後より下女、清八走りつき出て來り

清八　惡者めら、見つけたぞ。

下女　その駕籠待つた。

兩人　やる事はならぬ。

ト 引きとめる。爰は若い衆の下男の拵らへ、供男の拵らへなど、兩人出て

皆々　駕籠はやらぬぞ／＼。

藤百　やかましいワ、邪魔ひろぐな。

下清　イヤ、やる事はならぬ。

ト 立ち廻り引き戻す事、ごつたの立ち廻り、下女、清八、駕籠をとめる。若い衆の供兩人も、とめる。仕組よろしく、これに藤六、百藏さゝへる事、こゝへ赤間の子分助八、走り出て、清八、下女に拔身にて追ひ拂ふ。これにたまらず、供の一卷、逃げ出す。早めし鳴り物よろしく

惡皆　ソリヤ、駕籠をやれ。

駕舁　合點だ。

ト 舁き出でる、所へ以前の與五郎、鐵平と爭ひ出て、皆々をかき退け、駕籠をとめ、

與五　その駕籠やらぬ。マア待つた。

助八　ヤ、先刻の二才め

皆々　又うせたな。

與五　平馬に組せし惡者ぢやな。
鐵平　オヽ、知れた事ぢや。邪魔ひろがば命がないぞ。
與五　何を小癪な。
鐵平　ソレ、ぶッ締めろ。
ト縋りつく。與五郎を、藤六、百藏引きとめる内に、丈助は駕籠につき、橋がゝりへ入る。與五郎を突き退け、兩人も駕籠へつき、橋がゝりへ入る。鐵平、與五郎へ縋ぐるみにて打つてかゝる。潜りぬけ立ち廻る中に、懐中より以前の打がへを落す。
ヤ、慥かに金を。
トこれを聞き、與五郎、拾つて懐中して逸散に橋がゝりへ入る。これにて知らせにつき、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、中足の高さ、棕櫚植の土堤。正面より少し上へよせて、菰張りの蒲鉾小屋、この脇へ竹柱、面桶、一升徳利をこはしたる喰物入りの器、梅干樽など置き並べ、この前に振りよき松の臺實木、これへ燻りし自在をかけ、この下へ焚火鉢、この小屋の左右へ、松の並木二三本づゝ、この後藪だゝみ、上下同じく高數、日覆より一面に松の吊り枝、舞臺前によき所へ崖山の張物、この後、切穴、こゝへ冬木の梢、この間より茅萱の茂り、好みの通りにして、物凄く飾りつけ、こゝに非人頭門十、襤褸を身に纏ひ、ぼろ〳〵とした鬘、破れし手拭を頰被り、ぼろぼろと破れし三尺帶して、上へ菰を引つかけ、非人一、同じく襤褸を引つかけ、汚れたる手拭頰被り、兩人、焚火をして、自在へ鍋をかけ、この下を焚きつけてゐる。非人頭は、靑竹を割りし鞘へ、仕込み匕首の身にて、俎板をすゑ、干葉を刻みゐる。この俎板の上へ、鮭の頭のせてある事。時の鐘、木魚入りの合ひ方にて、道具納まる。

非一　オイ〳〵頭、いゝ鹽梅に火が燃えたせいか、雜炊がよく出來やしたぜ。
門十　待て〳〵、どうして〳〵、まだ思ふさま、焚かないけりやアいかねえワ。兎角宿なしの拵らへる雜炊は、米も麥も方々から集めたものだから、よく煮えたやうでも、だまがあるワ。
非一　成る程、そんなものであらう。こつちはお剩りばかりで、自分で炊いて喰つて見ねえから、解らねえ。

門十　もう少し煮えたら、ちつと脇へおろして、むらして置くがいゝ。今おれが、味え物を拵らへるワ。
非一　コレ、何の料理が出來るのだな。
門十　ハテ、茶漬けの香々の、漬き過ぎたのを、いかい事貰つた中へ、鮭の頭を刻み込んで、王子で貰つて來たお剰りも一緒にして、ごつた煮を拵らへるのだ。
非一　そいつは味からうわえ……それはさうと、昨夜この小屋へ、仲間入りがあつたではねえか。
門十　馬鹿を云へ、仲間入りぢやねえワ……年も若し、いい若い者だ、身内から面をかけて、疵だらけよ。
非一　そいつは、只者ぢやアあるめえな。
門十　されば、相應に貫目のある人足だらうが、まだ宿なしにおち切つたといふ譯ぢやねえ。路金につきて夜通しに歩いて疲れ果てたから、小屋の隅へ寐かしてくれないかと頼むから、可愛さうでもあり、昨日は王子から、素人に喰はせても恥かしくねえお剰りを、しこたま貰つて來たものだから、喰はないからと云つたらば……マア、何にしても寐かしてくれろと云ふから、そのまゝにしておいたら、今日永の日一日寐てゐる樣子だ……よつぽど疲れたと見えるが、何でもあいつは、江戸子のあがりだが、宿無しの小家へ無心を云つて泊るといふは、路用に盡きたのか。しかし、世の中には、物好きなやつもあるものだなア。
非一　いゝワ、目の覺めるまで、氣儘に寐かして置くがいいワ。
ト　この内、一は件の品物を切りきざみ、一つの鍋へ入れること。この内に右の鳴り物になり、このせりふの内に、上の方より、以前の赤間の子分丈助、一本差し、同じく子分段平、汐干の場の拵らへ、一本差し、尻はしおり、脚絆がけ、草鞋にて、好みの提灯と烏帽子籠へ入れし肴を提げ出て來り
丈助　上州、こゝにゐたか。
段平　いつもおぬしは達者ぢやな。
門十　オヽ、加納山の親方の組子の旦那衆かね。
非一　コリヤ、お揃ひで、どこからお戻りでござります。今、摺火打つて拵らへた火だ。宿無しの火でも汚くはござりません。一服のんで行かつしやりませ。
丈助　成る程、一服して行かうか。
段平　思ひの外くたびれた。
ト　石へ腰かけ、煙草のむ事。

丈助　カウ、見りやア乙なもので料理して居るな。

門十　これかえ……こりやかうサ、一昨年この土堤に行倒れがありやした。それをわたしが取り片附けをした時に、贓物にならうといふ匕首を、どめておいて、拵らへは段々に、凡そ二貫ばかりに賣つてしまつたが、身は今以つてこの通り、鞘へ入れて

　ト青竹の鞘を見せ

庖丁の代りに使つてゐるが、隨分よく切れますよ。

段平　とんだ非人敵討だ。

非一　本名があると見えませうな。

丈助　とつさんなどは、上州では相應に人に知られた男だなう。

非一　成る程……館林から熊ケ谷邊で、山あらしの門十と云つては、知らない者はねえ男だと、親分が話で聞いたつけえ。

門十　山あらしでも、もゝんがアでも、氣の利いた化物は、引込みが肝心だ。

非一　お菰となつて仕様がございません。

門十　しかし、お前方の親分の源左衞門さまなぞは、運に叶つて賣り出した人さね。

非一　いつでもこゝを通らつしやる時は、この土堤にゐる者へ、それ相應の心づけ。

門十　この間、川口の方へ逗留に行かつしやると聞きましたが、いつ、戻りになりますえ。

丈助　昨日までに、あつちの用も片付いた。これから鎌倉のお邸へ、少し頼まれた事もあり、夜を日についで急ぎの道中

段平　川口から通し駕籠で、追ッつけこゝを通らつしやるのサ。今度あつちでも、相應な金儲けよ。

門十　成る程、赤間源左衞門さんといふ人は、何につけても

非皆　運の強い男だてなう。

丈助　それといふも、鎌倉の屋敷に、いゝ引張りがあつての事サ。もう五六年も後の事だ。親分が世話をして置いた女をば、ちよろまかした野郎があつて、半殺しの目に遭はせて、その野郎めが體をば、相手方へくれてやり。定めし後でおつくたばつたと思つた所、鎌倉にまごついてうせると聞き、源左衞門どんの口先ひとつで、海老名さまへから〳〵と吹き込んだら、忽ちその野郎は縄にか

かり、憂目をあくまで見せてやるがよからうと、とうとうそいつは流人の境界。

段平　所も伊豆の離れ島へ流されて、さんざ憂目を見た上で、果ては磯邊で寐ぐさる命、とつくに島でその野郎は、おつくたばつてしまつたらう。

丈助　なんといゝ

兩人　氣味ぢやねえかえ　…ハア、、、。

ト兩人、思ひ入れあつて云ふ。

門十　成る程、赤間源左衞門さんの勢は

段平　凄まじいものだなア。

非人　今に川口からの通し駕籠で、この土堤を通らつしやるワ。

丈助　大方、祝儀でもくれるであらう。待ちうけて貰ふがいゝぜ。

門十　そりや、通りさへしなさりやア、小遣ひを貰ふ室旦那よ。

段平　時に遲くなつた。行かうぢやねえか。

丈助　ちげえねえ。

ト煙管をしまひ、件の烏帽子籠を出し

こりや、盜つて來た手あいが振舞で、喰ひきれねえから持つて來た。おぬしに土產だ。

門十　こりや、有り難うござります。

非一　さういふ者が來ては、濁酒をごんつく、奢らずばなるめえ。

門十　買つて來い〳〵……その序に土堤の內を送つて上げろ。病犬がどうもならねえ。

丈助　そいつは恐れるな。

非一　ナニ、わしが行けば、眼球が魔除けになりますワ。

ト段平、提灯を持ち、先へ立ち、非人一、竹杖を持ち、德利をさげる。

丈助　そんなら上州

段平　達者でゐやれ。

門十　氣をつけてござりませ。

ト風の音、木魚入りの合ひ方になり、丈助、子分、非人一、向うへ入る。非人頭、後見送り、捨ぜりふなどよろしくあつて

ヤレ〳〵、奇特な手合ひだ。しかし、おれも只の猫つかむりなら、かうもしてくれめえが、おれも以前は上州者、山あらしの門十と云つては、煙つてえ男のなれの果、それで氣をつけてくれるだらう。

薄暗き思ひ入れ、兩人よろしく
久次　何でも二人は物貰ひだが、二人の野郎は何者だか…
オイ姐さん、どうした譯だえ。
ト關路は、件の財布を尋ねて、こなしありながら思ひ入れあつて
關路　ハイ、何やら譯は知らねど、あの通りに云ひ合せ、わたしを捕へ無體の手籠……あなたのお蔭で助かりました。有り難うございまする。
久次　あいつらは惡いやつらだ……やつぱり荒稼ぎと見えるわえ。
トこなしあつて
サア、危い、行きなせえ〳〵、
關路　ハイ〳〵。
ト尋ね廻るこなし、久次もこれにうつかりと、この體を透し見て、ちよつと足許に躓く財布に手をかける。關路もこれへ手をかける。兩人よろしく、關路、手早く懷中して、かたへに落ちし苞へかくしたる匕首を持ち、立ち上がる、久次、思ひ入れ
わたしは、心も急げば、お先へ參りまする。
ト立ちかける。

久次　カウ姐さん、今のは金だの。
關路　ハイ……イ、エ。
ト怖氣に立ちかけるゆゑ
久次　オイ〳〵待ちねえ……一人ぢやア危ねえぜ、定九郎ぢやねえが、送つてやらうといふ事よ。
關路　イエ〳〵、わたしは、金子など持つては居りませぬ……滅多な事を云ふて下さりますな。
久次　それでも、今の混雜に、取り落したのを、おれが先へ手をつけた、重みは凡そ四五十兩。
關路　エ、。
ト思ひ入れ。
久次　大概、そこらと知れてあるわな。
ト關路つか〳〵と逃げ出すを、引き止め
コレ姐さん、待ちなせえ、今大勢のやつ等に取り卷かれたその時に、あいつらが手に渡らうなら、どこをどうなるか知れない金だ。おれが來たのがもつけの幸ひ……そんなら、おれに隱すには及ぶめえ。
關路　ハイ、成る程、そんなら申しまするが、いかにも、金を所持いたしてはをりますが、これはちと譯あつて、實意あるその人から、情の惠に受けたる金、一旦は預か

れども、容易に遣ひ捨てられねば、それゆゑ〳〵猶々大切に。

久次　どうで金は大事のものサ……カウ、お前に頼みだがわたしも少し譯があつて、金がなければならぬ事があるのだ……お前の方では容易に遣はれねえ金だらうが、こつちでは急になけりやならねえ入用だ、わしが方の用さへ濟めば、お前の方へその金はきつと返す。少しの間、どうぞ貸してくんなせえ。

關路　成る程、そりやお前の方で、どのやうな入用の事があらうも知れぬが、おやといふてこの金は、その惠まれた人へ對し、どうしてマア、むざ〳〵と見ず知らずのこなたさんへ。

久次　その見ず知らずのその人へ、こんな事を云ひ出すのは、薄見ッともねえが、詮方つき、男が手を下げて頼むのだ。

關路　たとへ、いか程頼まうと、そりや、そなたの勝手といふもの。

久次　されば、勝手でもあらうけれど、そこが頼みだ。

關路　エヽ、又してもアタしつこい……重ねて云はゞ。

ト身構へる。

久次　これ程云つて聞かねえけりやア……無理にも借りるよ。

ト關路、つか〳〵と駈け出すを引きとめ、懷中へ手を差し込む。

關路　コリヤ、理不盡な……そこ放しや。

久次　コレ、さう云はずと。

ト爭ふ。關路、隱し持つたる懷劍を拔き、切りつける。久次、身を替はし、この手先を捉へ、兩人見得よく

そんなら、刃物を持つてゐるな。

關路　さういふおのれを。

ト手を振り切り、突つかける。立ち廻つて

久次　エヽ、危ねえワ……マア、刃物をば。

ト捩ぎ取らうとする。

關路　放しや〳〵。

トこの機に兩人揉み合ふて、關路の乳の下を貫く

ハアヽ。

ト苦しむ事。

久次　コレ、聲を立てるな……シッ〳〵。

關路　コリヤ、わたしを殺して、この金を。

ト思ひ入れ。久次、關路を探り見て

ト貰ひし籠を持ち

今源左衞門さんが通らしつたら、金の一分もくれるであらう。食物は充分ある。貰つた肴もこの通り、どうしてどうしてこの樂しみは、大名になつても出來やしねえ。三日すると忘れぬとは、よく云つたものだなア。

ト思ひ入れ。この内に、後の菰垂れ、ばらりと落ちる。內に島戻り向う疵の與三郎、窶れし拵らへにて、始終の樣子聞いてゐたと思ひ入れ。門十見て

ヤ、こなたは、いつの間にか目が覺めたな。

與三　アイサ……たつた今、覺めやした。

門十　さうか、素敵に疲れたと見えるの。

與三　イヤもう、おかげで、ぐつすりとよく寐やしたよ。

トあたりへこなしあつて

モシ、今ちらりと聞きやしたが、源左衞門とやらいふ人の名は……アリヤ、上總の木更津邊に居なすつた、赤間源左衞門さんの事でござりますかえ。

門十　オ、サ、その赤間の親方よ……こなたはよく知つてゐるの。それでは近附きか。

與三　アイ、隨分その以前、お世話になつた事もありましたよ。

門十　そりやア丁度いゝ。知つた顏なら幸ひだ。路銀でも拵らへて貰ふがいゝ、今に爰を通らつしやるワ。

與三　そんなら、いよ〳〵今こゝを。

門十　ヤ。

ト思ひ入れ。

與三　ムウ。

トじつと思ひ入れ。門十、不思議だと思ひ入れ。時の鐘、好みの合ひ方

疲れてうつゝ何事も、白川夜舟で小屋の隅、靑天井の草枕、まだ初物のお菰の味、筵の隙に殘る風に、ふと目を覺むれば二人の野郎、問はず語りも地獄耳……そんなら、おれがこの程の、憂目もやつぱりあいつが業か。

ト門十、これにて、さてはとこなし。立ちかゝるを突き退け、

こいつは料簡ならねえわえ。

ト思ひ入れ

門十　さてこそ、われは

ト組みつくを、ちよつと立ち廻つて、以前、門十が使ひし竹鞘の匕首を見つけて、與三郎、取り上げる。

ヤイ、危ねえ、それを。

ト捩ぎ取りにかゝる。ちよつと奪ひ合ひ、この白刄を見得よく與三郎見て、思ひ入れあつて、又立ち廻り、はづみに門十をポンとあてる。門十、たぢ〳〵として、後の藪蔭へころげ込む。與三郎、土堤づらの石にて右の白刄を寝刄あはせるこなし。時の鐘、小凄き合ひ方にて、この仕組よろしく、道具まはる。

本舞臺、以前の崖づくり、辻堂の道具に戻る。

ト中程より禪のツトメ、こゝに以前の關路、袴に纏ひし脇差しを抱へて、これを以前の順禮實六部兩人、段平、子分市助、幕明の惡者立ちかゝり、引とめてゐる見得にて、道具納まる。

關路　見れば、先刻の修業者どの、最前、情ある人より惠を受けてありながら、又もわたしをば後追ひかけ、コリヤ、何とする。どうするのぢや。

八　さつきは、いつもの旦那から、扱ひの錢が出たゆゑに、

とら　一旦あすこは見遁したが。又改めて蒔き直し、それといふも

兩人　頼みがあつて。

關路　スリヤ、何者の頼みがあつて、

段平　オヽ、その頼み手は平馬さま、それゆゑ一味の鐵平へ。

市助　心が一致のこちとらが、われの跡から

兩人　つけて來たのだ。

關路　さては、惡人山鹿毛へ、荷擔なしたる惡者よな。

とら　ソレ、面倒な。

段平　たゝきしめろ。

ト子分兩人は、縫ぐるみ、お虎、六部八兩人は、關路の懐を窺ふ心、關路、手を觸れさせじと、いろいろ潜り抜ける。心意氣の立ち廻りよろしく、この内、向うより觀音久次、好みの拵らへ、麻裏草履、頬被りにて、出て來り、下手に窺ひゐて、皆々關路へ立ちかかる體を見て、この中へ分けて入り、一人が打つてかかる縫ぐるみを引つたくり、皆々を撲つ事、順禮、潜りぬけながら、關路を引立て行かんとする。この立ち廻りよろしく、關路、件の財布を取り落す事、關路、ハツとこれにて順禮の手を振りもぎり、取り上げんとする思ひ入れ。こゝを久次、皆々をうち拂ふるゆゑ、皆々敵はず、バラ〳〵と上下へ逃げて入る。時の鐘、

久次　や、今の機に……手が外れたか。

ト　じつと思ひ入れ。

關路　アレ……人殺し。

久次　コリヤもう、いつそ。

ト立ち廻りよろしく、關路の白刃を引つたくろ。關路、手疵を押へ逃げ出す。久次、引き止め、財布引き出す、關路、財布の紐をとらへ、久次、懐劍振り上げ、土堤へ上りかけ、兩人見得よく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、以前の非人小屋のある土堤のかゝり、小屋へは垂れをおろし、この前の自在へ、矢張り鍋かゝりゐる事、この下すこしづゝ燻りてゐる體、誂らへの通り、以前の道具附の如く飾りつけあり、土手の上、平舞臺に、兩人の駕籠舁、中に客を乘せし體、棒端へ川口宿と記したる提灯をさげ、この棒端の方へまはり、以前の與三郎、莚を引かけ、頬被りして、下より支へてゐる見得。靜かなる禪のツトメにて、道具納まる。

駕舁　コレ〳〵、道の邪魔だワ。

駕兩　夜夜中、つくな〳〵。

與三　御報捨をお願ひ申します〳〵。

トさし俯き思ひ入れ。兩人、息杖を入れて

駕一　圖々しい乞食ぢやねえか。

駕二　中の客人を誰れだと思ふのだ。どこのはし〴〵へ行からが、誰れ知らぬ者もねえ。

駕一　赤間源左衛門さまが、鎌倉急ぎの通し駕籠。

駕兩　邪魔になるワ、退きやアがれ〳〵。

與三　さう見かけまして、お願ひでござりまする。

トこれにて、駕籠の垂れを上げると、中に赤間源左衛門、これを見やり

源左　この土堤にゐる、いつもの山あらしかと思つたら、ハ、ア、わりやア新米で、まだおれを知らねえな……コレ、上州はどうした……熊谷を伴れて來い。どうで通る時はやる錢だワ。

ト云つても、圖々しく屈んでゐる。

駕一　コレ〳〵、親方を知らねえか。

駕二　あなたは、赤間

兩人　源左衛門さまだワ。

與三　その源左衛門どんと知つたゆゑ、駕籠を止めた新米へ……御報捨やつて下さりませ。

ト思ひ入れあつて、手拭を取る事。駕籠舁、この中に駕籠をおろし、與三郎を見て驚く。源左衛門、よくよく見て

源左　しやツ面の疵、身體をかけ……殊に身形も野臥りとも、見えねえわれが面魂。さうしてうぬは、どこの誰れだ。

與三　見覺えの惡い男だ……おれだよ。

源左　ヤ。

與三　與三郎だ。

源左　そんなら、わりやア、伊豆の島をば脱けて、あの爰へ。

與三　オヽ、サ、いつがいつまで伊豆海の、それで命を果さうよりと、配所を抜け出てやう〳〵爰へ。

源左　さて〳〵、しぶとい毛二才め、いつかもあれ程憂目を見て、それにも懲りず島を脱け、まだびく〳〵とその態は、左程命が惜しいのか……とは云ひながら、二度三度、命冥加な……野郎だなア。

與三　その命をば延はつて、江戸へ歸るも道を變へ、疲勞を休めた非人小家で、われが子分の問はず語り、尾に尾をつけて罪を増し、とう〳〵こつちは流人の身と、したのも、われが差略だと、殘らず聞きとる返報に、とうから來るのを待つてゐたのだ。

源左　エヽ、しやらつくせえその言葉、島を遁れて來るからは、どうで遁れぬ天の網、手を下ろすのも面倒だ。こいつが腕をたゝき折れ、エヽ。

兩人　合點だ。

ト打つてかゝるゆゑ、かい潜りて件の竹の仕込みを拔く。これに驚ろき、駕籠の兩人、ハアツと云ふて逃げて入る。直ぐに源左衛門へ突いてかゝる。與三郎を突き退け、支へながら

源左　うぬ、この上は。

ト拔いて切つてかゝる。立ち廻り、兩人よろしく、ちよつと立ち廻つて、このはづみに、源左衛門の切り拂ふ刀にて、枝にかけし自在を切る事、鍋ばつたり落ちて、ぱつと煙の煙硝火立つ。これにて、月雲がくれする。暗がりの模様よろしく、忍び三重、兩人立ち廻り、闇仕合、こゝへ上の方、バタ〳〵にて、以前の關路、手を負ひし體にて、財布を抱へ、つか〳〵と逃げて出て來る。爰へ觀音久次、追ひかけ出て來る。これへ源左衛門は、與三郎と心得、切りつける。久次、驚き、

身を替し受け止める事、この内に與三郎へ、關路突き當る。與三郎、驚ろき探り見て、女ゆゑ、掻き退ける。爰へ源左衞門、切り込む。この白刃、關路を切る。アツと苦しみ倒れる。この內に、下手より、以前の與五郎も、財布を懷中にして、髮を亂し、つか〳〵と逃げて出て來る。これを鐵平追ひかけ、刀拔き持ち、追ひ出る事、この仕組の立ち廻り、二重の上の平舞臺と兩方へ工風あつて分れる事、久次は源左衞門が切りつけるを潜りぬけ、關路の金へ心ある仕組の立ち廻り、鐵平は氣を苛ち、滅多切りに切りつける。これを與三郎は、源左衞門と思ひし仕組の立ち廻り、鐵平こなし、以前、源左衞門は密書を落す。これを與五郎、思はずも取り上ぐる事あつて、與三郎、鐵平の方へ行く。與三郎、闇がりに源左衞門と思ひ、鐵平へ突きかゝる白刃、鐵平、身をかはせる事、こゝへ與五郎入つて、過つて與三郎、與五郎を一突つく。與五郎はアツと苦しみ、聲立つるはずみに、金財布を落し、件の密書を口にくはへ、苦痛を耐へる仕組に、財布を尋れながら、舞臺の谷間へまろび込む事、與三郎、この內人間違ひの心意氣よろしくある事。鐵平、こゝにて與三郎へ切りつける。兩人立ち廻りすべて暗がりなり。平舞臺にては、關路は、この內財布を放さず、苦しみながら二重へ匐ひ上がる事、久次、暗がりに又一かせ切る。關路、アツと苦しみ財布を落す。關路、藪疊の蔭へ轉び込み、久次、財布を探す事、源左衞門は、二重より下りて下の方へ、この時與五郎か落せし財布が足に引かかり、取り上げ、につこり思ひ入れ。久次、源左衞門思ひ〳〵のこなしにて、源左衞門は西へ、久次は東の歩道へかゝる事、與三郎は、鐵平を二重へ追ひ上げ、源左衞門、暗がりに間違へし仕組、與三郎、脇差しにて、鐵平を一突つく。鐵平、アツと苦しむ所を押し伏せ、與三郎、裏向きに鐵平を刺し通す。源左衞門、久次、兩方の花道に、心々の思ひ入れ、財布を持つて、源左衞門、につたり、久次、財布を持ちよろしくこなし。件の匕首を持ちしまゝ、兩人、東西の揚げ幕へ逸散に入る。與三郎は鐵平を抉ぐる事。源左衞門、暗がりにて、間違ひの仕組よろしく、知らせに付きこの道具、一面にセリ上がる。

本舞臺、正面、奧向きに凸凹の芝山、骨組の靈心丸

ものにて、これへ棕櫚植ゑ、この山の上へ二段の柵、これへ所々に躑躅の花をこしらへ、樫松の立樹、赤松など丸物の高木所々に根ばり、これへ熊笹、以前の道具より付いて上りし土堤づら、あふり返し、闇ぼかしの傍へ、樫の枝を取りつけ、この前へ、日覆より一面の松の吊り枝、上下へ高き藪疊、よき所へ木燈籠の古びしへ、王子權現神燈と記し、燈明を點じ、上下植込の見切り、下の方へ芝山の土堤へしらみ打ち、これへ流れの濱板、爰に王子權現領石神井川と左右に記し、正面の椋木の木の根へ、以前の與五郎が上着の袖好みの紋つきしが、血潮に染みて引かゝりゐる事、おろし本舞臺、眞中より、本田の次郎親常、好みの鎧割羽織、大小、巡檢忍びの拵らへ、切草鞋、以前與五郎が銜へ落ちし密書を取り上げ、見てゐる立身。相澤六郎、緋襷股引、割羽織、大小にて拵へ、以前の手負ひし與五郎、髪を亂し、山の上より轉び落ち、氣絶の體、この上着の片袖ちぎれてゐる拵らへ、これを六郎、引きせし見得、この側に丸に本の字を篆書に記したる提灯を据ゑ、大小入れて、好みの鳴り物をかぶせ、見得よくセリ上げ、前の土堤づらへ、山幕を取り付けセリ上げ、道具の納りにこれを切つて落す。

ト こゝに近習八人、揃ひの緋襷、股引、大小にて立ち並び、この前へ忍びの箱提灯、これへ篆書にて、丸に本の字を記せしを、四つ程おき並べ、この右方より紺看板の仲間、若い衆四人出て、上下に控へることよろしく、かすめし夜神樂へ、こだまのあしらひ、誂らへの合ひ方にて納まる。

親常　時も餘月に三更の、分野も納り閃めく星影……この星月夜、鎌倉の、嚴命うけてかくいふ親常、世の政道の邪正を糺し、民間市中の愁訴をば、なからしめんと忍びの巡檢、あれなる熊野三社の宮へ、武運祈りに旅館より、その通行にこの場の警。

ト六郎、その外皆々へこなしあつて

その方ども、何と心得るぞ。

六郎　ハ、ハツ……全くこれなる山上にて、盗賊などに出逢ひし者が、手疵を受けしその機み、この谷間へ轉び落ち、氣絶いたせしものならんと

皆々　われ〳〵推量仕りまする。

トこの内、親常、右の書翰を袂へ納め

親常　ムウ……さもあらん……シテ、手疵はどうぢや。
　ト　この中六郎、改めし體にて
六郎　ハツ、深傷なれども急所をよけ、心下身内の暖り……
……氣脈はたしかに相見えまする。
親常　さすれば、程經し事とも見えぬな。
　ト　こなし、近習の内より見て
近一　見受けますれば血氣の若者
近二　よく〳〵介抱加へし上にて
近三　實否を糺明
八人　仕るでござりませう。
親常　イヤ、手疵の上に、高みより落ちたる者、苦痛を忍び耐ふる儀も、心に任すまい、何はしかれ。
　ト　印籠を出し
携へしこの良薬。
　ト　六郎へこなしあつて
ソレ、相澤六郎、かれに與へて呼び生けい。
六郎　ハツ。
　ト　印籠を受け取ること、この内、近習の中、上下より兩人立つて、一人は上帶を解き、一人は印籠を持ち、流れの水を掬ふ事、六郎、笄を出し、これへ印籠の薬を引かけ、與五郎の口へ含ませ、一人は上帶にて腹を卷く事、一人は水を與へるこなしあつて、トゞ、六郎立つて、ヤツと活を入れる思ひ入れ。與五郎これにてムウと息吹き返すこなし。皆々これを見て思ひ入れ。
與五　ムウ……ハア、。
六郎　コリヤ町人、氣がつきしか。
皆々　心を慥かに持ちませい。
六郎　親常公の
皆々　御前なるぞ。
　ト　きつと云ふ。これにて與五郎、じつと思ひ入れ。本釣り鐘、親常じつと見やる。好みの合ひ方、こだまのあしらひ
與五　途中の危難に逃げのびる、その暗がりに深手の苦痛、氣絶いたした私しを、御介抱下されまするこの場の體。
　ト　邊りをよく〳〵見やり、親常へ思ひ入れあつて
シテ、君は、いかなる御方さま。
　ト　思ひ入れ。
六郎　在鎌倉の列侯にて、民間市中の政治を預かる、本田

の二郎親常公。

與五　ハア、。

ト平伏せんとして、苦痛の思ひ入れ。

親常　ア、コレ〳〵……手疵の身分、差しおくぞ。

ト云ひながら、與五郎が體を見て

急所を避けしその手疵、案じる事はないぞ。心を靜めよ……コリヤ、その方はいづくの者、姓名は何と申すぞ。その答へ相ならば、有體に申せ、サ、、どうぢや。

ト勞はり尋ねる思ひ入れ。與五郎、手疵を抑へ、こなしあつて、

與五　當國武藏豐島の郷……元山町に住ひまする、伊豆屋喜兵衛の悴にて、與五郎と申しまする。

トこれを聞き、六郎、皆々と顔見合せ思ひ入れ。親常考へて

親常　ムウ、元山町にて伊豆屋の悴……ハテ、何らの事でか認め置いた事があつたわえ……ムウ、オヽ、それよ……そちが兄に、與三郎と申す者がある筈ぢやが、親喜兵衛が勘當いたし置いたであらう、さうか。

與五　ハツ、御意の通りでござりまする。

六郎　その與三郎と申す者は、先年鎌倉に於て海老名どのの手に搦め捕られ、伊豆の小島へ流人の身の上。

ト思ひ入れ。

親常　コリヤ、面をあげい。

ト與五郎、顔を上げろ。親常つく〴〵見やり、思ひ入れ。これにて與五郎、しほ〳〵とさしうつむく。

ハテ、曇りなきなんじが相貌……諺にも家を爭ふ子なければ、終にその家滅ぶるためし、なべて人の上を經書にも、孟子は性は善なりといひ……荀子は末世に性は惡なりと云ひ破る。これを、いづれを取り、いづれを捨つるか……既に與三郎が所業といひ、又この者の心根も、皆それ〴〵に、親なる者の敎へに隔てはあるまじきに、善と惡との身の行ひ、ハテ、解け難き世の人心ぢやなア。

ト時の鐘、こなしあつて

コリヤ、その方は、手疵をとくと手當いたした上、親許へこなたより、送り屆け遣はすぞ、この儀安心いたし居れ……さりながら、チトその方に尋ね問ふべき仔細があれば、今宵は豐島の旅館へ連れ參るぞ。

與五　ハツ……お情厚き君の御意、いかにも御供仕りま

する。
六郎　さは云ひながら、手負ひしこの者。
　ト思ひ入れ。
親常　コリヤ者共、近きに於て用意調へ、召し連れ行くべき手當いたせ。
皆々　畏まつてござりまする。
　ト親常、こなしあつて
親常　その方共の內、後に殘り、心靜かに手當して、直さま豐島の屋敷まで
八人　ハア、。
六郎　さは云ひながら、今宵のあらまし、一先づ當所の代官方へ、申し達せしその上にて、召し連れられ、然るべう存じまする。
親常　イヤ、ちと思ふ仔細もあれば、屆けに及ばぬ。その儘にいたし置け。
六郎　ハツ。
　トこの時、親常、袂より件の手に書りし密書を出す事
　六郎見て
　シテ、お手に觸れしその書翰は。
親常　ムウ、これか。

　ト思ひ入れ、與五郎もこれに心づく事よろしく、親常、
　書翰を見て
未だ封目切らざる書翰……コレ。
　ト居並ぶ中より提灯を出す。
送りし宛名は……紅を奪ふ筆の汀へ……ムウ。
　ト考へ
あけを奪ふは紫の……筆の汀は正しく硯。
六郎　紫　石は
六親　正しく赤間の
親常　ムウ……さては噂の
　ト皆々こなし
送りしその名は
　ト又狀を見て
ヤ……海老名彈正。
　ト思ひ入れ。
六郎　スリヤ、海老名公より
六皆　かの者へ。
親常　アヽコリヤ
　ト制して
この儀取り沙汰

ト思ひ入れ、チョンと木の頭

無用ぢやぞ。

ト皆々、ハツと思ひ入れ、與五郎、苦痛の體、六郎、いたはるこなし。和常、書翰を見て考へる事。一度の仕組、きざみにつき、早めし行列三重にて、よろしく

ひやうし幕

八　幕　目

元山町伊豆屋の場

役名——伊豆屋喜兵衞。宿役人、六兵衞。同、伊之助。同、七助。番人、半助。下男、忠助。切られ與三郎。

本舞臺、三間半、瓦葺の庇付、上の方、細格子、これへ續き三間、二所へ貫木揚げ戸おろせし商人店、夜の體、眞中の揚げ戸一枚あけ、この所格子になり、これへはまはり彩色に鼈甲櫛の形を描き「御誂鼈甲品々」と印し、この下、くゞり障子にて、これへ引手など誂らへの通り、伊豆屋と記し、二階の上下、白木のさゝら羽目、中一面格子窓を、上へ半分程に外へ見せ、下手にあげ縁、上下あがり框など、すべて好みの如く、綺麗に、上の方に土藏の前面、下手に四尺程の店の脇より勝手へ通る潜り戸、開閉の誂らへ、よき所へ用水桶、これへ元山町としるしある事、すべて與三郎宅、裏がゝりの體。幕の內より百萬遍鐘の音、テンツ、にて風の音をあしらひ、幕明く。

トこゝに六兵衞、踏込を穿き、宿役人の服裝、伊之助、同じき拵らへ、七助、同じく宿役人の拵らへ、下役兩人、年かさなる者、組合にて、役所より戻りし體、これを伊之助が弓張提灯を持ち、送り出す體。七助は鐵細雪洞を提げ、皆々立ちかゝりゐる。喜兵衞、伊豆屋主人にて、老けたる拵らへ、羽織着流しにて、幕の外にて

皆々　南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵、願以此功德平等施一切頓發菩提心往生安樂國。

喜兵　これは〳〵、皆の衆、御苦勞でござりました。

三人　イヤモウ、あなたもさぞお草臥れでござりませう。

六兵　時に、今日はお內にて、御法事でもござりまするか、百萬遍がござりますな。

喜兵　されば、聞いて下され。この百萬遍も、あの野良どのが、島へやられる船出の日、生死の程も解らねば、毎月毎月、今日を命日と思ふての百萬遍、親は未來の事までも思ふてゐるが、あいつめは樣々の惡業働き、今日も俄かのお呼び出しは、やつぱりあいつが事につき、こなさん方にも、大きな御苦勞をかけました。

伊之　なんのあなた、その御心配には及びませぬ。

六兵　年が年中、お店に御厄介になります私し共。

七助　この上とも、何なりとも御遠慮なく、御用の筋は仰しやつて下さりませ。

伊之　さりながら、御子息の與三郎さま、何ともかとも。

皆々　申しやうもござりませぬ。

喜兵　イヤ、もう／＼かうなつたら、わしもすつぱり斷念つてしまひました。又こなさん達も、今日お役所で云ひ渡された通り、見かけ次第捕めて出せと、後の後までかうした難儀をかけるといふは、詞にも絕えぬ不所存者、コレ皆の衆、あの野良めが、この居廻りにうろ／＼して目にかゝらうとも、必らずともに囘護ふてやつて下さるな。もしもの事のある時は、お前方を恨みまするぞ。

伊之　そりや、お氣遣ひなされまするな。その事は。

皆々　よう心得て居りまする。

喜兵　アイ／＼、何はともあれ、草臥れ休め、茶でもあがつて歸らつしやれ。

六兵　イエ／＼、さういたしては居りますまい。

皆々　お內もどうやらお取り込みの樣子。

七助　失禮ながらこれにて

皆々　お暇いたしませう。

喜兵　そんなら明日逢ひませう。皆の衆、御苦勞でござりました。

ト喜兵衛、店のくゞりへ入る。後皆々こなしあつて

伊之　サア／＼、これから銘々引取つて、內でゆつくりお休みなされませ。その內にも、わしは昨日からの事につき、イヤもう、內中粉になりました。

六兵　その御心配は御尤も。わたしなどは、箕田の地面を、親の代から宿役をして居りますが、地主の事なり、聞き捨てにもならず、それでお前さま方と立ち合つて、海老名さまのお屋敷へ出ましたが、とかくあそこは、やかましいお屋敷だてな。

七助　イヤ、もう、ちつと物の云ひやうが惡いと、すぐにとつこに取つて、眼の玉の出る程、叱られる。わたしな

どは、實に宿役は新參の事ゆゑ、びつしより汗をかきました、殊にわたしは、きのふの與五郎さまや、お母さんの一件を、その序につちから、旦那が發言さしやつた所が、最初にこれは筋が違ふと云つて叱られました。その後がわたしへ色々とのお尋ねに、何だかびく／＼して、今に胸がドキ／＼サ。

若者　とかくお代官所の事ばかりは、馴れぬでは。

兩人　いけぬものでござるてな。

　トこの內、橋がゝりの方より、やつし股引の番人半助、割竹、店行事といふ提灯を持ち出でて

半助　火の用心／＼。

　ト云ひながら出て、皆々を見て

オイ／＼、庄屋さま方は、これにお出でなされるかな。

伊之　オヽ、おぬしは會津屋の半助どの。

皆々　御苦勞でござるの……御大儀々々々。

半助　オイ／＼、あの、この內の忠助爺さんは、居ねえかね。

伊之　今勝手元に居たつけえが、今日はちつと內も色々混雜だ。

半助　混雜でも、今日は夜番が廻つてゐるわな。

伊之　その夜番の事は承知サ。

皆々　大方、今に出るであらうサ。

七助　こなたは組合だが不性だ。穴を埋めてやるがいゝ。

半助　お前方がさう仰しやれば、どうでもようござりますが……爰の伊豆屋は混雜な筈だ。今會所でその一件を聞きやした。內の養子の與五郎さんと、嫁御のおつるさんが居なくなる。そこへもつて來て……いつか島へ流られた與三郎さんが。

　ト云ひかけるを

伊六　マヽ、コレ／＼、大きな聲で……靜かにさつせえ。

皆々　靜かに／＼。

　ト制する事。半助、こなしあつて扣へる。

七助　時に、お二人の一件は、明日仁田さまへ、別に訴へる積りといたしませうな。

半助　さうサ／＼、仁田さまならよからう。

伊之　コレサ、マァ默つて居さつせえ。

六兵　わしは、所は箕田に居れど、あすこにも、この家の地面があれば、この事は……やつぱりあつちでも代官所へ屆けておかにやならねえ……いづれ明日、又こつちへ出張りませう。

七若　それは、御苦勞でござりますな。
皆々　そんなら明日。
半伊　これは御苦勞さまでござります。
　トテンツヽになり、六兵衞、七助、後の兩人つき添ひて、橋がゝりへ、伊之助、七助と提灯と鐵雪洞と取りかへる事、この内にあるべし。伊之助、すぐに内へ入りにかゝるを
半助　コレ／＼、マア待ちなされいなア。
伊之　それでも、おらア忙しいワ。
　ト云ふを捉へて
半助　あの忠助どのはどうしたのだ。早く寄越してくんなせえなア。
伊之　エヽ、コレ、おぬしも皮肉なものだ。今六兵衞さんに、あの位云はれたのではないか。
半助　云はれた事は云はれたが、いつもおれが少し遲く出ると、きつとあの親仁が、早く番小屋へ出しやばつて、今の若いやつはしッ腰がねえ、寒からうが暑からうが、年がよつても勤める所は、きつと勤めるなんのと、三段目の師直を見たやうな事を云つて、若い者をせこめてならねえ。

伊之　そりやア誰れがよ。
半助　おめえの内の師直爺が。
伊之　そりや、誰れの事だよ。
半助　忠助爺の事だわな。
　トこの内、よき時分より、下男忠助、好みの拵らへ、老けたる拵らへにて、割竹を持ち、伊豆喜と記したるすわうで子持筋引、夜番と記したる弓張提灯を持ち出て、二人が疊を後で聞きゐて
忠助　何がどうしたと。
　ト割竹で下をたゝく。
半伊　ア、こなたはそこに居たか。
　ト兩人こなし。忠助、半助へこなしあつて
忠助　コレ、忠助なら忠助でいゝわえ……忠助爺とは何の事だ……サア、もう一遍いつて見せう。
伊助　コレサ／＼……マアいゝわな。お前が居ねえと思つて云つたのだ……爺だから爺だと云つたらうではねえか。
半助　蔭で云ふ事は……當時鎌倉の天下さま、頼朝さまの事さへも、大天窓なんぞとやらかすではねえか。料簡しなせえ／＼。

忠助　マア／＼、さう云へば堪忍してやるがな……いつでもおれにばかり番をさせて置くではねえか。今夜は内がちつと、色々取り込んでゐる事があればこそ、遲くなつたのだ……いつもおれよりは半時づゝも遲く出張つて、九ツを聞くとこくら／＼坐睡はじめ、八ツを聞くと白川夜船……明方には他愛なし、丁度おれと組合ふのが仕合せ。いつでもおれが一人で勤めてやるのだ。

半助　さう云はれりやアおれが惡いが、いつも早いこなたが遲いから、つい、さう云つたのだ。

伊之　マア／＼、理屈を云はずと、いゝでねえか。

忠助　それでも、こんな年の下の者に、馬鹿にされるも。

　ト内の方へこなしあつて

矢張り旦那さまが惡いからだ。

　トこなし。兩人は解らぬ思ひ入れして

半伊　コレ／＼、そりや何を云ふのだ。

伊之　旦那が惡いなんぞと、滅多な事を云はつしやるな。

　トこなし。

忠助　イヤサ、コリヤ……こなた衆も知つての通り、與三郎さんや、弟御の事で、内中が亂飛亂國、とう／＼こんな騷動になつたのも……おれが云はねえ事かえ。

　ト内の方へ思ひ入れ。

伊之　コレサ、そんな事は、お前が云つても追付かねえわな。

忠助　それでも、もう六七年前の事だ。おれが何かの譯は知つてゐるから、大旦那にかう／＼なされる方がいゝと云つたけれど、その通りしねえもんだから、今度の一件だ。

伊助　サア、その與五郎さまが内にござらぬ、取り込みを知りながら……こなたの番に出やうが遲いと云つたのは惡かつたよ。

忠助　なんの、與五郎さんはどうでもいゝが……それよりか、まだ氣にかゝる事が。

　トこなし。

伊之　エヽ。

忠助　アヽ、かうなつては……後の祭だ。

　ト氣を落せし思ひ入れ。兩人、心々に考へるこなしあつて、伊之助の方へ

さては。

　ト思ひ入れ。

半助　何の事だ。そりやさうと忠助さん……今夜はの、宵

の中はお前マア、内の臺所も混雜だらうし、勝手に休みねえな。

伊之　ムウ……成る程。さうして、九ツを打つたら番小屋へ行つて、それからは貴樣の役となつてゐるものだから。

半伊　それから、心任せにするがいゝ。

ト忠助考へ

忠助　成る程、さうしやうか……おれも少し、今旦那へ。

トこなしあつて

何なら、さうして貰はう。

兩人　さうしなせえ〳〵。

ト忠助、考へ

忠助　イヤ〳〵、たとへさうするにしても、この夜番といふものは、疎略な役ではねえ。こりやア今度鎌倉から嚴しい命令で、銘々家持から出て、勤めると極つた事だ。内の旦那も、コリヤ、忠助が堅い者だから、この男の役にするがいゝと云つて、旦那の眼鏡で勤める役だ。

伊之　そりやアさうサ。

忠助　そこで先づ、旦那の命令とは云ひ條、鎌倉から出たお布令なれば、して見れば、賴朝公からこの忠助へ、云ひつけさしやつたも同じ事だ。

兩人　ハヽヽヽ……大層な事を云ふなア。

忠助　イヤ〳〵、笑ひ事ぢやねえて。お役當から拍子木が渡つて、もし何事ぞあれば、その番に當つた者が、カチカチとくらはせる……ソリヤ、一同に目を覺すワ、よしか……して見れば、今夜一晩の所は、この一町の者を寐かさうとも、起さうともマア、心任せだ……コリヤ、疎略にならねえ役だて。宵の内は、こなたに賴むにした所が、何にしろ、マア一遍廻はらねえ中は、役目が濟まねえ。

伊之　成る程、昔の者は、義理が堅いワ。

半助　それぢや、一遍まはつたら、こなたは臺所で休みなせえ……九ツまでは、おれが番小屋へ行つてゐるぜ。

忠助　オヽ、さうさつせ〳〵。

伊之　わしも又、色々用があつて。

ト件の鐵網の雪洞を持ち、立ちかゝる。ト忠助、この時心づき

忠助　コレ〳〵どうしたものだ……往來へ雪洞を持ち出すとは……夜番をする内では、猶々氣をつけにやならねえ……火の用心が悪うござる。

伊之　こりやアあやまつた。

半助　それぢやア一遍廻はんなせえ……おれらもあすこの新道から、すぐに番小屋へ行つてゐる。
忠助　九ツが打つたら、おれが代るぞ。
伊之　ドレ、店の用を片づけうか。
忠伊　火の用心〳〵。
ト詞つがへて別れ行く。
ト時の鐘、風の音になり、忠助は花道へかゝる。半助は上の方へ入る。伊之助は、内の潜障子をあけて内へ入る事。誂らへの合ひ方、忠助よろしく
忠助　アヽコレ、何にしても今日旦那が……海老名さまへ呼びつけられ、云ひ渡されたかの一件……あれが本當の事ならば……大事だが……よもやそんな事はあるめえ。アヽ氣にかゝる事だ……火の用心〳〵。
トこの節の捨ぜりふよろしく、花道より中の歩道へ渡り、提灯を持ち、割竹をならし行く。この内に、舞臺は靜かに道具まはる。
本舞臺、三間の間、目板うち、澁塗の高塀、上へ忍びがへし、この間より植込みの樹の見越し、よき所に非常くゞり戸の模樣。この脇に箱の用水溜、これへ元山町と記したる町名札、伊豆喜と彫りたる上へ、漆喰塗模樣よろしく、この道具になる。この間に、忠助、花道より中の歩道へかゝる頃、時の鐘、四ツ竹の合ひ方になり、揚げ幕より前幕の與三郎、好みの着附けになり、三尺着流し、頰被りして、のそのそ見廻して出て來る。この中に忠助、中の歩道より、東の歩道へかゝる事、双方よろしく
與三　アヽコレ、十年は一昔といふたとへがあるが……まだ漸々と六年餘り、それでせえ、この近所は、大分以前と變つたやうだ。
ト邊りへ思ひ入れあつて
しかし、變りもせうかえ、おれが身の上で知れたものだ。
ト呟きながら、舞臺へ來る。この内に忠助も火の用心火の用心と云ひながら、東の歩道を渡る事、双方よろしく、若い衆の仕出し、東西より往き交ふ事二三人ありて、與三郎は舞臺にて黑塀の方を、こゝだといふこなしあつて、色々見廻す思ひ入れ。忠助は割竹を鳴らし、舞臺へ來るゆゑ、與三郎、素知らぬ風にすれちがふ事。忠助は胡散なやつと訝かる事あつて、大きく火

の用心〳〵と割竹ならしながら下手へかゝる。與三郎、さうだといふ心意氣あつて、又後へ戻りかける。忠助、こなしあつて、割竹をわざとひどく鳴らし、行き過ぎんとするゆゑ
オイ爺さん、オイ〳〵。
忠助　なんだ、通りへ出るのなら、先の曲角から出さつせえ。この向うの潜りは閉め切りだよ。
與三　さうぢやアねえ……ちよつと聞きてえ事がよ。
忠助　時を聞くのか……まだ四ツが鳴つたばかりだ。
　トこんな事いひながら、行き過ぎるを
與三　コレサ、おれだよ。
忠助　何だ、おれだ……大風な事を吐かす……ハア、生醉か。
　トこなし
與三　オイ爺や……おれだよ〳〵。
忠助　爺やだ……ヘン、あまつたれた事吐かすな。誰れだえ……ハア、家根富の弟の源次か。内へ歸りそびれて、お袋へ詫事してくれか……そんないゝ氣な事ぢやねえワ。
與三　コレ爺や、おれだ。手前はいつも達者だな。

　トこの内、提灯でよく見て
忠助　さては狂人か。コレ、おらア、そんな汚い若い者に、近付きは持たねえワ。
與三　エヽ、解らねえ。
　ト側へより、邊りへこなしあつて
與三郎だよ。
　ト思ひ入れ。
忠助　エヽ。
　ト恟りして、又よく〳〵見て
嘘をつかつせえ、おれが育て申した坊さんは、そんな醜ねえ男ぢやねえ……アヽ、おれが種々とあの子の事を思つてゐるものだから、おれが氣を察して……そんな事を、しかし、魔ものぢやあるめえが……一體、手前は誰れだ。
　ト不審だち、きつと云ふ。與三郎考へ、こなしあつて
與三　ムウ、それぢやアおれが面や體の變つた事を。
　トこなしあつて
成る程、その後おぬしにやア逢はねえから、まだ譯を知らねえも尤もだ。カウ爺や、おれは與三郎だ。
忠助　エヽ。

〽忠助は見上げ、見おろし。
ト忠助、よく〳〵與三郎の姿を見て
オヽさうだ、坊さん、與三さんだ。
ト顔を見て
何だ、さうしてマア、お前のその顔の疵は……ハア、ヽ
そんならこの間、噂に聞いたに違ひなく。
與三　木更津の一件で、面も體もこの通りだ。
忠助　エヽ〳〵、情ない變り果てたそのお形。
ト燈火を消す。さてはといふ心ありて、怖氣立ちし思ひ入れ。邊りを思ひ、提灯を消す。時の鐘、あわてゝ
マア〳〵、こつちへ來さつしやりませ。
ト無闇に手を引張る事。
與三　コレサ、どうするのだ。
忠助　こゝでは話しが出來にくい……マア、わしがよい事がござります……モシ。
ト與三郎へ囁く事
與三　ムウ、ついそこか。
トめりやす、この内に縫ぐるみの犬二疋ほど出て、吼える事
忠助　エヽ、畜生め、提灯を消したら吼えやアがる。畜生め畜生め。
ト犬を追ふ事ありて騒ぐ。與三郎、こなしありて、天水桶の側へ忍ぶ心意氣、忠助、下の方へ來る。しらせにつきて、三方廻しの誂らへ、この道具まはる。
本舞臺、眞中に九尺の番小屋、板屋根、よき所に夜番火の用心と記したる掛行燈へ、燈火を點し、上下通し、竹矢來の中より、板羽目うち、高塀、天水桶二つ程、これへ元山町裏河岸と記し、日覆より櫓の釣り枝、番小屋の戸一枚開きて、これに割竹たてかけ、弓張りを置き、以前の半助、火鉢を扣へ番をなしてゐる。この道具納まる。
ト忠助、番小屋へ立ち寄る。半助、見て
半助　もうお前來たのか……今犬が吼えたつけえ。こなたは、どつちを通つて來た。
忠助　一廻り廻つてそれから爰へ……サア、こなたは、マア暫く休まつせえ。
半助　お前、なにを云ふのだ、たつた今、四ツを打つたばかりだ、九ツから代る積りだ。
忠助　ハテ、もういゝ。おれが番するワ、貴さまはマア、

休みなさい。
半助　それがいやだよ……さう云つてお前に勤めさせておいては……どうかすると、さつきのやうに云ふではねえか……おりや、九ツ迄勤める〳〵。
忠助　これは又、聞き分けの悪い、おれが代ると云へば。
半助　ハテ、九ツから代る積りだよ。
忠助　エヽ、おれが代る。
半助　なぜそんな事を云ふのだ。
忠助　ハテ、おれが内の臺所の用は片付いた。どうで内にゐた所が、寐られはしねえから、今日はおれに勤めさせて下せえ。
半助　さう云ふなら、どうでもいゝがの、又あとで先刻のやうに云ふといやだぜ。
忠助　さつきのは、おれが悪い。料簡さつせえ、マア〳〵おれに代らせて下せえ。
半助　色々な事を云ふなア……それぢやアおらア八ツを打つと出て來るよ。
忠助　ハテマア、それもどうでもいゝから……エヽ、行かつせえ。
ト この内、半助、こなしあつて、提灯へ火をつけ、割竹を持ち、立つて上の方へ
半助　それぢやア一廻り廻つて行かう。
忠助　アヽコレ〳〵、そつちは今おれが廻つて來た。
半助　ハテ、年寄といふものは、色々な事をいふものだ。
ト 割竹を鳴らしながら、下手へ入る。忠助、後見送り、思ひ入れあつて、上の方へ行く。
忠助　サア、ようございます、こゝへお出でなされませ。
ト これにて與三郎、上から出て來て様子を見
與三　ムウ……こりやア番小屋だな……かうして毎晩、手前が勤めるのか。
忠助　イヤ、さうではございませぬが、何でも家持ちの店店から人を出して、この通りに代る〳〵勤めるのでございます……マア〳〵爰でお話し申しまする。サア爰へお上がりなされませ。
與三　いゝかえ。
忠助　何の氣遣ひはございませぬ。
ト 四邊へこなしあつて、番小屋にある塵を拂ふ事、與三郎、上つて座らうとする。
アモシ〳〵、板敷の上は薄縁ばかりで、足が痛みまする。汚なけれど、これをお敷きなされませ。

與三　何のいゝワ、以前と違ふワ、これまでの身になる迄に、種々な苦しい目に遭つたのだ。

〽云ふにこなたも溜息つき

トこの内、忠助、無理に右の蒲團をあてがふ。與三郎この上に座る事。

忠助　モシ若旦那、以前に變ると仰しやるが、イヤもう變つた事だらけ……マア、その變つた事の始まりに、聞きたいは……お前なぜ、そんな顔へ、大層な疵をうけ、恐しい顔にはならつしやりました。

トこれを好みの合ひ方になり

與三　されば、木更津へ預けられたその頃に……あの土地に赤間源左衛門といふ道樂者の女房に、おとみといふ女があつて、操ねえ譯でその女をな。

ト云ひかけるこなし

忠助　お前、その女をどう毆したのぢやな。

與三　そこは、マアどうでもいゝワ。

忠助　呆れたものだ。

與三　云はれて見りやア、こつちがマア〳〵、少し義理の惡い譯も……そこで源左衛門といふ野郎の乾分等が、大勢かゝつて手籠めになり……それでしやつ面身體へも……この通りよ。

ト膝をまくり、引つかけし手拭を取る事。忠助、この内に行燈のあかりを、消したる提灯に移し、與三郎を見て思ひ入れ

忠助　オヽ〳〵、ヤレ〳〵慘たらしい。アヽ情ない事をしやがつたなう。

ト思ひ入れ。

與三　この譯ゆゑに、こゝの親仁は躍起となつて腹を立て中々江戸では寄せつけず、それで手前にも逢はねえ仕儀とう〳〵そのまゝ勘當と、身體ひとつを棒にふり、切られ與三と異名をつけられ、鎌倉にごろつく中……そのおとみといふ女をば、嚊にして暮してゐたが、又程もなく食ひ込み、こんな態で江戸へ來て、おぬしに逢ふのも面目ねえなア。

忠助　何のお前、面目ない事がござりまぜう……尤もお前さんの勘當は、親御さまの御立腹ばかりではござりませぬ。それには種々……マア〳〵その事は後でお話申しませうが……モシ若旦那。

ト與三郎へ囁き、よろしくこなし

こんな風聞を聞きましたが

ヘ耳に口
ト又囁き
眞實の事でござりますかえ。
ト思ひ入れ。
與三　眞の事よ。
忠助　エ。
與三　さまでもねえ事を讒訴され……そこでこの身は流人の境涯、なか〳〵話にやならねえ憂目を見て……そこでその儘朽ち果るのも、悔しい事だと、島を破つて忍び忍び、漸々の思ひで爰まで來たのよ。
ト思ひ入れ。忠助、この内、聞く程あきれるこなし。
忠助　そりや、愈々その恐しい所を脱け、あの爰へ……島紛失してござつたか。
ト當惑の思ひ入れ。ハア、と泣き伏す。與三郎邊りへこなしあつて
與三　コレサ〳〵、そんなに云はずと、いゝぢやアねえか。靜かにしやれ〳〵。
ト邊りへ思ひ入れして
その島を紛失してくればこそ、おれが育つた土地へ足踏ならず……まだその上に、今迄の、憂目に遭つた恨みある……そいつも昨夕。
ト源左衛門を仕止めしと思ふ心、忠助へこなし、忠助ぎつくり
イヤサ、云ふ事はいろ〳〵ある。又おれも、どうかうと思ひ込んだ事も、色々あつたれど……何を云つてもこの身すがら、まごついてはゐられねえ。これから又氣をかへて、チッと遠ツぱしりをせにやならねえ……たゞおぬしに聞きてえのは、親父さんやかゝさんは、御機嫌よくござるか……弟の與五郎も達者でゐるか、その安否を聞きに寄つたのだ。
ト云ふても、忠助、泣き伏してゐるゆゑ
コレサ、泣いてゐちやア解らねえわえ、とゝさんやお袋は達者で、弟も無事でゐるか。エヽ、コレ、さぞ親達もおれの事を、憎いやつだと云つてござるだらう。
ト思ひ入れ。
ヘ云ふにこなたも聲うるみ
ト始終この内、誂らへの合ひ方へ、よき程に鈴の音ありて、小さき木魚のあしらひ、忠助、思ひ入れてあつて、與三郎に向ひ
忠助　親御の安否が聞きたいとはまだしもぢや。そのお心

なら、なぜにマア、大外れた島破り、情ない事し出つしやつた。エヽ〳〵、さりとはお前は恨めしい、恨めしいお人ぢやなう。

ト思ひ入れ

〽怒る眼に零るゝ涙、內には佛間に二親が、看經の聲珠勝なる。

與三　今更それを云つたとて、もう追つつかねえ話だワ……面倒だ。どうで勘當うけてる體、親父やお袋の安否も聞かずともいゝわえ……達者でゐろよ。

ト行きかゝるゆゑ、忠助、狼狽へとめて

忠助　アヽコレ〳〵、待たつしやれ〳〵、愚痴を云つたはわしが惡い、堪忍して下さりませ……待たつしやりませ

トこなしあつて、この內、木魚の音、鈴の音聞える事

アレ〳〵、親御の安否が聞きたくば、あの鈴の音や木魚は、お袋さまや親旦那が、碌々夜の眼もお寐らねば、與の佛間で看經の、そのお勤も後世よりは、この世のお前の身の爲を、思し召してのあの回向……せめてあの音の聞える間、こゝにござらば二親へ、お逢ひなされたやうなもの……マア、下にゐて下さりませ。

ト思ひ入れあつて云ふ。與三郎もよろしくこなしある

忠助、與三郎を下に居させ

モシ若旦那、今日は何日と思はつしやるぞ。

ト思ひ入れ、與三郎、考へるこなし。

與三　手前に云はれて氣が付いた。おれが科が流罪と極まり、あの鎌倉から伊豆の島へ流されたは、いかさま去年の今日であつたなア。

トこなし。

忠助　別して今日は祥月とて、宵の中は百萬遍、同行者を呼び集め、待遇して歸すのも、皆お前の身の祈禱……その日になると、大旦那やお袋さまが、座敷へいつでもわしを呼ばつしやつて仰つしやるには、コレ爺よ……どういふ事か與三郎が、頑是ない時分から、乳母をつけてもおぬしに馴染み、物心をつけ、守してくれたはそちばかり……ソレ淺草の觀音さま、兩國の開帳よ、煙花の夜店緣日と、連れて行くのはそちばかり……その與三郎も成人して、男一人前になる頃には、不慮な事にて世間を兼ね、據所なく勘當中、罪を犯して鎌倉より、島流しにまでなるといふは、よくせき薄い親子の緣……どうであれが身體では、島で命は終るであらう。船に乘つた日を命日と思ひ、それで營む志ぢやによつて、今日の正客は

忠助、そちぢや、もてなす者は外にないと

〽膳の上座に据ゑられるその苦しさ

ア、情ない、これがマア、與三郎さまがおとなしくしてござつて、嫁御でも娶らつしやつて、その披露の悦びか初孫さまの宮參り、初の節句の歡びぢやと

〽家中が賑うて、御祝儀の赤小豆飯、御振舞の末座へなと。

坐つて食べる事ならば、嘸かし嬉しうござりませうが、それに引きかへ、守り育てたそのお子が、島へ行かれた今日のその膳へ……この正客にばつかりは、なりたくはござりませぬと、わしが云へば御兩親も、尤に思し召し何にも仰つしやらないで、たゞしく／＼と泣いてばつかり

〽仕出しは八百屋で結構な、手を盡した本膳が。

一箸咽喉へ通らばこそ、毎月々々今日の日が來るのは、わしは思ひでござるわいの。

〽かき口說きたる繰言も、信實見えて道理なる。聞く與三郎もさながらに、しばし詞もなかりけり。忠助それと心づき。

ト思ひ入れ。與三郎も種々こなしありて、蚊を拂ふ事などよろしく、忠助、心づき

ア、こりや氣が付かぬ。お前を捉へてわしが勝手のよい事……どうも爰は溝のあるせいかして、もう蚊が少しづつ出ますわいの……それに夜が更けるせいか、ひやひやと。

ト與三郎の形を見て

お前、風邪を引いては惡うござります。これなと引かけてござりませ。

ト袷の上へ引かけし袢纏を脫ぎ、與三郎へ着せんとするゆゑ

與三　よいわえ／＼、打つちやつておくがいゝ。もうからなつちやア風邪も引かねえ……そりやアさうと、親父どのやお袋へも物を思はせ、可愛想に手前に迄も、そんな思ひをさせるのも、みんなおれが心から、つく／＼身體に愛想がつきた……今看經の音を聞き、親に逢つた心持、不思議に手前にもかうして逢ひ、これでおれも氣が濟んだ。程過ぎたその後で、こんな事がありましたと、云ふていゝなら二親へ、手前の口から云ふてくれよ……そりやアさうと、あれが島ぬけの事を、どうして知つて居るのだ。

忠助　サア、その事は、今朝海老名さまのお屋敷から、召状が着いて、俄かに呼び出し、何事かと親旦那さまが、家老方と同道で、お役所へ出た所が、お前さんのお身の上、かやう〳〵の不屆ゆゑ、その方はかれが親里なれば確かにその地へ尋ね參るであらう程に、見かゝり次第搦めて出せ、もしも隱しておく時は、親は元より緣者までも同罪と、イヤモ、嚴しいお上の云ひ渡しを、旦那さまが戾つて早々、わしへのお話。モシマア、ひよんな事になりましたなア。

〽話す言葉に與三郎、きつと思案し駈け出すを

ト與三郎、始終の話を聞きゐて、この時、きつと思ひ入れあつて、ソレと立ち上がり行かうとするを、忠助とめて

モシお前、どこへござる。どこへ行かうと思ふのぢや。

與三　知れた事、名乘つて出るわえ。

忠助　エ、。

ト縋るを、與三郎、思ひ入れあつて

與三　よもや、おれがこの江戶へ、足のついたといふ事は誰れも知るめえと思つたに、もう何事もこれ迄だ。名乘つて出るのがいつちの分別。そこを放せ〳〵エ、。

忠助　イヤ〳〵、そりやなりませぬ〳〵。

與三　エ、、放せ〳〵。

忠助　イヤ〳〵放さぬ、コレ若旦那、そりやお前、惡い量見でござりますぞえ。

與三　馬鹿を云ふなえ……コレ、親の首へも繩をつけ、奉公人にも難儀をばかけうよりは、男らしく名乘つて出て立派に兇状うける心……それがなぜ、惡い量見だ。

忠助　エ、、さりとては情ない事云はつしやるの。お前、今名乘つて出れば、命は助かると思はつしやりますか。

與三　なんの、命は助かるものか、惡徒の最後はかうしたもの。行る所まで行つつけるわえ。

忠助　サ、、それが惡い。死ぬのが死れてゐる事なら、よしにして下さりませ……コレ、お前が今、名乘つて出れば、科は極つた鳥破り、身は荒繩で高手小手、忌はしい紙のぼり、裸馬に乘せられて

〽名もすて札の嚴めしく、拔身の槍で先拂はせ、こゝら邊りを引き廻される

その時は、人が何と云ひますぞ……アレ〳〵見やれ、あれが元山町の伊豆屋の息子ぢや……以前江戶にゐた時分は、アよい男ぢや、よい子息……伊豆屋の御夫婦は果報

者と、賞めた言葉の裏が來て……心一つの迷ひから、親も産みつけぬ恐ろしいあの顔は、あれが切られの與三とやらぢや、伊豆屋の子息の身の果てと、云はれたしまひがその身體さへ、三尺高い木のそらで

〽大身の槍でつかるゝ苦しみ。

惡徒のしまひはかうしたものと、お前、それをよいと思はつしやるか知らねども、御兩親のその歎きは、どのやうにあらうと思はつしやりますぞ……それに又、お前の實の父御さま、母御さまもお屋敷にある筈ぢやが。

與三　マア聞いてくれ、そのお袋も、人手にかゝつて亡くなつたア。

忠助　エヽ、あの親御も、人手にかゝつてお果てなされましたとか。エヽマア、どういふ事にか、親御さまの緣の薄い事ぢやなア……モシ若旦那、この爺は、惡い事は申しませぬ……どうぞわしが云ふ事聞いて、名乘つて出る事は、マア見合はせて下さりませ……モシ若旦那、これ程までに、わしが事を分けて云ひますに、聞き分けては下さりませぬか……コレ、默つてござるは不承知か、エエ、不承知なれば是非がない。いつその事に。

トこなしありて、手拭にて、わが手に首を縊らうとする。與三郎、慌てゝ止めて

與三　コレ〳〵滅相な、何をするのだ。

忠助　イヤ〳〵、わしが言葉を聞き入れなくば、どうぞ放して殺して下され。死にたい〳〵。

與三　エヽ、コレ、小さい時から色々と世話厄介になつたおぬし、さういふ事をさして濟むものか。

忠助　止めさつしやるは、わしがいふ事、聞かつしやる氣か。

與三　サア、それは。

忠助　聞き入れなくば、わしは矢張り。

與三　アヽコレ、滅相な。

忠助　そんなら、云ふこと聞かつしやるか。

與三　サア

忠助　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

忠助　モシ若旦那、もう生先のないこの老爺、わしを不憫と思はつしやらば、どうぞ名乘つて出る事はやめて下され……コレ申し。

〽聞きわけてたべ、これ賴むと、いふにこなたもほつと溜息。

與三　成る程、手前がそれ程にまで云つてくれるものだから……親父やお袋に歎をかけ、世間へ恥をさられせるも餘り見得でもあるめえから……やめにするからさう思へ

忠助　そんなら、アノ、聞き済んで、止まつて下さりますか。

與三　それもおぬしに免じてだ……然し、かうなつてはもう、江戸の中には居られねえ。これから氣のつかねえ、遠い所へ、巣を變へようよ。

忠助　オヽ、よう云ふて下されました。お前がさういふ氣にならつしやれば……わしが思惑がござります……チト待たつしやりませ。

　ト番小屋を出でんとする。

與三　どこへ行くのだ。

忠助　ハテ、お前さまに餞別をいたします。

與三　何を云ふのだ、手前に餞別を貰つてどうなるものだ

　ト思ひ入れ。忠助、こなしあつて

忠助　コレ、これから遠方へござるお前ゆゑ、餞別と申したは。

　ト塀の内へ、こなしあつて

奥にござる親御達へ、たゞ一目なとお前の姿を。

與三　エヽ。

忠助　モシ。

　ト床の合ひ方、與三郎、立ちかけるを、忠助止めて、又時の鐘、忠助、囁く事、與三郎こなし。

〽子の刻告ぐる鐘の音に、繁き往來もたまさかに、割竹曳いて走り脚、後にすごすご裏手より、またる、伊豆屋の表口。

　トこの内に、忠助、與三郎へ草履を出し穿かせ、手を引き、連れ立ち、捨ぜりふよろしく、忠助、割竹を持ち、與三郎へ件の提灯を持たせる事、與三郎手拭をわざと不器用に被り、共に夜番の心意氣、この内、道具三方廻しにて、道に黒塀の道具より廻る。

本舞臺、初めの道具、伊豆屋の表口の體に納まる。

トこの内に、與三郎、忠助兩人、時廻りの心あつて、上の方へ廻る。こゝで拍子木を打つ、生醉、夜商人の戻りなど、すべて四五人、東西より行き通ふ事、縫ぐるみの犬出でゝ、吼える事など、よろしくあつて、この犬を割竹にて、忠助追ふ。仕出しは違いふて行き過ぎる事などよろしくあつて、始終、床と下座の合ひ方

打ち合せ、與三郎、忠助よろしく門口の前へ來り、こなし、時の鐘。

忠助　まだ旦那さまは、おやすみなされは遊ばすまい。お前、一寸こゝにこの割竹と、提灯を預けます。番の積りで待つてござりませ。

與三　イヤ〳〵、止すがいゝ、却つてそりやア悪からう。

忠助　ハテマア、爰に少しの中、わたしが、一寸奥の樣子を見て參りまする。一寸待つて下さりませ。

ト何かは胸にくゞり戸へ、心あくせく入りにける。

ト時の鐘、こなしあつて、忠助、くゞり戸の中へ入る與三郎、是非なく割竹と提灯を持ち、待つてゐる心。この時、忠助件の揚緣をおろし、戸の内へ入る。この中に、東の揚げ幕より、夜蕎麥賣、風鈴のつきし荷を擔げ、呼びながら出て來る。犬吼えるを、與三郎、割竹にて追ひ拂ふ事などよろしく、この中に捨ぜりふよろしく

與三　なんぼこんな身形になつても、割竹で時廻りをしやうとは氣がつかねえ。飛んだ目に遭はしやアがるわえ……エヽ、畜生。

ト犬を追ひちらす。蕎麥屋の仕出し

蕎麥　饂飩蕎麥しつぽく、そばい〳〵。

ト呼び來るゆゑ

與三　オイ〳〵、いゝ所へ來た。一杯下つし。

蕎麥　ハイ〳〵……何にしませう。

與三　何でもいゝワ、熱くして。

蕎麥　煮麪もござりますよ。

與三　やつぱり、蕎麥にしやう。

蕎麥　ハイ〳〵。

ト緣先へ提灯をおき、腰かける。この內、蕎麥屋、揚げ笊へ蕎麥を入れ、湯を通す事、よろしく拵らへするそれぢやア、しつぽこにいたします。

ト拵らへる。

與三　汁が辛けりやア、湯をまはして、甘え方がいゝよ。

蕎麥　ナニ鹽梅は……吟味して上げます。

ト拵らへ

へイ、お上がりなざれませ。

ト出す。與三郎、丼を取り見て

與三　コリヤ、割箸で凝つたものだの。

ト喰ひながら、行燈を見て

籐の紋所で岩附屋か……いつも見かける印だア。

蕎麥　この近所は、お馴染でござります。これから四辻へ夜明まで店を張ります。

ト　この內、與三郎、喰ひながら

與三　コリヤ、いゝ鹽梅だ。

蕎麥　どうござりますか……イヤもう、夜鷹蕎麥とはいふものゝ、今は好い衆が召し上がるから、氣をつけにやなりませぬ……その代り、元が切れるには困ります。

與三　何でもそれよ。

ト　この內に代りする事あつて、蕎麥屋、又あとを一つ拵らへる事よろしく、喰ひながら

オイ蕎麥屋さん。

蕎麥　湯を上げませうかね。

與三　何時だえ。

蕎麥　今九ツを打ちました。

ト　與三郎が體を見て

お前さま、夜番をしながら、時をお聞きなさるなア、可笑しいね。

與三　エ。

ト　氣がつき

それでも蕎麥屋さん、何時だと云ふのは、お定りの捨臺詞だ。

蕎麥　ハ、、、……爰のお內では、いつでもお爺さんが番に出なさるではござりませんか。

與三　その爺さんが、おれに代りを賴んで、今用があつて臺所まで行つたのだ。

蕎麥　それぢやア、代りかね……この夜番も御苦勞さまさね。しかし、わたしの商賣は、お蔭で餘計賣れますよ。

與三　オイ、湯を下つし。

蕎麥　ハイ〳〵。

ト　湯を出す事よろしく

與三　ソレ、錢よ。

ト　丼と両方とり

蕎麥　これは有り難うござります……又明晩、お願ひ申します。

與三　早く仕舞ひなせえ。

蕎麥　そばい〳〵、うどん蕎麥しッぽこ。

ト　呼びながら、橋懸りへ入る。かすめて風の音、捨て鐘、床の合ひ方、下座の合ひ方あしらひ、與三郎この四邊りへ思ひ入れありて、內の樣子などよろしく窺ふ心意氣ありて、ふり仰向き、家の樣子をよく見やり、

こなし。
與三　おれ一人こゝへ置いて、只一日なりと、親父どんに逢はせると、呑み込んで行つたれど、どうしてどうしてよもや親父が逢ひはしめえ……なまなかに氣がおくれる……エヽ面倒だ。
ト立ちかけ、こなしあつて
しかしなア、この門口もこれが見納め。
ト本釣り鐘、風の音、右の合ひ方あしらひ
ドレ、この中に……ムウ。
〽人もふす亥の子も過ぎて
ト緣先へ提灯をそのまゝおき、割竹を立てかけ、行きかける。縫ぐるみの犬出て、吼える事、割竹にて追ひまはし、犬は下手へ逃げて入る。つか／＼と行きかけ、提灯の灯火へ心づき、立ち戻り、提灯を消さんとする。この内に忠助、以前の形にて、小風呂敷の中へ、好みの品々、脚絆、三度笠など持つて出るゆゑ、與三郎、提灯さし置き、つか／＼と駈け出るを、忠助とめて
三助　モシ、マア／＼待たつしやりませ。お前もう直ぐに行く氣であらうが、そんな姿形では、猶更人が目をつけます……コレ／＼、股引、脚絆もあり、風呂敷のその中には、旅に用立つ合羽に着換……こりや、親旦那が過ぎし頃、參宮なされたその時の笠を、せめては筐と思ひ、この軒下で支度して、どこへなりと行かつしやりませ。
與三　成る程、おれがこの形ぢやア、人目につくな。爺や、こればかりは手前が働き、有り難え／＼。そんなら、直ぐに支度をしやうよ。
ト合ひ方、床、下座かけあひ、忠助、邊りへ思ひ入れあつて、眉をひそめ、心意氣よろしく、じつとなり
忠助　さうして、お前がお出でのこのあらまし、親旦那さまや御老母さまへ、お話し申し上げました。
トこなし。與三郎も思ひ入れあつて
與三　たとへ手めえが、おれが譯をどのくらゐ云はうとも、勘當うけたおれが體、どうして／＼二親が、何のつけに逢ふものかえ。
ト思ひ入れ。忠助は與三郎の顏を見て、よろしく思ひ入れ。
忠助　サア、お前が云はつしやる通り、なか／＼、以ての外な親旦那のお詞。あの不孝者めが、うせやがつたか。イヤ、そりや、途方もない事ぢや。爰らあたりへまごついたら、この上にどのやうな、難儀をばかけ居るか知れ

ぬ事、人の目褄にかゝらぬうちに、手まへ、早く行つて、叩き出せ。われもわれぢや、それを爰へ來て、おれたちの耳へ、聞かす事があるものか。門ばた踏ますも、暖簾の穢れ、どこへなと、勝手な所へ失せをるやう、なぜ叱り付けて歸しはせぬ、年がひもない、愚鈍な奴と、思ひの外に、叱られましたわいなう。

　ト與三郎、こなし、下座の合ひ方、床とうち合せ

與三　ソレ見やアがれ。おれが、先から云はねえ事かえ。われがひとり、息精はつても、どうして〳〵。エヽ、あつたら、隙をかゝせやがるワ。ざまを見ろえ、べら棒め。

　トこれを心づかひの意味合ひよろしく

忠助　コレ、お前も、情ない事、云はつしやるぞ。たとへ勘當しられても、育てゝ貰ふた親御の家、その門ばたで、そんな憎さげな詞づかひ、ひよつと爰に。

　ト此うち正面の揚げ戸、上の方を少し揚げ、櫛の繪かきし障子を破り、さし覗く模樣、少し明り、内に映らふ事。與三郎はこれを知らず。忠助、こなたへ向ひ

親御たちがござつたら、わづかの間にあのやうにも、人が惡うなるものかと思はれるだけ、お前が不孝になりますぞや。

　ト内の方に向ひ

御兩親さま、御免なされて下さりませ。ありやソノ、昔の腕白で……わやく云ふのと、お赦され下さりませ。

　ト思ひ入れ。與三郎、思はず見かへる。この中に戸、少し上がり、障子に少し明りの影さし、内より窺ふ體。與三郎、じつと思ひ入れあつて、驅け出づるを、忠助、よろしく止めて、思ひ入れ、兩人、よろしく、與三郎、件の風呂敷を緣さきへひろげる事。件の合ひ方、時の鐘、かすめて風の音。三尺を解き、半股引、脚絆などの支度よろしくする事。

〽あつかふ氣くばり耐へかね、揚げ戸の障子ひき上げて、見合はす顏は親喜兵衞。

　トこれにて内の障子、引き上げ、以前の喜兵衞、顏を出す事。忠助、見合ひて、こなしよろしく、提灯の火に與三郎の姿を見せる心意氣。此うち與三郎は脚絆などはく事。

喜兵　コレ忠助よ、お主は、まだそこにゐるか。

忠助　ハイ……私より旦那さま、お前さん、なんと思ふて今ごろ、外を御覽じますぞ。

喜兵　サアそりや……今、犬めが表で、大さう吠えたゆゑ、

目が覺めて、外の樣子を……コレ〳〵門ばたで、犬めが吠えると、妾の内に、何ごとかかと、なほ〳〵人の思はくが……これと云ふも、其方が可愛がるから、どうも犬めが甘えてならぬ。早く、追ひ退けて仕舞ふがよいぞ。

忠助　ハイ〳〵、喧しう吠えた犬は、追ひしりぞけましたが、たつた一つ、跡へ殘りましたこの子犬……たゞ一目、よう御覽なされませ。

〽云ふまゝ明りさしつける、恩愛ふかき縁さきに、たまりかねつゝ見交はす顏。

ト此うち忠助、明り、さしつける。與三郎、この間に喜兵衛の聲を聞いて、よろしく思ひ入れあつて、この浄瑠璃、文句にて、双方、顏見合はせる事よろしく、與三郎、寄らうとするを、忠助、隔てゝ、こなしある。喜兵衛、見て、こなし、兩方よろしく

旦那さま、慘らしいこの子犬の姿。

喜兵　不憫な事とは思へども、また外の犬の目にかゝらば、その身の大事。早う、追ひ遣つて下され。

〽口には云へど心には、せめて一こと親と子の。

ト三人、よろしく思ひ入れ。與三郎、こなしあつて

與三　爺や、親父さまや母さんが、さぞ不孝な奴、憎い奴とも思つてござりませうが、初めはフトした義理だてから、却つてこの身の害となり、モウ、かうなつては仕方がねえ。みんな前生からの約束と、諦めておくんなせえ。必らずともに恨まぬやう、お二人へ、云ひ譯してくれ、コレ忠助。

ト立ちかける。

忠助　モシ、せめて別れに、たゞ一言。

〽無理にさしつけ障子越し、見かはす顏も先だつ涙、互ひになんと詞さへ、出でぬ親子の別れ路や。

與三　親父さまか。

喜兵　オヽ悴。

忠助　これが、この世の。

ト兩人、よろしく思ひ入れ。忠助、後より與三郎をさし付ける。喜兵衛、こなしあつて、胴卷のまゝ金を與三郎に投げて遣る。與三郎、受け取り、思ひ入れ。忠助、隔てゝ

若し、人目に立つては。

ト下手へ與三郎を突きやる。喜兵衛は障子を閉てる。雙方、見やつて、これを木の頭。

火の用心〳〵。

トよろしく、時の鐘、

ひやうし幕

ト與三郎は幕外に菅笠を持ち立ち上がり、よろしくあつて、誂らへ三重になり、向うへ行かうとする。この時、揚げ幕より按摩、出て來たり、行き違ひざま與三郎に突き當たり、轉ぶ。與三郎、詫びるこなし。按摩、捨ぜりふにて幕の引き附けへ入る。與三郎は右の鳴り物にて、よろしく向うへ入る。跡、シヤギリ。

大詰

大崎久次内の場

役名　觀音久次。妾、お富。目明し喜藏。損料屋甚八　實ハ噺家相生。雇ひ婆、おむら。小道具屋長九郎。海松杭の松五郎。成川民部。切られ與三郎。

本舞臺、三間の間、常足の世話家體。暖簾口、上の方へ格子戸棚。暖簾口より下手へ、小間物、荒物、別々の棚、引き出しの書き割り、この前、齒磨き、松脂、梳き油、などの掛け札。この前、棚間より本もの、手拭地、大分下げ、この下拭と共に金太郎の顔などつきし仕立て腹掛。この下へ巻き手拭地の並べし箱臺、曲げ紐、小間物の箱、並らべ、下手、一間の家體、前づら、爰に腰障子、これへ地染め手拭、小間物、荒物、品々、紙類と記し、この脇は三尺の羽目板、うしろ壁、これへ天地脊、その他、妙振り出しの張り札。いつもの所に門口。すべて品川宿、觀音前、久次住み家の體。爰に喜藏、梶原家、出入り目あかしの拵らへ、矢立てをさし、序幕に出でし噺家相生の甚八、好みの拵らへ、火鉢の側へより、煙草をのみゐる。喜藏も同じく煙草盆を控へ、おむら、木綿やつし、前垂れかけ、雇ひ婆の拵らへにて立ちかかり、門口に若い衆の仕出し三四人、買ひ物買ひ、立ちかゝり居る。おむら、これへ商ひして居る見得。テンツヽヘ雙盤太鼓をかぶせ、賑かに幕、開く。

若一　齒磨きと、楊子をおくんなせえ。

むら　アイ／＼、今、出して上げるよ。

若二　オイ／＼、手拭を早く、裁つてくんなせえ。豆絞りがいゝよ。

むら　今、裁つて上げるわな、忙しない。

若三　三味線の糸を、十五の三を二かけ、四つ切りを二帳

だよ。

甚八　ヨシ〳〵、そりやア、おれが出してやらうワ。

喜藏　この又、久次は、どこへ行つた事だ。店をうつちやらかして、途方もねえ。

ト煙草をのみ居る事。

若四　わしにも、芥子玉を一つ、くんなせえ。

むら　アイ〳〵。

ト此うち手拭二つ、裁る事。齒磨き、揚子、三味線絃、紙類、おむら兩人、捨ぜりふよろしくあつて、仕出しに出して遣る。

若三　アイ〳〵、お世話でござりました。アイ、錢を取らつしやい。

甚む　ハイ、ようお出でなされました。有り難うござります。

ト此うちに仕出しは品々を持ち、橋がゝりへ入る。

喜藏　甚八さん、お前、手傳ひかえ。

甚八　ナニサ、爰の內へ、用があつて來たところ。

むら　わたし一人で、間に合はねえから、主がすけてくんなすつたのだ。

甚八　とんだ粋輿ものでござりやせうに。サア、いま取つた錢は、おばさん、お前に渡すよ。

むら　アイ〳〵。ヤレ〳〵、いつでも、暮れ方になると、ごたつくやつサ。時にお前さんの、御用はえ。

喜藏　おらア久次どんに、少し話して置いた事もあり、それで、わざ〳〵來たのだが、內に居ねえぢやア、分らねえ。

むら　モウ今に、お歸りでござりませうよ。少しお待ちなされませ。

甚八　さうしておとみさんは、何をしてお出でだえ。

むら　いま奥の三疊で、髪を結んで居なさるわね。

甚八　成る程、この節の譯がらでは、一人で結はねばなるめえて。

むら　きびしい事のやうだがね、これが、本當の事サ。女は、手めえで結ふのがあたり前よ。

甚八　イヤ、きびしいと云へば、モシ喜藏さん、この間の川端の一件は、ほんの事でござりますかえ。

喜藏　さうサ、ほんの事だが、まだ、誰れが仕業か、判らねえのよ。

むら　ムウ、そりや、千葉家の飛脚を殺して、金をとつたとやら云ふ、話しだとかえ。

喜藏　さうサ、宿場では、よくあるやつサ。
甚八　人を殺して、金を取るとは、酷い奴があるものだ。定九郎なら五十兩だが、三百兩とは、ちつと仕事が大きいね。
むら　さうしてお前さん、その一件でお出でなされたのかえ。
喜藏　ナニサ、おらア千葉家へは出入りをせず、この一件は、他に聞き込んだものもあれば、こつちの儲つた事わけではねえが、その盗人が知れた時は、こつちの役だから、どうで、係り合ひになる仕事サ。然し、屋敷の飛脚を勤むる者が、殺されて、三百兩とられるとは、一體、とられる者も、濟まねえ譯サ。
甚八　マア、そんなものさね。さうして、お前さんなんぞ、外にこの宿に、調べる事でもありますかえ。
喜藏　海老名さまと、梶原さまから出た配符で、ちつと久次どんに逢つたに、渡して置きたいものがあり、それで話しもあつて、わざ〱こゝへ。
ト紙入れより疊みし與三郎の姿繪を出し、こなしある。
むら　それぢやア奥におとみさんが居るから、呼んで來ませう。
甚八　それがいゝ、早く呼びねえ。
ト立ちかけるゆゑ、喜藏、こなしあつて
喜藏　ア、コレ〱、待たつせえ、かみさんに聞かしては、ちつと悪い筋だ。マア、なんにしろ、久次に逢つてからの事サ。
甚八　ムウ、わかりやした。
ト親指を出し
うちのレコが、おとみさんへ内證で、また外に、女でも拵らへたのかね。
喜藏　馬鹿を云はつせえ。こんたではあるめえし。
甚八　わしがいつ、女を拵らへやした。
喜藏　コレ、隱しやんな。此ごろ年增の情婦が一人、出來た事は、こつちの帳にとまつてゐるぜ。
トこなし。
甚八　コレサ親方、そんな凄味は、なんだか無氣味だ。
むら　ぬしが云はつしやると、さう聞こえるやつサ。
兩人　ハヽヽヽヽ。
喜藏　冗談は冗談、役向きの配符の事だ。鮫津まで行つて、後に來るから、久次さんが戻つたら、少し内に居て下せ

えと、傳言けて下せえ。

むら　ハイ〳〵、さう申しませう。

喜藏　それぢやア一つ走り、行つて來やうか。

甚八　後に、お出でなされませ。

トテンツヽになり、喜藏、向うへ。これにて、向うより長九郎、道具屋にて摺れ違ひて舞臺へ來る事。喜藏は揚げ幕へ入る。長九郎、門口へ來たり

長九　ハイ、御免なさい〳〵。

ト氣を急く事。

むら　なんでござりますえ、さう〴〵しい。

長九　なんだ、さう〴〵しいえ。モシ、久次さんに逢ひてえ。久次さんは、どうしなすつた。

甚八　どなたか知らねえが、お前、マア内へお入りなされませ。

長九　わたしやア久次さんに逢ひてえよ。

甚八　ハテ、門口でそんなに云はずと、マア内へお入りなせえな。

トこれにて長九郎も内へ入り

長九　どうで入るがの、爰の内の御亭主は、名前さへ觀音久次と云ふから、正直なんだと思つたら、さりとはずるい男だ。

トこれを聞いて、甚八は長九郎の顏を見て、考へる思ひ入れ。

甚八　オイ〳〵、何が内の親方が、ずるい男だえ。

むら　譯を云ひなせえ〳〵。

長九　ハテ、いけずるいから、ずるいと云つたのだ。

ト此うちに奥よりおとみ、好みの着附け、卷き帶、結び髮の鬘、手拭にて煽ぎながら出て來たり、長九郎の云ふ事を聞いて居て、この時、長九郎へ向ひ

とみ　モシお前、どこからお出でだえ。

トこれにて長九郎、思ひ入れ。

今、あすこで聞いて居りやア、お前さん、なんと云ひなすつたえ。

長九　エ、わたしかえ。

ト險幕に恐れし體。

とみ　こゝに居る衆は、近所のお方や、雇ひのお婆さん、その前で内の亭主は、いけずるい男と、お前、云つたなう。なんだな、人の内へ來て、ろく〳〵に挨拶もしねえで、大きな聲で、うちの人の事を、どうのかうのと、いけ囂々しい、途方もねえ男だなう。マア、下にゐてから

譯を云ひなせえな。

トこなしあつて、おとみ、下に居るゆゑ、甚八、おむらもよろしく座に付く事。長九郎、しよげて、險幕に恐れし體。

長九　それぢやアお前はこゝの内の、アノ久次さんの。

甚八　おかみさんだわな。

ト長九郎、こなしあつて

長九　それとは知らねえで、わたしも、つい氣が急いたものだから、まつぴら御免なされませ。これはおかみさん、お初に、お目にかゝりました。

とみ　さうしてお前、なんの用で、今のやうに、さう／＼しくお云ひだえ。譯を、早く云ひなせえな。

長九　その譯は、からでござります。わたしは神明前で、小道具屋をいたします、長屋の長九郎と云ふ者でござりますが、さる屋敷の浪人衆へ、三十兩と云ふ金を貸しまして、その方の質に、金目の代物を預りましたが、サア、貸した金が、どうも戻らず、わたしも困つてね、その代物を捌かうと思つても、結構すぎて、はけ口の惡い品。そこで、この品川へはお屋敷方も、方々へ來てござる事だから、どこぞへ嫁入りさせうと、この間、持つて來たところ、本宿のさる内證で、こつちの旦那にお目にかゝり、その時に、ちつと貸してくれろ、見せる所があると云ひなさるから、大事の物だが、暫時のうちと、預けて置いたら、それからは、そこの内證へもきつぱりござらず、もう今日が日まで、七日八日になりますから、それで、今のやうに申しました。

トこれを聞き、おとみこなしあつて、

とみ　成る程、お前の云ふところは、解つたがね、定めてその時　うちの人が

トこなしあつて、若しや遣り繰りせしかと云ふ意氣なり。

どんな事の入り用か、マアそれにやア譯があつて、その品を、お前から預りもしたらうが、うちの人に限つては、ついにそんな事で、間違ひ引きのない氣性。マアなんにしても、ぬしが留守では分らねえから、明日、居る時に來なさいな。

長九　モシ／＼、そりやアお前さんのお詞だがね、神明前からこゝまでも、餘ほどござります。何を云つても、ちよつと預りで、時貸しにせえ、三十兩貸す代物、金目の物をいつ迄も、さう手ばなしては置かれませぬ。觀音前

の久次さんと云つては、名の高いお方ゆゑ、暫時の間も手ばなしたのだ。モウ、それから七八日。

　トそこら見廻し

かうして内へ來て見れば、さして手堅い。

　ト思ひ入れ。

とみ　なんだとえ。

　トこなし。

長九　イヤ、手がたくお約束申した事、なんならお歸り迄、待ちませうよ。

とみ　そつちの勝手で、うちの人へ貸して置いて、わたしに向つてそんな事。どうとも、勝手にしなせえな。然し、金目の物とは、一體なんだえ。

　ト思ひ入れ。

長九　エヽ、そりやア。

　ト甚八、おむらなどへこなしあつて

そりやア久次さんにお目にかゝれば、解る事。やつぱり、道具でござりますよ。

　トこなしあつて、莨のんゐる。此うち甚八、こなしあつて

甚八　モシ／＼道具屋さん、どうも見たやうな人だと思つたら、お前は元山町の、伊豆屋のお手代、長九郎さんだね。

　ト長九郎もこなしあつて

長九　さう云へば、こなたも……オヽ、兩國にござつた甚八さん。お前、今、こゝにゐるのかえ。

甚八　左やうサ。一しきりは旅に出て、五行亭相生と云つて、噺家の眞似をしたり、方々と流れ渡り、今では女房に彈き手をさせ、わたしが稼ぎは座敷へ出たり、その片手間の損料屋サ。さうしてお前、疾から伊豆屋を、暇を取つて。

長九　サア、聞きなせえ。放蕩者の與三郎にくツついて居て、どうで長い正月もあるめえと、こつちから暇をとり、今ではしなれた小道具商賣。久しぶりで、お目にかかつたよ。

　トこれをおとみ、聞いて、思ひ入れありて

とみ　それぢやア主は、あの與三郎さんの内に居た

　ト云ひかけるゆゑ

長九　あの與三郎とは、お近づきかえ。

　トおとみ、甚八、見合はせて、こなし。おとみ、氣をかへ

とみ　なアに、與三郎さんとやらは、近づきではねえがね、そこに居る、甚八さんから話しに聞き、それでさう云つたのサ。
甚八　イヤモウ、人と云ふ者は、どこでどう云ふ、近づきに逢はうやら、知れねえものサ。わたしも、うちの姉御は古いお馴染みで、頼まれた名びろめのせめ道具を、久次さんの顔で、方々を配つてお貰ひ申すのを、お頼み申しにちよつと來て、大きに長居をいたしました。
とみ　あの配り物の事は、主が承知ッ。モウ五六軒やる所があるから、後から屆けてくれるやうにと、今朝、うちの人が云つて居たよ。
甚八　何分よろしく、お頼み申します。時に、昨夕のは、お邪魔でござりませう。持つて行きませうか。
むら　アイ、爰にござりました、お持ちなさい。
　ト立つて、上の方の障子屋體より、損料蒲團二枚ほど出す事。
甚八　アイ〳〵、お世話でござります。
　ト擔げにかゝるゆゑ
とみ　コレナ甚八さん、お座敷を勤める人が、そんな物をかついで、見つともない。今、おばさんに、持たせてやるわな。
むら　わたしが、持つて行きませう。
甚八　商賣だから、わたしが持つて行くものを、そりやアお氣の毒な。さうして、昨夕のお顔はえ。
とみ　うちの人が以前の友達、大師河原の歸りだと、三四人づれで押し込んで、たうとう昨夕、夜あかしサ。
むら　道理で、お賑やかでござりました。
とみ　それぢやアおばさん、お前も今夜は、内の用を足しなさいな。
むら　ようござりますかえ。
とみ　いゝからお出でよ。
むら　それぢやアお願ひ申します。明日の朝、早く參りますよ。
　ト甚八、立ち上がり、おむらは蒲團をかたげ
甚八　そんなら姉御……親方へよろしくお頼み申します……モシ道具屋さん、御悠りとお待ちなされませ。
長九　アイ〳〵。
むら　お前の所の女中衆も、早く代りを見付けてえものだね。
甚八　誠に困りやす……いゝのがあつたら、お頼み申す

よ。

ト門口へ出て

ハイ、お暄ましうございました。

トこの間、よろしく捨て詞あるべし。流行唄になり、甚八、おむら、下手へ入る。おとみは、火鉢へ炭をつぎなど、よろしくこなし、長九郎、延つ反つして。

長九　ア、、この久次どのは、もう歸らつしやりさうなものだ……モシおかみさん、いつ頃お歸りなされませうね。

とみ　どうで、自分の內だから、いつか一度は歸つてくるわね。お前の口から、待たうと云つたのぢやないか、マア、氣を長く待つておいで。お前のやうな暇人でないから、構つてはゐられない。待ちなさるなら、店を氣をつけておくれ。その代り、お茶位はあげるわサ。

長九　そりやア御馳走だね。

とみ　ドレ、お茶でもあげやうね。

ト合ひ方になり、おとみ、奥へ入る。長九郎、煙草盆を引き寄せ、

長九　何にしても困つたものだ、

ト煙管くはへ、思ひ入れ。これを流行唄になり、向うより觀音久次、好みの拵らへ、日和下駄にて、この次へ喜藏、話ながら出て來り、この後より海松杭の松、品川宿の小屋頭の拵らへ、頰冠りにて出て來る事。

久次　喜藏さん、いゝ所で逢ひました。

喜藏　お前の內で、先刻よつぽど待つてゐたが、どうもこの一件は、內のレコにも。

ト小指を出し

話して惡い筋、委細の事は、昨夕こなたの耳へ入れた通り……又その外の委しい譯は、こいつを見れば解るのだ。

ト紙入の間より、疊みし繪姿を出し。

ぬしの方へ預かつて置いて下せえ。

ト繪姿をそのまゝ取り、懷中して

久次　ようござります……わたしが呑み込みやしたとは、請け合ふものゝ……お前方は本職だが、こつちは云はゞ素人の事だから。

喜藏　ハテ、さう云つてはいけねえ……こつちも確かに、こゝいらへまごついて來やうと思ふから、こなたを賴むのだ……カウ、骨さへ折つてくれるなら、冗談にではねえ、お出入する海老名さまや梶原さまから、お前には

キツとした
　ト立ちかけるゆゑ
久次　ハテ、ようござります。マア〳〵、どうなる事か、
　やつて見ませう。マア、任せておきなせえ。
喜藏　それぢやア何分頼んだよ。
久次　ハテ、いゝと云ふ事サ。
　ト喜藏は引返し、揚げ幕へ入る。この内に海松杭の松
　五郎、喜藏に行き合ふ。喜藏、海松杭を見て、両方よ
　ろしく、喜藏は揚げ幕へ、久次は喜藏の後見送る心意
　氣、捨臺詞ある内に、海松杭、久次見合ひて
松五　今のは、海老名さまへ出入をする、目明の喜藏だ
　の。
久次　さうよ……こなたと話をしてゐたその中に、あの男
　に逢つたから、肝心の話かけた一件を。
松五　サア、わしも以前は、海松杭の松と云はれて、随分
　人にも、もつかうされた男だが……今はこの近所へ來て
　味な所でお前とも近附きになつて、かうして一緒に歩い
　ても馴染まねえ土地と云ふものは、世間から見られて、
　つい、今のやうなやつに逢つても氣障だから、顔をよけ
　る氣になつたのサ。
久次　何の、あの喜藏なんかに、何の氣兼が入るものか。
　マア、おれが内へ來るがいゝ。
松五　それでも、お前の所は。
　ト小指を出し
レコの手前が、程が悪いわな。
久次　何の構ふものかな……マア、一寸一緒に來なせえ
　な。
　トこんな筋の事云ひながら、内へ來る事、内に長九
　郎、色々退屈のこなしあつて。
長九　久次どのは、まだ歸らぬのか。いつまで待たせてお
　くのだらう。それでもあんまり、久次どのもずるい人
　だ。
　トこの内、あらましを、門口に久次、海松杭、聞きゐ
　る。海松杭、こなしあつて、下手へ忍び入る。久次は
　門口をあけて、ずつと入り
久次　ずるい男がどうしたえ。
　ト思ひ入れ。
長九　ヤ……これは御亭主……よく戻らつしやりまし
　た。
　トこなしある。久次も思ひ入れあつて

久次　オイ道具屋さん、お前も又、おれが居ねえ所へ來て、何もかれこれやかましく、そんなに云はねえでも、よささうなものだ。

　ト云ひかけろゆゑ、長九郎、きつとなり

長九　イエ〳〵云ふね、云ひますよ……この間、お前さまに初めて逢つたその時は、お交際の方が、みんなこの宿の立派な衆、その中で久次さん〳〵と云はれてゐるお前だから、よもやと思つて大金な品、一寸見せろとお云ひなさるから、お貸し申して置いたのだ……その時からは七日八日、あそこの内證へも出さつしやらず、そりやお前さん、お名前にもお似合ひなされぬ方だと思ひますよ。

　ト云ふゆゑ、久次、むつとして

久次　コレ、乙な事を云はつしやるが、それぢやアおれがあの代物を引つかけて、遣り繰りにでも遣つたと思つて、こなたは疑ふかは知らねえが、おらアそんな小刀細工は嫌ひな男だ……ちつと、あの品には譯があつて、買ひたいと思ふから、おぬしから預かつてゐるうちに、ヤレ、仲直りだの、名披露のと、色々な事を頼まれて、それでこなたの方へも無沙汰になつた……ありやアおれが買ひ取るから、マア、さう思つてくんなせえ。

長九　サア、お前さまの方は、おれが引き請ける、おれが買はうと極めはつけてござつても、二兩や三兩の品物ぢやござりません。百兩の品物でござりますよ……それをば、玉を引き上げて、それなりけりとは、おかしなもの……そりやお前さん、風が惡いと申すものでござります。

久次　エヽ、矢張り氣障な事を吐かしやアがる……コレ、代物はこの通り。

　ト懐より出して、袱紗に包みし前幕の香爐を出す。

おれが方に預つてゐるわえ……こなたの遣り繰りをつける迄、なんで外へ品物を。

長九　そんなら、お金をおくんなせえな。

久次　ハテ、その金がこゝにありやア、直ぐに埒を明けてしまふのだ。

長九　それでは、わたしも迷惑でござります。こちらには、ちと望む人があつて、急にそつちへ請け渡したうござります。

久次　それでも、おれが先約だワ。

長九　ハテ、せんやくでも練藥でも、金を早く取らにやアわたしの商賣にやなりませぬ。マア、代物をわたしの方

へ。

久次　ハテ、おれが買ふわえ。

長九　ハテ、お前も情の強い。そんなら金をよこしなさいな。

久次　ハテ、二三日だ、待たつせえな。

長九　どうして〳〵、半日も待たねえ。早く金をおくんなせえ。

久次　それだと云つて、その金が。

長九　金がなければ、マアその品を。

ト取りにかゝるを、久次、爭ふ中に、海松杭の松、門口より顏さし入れながら、包金を五十兩抛り出し

松五　久次さん……この金を遣ひなせえな。

ト久次の前へ投げる。久次、取り上げ

久次　そんなら、手元にこの金が。

松五　今聞いた入用には、高が半分足りねえが、樣子によつたら跡はどうでも、マア、間に合せておきなさいな。

ト内へ入る。

久次　ムウ……有り難い。こつちもさしかゝつた入用だ、樣子によらば少しの間。

ト久次よろしくこなしあつて

いかにも、こなたが詞に任せ、それぢや借りるぜ……サア道具屋さん……半金の五十兩、これを渡しておくからは、代物はおれが自由、又跡金も、明日中にきつと調へて渡すから、さう思つてくんなんせえ。

ト金を渡す。長九郎、こなしあつて

長九　成る程、包金で五十兩……確かに受け取りました……あとの所は明日中に。

久次　間違ひなく調へてやらうから、それ迄どうぞ待つて下せえ。

長九　ようござります。それぢやア何分お約束の、間違はねえやうに、お賴み申します。

久次　ハテいゝわな。金を取つたら、さつさと行きなせえ。

長九　それでも、あとが五十兩、きつとお賴み申しました。

久次　エヽ、煩い男だぞ。

長九　ホイ、叱られた……これでお待ち申した効があつて、先づ商も出來たといふもの……しかし、これもお前さまがござつたゆゑ。

ト海松杭へこなしあつて

大きに有り難うござります……アイ久次さん、お喧しうござりました。

トテンツヽになり、長九郎、向うへ入る。久次、一寸右の袱紗包の香爐を開けようとする。海松杭も思ひ入れあつて見るゆゑ、一寸懐中して思ひ入れ。合ひ方。時の鐘。

久次　松五郎どん、何にしても、こなたのお蔭で辱けねえ。これといふも、先達つて、濱川のあの場所で、不圖出逢つて近附きになつたこなたをば、夢に牡丹餅、五十兩投げ出して貸したのは、よつぽど昨夜は出來がよかつたと見えるな。

松五　何のお前……昨夜は、どこへも出かけはしねえが……どこぞの場所の資金にと、持ち合せたあの金が、用に足りたは嬉しいのサ。

久次　しかし、五十兩といふ高を借りてゐて、こなたの內を知らねえでは、濟まねえわえ。

松五　わしが內は、云はずにおかうよ。

久次　云はれねえとは、どういふ譯で。

ト兩人思ひ入れ。

松五　わしが居所を云ふ時は、からした話も爲難い譯サ、素人衆と違ひますよ。

ト久次、ぎつくりこなしありて

久次　ムウ……素人と違ふといふからは。

松五　今では小屋へ落ちやした。

久次　そんなら、お前の身の上は。

ト思ひ入れ。

松五　その小屋者となつたのも、元はと云へば木更津で、おとみどのをばその以前、口說いた事が親方の源左衞門どのゝ耳に入り、それからこつちが疎まれて、仲間のやつには見捨てられ、世間が狹さになり下がり、この品川のよせ場へ來て、少し身分は下がつたが、その代りには困らぬ金……昔の仇は恩にかけ、貸すといふではねえが……幸ひこゝに持つてゐたのが、素人衆の用に立てば、これでわしも本望サ。

ト思ひ入れ。久次、こなしあつて

久次　さういふこなたの身の上とは、さつぱり知らずに、イヤ、とんだ話だ……どういふ譯で今の金を。

ト思ひ入れ。

松五　野伏り非人の金にしろ、世間は變りぬ天下の寶、お前が賴むものだから、間に合せた分の事……それと

も、借りて氣が濟まずば、直ぐにこつちへ返しなさいな。

　ト久次、思ひ入れ。

久次　イヤ、返すわえ。借りておかう……使つた後で譯を開き、どうなるものか仕方がねえ……長くは借りねえ、明日の朝まで。

松五　こつちは、明日が明後日でも、そこはそつちの勝手次第。然し、判證文はしねえでも、お前も觀音久次さん、間違ひはあるまいね。

久次　ハテ、駄目を押すには、及ばねえわえ。

松五　面白い、その詞を忘れぬやうに……そんなら久次さん……後、黑花を振んなせえよ。

　トこなし、唄になり、橋懸かりへ入る。久次、思ひ入れ。時の鐘、後合ひ方、彈流し、この時、おとみ、なに心なく奥より出る。

久次　おとみ、今歸つた。

とみ　オヤ、お前、今お歸りかえ、大層手間が取れた。どこをうそ〳〵ぼつつき歩いてお出でだえ。

　トつんとする。

久次　ヘン、歸り早々、亭主に劍つくを喰はしやアがるぜ。カウ、男は外を歩くのが商賣だ。そんなにけち〳〵云ふなえ。

とみ　それでも、お前の留守へ、いろ〳〵の人が來るからの事サ。

久次　來なくつてサ。人出入りの多い內が、陽氣でいゝものだ。

とみ　ほんに、その陽氣といへば、噺家の相生さんが來たから、彫物の事を云つたら、歡んで歸つたが、あの人もこの土地へ來て、貸蒲團屋をしてゐるとは氣がつかない。ほんに緣といふものは、不思議なものだえ。

久次　そりやアさうよ、しかし、何が緣が不思議だと云つて、凡そ不思議なのは、おぬしとおれよ……おぬしが、以前藝者商賣をしてゐる時分は、おれもその頃若い身空で、ずい分心易くしたその內に、不圖喧嘩の中へ飛び込み、退くに退かれぬはめになり、相手へ大勢疵をつけ……おれもその時、この通り。

　ト身體と脚をまくり見せて

身體にも疵をうけたが……相手に即死が二三人、その科により、伊豆の島へ流されてゐたのも五六年……その中おぬしも與三郎と、苦勞をし合つた曉が、たうとう與

三郎は重い科で、沖の小島へ捨てられた、その戻船へ大赦に遭ひ、こつちは故郷へ新世帶、おぬしと二人でこの通り、暮してゐるのがよくせきな、因緣づくだとおらア思ふよ。

とみ　そりやアお前の云ふ通りサ。わたしも一旦苦勞をしたあの人が、どうで島へ行くからは、あの身體では長い事、島で命は捨てるものと、思ひ諦めこの通り、今はお前と夫婦になつて暮すのも、譯を知つたお前だけ。せめて後で香花を快く手向けたさ。

久次　そりやアおれも承知だワ……しかし、前の亭主も身體の疵、今の亭主もこの通り、おぬしは、疵のある男に緣があるワ。

トこなしあつて

しかし、與三郎は、おれがやうな、こんな毛むくぢやらな脚ぢやあるめえ……ハヽヽヽ。

トこなし、おとみ、氣をかへ

酒があるなら、燗でもつけろな。

とみ　アイ、支度はしてあるよ。

ト時の鐘、入相を打つ。

久次　もう日が暮れるワ……ドレ、燈火の支度は、おれがしようか。

ト合ひ方になり、おとみは膳立したる蝶足の膳の上へ、小鉢、茶碗、丼などのせたるに、酒德利、猪口を出し、火鉢へ鐵瓶をかけ、酒の支度の事、捨臺詞よろしく、久次は行燈もち出でて、燈火を點す事。この內に向うより與三郎、三度笠、合羽、脚絆、手甲、前幕の品にて身拵らへせし體、件の笠をかざし、バタ〱向うより一散に走り出で、直ぐに內へ入り、慌てゝ戶を締める。兩人、愕りして

久次　エヽ、愕りすらア。

とみ　お前は誰れだえ。

ト與三郎、思ひ入れあつて

與三　御免なせえ。

ト四邊を見廻し、手拭に心づき

ハ、ア、手拭屋だの。手拭を一筋くんなせえ。

久次　アイ〱。

ト行燈を出し、灯火をつけてゐて

ソレお客だ。手拭を出してあげろよ。

とみ　ハイ〱。今お目にかけますよ。

與三　どんなのでもいゝ、早く裁つておくんなせえ。

とみ　それでも、模様を御覧なさいませ。
　ト掛けてあるのを、他に巻きたるを持ち出す事。
與三　ナニ、どれでもいゝわな。
　ト一寸見て
その不意氣な牛染がよからう。
とみ　これでござりまするかえ。
　ト巻きたるを取り上げる事。この時、兩人顔見合せ
ヤ、どうやらお前は。
與三　おとみだな。
とめ　ほんに與三さん。
久次　そんなら島を。
與三　ヤ、こなたは久次。
とみ　ひよんな所で。
　ト思ひ入れ
久次　逢つたたら。
　トこの内、三人よろしく、與三郎を久次、内へ引き入れ、入れ代つて門口をぴつしやり閉める。三人よろしく思ひ入れ。與三郎、氣をかへ
與三　コレ久次どん……何にも云ふにやア及ばねえ、おれがかうしてゐるからは、おぬしの胸には譯は知れやう。
　トおとみへこなしあつて
いゝやうに頼みやす……オイかみさん、早く手拭を裁つてくんねえな。
とみ　アイ、今裁るわね。
　トこの内に、手拭を裁る事。與三郎、當百錢と浪錢を出し、手拭を取つて久次をかきのけ、門口を明けやうとして
與三　お世話でござりやした。
　ト出やうとするを、久次とめて
久次　カウ、待たつせえな。
　ト立ちかけると、上へ突きやり
エヽ、話があるワ、マア待たつし……コレサ、見てゐずと、草鞋でも解いてやれな。
とみ　アイ。
　ト與三郎、兩人氣味合ありて、與三郎、草鞋を解く。おとみ、笠を取つて片よせ、こなしあつて與三郎は上の方へ、久次は外を窺ひ門を閉めて思ひ入れあり、與三郎へ向ひ
久次　カウ與三郎……おらア、よもやと思つたら
とみ　あの恐しい

とみ　島を破つて。

與三　察してくりやれな。

　トおとみ、ぎつくり思ひ入れあつて、さし俯く。

久次　素的な事をやつたなア。

　ト思ひ入れありて、好みの合ひ方。

今もおぬしが身の上を、こゝで話してゐた所だ。なアおとみ。

とみ　今宵お前に逢はうとは、ほんに夢さら知らぬ事。

久次　マア、何にしろ、達者でめでたいの。

與三　イヤ、その目出度いのはこなたの身の上……おれが鎌倉で罪をきて、船に乗つたは去年の今頃、風のもよりで汐待の、その時初めて近附きになつた、所は……ア、何とか云つた。

久次　オヽ、おれが流されてゐた所は、伊豆の岬の高島よ。

與三　ムウ違えねえ、高島々々……その高島でおぬしに逢つたは……丁度十日程も交際つたなう。

久次　さればよ。

　ト思ひ入れ。おとみ、こなしありて、久次に向ひ

とみ　そんなら、お前の居た島と……與三郎さんの行く島は。

久次　違ふのサ……その汐待の流人船、多くの人には間を分けて、切られ與三郎と肩書の、墨黒々とさげ札は、こいつは立派な惡黨と、おれが方から近付きに、なつておぬしが身の上の。

與三　その概略を話した上に、イヤ、その時は、こなたにも、大きに世話になりやした。かれこれする内出船となり、こつちは傳も磯浪の、沖の小島へ送られた。その戻り船に確かこなたは。

　ト思ひ入れ

久次　サテ、聞きやれ。有り難いお赦の沙汰で、程なくこつちは故郷へ歸り、古い馴染や友達も、無事に戻ればやれこれと、頼母しづくで店を借り、馴染んだ土地は觀音前、片名はやつぱり觀音の、久次と人に立てられて、以前の惡の夢も覺め……氣も入れ換へて堅氣の暮しサ。

與三　それだから、目出度いと云ふ事よ。

　トおとみへこなしあつて

カウ久次どん、イヤ久次……おれが口から、どうした譯だと、聞くのは何だかひけたやうで、チッと云ひ難いと思ふがな……しかし、問はずにはおかれねえ……この女

は、どうした譯で、こゝの內に居りやすえ。どうぞ譯を聞きてえな。

ト久次、おとみ思ひ入れ。

久次　あの何か、おとみの事か。

與三　さうよ。

久次　ムウ……コリヤ。

トこなしありて

おぬし云やれな。

トおとみ、思ひ入れ。

とみ　なんだな……お前お云ひな。

久次　エウ、手前から話せよ。

とみ　マア、お前からサ。

ト兩人よろしく

與三　コレサ、夜が短いワ。早く云やれな。

久次　ムウ……ハヽヽヽ

トよろしくこなしありて

こりやアかういふ譯よ。手前とおとみと二人が仲、色々と苦勞苦患して、その內不慮な譯となり、こなたは流人となつた仕儀、こりや云ふにも及ばぬが……今云つた戾船で、おれが鎌倉まで歸つた時、まだこのおとみは牢を出ず、引き取る人がねえとの事だ……そこで、おれも以前、江戶にゐた時分には、兩國でおとみとは心易くし合つた仲、棄てゝおくその時は、據なくこの女は、忌な所へ身を墮し……さうなつた時は、ついちよつと、足を洗つて世間の交り出來ねえ身にするも可愛さうと、おれが綠湯だゝ引き取つて、それから爰へ連れて來たのよ。

とみ　聞かしやんす通り、親切な久次さんのお世話ゆゑ、やう／＼わたしが身拔けをして、こゝへ來て居るその中にも、段々島の話を聞けば、なか／＼聞くより恐しい所ゆゑ、長う命は保つまい、どうでこの世に亡き人と、わたしは思ひ諦めて、せめては日每に香花を、心おきなく手向くるは、心の知れぬその人へ、身を委すより何かの事、譯を知つたその人を、力と賴んで月日を送るその內に、思ひがけなくお前に逢ひ、その面目なさ恥しさ、どうぞ料簡して下さんせいなア。

久次　おとみからも云ふ通りだ。今更おらア面目ねえ。

トこの時、與三郎、じつとこなしありて

與三　イヤ、その斟酌には及ばねえ。どうでこつちも島にゐて、滿一年はまだしもだが、二年と命は保つめえと、行つた時から覺悟はつけたのだ……よくこそ、おとみを

引き取つて、親切に世話をしてくれた。忝ないと禮を云はうが、おぬしを惡くなに思はう……又おとみも、外の亭主を持たず、人に知られた觀音久次を見立てゝ、よくも亭主に持つた……それでおれも心が安い。

とみ　そんなら、わたしへ恨みもなく。

久次　この久次へも疑念を晴らして。

與三　そこが江戸子、男は當つて碎けろだワ。

久次　流石は與三郎、感心した。

とみ　わたしも、それで少しは心が落ついたわいなア。

與三　されば、こなたの推量通り……頻りに江戸が懷かしく、艱難苦勞で故郷の空、元山町の親里の、どうぞ樣子が聞きてえと、昨夜だづねて行つたればな。

　ト思ひ入れ。

とみ　お前の母さん父さんに、お變りもないのかえ。

與三　向うに變りはねえにしろ、こつちは久離斷られた身の上、どうする事もならなんだが、不圖した譯で恩のある親父どのに唯一言、言葉を交したがこの世の思ひ出。

　ト思ひ入れ。

とみ　そんなら、それが泣別れ。

久次　ムウ……ムウ……そんなら江戸へとつくから。

與三　島を破つた配符が廻つて。

とみ　エヽヽヽ。

　ト思ひ入れ。

久次　コレ。

　トおとみを制し、與三郎又、久次へ囁く。

與三　こんな始末よ。

　ト久次、こなしありて

久次　そんなら、海老名のおかゝりで……ハテナア。

　ト思ひ入れ。

與三　そこでおれも、これ迄だと覺悟を極め、直ぐに名乘つて出る心で、駈け出したがな……おれが子供の時分から、守をしてくれた忠助といふ老人が、段々譯を云つて、おれへの頼み、どうぞ、一旦落ち延びてくれろといふ、その老人の心根が不憫だから、こゝ迄は忍んで來たが……矢張り配符が廻つた樣子、今宵の中に鎌倉へ走りつき、立派に名乘つて出る時は、江戸の親へも難儀もかからず……親の手前へ死恥かゝせる事も薄らぐ道理、おれが心は、臍を極めた。

　ト立ち上がりかけ

カウ久次どん。

ト　おとみへこなしありて

おとみが事も頼みます……おとみ、必ずわれも見捨てられるな……随分ともに無事で暮らしやれ……おらアこれから名乗つて出らア。

ト立ちかゝるけ。

後の回向を頼んだぜ。

久次　よく名乗つて出る氣になつた。いゝ覺悟だ、感心したが、餘人の内ならいざ知らず、おれが所へ來るからは……まさかこの儘かへされねえ。せめて今夜は寛りと、爰に足を延ばして寢て、又その上でどうせうと、篤り相談のしやうもあらう……コレおとみ、手前も以前の亭主ぢやねえか。何とか傍から口を利いて、與三が心を落つかせろよ。

とみ　アレ、あの通り久次さんの親切を、無足にせうより寛りと、今夜はこゝに心を休め、落ついて居てもよいではないかね……なに氣遣ひがあるものかな。

與三　二人の言葉は嬉しいが……他人の内なら格別よ、以前譯あるおとみがゐる久次ゆゑ、どうで名乗つて出る身體、こつちの身分は厭はねえが、後の難儀をかけるのも。

久次　イヤ、その心遣ひは尤だ。しかし、おれもこの近所に相應に、心易くしておく者もある事だ。滅多にこゝへ踏ん込ませるやうな事はしねえワ。

とみ　マア、それだから落ついて、緩りしてもいゝぢやないかな。

ト與三郎もこなしありて

與三　成る程、二人がそれ程いつてくれるを、この儘に振りもぎつても行かれねえ……この世の名殘りだ。せめての事、今夜は緩り世話にならう。

久次　それがいゝ〳〵。

とみ　マア、煙草でもお上がりな。

久次　何か味いものでも拵らへろよ。

與三　ナニ、構ひなさんな、かうして話すのが何よりだ。

トこの内、茶を汲み、煙草盆を出す事などよろしくあつて、久次、與三郎の疵へこなしあつて

久次　成る程、おぬしが體の疵は……おれが體よりは又豪氣だ……どうでも寒さ暑さには。

與三　滿足な體と違ひ、疵にはどうでも惱むのよ……イヤ、疵と云やア脛に疵を持てば笹原とやら譬があるが、今こゝへ來かゝる時、どいつか後をつけて來ると思つ

て、早足に急いだはづみ、手拭を落したから、あすこの障子が目についいて。

ト障子へこなしあつて

思はず入つた手拭屋は、島で馴染の觀音久次。

久次　それも眞面目になりたての、堅氣ではじく十呂盤染。

與三　こつちは人目を竊覗き、見かけた家のかみさんは。

久次　こなたが以前の女房のおとみ……思ひがけなく今はしも。

とみ　その濃淺黃重夫……義理と情の半染も

與三　くめば一河の水淺黃、流れわたつて三尺が

とみ　不思議な緣で話し合ふ

久次　どうか芝居に

三人　ありさうだなう。

ト三人思ひ入れ。時の鐘。久次、こなしありて

久次　時に、與三郎が思ひがけなく來たからは、どうかと思ふが、何よりの御馳走といふのは、この間、さる旦那の所から、熱海の溫泉を樽で貰つたから、据風呂を拵へてある……そこはこの邊の氣散じよ。後の廂下の地面が廣いワ……コレ、鐵砲の中へ少し炭をぶち込むと、ぢきに沸くワ……コレおとみ、與三郎どんに湯を使はせて、何ぞ口に合ふものを拵らへて饗應すがいゝ。おらアちよつと今の內、しかけた用を片づけて來るから。

ト立ちかける。

とみ　今からお前、どつちの方へ。

久次　ナニ、遠くではねえ、近所までよ。

與三　オイ〳〵久次どん……おれを一人爰に置いて、後はおとみとたゞ二人……それぢやアおかしな鹽梅だ、マア、お前が內に居てくれねえぢやアおれもかうして居られめえではねえか……カウおとみ、イヤおとみさん……御亭主をとめねえな。

とみ　お前マア、今夜に限つた事ではあるまいに、マア、內にお出でなね。

與三　おらアそれでは直ぐに行くよ。

ト立ちかける。

久次　コレサ、お前も野暮を云ふものだ。おとみは前の女房ぢやねえか。

與三　それだから稈が惡いわな……今はこなたが亭主ではねえか。

久次　サア、その以前の女房の所へ、以前の亭主が來たか

ら、今のおれが乙に通りものがつて、餘所へ行くといふ譯ではねえ……おらア實は用がある……外の者ではあるめえし、おれに何が遠慮があるものか。

とみ　あんなに云ふから、マアいゝわな。

與三　そいつは、黑梅式が惡いなア。

トもじ〳〵してゐる。

久次　しかし、湯を使ふなら使はせて、早く床を取つて寐かすがいゝ。

ト考へ

とは云へ、おれも取付世帶だから。夜着の都合が惡い。行きがけに、さの甚の内へいひつけて、綺麗な薄團を二枚ばかり、爰へよこすワ。

とみ　さうしておくれ。お前、それぢや、屆けておくれよ。

久次　よし〳〵、云ひつけるワ。

與三　とんだものが尋ねて來て、厄介をかけるなア。

とみ　なんのお前、遠慮はないよ。

與三　それぢやアどうでも久次さん、お前出かけるかえ。

久次　今夜、行かねえとならねえ譯だ。

ト立ち戻り、おとみへこなしありて

カウおとみ、もし今夜おそくなると、一人でぽつぽつ歸られねえから、さうしたら夜明方に、おれが歸る……その氣でゐやれ。早く戸締りをして、ゆつくりと寐かすがいゝ。おれが歸らねえその中に、與三郎どん……餘所へ行つてくちやア恨みだよ。

與三　有り難いその親切、言葉に甘へて世話になる。とは云へ、長らくかうしては。

とみ　なるたけ早く、戻つてお出でよ。

久次　承知よ。

トこの内、おとみ、ぶら提灯へ燈火をつける事。履物出す事よろしくありて

そんなら與三どん。

與三　久次どん。

久次　留守を隨分。

トこの時、以前の袱紗包の香爐を落す。

與と　ヤ。

ト兩人こなし。おとみ、手をかけるを、久次手早く懐中して

久次　ゆつくりと話しなせえ。

ト唄になり、久次、門口をぴつしやり。與三郎、おと

み思ひ入れ。久次、橋がゝりへ入る。後風の音。時の鐘。與三郎、こなしあつて

とみ　今、行きがけに取り落す

與三　袱紗に包んだ重みの代物。

とみ　お前の望みの

與三　どうか形も。

ト思ひ入れ。

とみ　モシ。

ト囁く。與三郎、こなし。

與三　そんならあれを……ムウ。

ト思ひ入れ。

とみ　話は奥で。

與三　おとみ、來やれな、

ト唄になり、時の鐘。與三郎、おとみ、こなしありて、奥へ入る。後、合ひ方、彈流し、時の鐘、浪の音になり、門口を屋臺下手へよせて、件の腰障子の屋體へ、建仁寺垣、建てつゞきし體にて半廻し。

本舞臺、右の家の横手の道具になる。すべて三方廻しの誂らへ。

トこゝに以前の海松杭の松五郎、尻端折にて立身、同じく以前の長九郎、これも頬被り、尻端折に立ちかゝり

長九　兼てお前が頼みだから、こつちも右と左の手へ、金をせしめる鍵まうけ。

ト以前の財布を出し

お前が久次に貸しなすつた、コレ、あの金もまだこゝに。

松五　それぢやア、金はこなたの手元に、まだ餘所外へ渡さぬのか……ムウ。

トこなしありて

その大金の商賣を、させてやらうぼつかりに、こつちもおぬしを合槌に

長九　その合槌を頼まれたが、先刻のはずみにかの品は……

……お前、首尾よくやらかしたかえ。

松五　その段取りは極上々、誠の物は、とつくにおれが。

ト懐へ思ひ入れ。

長九　しかし、先刻の代物は、贋せと知つて五十兩、どういふ譯で流したのだ。

松五　知れた事……中々甘口な挺では、迂濶に行かぬあの

久次、うまく欺したその上で……おれが金をば貸しつけても、中々明日の朝までには。

長九　お前の方へ五十兩、わたしの跡金が五十兩、どうして百兩出來るものか。

松五　そこを附け込んであのおとみを、おれが方へ引き上げる、手段の壺へすつかりはまつた……その上、確かに今内へ、旅姿で來たやつは、確かにあいつが與三郎。

長九　與三郎は、元はと云へばわたしの主人の息子だが……今は方々配符が廻り。

松五　確かにきやつなら島破り、こいつも目明しへ訴人すれば、一廉元手にありつく仕事、コレ。

ト長九郎へ囁く事。

長九　そんなら、わたしは後へ殘り、内の様子を嗅ぎつけて、様子によつたら明日の手管に……さうしてお前は、これからどこへ。

松五　首尾よくやつたこの品を。

ト懐中へこなしあつて

今夜の中に、かの人へ手渡して、おれも昔の身の上に、又なり出づる手段が肝心……これから直ぐに川崎まで。

長九　そんなら、わたしは後で何かの。

松五　首尾よく頼むぞ。

長九　大呑み込みサ。

松五　コレ。

ト囁く。兩人、よろしくこなしあつて、長九郎は上の方へ、松五郎は、この時懐中より袱紗包みの香爐を出し、思ひ入れして、橋がゝりへ入る。浪の音、時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、正面より少し下へよせて、平舞臺、九尺餘の折り廻し世話家體、眞中に暖簾口、下手へ折り廻し、壁の下通り羽目板、この所に勝手道具、棚、小どりまはし土竈、暖簾の上に佛壇、これより上に九尺の障子家體開閉、この内、茶壁きれいに、下手へ撥釣瓶の車井戸、この後、生垣、いつもの所へ誂らへのまはし戸、すべて久次の内、奥の體、ここに好みの行燈ともし、蝶足の膳へ、丼、肴の道具、外に小さき廣蓋へ猪口、燗徳利など、誂らへの通りに置き並べ、土瓶かゝりし箱火鉢をおいて、爰に與三郎、おとみ兩人、行燈の側にゐて、酒を飲む體、誂らへの合ひ方、風の音、時の鐘にて、道具とま

ろ。
ト石の合ひ方にて
與三　それぢやァなにか、あの久次がおぬしにひし隱しに、百兩といふ代物を
とみ　アイサ、わたしに譯も話さずに、今云つた……道具屋から買ひ請ける約束も、金に手づかへ、海松杭の松五郎の手から、半金の五十兩をば借りうけて。
ト思ひ入れ。
與三　それ程にまでして欲しがる代物、先刻落したその時に、見かけた形はどうやらおれが。
とみ　わたしもその時、眼づいたが。
與三　どうぞ正脈を聞きてえものだ。
ト時の鐘、風の音、やはり右の合ひ方になり、人音するゆゑ、兩人こなし。この時橋かかりより甚八、傘の印つきし貸蒲團を二枚、肩に引かけ、作野甚と記したぶら提灯をともし、下駄がけにて出て、門口より入りながら
甚八　おとみさん、今夜もお內ださうだが、先刻久次さんがお寄んなすつて、綺麗な蒲團を二枚、よこしてくれろと仰つしやつたが、つい人がねえので、おそくなりました。
とみ　お前が持つてお出でかえ。お氣の毒な。
與三　聞いたやうな聲だな。
トこの內、おとみ立つて、甚八も內へ入り、蒲團をかたへに置く事。
とみ　聞いた筈だわな。
トこの內に、甚八も立つて內へ入り、與三郎を見て、合點の行かぬ思ひ入れ。與三郎は甚八を見てにつこり
與三　ムウ、違えねえ……甚八だ、オイ相生さん……工面をよくして片手間が損料屋か、うまくするな。
ト甚八、與三郎を見て
甚八　エ、……ありや、どこのお人だえ。
とみ　これいなア。
ト囁く。甚八、びつくりふるへ出し
甚八　エ、、、……そんなら、あの時。
ト傍へより見て
違ひねえ、若旦那與三郎さん。
ト云ひかけ、はつと口を押へ、思ひ入れあつて
モシ、とんだ譯でござりましたねえ。
トよろしく思ひ入れ。こわ〴〵してゐる事。

與三　わつとは譯も聞いたらう……見やれ、この態を。

　ト甚八、ぶる／＼して

甚八　誠にお珍らしい。つい、お見外れ申しました。

とみ　マア、落ち付いてお出でなねえ。

甚八　落ち付かうと思つても、わたしも何だか氣になる事がありますから、怖いやうで氣味が惡くつて、それで體がぶる／＼しやす。

とみ　一つお上がりな。

　と茶碗をさす。甚八、慄へながら

甚八　ア、、、有り難う。

　ト茶碗をうける。

與三　おれが噂を聞いたのだらう。何も怖い事はねえわえ。

　トこの内、大きな茶碗で一つ飲み

甚八　少し心が落ちつきました……イヤ、怖いといへば、恐かない目に逢ひました。

與三　どんな目に逢つたのだ。

とみ　早く話してお聞かせな。

甚八　そりやア外でもござりません。さうして、こりや。

　ト與三郎へこなしあつて

お前さんにも、話さねえければならねえ事サ。

　ト引かけし提灯へ心づき、ちよつと立つて消し

その怖いといふのは、四五日後、本宿のさる店の二階へ、わたしが馴染の屋敷の客人お勤めて、仕舞つて戻りがけ、表座敷の亂暴な、とつぴきつぴの大一座、わたしを連れて來いといふお客があるといふ事ゆゑ、何でも有り難い儲け口と、直ぐに顏を出した所が、お聞きなせえ……車座に並んだ中、六七人は見た顏だと、考へ出してびつくりサ……源左衞門さんの乾分の衆サ。もしこの内に、赤間の親方が居なすつたら、どんな目に逢ふ事かと、ぶる／＼慄へる盃を、一つうけてゐる中に、あの黒砂の次郎藏さんが、喰ひしめての不問語、お前さんの話しが出て……モシ、お聞きなせえ。

　ト與三郎へ向ひ

あなたへいろんな罪をきせて、遠い所へ憂目を見せたも、やつぱり源左衞門さんの軍略だと、わたしはきつぱり聞きましたよ。

　ト與三郎、おとみ、顏見合せ、思ひ入れ。

とみ　そんなら、ぬしを罪に落し、たうとう島へ逐つたも、矢張り根ざしはあの人が。

ト思ひ入れ。

與三　海老名へ、久しく入り込む風聞、成る程、あいつが仕業であらうよ。

ト思ひ入れ。

甚八　わたしがかういふと、どうかお前さんの氣を立たせるやうでございますが、あんまり惨い仕方と思ふから、つい申しました……これさへ云へば用はない……モシ、油斷のならねえ事を聞きましたよ。どうぞ早くお前さん、人の氣のつかねえ所へお出でなされいよ。

與三　案じるなよ。隨分達者で暮すがいゝぜ。

トこの内、そわ〳〵立ちかけ

甚八　しかしマア、お二人が、この譯の初りより、わたしがひよんな事をして、たうとうこんな譯になり、又思はずも今こゝで……モシおとみさん……若旦那。

ト小聲になり、こなしありて

今夜も矢張り、御亭主が留守でございますぜ……それでも、今日のは久次さんが、云ひつけなされた蒲團だから、氣遣ひはなけれども……お二人さんの前で云ふぢやねえが、この與三郎さんが若旦那の時分、木更津の一件も、不圖した事からお二人が身の上、その時わたしも關り合ひで、すんでの事ぶち殺される所を、やうやう助かつて、今ぢやアかうなつて居ますが、もう〳〵思ひ出すとゾッとして、氣色が惡くなりますが、お前さん方も、あれに懲りて氣をおつけなせえ。イヤ、とんだ事でございましたねえ。

ト思ひ入れ。

與三　コレ、無駄を云はずと、早く行きねえ。

とみ　モシ……相生さん。

ト與三郎へこなしありて

必らず外へ、この事を。

ト手で仕方して、沙汰なしだと思ひ入れ。

甚八　どういたしてわたしが。

ト兩人へこなしありて

お早くお休みなされましよ。

ト風の音、合ひ方、時の鐘にて、そわ〳〵して、下手へ入る。

與三　いつでもそゝくさしてゐるが、頼母しい男だわえ。

とみ　サア、あんな話を聞くと、何から云はうと氣がどきまぎして、つい話も前後にて……あの、いつぞや鎌倉の野阿が原で、人手にかゝつて死になすつた、お前の母

さん、殺した人はあれぎりに、その手掛りも知れないかネ。

與三　サア、おれも大方からだらうと心に浮んだが、それだといつて、かう／＼といふ、確乎した證據もなく……その中に縛られ、おぬしとも別れ／＼、たうとう島に行つてからは、どう思つても仕方なく……しかし、島を破つて來る道で、不思議に手に入るこの手紙。

ト夢ざめに手に入りし密書を、叺煙草入より出して見せる。おとみ、取つて讀む事。

先の宛名には、海老名の軍次、送つたやつの名を隠すはどうで胡散と思ふにつき、あの香爐へ心をかくるは、山鹿毛平馬といふ武士……どうでも、あいつが敵の手がゝり。

ト思ひ入れ。

とみ　これは、鶴の香爐を隠して、江戸へ身を忍び、この秋まで鎌倉へ、上つた上で香爐を、海老名軍次へ渡さうと、約束のこの手紙。

ト文字を見て、こなしありて

さうして、この筆は覺えのある……コリヤ、わたしが以前世話になつた、源左衛門どのゝこの手蹟。

ト思ひ入れ、

與三　ムウ、そんならこれは源左衛門か……今相生の話と云ひ　子分を連れて鎌倉へ、もう上つたに違はねえな。

ト思ひ入れ。おとみもこなしありて

とみ　お前の生の母さんを、殺した敵も。

ト思ひ入れ。

與三　コレ、まだその上に、この江戸へ、本海道では人目に立つと、中仙道へ廻り路の、風の便りに聞いたには。

ト右の手紙にこなしありて

この香爐の紛失より、惡人めらが讒訴にて、血筋の兄の左近どのは切腹し、實の親父の隼人さまは、屋敷追放、穂積の家は絶え果てたと、來る道すがらに聞きとる風聞。

とみ　そんなら實の兄さんも、この世を去り、血筋の父御は浪人の……どこにどうしてござんすやら。

與三　めぐり逢ふとも、お顔は知らず、いかなる宿世の

兩人　惡縁ぢやなア。

ト思入、抱き合ひ、愁ひの思ひ入れ、涙おとす。時の鐘、風の音、兩人、氣をかへ

鐘三　ア、、何の事だ。

ト氣をかへて

コレ、夜が短いワ、早く寐かしてくれないか。

ト時の鐘。これを、床の淨瑠璃になる。

〽又つぐる鐘、更くる夜の、早苗にそよ〳〵涼風や、いとに涙の梅の雨、妻がさねして蒲團さへ、十編の菅簑、まかせぬ義理に、隔つふしども障子ごし。

ト右の内に、おとみ、與三郎の姿を見て、悄々したる愁ひにてこなし、佛檀の下の押入れより、好みの久次の模樣つきし袷、又は單衣でも、後の仕込みに着かへさすこと。すべて文句の内に、こなしよろしく、與三郎、着てゐる衣服を脫いで袖だゝみ、脚絆を取れといふ仕方、與三郎、このまゝに居ろといふこなし、嘿く事などよろしく、この内に、別の行燈を持ち出し、障子の内の枕元へ、莨盆など運ぶ事よろしく、この内に與三郎、おとみ、兩人こなしあつて、床の合ひ方。

とみ　モシ、愚痴なやうだが、名乘つて出ずに、どこでか一遍、身をかくし、どうかしやうはあるまいかね。

ト寄りかゝり、思ひ入れ。與三郎、こなしあつて

與三　エヽ、又しても未練なこと。兇狀うけて、死ぬ時に死なねえとな……死ぬにも勝る身の恥を……たとへおぬしも知つてゐやうが。

とみ　とは云ふものゝ、どうかこのまゝ。

ト思ひ入れ。與三郎、おとみを突きのけ

與三　ドレ、一寐入りやつつけやうか。

トおとみ、じつとさし俯向く。

〽蒲團かむりて臥にける。

ト與三郎、枕を引きよせ、蒲團をかぶり寢る事、時の鐘、床と下座の合ひ方よろしくあしらひ、風の音、おとみ、こなしありて、隔ての障子しめる。正面の障子も、これにて閉める事。内に行燈の灯火さす誂らへなり。

〽日頃の疲れわれ知らず、結ぶ假寐の夢の間に、過ぎ來し方を思ひやり、おとみは一人寐もやらず。

トおとみ、舞臺の方へ、以前の前の道具の行燈をおきて、一間の内の樣子を窺ふ思ひ入れ。下座の合ひ方、よろしく、時の鐘のあしらひありて

とみ　思ひまはせば、わたしほど不幸な者はない。邪見な他人の手に育ち、藝者勤めや人の世話、その浮沈み幾度か、木更津にゐるその中に、この與三さんに思れた、心と心が行き合ふて、その惡緣が身の錆と、命の恩ある血筋の兄も、緣もいつしか絶え果てゝ、一生連れ添ふと思

ふその人は、この身すがらがなれの果、義理ある今の夫
へも、引くに引かれぬ二張の弓、まゝにならぬが浮世と
云へど……あんまりしがない身の上だなう。

ト この時、久次、暖簾口より出て

久次 おとみ、まだ手前寐ねえのか。
とみ オヤ、お前お歸りかえ。
久次 相手のねえ獨言、熱病や狂氣ぢやあるめえし、夜更
さふけに何の事だ。
とみ サア、それはな。
久次 ア、解つた。先の亭主の顏を見て、手前は性根が狂
つたな。
とみ よしておくれな、とんだ甚助だね。
久次 そんなら、わりやア、未練はねえか。
とみ アイ、そんな人ぢやアありませんよ。
久次 よし、その性根に違ひなくば、只一思ひにやらかし
てしまへ。
とみ エ。
久次 今日とび込んだ與三郎、ありや、立派に名乘つて出
る男だと思つてゐるか。
とみ あの通り云ふからは、なんで間違ひあるものかな。
久次 それだからいけねえ。どうして／＼、大層な事を云
つたとて、高が商人の息子株、いくらすれてもお坊さん
だ。中々名乘つて出る根性骨があるものか。男同士の義
理張りで、親切らしく取り留めたが、お手が入りやア係
合ひ、よし、又逃がしてやつたとて、捕へられりやア、
やつぱり引き合ひ、殊に手前の以前の亭主、今日の前で
まごつかれちやア、怯けたやうだが寐覺が悪い。配符の
廻つた切られ與三、こつちの身請に訴人しやうか。
とみ そりやあんまり卑怯といふもの、一旦番うた言葉も
あり、それでは男と云はれますまい。
久次 お爲ごかしに云ひ曲げて、以前の亭主を回護ふ心か。
とみ なんのさうでは。
久次 但は、おれへの面晴に、わが手にかけて殺してしま
ふか。
とみ サア、それは。
久次 殺す事は出來ねえか。
とみ サア
兩人 サア／＼／＼。
久次 うぬはマア、引腰のねえ女だなア。

〽心ありげな一言に。

とみ　退引ならぬお前の頼み、女の愚痴な心から、責にかかるこの身體、どうなるものかな、仕方がねえわな。
久次　そんなら、わりやァ思案がついたか。
とみ　アイ、義理もへちまもあるものかな。
久次　丁度今が寐入り花。
とみ　しかし、女のか弱い腕で。
久次　ナニ、寐鳥も同然、おれも傍から。
とみ　そんならどうでも。
久次　行燈を持つて來い。
　トこれにて、土器の袖火を、よき所へ持つて來る。
〽謀し合せる心と心、善か惡かは胸の裡、隔ての障子の褄ならぬ、いざ白川の夜半の鐘、勝手馴れたる下流し、取り出す砥石出刃庖丁、砥立々々押し拭ひ、夜風に一室うば玉の、闇は文なし忍び足、さて足拔き足窺ふより。
　ト本釣り鐘、風の音、下手に臺付の砥石、手盥へ柄杓にて水を汲み、誂らへの出刃庖丁を出して、研ぐ事よろしくありて、押し拭ひ、おとみわざと行燈を吹き消し、暗がりになる思ひ入れ。
なぜ行燈をば。
　ト久次、さぐり／＼佛檀の引出しより藥包を出して懐中する。この時、正面の障子、ばらりと引き拔く。内に與三郎、手甲脚絆にて、蒲團にくるまつて、寢てゐる。着付は行燈へ引かけあるゆゑ、闇の模様になりおとみ、久次よろしくありて、久次は耳をよせて窺ふおとみ、是非なく殺さうといふこなし、尤おとみ、久次を切る心、双方よろしく小聲にて
コレ、おとみ／＼。
とみ　どこにお出でだえ。
久次　爰に居るよ。
とみ　そこにかえ。
〽聲をしるべに突き出す白刃
　トおとみ、久次の胸先へ出刃を突かける。
久次　おれだ。
とみ　危いことの。
〽口では云へど女のひ弱さ、總身に冷汗とつおいつ、久次はこゝぞと聲をすゑ、探り寄つたる暗紛れ、おとみは猶も一生懸命、隙を窺ふ背後より、ぐつと一かせ斬り下ぐれば、あつと一聲十顛八倒、音に驚く與三郎、むつくと起きて立ち上がり
　トおとみ、きつとなつて、久次を後袈裟に切りつける

この物音に與三郎、蒲團をはねのけ、きつと飛び起き

與三　コリヤ、おとみと云ひ合せ、おれを殺すな。

久次　ム、、殺す所か、訴人するワ。

とみ　殺しておくれ。

〽もうたまらじと、突かゝるを、突き退け斬りつけ爭ふはずみ、肪をかけて乳の下、ぐつと貫きたばしる血汐、痛手に屈せず驅け出るを、やらじと止むるも闇の闇、絶體絶命女の一心、呼吸をめどの滅多突き。

トこの中に、おとみ、久次をとめる心にて、是非なく所々へ手を負はせる事。與三郎、身をよけながら支へる事、すべて暗がりの模樣よろしく、文句の内にうごきありて、久次、よき程に、薄傷を諸々に負ふこと。

トゞ、おとみの手先を止めながら、出刃を持ち添へ

〽とめる出刃をわが腹へ、ぐつと突き立て深手の苦痛、

トそのまゝ久次、アツと苦しむ大聲、おとみ、與三郎思ひ入れある事、これにて一室にありし行燈へかけたる與三郎の着物、風の音して落ちる。これにて、皆々見合す事。

〽覆ひし衣おち、灯火に。

與三　ヤ、われとわが手に。

とみ　この重傷は。

兩人　ヤ、、、。

ト兩方より思ひ入れ。

〽苦しさ堪へ聲立てず。

ト久次、眞紅になり、起き直り

久次　コレ、靜かに〱。

與三　コレ久次、合點の行かぬおぬしが詞。

とみ　どういふ心か。

兩人　その譯を。

ト思ひ入れ。

久次　成る程、云はにやア久次が身の上、解るめえ……コレおとみ……聞いてくれ與三郎……イヤ、穗積の血筋の若旦那、

與三　なんと。

ト竹笛になり、思ひ入れ。おとみもこなしあり

久次　今こそ明かす久次が身の上、お聞きなされて下さりませ……元は穗積のお家にて、三代恩義の御家來筋、十七歳の春の事、朋輩喧嘩で人を害め、すでに死罪と極まりしを、お前の親御の計ひにて、命を助り資金を貰ひ、それからは、町人暮し、なれど以前の氣が失せず、達引

事の剛氣の交際、送る月日も六年前、喧嘩出入で岬に流され、一心不亂に信心の、その御利益にわが土地へ、大赦にかゝつて歸るとそのまゝ、お禮參りの道すがら、お目にかゝつた親旦那、仔細を聞けば與さまには、人手にかかつて敢へない御最期、左近さまの御切腹、穗積のお家は斷絶と、聞いて恂り南無三寶、どうぞ恩義が送りたいと、思つて暮すその內に、ふと手に渡りし鶴の香爐、兎に角これを買ひ求め、再び殿へ差し上げて、お家の再興願はんと、半金才覺も無理な工面で、手に入る香爐、今日お泊りを幸ひに、旅宿にござる民部さまに、お渡し申せば大丈夫、先づ一方は片づいたが、サア、これからが金の工面と、急いで歸りの心の目算、先刻こなたが話しの中、涙金とて親御から貰つたとある五十兩、見たがこつちの因果のつくばひ、足にならうとわが家へ、急いで歸つて窺ふ內、初めて聞いたあなたの素性、恩義は深きお主の血筋、その御子息を家來の身で、なんぼ手詰めになればとて、どうして刃物が當てられう……われに殺せと云つたのは、僅かの中でも抱寐して、操を破つた云ひ譯に、この久次を殺せといふ心の謎の憎まれ口、性根の据つた女房が、その手をかりて命をば、棄つるもやつぱりお主の爲。

與三　おれも、こなたの身の上を、聞けば聞くほど不思議な奇縁、實父の血筋の恩義を思ひ、その寶をば手に入れて、穗積の家を立てんとは、おれが性根と心は一つ、よくも寶を手に入れて、親の實家へ屆けてくれた。この與三郎は今こゝで、隼人さまに逢ふにせよ、お顏は知らずこの態で、何で血筋の伜だと、名乘合がなるものか……よくしてくれた、屍ないが、おとみの手をかり命を捨て、忠義の道を立てるとは……おれを訴人と思ひ込み、云ひ譯心か知らねえが、それは知らねえ前の事、早まつた事しやつたなア。

〽早まりしこの有り樣と、嘆けば沈み俯すおとみも、やう〳〵に顏を上げ。

ト與三郎、思ひ入れ。おとみもこの內、愁ひの思ひ入れよろしくありて

とみ　さつきお前が戻つてから、日頃に變るお前の素振り、與三郎さんをひと思ひに殺せよと、手の裏かへすその一言、もしもわたしが殺さずば、自身にかうとの權幕ゆゑ、いかにもわたしが殺さうと、白刃を取れど義理ある與三さん……明日が日、名乘つて出るにせよ、たとへば縛め

捕られるとも、一時片時も命をば、永らへて置きたさも、情につれる女の情、さればと云つて今こゝで、夫と定めるその人の、なほなほ詞は背かれず、この身は一つ、亭主は二つ、絶對絶命、お前を殺し、その刃物にて死なれずば、亭主殺しと名乘り出て、罪をうけるは覺悟の前。

〽恨み涙ぞ道理なる。

與三　コレ、おとみの手を借り、命を捨て

とみ　忠義ぢやと云はしやんすは

與三　おぬしは心が顚倒したか。

とみ　どういふ心か久次どの。

〽歎きが中にうらうら問ふ二人、手負ひは居直りにつこと笑み。

ト久次、思ひ入れありて、起き直り

久次　サヽヽ……仔細といふはこの繪姿。

ト以前の繪姿を出し、こなしありて

與三郎どの、面體身體へ、數ヶ所の疵が配符の表、その手疵の痕を癒さんため。

ト思ひ入れ。

與三　何といふ。そんならおれがこの疵を。

とみ　癒さうために。

兩人　命をば。

久次　オヽ。

〽そのまゝいざつて落ち散りし、守袋と隱し持つ、藥包を取り出し。

サア、妙藥、覺えがござるか。

ト與三郎へ藥包、守袋をおとみへ渡すこと。與三郎、おとみ、藥包を見て

與三　オヽ、これは、いつぞや源氏店で、あの藤八めが持つてゐた、海松杭松から送りし手紙の中に、封じあつた毒藥。

とみ　何か用立つ事もやと、わたしが手箱のその中に、どう紛れてかあつたゆゑ、あの佛壇の下壇へ置いたを

ト思ひ入れ。この内に與三郎、添書をひろげ見て

與三　酒に合せて飲む時は、直ちに人の命を斷つ、南蠻秘法の毒藥ながら、辰の年月日揃ひたる、男の血汐に藥を合せ用ゆる時には、年を經しいかなる金瘡古疵も、忽ち癒ると記したは……世に稀なる藥の効驗。

ト思ひ入れ。この時、おとみ、久次の守袋の中より、色々の臍の緒書を出して見る事ありて

とみ　承安二年辰年の彌生の産れ、年月日時揃ひしと、委し

く記した丸の緒書。

ト與三郎へ見せる事ありて

與三　ムウ……そんなら久次は、この藥に

とみ　合す年度の。

兩人　生れであつたか……ヤ、、、。

ト思ひ入れ。

久次　それゆゑにこの如く、おとみが手をかり左の乳の下。

ト手疵へ思ひ入れ。

とみ　お主を思ふその心……少しも早うその藥を。

與三　オヽ忝ない、久次が賜物。

久次　早く血汐を御用に立て。

〽それと手に絞り込む、苦痛は厭はぬ忠義の一心、瀧津瀬流す紅も、あはれと見やる兩人が、涙も共に染めぬらん。

トおとみ、この内、丼を持ち出る。與三郎、立ち寄りて、丼の中へ件の血を入れる事。兩人、介抱しながら久次よろしく思ひ入れありて、乳の下の血を絞る事よろしくありて、與三郎、おとみ見合せて、愁ひの思ひ入れ。文句一ぱいにある事よろしく、この内、風の音をあしらひ、床の合ひ方をあしらふ事。

とみ　早く用ひて

久次　われらが忠義を。

與三　オヽ、何にも云はぬ、忝ない。

〽悦び涙そのまゝに、ぐつと一息件の一藥。

ト飲む事。床の合ひ方よろしく、おとみ、久次、見やりてこなし。

〽うけし器のそのまゝに、殘る方なく服すれば、五體も惱乱與三郎、苦しみそこへ倒れ伏す。

トこの内、風の音あしらひ、文句の中に、與三郎飲み終ると、アツと苦しみ、この内に、運びし二枚折の蔭へ倒れ伏す。

とみ　アヽ、コレ申し與三郎さん……ヤ、、、今の藥を飲むと等しく、たつての苦しみ、この熱氣は。

久次　それこそ藥の正しく利き目。

〽さやあらんずと、躊躇ふ折柄、奥の物音に、思ひがけなく一室より、道具屋引き立て成川民部。

ト奥バタ／＼物音して、以前の長九郎を下緒でくゝり、猿轡をはめて、長九郎の襟へ以前の財布ぶらりと下がり着流し、大小にて、成川民部、褄高く引き上げし

　居る事。
とみ　ヤ、ついに見かけぬお武家さま。
久次　オヽ、あなたは成川民部さま。
　トおとみも、さてはとこなしありて、與三郎の身體へかこふ。
兩人　どうしてこれへ。
民部　先刻月の岬にて、計らずこの家の久次に出會ひ、請け取りし香爐を……隼人さまの浪宅へ持參せしに、尋ぬる仔細あるゆゑに、とつて返してこの家の内へ參りかゝつてかしこより……與三郎と申すのは、誠はわれ等が劍術の師と頼みし隼人どのゝ血筋の倅……忠義によつて觀音久次が命を捨てし事までも、逐一あれより聞き取つたり。
とみ　シテ、御尋ねのその譯は。
民部　先刻、われ等が受け取りし、眞鶴の香爐は、紛るゝ如く作れども、正眞ならぬ、コリヤ、コレ贋物。
　ト袱紗に包みし香爐を出す。
とみ　ナニ、その香爐が。
　ト久次、この内、摺り寄り見て、いろ〳〵思ひ入れ、探り見る事よろしく。

久次　贋物とな……ヤ、、、、。
　ト民部、こなしありて
民部　イヤ、その歎には及ばぬ事……あれに窺ふその内に、この家を窺ふこの町人、さてこそ仔細あらんずと、かしこに於て詮議すれば、具さに分りし仔細こそ、與三郎が爲にもつけの幸ひ……御身が忠義も立つといふもの。
久次　ナニ、スリヤ、わたしが忠義も立ち
とみ　與三郎どのゝ身のためとは。
民部　サア町人、その譯、一應これにて申せ。
　ト出かけに當し呼吸へ、活を入れる。長九郎、ムウと息吹きかへし
長九　イヤ〳〵、先刻いつたれば、もう云ふには及ばねえ。堪忍して下さい。お侍ひさま。
民部　申さずば、かうして云はせる。サア〳〵、これでもか〳〵。
　トこじあげる。
長九　アイタヽ、申します〳〵……いかにも、あの香爐は山鹿毛平馬といふ侍ひが、赤間源左衞門といふ强い人を語らつて、野陣が原で女を殺し、盜み物だといふ事は、

香爐を預つて後で聞き、氣味がわるさに久次どのへ賣りつけるわたしが心、所へ海松杭の松五郎といふ人が、金はこつちから廻しても商ひさせてやる。その代りにはかう〱しろと味さうな口振り、頼れて今日、催促に來た時に奪ひ合ふはづみに門口で、松五郎にすりかへさせ、誠の品は海松杭が、赤間源左衞門の方へ持つて行つた。これより外にいふ事はねえ、どうぞ助けて下さりませ。

民部　まだ、この外に、海松杭の用立てし金子を改め見る所一兩々々われらが主人、結城家の極印金、察する所先達つて、濱川に於て、飛脚を殺し、金子を奪ふ盜賊は、かの海松杭の松五郎、盜んだ金を貸付けて、正しく久次へ盜賊の、汚名をうけさせ、罪を遁れんかれが存心。

久次　心を碎く寶をすりかへ、その上、おれへ悪名つけん下心。

とみ　深い企みで

兩人　あつたよなア。

〽さらりとわかりしその樣子、いつか立ち聞く目明しども。

トこの時、組子二人つれ、以前の喜藏、窺ひゐて、この時。

喜藏　この家に忍ぶ與三郎、おとみは亭主を殺した科人、ソレ、引縛れ。

兩人　合點だ。

ト風の音はげしく

〽あはやと民部は身構ひ、駈け出る長九郎、引きすゑる。内に踏込む喜藏の組子。

ト喜藏はおとみへ立ちかゝる。長九郎、逃げんとするを、民部引きつける。組子、與三郎へかゝり、引き起す事。

〽藥のために總身しびれ、倒れ伏したる切られの與三、そのまゝ捕つたと引き起せば

ト風の音、ドロ〱のやうに、これへ早めし鳴り物あしらひ、立ち廻つて

〽祕藥の効驗、あら不思議や

トこの内、民部は、喜藏を引きつけ、一寸當てる。見得よく、與三郎は、かゝる兩人を投げ退け、きつと見得、おとみ、これを見合つて、よろしく、人々見得定る事。

與三　誠を盡した久次どの、勸めによつて、用ひし藥に五體惱亂。

ト皆々思ひ入れ。この時、立ちまはり皆々かゝる事、與三郎、これをあしらううちに

とみ　今まで顔にまざ〳〵と、その疵の痕、消え失せて

ト思ひ入れ、この内、民部、立ち廻りの中に、運ぶ繪姿取り上げ見て

民部　この繪姿に記せしは……うつて變りし面影の。

久次　さ程に變るも久次が願ひ、エヽ、有り難い〳〵。

ト久次には、はつきり見えぬ心いき。

與三　さてこそ薬の。

とみ　効験をこれで。

トこの内に、おとみ、鏡を出し、與三郎へ見せ

〽さし出したる鏡にて、見れば以前に變りし面影。

トこの内に與三郎、手甲、脚絆を去る事、殘らず疵の痕、癒える事。與三郎、皆々思ひ入れよろしく

與三　オヽ、こりや、顔ばかりかは、身體まで。

とみ　それも偏へに久次どのゝ。

民部　忠義の一心とゞきししるし。

與三　コレ、よく見てくれよ、この通りだ。

ト與三郎、久次へ立ちより、思ひ入れ。

〽顔さしつけて手負ひの傍、見やり〳〵、苦痛も忘れ

ト久次、身體の體もよく〳〵見て

久次　エヽ、有り難い〳〵、コレ見やれおとみ、忠義は立つた。

〽互に歡び感じ入り、しばし呆るゝばかりなり。

ト皆々、この内に捨せりふかぶせ、よろしく納まる事。與三郎。こなしありて

與三　これも久次が忠義ゆゑ、姿かはれば鎌倉へ、母の敵は源左衛門、平馬も正しくかしこへ同道。

とみ　誠の香氣とり返し、今の夫の恨みも共に、どうぞ晴らして下さんせ。

民部　さある時には穂積の家名、引き興すのも一つの孝道。

與三　それにて不義の汚名をはらし、その上名乗つて、この身の科を

民久　少しも早く。

ト民部、差添を、與三郎へ渡す事。與三郎、押し戴き、腰にさす事。この時に、喜藏かゝるを、民部あてる。與三郎にかゝる兩人を投げ退ける事よろしく、この内に、與三郎、旅形の拵らへする事。床のめりやす、文句の中へあしらひ、この内、よき程に、喜藏、立ちか

み思ひ入れ。久次、橋がゝりへ入る。後風の音。時の鐘。與三郎、こなしあつて

とみ　今、行きがけに取り落す袱紗に包んだ重みの代物。

與三　お前の望みの

とみ　どうか形も。

與三　ト思ひ入れ。

とみ　モシ。

ト囁く。與三郎、こなし。

與三　そんならあれを……ムウ。

ト思ひ入れ。

とみ　話は奥で。

與三　おとみ、來やれな、

ト唄になり、時の鐘。與三郎、おとみ、こなしありて、奥へ入る。後、合ひ方、彈流し、時の鐘、浪の音になり、門口を屋臺下手へよせて、件の腰障子の屋體へ、建仁寺垣、建てつゞきし體にて半廻し。本舞臺、右の家の横手の道具になる。すべて三方廻しの誂らへ。

トこゝに以前の海松杭の松五郎、尻端折にて立身、同じく以前の長九郎、これも頰被り、尻端折に立ちかゝり

長九　兼てお前が賴みだから、こつちも右と左の手へ、金をせしめる鍵まうけ。

ト以前の財布を出し

お前が久次に貸しなすつた、コレ、あの金もまだこゝに。

松五　それぢやア、金はこなたの手元に、まだ餘所外へ渡さぬのか……ムウ。

トこなしありて

その大金の商賣を、させてやらうばつかりに、こつちもおぬしを合槌に

長九　その合槌を賴まれたが、先刻のはずみにかの品は……お前、首尾よくやらかしたかえ。

松五　その段取りは極上々、誠の物は、とつくにおれが。

ト懐へ思ひ入れ。

長九　しかし、先刻の代物は、贋せと知つて五十兩、どういふ譯で流したのだ。

松五　知れた事……中々甘口な挺では、迂濶に行かぬあの

久次、うまく欺したその上で……おれが金をば貸しつけても、中々明日の朝までには。

長九　お前の方へ五十兩、わたしの跡金が五十兩、どうして百兩出來るものか。

松五　そこを附け込んであのおとみを、おれが方へ引き上げる、手段の壺へすつかりはまつた……その上、確かに今内へ、旅姿で來たやつは、慥かにあいつが與三郎。

長九　與三郎は、元はと云へばわたしの主人の息子だが……今は方々配符が廻り。

松五　確かにきやつなら島破り、こいつも目明しへ訴人すれば、一廉元手にありつく仕事、コレ。

ト長九郎へ囁く事。

長九　そんなら、わたしは後へ殘り、内の樣子を嗅ぎつけて、樣子によつたら明日の手筈に……さうしてお前は、これからどこへ。

松五　首尾よくやつたこの品を。

ト懷中へこなしあつて

今夜の中に、かの人へ手渡して、おれも昔の身の上に、又なり出づる手段が肝心……これから直ぐに川崎まで。

長九　そんなら、わたしは後で何かの。

松五　首尾よく頼むぞ。

長九　大呑み込みサ。

松五　コレ。

ト囁く。兩人、よろしくこなしあつて、長九郎は上の方へ、松五郎は、この時懷中より袱紗包みの香爐を出し、思ひ入れして、橋がゝりへ入る。浪の音、時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、正面より少し下へよせて、平舞臺、九尺餘の折り廻し世話家體、鼠壁、眞中に暖簾口、下手へ折り廻し、壁の下通り羽目板、この所に勝手道具、棚、小どりまはし土竈、暖簾の上に佛壇、これより上に九尺の障子家體開閉、この内、茶壁きれいに、下手へ撥釣瓶の車井戸、この後、生垣、いつもの所へ誂らへのまはし戸、すべて久次の内、奥の體、ここに好みの行燈ともし、蝶足の膳へ、丼、肴の道具、外に小さき廣蓋へ豬口、燗徳利など、誂らへの通りに置き並べ、土瓶かゝりし箱火鉢をおいて、爰に與三郎、おとみ兩人、行燈の側にゐて、酒を飲む體、誂らへの合ひ方、風の音、時の鐘にて、道具とま

ろ。

ト笛の合ひ方にて

與三　それぢやァなにか、あの久次がおぬしにひし隱しに、百兩といふ代物を

とみ　アイサ、わたしに譯も話さずに、今云つた……道具屋から買ひ請ける約束も、金に手づかへ、海松杭の松五郎の手から、半金の五十兩をば借りうけて。

ト思ひ入れ。

與三　それ程にまでして欲しがる代物、先刻落したその時に、見かけた形はどうやらおれが。

とみ　わたしもその時、眼づいたが。

與三　どうぞ正脈を聞きてえものだ。

ト時の鐘、風の音、やはり右の合ひ方になり、人音するゆゑ、兩人こなし。この時橋がかりより甚八、傘の印つきし貸蒲團を二枚、肩に引かけ、佐野甚と記したぶら提灯をともし、下駄がけにて出て、門口より入りながら

甚八　おとみさん、今夜もお內ださうだが、先刻久次さんがお寄んなすつて、綺麗な蒲團を二枚、よこしてくれろと仰つしやつたが、つい人がねえので、おそくなりました。

とみ　お前が持つてお出でかえ。お氣の毒な。

與三　聞いたやうな聲だな。

トこの內、おとみ立つて、甚八も內へ入り、蒲團をかたへに置く事。

とみ　聞いた筈だわな。

トこの內に、甚八も立つて內へ入り、與三郎を見て、合點の行かぬ思ひ入れ。與三郎は甚八を見てにつこり

與三　ムウ、違えねえ……甚八だ、オイ相生さん……工面をよくして片手間が損料屋か、うまくするな。

ト甚八、與三郎を見て

甚八　エ、……ありや、どこのお人だえ。

とみ　これいなア。

ト囁く。甚八、びつくりふるへ出し

甚八　エ、、、……そんなら、あの時。

ト傍へより見て

違ひねえ、若旦那與三郎さん。

ト云ひかけ、はつと口を押へ、思ひ入れあつて

モシ、とんだ譯でござりましたねえ。

トよろしく思ひ入れ。こわ〳〵してゐる事。

與三　ちつとは譯も聞いたらう……見やれ、この態を。
　ト甚八、ぶる／＼して
甚八　誠にお珍らしい。つい、お見外れ申しました。
とみ　マア、落ち付いてお出でなねえ。
甚八　落ち付かうと思つても、わたしも何だか氣になる事があリますから、怖いやうで氣味が惡くつて、それで體がぶる／＼しやす。
とみ　一つお上がりな。
　ト茶碗をさす。甚八、慄へながら
甚八　ア、、有り難う。
　ト茶碗をうける。
與三　おれが噂を聞いたのだらう。何も怖い事はねえわえ。
　トこの内、大きな茶碗で一つ飲み
甚八　少し心が落ちつきました……イヤ、怖いといへば、恐かない目に逢ひました。
與三　どんな目に逢つたのだ。
とみ　早く話してお聞かせな。
甚八　そりやァ外でもござりません。さうして、こりや。
　ト與三郎へこなしあつて
お前さんにも、話さねえければならねえ事サ。
　ト引かけし提灯へ心づき、ちよつと立つて消し
その怖いといふのは、四五日後、本宿のさる店の二階へ、わたしが馴染の屋敷の客人を勸めて、仕舞つて戻りがけ、表座敷の亂暴な、とつぴさつぴの大一座、わたしを連れて來いといふお客があるといふ事ゆゑ、何でも有り難い儲け口と、直ぐに顔を出した所が、お聞きなせえ……車座に並んだ中、六七人は見た顔だと、考へ出してびつくりサ……源左衞門さんの乾分の衆サ。もしこの内に、赤間の親方が居なすつたら、どんな目に逢ふ事かと、ぶる／＼慄へる盃を、一つうけてゐる中に、あの黒砂の次郎藏さんが、喰ひしめての不問語、お前さんの話しが出て……モシ、お聞きなせえ。
　ト與三郎へ向ひ
あなたへいろんな罪をきせて、遠い所へ憂目を見せたも、やつぱり源左衞門さんの軍略だと、わたしはきつぱり聞きましたよ。
　ト與三郎、おとみ、顔見合せ、思ひ入れ。
とみ　そんなら、ぬしを罪に落し、たうとう島へ遣つたも、矢張り根ざしはあの人が。

ト思ひ入れ。

與三　海老名へ、久しく入り込む風聞、成る程、あいつが仕業であらうよ。

ト思ひ入れ。

甚八　わたしがかういふと、どうかお前さんの氣を立たせるやうでござりますが、あんまり慘い仕方と思ふから、つい申しました……これさへ云へば用はない……モシ、油斷のならねえ事を聞きましたよ。どうぞ早くお前さん、人の氣のつかねえ所へお出でなされいよ。

與三　案じるなよ。隨分達者で暮すがいゝぜ。

トこの內、そわ〳〵立ちかけ

甚八　しかしマア、お二人が、この譯の初りより、わたしがひよんな事をして、たうとうこんな譯になり、又思はずも今こゝで……モシおとみさん……若旦那。

ト小聲になり、こなしありて

今夜も矢張り、御亭主が留守でござりますぜ……それでも、今日のは久次さんが、云ひつけなされた蒲團だから、氣遣ひはなけれども……お二人さんの前で云ふぢやねえが、この與三郎さんが若旦那の時分、木更津の一件も、不圖した事からお二人が身の上、その時わたしも關り合ひで、すんでの事ぶち殺される所を、やうやう助かつて、今ぢやアかうなつて居ますが、もう〳〵思ひ出すとゾツとして、氣色が惡くなりますが、お前さん方も、あれに懲りて氣をおつけなせえ。イヤ、とんだ事でござりましたねえ。

ト思ひ入れ。

與三　コレ、無駄を云はずと、早く行きねえ。

とみ　モシ……相生さん。

ト與三郎へこなしありて

必らず外へ、この事を。

ト手で仕方して、沙汰なしだと思ひ入れ。

甚八　どういたしてわたしが。

ト兩人へこなしありて

お早くお休みなされましよ。

ト風の音、合ひ方、時の鐘にて、そわ〳〵して、下手へ入る。

與三　いつでもそゝくさしてゐるが、賴母しい男だわえ。

とみ　サア、あんな話を聞くと、何から云はうと氣がどきまぎして、つい話も前後にて……あの、いつぞや鎌倉の野陣が原で、人手にかゝつて死になすつた、お前の母

さん、殺した人はあれぎりに、その手掛りも知れないかえ。

與三　サア、おれも大方からだらうと心に浮んだが、それだといつて、かう／＼といふ、確乎した證據もなく……その中に縛られ、お主とも別れ／＼、たうとう島に行つてからは、どう思つても仕方なく……しかし、島を破つて來る道で、不思議に手に入るこの手紙。

ト夢ざめに手に入りし密書を、叺煙草入より出して見せる。おとみ、取つて讀む事。

先の宛名には、海老名の軍次、逆つたやつの名を隱すはどうで胡散と思ふにつき、あの香爐へ心をかくるは、山鹿毛平馬といふ武士……どうでも、あいつが敵の手がゝり。

ト思ひ入れ。

とみ　これは、鶴の香爐を隱して、江戸へ身を忍び、この秋まで鎌倉へ、上つた上で香爐を、海老名軍次へ渡さうと、約束のこの手紙。

ト文字を見て、こなしありて

さうして、この筆は覺えのある……コリヤ、わたしが以前世話になつた、源左衛門どのゝこの手蹟。

ト思ひ入れ、

與三　ムウ、そんならこれは源左衛門か……今相生の話と云ひ　子分を連れて鎌倉へ、もう上つたに違はねえな。

ト思ひ入れ。おとみもこなしありて

とみ　お前の生の母さんを、殺した敵も。

ト思ひ入れ。

與三　コレ、まだその上に、この江戸へ、本海道では人目に立つと、中仙道へ廻り路の、風の便りに聞いたには。

ト右の手紙にこなしありて

この香爐の紛失より、惡人め等が讒訴にて、血筋の兄の左近どのは切腹し、實の親父の隼人さまは、屋敷追放、穗積の家は絶え果てたと、來る道すがらに聞きとる風聞。

とみ　そんなら實の兄さんも、この世を去り、血筋の父御は浪人の……どこにどうしてござんすやら。

與三　めぐり逢ふとも、お顏は知らず、いかなる宿世の

兩人　惡縁ぢやなア。

ト思入、抱き合ひ、愁ひの思ひ入れ、涙おとす。時の鐘、風の音、兩人、氣をかへ

鐘三　アヽ、何の事だ。

ト氣をかへて

コレ、夜が短いワ、早く寐かしてくれないか。
ト時の鐘。これを、床の淨瑠璃になる。
〽又つぐる鐘、更くる夜の、早苗にそよ〳〵涼風や、いとに涙の梅の雨、妻がさねして蒲團さへ、十編の菅菰、まかせぬ義理に、隔つふしども障子ごし。
ト右の内に、おとみ、與三郎の姿を見て、惜々したる愁ひにてこなし、佛檀の下の押入れより、好みの久次の模様つきし袷、又は單衣でも、後の仕込みに着かへさすこと。すべて文句の内に、こなしよろしく、與三郎、着てゐる衣服を脱いで袖だゝみ、脚絆を取れといふ仕方、與三郎、このまゝに居るといふこなし、囁く事などよろしく、この内に、別の行燈を持ち出し、障子の内の枕元へ、莨盆など運ぶ事よろしく、この内に與三郎、おとみ、兩人こなしあつて、床の合ひ方。
とみ　モシ、愚痴なやうだが、名乘つて出ずに、どこでか一遍、身をかくし、どうかしやうはあるまいかね。
ト寄りかゝり、思ひ入れ。與三郎、こなしあつて
與三　エヽ、又しても未練なこと。兇狀うけて、死ぬ時に死なねえとな……死ぬにも勝る身の恥を……たとへおぬしも知つてゐやうが。
とみ　とは云ふものゝ、どうかこのまゝ。
ト思ひ入れ。與三郎、おとみを突きのけ
與三　ドレ、一寐入りやつつけやうか。
トおとみ、じつとさし俯向く。
〽蒲團かむりて臥にける。
ト與三郎、枕を引きよせ、蒲團をかぶり寢る事、時の鐘、床と下座の合ひ方よろしくあしらひ、風の音、おとみ、こなしありて、隔ての障子しめる。正面の障子も、これにて閉める事。内に行燈の灯火さす謎らへなり。
〽日頃の疲れわれ知らず、結ぶ假寐の夢の間に、過ぎ來し方を思ひやり、おとみは一人寐もやらず。
トおとみ、無聊の方へ、以前の前の道具の行燈をおきて、一間の内の様子を窺ふ思ひ入れ。下座の合ひ方、よろしく、時の鐘のあしらひありて
とみ　思ひまはせば、わたしほど不幸な者はない。邪見な他人の手に育ち、藝者勤めや人の世話、その浮沈み幾度か、木更津にゐるその中に、この與三さんに思れた、心と心が行き合ふて、その惡縁が身の錆と、命の恩ある血筋の兄も、緣もいつしか絶え果てゝ、一生連れ添ふと思

ふその人は、この身すがらがなれの果、義理ある今の夫へも、引くに引かれぬ二張の弓、まゝにならぬが浮世と云へど……あんまりしがない身の上だなう。

トこの時、久次、暖簾口より出て

久次　おとみ、まだ手前寐ねえのか。

とみ　オヤ、お前お歸りかえ。

久次　相手のねえ獨言、熱病や狂氣ぢやあるめえし、夜更さふけに何の事だ。

とみ　サア、それはな。

久次　ア、解つた。先の亭主の顔を見て、手前は性根が狂つたな。

とみ　よしておくれな、とんだ甚助だね。

久次　そんなら、わりやア、未練はねえか。

とみ　アイ、そんな人ぢやアありませんよ。

久次　よし、その性根に違ひなくば、只一思ひにやらかしてしまへ。

とみ　エ。

久次　今日とび込んだ與三郎、ありや、立派に名乘つて出る男だと思つてゐるか。

とみ　あの通り云ふからは、なんで間違ひあるものかな。

久次　それだからいけねえ。どうして〳〵、大層な事を云つたとて、高が商人の息子株、いくらすれてもお坊さんだ。中々名乘つて出る根性骨があるものか。男同士の義理張りで、親切らしく取り留めたが、お手が入りやア係合ひ、よし、又逃がしてやつたとて、捕へられりやア、やつぱり引き合ひ、殊に手前の以前の亭主、今日の前でまごつかれちやア、怯けたやうだが寐覺が惡い。配符の廻つた切られ與三、こつちの身請に訴人しやうか。

とみ　そりやあんまり卑怯といふもの、一旦番うた言葉もあり、それでは男と云はれますまい。

久次　お爲ごかしに云ひ曲げて、以前の亭主を回護ふ心か

とみ　なんのさうでは。

久次　但は、おれへの面晴に、わが手にかけて殺してしまふか。

とみ　サア、それは。

久次　殺す事は出來ねえか。

とみ　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

久次　うぬはマア、引腰のねえ女だたア。

〽心ありげな一言に。

とみ　退引ならぬお前の頼み、女の愚痴な心から、貰にかかるこの身體、どうなるものかな、仕方がねえわな。
久次　そんなら、わりやア思案がついたか。
とみ　アイ、義理もへちまもあるものかな。
久次　丁度今が寐入り花。
とみ　しかし、女のか弱い腕で。
久次　ナニ、寐島も同然、おれも傍から。
とみ　そんならどうでも。
久次　行燈を持つて來い。
　トこれにて、土器の紬火を、よき所へ持つて來る。
〽諜し合せる心と心、善か惡かは胸の裡、隔ての障子の神ならぬ、いざ白川の夜半の鐘、勝手馴れたる下流し、取り出す砥石出刃庖丁、研立々々押し拭ひ、夜風に一室うば玉の、闇は文なし忍び足、さて足拔き足窺ふより。
　ト本釣り鐘、風の音、下手に臺付の砥石、手盥へ柄杓にて水を汲み、誂らへの出刃庖丁を出して、研ぐ事よろしくありて、押し拭ひ、おとみわざと行燈を吹き消し、暗がりになる思ひ入れ。
なぜ行燈をば。
　ト久次、さぐり〳〵佛檀の引出しより藥包を出して懷中する。この時、正面の障子、ぱらりと引き拔く。内に與三郎、手甲脚絆にて、蒲團にくるまつて、寢てゐる。着付は行燈へ引かけあるゆゑ、闇の模樣になりおとみ、久次よろしくありて、久次は耳をよせて窺ふおとみ、是非なく殺さうといふこなし、尤おとみ、久次を切る心、双方よろしく小聲にて
コレ、おとみ〳〵。
とみ　どこにお出でだえ。
久次　爰に居るよ。
とみ　そこにかえ。
〽聲をしるべに突き出す白刃
　トおとみ、久次の胸先へ出刃を突かける。
久次　おれだ。
とみ　危いことの。
〽口では云へど女のひ弱さ、總身に冷汗とつおいつ、久次はこゝぞと胴をすゑ、探り寄つたる暗紛れ、おとみは猶も一生懸命、隙を窺ふ背後より、ぐつと一かせ斬り下ぐれば、あつと一聲七顛八倒、音に驚く與三郎、むつくと起きて立ち上がり
　トおとみ、きつとなつて、久次を後袈裟に切りつける

この物音に與三郎、蒲團をはねのけ、きつと飛び起き

與三　コリヤ、おとみと云ひ合せ、おれを殺すな。

久次　ム、、殺す所か、訴人するワ。

とみ　殺しておくれ。

〽もうたまらじと、突かゝるを、突き退け斬りつけ爭ふはずみ、肋をかけて乳の下、ぐつと貫きたばしる血汐、痛手に屈せず蹶け出るを、やらじと止むるも眞の闇、絶體絶命女の一心、呼吸をめどの滅多突き。

トこの中に、おとみ、久次をとめる心にて、是非なく所々へ手を負はせる事。與三郎、身をよけながら支へる事。すべて暗がりの模樣よろしく、文句の内にうごきありて、久次、よき程に、薄傷を諸々に負ふこと。トヾ、おとみの手先を止めながら、出刄を持ち添へ

〽とめる出刄をわが腹へ、ぐつと突き立て深手の苦痛、

トそのまゝ久次、アツと苦しむ大聲、おとみ、與三郎思ひ入れある事、これにて一室にありし行燈へかけたろ與三郎の着物、風の香して落ちる。これにて、皆々見合す事

〽覆ひし衣おち、灯火に。

與三　ヤ、われとわが手に。

とみ　この重傷は。

兩人　ヤ、、、。

ト兩方より思ひ入れ。

〽苦しさ堪へ聲立てず。

ト久次、糊紅になり、起き直り

久次　コレ、靜かに〳〵。

與三　コレ久次、合點の行かぬおぬしが詞。

とみ　どういふ心か。

兩人　その譯を。

ト思ひ入れ。

久次　成る程、云はにやア久次が身の上、解るめえ……コレおとみ……聞いてくれ與三郎……イヤ、穗積の血筋の若旦那。

與三　なんと。

ト竹笛になり、思ひ入れ。おとみもこなしあり

久次　今こそ明かす久次が身の上、お聞きなされて下さりませ……元は穗積のお家にて、三代恩義の御家來筋、十七歳の春の事、下輩喧嘩で人を害め、すでに死罪と極まりしを、お前の親御の計ひにて、命を助り資金を貰ひ、それからは、町人暮し、なれど以前の氣が失せず、達引

事の剛氣の交際、送る月日も六年前、喧嘩出入で岬に流され、一心不亂に信心の、その御利益にわが土地へ、大赦にかゝつて歸るとそのまゝ、お禮參りの道すがら、お目にかゝつた親旦那、仔細を聞けば奥さまには、人手にかかつて敢へない御最期、左近さまの御切腹、穗積のお家は斷絶と、聞いて恟り南無三寶、どうぞ恩義が送りたいと、思つて暮すその內に、ふと手に渡りし鶴の香爐、兎に角これを買ひ求め、再び殿へ差し上げて、お家の再興願はんと、半金才覺も無理な工面で、手に入る香爐、今日お泊りを幸ひに、旅宿にござる民部さまに、お渡し申せば大丈夫、先づ一方は片づいたが、サア、これからが金の工面と、急いで歸りの心の目算、先刻こなたが話しの中、涙金とて親御から貰つたとある五十兩、見たがこつちの因果のつくばひ、足にならうとわが家へ、急いで歸つて窺ふ內、初めて聞いたあなたの素性、恩義は深きお主の血筋、その御子息を家來の身で、なんぼ手詰めになればとて、どうして刄物が當てられう……われに殺せと云つたのは、僅かの中でも抱寐して、操を破つた云ひ譯に、この久次を殺せといふ心の謎の憎まれ口、性根の据つた女房が、その手をかりて命をば、棄つるもやつぱりお主の爲。

與三　おれも、こなたの身の上を、聞けば聞くほど不思議な奇緣、實父の血筋の恩義を思ひ、その寶をば手に入れて、穗積の家を立てんとは、おれが性根と心は一つ、よくも寶を手に入れて、親の實家へ屆けてくれた。この與三郎は今こゝで、隼人さまに逢ふにせよ、お顏は知らずこの態で、何で血筋の悴だと、名乘合がなるものか……よくしてくれた、屆ないが、おとみの手をかり命を捨て、忠義の道を立てるとは……おれを訴人と思ひ込み、云ひ譯心か知らねえが、それは知らねえ前の事、早まつた事しやつたなア。

〽早まりしこの有り樣と、聞けば沈み俯すおとみも、やう〱に顏を上げ。

ト與三郎、思ひ入れ。おとみもこの內、愁ひの思ひ入れよろしくありて

とみ　さつきお前が戻つてから、日頃に變るお前の素振り、與三郎さんをひと思ひに殺せよと、手の裏かへすその一言、もしもわたしが殺さずば、自身にかうとの料簡ゆゑ、いかにもわたしが殺さうと、白刄を取れど義理ある與三さん……明日が日、名乘つて出るにせよ、たとへば捕め

捕られるとも、一時片時も命をば、永らへて置きたさも、情につれる女の情。されば云つて今こゝで、夫と定めるその人の、なほなほ詞は背かれず、この身は一つ、亭主は二つ、絶對絶命、お前を殺し、その刃物にて死なれずば、亭主殺しと名乘り出て、罪をうけるは覺悟の前。

〽恨み涙ぞ道理なる。

與三　コレ、おとみの手を借り、命を捨て

とみ　忠義ぢやと云はしやんすは

與三　おぬしは心が顛倒したか。

とみ　どういふ心か久次どの。

〽歎きが中にうらゝ問ふ二人、手負ひは居直りにつこと笑み。

ト久次、思ひ入れありて、起き直り

久次　サヽヽ……仔細といふはこの繪姿。

ト以前の繪姿を出し、こなしありて

與三郎どの、面體身體へ、數ヶ所の疵が配符の表、その平疵の痕を癒さんため。

ト思ひ入れ。

與三　何といふ。そんならおれがこの疵を。

とみ　癒さうために。

兩人　命をば。

久次　オヽ。

〽そのまゝいざつて落ち散りし、守袋と隱し持つ、藥包を取り出し。

サア、妙藥、覺えがござるか。

ト與三郎へ藥包、守袋をおとみへ渡すこと。與三郎、おとみ、藥包を見て

與三　オヽ、これは、いつぞや源氏店で、あの藤八めが持つてゐた、海松杭松から送りし手紙の中に、封じあつた毒藥。

とみ　何か用立つ事もやと、わたしが手箱のその中に、どう紛れてかあつたゆゑ、あの佛壇の下壇へ置いたを

ト思ひ入れ。この内に與三郎、添書をひろげ見て

與三　酒に合せて飮む時は、直ちに人の命を斷つ、南蠻秘法の毒藥ながら、辰の年月日揃ひたる、男の血汐に藥を合せ用ゆる時には、年を經しいかなる金瘡古疵も、忽ち癒ると記したは……世に稀なる藥の効驗。

ト思ひ入れ。この時、おとみ、久次の守袋の中より、色々の臍の緒書を出して見る事ありて

とみ　承安二年辰年の彌生の產、年月日時揃ひしと、委し

く記した拵の緒書。

ト與三郎へ見せる事ありて

與三　ムウ……そんなら久次は、この藥に

とみ　合す年度の。

兩人　生れであつたか……ヤ、、、。

ト思ひ入れ。

久次　それゆゑにこの如く、おとみが手をかり左の乳の下。

ト手疵へ思ひ入れ。

とみ　お主を思ふその心……少しも早うその藥を。

與三　オヽ忝ない、久次が賜物。

久次　早く血汐を御用に立て。

〽それと器に絞り込む、苦痛は厭はぬ忠義の一心、瀧津瀬流す紅も、あはれと見やる兩人が、涙も共に染めぬらん。

トおとみ、この內、丼を持ち出る。與三郎、立ち寄りて、丼の中へ件の血を入れる事。兩人、介抱しながら久次よろしく思ひ入れありて、乳の下の血を絞る事よろしくありて、與三郎、おとみ見合せて、愁ひの思ひ入れ。文句一ぱいにある事よろしく、この內、風の音をあしらひ、床の合ひ方をあしらふ事。

とみ　早く用ひて

久次　われらが忠義を。

與三　オヽ何にも云はぬ、忝ない。

〽悦び涙そのまゝに、ぐつと一息件の一藥。

ト飲む事。床の合ひ方よろしく、おとみ、久次、見やりてこなし。

〽うけし器のそのまゝに、殘る方なく服すれば、五體も惱亂與三郎、苦しみそこへ倒れ伏す。

トこの內、風の音あしらひ、文句の中に、與三郎飲み終ると、アツと苦しみ、この內に、運びし二枚折の屛へ倒れ伏す。

とみ　アヽコレ申し與三郎さん……ヤ、、、今の藥を飲むと等しく、たつての苦しみ、この熱氣は。

久次　それこそ藥の正しく利き目。

〽さやあらんずと、躊躇ふ折柄、奧の物音に、思ひがけなく一室より、道具屋引き立て成川民部。

ト奧バタ／＼物音して、以前の成川民部、裾高く引き上げし着流し、大小にて、以前の長九郎を下緒でくゝり、猿轡をはめて、長九郎の襟へ以前の財布ぶらりと下がり

居る事。
とみ　ヤ、ついに見かけぬお武家さま。
久次　オヽ、あなたは成川民部さま。
　トおとみも、さてはとこなしありて、與三郎の身體へかこふ。
兩人　どうしてこれへ。
民部　先刻月の岬にて、計らずこの家の久次に出會ひ、請け取りし香爐を……隼人さまの浪宅へ持參せしに、尋ぬる仔細あるゆゑに、とつて返してこの家の内へ參りかゝつてかしこより……與三郎と申すのは、誠はわれ等が劍術の師と賴みし隼人どのゝ血筋の悴……忠義によつて觀音久次が命を捨てし事までも、逐一あれより聞き取つたり。
とみ　シテ、御尋ねのその譯は。
民部　先刻、われ等が受け取りし、眞鶴の香爐は、紛るゝ如く作れども、正眞ならぬ、コリヤ、コレ贋物。
　ト袱紗に包みし香爐を出す。
とみ　ナニ、その香爐が。
　ト久次、この内、摺り寄り見て、いろ／＼思ひ入れ、探り見る事よろしく。

久次　贋物とな……ヤ、、、、。
　ト民部、こなしありて
民部　イヤ、その歎には及ばぬ事……あれに窺ふその内に、この家を窺ふこの町人、さてこそ仔細あらんずと、かしこに於て詮議すれば、具さに分りし仔細こそ、與三郎が爲にもつけの幸ひ……御身が忠義も立つといふもの。
久次　ナニ、スリヤ、わたしが忠義も立ち
とみ　與三郎どのゝ身のためとは。
民部　サア町人、その譯、一應これにて申せ。
　ト出かけに當し呼吸へ、活を入れる。長九郎、ムウと息吹きかへし
長九　イヤ／＼、先刻いつたれば、もう云ふには及ばねえ。堪忍して下さい。お侍ひさま。
民部　申さずば、かうして云はせる。サア／＼、これでもか／＼。
　トこじあげる。
長九　アイタヽ、申します／＼……いかにも、あの香爐は山鹿毛平馬といふ侍ひが、赤間源左衛門といふ强い人を語らつて、野陣が原で女を殺し、盜み物だといふ事は、

香爐を預つて後で聞き、氣味がわるさに久次どのへ賣りつけるわたしが心、所へ海松杭の松五郎といふ人が、金はこつちから廻しても商ひさせてやる。その代りにはかう／＼しろと味さうな口振り、頼れて今日、催促に來た時に奪ひ合ふはづみに門口で、松五郎にすりかへさせ、誠の品は海松杭が、赤間源左衞門の方へ持つて行つた。これより外にいふ事はねえ、どうぞ助けて下さりませ。

民部　まだ、この外に、海松杭の用立てし金子を改め見る所、一雨々々われらが主人、結城家の極印金、察する所先達つて、簀川に於て、飛脚を殺し、金子を奪ふ盜賊は、かの海松杭の松五郎、盜んだ金を貸付けて、正しく久次へ盜賊の、汚名をうけさせ、罪を遁れんかれが存心。

久次　心を碎く寶をすりかへ、その上、おれへ惡名つけん下心。

とみ　深い企みで

兩人　あつたよなア。

〽さらりとわかりしその樣子、いつか立ち聞く目明しども。

トこの時、組子二人つれ、以前の喜藏、窺ひゐて、この時。

喜藏　この家に忍ぶ與三郎、おとみは亭主を殺した科人、ソレ、引縛れ。

兩人　合點だ。

ト風の音はげしく

〽あはやと民部は身繕ひ、駈け出る長九郎、引きすゑる。内に踏込む喜藏の組子。

ト喜藏はおとみへ立ちかゝる。長九郎、逃げんとするを、民部引きつける。組子、與三郎へかゝり、引き起す事。

〽藥のために總身しびれ、倒れ伏したる切られの與三、そのまゝ捕つたと引き起せば

ト風の音、ドロ／＼のやうに、これへ早めし鳴り物あしらひ、立ち廻つて

〽祕藥の効驗、あら不思議や

トこの内、民部は、喜藏を引きつけ、一寸當てる。見得よく、與三郎は、かゝる兩人を投げ退け、きつと見得、おとみ、これを見合つて、よろしく、人々見得定る事。

與三　誠を盡した久次どの、勸めによつて、用ひし藥に五體惱亂。

ト皆々思ひ入れ。この時、立ちまはり皆々かゝる事、
與三郎、これをあしらううちに

とみ　今まで顏にまざ〲と、その疵の痕、消え失せて

ト思ひ入れ、この內、民部、立ち廻りの中に、運ぶ繪姿取り上げ見て

民部　この繪姿に記せしは……うつて變りし面影の。

久次　さ程に變るも久次が願ひ、エヽ、有り難い〱。

ト久次には、はつきり見えぬ心いき。

與三　さてこそ藥の。

とみ　効驗をこれで。

トこの內に、おとみ、鏡を出し、與三郎へ見せ

〽さし出したる鏡にて、見れば以前に變りし面影。

トこの內に與三郎、手甲、脚絆を取る事、殘らず疵の痕、癒える事。與三郎、皆々思ひ入れよろしく

與三　オヽ、こりや、顏ばかりかは、身體まで。

とみ　それも偏へに久次どのゝ。

民部　忠義の一心とゞきししるし。

與三　コレ、よく見てくれよ、この通りだ。

ト與三郎、久次へ立ちより、思ひ入れ。

〽顏さしつけて手負ひの傍、見やり〱、苦痛も忘れ

ト久次、身體の體もよく〱見て

久次　エヽ、有り難い〱、コレ見やれおとみ、忠義は立つた。

〽互に歡び感じ入り、しばし泣るゝばかりなり。

ト皆々、この內に捨せりふかぶせ、よろしく納まる事。與三郎。こなしありて

與三　これも久次が忠義ゆゑ、姿かはれば鎌倉へ、母の敵は須左衛門、平馬も正しくかしこへ同道。

とみ　誠の香爐とり返し、今の夫の恨みも共に、どうぞ霽らして下さんせ。

民部　さある時には穗積の家名、引き興すのも一つの孝道。

與三　それにて不義の汚名をはらし、その上名乘つて、この身の科を

民久　少しも早く。

ト民部、差添を、與三郎へ渡す事。與三郎、押し戴き、腰にさす事。この時に、喜藏かゝるを、民部あてる。與三郎にかゝる兩人を投げ退ける事よろしく、この內に、與三郎、旅形の拵らへする事。床のめりやす、文句の中へあしらひ、この內、よき程に、喜藏、立ちか

かるを、民部、上の方の子家體の裡へあてゝ、蒲團をかける事。以前の組子兩人、立ちかゝるを、久次、引きつける。これにて兩人、立ち廻りの仕組よろしく、一人を殺し、一人を相手につかひて、上へ乘りかゝり、久次よろしく。

與三　ハヽア、有り難く頂戴仕る。

久次　今ぞ、この世の思ひ出なし。とても事に久次が亡骸、首をば刎ねて取り隱し。

ト與三郎が以前の着附けを持つて、思ひ入れ。

アヽ、塵塚へ捨ておかば、切られの與三は自殺して、最早この世に亡き人と。

〽世の口の端にかけさせる、骸の疵痕身代りと。

ト體の舊疵へ思ひ入れある。

〽知死期に頼みな忠義の一心。

とみ　詞に任せ、塵塚へ……もし、この事が露見せば、その與三郎を殺したは、わたしが業と云ひ張つて、亭主殺しの身の罪を。

ト思ひ入れ。

與三　出かしたおとみ……コレ。

ト財布を出し

この金は、親の情の賜物なれど、名乘つて出るには不用のもの、これはおぬしにやる程に、久次が亡き後の問ひ弔ひ、又は手前が身の上の、しがくの爲にやつてくりよ。

とみ　アイ、そんなら、ぬしの亡き跡を。

民部　弔ふ未來の門出は、不思議な縁にて、身共が介錯。

久次　それで願ひも。

ト思ひ入れよろしく、皆々こなしありて

〽よろぼひ／＼見送る一念、息も絶々消えて行く、この世かの世の別れ路や、はや曉近き無常の鐘。

ト本釣り鐘、皆々よろしく、おとみへ組子一人、かゝるを、久次引きつけ、これも刺し通し、上へ乘りかゝる事。この時與三郎、下手に居て見かへる。こゝへ以前の喜藏、出て來り

喜藏　與三郎、うぬ。

トかゝるを、與三郎、引きとめ、立ち廻り、よくとめる事、久次、起き直り、捕手の上へ乘りかゝる。民部、刀を拔いて、上の方へ廻る事ありて、與三郎へこなし。與三郎、頷き、喜藏を件の井戸の中へ當て込み、撥釣瓶をおろす事。下に水音ドンとする。

には無論統一されたのであらうが、本書にわざと、どちらにも訂正せず、稿本のまゝで記載しておいた。お含みを願ひたい。

初演の役割は左の通りである。

眞柴久次、鮒屋源五郎 實ハ岩城東馬之丞（八世片岡我童）眞柴久秋。堀尾帶刀（嵐璃珏）二三五郎七。不破伴作（中村歌十郎）奴矢田平 實ハ安田作兵衛（中村歌七）筑紫の權六、早川高景（叶雛助）堅田の小雀、平野屋平平（中村友三）小田彈正（中村翫十郎）筒井順慶、局常盤木、追從庵景伯（中村芝藏）腰元早瀨（中村巳丈）淀町御前、乳母お松（嵐璃光）お通姫（中村與三郎）粟津嘉門（中村勝三郎）岸田民部 實ハ四方天但馬守、辻浦十内、石場の五郎藏 實ハ齋藤内藏之助（淺尾工左衛門）石川屋眞砂路 實ハ明智娘皐月姫、祇園のお梶、十内娘お瀧（二世中村富十郎

散書戀文章（ちらしがきこひのぶんしやう）

上演の際は「鐘鳴今朝噂」と、いろは新助と同じ名題に改められたらしい。稿本の表紙にも、角書やうにその名題が書いてある。恐らく當時の三面記事を當込んだものであらう。天保五年五月、大坂角の芝居の初演で、作者は奈河泉助であらうと思はれる。武士と町人の違ひはあるが、「銘作切籠曙」樽屋おせんを全部拜借といつてもいゝ趣向である。獨吟に「黑髮」を使ふところまで同じである。

役割左の通り。

木造り杢兵衛（中山文七）金屋金五郎（嵐三五郎）額の小さん（中山南枝）後家お幸（山村友右衛門）親方長兵衛（中村翫十郎）甥の忠兵衛（中村友三）下女お末（坂東七五郎）姉お雪（嵐璃光）娘お八十（中村松江）手代藤兵衛（坂東壽太郎）

與話情浮名横櫛（よはなさけうきなのよこぐし）

嘉永六年三月、中村座の初演。最初は「鏡山」の二番目狂言として出したものであるが、一番目の評判が惡いので後には二番目を增補して通しにしたものである。與三郎は長唄うたひの四世芳村伊三郎がモデルださうで、若い時に上總の遊び人の妾とあゝした事があつて、疵を受けたのが癒えて江戸へ出て來た。深川の祭禮で偶然お富に逢つて撚が戻り、二人は夫婦になつて無事に暮らしたのだといふが三面記事を種にする講釋師が、早速これを採つて、切られ與三郎なる話を作つた。當時でも二三種あつて筋は皆變つ

てゐたといふ。芝居では文車の講釋を材にしたのだが、俳優が納まらないで、稽古のうちから、しん生の方の筋に直しながら舞臺に上せたといふ記錄が傳はつてゐる。當時の番附で見ると、本田次郎親常の裁判でケリをつける腹案らしいのだが、實際は久次の内で終つたので、また「飛鳥山」の一幕は、脚本はあつても上演は見なかつたらしい。今日でも源氏店の一幕は、幕末江戸市井の好スケッチ劇として喝采されてゐる。

觀音久次、八丁礫の喜平次、伊豆屋下男忠助（市川小團次）みる杭の松五郎、番頭藤八（中山市藏）女護島の小ふじ（吾妻市之丞）鼈甲屋金五郎、山鹿毛平馬、蝙蝠安（中村鶴藏）赤間源左衞門、井澄屋多左衞門（關三十郎）藍屋娘お鶴、女護島の龜菊（中村歌女之丞）伊豆屋與五郎（市川猿藏）隼人妻小笹（中村歌六）成川民部（市川高麗藏）手代松兵衞（關歌助）横綱お富、女護島梅薫女（尾上梅幸）伊豆屋與三郎、鎭西八郎爲朝（八世市川團十郎）

には無論統一されたのであらうが、本書にわざと、どちらにも訂正せず、臺本のまゝで記載しておいた。お含みを願ひたい。

初演の役割は左の通りである。

眞柴久次、鮒屋源五郎 實ハ岩城東馬之丞（八世片岡我童）眞柴久秋。堀尾帶刀（嵐璃珏）二三五郎七。不破伴作（中村歌十郎）奴矢田平 實ハ安田作兵衞（中村歌七）筑紫の權六、早川高景（叶雛助）堅田の小雀、平野屋平平（中村友三）小田彈正（中村翫十郎）筒井順慶、局常盤木、追從庵景伯（中村芝藏）腰元早瀨（中村巴丈）塗町御前、乳母お松（嵐璃光）お通姬（中村與三郎）粟津嘉門（中村勝三郎）岸田民部 實ハ四方天但馬守、辻浦十内、石場の五郎藏 實ハ齋藤内藏之助（淺尾工左衞門）石川屋眞砂路 實ハ明智娘早月姬、祇園のお梶、十內娘お瀧（二世中村富十郎）

散書戀文章（ちらしがきこひのぶんしやう）

上演の際は「鏡鳴今朝噂」と、いろは新助と同じ名題に改められたらしい。臺本の表紙にも、角書やうにその名題が書いてある。恐らく當時の三面記事を當込んだものであらう。天保五年五月、大坂角の芝居の初演で、作者は奈河泉助であらうと思はれる。武士と町人の違ひはあるが、「銘作切籠曙」榎屋おせんを全部拜借といつてもいゝ趣向である。獨吟に「黑髮」を使ふところまで同じである。

役割左の通り。

木造り本兵衞（中山文七）金屋金五郎（嵐三五郎）額の小さん（中山南枝）後家お幸（山村友右衞門）親方長兵衞（中村翫十郎）舅の忠兵衞（中村友三）下女お末（坂東七五郎）姉お雪（嵐璃光）娘お八十（中村松江）手代藤兵衞（坂東壽太郎）

與話情浮名横櫛（よはなさけうきなのよこぐし）

嘉永六年三月、中村座の初演。最初は「鏡山」の二番目狂言として出したものであるが、一番目の評判が惡いので後には二番目を增補して通しにしたものである。與三郎は長唄うたひの四世芳村伊三郎がモデルださうで、若い時に上總の遊び人の妾とあゝした事があつて、疵を受けたのが癒えて江戸へ出て來た。深川の祭禮で偶然お富に逢つて撚が戻り、二人は夫婦になつて無事に暮らしたのだといふが三面記事を種にする講釋師が、早速これを採つて、切られ與三郎なる話を作つた。當時でも二三種あつて筋は皆變つ

てゐたといふ。芝居では文車の講釋を材にしたのだが、俳優が納まらないで、稽古のうちから、しん生の方の筋に直したがら舞臺に上せたといふ記錄が傳はつてゐる。當時の番附で見ると、本田次郎親常の裁判でケリをつける腹案らしいのだが、實際は久次の內で終つたので、また「飛鳥山」の一幕は、脚本はあつても上演は見なかつたらしい。今日でも源氏店の一幕は、幕末江戸市井の好スケッチ劇として喝采されてゐる。

觀音久次、八丁礫の喜平次、伊豆屋下男忠助（市川小團次）みる杭の松五郎、番頭藤八（中山市藏）女護島の小ふじ（吾妻市之丞）鼈甲屋金五郎、山寬毛平馬、蝙蝠安（中村鶴藏）赤間源左衞門、井澄屋多左衞門（關三十郎）藍屋娘お鶴、女護島の龜菊（中村歌女之丞）伊豆屋與五郎（市川猿藏）隼人妻小笹（中村歌六）成川民部（市川高麗藏）手代松兵衞（關歌助）横櫛お富、女護島梅薫女（尾上梅幸）伊豆屋與三郎、鎭西八郎爲朝（八世市川團十郎）

責任校訂
渥美清太郎

日本戲曲全集・第二十三卷
天保嘉永度狂言集・第卅回配本

編纂者檢印

昭和六年八月一日印刷
昭和六年八月五日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎幸三郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋　五一・六四一　三七八八
振替東京　一六一七

整版所　新倉東文堂

神田區松下町七番地　（明治印刷株式會社・印刷）



